

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第127集

なごやじょうさん まる
名古屋城三の丸遺跡(VII)

—旧国立名古屋病院地点の調査—

2005

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター

序

尾張徳川家 62 万石の居城として建設された名古屋城は、一般にはその天守閣に飾られた金の鯨で有名です。天守閣や本丸御殿などの建物遺構は戦前まで残されていましたが、太平洋戦争で消失してしまい、現在は石垣や二の丸庭園などの一部の遺構が残されているに過ぎません。しかし、その城構えは壮大で現在は特別史跡に指定されています。一方、名古屋城の城下は、江戸時代において既に全国でも有数の近世都市として発展しており、現在では名古屋は東海地方の政治・経済・文化の中心として機能しています。

名古屋城三の丸遺跡は、名古屋城三の丸一帯を範囲とする遺跡であり、既に約 20 ヶ所で発掘調査が行われています。その結果、江戸時代の三の丸域内に展開した武家屋敷などに伴う遺構や遺物が確認されるだけに止まらず、それ以前の集落や墓域が展開していたことが明らかになっています。また、最近では近代の陸軍関係の遺構や遺物も発見され研究が進んでまいりました。

今回の調査は、国立名古屋病院（現独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター）の敷地内で行われ、名古屋城三の丸の北東部に当たります。当地点は「御屋形」と呼ばれる藩主の親族らが居住した屋敷が存在した場所に相当し、実際の発掘調査では庭園に伴う池など貴重な調査成果が上がっています。江戸時代のみならず、古墳時代から昭和時代前半までの様々な遺構や遺物も確認されており、これらの資料は名古屋台地北端部の歴史を解明する上で重要な情報となると思われます。

これらの多岐にわたる調査成果を本書に掲載することが、地域史研究に寄与し多くの方々に活用され、ひいては埋蔵文化財保護につながっていくことを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、各方面の方々にご配慮を賜り、関係者および関係機関のご理解とご協力をいただきましたことに対して、厚くお礼申し上げます。

平成 17 年 3 月

財団法人愛知県教育サービスセンター
理事長 古池庸男

例言

1. 本書は愛知県名古屋市中区三の丸に所在する名古屋城三の丸遺跡(県道跡番号 01-7027)の発掘調査報告書である。
2. 調査は国立名古屋病院(現独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター)の看護副院長所大聖化整備事業に伴う事前調査として、愛知県埋蔵文化財センターが愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。調査対象面積は1100㎡である。
3. 発掘調査は平成14年4月から9月にかけて実施した。整理および報告書作成作業は平成15年4月から平成16年9月にかけて実施した。
4. 現地における発掘調査は朝日航洋株式会社(主査)の支援を受けて行い、石黒立人(主査)、鈴木正貴(調査研究員:現主任)、鶴岡雅弘(調査研究員)が担当した。なお、朝日航洋株式会社の調査スタッフは本文第1章に記載した通りである。
5. 調査にあたっては、愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、国立病院機構名古屋医療センター、名古屋市教育委員会、名古屋市見附台考古資料館、名古屋市蓬左文庫、西尾市教育委員会をはじめとして、多くの関係諸機関のご協力を得た。
6. 本書の執筆と編集は鈴木正貴が担当したが、一部に分担執筆がある。
第3章第2節第12項挿絵:早野浩二(本センター調査研究員)
第3章第2節第13項古代瓦:永井邦仁(本センター調査研究員)
第4章第1節:鬼頭剛(本センター調査研究員)・古澤明(古澤地質調査研究所)
第4章第2節:森岡一(愛知県立明和高等学校)・上田基子(同)
第4章第3節:堀本真美子(本センター調査研究員)・小村美代子(パレオ・ラボ)
第4章第4節:堀本真美子(本センター調査研究員)
第4章第5節:植田弥生(パレオ・ラボ)
第5章第1節:鶴岡雅弘(本センター調査研究員)
7. 整理作業は鈴木正貴が担当した。なお、整理スタッフおよび作業の一部を委託した機関および協力者は本文第1章に記載した通りである。
8. 本書に示す座標数値は国土交通省に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠する。海拔表記は東京湾平均海面(T.P.)の数値である。ただし、表記は日本測地系とした。
9. 遺物は、本書に掲載された遺物図版番号を登録番号として整理した。
10. 写真や図面などの調査記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方 802-24 (0567-67-4161)
11. 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方 802-24 (0567-67-4164)
12. 本書の作成に至るまで、本センター専門委員・職員をはじめとして、下記の多くの方々から多大なご指導とご助言を得ている。記して感謝したい。(五十音順:敬称略)
浅野弘子、伊藤厚史、伊藤正人、蟹江吉弘、上條信彦、木村有作、小島一夫、佐藤公保、下村信博、城ヶ谷相広、辻田文雄、竹内智、仲隆裕、中野晴久、仲野泰裕、野口泰子、服部哲也、藤井康隆、藤澤良祐、村上伸之、森本伊都部

目次

第1章	調査の概要	
第1節	調査の経緯	1
第2節	調査の方法と経過	4
第3節	歴史的環境	6
第2章	遺構	
第1節	基本層序と遺構の概要	11
第2節	A期の遺構	14
第3節	B期の遺構	24
第4節	C期の遺構	35
第5節	D期の遺構	83
第3章	遺物	
第1節	遺物の概要	88
第2節	A期の遺物	91
第3節	B期の遺物	109
第4節	C期の遺物	127
第5節	D期の遺物	214
第4章	自然科学的分析	
第1節	名古屋城三の丸遺跡地下の層序、堆積環境と地形解析	234
第2節	名古屋城三の丸遺跡の埋桶の理土より産出した双翅目のサナギについて	242
第3節	名古屋城三の丸遺跡出土の漆喰等の科学分析	247
第4節	名古屋城三の丸遺跡出土の石材について	261
第5節	名古屋城三の丸遺跡出土木製品の樹種同定	268
第5章	考察・まとめ	
第1節	文献から見た御屋形の歴史	276
第2節	名古屋城三の丸遺跡出土土師器皿の変遷	286
第3節	名古屋城三の丸遺跡出土土師器鍋類の変遷	295
第4節	御屋形庭園の意義	299
第5節	遺構の変遷	308
第6節	まとめ	318
付表		
	遺構一覧表	331
	遺物一覧表	343
図版		
	遺構図版	394
	写真図版	399
抄録		

挿図 目次

第1図	遺跡位置図(1).....	1	第37図	石組溝 SD04 土層断面図.....	51
第2図	遺跡位置図(2).....	2	第38図	SD01 石組溝成石材実測図.....	51
第3図	調査区位置図(1).....	3	第39図	石列 SX09 遺構図.....	54
第4図	調査区位置図(2).....	4	第40図	池 SX02 遺構全体図.....	55
第5図	名古屋城三の丸遺跡の自然立地.....	7	第41図	池 SX02 遺構詳細図(1).....	56
第6図	周辺遺跡分布図.....	8	第42図	池 SX02 遺構詳細図(2).....	57
第7図	これまでの発掘調査位置図.....	9	第43図	池 SX02 遺構詳細図(3).....	58
第8図	基本土層断面図(南壁).....	11	第44図	池 SX02 遺構詳細図(4).....	60
第9図	包含層掘り下げ範囲.....	12	第45図	池 SX02 遺構詳細図(5).....	61
第10図	竪穴建物跡 SB02・SB07・SB09 遺構図.....	15	第46図	池 SX02 遺構詳細図(6).....	63
第11図	竪穴建物跡 SB03・SB05 遺構図.....	16	第47図	池 SX02 遺構詳細図(7).....	65
第12図	竪穴建物跡 SB04 遺構図.....	17	第48図	池 SX02 遺構詳細図(8).....	67
第13図	竪穴建物跡 SB08 遺構図.....	18	第49図	池 SX02 エレベーション図(1).....	68
第14図	竪穴建物跡 SB06 遺構図.....	19	第50図	池 SX02 エレベーション図(2).....	69
第15図	掘立柱建物跡 SB10 遺構図.....	20	第51図	池 SX02 土層断面図.....	71
第16図	掘立柱建物跡 SB11～14・SA01～02 遺構図.....	21	第52図	池関連施設 SD41・SX03・SD40 土層断面図.....	73
第17図	土坑 SK308 遺物出土状態図.....	22	第53図	池 SX02 石材分布図.....	74
第18図	土坑 SK353 遺物出土状態図.....	23	第54図	池 SX02 玉石区分図.....	74
第19図	掘立柱建物跡 SB15～19 遺構図.....	25	第55図	池 SX02 周辺土坑遺構図.....	75
第20図	掘立柱欄列跡 SA03 遺構図.....	26	第56図	埋桶遺構 SK145・SK37・SK228 遺構図.....	76
第21図	掘立柱欄列跡 SA04・05 遺構図.....	27	第57図	地下室 SK94・SK100 遺構図.....	77
第22図	井戸 SK226・SK203 土層断面図.....	28	第58図	土坑 SK185 遺構図.....	79
第23図	井戸 SK147 土層断面図.....	30	第59図	土坑 SK01 遺構図.....	80
第24図	井戸 SK146 土層断面図.....	31	第60図	土坑 SK484 遺物出土状態図.....	81
第25図	溝 SD17・SD18・SD22・SD25 土層断面図.....	32	第61図	土坑 SK04・SX10 遺構図.....	82
第26図	掘立柱建物跡 SB21 遺構図.....	36	第62図	掘立柱建物跡 SB25 遺構図.....	84
第27図	掘立柱建物跡 SB22～24・SA08～09 遺構図.....	37	第63図	礎石建物跡 SB01 遺構図.....	85
第28図	掘立柱欄列跡 SA06・07 遺構図.....	38	第64図	礎石建物跡 SB01 平面復元図.....	85
第29図	井戸 SK163・SK202・SK49 土層断面図.....	40	第65図	礎石建物跡 SB01 土層断面図.....	85
第30図	溝 SD12・SD14・SD31 土層断面図.....	41	第66図	第三師団司令部周辺軍事施設 設置図と調査区.....	86
第31図	石組溝 SD01～SD04 遺構全体図.....	43	第67図	名古屋徳成病院病棟平面図.....	86
第32図	石組溝 SD01・SX01 遺構図(1).....	44	第68図	土坑 SK142・SK107 遺構図.....	87
第33図	石組溝 SD01 遺構図(2).....	45	第69図	A期の遺物実測図(1) SK308(1).....	92
第34図	石組溝 SD01～SD04 遺構図(3).....	47	第70図	A期の遺物実測図(2) SK308(2).....	93
第35図	石組溝 SD01・SD02 遺構図(4).....	48	第71図	A期の遺物実測図(3) SK308(3).....	94
第36図	石組溝 SD01・SD03・SD04 遺構図(5).....	50	第72図	A期の遺物実測図(4) SB02・SB07・SB09.....	95

第 145 図 C 期の遺物実測図 (46) 丸瓦 (4).....	183	第 182 図 D 期の遺物実測図 (9) 活字 (2).....	225
第 146 図 C 期の遺物実測図 (47) 平瓦 (1).....	184	第 183 図 D 期の遺物実測図 (10) 活字 (3).....	226
第 147 図 C 期の遺物実測図 (48) 平瓦 (2).....	185	第 184 図 D 期の遺物実測図 (11) 活字 (4).....	227
第 148 図 C 期の遺物実測図 (49) 平瓦 (3).....	186	第 185 図 D 期の遺物実測図 (12) 活字 (5).....	228
第 149 図 C 期の遺物実測図 (50) 平瓦 (4).....	187	第 186 図 D 期の遺物実測図 (13) 活字 (6).....	229
第 150 図 C 期の遺物実測図 (51) 棧瓦 (1).....	188	第 187 図 D 期の遺物実測図 (14)	
第 151 図 C 期の遺物実測図 (52) 棧瓦 (2).....	189	包含層他出土遺物.....	230
第 152 図 C 期の遺物実測図 (53) 飾瓦 (1).....	191	第 188 図 時期不明の遺物実測図 (1).....	232
第 153 図 C 期の遺物実測図 (54) 飾瓦 (2).....	192	第 189 図 時期不明の遺物実測図 (2).....	233
第 154 図 C 期の遺物実測図 (55) 飾瓦 (3).....	193	第 190 図 調査地点位置図.....	238
第 155 図 C 期の遺物実測図 (56) 飾瓦 (4).....	194	第 191 図 名古屋城三の丸遺跡 02 区における	
第 156 図 C 期の遺物実測図 (57) 飾瓦 (5).....	195	深堀柱状図.....	239
第 157 図 C 期の遺物実測図 (58) 飾瓦 (6).....	196	第 192 図 名古屋城三の丸遺跡 02 区深堀地点の	
第 158 図 C 期の遺物実測図 (59) 飾瓦 (7).....	197	テフラ分析結果.....	240
第 159 図 C 期の遺物実測図 (60) 飾瓦 (8).....	198	第 193 図 名古屋城三の丸遺跡における	
第 160 図 C 期の遺物実測図 (61) 飾瓦 (9).....	199	地下層序模式断面図.....	241
第 161 図 C 期の遺物実測図 (62) 飾瓦 (10).....	200	第 194 図 試料採取位置.....	254
第 162 図 C 期の遺物実測図 (63) 鬼瓦 (1).....	201	第 195 図 蛍光 X 線スペクトル (1).....	255
第 163 図 C 期の遺物実測図 (64) 鬼瓦 (2).....	202	第 196 図 蛍光 X 線スペクトル (2).....	256
第 164 図 C 期の遺物実測図 (65) 鬼瓦 (3).....	203	第 197 図 蛍光 X 線スペクトル (3).....	257
第 165 図 C 期の遺物実測図 (66) 菊丸瓦.....	205	第 198 図 Ca の分布状況 (1).....	258
第 166 図 C 期の遺物実測図 (67) 輪造い瓦 (1)...	207	第 199 図 Ca の分布状況 (2).....	259
第 167 図 C 期の遺物実測図 (68) 輪造い瓦 (2)...	208	第 200 図 Ca の分布状況 (3).....	260
第 168 図 C 期の遺物実測図 (69) 丸瓦系道具瓦... 209		第 201 図 池伏道構の巨礫の配置.....	261
第 169 図 C 期の遺物実測図 (70)		第 202 図 愛知県周辺の地形図と礫採取推定地.....	264
平瓦系道具瓦 (1).....	210	第 203 図 池伏道構より出土した礫.....	267
第 170 図 C 期の遺物実測図 (71)		第 204 図 名古屋城三の丸遺跡出土木製品材組織の	
平瓦系道具瓦 (2).....	211	光学顕微鏡写真 (1).....	273
第 171 図 C 期の遺物実測図 (72)		第 205 図 名古屋城三の丸遺跡出土木製品材組織の	
緑輪陶器瓦 (1).....	212	光学顕微鏡写真 (2).....	274
第 172 図 C 期の遺物実測図 (73)		第 206 図 名古屋城三の丸遺跡出土木製品材組織の	
緑輪陶器瓦 (2).....	213	光学顕微鏡写真 (3).....	275
第 173 図 D 期の遺物実測図 (1) SK96 (1).....	215	第 207 図 御屋形の機能.....	278
第 174 図 D 期の遺物実測図 (2) SK96 (2).....	216	第 208 図 御屋形の内部空間.....	280・281
第 175 図 D 期の遺物実測図 (3) SK96 (3).....	217	第 209 図 御屋形の変遷.....	284
第 176 図 D 期の遺物実測図 (4) SK96 (4).....	218	第 210 図 名古屋城三の丸遺跡 (御屋形地点) の	
第 177 図 D 期の遺物実測図 (5) SK56 (1).....	220	土師器皿の変遷.....	290
第 178 図 D 期の遺物実測図 (6) SK56 (2) 他....	221	第 211 図 尾張における戦国時代の	
第 179 図 D 期の遺物実測図 (7) SK57・SK362 ..	222	土師器皿の地域性.....	294
第 180 図 活字模式図.....	223	第 212 図 名古屋城三の丸遺跡 (御屋形地点) の	
第 181 図 D 期の遺物実測図 (8) 活字 (1) 他....	224	土師器皿類の変遷.....	296

第213図	池 SX02 の復元想定イメージ	301	第218図	名古屋城下大曾根屋敷庭園	306
第214図	名古屋城二の丸庭園の発掘調査状況	302	第219図	遺構変遷図 (1)	314
第215図	名古屋城二の丸庭園	303	第220図	遺構変遷図 (2)	315
第216図	名古屋城御深井庭園	304	第221図	遺構変遷図 (3)	316
第217図	名古屋城下御下屋敷庭園	305	第222図	遺構変遷図 (4)	317

挿表 目次

第1表	調査スタッフ	2	第20表	SK20より出土した礎	263
第2表	整理スタッフ	9	第21表	名古屋城三の丸遺跡出土木製品の 樹種同定結果一覧	271
第3表	名古屋城関連年表	10	第22表	名古屋城三の丸遺跡出土木製品の 種別の樹種集計	272
第4表	石組溝の石材加工度	53	第23表	三の丸御形居住者の変遷	285
第5表	SX02出土玉石組成表	75	第24表	SK226出土山茶碗類組成表	318
第6表	出土遺物組成表	89	第25表	SK155出土陶器類組成表	319
第7表	時期区分対照表	90	第26表	SK147出土陶器類組成表	320
第8表	丸瓦出土量一覧表	177・178	第27表	SD39出土陶器類組成表	321
第9表	平瓦厚さ別出土量一覧表	179	第28表	SD17出土陶器類組成表	322
第10表	名古屋城三の丸遺跡02区深掘地点の テフラ分析結果	237	第29表	SK185出土瀬戸美濃窯産陶器類組成表	323
第11表	漆喰の分析試料一覧	247	第30表	SK156出土瀬戸美濃窯産陶器類組成表	324
第12表	肉眼観察結果	248	第31表	SK163出土瀬戸美濃窯産陶器類組成表	325
第13表	X線分析結果	249	第32表	SK94出土瀬戸美濃窯産陶器類組成表	326
第14表	石英と方解石の最高強度	250	第33表	SK01出土瀬戸美濃窯産陶器類組成表	327
第15表	方解石の検出限界実験結果	251	第34表	SD01出土瀬戸美濃窯産陶器類組成表	328
第16表	蛍光X線分析結果	252	第35表	SK23出土瀬戸美濃窯産陶器類組成表	329
第17表	SX01より出土した巨石	262	第36表	主要遺構出土肥前産磁器類組成表	330
第18表	池状遺構の床面より出土した礎	263			
第19表	池状遺構東張り出し部より出土した礎	263			

第1章 調査の概要

第1節 調査の経緯

名古屋城三の丸遺跡（県遺跡番号 01-7027）は愛知県名古屋市中区三の丸一帯に所在する遺跡である。江戸時代には尾張藩徳川家 62 万石の拠点として名古屋城が築城されたが、そのうちの三の丸城全体が遺跡の範囲となっている。遺跡の内容は、これまでの約 20 回の発掘調査などにより、名古屋城に関連する江戸時代の遺構・遺物ばかりではなく、弥生時代から近代に至るまで連続と遺跡は継続していることが判明しており、名古屋地域の歴史を解明するために重要な遺跡と評価されている。

今回の発掘調査は国立名古屋病院（現独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター）の看護婦養成所大型化整備事業に伴う事前調査として実施した。調査地点は三の丸 4 丁目の名古屋医療センター敷地内である。まず、平成 13（2001）年に国立名古屋病院から依頼を受けて愛知県教育委員会が遺跡の有無確認調査（試掘調査）を行った。建設予定地に南接する部分にトレンチを掘削した結果、トレンチ全体が約 2m の深さに至るまで掘

乱であったが、近世の遺物が確認されたことから、発掘調査が必要と判断された。これを受けて、翌平成 14（2002）年 4 月から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。調査面積は 1100m²、調査担当者は石黒立人・鈴木正貴・鶴飼雅弘である。

発掘調査は、調査支援として朝日航洋株式会社にて作業を委託した。調査スタッフは第 1 表の通りである。調査区の設定や近代以降の整地土の掘削、事務所の設営など周辺の環境整備などについては、国立名古屋病院から看護婦養成所大型化整備事業の委託を受けた鹿島建設株式会社の多大な協力を得た。調査は、調査区が当初の予想よりも遺構・遺物の残存状況が良好であり、3 面調査が必要となった。調査期間中は当センター理事橋崎彰一氏、京都芸術大学教授仲隆裕氏、愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、名古屋市教育委員会の他多くの方々から現地での指導を得た。そして平成 14 年 9 月 4 日に



第1図 遺跡位置図(1)

名古屋城三の丸遺跡 VII

は江戸時代の庭園遺構などを中心に現地説明会を開催し約500名の参加者があった。現地での発掘調査は9月20日に終了し、終了後はすぐに鹿島建設の工事業業が開始された。遺物の洗浄・注記作業は一部を発掘調査現場で行ったが、大部分は平成14年度中に整理作業員によって実施した。

一方、整理・報告書作成作業は平成15年4月から平成16年9月まで実施した。調査担当者は鈴木であり、これに調査研究補助員と整理補助員が補佐した。整理担当スタッフは第2表の通りである。整理作業のうち、文様の複雑な染付磁器を中心とした遺物実測についてはアイシン精機株式会社にて作業を委託した。また、遺物のトレース作業はアイシン精機株式会社および株式会社セビアにて作業を委託した。庭園に伴う池状遺構のコンピューターグラフィック作成については、仲隆裕氏の指導を受けて朝日航洋株式会社が行い鈴木

が監督した。写真撮影は福岡栄氏の手を煩わせた。自然科学的な分析については、漆喰分析をバリノ・サーヴェイ株式会社、樹種同定をバレオ・ラゴ株式会社、昆虫遺体分析を森勇一氏にお願いした。遺物の実測は分担執筆を除く大部分の資料を鈴木および安達が行い、全点を鈴木が点検した。また、整理作業中には愛知県陶磁資料館仲野泰裕氏と愛知学院大学教授藤澤良祐氏をはじめとする多くの方々の指導を得た。報告書の印刷作業は西濃印刷株式会社に委託した。

第1表 調査スタッフ

総括責任者	岩崎直也	安田幸市	7月18日交待
現場代理人	大岩 隆		
調査補助員	木戸心界		
調査助手	近藤 緑	古田 恵	
土木測量技師	関根浩希	村井志高	7月18日交待
土木測量技師補	村井志高	本田義春	7月18日交待
発掘作業員	神川信子	中田真澄	森田明子
	堀場美子	濱崎英津子	野田郁子
	古田めぐみ	江口智恵子	中川豪雄
	林 満	志水康佑	吉田 清
	山田正夫	松井美佐子	高山ヒサ
	長谷川邦子		



第2図 遺跡位置図(2)



第3図 調査区位置図(1)

第2節 調査の方法と経過

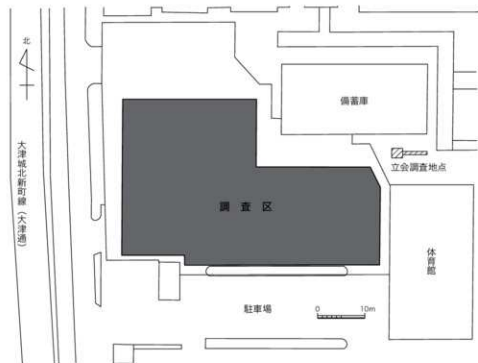
今回の発掘調査区はIINS02区と表記する。IINSは当センターにおける名古屋城三の丸遺跡の略号である。遺構図面・記録類・写真類・遺物カード・遺物の注記もすべてこの記号によっている。

発掘調査に先立って調査区の設定と近代以降の整地上の掘削を調査員の立会いのもと鹿島建設株式会社が重機によって行った。この掘削は現地表面から約1.2mまで行き、これ以下の表土掘削は愛知県埋蔵文化財センターが重機によって行った。

測量は新国土座標と海拔標高(TP)を基準に実施した。なお、これまで当センターで実施した名古屋城三の丸遺跡の6調査区では旧測地系による国土座標を基準に測量されており、これと簡易に合成できるよう巻末基本遺構図面に旧測地系による座標値を挿入しておいた。調査では国土座標に基づき5mグリッドを設定し、遺物の取り上げは一部の例外を除きこの5mグリッド単位で取り上げている。5mグリッドの名称は本センター調

査マニュアルにより4種の記号で表記され、南北方向の100mグリッドをローマ数字、東西方向の100mグリッドを大文字アルファベット、南北方向の5mグリッドを算用数字、東西方向の5mグリッドを小文字アルファベットで示す。順は南北方向が北から南へ、東西方向が西から東となっている。今回の調査区では100mグリッドは全てVCに属することから特別な場合を除き100mグリッド表記を省略し5mグリッドのみを用いることとした。

表土掘削の後トレンチを南壁・西壁付近に設定し掘削した結果、遺構面が大きく3面存在することが判明し3面調査を実施することとした(実際には部分的に1面しか残存しない部分などがある)。実際の遺構面はさらに多く存在することが認められたが、複雑に分布しており調査区全体を通した遺構面の認識が困難なため便宜上3面とした。したがって各面はおおよそ時代順に推移するが、各面には複数の時代の遺構が含まれてい



第4図 調査区位置図(2)

ることに注意する必要がある。

表土掘削以降の掘削作業は一部を除き全て人力によった。

測量は、各3面の基本平面図はラジコンヘリによる空中写真撮影測量、庭園に伴う池状遺構SX02はレーザー測量をそれぞれ実施し、それ以外は電子平板測量または手測り測量を行った。図面は多くは50分の1の縮尺で表記したが、遺構詳細図、遺物出土状態など特殊な図面は20分の1あるいは10分の1の縮尺を用いた。また一部の遺構については100分の1の図面を作成したものもある。図面類は全てデジタル表記で記録され、打ち出し図面ともども当センターで保管している。

写真類は6×7のカラーリバーサルで撮影したものを記録保存用として撮影した。撮影は全て調査担当者の指示のもとに朝日航洋株式会社の木戸心界が行った。この他に記録保存や作業記録としてデジタルカメラによる写真データも記録した。

以下に調査日誌の概要を記述する。

調査日誌抄

- 4月4日 国立名古屋病院敷地内での埋設物設置に伴う立会調査。
 4月8日 表土上部（現代整地土）を整備事業工事受託業者鹿島建設が掘削開始。
 4月10日 現地表下約1.2mで陸軍東練兵床床面と礎石建物SB01を検出。
 4月12日 礎石建物SB01測量写真撮影。鹿島建設表土掘削終了。伊藤厚史氏指導。
 4月15日 表土下部の掘削を開始し、地山と黒色土を残す。飯江吉弘氏・伊藤厚史氏指導。
 4月18日 竹内智氏指導。
 4月23日 調査区半ばで石組溝を検出。既掘削部分より約30cm高く表土を掘削。
 4月24日 表土掘削終了。
 5月7日 作業開始。調査区清掃と壁トレンチの掘削。
 5月14日 トレンチ土層断面観察から、調査地点は3面調査が必要であると判断。
 5月15日 第1面遺構検出開始。
 5月24日 第1面遺構掘削開始。石組溝の掘削および清掃に着手。
 5月31日 当センター研究会中近世部会現地検討会開催。
 6月5日 名古屋教委来訪。石組溝測量開始。
 6月6日 泉教委来訪。石組溝写真撮影。調査研究員堀木による石組溝構成石材の調査。
 6月7日 SX02 トレンチ掘削完了。規模と構造の概要を把握。
 6月12日 浅野弘子氏来訪。SK01の掘削が進み遺物出土状況の写真撮影。
 6月19日 池SX02掘削開始。埋土上位を重機により掘

- 削する。
 6月20日 伊藤正人氏・藤井康隆氏来訪。
 6月21日 SK96掘削。近代遺物でガラス片を多く含むためゴム手袋着用で掘削。
 6月24日 SK94が地下室と推定。土壌サンプル採取（調査研究員鬼頭・堀木）
 6月27日 SX02 完掘し庭園に伴う池の可能性が高くなる。第1面遺構写真撮影。空中写真測量。近世遺物と遺構について橋崎彰一氏招聘指導。国立名古屋病院幹部見学。
 6月28日 写真撮影。補足調査。泉教委・名古屋教委・佐藤公保・福田敏一氏来訪。
 7月2日 第1面遺構補足調査。SX02 精査などを実施。上條信彦氏来訪。
 7月3日 名古屋教委2名・名古屋市政資料館小南敬治氏9名来訪。
 7月4日 東海テレビ取材。松村冬樹氏来訪。上條信彦氏から御屋形絵図の紹介あり。
 7月8日 朝日新聞取材。石組溝測量補足作業。SK147掘削開始。
 7月15日 近世の遺構について小寺武久氏招聘指導。
 7月17日 当センター研究会中近世部会現地検討会開催。森本伊知郎氏来訪。
 7月18日 第2面調査のため遺物出土量が非常に少ない間層を重機で掘削。暗灰褐色粘質土を除去し黒色土上面を露出させる。CBCテレビ取材。
 7月22日 第2面遺構検出開始。石組溝掘削写真撮影。下村信博氏来訪。
 7月23日 第2面遺構掘削開始。
 7月29日 半田高校生徒15名見学。
 7月30日 下村信博氏指導。御屋形絵図についての情報を得る。
 8月1日 第2面空撮。写真撮影。国立名古屋病院ニュースに関連記事が掲載される。
 8月2日 第2面遺構補足調査。第3面調査に向けて黒色土の掘削を人力で開始する。小幡早苗氏来訪。
 8月5日 調査研究員川部が調査に助勢参加。8月22日まで。
 8月9日 掘り下げが7割程度終了し遺構検出を開始。小島一夫氏指導。
 8月13日 SX02 清掃、写真測量とレーザー測量を実施。SK01とSK185の土壌サンプル採取（調査研究員鬼頭・堀木・森勇一氏指導）
 8月14日 第3面遺構検出完了。SK02補足測量。NHK取材。
 8月16日 SX02床面断り掘り。伊藤正人氏来訪。
 8月21日 第3面遺構掘削。庭園遺構について仲除裕氏招聘指導。
 8月26日 SK308掘削開始。橋崎彰一氏・藤澤良祐氏に遺物指導を受ける。
 8月30日 第3面遺構写真撮影。空撮。
 9月2日 第3面遺構補足調査開始。土層断面精査の結果、遺構面の把握を間違えたことを認識。厚生局見学。
 9月3日 名古屋市博3名、加藤安信氏来訪。厚生局・病院幹部見学。
 9月4日 現地説明会開催に関する新聞記者発表（資料配布）。伊藤氏来訪。現地説明会開催（約350名見学）。SX02補足調査開始（断り掘り調査などを実施）。
 9月9日 SX02補足調査開始（断り掘り調査などを実施）。
 9月10日 SX02などの漆喰壁サンプル採取。SK49断り掘り調査。藤澤良祐氏・丸山竜平氏来訪。
 9月17日 排水路SD41掘削。
 9月19日 調査区南側中央部で深掘り調査し、必要サンプル採取（調査研究員鬼頭）。
 9月20日 発掘調査に伴う掘削作業が終了。
 9月21日 遺構測量も完了し、現地調査作業は完全に終了する。

第3節 歴史的環境

名古屋城三の丸遺跡は名古屋台地北西端に立地しており、北西には木曾三川によって形成された濃尾平野が広がっている。名古屋台地と沖積低地の比高差は約8mを測り、近世名古屋城はこの崖を防衛上の利点として活用し崖下には外堀を構えている。加えて名古屋台地は北端部が最も標高が高く南に向かって緩やかに下がる地形であり、四方に見通しが利く場所であったといえる。

名古屋台地の縁辺部では縄文時代以降の各時代にもわたる多くの遺跡が分布している。名古屋城三の丸遺跡では西端部の調査地点で弥生時代の遺構が確認され集落が営まれていた。古墳時代では東側に片山神社古墳など古墳が所在している。

古代において当地は愛智郡に属し、『和名抄』によれば愛智郡内には10郷のムラが記載されている。このうち熱田郷周辺では6世紀前葉の前方後円墳である断夫山古墳や熱田神宮が所在する。現中区正木町にある5世紀中葉から6世紀にかけて営まれた集落遺跡は古代豪族尾張氏を中心とした集落と考えられている。また、7世紀代には正木町に尾張元興寺が創建され中央との強い結びつきを窺い知れる。11世紀代に勢力が衰退した古代豪族尾張氏は藤原氏と外戚関係を持ち三河に拠点を移していくようになった。名古屋城三の丸遺跡では西端部の調査地点で奈良時代を中心とした竪穴建物跡などが確認され集落が営まれていたことが判明している。

11世紀から12世紀にかけて名古屋台地上には那古野荘という荘園が成立する。開発領主は「建春門院法花堂領尾張国那古野荘領家職相伝系図」によれば小野法印顯恵とされ、荘園は特定できない。荘園内に安養寺が所在したことから現名古屋城城を含むと考えられる。

14世紀代には那古野荘に今川氏が台頭してくる。一般に大永4(1524)年頃に今川氏親が那

古野城を築き今川氏豊が入城したといわれるが、永享3(1431)年に那古野今川氏が屋敷を構えた可能性が考えられ、その後今川氏は在国化の傾向を強めた。明応2(1493)年の細川政元の政変後には奉公衆の職務を捨て在地那古野を拠点としたという。

天文7(1538)年(天文元年説もある)に、守護代家の三奉行の一人である織田信秀が那古野城を攻略した。その後は信秀の子織田信長、林秀貞が那古野城を支配していた。那古野城廃城の経緯は詳らかではないが、天正10(1582)年頃と推測されている。中世や戦国時代の屋敷地は、名古屋城三の丸遺跡の中では台地縁辺部を中心に確認されている。特に戦国時代の那古野城関連の遺構が各地点で確認されるようになり、実情が不明であった城郭の構造が徐々に明らかになってきている。

戦国時代において尾張国の政治の中心は清須であったが、徳川家康は慶長14(1609)年に名古屋城築城を決定し翌年に普請を開始した。慶長18(1613)年にはその大略が完成し、三の丸城では多くの武家屋敷が建設された。今回の調査地点では、当初武家屋敷が展開したが、17世紀後半に御屋形と呼ばれる徳川家の親族等が居住した屋敷に変更している。この経緯の詳細については第5章第1節を参照されたい。

明治維新により江戸幕府が解体すると、版籍奉還により名古屋城主徳川義勝は名古屋藩知事になった。名古屋城は1871年(明治4年)に二の丸が兵営となり、1872年(明治5年)には東京鎮台第三分営(後の名古屋鎮台)が城内に置かれた。三の丸は1874年(明治7年)に全城が陸軍省に移管され、今回の調査地点は東練兵場となった。そして太平洋戦争終戦直前には名古屋陸軍病院第二分院が建造された。

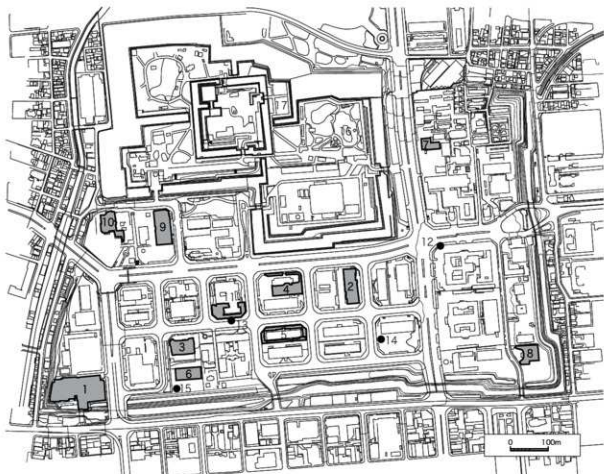


第5図 名古屋城三の丸遺跡の自然立地



1. 志賀公園遺跡・志賀城跡 2. 黒川遺跡 3. 鯉神社遺跡 4. 西志賀遺跡 5. 田橋城跡 6. 七少町遺跡 7. 児玉町遺跡 8. 片山神社遺跡
 9. 東芳野町遺跡 10. 長久寺遺跡 11. 東二条町遺跡 12. 西二条町遺跡 13. 名古屋城三の丸遺跡 14. 名古屋城天守閣貝塚
 15. 押切城跡 16. 原古野城跡 17. 善定院跡 18. 幡下遺跡 19. 名古屋城跡 20. 小島町遺跡 21. 伏見遺跡 22. 白山神社古墳
 23. 白川公園遺跡 24. 豊三臺遺跡 25. 南大津遺跡 26. 旧柴川遺跡 27. 日出神社古墳 28. 小林城跡 29. 那古野山古墳
 30. 浅間神社古墳 31. 岩井通貝塚 32. 西脇町遺跡 33. 旗籠町遺跡 34. 日置城跡 35. 大須二子山古墳

第6図 周辺遺跡分布図



第7図 これまでの発掘調査位置図

1. 愛知県図書館地点『名古屋城三の丸遺跡Ⅰ』県埋文
2. 名古屋第一地方合同庁舎地点『名古屋城三の丸遺跡Ⅱ』県埋文
3. 簡易家庭裁判所地点『名古屋城三の丸遺跡Ⅲ』県埋文
4. 愛知県警察本部地点『名古屋城三の丸遺跡Ⅳ』県埋文
5. 愛知県三の丸庁舎地点『名古屋城三の丸遺跡Ⅴ』県埋文
6. 地裁簡裁合同庁舎地点『名古屋城三の丸遺跡Ⅵ』県埋文
7. 国立名古屋病院地点『名古屋城三の丸遺跡Ⅶ』県埋文
8. 名古屋市公館地点『名古屋城三の丸遺跡—1・2・3次調査の概要』市教委
9. 中部電力地下変電所地点『名古屋城三の丸遺跡第4・5次発掘調査報告書—遺構編・遺物編』市教委
10. 名古屋市徳業堂地点『名古屋城三の丸遺跡第6・7次発掘調査報告書』市教委
11. 名城病院地点『名古屋城三の丸遺跡第8・9次発掘調査報告書』市教委
12. 地下鉄出入口地点『名古屋城三の丸遺跡第10次発掘調査概要報告書』市教委
13. 下水道管築造地点『下水道工事に伴う埋蔵文化財報告書』市教委
14. 無線統制室地点『代替無線統制室建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』県教委
16. 名古屋城二の丸庭園地点『名古屋城二の丸庭園発掘調査概要報告書』市教委
17. 名古屋城本丸東門地点：市教委

第2表 整理スタッフ

調査研究補助員	安達崇子 水野多栄
整理補助員	加藤和枝 上岡知春 小森奈菜枝 山下明美

第3表 名古屋城関連年表

1582年(天正10年)この頃那古野城廃城となる(『金城温古録』)	1739年(元文4年)宗春が蟄居を命じられ、宗勝が封を継ぐ、儉約令を出す
1607年(慶長12年)徳川義直が甲斐から尾張(清須)に移封(『当代記』他)	1744年(延享元年)松平君山が深井丸に菜園を設ける
1608年(慶長13年)徳川秀忠、義直へ尾張一門領地支配を認める(『秀忠判物』)	1745年(延享2年)町屋に棧瓦葺を許す
1609年(慶長14年)徳川家康が徳川義直を従え清須城に入り名古屋築城を決定する(『事蹟録』他)	1761年(宝暦11年)宗勝死去、宗睦が封を継ぐ
1610年(慶長15年)徳川家康が名古屋に至り、牧長勝の縄張りを決定する(『尾陽始君知』)	1799年(寛政11年)宗睦死去
本丸・二の丸・西丸・深井丸の石垣完成(『当代記』)	1800年(寛政12年)一橋家から斎朝が封を継ぐ
1611年(慶長16年)本丸・二の丸・西丸・深井丸の作事	1822年(文政5年)二の丸御殿大改造、南御庭がなくなり、東御庭を増造
1612年(慶長17年)天守作事完了、城下の橋地と町割り	1827年(文政10年)斎朝が家督を齋温に譲る
1613年(慶長18年)名古屋越、諸士・町人の住宅定まる	1834年(天保5年)下深井御庭に達磨町(門前町)設立、ついで杉股町(宿場町)を造営
1615年(元和元年)義直が本丸御殿に移徙(『敬公実録』)	1839年(天保10年)齋温死去、田安家から齋荘が封を継ぐ
1617年(元和3年)二の丸殿舎作事、尾張藩政の各機関の整備	1842年(天保13年)齋荘死去
1618年(元和4年)深井丸(下深井御庭)完成(『事蹟録』)	1845年(弘化2年)養子慶城封を継ぐ
1620年(元和6年)義直が二の丸に移徙(『敬公実録』)	1849年(嘉永2年)慶城江戸藩邸で死去、慶勝封を継ぐ
1650年(慶安3年)義直が江戸藩邸で死去、光友が封を継ぐ	1858年(安政5年)慶勝退隠、茂徳封を継ぐ
1663年(寛文3年)二の丸の成瀬・竹腰邸を三の丸に移転	1863年(文久3年)茂徳隠居して家督を義直に譲る
1679年(延宝7年)この頃御下屋敷を設ける	1869年(明治2年)版籍奉還により義勝名古屋藩知事になる
1693年(元禄6年)光友が家督を世子綱誠に譲る	1871年(明治4年)廃藩置県、二の丸が兵営になる。
1699年(元禄12年)綱誠が江戸藩邸で死去、吉通が封を継ぐ	1872年(明治5年)東京鎮台第三分営(後の名古屋鎮台)城内に置かれる
1713年(正徳3年)吉通死去、五郎太襲封するが3ヵ月後に死去、継友が封を継ぐ	1874年(明治7年)三の丸全城を陸軍省に移管
1730年(享保15年)継友急逝、弟宗春が封を継ぐ	1889年(明治22年)名古屋市制施行、下深井御庭を小牧山と交換し陸軍省に移管
1731年(享保16年)宗春が入府して自由化政策を実施、名古屋城下が発展	1893年(明治26年)本丸と西丸の一部を宮内省に移管、名古屋離宮となる
	1930年(昭和5年)宮内省から名古屋城を名古屋市に下賜、名古屋城24棟を国宝に指定
	1945年(昭和20年)空襲を受け、名古屋城本丸他を焼失

『日本名城集成 名古屋城』より抜粋

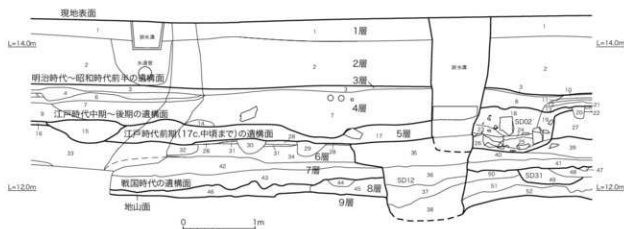
第2章 遺構

第1節 基本層序と遺構の概要

今回の調査区における土層堆積状態は地点によって異なるが、遺構との対応関係を比較的良好に把握できる南壁西部の土層断面(第8図)で見ると、上位から1層灰白色礫層、2層にぶい黄褐色中粒砂層、3層褐色砂、4層暗褐色砂、5層灰黄褐色細粒砂、6層褐色細粒砂、7層黒褐色シルトまたは細粒砂、8層黒褐色シルト、9層にぶい黄褐色シルトの順に堆積する。

このうち1層と2層は昭和20年以降の堆積と

思われ、国立名古屋病院の建設などに伴う整地層と推測される。3層はその上層で近代の遺物が散見されることから、明治時代以降に陸軍第三師団が設置された時の面と考えられる。この3層は層厚が約2cmと非常に薄く、硬く締まった状態で検出されていることから、練兵場の硬化面と推測される。4層はシルトなどがブロック状に混在した土上であり、近世の遺物をわずかに含む土層である。層厚は30~80cmと比較的厚いことか



第1層 N7/0 灰白色礫層 中粒砂含む 現地表面
 第2層 10YR5/4 にぶい黄褐色中粒砂 礫多く混じる
 第3層 10YR6/1 褐灰色砂粒 礫多く含む
 第4層 10YR3/4 暗褐色砂粒 礫混じる
 第5層 10YR3/4 暗褐色砂粒 赤褐色土粒、炭化物混じる
 第6層 10YR3/2 黒褐色砂粒 礫、炭化物混じる
 第7層 10YR3/2 黒褐色砂粒 炭化物多く混じる
 第8層 10YR5/3 にぶい黄褐色砂粒 礫多く混じる 炭化物少量混じる
 第9層 10YR3/3 暗褐色細粒砂 黒色土粒、炭化物混じる
 第10層 10YR3/4 暗褐色細粒砂 礫、炭土混じる 炭化物少量混じる
 第11層 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 細粒砂混じる
 第12層 10YR3/2 黒褐色細粒砂 礫、炭化物混じる
 第13層 10YR3/2 黒褐色細粒砂 炭化物混じる
 第14層 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂 炭化物少量混じる
 第15層 10YR2/2 黒褐色細粒砂 褐色土混じる
 第16層 10YR3/4 暗褐色細粒砂 粘土混じる
 第17層 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂 礫混じる
 第18層 7.5YR3/3 暗褐色細粒砂 黄褐色土粒、炭化物混じる
 第19層 10YR2/3 黒褐色細粒砂 褐色土粒、炭化物混じる
 第20層 10YR4/5 にぶい黄褐色細粒砂 炭化物混じる
 第21層 10YR3/3 暗褐色細粒砂 赤褐色土粒混じる
 第22層 7.5YR4/6 褐色細粒砂 炭化物混じる
 第23層 7.5YR3/3 暗褐色細粒砂 赤黄褐色土混じる
 第24層 7.5YR4/6 褐色砂粒 暗褐色細粒砂混じる
 第25層 10YR3/3 暗褐色砂粒 炭化物少量混じる
 第26層 10YR4/4 褐色砂粒 礫多量に混じる

第27層 10YR4/4 褐色細粒砂 炭化物混じる
 第28層 10YR3/4 暗褐色砂粒 炭化物混じる
 第29層 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂 炭化物混じる
 第30層 10YR3/4 暗褐色細粒砂 褐灰色シルト混じる
 第31層 10YR5/4 にぶい黄褐色細粒砂
 第32層 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂 粘土塊混じる
 第33層 10YR4/4 褐色細粒砂
 第34層 10YR4/6 褐色細粒砂 粘土塊混じる
 第35層 10YR5/3 にぶい黄褐色砂粒
 第36層 10YR3/2 黒褐色シルト 細粒砂混じる
 第37層 10YR3/2 黒褐色シルト 細粒砂混じる
 第38層 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 粘土混じる
 第39層 10YR4/3 にぶい黄褐色細粒砂 炭化物混じる
 第40層 10YR5/3 にぶい黄褐色細粒砂
 第41層 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂 炭化物混じる
 第42層 10YR2/3 黒褐色シルト 細粒砂、炭化物混じる
 第43層 10YR3/2 黒褐色細粒砂
 第44層 10YR2/1 黒褐色砂粒 赤褐色土粒混じる
 第45層 10YR3/3 暗褐色細粒砂 黄褐色シルト混じる
 第46層 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 黄褐色シルト、粘土混じる
 第47層 10YR5/1 褐灰色細粒砂 炭化物混じる 礫少量混じる
 第48層 10YR2/2 黒褐色細粒砂 礫、炭化物、赤褐色砂混じる
 第49層 10YR3/4 暗褐色細粒砂 黄色土、炭化物混じる
 第50層 10YR2/2 黒褐色シルト 粘土、黄褐色土粒、炭化物混じる
 第51層 7.5YR3/2 黒褐色シルト 細粒砂、赤褐色砂混じる
 第52層 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 細粒砂混じる 炭化物少量混じる

第8図 基本土層断面図(南壁)

ら、江戸時代に行われた大規模な整地層と考えられる。5層は4層と同様シルトと砂質土の斑土であり、出土遺物からみて江戸時代前期の整地層と判断される。6層も4層と同様シルトと砂質土の斑土であり、出土遺物からみて戦国時代の整地層と推測される。7層も4層と同様シルトと砂質土の斑土となるが部分的に認められる堆積であり状況は詳らかではない。出土遺物からみて古代から中世前半にかけての堆積と思われるが、整地層と断定するには至らない。8層は黒褐色シルトで旧表土に相当する堆積物と考えられる。9層は名古屋台地の基盤層の最上層と推測される堆積で人為的な攪拌は認められない。

このようにみると、調査区南西部においては、3層上面が明治時代以降の遺構面、4層上面が江戸時代中後期の遺構面、5層上面が江戸時代前期の遺構面、6層上面が戦国時代の遺構面、7層または8層上面が室町時代以前の遺構面にそれぞれ対応すると思われ、少なくとも合計5面の遺構面が存在したと推測される。

実際の発掘調査では、1～7層までが整地層であり面の把握が困難であることや地点により堆積層が大きく異なっていることから、各5面の遺構面を平面的に認識することは難しくまた調査区全体で5面の遺構面が均一に識別できる形で展開したとは思われない。また、これに加え、遺構面の把握が難しい状況であったため、調査上の失敗を犯したことも遺構面を正しく平面的に捉えられなかった一因である。実際に調査当初の表土掘削の際に第9図に示した範囲で3層と4層の一部を重機で掘削してしまうというミスをしている。

このような諸般の理由で、発掘調査は便宜上3面で調査を実施した。このうち表土掘削で一部掘り過ぎた部分や遺構の重複が少ない部分については1面または2面で調査した範囲が存在する。当然上記のような事情から、調査時の面は正しく均質な時期の遺構が検出されたとはいえないの

で、各面の遺構は複数の時期にまたがって検出されていると認識しなければいけないものである。巻末に示した各面の遺構図はこうした発掘調査時の検出状態をそのまま表現しているの、この点を留意願いたい。

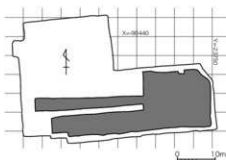
さて、このような形で検出された遺構や遺物は極少量の古い時期の遺物が存在する他は、古墳時代中期から昭和時代前半の範囲に広く展開している。報告に際してはこれらを大きく時期別に整理しておく方が、記述においてあるいは利用に際しても便利であると考え、遺構や遺物の種別が大きく変化する面期を認識して大きく4期に区分したい。

A期：古墳時代中期～平安時代(5世紀～12世紀)

この段階の遺構は竪穴建物跡と掘立柱建物跡、土坑などによって構成される。井戸や溝などは顕著な形では確認されない。また遺物は多くの須恵器、土師器、灰軸陶器などの焼き物と一部の石製品で構成される。

B期：鎌倉時代～戦国時代(13世紀～16世紀)

この段階の遺構は掘立柱建物跡、井戸、溝、土坑などによって構成される。竪穴建物跡がなくなり、井戸や溝が出現することが大きな特徴である。また遺物は多くの陶器と土師器類の他、一部の石製品・金属製品・木製品で構成される。金属製品が一定量認められるようになるのが特徴で、木製品の出現は滞水状態の環境を維持し続けた井戸などの遺構が存在することが大きく影響しているといえる。



第9図 包含層掘り下げ範囲

C期：江戸時代（17世紀～19世紀中頃）

この段階の遺構は掘立柱建物跡と礎石建物跡、井戸、溝、池、地下室、土坑など多量の遺構によって構成される。石材を豊富に使用した遺構が展開した点に大きな特徴を見出すことができる。また遺物はこれまでの陶器や土師器に加え一定量の磁器が加わり、これに石製品・金属製品・木製品などが加わる。特に金属製品や木製品は種類と出土量ともに増加し、豊かな物質文化が展開したことがうかがい知れる。

D期：明治時代～昭和時代前半（19世紀後半～20世紀前半）

この段階の遺構は礎石建物跡と井戸・土坑など

によって構成される。ただし、この時期は調査当初には調査の対象として視野に入れていなかったため、いくつかの遺構を見逃している可能性が高いことに注意しておきたい。また遺物は多くの陶磁器類・ガラス製品・金属製品が認められ、木製品・革製品・石製品など多様な材質の遺物で構成される。ガラス製品と金属製品の比重が非常に高まったことが特徴といえる。

以上、4期の時期区分にしたがってこれから遺構と遺物の記述を進めて行きたい。なお、各時期はさらに細分することが可能であるが、ここでは示さず各時期毎に分析していく。

第2節 A期の遺構

第1項 概要

A期は古墳時代中期から平安時代までの時期である。この段階に属する遺構には、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、掘立柱欄列跡、土坑などが存在する。この時期の遺構はさらに次の5段階に細分が可能である。

A-1期：5世紀後半を中心とする段階。東山11号窯式期の猿投窯系須恵器などが出土する時期。

A-2期：6世紀前半の段階。東山61号窯式期の猿投窯系須恵器などが出土する時期。

A-3期：7世紀を中心とする段階。東山44号窯式期前後の猿投窯系須恵器などが出土する時期。

A-4期：8世紀を中心とする段階。岩崎17号窯式期から折戸10号窯式期の猿投窯系須恵器などが出土する時期。

A-5期：9世紀を中心とする段階。黒笹90号窯式期の灰釉陶器などが出土する時期。

以下、種別に遺構を紹介する。

第2項 竪穴建物跡

今回の調査で確認された竪穴建物跡は全部で8棟存在する。黒褐色砂質土の旧表土を掘削して構築されたと思われるが、旧表土と埋土との区別は難しい場合が多い。また、中世以降の掘乱などが激しいことや竪穴建物跡の重複が認められるなどの悪条件も重なり、平面プランの検出は困難を極めた。平面形はおおよそ隅丸長方形で、旧表土などの遺存状況が悪いために、遺構の深さは概して非常に浅くなっている。以下、個別に説明を加えていく。

SB02 (第10図)

調査区の西部で確認された隅丸長方形の竪穴建物跡で、西辺は明瞭な掘削を確認することができ

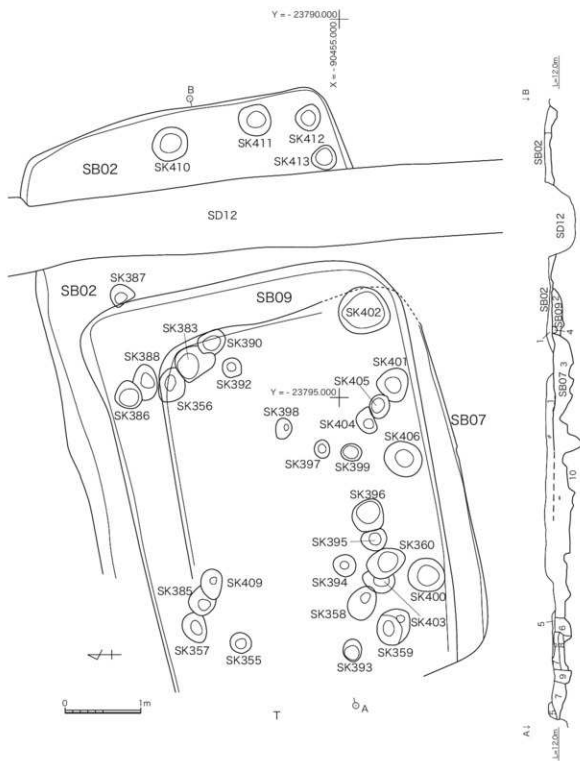
きなかった。規模は5.42m以上×4.46mで、深さは最大で12cmを測る。平面的にも断面的にもSB04、SB07、SB09を切る状態が確認された。特にSB07とSB09とはほぼ重複した形で検出されており、SB02はこれらの建て替えられた竪穴建物群の最終段階の竪穴建物跡と推測される。主柱穴はSD12などの掘乱も存在するため明確に確認できなかった。SK410～413はSB02の補助的な柱穴であった可能性が考えられる。埋土は黒褐色砂質土の斑土が主体で、最下層では白色のシルトが薄く堆積していた。この白色シルトは床面整地土(貼床)と考えられる。埋土には焼土粒が混入していたが、カマドや炉などの痕跡は認められなかった。一部にB期の遺物が混入するものの、折戸10号窯式期の猿投窯系須恵器などが出土していることから、8世紀後半に廃絶した竪穴建物跡と推定される。

SB07 (第10図)

調査区の西部で確認された隅丸長方形の竪穴建物跡で、北西隅を確認することができなかった。規模は5.08m以上×3.80mで、深さは最大で25cmを測る。SB02に切られ、SB09を切った状態が確認された。特にSB09とはかなり近接した状態で重複している。主柱穴はSK355・SK400・SK401が該当すると考えられるが、北東隅の柱穴を確認することはできなかった。埋土は黒褐色砂質土の斑土が主体で、焼土粒などが混入していた。カマドや炉、周溝などの内部遺構は認められなかった。岩崎1号窯式期または高蔵寺2号窯式期の猿投窯系須恵器などが出土していることから、8世紀中頃に廃絶した竪穴建物跡と推定される。

SB09 (第10図)

調査区の西部で確認された隅丸長方形の竪穴建物跡で、西辺は明瞭な掘削を確認することができ



SB02.07.09東西セクション土層説明

- 第1層 10YR2/2 灰褐色細粒砂 粘土・焼土混じる 下層界面に白色シルト
 第2層 10YR3/1 灰褐色細粒砂 粘土・焼土混じる
 第3層 10YR2/2 灰褐色細粒砂 粘土・焼土混じる
 第4層 10YR5/2 灰黄褐色シルト
 第5層 2.5Y5/2 粗灰黄色細粒砂 中粒砂混じる、焼土少量混じる

- 第6層 10YR3/1 灰褐色細粒砂 粘土・焼土混じる
 第7層 2.5Y2/1 灰褐色細粒砂 粘土混じる
 第8層 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土 細粒砂混じる 粘板6~7
 第9層 10YR3/1 灰褐色細粒砂 粘土混じる
 第10層 10YR5/6 明黄褐色粘土(地山)

第10図 竪穴建物跡 SB02・SB07・SB09 遺構図

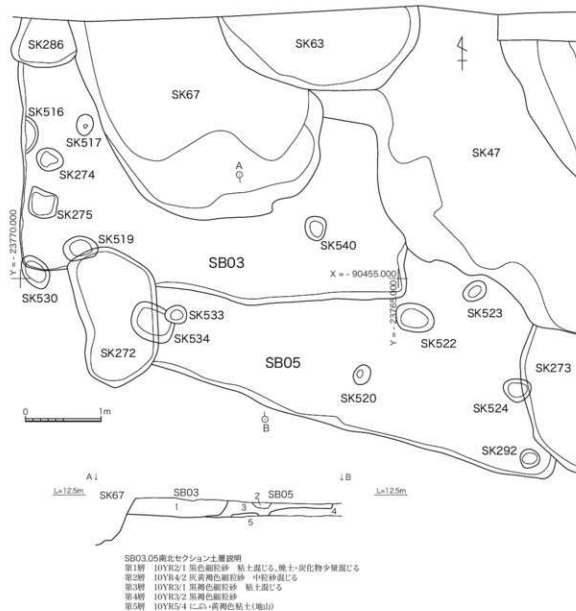
名古屋城三の丸遺跡 VII

なかった。規模は5.38m以上×4.09mで、深さは最大で14cmを測る。SB02とSB07に切られており、特にSB07はSB09よりも深く掘削されているために、埋土はほとんど遺存しない状態であった。状況から見てSB02などの建て替えられた竪穴建物群の初期段階の竪穴建物跡と推測される。主柱穴はその配置からみてSK402・SK388・SK357・SK359とここでは推測しておくが、確定的ではない。埋土は黒褐色細粒砂の斑土が主体で、カマドや炉などの痕跡は認められなかった。

埋土がわずかしこ遺存しないため出土遺物が非常に少なく、鳴海32号竪穴期の猿投窩系須恵器などが出土したが、切り合い関係からみて、7世紀後半に廃絶した竪穴建物跡と推定される。

SB04 (第12図)

調査区の中央部のやや西寄りでは確認された隅丸長方形の竪穴建物跡で、西辺の一部がSB02によって切られている。規模は5.48m×3.44mで、深さは最大で26cmを測る。SB08を切る状態が確認された。主柱穴はSK414・SK420・SK424



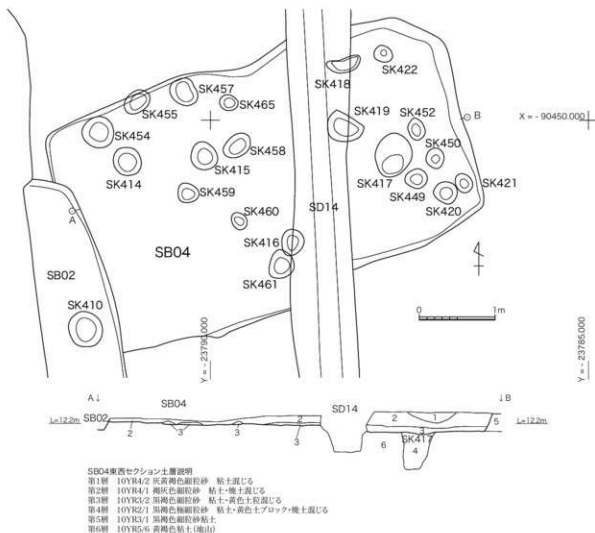
第11図 竪穴建物跡 SB03・SB05 遺構図

が該当すると推定され、南西隅の柱穴を特定することはできなかった。埋土は上層が褐灰色細粒砂、下層が黒褐色細粒砂となっている。このうち下層は地山の黄色土粒が混入して薄く堆積していることから、床面整地土（貼床）の可能性が考えられる。埋土上層には焼土粒が混入していたが、カマドや炉などの痕跡は認められなかった。B期以降の柱穴が相当量重複しているために一部にB期以降の遺物が混入するものの、多くの東山44号窯式期の猿投窯系須恵器などが出土していることから、8世紀中頃に廃絶した竪穴建物跡と推定される。

SB08 (第13図)

調査区の中央部で確認された少し歪な隅丸長方

形の竪穴建物跡で、西辺は明瞭な掘削を確認することができなかった。規模は4.94m×3.56mで、深さは最大で20cmを測り、SB04に切られていた。主柱穴はSK421・SK432・SK427が該当すると推定され、北西隅の柱穴を特定することはできなかった。北東および南西の主柱穴はSK421・SK427以外にも候補が考えられ、建て直しが行われた可能性が考えられる。埋土は黒褐色細粒砂の斑土が主体であったが、カマドや炉などの痕跡は認められなかった。一部にB期の遺物が混入するものの、黒笹90号窯式期の猿投窯系灰軸陶器などが出土していることから、9世紀後半に廃絶した竪穴建物跡と推定される。



第12図 竪穴建物跡SB04遺構図

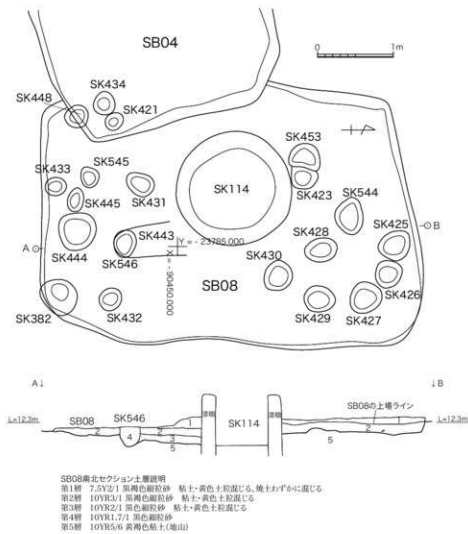
SB03 (第11図)

調査区の東部で確認された隅丸長方形の竪穴建物跡で、北半は近世以降の遺構に切られ、さらに調査区外にも広がると予測されるため、規模を特定することができなかった。規模は5.12m × 2.36m以上で、深さは最大で23cmを測る。平面的・断面ともSB05を切る状態が確認された。支柱穴はSK517・SK519・SK540が該当すると推定され、北辺の柱穴は確認されなかった。SK517は補助的な柱穴かも知れない。埋土は黒色細粒砂の斑土で炭化物や焼土粒が混入していたが、カマドや炉などの痕跡は認められなかった。高蔵寺2号竪穴期の猿投窯系須恵器などが出土していることから、8世紀中頃に廃絶した竪穴建物跡と推定される。

物跡と推定される。

SB05 (第11図)

調査区の東部に所在する隅丸長方形と推測される竪穴建物跡で、南辺のみが明瞭に確認された。規模は5.52m以上×1.80m以上で、深さは最大で21cmを測る。SB03に切られ、南西隅と南東部がそれぞれSK272とSK273に切られていた。支柱穴はSK533・SK524が該当すると推定され、北辺の柱穴は確認されなかった。SK520などはSB05の補助的な柱穴であった可能性が考えられる。埋土は黒褐色細粒砂の斑土で、カマドや炉などの痕跡は認められなかった。東山44号竪穴期の猿投窯系須恵器などが出土していることから、7世紀前半に廃絶した竪穴建物跡と推定される。



第13図 竪穴建物跡 SB08 遺構図

SB06 (第14図)

調査区の中央部南寄りで確認された隅丸方形の竪穴建物跡である。柱穴が検出されなかったことや規模が小さいことなどの遺構の状態からみて、竪穴建物跡ではなかった可能性が高い。規模は3.10m×2.64mで、深さは最大で17cmを測る。竪穴建物跡どうしの遺構の重複は確認されなかった。南半部が段差を持って深くなっており、埋土は黒色細粒砂の斑土であった。一方、北半部は埋土が灰黄褐色細粒砂であり、これを床面整地土(貼床)と考えることができる。カマドや炉などの痕跡は認められなかった。東山61号竪穴期の猿投窯系須恵器などが出土していることから、6世紀前半に廃絶した遺構と推定される。

第3項 掘立柱建物跡

今回の調査で確認された掘立柱建物跡は全部で16棟存在する。掘立柱建物跡は全てそれに伴う確実な床面を確認することができなため、建物の時期を決定する重要な床面出土遺物が存在しない。また、多くは各柱穴が同一の遺構面から掘

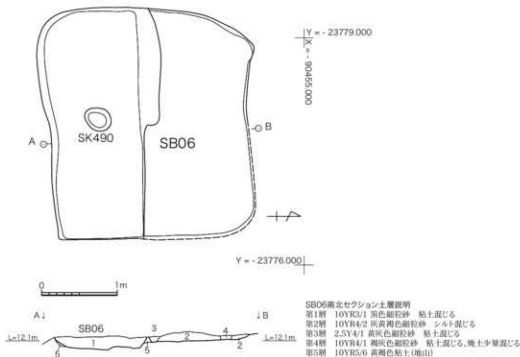
削されたたものと断定することも難しい状態でもある。このため、建物跡の時期は柱穴内出土遺物と柱穴の切り合い関係など様々な情報から総合的に推測せざるを得ない。ここではA期に属すると推測された5棟の掘立柱建物跡を報告する。掘立柱建物跡の平面形は全て長方形を呈しており、庇などの付属施設を伴うものも存在する。以下、個別に説明を加えていく。

SB10 (第15図)

調査区の中央部で確認された3間×2間の掘立柱建物跡である。建物規模は5.2m×3.7mを測る総柱建物で、北東隅の柱穴は調査区外に展開すると推測される。当初は埋土が灰黄褐色砂質土であるためB期の遺構と認識していたが、柱穴から出土した遺物を検討するとA期の遺構である可能性が高くなった。柱穴から岩崎17号竪穴期の猿投窯系須恵器などが出土していることから、8世紀中頃に廃絶した掘立柱建物跡と推定される。

SB11 (第16図)

調査区の北西部で確認された2間以上×2間の



第14図 竪穴建物跡SB06遺構図

名古屋城三の丸遺跡 VII

掘立柱建物跡で、西辺は調査区外に展開すると推測される。少なくとも東辺と南辺には1間分の底が存在したと見られ、この部分も含めた建物規模は6.8m以上×6.2mである。身舎の規模は4.1m以上×4.4mである。柱穴から東山44号室式期の猿投窓系須恵器などが出土していることから、7世紀中頃に廃絶した掘立柱建物跡と推定される。

SB12 (第16図)

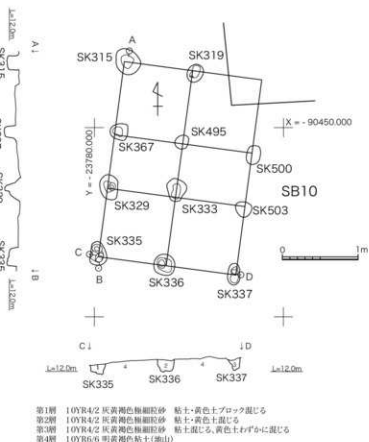
調査区の中央部で確認された2間×1間の掘立柱建物跡で、北東部が調査区外に展開する。建物規模は5.3m×2.5mで、SK322は東柱と推定される。柱穴から黒笹14号室式期の猿投窓系灰釉陶器などが出土していることから、9世紀中頃に廃絶した掘立柱建物跡と推定される。

SB13 (第16図)

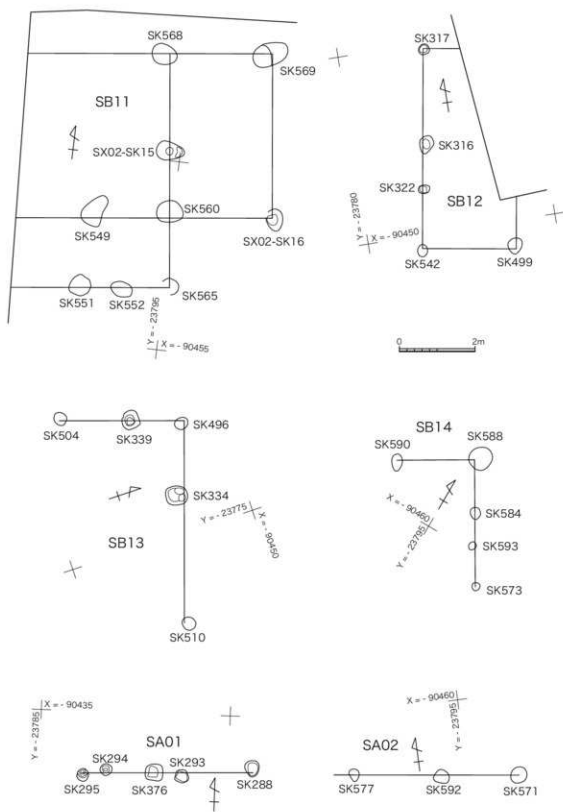
調査区の中央部で確認された2間×2間と推測される掘立柱建物跡で、西辺と南辺の柱穴は確認することができなかった。SB13が2間×2間とすれば建物規模は5.3m×3.3mである。柱穴から東山44号室式期の猿投窓系須恵器などが出土していることから、7世紀中頃に廃絶した掘立柱建物跡と推定される。

SB14 (第16図)

調査区の南西部で確認された1間×3間と推測される掘立柱建物跡で、西辺と南辺の柱穴は発見されなかった。建物規模は3.3m×2.1mである。柱穴から高蔵寺2号室式期の猿投窓系須恵器などが出土していることから、8世紀前半に廃絶した掘立柱建物跡と推定される。ただし状況から中世まで下る可能性も残されている。



第15図 掘立柱建物跡SB10遺構図



第 16 図 掘立柱建物跡 SB11 ~ 14・SA01 ~ 02 遺構図

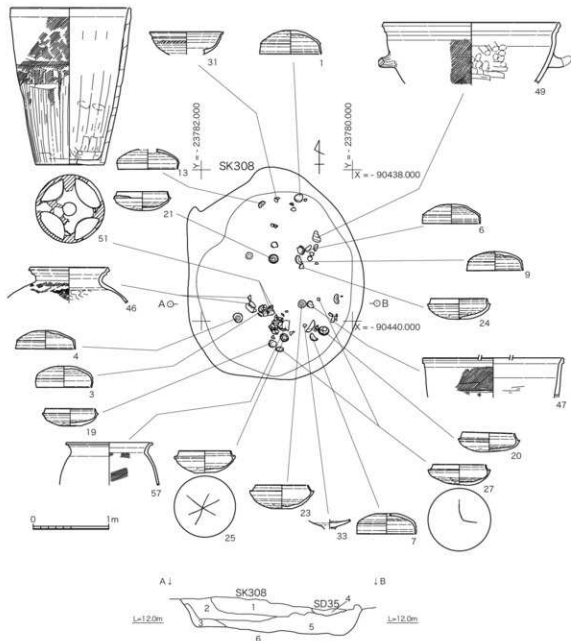
第4項 掘立柱柵列跡

今回の調査で確認された掘立柱柵列跡は全部で9棟存在する。掘立柱柵列跡は、掘立柱建物跡と同様、全てそれに伴う確実な床面を確認することができないし、多くは各柱穴が同一の遺構面から掘削されたものと断定することも難しい状態で

ある。したがって、柵列跡の時期は柱穴内出土遺物と柱穴の切り合い関係など様々な情報から総合的に推測せざるを得ない。ここではA期に属すると推測された2基の掘立柱柵列跡を報告する。

SA01 (第16図)

調査区の北端部で確認された掘立柱柵列跡で、



SK308東西セクション土質説明

- 第1層 7.5YR3/2 黒褐色細粒砂 焼土多く混じる、粘土・灰化物混じる
- 第2層 7.5YR3/1 黒褐色細粒砂 粘土・焼土・灰化物混じる
- 第3層 底土(10YR5/4 に近い黄褐色)+7.5YR3/1 黒褐色) 細粒砂 粘土・黒色土混じる、焼土わずかに混じる
- 第4層 10YR3/3 暗褐色極細粒砂 粘土・黄色シルト・焼土・灰化物混じる
- 第5層 7.5YR2/3 暗褐色極細粒砂 焼土多く混じる、灰化物・粘土・黒色土混じる
- 第6層 10YR6/6 明黄褐色粘土(地山)

第17図 土坑SK308 遺物出土状態図

2間分(4.6m)が確認された。SK294・SK293は東柱と推測される。柱穴から出土した遺物からは時期を詳細には特定できない。ただし位置がSD23と重複するためSD23とはあまり遡らない時期の遺構である可能性は考えられる。

SAO2 (第16図)

調査区の南西部で確認された掘立柱欄列跡で、2間分以上(4.4m以上)が確認された。柱穴から黒笹90号窯式期の鎚投窯系灰軸陶器などが出土していることから、9世紀中頃に廃絶した掘立柱欄列跡と推定される。

第5項 土坑

今回の調査で確認されたA期に属すると推測される土坑は全部で数十基存在する。ここでは特徴的な土坑を報告する。

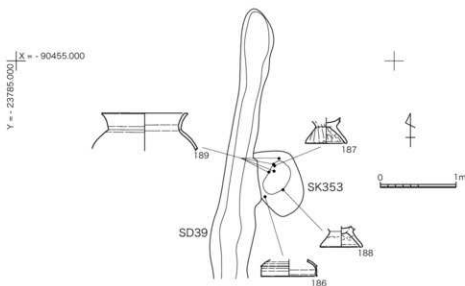
SK308 (第17図)

調査区の北東部で確認された土坑で、規模は2.73m×2.32m、深さは最大で43cmを測る。

平面プランは少し歪な円形を呈し、断面形は楕円状となっている。SD35に切られている。土坑埋土から多量の須恵器などの遺物が出土した。これらの須恵器は東山44号窯式期から東山50号窯式期に属する資料が大半を占めていることから、7世紀中頃に多量の須恵器を投棄した土坑と推定される。発掘調査の過程で遺物の出土量が多く特殊な遺構と判断されたため、土層観察用ベルト部分についてのみ1mmメッシュの篩別作業を実施した。この結果土製白玉や石製白玉、土製勾玉などを検出することができた。本来はこのような微細な遺物がもう少し多く存在した可能性が考えられる。

SK353 (第18図)

調査区の北東部で確認された0.88m×0.54mを測る土坑である。平面プランは歪な円形状を呈しており、SD39に切られている。土坑埋土から土師器台付瓶甕や須恵器杯蓋などの遺物が出土した。5世紀後半に比定される。



第18図 土坑SK353遺物出土状態図

第3節 B期の遺構

第1項 概要

B期は鎌倉時代から戦国時代まで（13世紀～16世紀）の時期である。この段階の遺構には掘立柱建物跡、井戸、溝、土坑などが存在する。この時期の遺構はさらに4段階に細分が可能である。

B-1期：13世紀中葉を中心とする段階。尾張型山茶碗第7～8型式などが出土する時期。

B-2期：14世紀から15世紀中頃までの段階。東濃型山茶碗大畑大洞窯式～脇之島窯式などが出土する時期。

B-3期：15世紀後半の段階。東濃型山茶碗生田窯式や古瀬戸後IV期古段階の瀬戸窯産陶器などが出土する時期。

B-4期：15世紀後葉から16世紀中頃までの段階。古瀬戸後IV期新段階から大窯第1段階までの瀬戸美濃窯産陶器などが出土する時期。

B-5期：16世紀中葉の段階。大窯第2段階の瀬戸美濃窯産陶器などが出土する時期。

以下、種別に遺構を記述する。

第2項 掘立柱建物跡

この段階に属すると推測される掘立柱建物跡は全部で6棟存在する。A期の遺構で記述したように、掘立柱建物跡は全て時期を特定することが難しい状態である。加えてこの段階に属すると考えられた掘立柱建物跡の柱穴は規模が小さく柱穴がきちんと並ばない傾向が見られる。建物の形状や規模はなお検討を要する状態といえる。以下、個別に説明を加えていく。

SB15（第19図）

調査区の南東端部で確認された2間以上×1間の掘立柱建物跡で、東部は調査区外に展開すると推測される。建物規模は4.2m以上×4.1mである。柱穴から尾張型山茶碗第6型式の碗などが出土していることから、B-1期（13世紀中頃）に廃

絶した掘立柱建物跡と推定される。

SB16（第19図）

調査区の中央部で確認された1間以上×1間の掘立柱建物跡で、北東部が調査区外に展開する。建物規模は4.3m以上×3.0mである。柱穴から山茶碗と思われる陶器片がわずかに出土していることから、古代末から中世に廃絶した掘立柱建物跡と推定される。

SB17（第19図）

調査区の中央部で確認された3間以上×1間と推測される掘立柱建物跡で、北東部が調査区外に展開する。建物規模は6.1m以上×3.0mである。柱穴から東濃型山茶碗の破片などが出土していることから、B-3～4期（15世紀から16世紀前葉）に廃絶した掘立柱建物跡と推定される。

SB18（第19図）

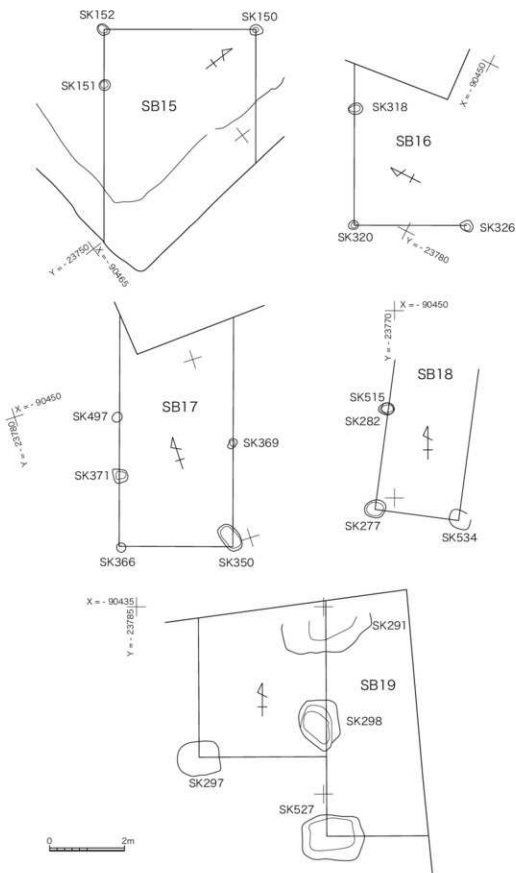
調査区の中央部東寄りで確認された1間×2間以上と推測される掘立柱建物跡で、北辺の柱穴は発見されなかった。建物規模は2.8m以上×2.2mである。柱穴から大窯前半の瀬戸美濃窯産陶器などが出土していることから、B-5期（16世紀中葉）に廃絶した掘立柱建物跡と推定される。

SB19（第19図）

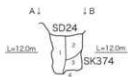
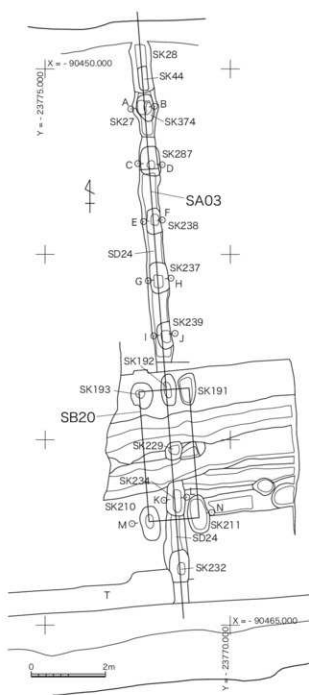
調査区の北端部で確認された2間以上×1間以上と推測される掘立柱建物跡で、南西隅部のみが検出された。建物規模は6.4m以上×2.7m以上である。SB19はこの時期の他の掘立柱建物跡と比べて非常に柱穴の規模が大きい点が特徴である。SK297の存在から西側に庇が付く可能性も考えられる。柱穴から古瀬戸末段階の瀬戸美濃窯産陶器などが出土していることから、B-3期（15世紀後半）に廃絶した掘立柱建物跡と推定される。

SB20（第20図）

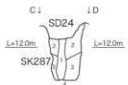
調査区の東半部で確認された1間×1間の掘立柱建物跡で、建物跡の中央部を南北にSA03およ



第19図 掘立柱建物跡 SB15～19 遺構図



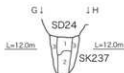
- 第1層 10YR3/1 黒褐色細砂 白色シムトブロック状に、黄色土の付着に凝る
- 第2層 10YR3/2 黒褐色細砂 白色シムトブロック状に、黄色土の付着に凝る
- 第3層 10YR2/1 黒褐色細砂 白色粘土に凝る
- 第4層 10YR6/6 明褐色粘土(地肌)



- 第1層 10YR3/2 黒褐色細砂 粘土・黄色土に凝る
- 第2層 10YR2/3 黒褐色細砂 粘土・黄色土に凝る・白色土に凝る
- 第3層 10YR2/2 黒褐色細砂 粘土・白色土に凝る
- 第4層 10YR6/6 明褐色粘土(地肌)



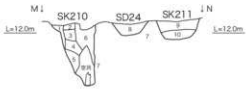
- 第1層 10YR4/2 灰青褐色細砂 粘土に凝る
- 第2層 2.5Y5/1 黄褐色細砂 粘土・中砂に凝る
- 第3層 10YR3/1 黒褐色粘土 凝り・シムトに凝る
- 第4層 10YR2/2 黒褐色細砂 粘土・黄色土に凝る
- 第5層 2.5Y3/1 黄褐色細砂 粘土・黄色土に凝る
- 第6層 10YR2/1 黒褐色細砂 粘土・多くに凝る・シムトに凝る
- 第7層 10YR6/6 明褐色粘土(地肌)



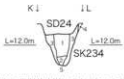
- 第1層 10YR4/1 灰青色細砂 粘土・黄色土ブロック状に凝る
- 第2層 N3 明灰色細砂 粘土・白色シムトブロック状に凝る
- 第3層 10YR2/2 黒褐色細砂 粘土に凝る
- 第4層 10YR6/6 明褐色粘土(地肌)



- 第1層 7.5YR4/1 褐色細砂 シムトに凝る、木灰の付着に凝る
- 第2層 10YR3/2 黒褐色細砂 粘土に凝る
- 第3層 N3 明灰色粘土 シムトに凝る
- 第4層 10YR 6/6 明褐色粘土(地肌)



- 第1層 10YR3/1 黒褐色細砂 粘土に凝る
- 第2層 10YR4/2 灰青褐色細砂 中砂に凝る
- 第3層 10YR4/3 に近い黄褐色細砂 黄色土ブロック状に凝る
- 第4層 10YR4/3 に近い黄褐色細砂 黄色土ブロック状に凝る
- 第5層 10YR4/1 黄褐色細砂 黄色土に凝る
- 第6層 2.5Y4/1 黄褐色細砂 粘土に凝る
- 第7層 10YR6/6 明褐色粘土(地肌)
- 第8層 10YR4/2 灰青褐色細砂 シムトに凝る
- 第9層 10YR4/2 灰青褐色細砂 粘土に凝る、粘土・少量凝る
- 第10層 10YR3/2 黒褐色細砂 粘土に凝る、粘土・少量凝る



- 第1層 10YR4/2 灰青褐色中砂 粘土・白色シムトブロック状に凝る
- 第2層 10YR3/2 黒褐色粘土 凝り・中砂に凝る
- 第3層 10YR 3/1 黄褐色細砂 粘土・黄色土ブロック状に凝る
- 第4層 10YR 2/3 明褐色細砂 粘土に凝る
- 第5層 10YR 6/6 明褐色粘土(地肌)



第20図 掘立柱柵列跡 SA03 遺構図

びSD24が走っている。建物規模は3.5m×1.3mと小型である。柱穴の平面形は長楕円形を呈しその深さは約50cmと深い点特徴である。SA03またはSD24に付随する建物跡と想定するならば柵または塀などの遮蔽施設に伴う門である可能性が高い。柱穴から古瀬戸末段階の瀬戸美濃窯産陶器などが出土したが、SA03・SD24と一連の遺構と考えるならばB-5期（16世紀中葉）に廃絶した掘立柱建物跡と推定される。

第3項 掘立柱柵列跡

今回の調査で確認された9棟の掘立柱柵列跡のうち、B期に属すると考えられるものは3棟である。掘立柱建物跡と同様、時期を断定することは難しいが、柱穴内出土遺物と柱穴の切り合い関係など様々な情報から推測した。ここでは個別に報告する。

SA03（第20図）

調査区の中央部で確認された掘立柱柵列跡で、10間分（15.2m）以上が確認された。柱穴はSD24内に平行して存在するため、いわゆる布掘り状の柵列と想定される。柱穴の平面形は隅丸長方形を呈し、埋土の断面観察から柱の痕跡を確認することができた。柱穴およびSD24から大窯第2段階に属する瀬戸美濃窯産陶器などが出土していることから、B-5期（16世紀中葉）に廃絶し

た掘立柱柵列跡と推定される。なお、柵列の南部でSB20が付随していると考えられる。

SA04（第21図）

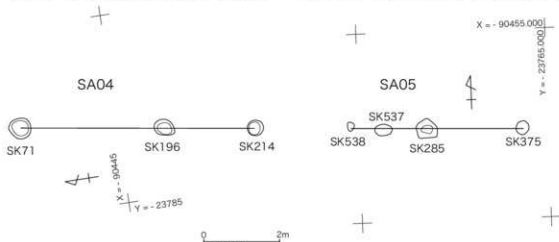
調査区の中央部北半で確認された掘立柱柵列跡で、2間分（6.2m）が確認された。柱穴から古瀬戸後期末段階に属する瀬戸美濃窯産陶器などが出土していることから、B-3期（15世紀後半）に廃絶した掘立柱柵列跡と推定される。

SA05（第21図）

調査区の東半部で確認された掘立柱柵列跡で、2間分（4.6m）が確認された。SK537は柄柱であった可能性が考えられる。SA04の南部には並行してSD17などが存在する。柱穴から大窯前半の瀬戸美濃窯産陶器などが出土していることから、B-5期（16世紀中葉）に廃絶した掘立柱柵列跡と推定される。

第4項 井戸

今回の調査で確認された地下水を汲み取るための掘り抜き井戸は全部で6基存在する。このうちB期に属する井戸は4基を数える。この時期の井戸は井戸側に石材や木材の構造物を持たないいわゆる素掘り井戸である。井戸の形状は、上位が広く下位が狭い逆円錐形で、深さは遺構検出面から2m以上を測る。井戸の完全掘削作業は危険を伴うため、遺物の大量出土を伴わない限り、あ



第21図 掘立柱柵列跡 SA04・05 遺構図

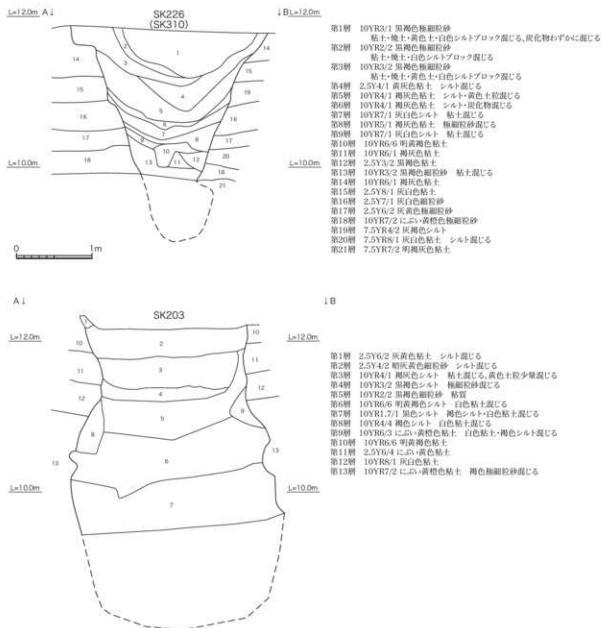
名古屋城三の丸遺跡 VII

る深度以上の調査は重機による断ち割り調査を実施した。しかしながら一部の井戸については最深度まで調査が達しなかったものもあることをあらかじめ断っておきたい。ここでは個別に事例を報告する。

SK226 (第22図)

調査区の南西部で確認された素掘り井戸である。平面形は2.98m × 2.59mの歪な楕円形で、深さは遺構検出面から最大で278cmを測る。標高9m強で湧水層に達したと推測され、断面形は

三角形状であるが、下部で一部の壁が崩落していた。埋土は黒褐色細粒砂に粘土やシルトが混入する斑土となっている。土層断面からみて、井戸廃絶に際して斑土を埋め立て、その後埋め立て土が陥没した際に再度埋め立て整地されたものと推測される。井戸埋土中位から数点の完形に近い状態の山茶碗などの遺物が出土している。これらは尾張型第7～8型式に属する山茶碗であることから、B-1期(13世紀中頃)に廃棄された井戸と推定される。なお、上層をSK226、下層を



第22図 井戸 SK226・SK203 土層断面図

SK310として掘削した。

SK203 (第22図)

調査区の中央部南寄りで確認された素掘り井戸で、平面形は2.27m×1.96mの楕円形となっている。最深部には確実に達していないが、深さは遺構検出面から264cmを測ると思われ、標高9m弱で湧水層に達したと推測される。断面形は箱形となっているが、下半部で一部の壁が崩落したために袋状に広がっていた。埋土は黒褐色細粒砂に粘土やシルトが混入する斑土となっている。土層断面からみて、井戸廃絶時に斑土を念入りに順に埋め立てて整地されたものと推測される。ただし、SK203の埋め立て土は後に陥没したと思われ、実際に江戸時代に構築された石組溝SD01がこの陥没によって一部が崩壊している。埋土から灰釉陶器や山茶碗の他に土師器内燗型羽釜などの遺物が出土していることから、B-2期(14世紀中頃)に廃棄された井戸と推定される。

SK147 (第23図)

調査区の東端部で検出された素掘り井戸である。平面形は3.91m×3.71mの楕円形で、深さは遺構検出面から最大で424cmを測ることから、標高8m付近で湧水層に達したと推測される。断面形は三角形であるが、標高10m付近で土壁が崩落していた。埋土は黒褐色細粒砂に粘土やシルトが混入する斑土となっている。土層断面からみて、中位までは一気に斑土を埋積させ、上位を互層に埋め立てた状況を読み取れるが、それでも後世に陥没したと思われる。互層に堆積した埋土から多量の完形に近い状態の土師器皿などの遺物が出土しており、これらの遺物からB-4期(15世紀後葉)に廃棄された井戸と推定される。同じ器種の一括大量廃棄の状況から見て、井戸廃絶の際に行われた儀礼の痕跡であった可能性も考えられる。

SK146 (第24図)

調査区の北東端部で確認された素掘り井戸であ

る。平面形は3.43m×2.68mの歪な楕円形で、深さは遺構検出面から最大で470cmを測る。標高8m弱で湧水層に達したと推測され、断面形は三角形である。埋土は黒褐色細粒砂に粘土やシルトが混入する斑土となっている。土層断面からみて、順次土砂を埋め立てて井戸を廃絶したものと推測される。井戸埋土から土師器皿や土師器内燗型羽釜などが出土していることから、B-3期(15世紀中頃)に廃棄された井戸と推定される。

第5項 溝

今回の調査で確認されたB期に属すると推測される溝は全部で13条確認された。ここでは主要なものについて報告する。

SD06

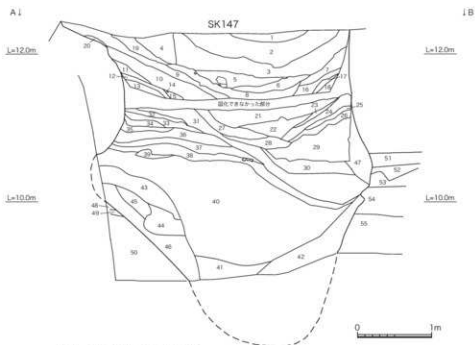
調査区の東部でほぼ南北方向に走る溝である。幅は最大で0.77m、深さは最深で0.23mを測るが、南端部は調査区外に伸び、北端部はSK01に切られて長さは特定できない。溝底はほぼ平坦となる箱状である。発掘調査時点では17世紀に属すると考えていたが、出土遺物の検討からみてそこまで下らないと思われる。SD17を切ることから、現状ではB-5期(16世紀中葉)に位置づけておきたい。

SD17 (第25図)

調査区の南東部でほぼ東西方向に走る溝で、幅は最大で1.72m、深さは最深で1.15mを測る。東端部は調査区外に伸びるが、西端部はSK185に大きく切れその行方は特定できない。おそらくSD25に継続していくものと思われる。断面形が上位は掘鉢状、下位は箱形状となっている。少なくとも暗褐色細粒砂層の上位から掘り込まれたことが確認され、平行して走るSD18を切っている。出土遺物からB-4期(15世紀後葉～16世紀前葉)に属するだろう。

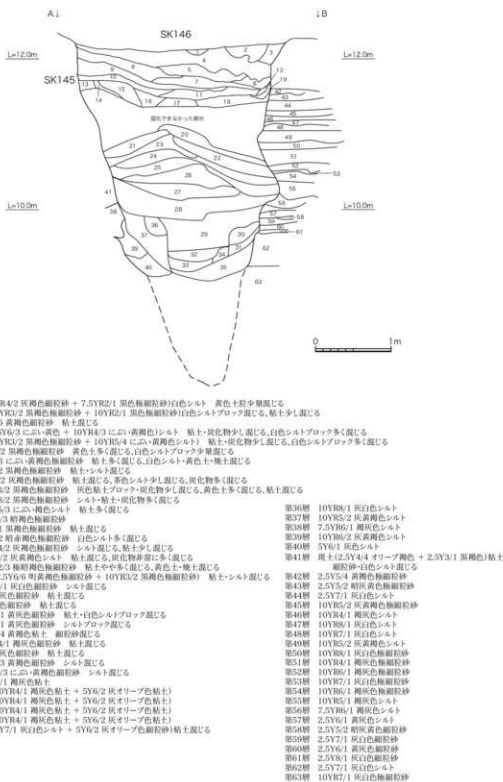
SD18 (第25図)

調査区の南東部でほぼ東西方向に走る溝で、幅



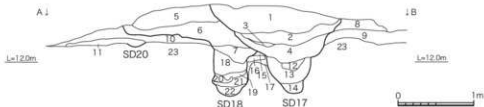
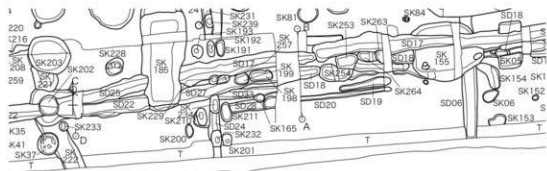
- 第1層 7.5Y4/1 灰色細粒砂 粘土混じる
- 第2層 2.5Y3/1 黒褐色細粒砂 シルト混じる。焼土少量混じる
- 第3層 10YR2/2 黒褐色細粒砂 粘土混じる。炭化物・焼土少量混じる
- 第4層 10YR4/3 に近い黄褐色細粒砂 浅黄色の土粒多く混じる。粘土・礫混じる。炭化物わずかに混じる
- 第5層 5Y3/1 オリーブ黒細粒砂 粘土混じる。浅黄色粘土ブロック大量に混じる
- 第6層 10YR3/1 黒褐色細粒砂 シルト混じる。浅黄色粘土ブロック若干混じる。炭化物少量混じる
- 第7層 2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂 粘土混じる。浅黄色土粒若干混じる
- 第8層 7.5YR3/1 黒褐色粘土 細粒砂混じる。浅黄色粘土ブロック大量に混じる
- 第9層 7.5YR2/2 黒褐色粘土 細粒砂混じる。浅黄色土粒若干混じる。焼土少量混じる
- 第10層 10YR3/1 黒褐色粘土 細粒砂混じる。浅黄色土粒大量に混じる。焼土若干混じる
- 第11層 10YR2/1 黒色粘土 細粒砂・焼土混じる
- 第12層 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘土 細粒砂混じる。灰黄色粘土粒大量に混じる
- 第13層 2.5Y2/1 黒色粘土 細粒砂混じる。黄色粘土ブロック若干混じる
- 第14層 10YR2/1 黒色粘土 細粒砂混じる
- 第15層 10YR2/1 黒色粘土 細粒砂混じる
- 第16層 2.5Y2/1 黒色粘土 細粒砂混じる。焼土わずかに混じる
- 第17層 2.5Y5/2 暗灰黄色細粒砂 粘土混じる
- 第18層 2.5Y3/1 黒褐色粘土 細粒砂混じる
- 第19層 2.5Y4/1 黄灰色細粒砂 粘土混じる。浅黄色粘土粒若干混じる
- 第20層 10YR2/1 黒色細粒砂 粘土混じる。焼土少量混じる
- 第21層 10YR2/2 黒褐色細粒砂 粘土・白色シルトブロック混じる。酸化部分(赤褐色)有り
- 第22層 10YR5/2 灰黄色細粒砂 粘土・黄色土ブロック混じる。酸化部分(赤褐色)有り
- 第23層 10YR5/4 に近い黄褐色細粒砂 粘土混じる。酸化部分(赤褐色)有り
- 第24層 10YR2/1 黒色細粒砂 粘土混じる。黄色土ブロック多く混じる。酸化部分(赤褐色)有り
- 第25層 10YR5/4 に近い黄褐色細粒砂 粘土混じる。黒色土混じる
- 第26層 10YR2/1 黒褐色細粒砂 粘土・黄色土ブロック焼土混じる。酸化部分(赤褐色)有り
- 第27層 10YR6/2 灰黄色細粒砂 白色シルトブロック多く混じる。黄色シルトブロック粘土混じる
- 第28層 黄土(10YR7/2)に近い黄褐色粘土 + 10YR4/1 褐灰色細粒砂 粘土混じる
- 第29層 黄土(10YR5/2 灰黄色シルト + 5YR2 灰白色シルト) 黒色土ブロック混じる
- 第30層 N3/1 暗灰色粘土 シルトブロック混じる
- 第31層 10YR3/2 黒褐色細粒砂 黄色・白色シルトブロック・焼土・粘土混じる
- 第32層 10YR2/2 黒褐色細粒砂 白色シルトブロック多く混じる。焼土・粘土混じる
- 第33層 10YR3/2 黒褐色細粒砂 白色シルトブロック・黄色土混じる。焼土わずかに混じる
- 第34層 10YR4/2 灰黄色細粒砂 白色シルトブロック多く混じる。黄色シルトブロック・炭化物混じる
- 第35層 10YR3/2 黒褐色細粒砂 黄色土・粘土混じる。焼土わずかに混じる
- 第36層 黄土(10YR6/1 灰白色 + 10YR2/2 黒褐色 + 10YR6/1 褐灰色) 細粒砂 黄色土わずかに混じる
- 第37層 10YR3/2 黒褐色細粒砂 白色シルトブロック多く混じる。黒色土・黄色土混じる。わずかに焼土混じる
- 第38層 5YR3/1 黄褐色粘土 細粒砂混じる
- 第39層 10YR2/1 黒褐色細粒砂 粘土・黄色土ブロック混じる
- 第40層 10YR6/3 に近い黄褐色粘土 砂粒混じる
- 第41層 10YR3/2 黒褐色粘土
- 第42層 2.5Y5/3 黄褐色粘土
- 第43層 黄土(10YR 4/1 暗灰色粘土 + 10YR7/6 明黄褐色粘土) 砂粒混じる
- 第44層 2.5YR/4 に近い黄色粘土
- 第45層 10YR6/1 褐灰色シルト
- 第46層 2.5YR/2 灰黄色粘土 細粒砂混じる
- 第47層 2.5YR/1 灰白色シルト
- 第48層 7.5Y7/1 灰白色シルト
- 第49層 7.5Y7/3 浅黄色シルト
- 第50層 10YR6/1 褐灰色シルト
- 第51層 7.5Y7/2 灰白色シルト
- 第52層 7.5YR/1 灰黄色細粒砂
- 第53層 7.5YR/2 灰白色シルト 粘土混じる
- 第54層 10YR7/1 灰白色シルト
- 第55層 7.5YR/1 灰白色粘土

第 23 図 井戸 SK147 土層断面図



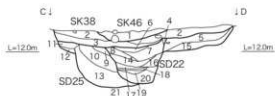
第24図 井戸SK146土層断面図

名古屋城三の丸遺跡 VII



SD17,18南北セクション土層説明

- 第1層 2.5Y5/2 暗褐色細粒砂 中粒砂・白色シルトブロック混じる。薄少量混じる
- 第2層 10YR5/3 にい・黄褐色極細粒砂
- 第3層 10YR6/2 灰黄褐色細粒砂
- 第4層 10YR4/3 に二・灰褐色細粒砂 シルト・粘土混じる。焼土少量混じる
- 第5層 10YR5/1 褐色細粒砂 白色砂混じる
- 第6層 7.5YR3/4 暗褐色極細粒砂 焼土若干混じる
- 第7層 7.5YR3/3 暗褐色極細粒砂 粘土混じる
- 第8層 10YR4/6 暗褐色細粒砂 粘土・黄色土ブロック混じる
- 第9層 黄土(7.5YR4/4 褐色細粒砂 + 7.5YR2/1 灰色極細粒砂)
- 第10層 黄土(7.5YR3/4 暗褐色細粒砂 + 7.5YR2/3 暗褐色細粒砂) 粘土・黄色土ブロック混じる。焼土若干混じる
- 第11層 黄土(10YR5/6 黄褐色極細粒砂 + 7.5YR2/1 灰色極細粒砂) 粘土混じる
- 第12層 7.5YR3/2 黒褐色極細粒砂 粘土混じる。焼土若干混じる
- 第13層 7.5YR3/1 黒褐色細粒砂 焼土若干混じる
- 第14層 7.5YR2/2 黒褐色極細粒砂 黄色土ブロック多く混じる
- 第15層 10YR4/3 にい・黄褐色細粒砂 粘土混じる
- 第16層 10YR2/3 黒褐色極細粒砂 黄色土ブロック多く混じる
- 第17層 黄土(2.5Y7/8 黄色細粒砂 + 7.5YR3/2 暗褐色極細粒砂) 粘土混じる
- 第18層 7.5YR3/2 黒褐色極細粒砂 粘土混じる
- 第19層 2.5Y2/3 暗オリーブ褐色細粒砂 粘土混じる。黄色土わずかに混じる
- 第20層 黄土(10YR3/2 黒褐色細粒砂 + 2.5Y7/8 黄色細粒砂) 粘土混じる
- 第21層 10YR3/2 黒褐色細粒砂 粘土混じる。焼土若干混じる
- 第22層 10YR2/3 黒褐色極細粒砂 粘土混じる・白色土ブロック・黄色土ブロック混じる
- 第23層 10YR5/6 黄褐色粘土(龍山)



SD22,25,SK38,46南北セクション土層説明

- 第1層 10YR3/2 黄褐色細粒砂 焼土多く混じる。中粒砂・粗粒砂・礫・粘土混じる。
- 第2層 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂 中粒砂・粗粒砂・礫・焼土・褐色シルト多く混じる
- 第3層 10YR3/3 暗褐色細粒砂 焼土混じる。灰水化物・粘土少し混じる
- 第4層 10YR4/2 黒褐色細粒砂 焼土多く混じる。粘土少し混じる
- 第5層 10YR3/2 灰黄褐色細粒砂 焼土多く混じる。黄色土粒混じる。白色シルトブロック少量混じる
- 第6層 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂 シルト・焼土・粘土少し混じる
- 第7層 10YR3/2 黒褐色細粒砂 シルト・粘土・灰水化物少し混じる。焼土混じる
- 第8層 10YR4/3 にい・黄褐色細粒砂 焼土多く混じる
- 第9層 10YR3/3 暗褐色細粒砂 焼土・粘土混じる
- 第10層 10YR2/3 暗褐色細粒砂 焼土・粘土・黄色シルトブロック混じる
- 第11層 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂
- 第12層 10YR3/2 黒褐色細粒砂 粘土・黄色土粒混じる
- 第13層 7.5YR3/2 黒褐色細粒砂 粘土やや多く混じる。焼土混じる
- 第14層 10YR4/3 にい・黄褐色細粒砂 粘土・焼土少し混じる
- 第15層 7.5YR3/2 黒褐色細粒砂 粘土・シルト少し混じる。焼土多く混じる
- 第16層 10YR4/3 にい・黄褐色細粒砂 焼土混じる
- 第17層 10YR3/4 暗褐色細粒砂 焼土・粘土混じる
- 第18層 10YR3/2 黒褐色シルト 焼土・粘土混じる
- 第19層 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂 シルト・焼土・粘土混じる
- 第20層 10YR5/2 黒褐色細粒砂 シルト・焼土・粘土混じる。白色シルトブロック少し混じる
- 第21層 10YR5/6 黄褐色粘土(龍山)

第25図 溝SD17・SD18・SD22・SD25土層断面図

は最大で0.71m、深さは最深で0.89mを測る。東端部は調査区外に伸びるが、西端部は途中で収束する。SD27に継続していく可能性も考えられる。断面形が上位は楕円状、下位は箱形状となり、平行して走るSD17に切られている。出土遺物からみて、B-1期（13世紀中頃）に埋没した溝と推定される。

SD19・SD20（第25図）

調査区の南東部でほぼ東西方向に走る溝で、両者とも規模は小さく部分的に重複する。幅はSD19が53cm、SD20が27cm、深さはSD19が10cm、SD20が6cmを測る。出土遺物は少ないが、B-1期（13世紀？）と推定される。

SD24（第20図）

調査区の中央部でほぼ南北方向に走る溝である。幅は最大で0.51m、深さは最深で0.14mを測るが、両端部は調査区外に伸びて長さは特定できない。溝内に掘立柱柵列跡SA03が構築されている。SD17などを切ることから、B-5期（16世紀中葉）に位置づけられる。

SD25（第25図）

調査区の南部でほぼ東西方向に走る溝で、幅は最大で0.84m、深さは最深で0.52mを測る。東端部はSK185、西端部はSK202に切れその行方は特定できない。おそらく東側はSD17、西側は南に屈曲してSK222に継続していくものと思われる。この推測が正しければ、これらの溝群は東西30m以上、南北6m以上の区画を囲む溝と考えられる。断面形は丸底状となり、ほぼ平行して走っているSD22に切られている。黒褐色細粒砂層の斑土が堆積し、出土遺物からみてB-4期（16世紀前葉）に属すると推定される。

SD27

調査区の南部でほぼ東西方向に走る溝で、幅は最大で0.83m、深さは最深で0.37mを測る。東端部はSD18と同一と思われるが確定が難しい。また、西端部はSK185に大きく切れその行方

は特定できない。おそらくSD22に継続していくものと推測されるが、遺構の所属時期が合わない点が問題となっている。断面形は箱形で、出土遺物からみて、B-4期（15世紀後葉～16世紀中頃）に埋没した溝と推定される。

SD28・SD33

調査区の南部でほぼ東西方向に走る溝で、両者とも規模は小さく部分的に重複する。幅はSD28が0.53m、SD33が0.48m、深さはSD28が0.27m、SD33が0.11mを測る。出土遺物が少なく時期の特定が難しいが、B-1期（13世紀）と推定される。SD19・SD20の西側に所在することから、同一の溝であった可能性が考えられる。

SD29

調査区の中央部でほぼ南北方向に走る溝である。幅は最大で0.60m、深さは最深で0.20m、長さは4.68mを測る。やや蛇行しながら、SD36と平行している。出土遺物からみて、B-4期（15世紀後葉～16世紀中頃）に位置づけられる。

SD31

調査区の西部でほぼ南北方向に走る溝である。幅は最大で1.23m、深さは最深で0.74mを測る。北端はSX02によって切られ、南部は調査区外に伸びている。SD14などと平行している。出土遺物には若干江戸時代の遺物が含まれるが、南壁の土層断面観察などを検討した結果B期（おそらくB-5期（16世紀中葉））に位置づけられよう。

SD35

調査区の北部中央でほぼ南北方向に走る溝である。幅は最大で0.64m、深さは最深で0.16mを測るが、北端部はSK308に、南端部はSK94切られて長さは特定できない。SK94の南側に存在するSK327が溝の南端である可能性も残される。出土遺物からみて、B-3期（15世紀後半）と思われる。

SD36

調査区の北部中央ほぼ南北方向に走る溝で、幅

名古屋城三の丸遺跡 VII

は最大で0.40m、深さは最深で0.13mとなり、北端は調査区外に伸びる。やや蛇行しながら、SD33と平行している。出土遺物からみてB-4期(15世紀後葉～16世紀前葉)に位置づけられる。

SD39

調査区の中央部でほぼ南北方向に走る溝である。幅は最大で0.97m、深さは最深で0.17m、長さは7.54mを測る。溝の両側には柱穴群(SK475・SK479・SK480・SK481・SK482・SK483)が伴っている。出土遺物からみて、B-4～5期(16世紀前半)に位置づけられる。

なお、SD33・SD35・SD36・SD39はその配置からみて、幅約2.5mの道路状遺構の側溝と考えることができる。この想定が正しければ、道路状遺構SF01は中央部でやや西側に湾曲してほぼ南北方向に走る道路であるといえよう。

第6項 土坑

今回の調査で確認されたB期に属すると推測される土坑は全部で数十基存在する。ここでは特徴的な土坑を報告する。

SK155

調査区の東部中央で確認された土坑で、規模は3.23m×3.11m、深さは最大で58cmを測る。平面プランは楕円形を呈し、断面形は浅い皿状となっている。SD17・SD06などに切られている。土坑埋土から古瀬戸製品の他に大量の須恵器、灰軸陶器、山茶碗などの遺物が出土しており、土地改変に伴い集められた廃棄物をまとめて投棄されたものと想定される。遺構の埋没時期は、出土遺物の中における最新資料から見て、B-3期(15世紀後半)と考えられる。

SK215

調査区の北東部で確認された土坑で、規模は1.55m×1.05m、深さは最大で35cmを測る。平面形はいびつで、断面形は皿状となっている。土坑埋土から多くの古瀬戸製品の他に須恵器、灰

軸陶器、山茶碗などの遺物が混在していた。陶器片がまとめて投棄されたものと想定される。遺構の埋没時期は、出土遺物の最新資料から見て、B-4期(15世紀後葉)と推測される。

SK240

調査区の中央部に所在する土坑で、規模は3.07m×2.03m、深さは最大で32cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面形は丸底の皿状となっている。SD21に切られている。土坑埋土から古瀬戸製品の他に大量の須恵器、灰軸陶器、山茶碗などの遺物が出土しており、土地改変に伴い集められた廃棄物をまとめて投棄されたものと想定される。遺構の埋没時期は、出土遺物の最新資料から見て、B-4期(15世紀後葉)と考えられる。

SK324

調査区の中央部で確認された土坑で、平面プランは規模が2.12m×0.82mを測る隅丸長方形を呈する。断面形は箱状で、他の土坑とは形状が異なる。土坑埋土から古瀬戸製品が含まれることから、B-3期(15世紀後半)に位置づけられる。

SK330

調査区の中央部で検出された土坑で、規模は1.47m×0.86m、深さは最大で53cmを測る。平面プランは隅丸長方形を呈し、断面形は箱状となっている。土坑埋土から古瀬戸製品が出土していることから、B-3期(15世紀後半)に位置づけられる。SK324と同様の形状であり、両者とも墓坑である可能性も考えられる。

SK556

調査区の北西部で確認された土坑で、規模は2.00m×1.33m、深さは最大で100cmを測る。平面プランは楕円形を呈し、断面形は擂鉢状となっている。SD12・SK557などに切られており、SK557と同一の遺構である可能性も残る。土坑埋土から尾張型山茶碗などの遺物が出土した。B-1期(13世紀)に位置づけられる。

第4節 C期の遺構

第1項 概要

C期は江戸時代を通じた段階（17世紀～19世紀中頃）であり、尾張藩徳川家の拠点である名古屋城が存続した時期である。この段階の遺構は掘立柱建物跡と礎石建物跡、井戸、溝、池、地下室、土坑などが存在する。この時期の遺構はさらに4段階に細分が可能である。

C-1期：17世紀前半。連房式登窯第1～2小期の瀬戸美濃窯産陶器などが出土する時期。名古屋城三の丸域全体で展開した武家屋敷が構築された段階である。

C-2期：17世紀後半。連房式登窯第3～4小期の瀬戸美濃窯産陶器などが出土する時期。武家屋敷が廃止され東御屋敷や御屋形が形成された段階に相当すると考えられる。この段階以降、C-4期までは屋敷割りの形状を変えつつも御屋形が継続して存在したものと見える。

C-3期：18世紀。連房式登窯第5～8小期の瀬戸美濃窯産陶器などが出土する時期。

C-4期：19世紀前半～中頃。連房式登窯第9～11小期の瀬戸美濃窯産陶器などが出土する時期。この段階の遺物出土量が少ないため、この時期に属する遺構はあまり多く確認できない。

以下、種別に遺構を記述する。

第2項 掘立柱建物跡

C期に属すると推測される掘立柱建物跡は全部で4棟存在する。これまで記述したように、掘立柱建物跡は全て時期を特定することが難しい。加えてこの段階では建物の平面プランが複雑に入り組む形状のものが出現すると考えられるため、建物構造を考察することも難しい。以下、個別に説明を加えていく。

SB21（第26図）

調査区の南部中央で確認された3間以上×1間

の掘立柱建物跡で、南部は調査区外に展開すると推測される。建物規模は9.2m以上×9.1mである。東辺の柱穴は北隅のみを確認したに過ぎず、建物と推定することには問題が多いが、ここでは柱穴をSK185の埋土中で見落とした可能性が考えられることから、このような形状で復元した。柱穴の出土遺物からC-2期（17世紀後半）に廃絶した掘立柱建物跡と推定される。

SB22（第27図）

調査区の東部で確認された3間以上×1間以上の掘立柱建物跡と推測される遺構である。東部と南部が調査区外に展開し、建物規模は10.5m以上×2.3m以上である。西辺南半部に庇が付いたものと想定される。柱穴から出土した陶器片などから、C-1期（17世紀前半）に廃絶した掘立柱建物跡と推定される。

SB23（第27図）

調査区の中央部で確認された3間×3間と推測される掘立柱建物跡で、西辺は柱穴が2間分しか残存しなかった。また南辺では両端部しか柱穴が確認できなかった。建物規模は5.7m×4.8mである。柱穴からわずかに出土した陶器破片などから、C-1期（17世紀前半）に廃絶した掘立柱建物跡と推定される。

SB24（第27図）

調査区の北東端部で確認された2間以上×2間以上と推測される掘立柱建物跡で、東部と北部は調査区外に展開すると推定される。柱穴の平面形は円形で、建物規模は5.9m以上×4.8m以上である。柱穴からわずかに出土した陶器破片などから、C-3期（18世紀前半）に廃絶した掘立柱建物跡と推定される。

第3項 掘立柱柵列跡

今回の調査で確認された9棟の掘立柱柵列跡

名古屋城三の丸遺跡 VII

のうち、C期に属すると考えられるものは4棟である。掘立柱建物跡と同様、時期を断定することが難しいが、柱穴内出土遺物と柱穴の切り合い関係など様々な情報から推測した。ここでは個別に報告する。

SA06 (第28図)

調査区の北西部に所在する掘立柱柵列跡で、6間分(15.5m)以上が確認された。柱穴は南北に走る石組溝SD03とSK23に平行して切られているため、石組溝SD03の前身の区画施設であった可能性が高い。柱穴の平面形はまちまちであるが、柱穴から出土する遺物から、C-2期(17世紀後半)に属した掘立柱柵列跡と推定される。

SA07 (第28図)

調査区の南部西寄りて検出された掘立柱柵列跡で、2間分以上(3.5m)が確認された。SD12のテラス状に掘削された西側に設定されているこ

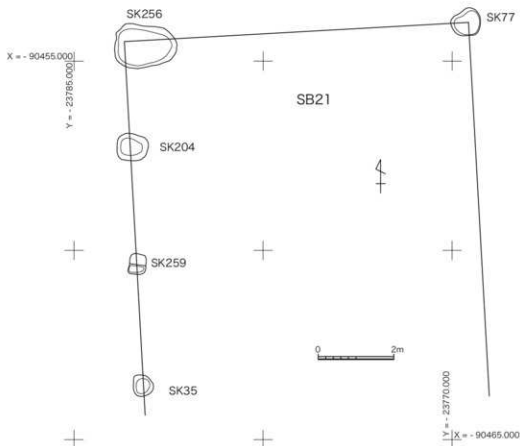
とからSD12に付随する施設と考えることができる。柱穴およびSD12から出土した遺物から、C-1～2期(17世紀)に存在した掘立柱柵列跡と推定される。

SA08 (第27図)

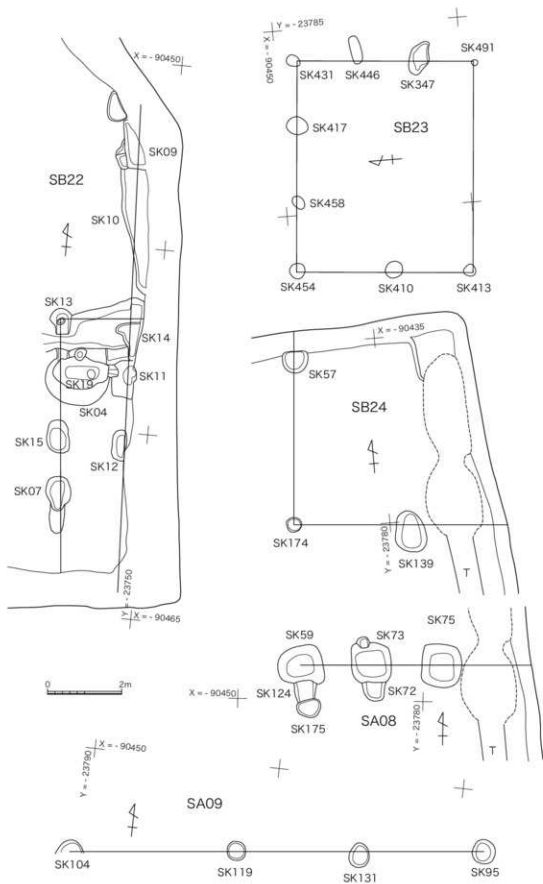
調査区の北東端部に位置する掘立柱柵列跡で、ほぼ東西方向に2間分(4.2m)以上が確認された。柱穴の平面形は一边が約1mの隅丸方形で規模が大きく、柱穴の南に補助的な土坑が付随する。北側に柱穴列が並び建物跡になる可能性も残される。柱穴から出土する遺物から、C-1期(17世紀前半)に属する掘立柱柵列跡と推定される。

SA09 (第27図)

調査区の中央部で検出された東西方向に走る掘立柱柵列跡である。3間分(11.3m)が確認された。わずかに柱穴から出土した遺物から、C期に属することは明らかであるが、詳細な時期は特定



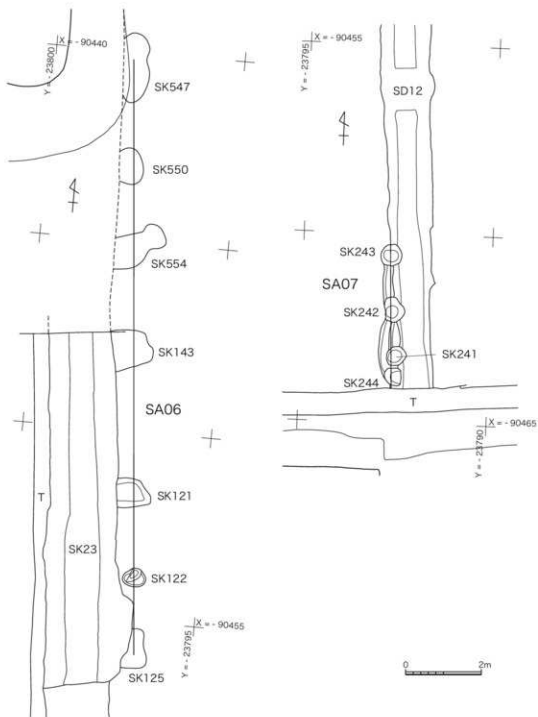
第26図 掘立柱建物跡SB21遺構図



第 27 図 掘立柱建物跡 SB22 ~ 24・SA08 ~ 09 遺構図

名古屋城三の丸遺跡 VII

できない。遺構の全体配置からみて後述する池状遺構の南部を区画する施設の可能性が考えられることから、C-4期（19世紀前半）に存在した掘立柱柵列跡と想定しておきたい。



第 28 図 掘立柱柵列跡 SA06・07 遺構図

第4項 井戸

この段階の掘り抜き井戸は全部で3基を数え、井戸側に石材や木材の構造物を持たないいわゆる素掘り井戸である。井戸の形状は垂直に掘り下げられた円筒形を呈しており、深さは遺構検出面から2m以上を測る。前述と同様、ある深度以上の調査は重機による断り掘り調査を実施した。ここでは個別に事例を報告する。

SK162・SK163 (第29図)

調査区の南西部で確認された素掘り井戸である。平面形は2.94m×2.92mのほぼ円形で、深さは遺構検出面から最大で411cmまで掘削したが、確実な最終底面までは達しなかった。標高8m弱で湧水層に達したと推測されよう。下部で一部の壁が崩落していた。埋土は黒褐色細粒砂に粘土やシルトが混入する斑土が主体となっている。土層断面からみて、木製井戸側の存在を予想させる堆積状況を確認できたが断定するには至らなかった。むしろ井戸廃絶に際して斑土を埋め立て、その後埋め立て土が何度か陥没したと想定される。調査では、井戸全体の埋土をSK163とし、陥没して土坑状になった窪地を最終的に埋め立て整地されたものをSK162として認識した。井戸埋土から出土した遺物から、C-2期(17世紀後半)に廃棄された井戸と推定される。

SK202 (第29図)

調査区の中央部南寄り確認された素掘り井戸で、平面形は1.08m×1.03mのほぼ円形となっている。最深部には確実には達していないが、深さは遺構検出面から289cmを測ると思われ、標高9m弱で湧水層に達したと推測される。断面形は箱形となっている。埋土は黒褐色細粒砂に粘土やシルトが混入する斑土となっている。土層断面からみて、井戸廃絶時に斑土を念入りに順に埋め立てて整地されたものと推測され、後に陥没した痕跡は認められない。埋土から出土した土師器皿から見て、C-1期(17世紀前半)に廃棄された

井戸と推定される。

SK49 (第29図)

調査区の南西端部で検出された素掘り井戸である。平面形は1.27m×1.26mの円形で、深さは遺構検出面から最大で185mを測る。やや浅く湧水層に達したかは疑問が残ることから、井戸ではない可能性も残される。断面形は箱状で、埋土は黒褐色細粒砂に粘土やシルトが混入する斑土となっている。出土遺物からC-2期(17世紀後半)に廃棄された井戸と推定される。

第5項 溝

今回の調査で確認されたC期に属すると推測される溝は全部で13条確認された。この段階の溝には従来から存在した素掘り溝の他に、兩岸と床を石積みで構築された石組溝が出現している。石組溝は次項に改めて項目を設けて記述することとし、ここでは主要な素掘り溝について報告したい。

SD11

調査区の中央部でほぼ東西方向に走る溝で、幅は最大で1.17m、深さは最深で0.13m、長さは8.40mを測る。溝底は浅い皿状で、陶磁器類の他に多くの石材が投棄されていた。出土遺物から見てC-3期(18世紀)に位置づけられるだろう。

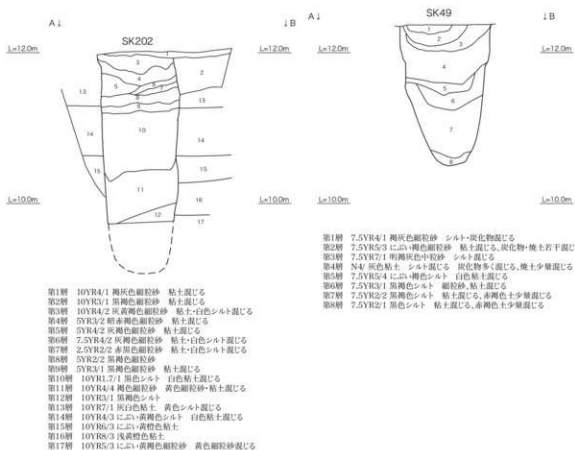
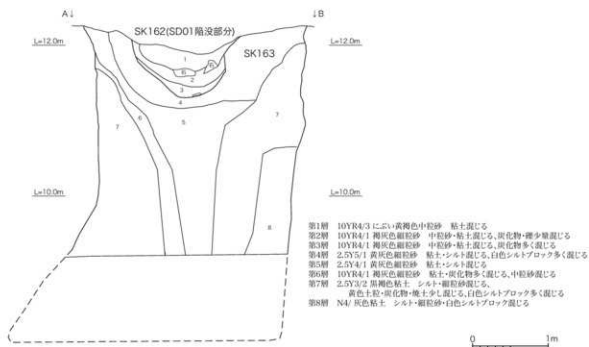
SD12 (第30図)

調査区の西部でほぼ南北方向に走る溝で、幅は最大で2.09m、深さは最深で0.97mを測る。溝の断面形は逆台形を呈し、底幅は50～60cmを測る。SD14と平行して走っていることから、両者で道路状遺構を形成している可能性も考えられる。出土遺物から見てC-1～2期(17世紀)に位置づけられるだろう。

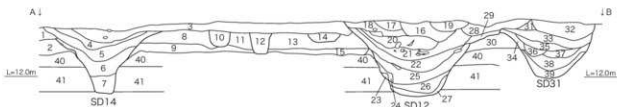
SD13

調査区の西部でほぼ東西方向に走る溝で、幅は最大で1.49m、深さは最深で0.10mと非常に浅い。SD12とSD14の間の部分を結ぶような形で

名古屋城三の丸遺跡 VII



第29図 井戸SK163・SK202・SK49土層断面図



SD12・14・31 溝断面セクション土層説明

- 第1層 10YR4/2 灰褐色粘り粉砂 粘土層に、シロト少し混じる。灰化物や中多量混じる
 第2層 10YR2/2 暗褐色粘り粉砂
 第3層 10YR4/2 灰褐色粘り粉砂 中乾砂・形砂混入。赤色土層・白色シロト・緑混じる
 第4層 10YR2/2 暗褐色粘り粉砂 赤色土層・グロツク混入。粘土層に混入
 第5層 10YR2/2 暗褐色粘り粉砂 灰化物・赤色土層・グロツク混入。粘土層に混入
 第6層 10YR2/2 暗褐色粘り粉砂 シロト混入。灰化物少し混入
 第7層 2.5YR/2 灰褐色粘り粉砂 粘土層に少し混入
 第8層 10YR2/2 暗褐色粘り粉砂 粘土層に混入
 第9層 10YR4/3 赤い・暗褐色粘り粉砂 シロト・粘土層に混入
 第10層 2.5YR/2 暗褐色粘り粉砂 シロト多量混入。白色シロト・グロツク多量混入
 第11層 2.5YR/2 暗褐色粘り粉砂 粘土層に混入
 第12層 10YR4/3 赤い・暗褐色粘り粉砂 粘土層に少し混入
 第13層 2.5YR/2 暗褐色粘り粉砂 粘土層に混入
 第14層 10YR4/3 赤い・暗褐色粘り粉砂 粘土層に少し混入
 第15層 2.5YR/2 暗褐色粘り粉砂 粘土層に混入
 第16層 10YR4/3 赤い・暗褐色粘り粉砂 中乾砂・形砂混入。粘土層に混入
 第17層 10YR4/3 赤い・暗褐色粘り粉砂 粘土層に混入。白色シロト・赤色土層・灰化物少し混入
 第18層 粘土(10YR4/2 灰褐色粘り粉砂 + 10YR4/3 赤い・暗褐色粘り粉砂)
 中乾砂・赤いシロト混入。灰化物少し混入
 第19層 10YR4/2 暗褐色粘り粉砂 赤色土層に混入
 第20層 粘土(10YR4/2 灰褐色粘り粉砂 + 10YR4/3 赤い・暗褐色粘り粉砂)
 褐色・赤色・白色土層混入。灰化物・粘土層に少し混入

- 第21層 10YR4/2 灰褐色粘り粉砂 粘土層に、シロト少し混入。灰化物や中多量混じる
 第22層 10YR4/2 灰褐色粘り粉砂 シロト・灰化物少し混入
 第23層 10YR4/2 灰褐色粘り粉砂 シロト・中乾砂少し混入。褐色土層多量混入
 第24層 10YR3/1 黒褐色粘り粉砂 シロト混入
 第25層 10YR4/2 灰褐色粘り粉砂 シロト・灰化物・粘土層に少し混入
 第26層 10YR2/2 暗褐色粘り粉砂 白色シロト・赤色土層に混入
 第27層 10YR2/1 赤褐色粘り粉砂 シロト混入。粘土層に混入。白色シロト多量混入
 第28層 10YR2/2 暗褐色粘り粉砂 灰化物少し混入。赤色土層に混入
 第29層 10YR4/2 灰褐色粘り粉砂 シロト少し混入。白色シロト混入。赤色土層に混入
 第30層 2.5YR/2 暗褐色粘り粉砂 粘土層に混入
 第31層 5YR4/1 褐色粘り粉砂 粘土層に混入
 第32層 粘土(10YR4/2 灰褐色粘り粉砂 + 10YR5/6 黄褐色粘り粉砂) 粘土層に少し混入
 第33層 10YR4/3 赤い・暗褐色粘り粉砂 粘土層に少し混入
 第34層 10YR4/2 灰褐色粘り粉砂 白色シロト多量混入。粘土層に混入
 第35層 粘土(10YR4/3 赤い・暗褐色粘り粉砂 + 2.5YR/2 暗褐色粘り粉砂)
 白色シロト多量混入。粘土層に混入
 第36層 10YR2/2 暗褐色粘り粉砂 粘土層に混入。白色シロト多量混入。粘土層に混入
 第37層 10YR2/3 暗褐色粘り粉砂 白色シロト混入。粘土層に混入
 第38層 2.5YR/5 黄褐色粘り粉砂 シロト多量混入。粘土層に混入
 第39層 10YR4/2 暗褐色粘り粉砂 粘土層に混入
 第40層 10YR2/2 暗褐色粘り粉砂 シロト混入(土塊)
 第41層 2.5YR/8 黄褐色粘り粉砂(土塊)



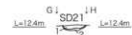
SD12・16・31 溝断面セクション土層説明

- 第1層 2.5Y/2 灰褐色粘り粉砂 粘土層に少し混入
 第2層 2.5Y/3/1 暗褐色粘り粉砂 粘土層に混入
 第3層 10YR2/1 赤褐色粘り粉砂 シロト混入。灰化物や中多量混入
 第4層 2.5Y/1 黄褐色粘り粉砂 シロト混入。灰化物少し混入
 第5層 2.5Y/4/1 黄褐色粘り粉砂 シロト混入
 第6層 5Y/4/1 灰色粘り粉砂 粘土層に少し混入
 第7層 5Y/3/2 オリーブ灰色粘り粉砂 シロト混入
 第8層 10YR4/1 暗褐色粘り粉砂 粘土層に混入
 第9層 10YR4/2 暗褐色粘り粉砂 粘土層に混入
 第10層 2.5Y/4/1 黄褐色粘り粉砂 粘土層に混入
 第11層 2.5Y/3/1 暗褐色粘り粉砂 粘土層に混入
 第12層 2.5Y/6/6 黄褐色粘り粉砂(土塊)



SD21 溝断面セクション土層説明

- 第1層 5Y2/2 オリーブ灰色粘り粉砂 シロト混入。灰化物・粘土層に少し混入
 第2層 10YR5/6 黄褐色粘り粉砂(土塊)



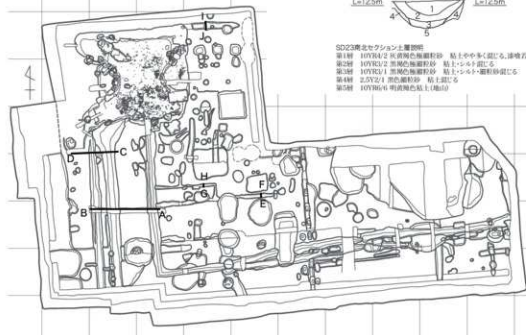
SD21 溝断面セクション土層説明

- 第1層 2.5Y/3/3 暗褐色粘り粉砂 シロト混入。灰化物・粘土層に少し混入
 第2層 10YR2/6 黄褐色粘り粉砂(土塊)



SD23 溝断面セクション土層説明

- 第1層 10YR4/2 灰褐色粘り粉砂 粘土層に少し混入。溝境下方に
 第2層 10YR2/2 暗褐色粘り粉砂 粘土層に少し混入
 第3層 10YR3/1 黒褐色粘り粉砂 粘土層に少し混入。中乾砂混入
 第4層 2.5Y/2/1 黄褐色粘り粉砂 粘土層に混入
 第5層 10YR6/6 黄褐色粘り粉砂(土塊)



第30図 溝SD12・SD14・SD31土層断面図

名古屋城三の丸遺跡 VII

検出され、調査時点ではSD12とSD14を切る形で確認された。出土遺物や前述の遺構の検出状況から見てC-3期(18世紀)に位置づけられるだろう。

SD14 (第30図)

調査区の西部でほぼ南北方向に走る溝で、幅は最大で1.44m、深さは最深で0.81mを測る。北部はSX02に切れ、南端部は東に折れてSD22に連続する。巻末遺構図には表現されていないが、SD14の最上層部分はSD22を越えてさらに南に継続する状態が認められ、その断面が南壁上層断面に観察されたが、これは非常に浅く同一遺構とは認めたい状態であった。溝の断面形はSD12と同様に逆台形をなしているが、底幅20～30cmと狭く「V」字状に近い形状である。陶磁器類の他に多くの石材が投棄されていた。SD12とともに道路状遺構を形成していた可能性がある。出土遺物から見てC-1～2期(17世紀)に位置づけられるだろう。

SD15

調査区の中央部でほぼ東西方向に走る溝で、幅は最大で0.63m、深さは最深で0.43m、長さは3.85mを測る。溝底は「U」字状を呈する。埋土は黄灰色細粒砂の斑土で、上層からは近代の遺物が混入していたが、下層の出土遺物からC-3期(18世紀)に属すると思われる。

SD21 (第30図)

調査区の中央部で検出された溝で、溝中央部で2回直角に折れてクランク状となっている。幅は最大で0.40m、深さは最深で0.08mと規模は小さい。出土遺物から見てC期の遺構であることは知れるが、詳細は明らかではない。

SD22 (第25図)

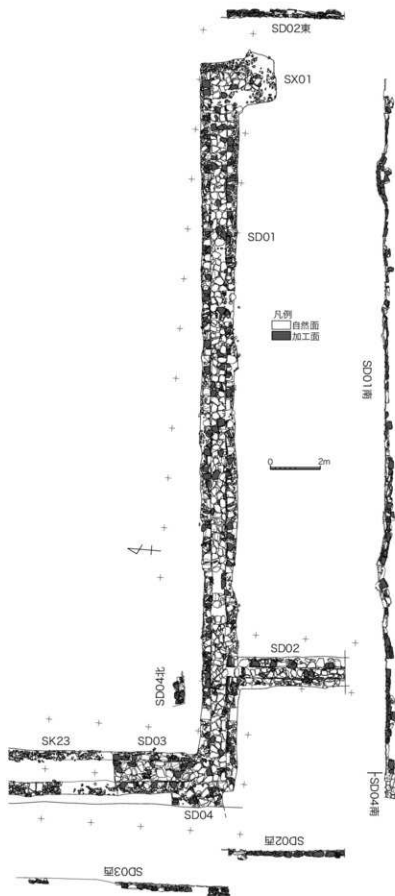
調査区の南部中央でほぼ東西方向に走る溝で、幅は最大で0.77m、深さは最深で0.47mを測る。西端部はSD14と接続し北に折れ曲がる形状となっている。一方、東端部はSK185に切れ

ており、その行方は特定できない。遺構の配置状況からSD27と連続する可能性が残されるが、遺構の時期が合致しないため、ここでは別の溝として理解しておきたい。溝の断面形は箱状であり、SD25を切っている。出土遺物や遺構の検出状況から見てC-1期(17世紀前半)に位置づけられるだろう。

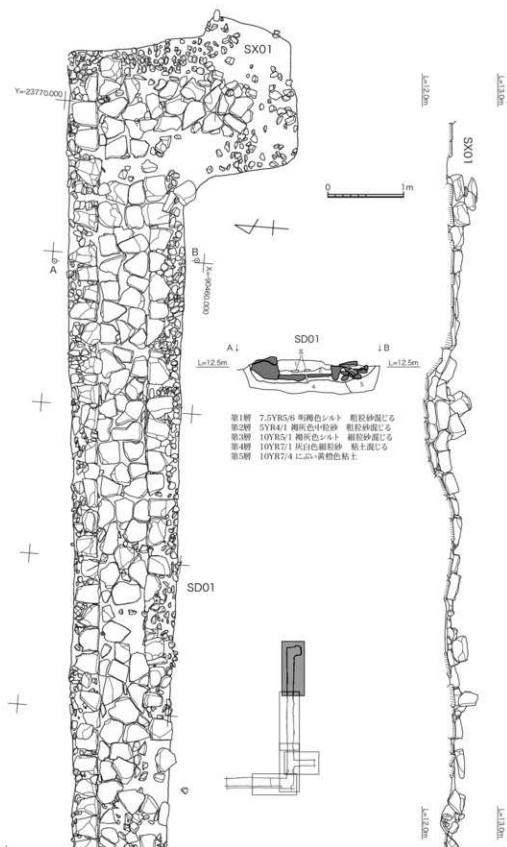
第6項 石組溝

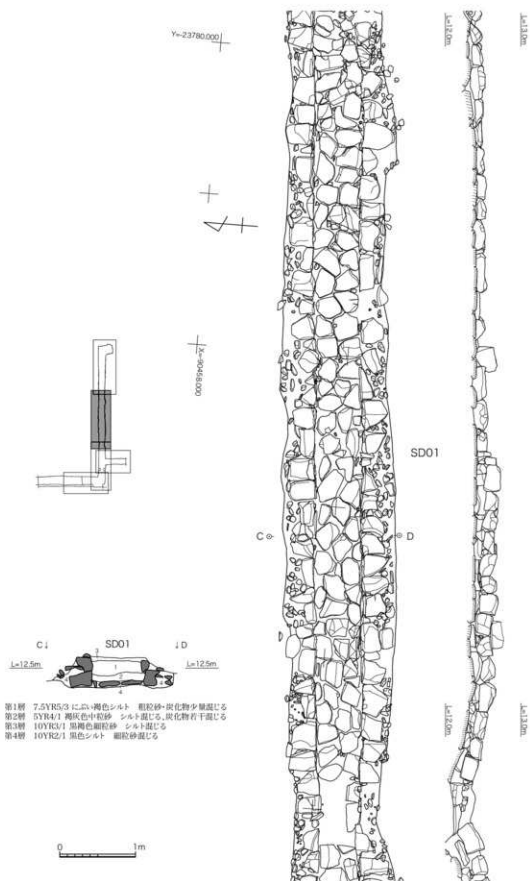
石組溝は全部で4条確認されたが、いずれも相互に連続して構築されており、総体的には一連の遺構と捉えることが妥当であろう。調査区の南西辺に平行してSD01とSD03がL字状に屈曲して存在し、SD01の屈曲部付近からSD02が、SD03の屈曲部付近からSD04が分岐していた。SD01の東端部は短く南に折れて柵状の遺構SX01が付随していた。SD03の北側の大部分は石組溝を構成する石材の抜き取り穴であるSK23により破壊されていた。溝底の高さ(レベル)は、SD01の東端が最も高く、SD02南端とSD04の西端も高い。SD01は西側に向かって低く傾斜しSD03に至って北側に低く傾斜していた。水を流す溝と想定した場合、SD01東端、SD02南端、SD04西端から、それぞれSD03に向かって流れ、SD03に集められた水は北に向かって流れていったものと考えられる。このまま北に向かって流れていけば台地の崖下で排水されたものと想定される。

石組溝の基本的な構造は、箱型に掘削された溝に扁平な石材を床材として敷き並べ、その両側に溝石を積み上げて側石とし、側石の背後に溝石を製作する際に出てきた小石材を裏込め石に使用して完成させている。蓋の存在については現状では明らかではない。石組溝内の埋土は最下層と上層に分離でき、上層は明褐色粘土による整地層であった。石組溝を廃絶した後は、同じ平面プランで明褐色を呈する道路状の堆積が存在したと想定



第31圖 石組溝SD01～SD04遺構全体圖





第33図 石組溝 SD01 遺構図(2)

される。

以上が全体に共通する石組溝の特徴であるが、ここでは個別のパーツに分割してさらに詳細に報告したい。

SD01 (第 32 ～ 34 図)

調査区の南部で西端部付近から中央部東寄りの付近まで伸びる東西方向に走る石組溝で、内法幅は最大で 66cm、長さは 28.11m を測る。溝を構築するために掘削された溝の掘削の幅は最大で 155cm、深さは最深で 50cm を測る。断面形で箱型に掘られた溝の床面には基本的に何も施されていなかったが、東部では部分的に灰白色細粒砂が堆積していた。

床面の上には扁平な石材が 2 ～ 3 列に敷き並べられていた。石材は自然石または荒く割られて成形された石材が用いられており、どの部分でも石と石の間の隙間が大きく開いている状態である。SD01 の東部に 1ヶ所と中央部に 1ヶ所に大きく床面が窪み、敷き並べられた石材が乱れている部分があった。これらはそれぞれ SK185 および SK163 (SK162) を埋め立てた整地が十分に堅固ではなく石組溝が構築された後に陥没してしまったために発生したと考えられる。同様の陥没は SD01 中央部にもわずかに認められ、これは SK203 によるものと想定される。また東端部に近い部分で床石が 1 列分残存していなかった。状況から見て後世に抜き取られた可能性を考えておきたい。

側石は南壁と北壁両者とも高さ約 20cm の割石で構成されていた。石組の上位は既に破壊または除去されて遺存しておらず、大部分は 1 段分しか残存していなかったが、部分的に最高で 3 段積み重なった状態が残っており、本来はこの高さかそれ以上の高さの石組が残っていたことが予測される。割石は内法面を比較的平坦にした横に長い長方形状になるように配置され、上下面も比較的平坦になるように配慮されていた。一方、背

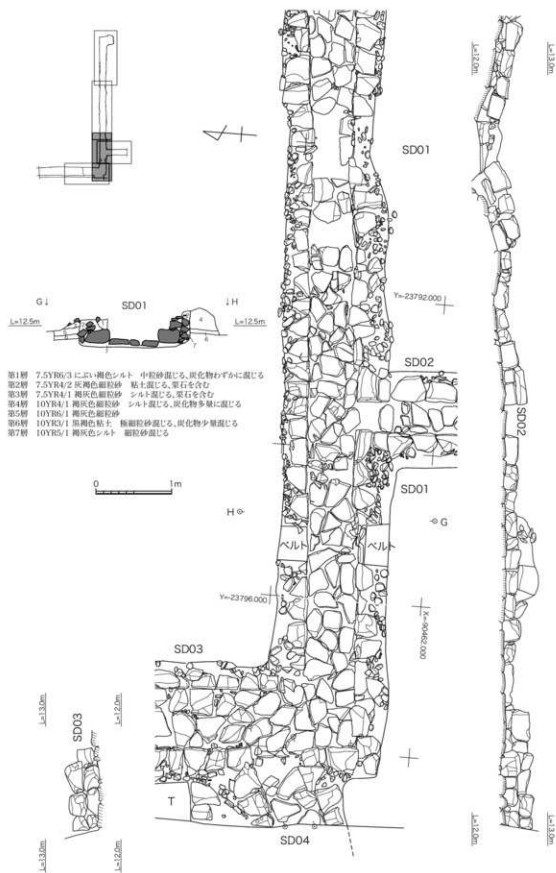
後の部分は形状がバラバラの状態であり、その間には同一石材の細かな割石の小破片などが隙間の無いように詰め込まれていた。

石組溝内の堆積は、最下層は褐色中粒砂が非常に薄く堆積しており、これは溝が機能していた時に自然に堆積した土層である可能性が高い。その上位には明褐色シルトが硬く締まった状態で堆積しており、人工的に埋め立てられ叩き締められたものと考えられる。確証はないが、この人工的な埋め立て土は名古屋台地を構成する表面に近い部分の褐色土が集められ用いられたのではないかと推測される。

石組溝内から陶磁器類などが出土しているが、中でも鉄釘 (1594 ～ 1628) の出土量が多い点が特徴的である。遺物の項でも説明するが、この鉄釘は基部付近で木質の存在した痕跡が認められるものが多いことから、鉄釘留めで組み立てられた木製品が廃棄された可能性が考えられる。想像を逞くすれば木製の蓋板に使用された鉄釘である可能性も考えられよう。また、SD02 の接合部付近では、常滑窯産陶器の甕 1 個体分が潰れた状態で確認された。これらの出土遺物から見て、溝が機能し廃絶した時期は C-3 期 (18 世紀) 初頭に位置づけられるだろう。また、石組の背後の裏込め部分からは肥前窯産磁器碗 (1553) などが出土しており、構築された時期は 17 世紀末から 18 世紀初頭と位置づけられよう。

SD02 (第 35 図)

SD01 の西端付近の南壁に接続する南北方向に走る石組溝で、内法幅は最大で 42cm、長さは 4.41m を測る。溝を構築するために掘削された溝の掘削の幅は最大で 126cm、深さは最深で 63cm (南壁土層断面で計測) を測る。断面形で箱型に掘られた溝の床面に直接扁平な石材が 1 ～ 2 列に敷き並べられていた。石材は自然石または荒く割られて成形された石材が用いられており、石の隙間が大きい。



第34図 石組溝SD01～SD04遺構図(3)

側石は東西壁両側とも高さ10～20cmの側石で構成されていた。石組の上位は既に破壊または除去されて遺存しておらず、大部分が西壁は1段分、東壁は2段分が残存していた。側石は内法面を比較的平坦にした横に長い長方形状になるように配置され、上下面も比較的平坦になるようになっていた。背後の状態は表土はぎの段階で掘削されていた部分が多く、詳細は不明である。状況からみてSD01と同様に、隙間に細かな側石の小破片などが詰め込まれていたといえる。

SD01との接合部は床面で5cm程度の段差が存在し、SD02の方が高い。SD01に接するSD02の床石が推定1個欠落しており、これが構築当時から欠けていたものか、後に抜き取られたものかは特定できない。東西両壁の側石とSD01の南壁の側石は一連の遺構として連続した状態で構築され、石積が2段存在する東壁の隅角部は算木積み状に長辺を入れ違いの状態で作られていた。

石組溝内の堆積は、最下層は褐灰色中粒砂が10cm程度とやや厚く堆積しており、その上位にはにぶい褐色シルトがやや硬く締まった状態で堆積していた。石組溝内から陶磁器類などが出土しているが、検出された部分が少ないためその量は少ない。それでもSD01と同様に鉄釘の出土量が多い傾向は認められる。SD01と同様に、構築された時期は17世紀末から18世紀初頭、廃絶時期はC-3期(18世紀)に位置づけられるだろう。SD03(第36図)

SD01の西端部で屈曲して北方向に伸びる南北方向に走る石組溝で、内法幅は最大で76cm、深さは43cmを測る。北部は石材抜き取り穴SK23によって破壊されており、石組溝は遺存していない。残存長は3.40mを測るが、SK23の検出状態からみて、本来SD03は調査区北端まで継続していたものと考えられる。溝を構築するために掘削された溝の掘削の幅は最大で172cm、深

さは最深で72cmを測る。断面形で箱筒状に掘られた溝の床面に直接扁平な石材が2～3列に敷き並べられていた。SD01と同様、石材は自然石または荒く割られた石材が使用され、石の隙間が大きい。

側石は東西壁両側とも高さ約20cmの側石で構成されていた。石組の上位は既に破壊または除去されて遺存しておらず、大部分が1段分しか残存していなかった。側石は内法面を比較的平坦にした横に長い長方形状になるように配置されていた。背後の状態は表土はぎの段階での掘削と西壁トレンチにより不明な部分が多いが、SD01と同様に、隙間に細かな側石の小破片などが詰め込まれていた。

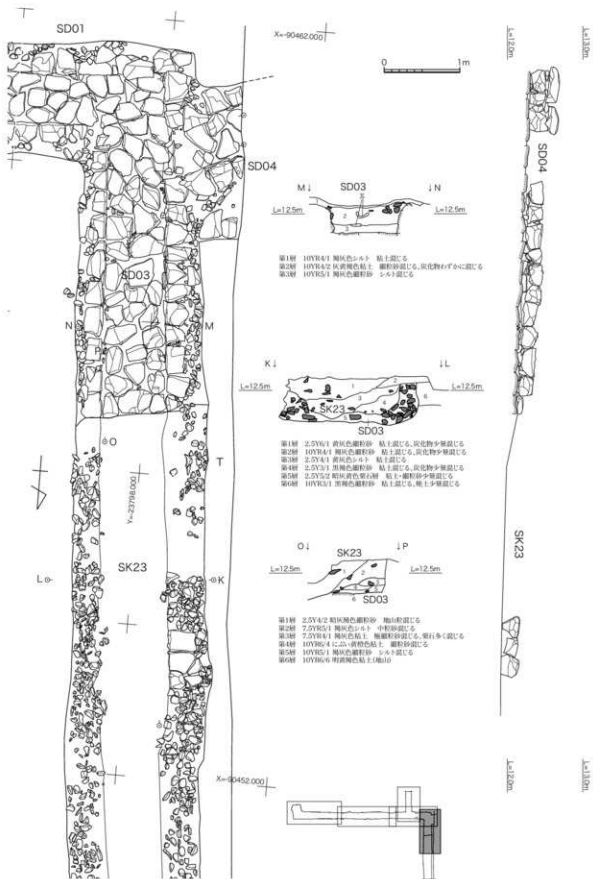
SD01との接合部分は、床石と側石ともに連続して構築されていた状態と思われる。少なくとも床石についてはSD01とSD03の境界線を認めることはできない。SD03の東壁の隅角部(出角部)の石材が遺存せず、構造は明らかにできない。SD03の西壁の隅角部(入角部)の石積みはSD01の南壁が築造された後にSD03の西壁が構築された構造が確認された。

石組溝内の堆積は、最下層は褐灰色中粒砂が10cm程度とやや厚く堆積しており、その上位は灰黄褐色粘土の斑土層、褐灰色シルト層が順に堆積し、最上面はやや硬く締まっていた。石組溝内から陶磁器類などが出土しているが、検出された部分が少ないためその量は少ない。それでもSD01と同様に鉄釘の出土量が多い傾向は認められる。SD01と同様に、構築された時期は17世紀末から18世紀初頭、廃絶時期はC-3期(18世紀)に位置づけられるだろう。

SD04(第36図)

SD03の南端付近の西壁に接続するやや方位が南に振れた東西方向に走る石組溝である。内法幅は最大で68cm、深さは最深で50cm(西壁土層断面で計測)で、検出長は0.80mを測る。大半

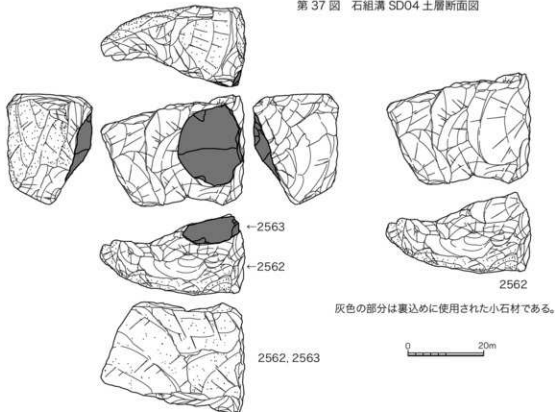
名古屋城三の丸遺跡 VII



第 36 図 石組溝 SD01・SD03・SD04 遺構図 (5)



第 37 図 石組溝 SD04 土層断面図



第 38 図 SD01 石組構成石材実測図

は調査区外に伸びると想定される。溝を構築するために掘削された溝の掘肩の幅は最大で162cm、深さは最深で66cm（西壁土層断面で計測）を測る。断面形で箱堀状に掘られた溝の床面に直接扁平な石材が1～2列に敷き並べられていた。石材は自然石または荒く割られた石材が用いられ、その隙間が大きい。

側石は東西壁両側とも高さ約20cmの割石で構成されていた。石組の上位は既に破壊または除去されて遺存しておらず、大部分が南北両壁とも2段分が遺存していた。SD01と同様に割石は内法面を比較的平坦にして配置され、隙間に細かな割石の小破片などが詰め込まれていたが、北壁については若干様相が異なっている。北壁を構成する石材の背後にも、側石と同様の石材で石列が1段構成されている。背後の石列は北方向に面して平坦面が揃った状態で配置されており、溝内法面を構成する石列と対になっている。遺構の大半は調査区外に伸びて様相は明らかではないが、この石列は溝の内法面を構成するとは考えにくく、北壁を構成する石列とともに石壁を構成していたと考えられよう。

SD03との接合部は床面で5cm程度の段差が存在し、SD03の方が高い。SD03に接するSD04の床石が推定1列分欠落しており、これが構築当時から欠けていたものか、後に抜き取られたものかは特定できない。南北両壁の側石とSD01の南壁の側石は一連の遺構として連続した状態で構築されているが、両壁とも石積が2段存在するもののその積み方は特に算木積み状にしておらず1段目と2段目の石列配置はあまり変化していない。

石組溝内の堆積は、最下層は黄灰褐色細粒砂が20cm強とやや厚く堆積し、その上位にはにぶい赤褐色細粒砂が薄く堆積していた。石組溝内から陶磁器類などが出土しているが、検出された部分が少ないためその量は少ない。SD01と同様

に、構築された時期は17世紀末から18世紀初頭、廃絶時期はC-3期（18世紀）に位置づけられるだろう。

SD01（第32図）

SD01の東端から南に屈曲して南北方向に走る短い柵状の石組構造物である。側石はほぼ全部が遺存せず、側の裏込め石と床壁のみが遺存していた。床材の状態からみて内法幅は最大で70cm、長さは2.15mを測る。溝を構築するために掘削された溝は、石組溝と方位がやや異なり南で東に振れていた。掘肩の幅は約185cmを測るが、一部の東辺が広がっている。断面形で箱堀状に掘られた溝の床面に直接扁平な石材が2～3列に乱雑に敷き並べられていた。石材は自然石または荒く割られて成形された石材が用いられ、その隙間が大きい。SD01との接合部分は、床石と側石ともに連続して構築されていた状態と思われる。少なくとも床石についてはSD01とSD01の境界線を明瞭に認めることはできない。

側石が遺存しなかったが、裏込めまたは下部に存在した小石材は残存しており、SD01～04と同様な構造を持っていたと考えられる。石組溝内の堆積もほとんど残存しておらず、出土遺物もわずかである。SD01と同様に、構築された時期は17世紀末から18世紀初頭、廃絶時期はC-3期（18世紀）に位置づけられるだろう。

石材について

石材は花崗岩が1点使用されたのを除き全て木曾川流域で産出されたと想定される砂岩であった。側壁に使用された石材は、多くは長さが30～50cm、幅が20～40cm、厚さが10～20cmの大きさに加工されている。一方、床壁に使用された石材は、多くは長さが20～50cm、幅が20～40cm、厚さが5～15cmの大きさに加工されている。ただし、加工が施されているといっても、実際には同等の規模の石材が調達され、大半は細かな形状を形成するために部分的に打ち欠いた程

度の加工であった。したがって自然面が活用できる部分は可能な限り活用されている。また、加工痕は床壁よりも側壁に使用された石材の方が多い傾向が窺える。

加工は打撃による剥離技法が使用されている。2562はSD01の北壁に使用された石材の一つである。また、2563はSD01の北壁石材背後に裏込めされていた小規模な石材の一つで、2562と2563は接合された資料である。側壁に使用された石材と裏込めに使用された小石材の接合作業は調査上の制約のため十分に行うことができなかったが、2562と2563のような事例が存在することは剥離による石材加工は現地（石組溝が存在する場所の付近）で行われて全ての材料が効率よく使用されたことを推定できる。2562は第38図の下面が石組溝側石の内法面に相当する。加工の順番は、まず内法面である下面の平坦面を形成するために数回の剥離作業が行われた後、上面に相当する正面の平坦面を形成するために大きな剥離作業が施されている。大きな剥離作業を行う際に、打点の部分にはあらかじめ直径1cm程度、深さ1cm弱の小穴が穿たれており、その部分に敲打具を当てハンマーなどによって衝撃が加えられたものと考えられる。

最後に石材の加工面と自然面の割合を検討する。全ての石材の6面全部の加工状況を確認することも調査上の制約のためできなかったが、石組溝が検出された状態で見える面についてはどの部分が加工されているかという調査を現地で行っているため、その傾向を示しておきたい。第31図は石組溝群全体の平面図に、平面図に見える部分(上面)で剥離加工が行われた部分をトーン(灰色)で示したものである。上面で剥離加工が施されたものと自然面のまま使用されたものの数量比をまとめたものが第4表である。これによると、床石は自然面のまま使用されたものが圧倒的に多く、側石は上面で剥離加工が施されたものと自然

面のまま使用されたものがほぼ同数であることが判明した。床と側である程度石材の適正が選別され、これが加工状態にも反映された結果であると考えられる。

上面の状態(個数)		加工面	自然面
SD01	北側壁	48	41
	南側壁	40	32
	床	33	149
SD02	東側壁	4	8
	西側壁	2	9
	床	3	16
SD03	東側壁	8	3
	西側壁	4	7
	床	13	27
SD04	北側壁	1	1
	南側壁	2	0
	床	1	2

第4表 石組溝の石材加工度

第7項 石列

C期に属すると推測される石列は1基存在する。

SX09 (第39図)

調査区南端で検出された東西方向に伸びる石列である。発掘調査時点では、この石列は南壁土層断面に見えていた遺構で、調査終了直前に南壁を部分的に拡大してSX09の平面形態の調査を実施した。したがって石列の南側がどのように展開したかは、調査区外のため不明である。石列は大きく3つの石群に分かれており、全体の長さは6.6mを測る。直方体の形状をした切石を用いて石の北側の面を直線的に揃えて配置されていた。切石の下部と南側には若干の自然石を使用して裏込め石としていた。石列は標高13m強のレベルの地面に設置され、その周囲は黒褐色シルトの粘土で覆われていた。石列設置面の下層は暗褐色細粒砂などによる整地土層でこの堆積はC-1期の遺構を埋め立てた土層である。一方、石列設置面上層は黒褐色極細粒砂の粘土であり、詳細な時期の特定

名古屋城三の丸遺跡 VII

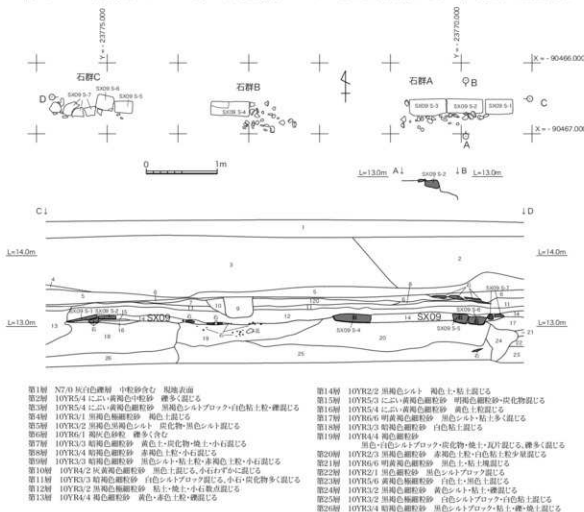
は難しい状態であった。

次に各石群の状況について説明を加える。SX09の東端に所在する石群Aは直方体の石材を3個(S-1~3)配置して1.45m分の石列を構成している。北に面する側面は表面が研磨され美しく平坦面を作っていたが、それ以外の部分では表面を打ち欠いた加工痕が残存している。SX09の中央に位置する石群Bは直方体の石材を1個(S-4)配置したものである。石材の東側には裏込めに使用される小玉石が約70cm四方の範囲で散乱しており、本来はこの東側の部分にも直方体の石材が存在していた可能性が高い。この想定が正しければ石群Bの全長は1.25mを測る。SX09の西端に展開する石群Cは直方体の石材を5個(S-5~9)配置して1.20m分の石列を構成

している。石列の配置は後世の擾乱によって乱されてしまったものと思われ、どの面も直線的にはなっていないかった。

各石群の間は、石群Bで見られたような玉石の散乱などが認められないことから、断定はできないものの、元々石列の空白が存在した可能性が高いと推定できる。このように推定すると、石群Aと石群Bとの間は約1.6m、石群Bと石群Cとの間は約1.1mを測る。

この石群に伴う遺物はわずかな陶磁器類と石群を構成する石材が存在するのみで時期を特定するにはあまり参考にはならない。石列の検出位置から考察すると、C-3期(18世紀)に構築された石列と推定される。この石列の用途を特定することはもとより困難であるが、現在まで残る近世の



第39図 石列SX09遺構図

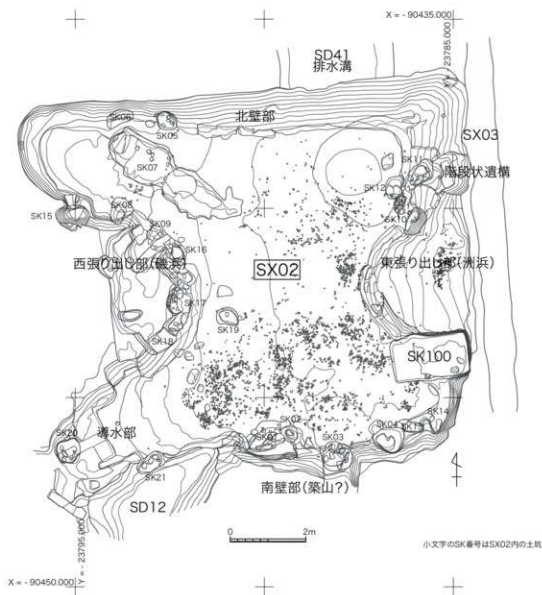
建造物などの基礎構造を観察すると、建物基礎の土盛周囲に配置された石列や、雨落ち溝の建物側に設置された石列などの類例を知ることができる。このような状態から、SX09も建物（おそらく礎石建物）に伴う縁石列であったと推測したい。

第8項 池状遺構 SX02 (第40～55図)

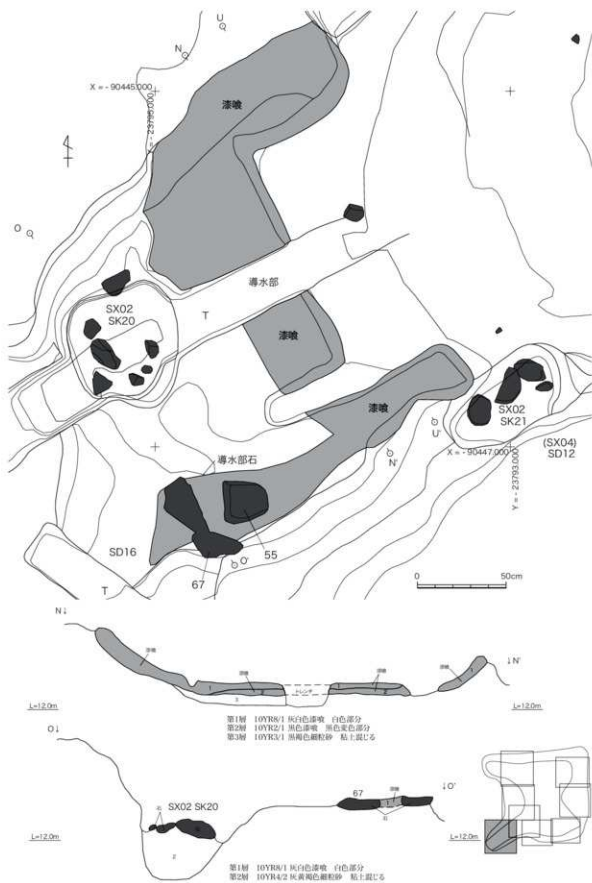
C期に属する池状遺構は1基存在する。今回の発掘調査で最も特徴的な遺構となっている以下、詳細に説明を加えていく。

概要 (第40図)

SX02は調査区の北西部で確認された池状遺構で、規模は最大長12.0m×最大幅10.8m×深さ1.45mである。全体の平面形は11m×10mのほぼ正方形に近い方形のプランに、東辺と西辺の両側から半島状に伸びた張り出し部が掘り残される形状と説明できる。周囲の壁面は大小様々な形状の土坑と津喰による壁面などが認められ、部分的には石材が埋め込まれる形で配置されていた。床面は薄く粘土が貼られ表面には大量の玉石が敷き並べられていた。南西隅がスロープ状に傾斜し、



第40図 池SX02遺構全体図

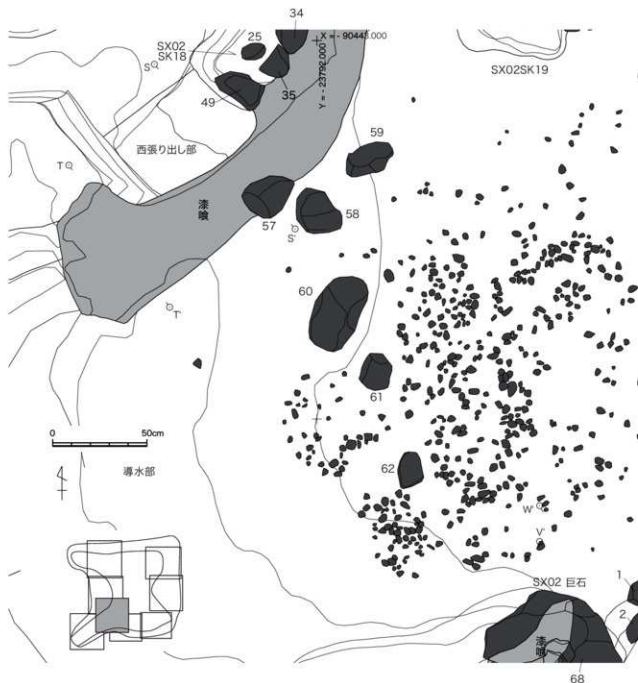


第41図 池SX02遺構詳細図(1)

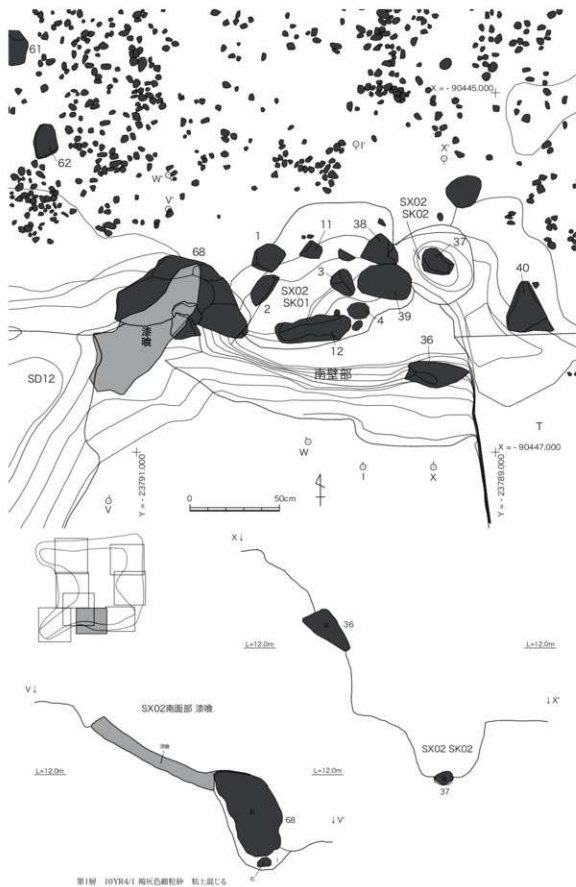
東辺北部で階段状の遺構が存在する。北壁は直線的に構築され東寄りの部分にはSD41が掘削されていた。埋土は灰色細粒砂と粘土の斑土が堆積しており、一気に埋め立てられたと考えられる。なお、池東辺に接する形で砂利敷SX03が存在し、SX02と一連の遺構の可能性が高い。

以上がSX02の形態的な概略である。次にSX02の性格や機能を検討する。まず、床に粘土

が貼られ四周の壁は漆喰で覆われていたことが予測されることから、SX02は水を貯める施設であることがわかる。しかも、南西部にスロープを持ち、その対角線上の北東部に排水溝と思われるSD41が存在することから、大局的には南西から北東に水を流したものと推定される。また、部分的に巨石や装飾的な石材が漆喰壁に埋め込まれていたことから、壁周囲に分布する土坑は埋め込



第42図 池SX02遺構詳細図(2)



第43図 池SX02遺構詳細図(3)

れた石の抜き取り穴であることが想定され、従ってSX02は石材で装飾された構築物であると考えられる。ただし、北壁は極めて直線的に構築され装飾を持たない構造を呈している。こうした状況を総合的に判断すると、石材を配置して漆喰壁で覆われた装飾的な庭園に伴う池と推定され、北側から観賞したものと想定されよう。なお、SX02の時期は、出土遺物や他の遺構との関係から、C-3期（18世紀）に構築・廃絶されたと推定される。

さて、ここでは遺構の説明を行うために、導水部（南西部）、南壁部（築山？）、西張り出し部、東張り出し部、階段状遺構、北壁部、排水部（SD41）、床面、砂利敷（SX03）の8つの部分に分けて記述を進めたい。

導水部（第41・42図）

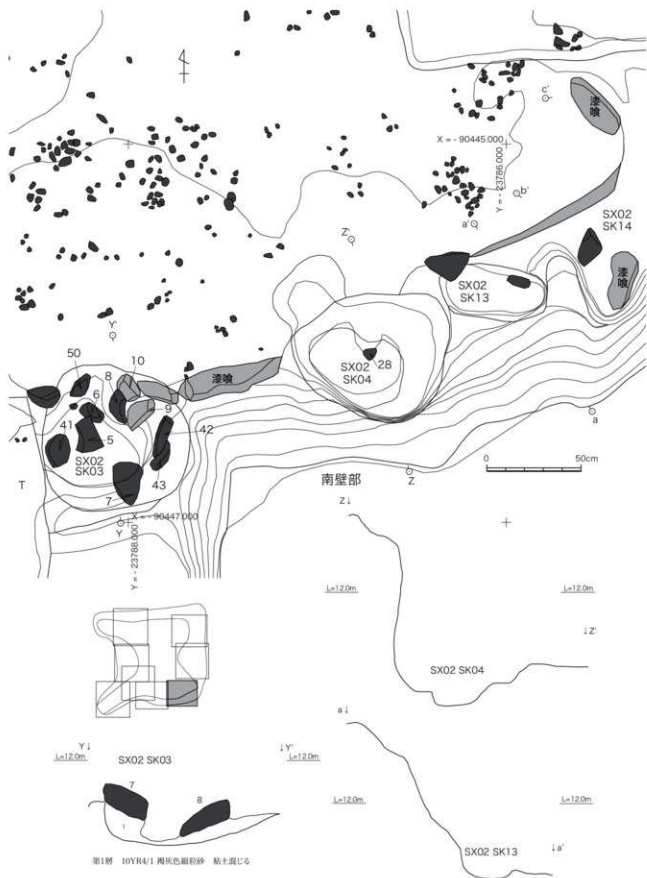
導水部はSX02の南西部に所在する。南西端部が高く北東方向に向かって下る傾斜となっており、傾斜角度は約5°を測る。導水部の幅は上端部付近で約2.0m、開口部付近で約2.8m、長さは約4.7mを測る。

導水部上部では、北壁・床・南壁ともに厚さ6cmの漆喰で覆われた状態が確認された。漆喰は「h」字状に残存していたが、一部の漆喰が直線的に欠落していた。欠落した部分が石の抜き取り痕か否かは特定し難いが、偶然に欠落したものは考えにくい。漆喰は中央部が幅約1.4mの平坦面を形成し、両側は緩やかな断面U字状の形態となっている。漆喰の北側の平坦部と傾斜部の境界にはわずかな溝が存在する。導水部上位の漆喰には石材が2個埋め込まれていた。導水部上位中央部には直径が70cm程度の歪な円形プランの土坑（SX02SK20）が存在する。この土坑は中位まで灰黄褐色細粒砂が埋積され、その上には小石材が散乱していた。埋め込まれた巨石の抜き取り穴と想定される。漆喰下端の東側にも70cm×40cmの楕円形土坑が存在し、中からは中規模

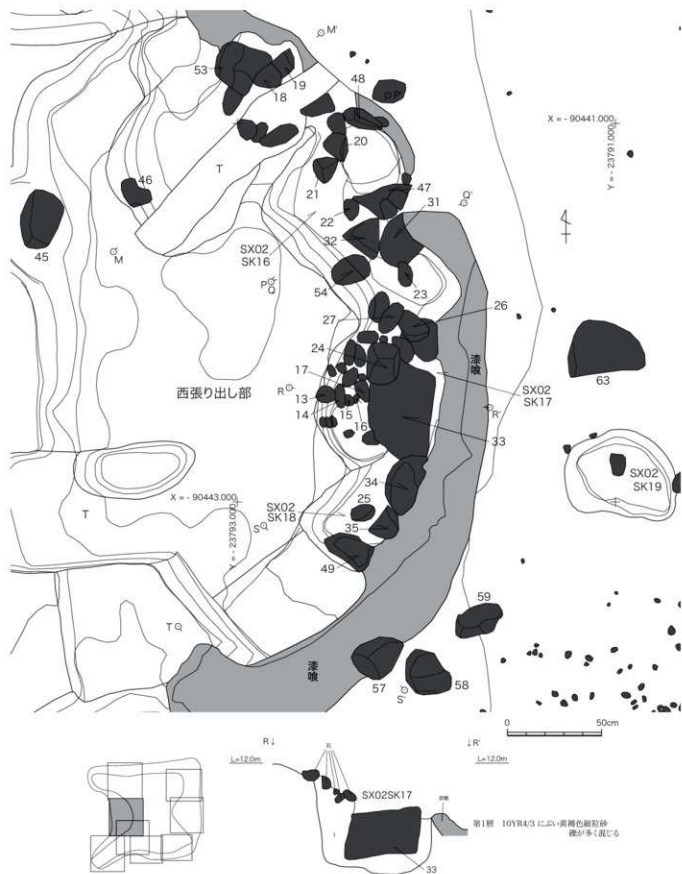
の石材が3点ほど出土した。これも石抜き取り穴であろう。

導水部下部（北東方向の大半）は傾斜を持つ地山の平坦面が広がり、他の構造物は全く存在しない。もともと地山面が露出していた可能性も考えられるが、ここでは上位に存在するような漆喰壁に覆われていたものと想定しておく。庭園の池の導水部としての景観を考えると、地山に影響を与えない程度の小規模の配石が存在したことも視野に入れておきたい。導水部最下部では地山あるいは薄い黄褐色粘土層上に玉石が敷かれた状態が展開し、導水部と池本体との境界部分には中規模な石材が6個確認された。これら6個の石材は全て据え付けられた状態では確認されず、本来の位置から移動している可能性が高い。実際6個の石材のうち2個については石材に漆喰が付着した状態が確認されもともと漆喰壁に埋め込まれていたことを窺わせている。しかしながら、6個の石材の一部を除き直線的に検出されたこと自体が偶然の産物とは思われず、導水部と池本体の境界部に一程度の配石が存在したものと想定しておくたい。

導水部南壁中央部にはSD12が存在しているが、少なくとも漆喰壁で導水部が覆われていた段階ではこのSD12は機能していなかったと考えられる。しかし、漆喰壁に覆われる以前（池構築段階か？）にはSD12と共存していた段階があったことが想定される。その理由はSD12上層がSX02に接する直前でラッパ状に開き、SD12上層の東壁がSX02の南壁と連続するかのような状態が確認されたためである。SD12とSX02の境界部は硬化した盛土によって山形に少し高くなっており、仮にSD12をSX02の水の供給源と想定するならば、境界部の高まりをオーバーフローした水流が池に流れたものとも考えることもできよう。一方、導水部上端南部にはSD16が存在するが、検出された長さが短くその性格は確定で



第44図 池SX02遺構詳細図(4)



第45図 池 SX02 遺構詳細図 (5)

きない。導水部の上端部は本来もう少し上位まで遺構が現開したと考えられ、導水部が漆喰壁に覆われていた段階の水供給源の遺構は、後世の削平により滅失したものとここでは考えておきたい。
南壁部（築山?）（第43・44図）

SX02の南壁部は概ね直線的に東西方向に広がっている。西は導水部につながり、東は池壁が北に折れてそのまま東張り出し部に至る。西端部には巨石が埋め込まれた漆喰壁が広がり、中央部は壁が厚い斑土で整地された土壁となり、中央部から東端部にかけてはその手前に石抜き取り穴と思われる土坑が多数存在していた。

南壁部西端のSD12東肩と接する部分には76cm×36cm×46cmの規模を持つ巨石が据え付けられていた。巨石は深さ10cm強の土坑中に立て置かれ、巨石より上位は厚さ約8cmの漆喰壁で覆われていた。漆喰は巨石上端部を覆うように設定されたが、巨石下部には漆喰壁は認められなかった。

南壁部中央には前時期に存在したSD14があり、南壁から奥へ約1.5mの範囲は灰白色粘土や褐灰色粘土などにより突き固められていた。版築状に積み重ねられた盛土は標高12.5m前後まで確認されたが、これよりも高くなっていった可能性もある。このように粘土によって溝を堰き止め盛土を行った場所は南壁部中央のみであり、他の地点では確認できない。

南壁部の掘削は凹凸があり平坦ではない。掘削部分には池の埋土とは異なる盛土が存在し、これは石材を配置した際の裏込め土である可能性が高い。

南壁部の直下には多数の土坑が存在する。土坑の形状や規模は様々であるが、中から中小規模の石材や漆喰片などが出土し、土坑の周囲には漆喰壁や床面の粘土層が巡りやや盛り上がりつつあった。以上の所見から、これらの土坑は石抜き取り穴と推定され、本来据え付けられた石材は漆喰や粘土

により隙間が埋められ固定されていたと想像される。

SX02SK01は南壁部西端にある巨石の東隣に所在する土坑で、100cm×56cmの規模を持つ。土坑の周囲を巡るようにS1、S2、S12、S42などの石材が配置されていた。この土坑に庭石1石を配置したとすると相当大きな石材が使用された可能性が高い。

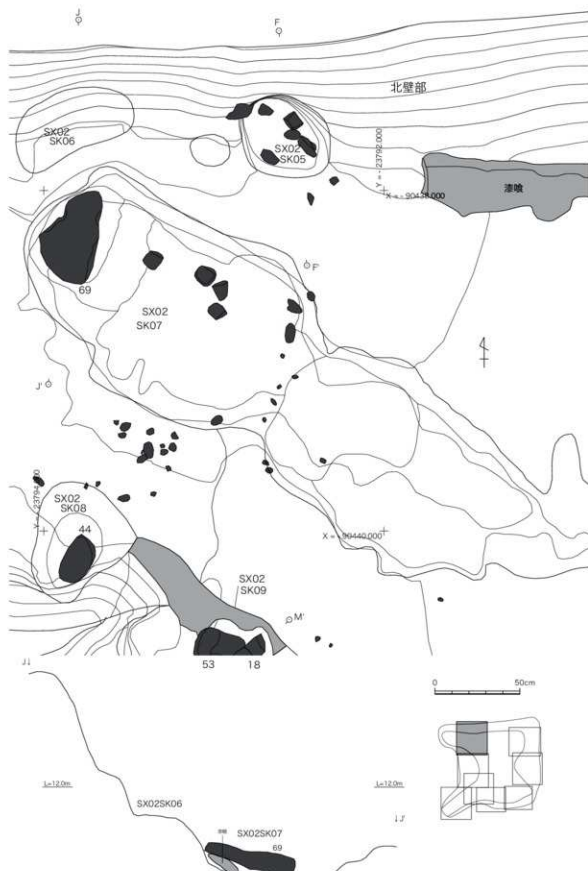
SX02SK02はSX02SK01の東隣に所在する土坑で、46cm×44cmのほぼ円形プランとなっている。土坑の中央から石材1個(S40)が出土した。SX02SK02とSX02SK03の間はトレンチ掘削のため不明な点が多いが、壁の奥側に抜き取り穴が存在した可能性がある。手前部分にはS43が存在する。

SX02SK03は南壁部中央にある土坑で、78cm×77cmの規模を持つ。土坑内部からS5～10、S44～46、S54などの石材が出土した。石材の他に漆喰片も出土しており、石が抜き取られた後に部材が混入した状態が想定される。この土坑に庭石1石を配置したとすると相当大きな石材が使用された可能性が高い。

SX02SK04は南壁部東部に位置する土坑で、84cm×69cmの規模を持つ。土坑からは小石材が数個出土した程度である。SX02SK03とSX02SK14の間には漆喰壁が一部残存していた。

SX02SK13は南壁部東端に所在する土坑で、57cm×28cmの規模を持つ。土坑の周囲に数個の中小規模の石材が配置されていた。この土坑にはあまり大きくない石材が使用された可能性が高い。

SX02SK14は南壁部東端に存在する土坑で、壁を横に掘り込んだ状態で確認された。土坑と盛土の識別は実際には難しいが、漆喰片や石材が出土したため土坑と確定した。SX02SK12の前面には漆喰壁の立ち上がり部分が残存しており、池の平面プランはこの漆喰残存位置で特定できよ



第46図 池SX02遺構詳細図(6)

う。であるとなれば、SX02SK12やSX02SK13は漆喰壁のやや奥に設定されており石材は相当埋め込まれた状態であったと想像される。

上記の状態からみて、南壁部は概ね直線的に庭石が一列に配置されていたことが想定される。

西張り出し部（第45図）

西張り出し部はSX02の西部に所在する。西張り出し部本体は半円形に掘り残された半島状の高まりであり、その周囲には漆喰壁の護岸が施されその上位には土坑や石材が配置されている。上部は数個の石材が配置されている他は施設が遺存しない。西張り出し部の南側は導水部北壁に連続し、北側は壁がUターンをして北壁部に至る。

西張り出し部南端では漆喰壁が高さ約30cm、平面幅約70cmで残存していた。漆喰の厚さは12cmを測り、特に表面の厚さ2cmの部分は肌理の細かい漆喰で丁寧に塗られていた。漆喰壁は東端部で最も高く遺存し、すぐ北側で約半分の高さとなっている。これはその背後が平坦面を形成していることに起因するものと思われる。漆喰壁の残存状況はさらに北に行くほど低くなり西張り出し部北側で漆喰壁は残っていない。西張り出し部北側で漆喰壁は残っていない。

西張り出し部では、残存する漆喰壁の上位に石抜き取り穴と推測される土坑が6基存在する。残念ながら巨石が据え付けられていたままの部分は認められなかった。土坑の形状や規模は様々であるが、中から中小規模の石材や漆喰片などが出土していた。南壁部では漆喰壁下端付近で土坑が存在していたのに対して、西張り出し部では土坑が上位に存在する点が大きく異なる特徴であるといえよう。

SX02SK18は西張り出し部南側にある段差状の土坑で、60cm以上×40cm以上の規模を持つ。土坑の岸側にS27、S37、S38、S52などの中小規模の石材が配置されていた。この土坑の奥側に庭石1石を配置し中小規模石材を根固めとして利用したものと考えられる。

SX02SK17は西張り出し部中央に所在する土坑で、約70cm×約60cmの大きさを測る。土坑の岸側には上面が平坦で厚さが22cm、平面形が54cm×34cmの平行四辺形の巨石S36が据え付けられ、その奥側に小規模な石材S13～S17などが散乱していた。巨石S36は庭石1石を配置するための根石の可能性がある。

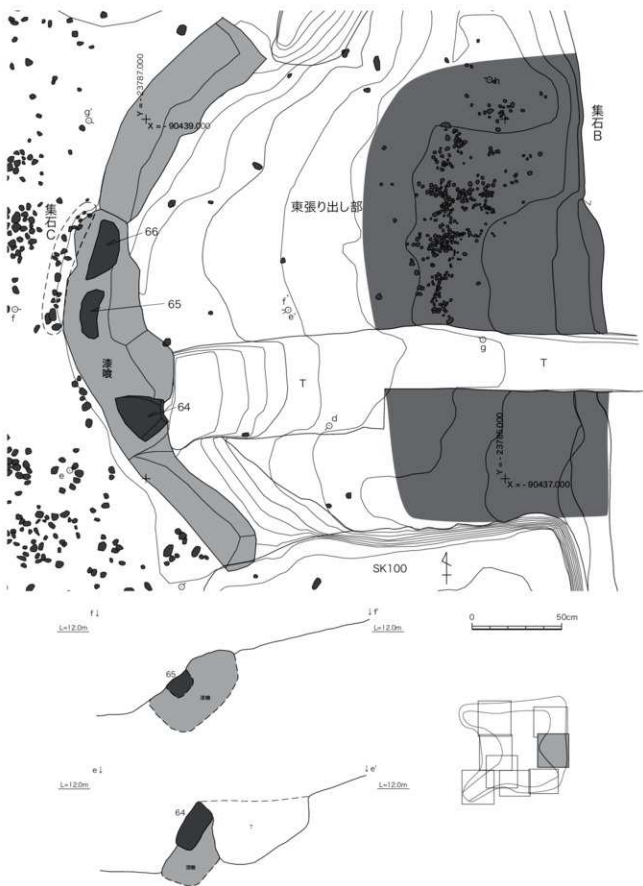
SX02SK16は西張り出し部北側にある長方形土坑で、117cm×80cmの規模を持つ。複数の土坑が重複してこの形状になった可能性もあり、S22～S24など多くの石材が配置されている。この土坑には複数の庭石が配置されたと思われる。

SX02SK09は西張り出し部北側に所在する124cm×82cmの規模を持つ土坑である。土坑の上端部からの深さは65cmを測る非常に深い土坑である。最下層からは鎌倉時代の山茶碗などが出土していることから、下部はB期の遺構と推測される。一方、土坑の岸側の部分ではS16、S19、S56などの石材がおおよそ円形に配置されており、その中央に庭石1石が配置されたと想定できる。

SX02SK08は西張り出し部北端にある土坑で、71cm×62cmの規模を持つ。土坑中央には石材S47などが配置されていた。この石材は庭石を安置するための根石の可能性がある。漆喰壁はどの土坑まで残存し、土坑の西側には展開していない。

SX02SK15は西張り出し部北端にある土坑で、91cm×65cmの規模を持つ。土坑中央には石材S30などが配置されていた。この石材は庭石を安置するための根石の可能性がある。

上記のように西張り出し部の岸に沿った形で展開する土坑群の上位には、土坑など池の装飾などに関連する遺構は意外と少なく、石材2個と土坑2基が存在するのみである。土坑については池に伴う遺構と特定できない。



第47図 池SX02遺構詳細図(7)

東張り出し部 (第 47 図)

東張り出し部は SX02 の東部に所在する。東張り出し部本体は半円形に掘り残された半島状の高まりであり、その周囲には漆喰壁の護岸が施されその上位には土坑や大きな石材が配置されず、上部は小規模な白色の玉石が敷き並べられている他は施設が遺存しない。西張り出し部の南側は SK100 によって破壊され、南壁部との接続状況は不明である。北側は土坑が 3 基と階段状遺構が存在する。階段状遺構の右手床面には巨石が据え付けられた状態が確認された。土坑と階段状遺構以外の壁は漆喰によって覆われ、そのまま北壁に連続している。

東張り出し部は西張り出し部と異なり、半分ほどが盛土されて構築されている。当初の掘削は下端部で 1.3m ほど掘り残した状態であり、その後粘土混じりの黒褐色細粒砂で高さ約 75cm、幅 2m 強、先端に向かって約 1.5m 盛土されていた。当初の掘削ラインで池が機能していた可能性も考えられるが、この段階での土坑や石材は確認されなかった。

盛土の先端では漆喰壁が高さ約 30～50cm、厚さ約 20～30cm で残存していた。漆喰は上位が削られた可能性があるが、それほど高くはないと思われる。先端部中央部の漆喰壁には黒色の直方体状の石材が 3 個埋め込まれており、黄白色の壁面に四角い黒色石が浮かぶ形となっている。石材の下端は床面から約 20cm 上位に挿った状態であり、構築段階で想定された池の水位は黒色石に近似した 20cm くらいであったと想定できる。北部に行くに従い漆喰壁は高く遺存している。漆喰壁は少なくとも先端部では 2 段階に塗られていたことが判明している。これが床面の新旧に対応していた。

漆喰壁の上位には、白色シルトブロックを多量に含む土層で整地され、その上に白色の径 2cm 程度の玉石が敷き並べられていた。石の抜き取り

穴や大型の石材が存在しないことから非常に平板な構造を呈していたといえる。

階段状遺構 (第 48 図)

階段状遺構は SX02 の東辺の北部にあり、段差が素掘りで 4 段設けられていた。周辺に土坑が 3 基存在する。巨石が据え付けられていたものはなく、土坑の設置位置も様々であった。

階段状遺構の北側は約 45 度の傾斜で池底に至り、階段状遺構は掘削上位から設置されていた。上位から 1 段目の段差は明瞭ではなく、4 段目の段差は SX02SK11 のため正確な形状を把握できない。幅は上端部で約 1.1m、下端 (段差) 部で 0.7m を測る。段差部分では石材や石材が抜き取られた痕跡などを見出すことはできなかった。しかし、検出時点でも地盤が不安定な状態であったため、本来は石材が埋められていたと想定される。

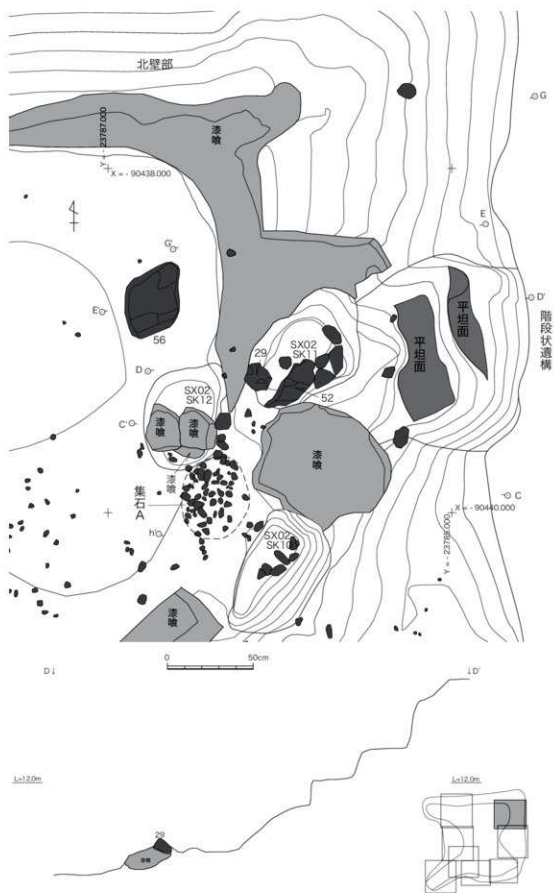
SX02SK11 は階段状遺構の下半部北寄りに所在する 82cm × 54cm の規模を持つ土坑である。土坑内で中小規模の石材が南側に偏って配置されており、庭石 1 石が配置されたと想定できる。

SX02SK12 は階段状遺構直下にある土坑で、58cm × 46cm の規模を持つ。土坑中央には漆喰片などが出土しており、石が抜き取られた後に漆喰を埋めたものと考えられる。

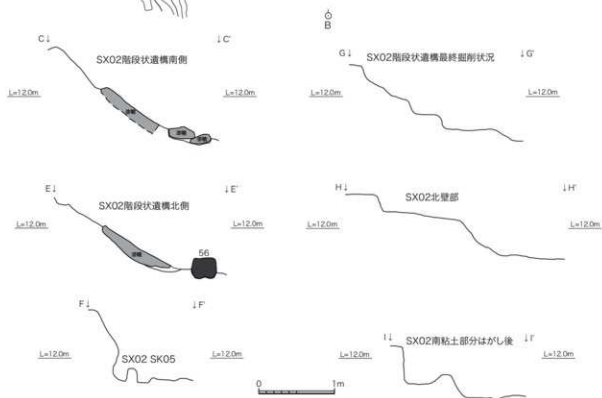
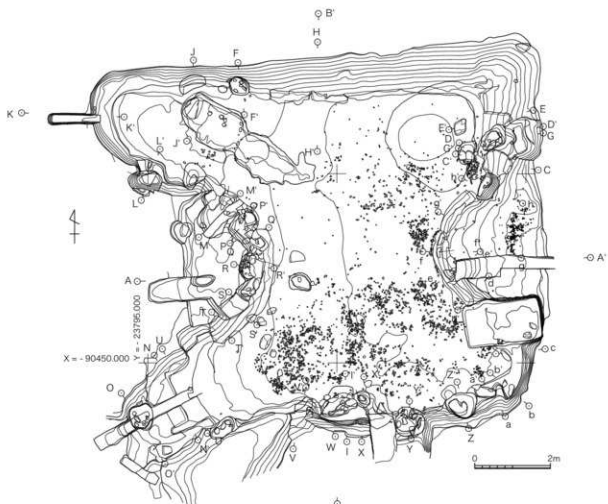
SX02SK10 は階段状遺構の南部に位置する土坑で、76cm × 46cm の規模を持つ。階段状遺構とは漆喰壁を挟んで約 60cm 離れた場所にあり、土坑中央には小石材が出土した。この土坑の存在で漆喰壁は分断されていた。

SX02SK10 と SX02SK12 との間の床面には玉石が集中して分布する部分 (集石 A) が存在する。この集石も池を装飾するための施設の基礎の可能性がある。

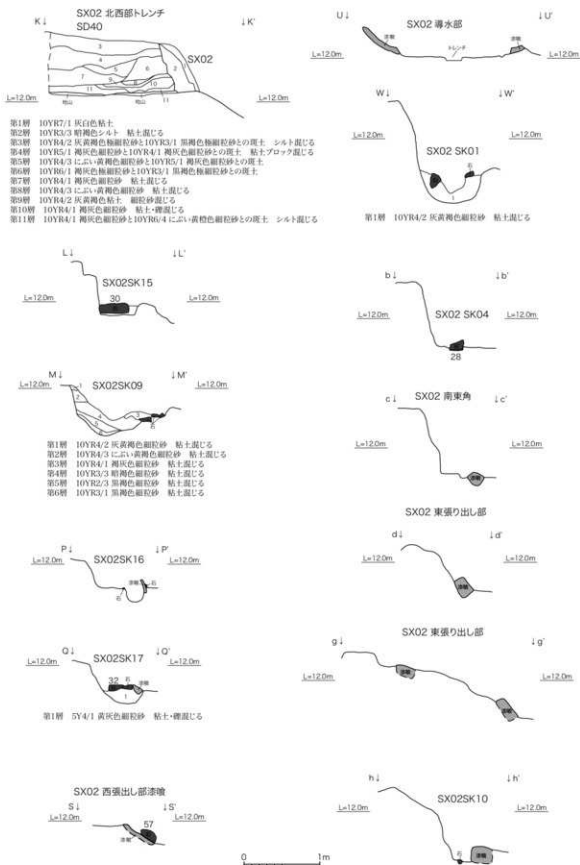
SX02SK12 の北部には一辺が約 40cm の黄色チャートが床面に据え付けられる形で検出された。床面にわずかな窪みに石を置き周囲を床面を覆う黄褐色粘土で固められていた。階段状遺構に



第48図 池SX02遺構詳細図(8)



第49図 池 SX02 エレベーション図 (1)



第50図 池SX02エレベーション図(2)

近接するため手水鉢台用の石材の可能性も考えられる。

北壁部 (第 46 図)

北壁部は池の直線的な北面を指し、西部に土坑が2基、東部にSD41の排水口が設置されていた。これ以外の部分は約50度の傾斜で素掘りの地山が大きな平坦面を形成して露出し、下端部で一部漆喰壁が残存していた。この状態から見て本来は土坑と排水溝を除く部分は北壁全体が漆喰壁に覆われていたと想定される。

SX02SK06は北壁西部に所在する土坑で72cm×38cmの規模を持つ楕円形土坑である。石材がほとんど出土しておらず、池よりも古い遺構である可能性も想定できる。

SX02SK05は北壁西部にある土坑で、60cm×48cmの規模を持つ。土坑中央には小規模な石材などが出土しており、石が抜き取られた後に漆喰を埋めたものと考えられる。

排水部 SD41 (第 52 図)

排水部SD41はS X02北壁部の東部に所在する溝で、南北方向に走る。上端幅約4.0m、下端幅約2.5m、深さ約1.2mの規模を持つ断面形が逆台形を呈する形状で、満底は池の床面からは約15cm上位に存在した。内部は細粒砂やシルトの斑土で充填されており、廃絶の際に一気に埋め立てられたと考えられる。溝は池の状況からみて暗渠であった可能性が考えられ、おそらく石組暗渠が壊され抜き取られた後に整地されたのであろう。

なお、北壁上層断面では29層より上位に建物跡と思われる柱穴と根石が確認され、SD41構築後に建物遺構が存在したことが予測される。

床面 (第 51 図)

池の床面は南西部が最も高く北東部が最も低い。全体には西側が高く東側が低い傾斜となっている。床面は全部で3段階に分けることができる。

上位の床面は池廃絶時点までの最終床面に相当

し、表面が黄褐色粘土で覆われていた。黄褐色粘土層の上には大量の黄色チャート製の自然石の玉石が敷かれていた。玉石は南部で多く認められ北西部では少ない傾向がある。この床面は東張り出し部先端の漆喰壁の表面と対応している。

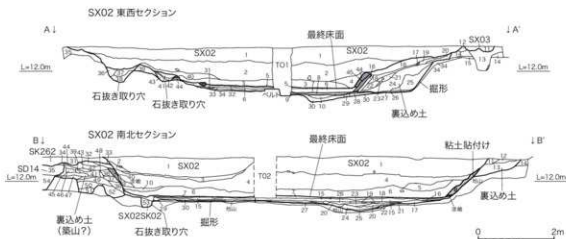
中位の床面は、厚さ約5cmの黒褐色土が混じる細粒砂層を挟んで上位床面より下位に存在する面である。中位床面は部分的にしき確認されず、下位床面と区分できないところがある。表面は灰黄色細粒砂層で覆われているが、玉石はほとんど敷かれていなかった。初めから玉石が存在しなかったのか、上位床面構築段階で削り取られたのかは特定し得ない。この床面は東張り出し部先端の漆喰壁の塗り直し前の表面と対応している。

下位の床面は池の掘削に相当する地山面である。この面が池として機能していたのかは明らかではない。表面は粘土や玉石などによる装飾は全く施されていない。

床面にはいくつかの浅い土坑が上位床面で2基、下位床面で1基確認された。SX02SK07は全長4.0m、幅1.2mを計る溝状の土坑で、上位床面で構築されていた。SX02の北西部に所在し斜め方向に走り、中部で折れを持ちそこに段差が生じている。土坑の北西端に大型の石材が据え付けられ、南東方向に向けて小規模な石材が散乱していた。SX02SK22は直径約2mの円形土坑で、上位床面から構築されていた。SX02の北東部に所在し、緩やかな窪みを形作っていた。石材はほとんど確認できなかった。一方、SX02SK23は下位床面から構築されていた。北西から南東方向に伸びる細長い形状で、SX02の中央部に所在する。内部にはぶい黄褐色シルトなどで充填され整地されていた。

SX03 (第 52 図)

SX02東辺上端に接する形で並走する溝状の砂利敷遺構である。北端は調査区外に伸びるが、南端は池の南部付近で収束する。幅は約1.05m、



東西セクション土層説明

- 第1層 10YR5/1 褐色細粒砂 シルト混じる、互多く混じる
 第2層 5Y4/1 灰色細粒砂 粘土・白色シルトブロック混じる
 第3層 N4/1 灰色細粒砂 粘土・ブロック混じる
 第4層 N5/1 灰色細粒砂 粘土混じる、浮環状ブロック若干混じる
 第5層 2.5Y6/2 灰黄色中粒砂
 第6層 2.5Y4/3 オリーブ褐色細粒砂 黒褐色土混じる
 第7層 10YR4/1 褐色細粒砂 粘土混じる
 第8層 2.5Y6/2 灰黄色細粒砂 灰色土混じる
 第9層 5YR3/3 暗赤褐色細粒砂 粘土混じる
 第10層 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂 黒色土ブロック混じる
 第11層 2.5YR4/2 灰褐色細粒砂 3cm以下の砂粒を大粒に含む
 第12層 7.5YR4/3 褐色細粒砂 細粒砂混じる
 第13層 黄土(10YR4/1 黄褐色細粒砂 + 2.5Y6/2 明灰黄色細粒砂)
 第14層 5YR3/1 黄褐色細粒砂 粘土混じる
 第15層 7.5YR2/1 黒色細粒砂 粘土混じる
 第16層 10YR3/2 黒褐色細粒砂 白色シルトブロック多く混じる
 第17層 2.5YR4/4 赤褐色粘土(腐植土)
 第18層 2.5Y4/4 黄灰色細粒砂 粘土混じる、白色シルト粒若干混じる
 第19層 2.5YR3/1 黒色細粒砂 白色シルトブロック多く混じる
 第20層 7.5YR3/2 赤褐色細粒砂 粘土混じる
 第21層 10YR4/1 褐色細粒砂 白色シルトブロック混じる
 第22層 10YR5/1 褐色細粒砂 白色シルト粒混じる
 第23層 7.5YR6/1 褐色粘土
 第24層 黄土(10YR8/1 灰白色シルト + 10YR4/1 褐色細粒砂) 赤褐色土・黒色土混じる
 第25層 5YR/1 灰白色粘土
 第26層 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂 黒褐色土混じる
 第27層 5YR4/6 赤褐色細粒砂 粘土・灰色土混じる
 第28層 10YR5/4 にい・黄褐色細粒砂 粘土・黒色土・白色シルトブロック多く混じる
 第29層 7.5YR4/2 灰褐色シルト 黒色土混じる
 第30層 10YR7/3 にい・黄褐色シルト 粘土混じる
 第31層 2.5YR4/4 褐色細粒砂 下部に酸化部分有り
 第32層 10YR4/4 褐色細粒砂 赤土・黒色土混じる
 第33層 10YR6/1 褐色細粒砂 粘土・赤土・黒色土・黄色土混じる 下部に酸化部分有り
 第34層 10YR6/6 明黄褐色粘土(堆土)
 第35層 2.5YR/4 黄褐色粘土(堆土)
 第36層 N3/1 暗灰色粘土
 第37層 N5/1 灰色細粒砂 炭化物若干含む
 第38層 N4/1 灰色粘土 細粒砂混じる、粘土・炭化物若干含む
 第39層 5Y7/2 灰色中粒砂
 第40層 5Y5/1 灰色細粒砂 粘土混じる
 第41層 N5/1 灰色粘土 細粒砂混じる、白色粘土ブロック若干混じる
 第42層 N5/1 灰色粘土 細粒砂混じる、白色粘土ブロック多く混じる
 第43層 N4/1 灰色粘土 細粒砂混じる、炭化物若干含む
 第44層 浮環 N5/1 灰色 粒子面が
 第45層 浮環 2.5YR/1 灰白色 粒子面が

南北セクション土層説明

- 第1層 10YR5/1 褐色細粒砂 シルト混じる、互多く含む
 第2層 10YR4/2 灰褐色細粒砂 シルト混じる
 第3層 10YR4/1 褐色細粒砂 粘土混じる
 第4層 2.5Y4/1 灰黄色細粒砂 粘土混じる、白色の粘土ブロックを若干含む
 第5層 N5/1 灰色細粒砂 粘土混じる、浮環状ブロック若干混じる
 第6層 N4/1 灰色細粒砂 粘土ブロック混じる
 第7層 5Y7/1 灰白色中粒砂
 第8層 7.5Y7/1 灰白色粘土
 第9層 10YR4/3 にい・黄褐色細粒砂 粘土混じる
 第10層 10YR4/4 褐色細粒砂 粘土混じる
 第11層 10YR6/2 灰褐色細粒砂 灰色土・黄色土・白色シルトブロック混じる
 第12層 7.5YR3/2 褐色細粒砂 黄色土・白色シルトブロック混じる
 第13層 7.5YR3/2 褐色細粒砂 黄色土混じる、白色シルトブロック多く混じる
 第14層 10YR3/2 赤褐色細粒砂 粘土混じる、地土若干含む
 第15層 10YR4/4 褐色細粒砂 赤土・黒色土混じる
 第16層 10YR6/1 褐色細粒砂 粘土・黒色土混じる 下部に酸化部分有り
 第17層 2.5Y5/4 黄褐色細粒砂 灰色土・白色シルトブロック混じる
 第18層 10YR6/1 褐色細粒砂 粘土・黒色土・白色シルトブロック混じる
 第19層 黄土(10YR7/6 明黄褐色細粒砂 + 10YR7/1 灰褐色細粒砂) 黒色土混じる
 第20層 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂 わずかに黒色土混じる
 第21層 10YR5/4 にい・黄褐色細粒砂
 第22層 7.5YR5/8 明褐色細粒砂 粘土混じる、下部に酸化部分有り
 第23層 黄土(10YR8/1 褐色細粒砂 + 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂 + 2.5Y2/1 黒色細粒砂) 粘土・白色シルトブロック混じる
 第24層 黄土(10YR8/1 褐色細粒砂 + 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂 + 2.5Y2/1 黒色細粒砂) 粘土・白色シルトブロック混じる、赤褐色土多く混じる
 第25層 2.5Y5/4 黄褐色細粒砂 灰色土混じる 下部に酸化部分有り
 第26層 10YR4/1 褐色細粒砂 粘土・黒色土・白色シルトブロック多く混じる
 第27層 2.5Y5/3 黄褐色細粒砂 灰色土・黒色土・白色シルトブロック多く混じる
 第28層 10YR4/1 褐色細粒砂 粘土・黒色土・白色シルトブロック混じる
 第29層 10YR3/4 暗褐色細粒砂 粘土・灰色土・赤土・黄色土・白色シルトブロック混じる
 第30層 10YR6/1 褐色細粒砂 粘土混じる 灰色土・黄色土・白色シルトブロック混じる
 第31層 10YR5/2 灰褐色細粒砂 粘土混じる SK262埋土
 第32層 5Y7/2 灰黄色細粒砂
 第33層 7.5Y7/2 灰色細粒砂
 第34層 10YR5/2 灰褐色細粒砂
 第35層 10YR4/1 褐色細粒砂 粘土混じる 埋土層
 第36層 2.5Y7/1 灰白色細粒砂 炭化物混じる
 第37層 2.5Y6/1 灰黄色細粒砂 粘土混じる
 第38層 2.5Y6/1 灰黄色粘土 粘土混じる
 第39層 10YR7/2 にい・黄褐色粘土
 第40層 7.5YR7/1 明褐色浮環
 第41層 10YR7/1 灰白色粘土 細粒砂混じる
 第42層 2.5Y7/2 灰黄色シルト 白色シルトブロック混じる
 第43層 2.5Y7/3 灰色粘土
 第44層 2.5Y7/2 灰黄色粘土
 第45層 2.5Y6/1 灰黄色細粒砂 シルト混じる
 第46層 10YR8/1 灰白色粘土 褐色土ブロック混じる
 第47層 10YR3/1 黄褐色細粒砂 粘土混じる
 第48層 2.5Y6/1 灰黄色浮環
 第49層 2.5YR/1 灰白色粘土
 第50層 10YR6/2 灰褐色粘土 細粒砂混じる
 第51層 10YR5/1 褐色粘土 白色シルト混じる
 第52層 7.5YR6/1 褐色粘土 黄褐色土ブロック混じる
 第53層 7.5YR4/1 褐色粘土 細粒砂混じる
 第54層 10YR3/1 黄褐色粘土 細粒砂・白色シルトブロック混じる SD14埋土

第51図 池SX02土層断面図

深さは北壁土層断面で65cmを測る溝であり、内部は砂利で充填されていた。この結果、遺構検出状態では幅約1mの砂利敷帯が南北に伸びる状態であった。SX03は部分的にSX02を切る地点が存在するために池とは関係が無い可能性が残されるが、ここでは遺構の配置からみて一連の遺構と考えておきたい。

石材

石材の同定結果については第4章第4節で詳述するが、ここでは本来据え付けられていた石材の配色と玉石の種類と規模についてまとめておきたい。

本来据え付けられていた石材の配色については、肝心の石材の大多数が抜き取られているために全容を解明することはできない。しかし限られた資料からでも一定の傾向を知ることができる。導水路や床面に埋め込まれた石材は緑色片岩、東張り出し部に埋め込まれた石材は黒色の砂岩が使用されていた。南壁の巨石は砂岩であったが、抜き取られた石材が同様であったか否かは疑問である。階段状遺構前の石材は単独で据えられていたため、黄色チャートが意図的に選択されていたと推測される。

一方、玉石の種類と規模については、採取さ

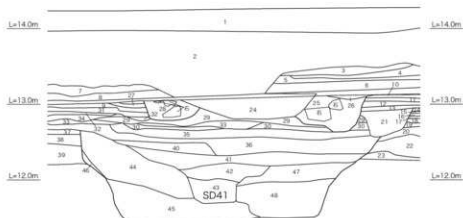
れた場所によって傾向が異なっている。床面は4地区に分割し、その他に東張り出し部表面、SX03、集石5箇所、玉石類が多く出土した池内土坑3箇所をサンプルとして分析した(第54図)。その結果が第5表である。

これを見ると、床面では径3～5cm程度の重円礫チャートが多用されている。東張り出し部表面では径1～2cm程度の円礫珪質岩が多用されている。SX03では様々な大きさの様々な石種の玉石が用いられていた。角礫が多いことも特徴である。集石や池内土坑では大きさが多少ばらつく他は床面の玉石と同様な状況であった。

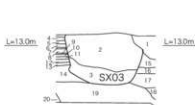
以上の結果から、石材は使用された部位によって意図的に選択されたことが判明した。

まとめ

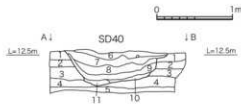
以上が池状遺構SX02の詳細である。全体として石の大部分が抜き取られるなど本来の形状をとどめていないが、その痕跡からは池構築が入念に行われていた雰囲気を読み取ることができた。江戸時代の庭園史を語る上で貴重な資料になることは間違いないだろう。なお、この結果から想定される本来あった池の形状(最終段階：上位床面の時期)については第5章第4節で考察するので、そちらも参照されたい。



- 第35層 10YR3/3 暗褐色細粒砂 黄色土ブロック混じる、粘土粒・赤色土粒少量混じる
 第36層 10YR4/1 褐色細粒砂 黒色土混じる、黄色土ブロック・炭化物・小石少量混じる
 第37層 10YR4/3 にぶい・黄褐色細粒砂 暗褐色土・粘土混じる、赤黄土・炭化物少量混じる
 第38層 10YR6/4 にぶい・黄褐色細粒砂 粘土・赤褐色土粒混じる
 第39層 10YR3/1 黒褐色細粒砂 褐色土ブロック混じる、小石少量混じる
 第40層 10YR3/1 黒褐色細粒砂 粘土・赤土粒・炭化物混じる
 第41層 10YR5/4 にぶい・黄褐色細粒砂 赤褐色土・黒褐色土ブロック・小石混じる
 第42層 2.5Y4/2 暗灰色細粒砂 にぶい・黄褐色土にぶい・黄褐色土ブロック・礫混じる
 第43層 10YR3/1 黒褐色細粒砂 粘土・黄褐色土粒・赤褐色土・炭化物混じる
 第44層 10YR3/3 暗褐色細粒砂 粘土ブロック・赤褐色土ブロックにぶい・赤褐色土混じる
 第45層 10YR2/2 黒褐色シルト 赤褐色シルトブロック・黄褐色土・粘土粒・炭化物混じる
 第46層 10YR2/3 黒褐色細粒砂 暗褐色土粒・粘土粒混じる
 第47層 10YR4/4 褐色細粒砂 明褐色土ブロック・黒褐色土ブロック・粘土・黄土混じる
 第48層 10YR5/4 にぶい・黄褐色細粒砂 にぶい・黄褐色粘土・黒褐色土・黄褐色土ブロック・黄土ブロック混じる



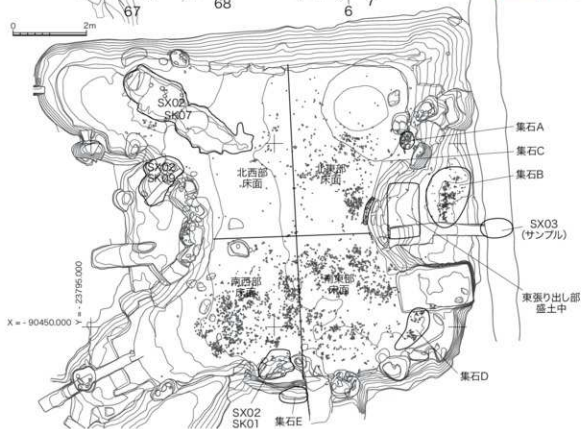
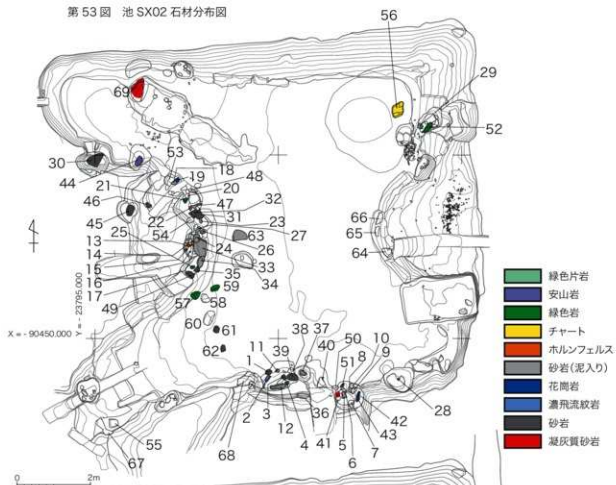
- 第1層 2.5Y4/1 黄灰色中粒砂 炭化物・小石・白色シルトブロック多く混じる
 第2層 10YR4/1 褐色細粒砂 炭化物混じる、小石多く混じる
 第3層 10YR4/2 灰黄褐色中粒砂 炭化物混じる、小石かなり多く混じる
 第4層 7.5YR4/6 褐色細粒砂 10YR4/4 褐色土・小石混じる
 第5層 10YR3/3 暗褐色細粒砂 黄色土ブロック少量混じる、小石混じる
 第6層 10YR3/1 黒褐色細粒砂 粘土・赤土粒・炭化物・小石・瓦片少量混じる
 第7層 10YR4/2 灰黄褐色中粒砂 黒褐色土混じる、褐色土粒少量混じる
 第8層 10YR3/2 暗褐色細粒砂 赤褐色土・黄褐色土混じる
 第9層 10YR4/4 褐色細粒砂 粘土・黄褐色土粒混じる
 第10層 10YR8/2 灰白色シルト 粘土層 褐色土粒混じる
 第11層 10YR3/3 暗褐色細粒砂 炭化物・小石少量混じる
 第12層 10YR8/1 灰白色シルト 粘土層 浅黄褐色土混じる、黒色土ブロック少量混じる
 第13層 10YR5/4 にぶい・黄褐色細粒砂 粘土ブロック混じる、黒褐色土ブロック少量混じる
 第14層 10YR4/3 にぶい・黄褐色細粒砂 黒褐色土混じる
 第15層 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂 炭化物混じる
 第16層 10YR3/2 暗褐色細粒砂 褐色土・黒色土ブロック・黄土・炭化物混じる
 第17層 10YR3/2 暗褐色細粒砂 粘土・黄褐色シルトブロック・黒色土・黄土・炭化物混じる
 第18層 10YR3/1 黒褐色細粒砂 粘土・炭化物混じる、黄土わずかに混じる
 第19層 10YR3/1 黒褐色細粒砂 粘土混じる
 第20層 10YR3/4 暗褐色細粒砂 にぶい・黄褐色土・粘土混じる、炭化物少量混じる



- 第1層 10YR3/1 黒褐色細粒砂 粘土混じる
 第2層 10YR3/2 黒褐色細粒砂 粘土混じる
 第3層 10YR4/3 にぶい・黄褐色粘土
 第4層 2.5Y5/4 暗灰褐色粘土
 第5層 2.5Y6/6 暗黄褐色粘土
 第6層 10YR4/2 灰黄褐色細粒砂 中粒砂混じる
 第7層 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂 シルト混じる
 第8層 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂 褐色土粒・粘土混じる
 第9層 10YR3/2 黒褐色細粒砂 シルト混じる
 第10層 2.5Y4/1 黄灰色細粒砂
 第11層 2.5Y4/2 暗灰黄色細粒砂 シルト混じる

第 52 図 池関運施設 SD41・SX03・SD40 土層断面図

第 53 図 池 SX02 石材分布図

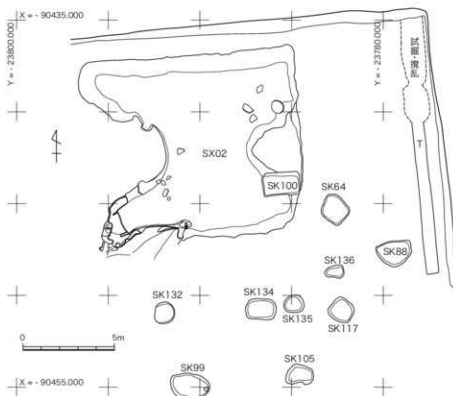


第 54 図 池 SX02 玉石区分図

地点	アブライト	チャート	ホルンフェルス	安山岩	珪質岩	砂岩	濃飛流紋岩	緑色岩	緑色片岩	その他	合計
床面(北西部)		80	6			1	2		1	8	99
床面(北東部)	21	450	30	2	6	11	7	6		20	553
床面(南西部)		287									287
床面(南東部)	18	361	23	2		2	3	1	5	22	437
集石A	3	65	14		16	1	1				100
集石B		17			509			2		2	530
集石C	9	124	6	4	2	4	1	1		2	153
集石D	188	15	8			12		1		4	228
集石E	1	46	26		13	2	1	4	10	12	115
東張出部盛土	7	117	34		5	15	4	6	9	14	211
SX02SK01		12			1	2		2		8	25
SX02SK07		24		4			2	6	1	6	43
SX02SK09		25	7		2	4		7	3	10	58
SX03		612				4	1	1	19		637

地点	~1g	1~2g	2~3g	3~4g	4~5g	5~10g	10~15g	15~20g	20~25g	25~30g	30~35g	35~40g	40~45g	45~50g	50g~	合計
床面(北西部)			2			11	4	19	6	19	6	11	3	9	9	99
床面(北東部)	2	2			16	36	36	85	42	86	29	56	31	39	93	553
床面(南西部)					7	36	1	79	4	54	2	47	1	31	25	287
床面(南東部)		3			9	19	49	43	37	53	30	52	34	31	77	437
集石A	4		5		6	1	1	5	2	7		3	2	10	54	100
集石B	156	110	100	49	89	24	1		1							530
集石C					9	5	7	15	11	15	12	14	4	7	54	153
集石D						2	2	2	1		1	4	2	5	209	228
集石E		1			9	17	4	14	2	6	3	8	1	2	48	115
東張出部盛土					14	12	8	13	12	14	4	13	3	13	105	211
SX02SK01					2	6	2	3	1				1	2	8	25
SX02SK07	8	8	1		9	8			2	2	3	1			1	43
SX02SK09					9	14	7	5	3	3	3	1	1	2	10	58
SX03	179	123	67	17	137	53	22	11	2	6	4	5		5	6	637

第5表 SX02出土玉石組成表



第55図 池SX02周辺土坑遺構図

第9項 埋桶遺構

C期に属する埋桶遺構と考えられるものは3基確認された。埋桶遺構とは底板を有する結物桶を埋設した遺構を指すが、今回確認されたものは、木製結物桶は遺存しなかった。土層断面などでかろうじて痕跡を認めることができたに過ぎない。

SK145 (第56図)

調査区東北端で検出された埋桶遺構で、ほぼ円形の平面プランを持つ。結物桶は遺存しないが、平面および断面で、その形状を確認することができた。結物桶は円筒形で直径約68cm、深さ213cmを測る。結物が積み重ねられていたか否かは特定できないが、底板の痕跡は認めることができた。出土物から見てC-1期(17世紀前半)に属するものである。

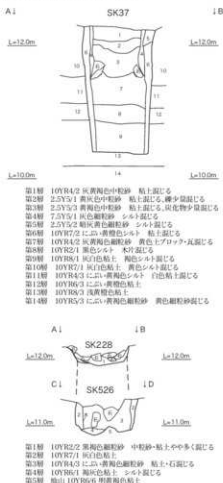


SK37 (第56図)

調査区南部で確認された埋桶遺構である。直径110cm、深さ185cmの円筒形の桶形で、ほぼ、それにぴったり重なるように結物桶が配置されたものと考えられる。中位のレベルで石材が円形に配置されていた。内部からはヒメイバエのサナギなどが多数認められ、埋桶内に何らかの発酵物が存在していた可能性がある。(第4章第2節参照)。出土遺物などからみてC-3期(18世紀)に位置づけられよう。

SK228 (第56図)

調査区中央部に位置する埋桶遺構で直径約75cm、深さ130cmを測る。内部には、多量の石材が収蔵されていた。最下部で結物桶の痕跡を見出すことができた。C期に属する遺構と考えられるが詳細は不明である。



第56図 埋桶遺構 SK145・SK37・SK228 遺構図

第10項 地下室

今回の調査で確認されたC期に属する地下室は2基存在する。

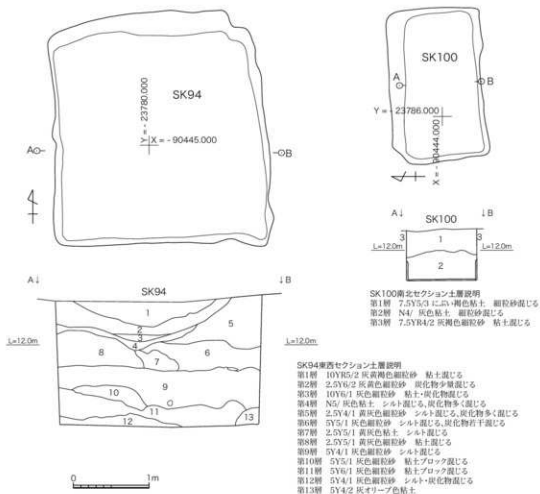
SK94 (第57図)

調査区北半で検出された地下室である。3.05m × 2.86mのほぼ正方形の平面形を持ち、深さ1.7mを測る。北面の一部が崩落していたものの、壁面は垂直に掘り下げられており、極めて規格的に製作された遺構である。壁面や床面には土坑などの他の施設は全く確認されなかった。埋土は灰色または黄灰色細粒砂の斑土が主体で、廃絶時に一気に埋め立てられたものと思われる。中からは肥前窯産磁器碗や土師器皿などが出土していた。これ

らの遺物は大半が17世紀末から18世紀初頭に位置づけられるが、廃絶した段階は遺物の最新資料からみて18世紀後葉と推定される。C-3期に属する遺構といえる。

SK100 (第57図)

調査区北半で検出された地下室である。2.05m × 1.20mの長方形の平面形を持ち、深さ0.93mを測る。池状遺構SX02の軟弱な埋土を掘り下げられたもので、土壁の崩落を防ぐため板目板材で護岸が施されていた。板材は遺存状態があまり良好ではなかったが、特別な組加工を持たず板を直方体に組み合わせるだけの簡単な構造であった。埋土は下層が灰色粘土、上層かにぶい褐色粘土で



第57図 地下室SK94・SK100遺構図

充填され、一気に廃絶されたものと推測される。中からはあまり遺物が出土しなかったが、SX02との関係からC-4期（19世紀前半）の遺構と考えられる。

第11項 土坑

今回の調査で確認されたC期に属する土坑は多数存在するが、ここでは主要なものについて個別に記述する。

SK01（第59図）

調査区東部北平で検出された大型土坑である。複数の土坑が重複しており、SK47とSK67を切っている。SK01は中央部で直線的に走る土壁状の高まりがあり、SK01AとSK01Bに区分される。埋土からみると西接するSK63と一連の遺構と思われる。

SK01AはSK01東側部分で、規模は5.90m以上×2.35m、深さ1.37mを測る。南端部で巨石が出土した。SK147を切るためにB期の遺物が大量に出土したが、実際にはC-3期に属すると考えられる。

SK01BはSK01の西側部分で規模は6.92m以上×4.87m、深さ2.12mを測る。SK01Aが埋没した後に掘削し直された土坑で、SK01Aよりも深く掘り込まれていた。底部は平坦面を形成し下半は黒色粘土が堆積していた。遺物は最下層から大量の材木片が、その上層からは礫、切石、白色粘土および瓦類が大量に出土した。陶磁器類は比較的少ないことも考え合わせると、建築に伴う廃材が大量に投棄されたものと考えられる。SK01の掘削そのものも粘土などを採掘するための可能性も考えられる。遺物からC-3期に属すると考えられる。

SK01に西接するSK63も、規模が2.81m×1.17m以上、深さ2.15mと大型な土坑である。SK01BとSK63は埋土が連動した形で堆積しており、両者が同時に存在して埋め立てられたと思

われる。C-3期に属する。

SK04・SK19（第61図）

SK04は調査区東部で検出された1.70m×1.62m、深さ0.66mを測る土坑である。SK04はSK19を掘り直した遺構と推測される。出土した遺物からSK04はC-3期、SK19はC-2期に属すると考えられる。

SK20

調査区中央部で確認された円形土坑で、規模は1.93m×0.78m以上、深さ0.26mを測る。内部から長さ10cm弱の白色の石材が多数出土した。石材は規模や形状が揃っており、意図的に集められたものと思われる。遺物からみてC-3期に属すると思われる。

SK26

調査区中央部に所在する土坑で、北半部は調査区外に伸びる。土坑内から砂岩の切石が4点出土した。C-3期に属すると考えられる。

SK60

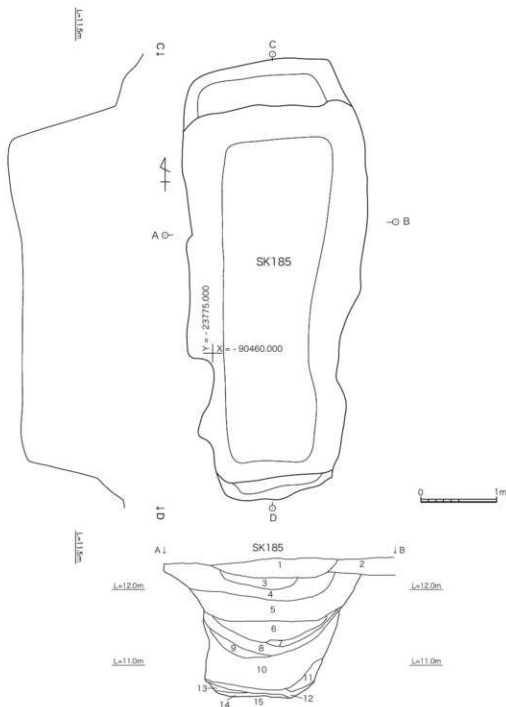
調査区中央部にある東西に長い隅丸長方形土坑である。規模は5.14m×2.20m、深さ0.19mを測る。土坑からは常滑窯産陶器類などの遺物が比較的多数出土しており、廃棄土坑の可能性が高い。その遺物からみてC-3期と考えられる。

SK93

調査区中央部で検出された直径約0.53m、深さ0.30mの土坑である。土坑の中央には瀬戸美濃窯産陶器筒型容器（1590）が正位置に埋設された状態で出土した。容器内部には最下部に黒色石材が2個（1592、1593）、その上位に1590に伴う陶器蓋（1591）が存在した。容器1590の口縁部が欠損していることから、本来は黒色石材を入れた後に蓋をして埋置されていたと考えられる。C-3期に位置づけられる。

SK127

調査区中央部で確認された不定形な土坑で、規模は1.70×1.30m、深さ0.16mを測る。小規模



SK185東西セクション土層説明

- 第1層 10YR4/4 褐色細粒砂
 第2層 10YR3/4 暗褐色極細粒砂 粘土少し混じる
 第3層 7.5YR2/3 暗褐色極細粒砂 粘土少し混じる
 第4層 7.5YR2/3 暗褐色極細粒砂 粘土混じる、炭化物少し混じる
 第5層 10YR2/3 黒褐色極細粒砂 炭化物やや多く混じる、粘土少し混じる、粘土・白色シルトブロック混じる
 第6層 10YR4/1 黒灰色極細粒砂 粘土多く混じる、シルト・炭化物・粘土混じる
 第7層 10YR3/1 黒褐色極細粒砂 シルト・粘土多く混じる、炭化物・粘土混じる
 第8層 2.5Y3/1 黒褐色シルト 粘土・中粒砂混じる、炭化物・粘土少し混じる
 第9層 10YR3/2 黒褐色シルト 粘土・中粒砂混じる、炭化物多く混じる
 第10層 10YR3/1 黒褐色粘土 シルト・中粒砂混じる、炭化物多く混じる
 第11層 10YR3/1 黒褐色粘土 シルト・粘土・礫混じる、黄色土粒少し混じる、白色土多く混じる
 第12層 7.5YR3/1 黒褐色粘土 炭化物少し混じる、シルト・黄色土粒・礫・白色土混じる
 第13層 10YR3/1 黒褐色粘土 黄色土粒混じる
 第14層 10YR4/2 灰黄褐色粘土 シルト・灰色粘土ブロック混じる
 第15層 10YR5/6 黄褐色粘土(畑土)

第58図 土坑SK185遺構図

な廃棄土坑と思われる。遺物から C-3 期に位置づけられよう。

SK156

調査区中央部で検出された方形の土坑である。規模は 3.15m × 2.99m で、深さは 0.12m と浅い。中から古い時代の遺物片を大量に含む陶磁器類が出土しており、時期は C-2 期に属する。

SK185 (第 58 図)

調査区南部中央に所在する隅丸長方形土坑で規模は 4.89m × 2.35m、深さ 1.83m と大きい。北部はテラス状の低い段差がある。埋土からみて土坑は一気に埋め立てられていた。規模が大きく深いことから地下室の可能性が考えられるが、壁面が直立する形で維持されていなかったことから、今回は土坑として報告した。出土した遺物から

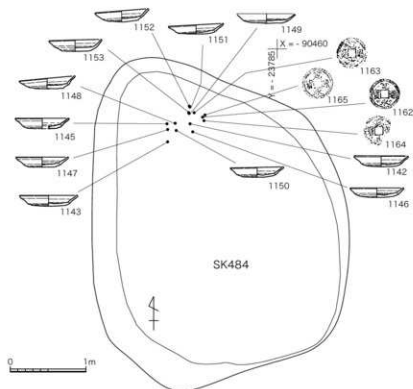
C-1 期に属すると考えられる。

SK223

調査区北半で検出された土坑である。規模は 2.20m × 1.05m、深さ 0.30m を測る。出土した遺物から C-1 期に属すると考えられる。

SK484 (第 60 図)

調査区北半で検出された土坑で第 3 面で検出された。第 1 面で検出された SK40 と同一と思われる。規模は 4.30m × 3.90m、深さ 0.25m を測り、遺構の北半部から土師器皿と銭貨 6 枚が出土した。寛永通宝が 6 枚出土したことから墓坑に伴う六道銭の可能性が考えられるが、遺構の形状はそれほど深くない。ここでは何らかの祭祀遺構との評価に留めておく。出土遺物から C-1 期に属する。



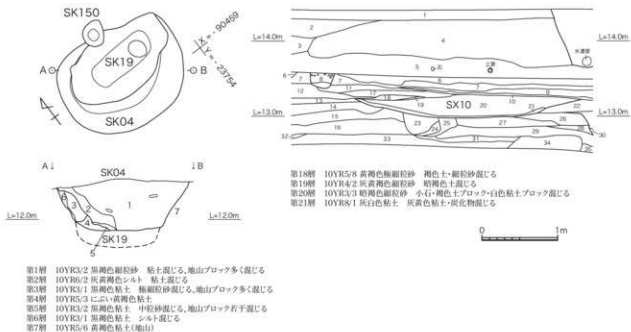
第 60 図 土坑 SK484 遺物出土状態図

第 12 項 その他の遺構

SX10 (第 61 図)

調査区南壁土層断面のみで検出された土坑で、規模は幅が 2.95m、深さ 0.30m を測る。浅い皿型の土坑で、最下層は灰白色粘土で覆われており

貯水施設と考えられる。池状遺構の末端部分を検出した可能性が考えられる。出土遺物がないが、C-3 期の遺構面から掘削されていることから C-3 ~ 4 期に位置づけられる。



第 61 図 土坑 SK04・SX10 遺構面

第5節 D期の遺構

第1項 概要

D期は明治時代以降の段階で、名古屋城三の丸城では武家屋敷が解体され、代わりに陸軍第三師団や官庁の諸施設が設置された。この段階の遺構は礎石建物跡と井戸・土坑などがある。現地地表下約1.2mにある褐灰色砂の硬化面が陸軍東練兵場に相当する地面と推測され、D期の遺構はこの硬化面上に構築されたものと考えられる。しかし、調査当初にはD期を調査の対象としていなかったため、多くの遺構を見逃している可能性が高い。実際に、SB01以外の遺構は硬化面から約30cm下げた遺構検出面（第1面）で確認された。

この時期は、さらに3段階に細分が可能である。

D-1期：1870年代～1943年頃。遺構や遺物をほとんど確認することができなかった時期である。陸軍東練兵場が構築された段階に相当する。

D-2期：1943年頃～1945年。遺物の多くはこの段階に属すると思われる。陸軍名古屋病院第二分院が急造された段階に相当する。

D-3期：1945年以降。太平洋戦争終戦後、当地はGHQの管轄となり、その後名古屋国立病院が設立され、現在に至る。

以下、種別に遺構について記述する。

第2項 掘立柱建物跡

D期に属する掘立柱建物跡は1棟存在する。

SB25（第62図）

調査区の北部で確認された2間以上×2間？の掘立柱建物跡で、東部は調査区外に展開すると推測される。建物規模は5.5m以上×7.5mである。柱穴には根石を持つもの（SK55、SK68、SK69）があるが、正確な構造は不明である。柱穴の出土遺物からD-2期（1943～1945年）と推定される。簡便な施設の基礎構造と思われる。

第3項 礎石建物跡

D期に属する礎石建物跡は1棟存在する。

SB01（第63～65図）

調査区の南西部で確認された28間以上×8間の礎石建物跡で、西部は調査区外に展開する可能性がある。建物規模は26.6m以上×7.2mである。礎石は陸軍東練兵場に相当する現地地表下約1.2mにある褐灰色砂の硬化面に直接配置され、硬化面には柱穴部分が窪んだ圧痕が残存した。礎石は全部で85箇所残存し、礎石の痕跡を示す小規模な窪みは40箇所確認された。礎石は89.75cmの方眼上に配置されたものと考えられ、これから位置がずれる礎石または痕跡は13箇所しかない（第64図）。方眼上で欠落する礎石も多数存在しており、特に北から第2列目の礎石は擾乱が存在したことを考慮しても少ない。礎石は直径が20～30cmの円形で扁平な自然石が使用されていた。SB01南東部では硬化面上に多量の木屑が散乱しており、建物建設中に床下の廃材を十分に清掃していなかった可能性が考えられる。建物跡に伴う遺物は確認できなかったが、陸軍東練兵場と思われる硬化面上に存在することからD-2期（1943～1945年）と考察される。

「第三師団司令部周辺軍事施設配置図」（第66図）によれば、D-2期（1943～1945年）の調査地点は第二名古屋陸軍病院の北部に立ち並ぶ病室に相当しており、検出されたSB01はこの病室の一つと推測される。第二名古屋陸軍病院の病室そのものの図面ではないが、名古屋衛戍病院の病棟平面図（第67図）を参考にすると、SB01の26.6m×7.2mという規模はちょうどその病室部分の規模に相当している。SB01の周囲に廊下が巡っていたと仮定すればSB01は同様の規模の病棟と言えよう。ただし、注意しておきたい点は、礎石建物跡とはいえ非常に脆弱な構造を呈してお

名古屋城三の丸遺跡 VII

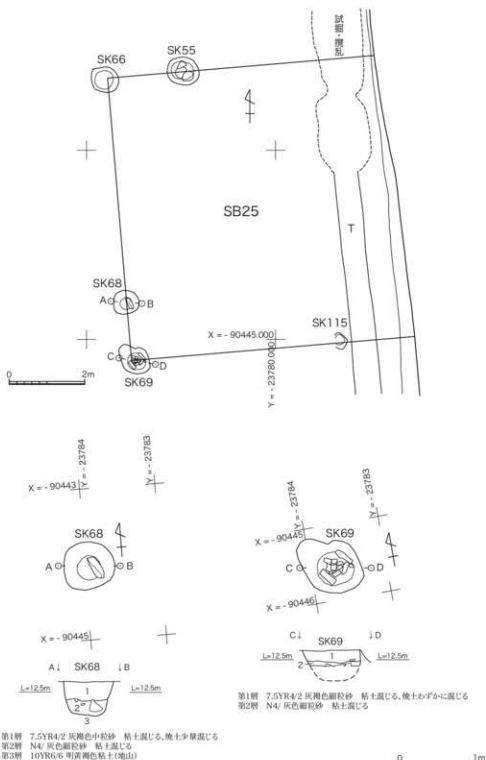
り、十分な資材が用いられず急造された様相が窺い知れる。放置しておくとも虫が湧きかねない床下の廃材をそのままにしていたのも、慌しく建造された状況を示すものとして興味深い。

第4項 井戸

D期に属する井戸は1基存在する。

SK114

調査区中央部で確認された円形漆喰式井戸で



第62図 掘立柱建物跡SB25遺構図

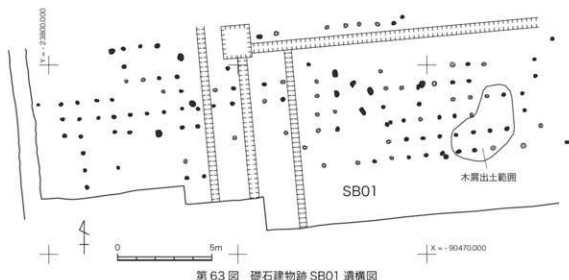
あるが、下部の構造までは確認できなかった。直径約 1.6 m の円筒形に作られた厚さ約 15cm の漆喰壁を井戸側としたものである。掘削は漆喰側とほぼ同様の規模であり、裏込め土はほとんど確認されなかった。薬瓶などの出土遺物から D-2 期 (1943 ~ 1945 年) に位置づけられる。

第 5 項 土坑

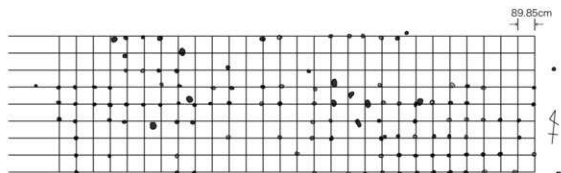
D 期に属すると推測される土坑は数基存在する。ここでは主要な遺構を紹介することとした。

SK24

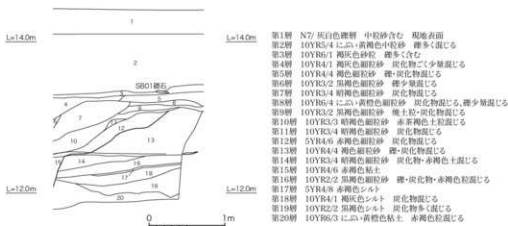
調査区の中央部にある不定形な土坑で、深さは 0.20 m を測る。眼鏡レンズなどの出土遺物があ



第 63 図 礎石建物跡 SB01 遺構図



第 64 図 礎石建物跡 SB01 平面復元図



第 65 図 礎石建物跡 SB01 土層断面図

り、D-2期と推測される。

SK25

調査区中央部で検出された不定形な土坑で、内部から鉄製品や視力調整用レンズなどが出土した。D-2期に位置づけられる。

SK56

調査区北東部で確認された円形土坑で、規模は1.13m×0.96m、深さは0.45mを測る。内部から、形状は特定できないが木製容器の痕跡が確認され、遺物として螺番などが存在する。また革靴や碇子、ボタンなどが出土した。遺物からD-2期(1943～1945年)に位置づけられ、革靴などを容器に入れて埋納したものと推測される。

SK96

調査区西部で検出された長方形土坑で、規模は1.46m×0.78m、深さ0.70mを測る。遺構内はほとんど土砂が無く、大量の陶磁器やガラス瓶が出土した。これらは土圧で破損したものを以外は大半が完全な形状を保っていた。土坑壁を護岸する構造などは確認されなかったが、遺構の形状から

みて木製箱などに物品を取納し再利用することを前提に埋置されたものと推測される。出土遺物からD-2期(1943～1945年)に位置づけられる。

SK107 (第68図)

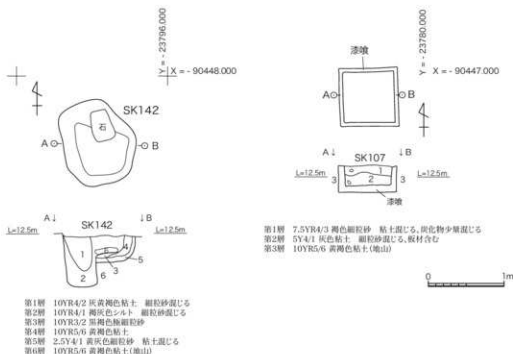
調査区の中央部で確認された一辺0.84m方形土坑で、深さは0.36mを測る。土坑は箱型に厚さ約10cmの漆喰壁に覆われており、拵状遺構と考えられる。下層埋土は灰色粘土であった。内部には口字状に組まれた木材が埋置されていた。状況から見てD-2期と考えられる。

SK142 (第68図)

調査区西部に所在する円形土坑で、規模は1.11m×0.99mを測る。内部は段差が設けられ、高い部分に根石が存在する。深い部分に本来は柱が建っていた可能性が考えられる。出土遺物からD-1期と推測される。

SK362

調査区の西部中央で確認された直径0.59m円形土坑で、内部に根石が配置される。木製品などが出土した。D-1期に位置づけられよう。



第68図 土坑 SK142・SK107 遺構図

第3章 遺物

第1節 遺物の概要

今回の調査で名古屋城三の丸遺跡から出土した遺物は全部で、27ℓ入りコンテナで約350箱を数える。接合作業を実施する前の総破片数は74,489点となっている。その内訳は、陶磁器・土器類、石製品、木製品、金属製品、ガラス製品、革製品など多岐多様である。所属する時間も古墳時代から現代に至るまで幅広く存在している。

遺物の採取方法は、SK308東西ベルトの土壌について1mmメッシュの篩別作業を実施した他は、全て掘削作業時に注意して遺物を採取する方法によった。遺物は厚く堆積する表土や包含層からも多くの資料が出土したが、大部分は遺構内埋土から出土したものであり、中には人為的一括して埋納あるいは廃棄されたと推測できるものが存在する。一方で比較的新しい時期の遺構内からは遺構の埋没時期よりも古い時期の遺物が多量に混在する事例も多く、また遺構の重複が激しく掘り間違いや掘り残しなどによる新しい時期の遺物が混入する事例もあったと考えられる。こうした事情があることから、出土遺物が少ない遺構出土資料においてはその時期を特定することが難しい場合が少なくない。一部を除き、遺構出土資料が必ずしも良好な一括資料とは言いつけないことをあらかじめ断っておきたい。

さて、遺物が材質と時期において多様性が存在していることから、ここでは時期を遺構の項で区分した4期ごとにまとめ、遺構出土資料を基準にして記述を進めていきたい。時期区分は繰り返し記述すると下記のとおりである。

A期：古墳時代中期～平安時代（5世紀～12世紀）

B期：鎌倉時代～戦国時代（13世紀～16世紀）

C期：江戸時代（17世紀～19世紀中頃）

D期：明治時代～昭和時代前半（19世紀後半～20世紀前半）

なお、遺物については城ヶ谷和広、藤澤良祐、中野晴久、仲野泰裕に鑑定いただいている。遺物の編年については次の文献を参考にしている。

斉藤孝正他編 1995『須置器集成図録 第3巻 東日本Ⅰ』雄山閣出版

藤澤良祐 1994『山茶碗研究の現状と課題』『研究紀要 第3号』三重県埋蔵文化財センター

赤羽一郎・中野晴久 1994「生産地における編年」『中世常滑窯をおって』資料集 日本福祉大学知多半島総合研究所

藤澤良祐 1991「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年」『研究紀要』X 瀬戸市歴史民俗資料館

北村和宏 1996「尾張平野における鎌倉・室町時代の煮沸具の編年」『年報 平成7年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター

鈴木正貴 1996「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕 そのデザイン』東海考古学フォーラム

藤澤良祐 2002「瀬戸・美濃大窯の再検討」『研究紀要 第10輯』（財）瀬戸市埋蔵文化財センター

藤澤良祐編 1998「瀬戸市史陶磁史篇六」

九州近世陶磁学会 2000『九州近世陶磁学会10周年記念 九州陶磁の編年』

金子健一 1996「尾張・三河のホウロウ」『鍋と甕 そのデザイン』東海考古学フォーラム

種 別	内 訳				その他	合計
須恵器	杯身 840	杯蓋 747	高杯 286	袋物 1567	8494	11934
古式土師器	甕 1899	高杯 31			7200	9130
灰軸陶器	碗 1852	皿 476			528	2856
山茶碗	尾張型碗 1700	尾張型皿 358	尾張型鉢 75		1291	3424
常滑	中世 351	近世真焼 500	近世赤物 842		0	1693
戦国陶器	瀬戸美濃 1534				0	1534
中世土師器	皿 6059	鍋釜 1764			74	7897
輸入陶磁器	青磁 37	白磁 17	青花 49		0	103
近世陶器	瀬戸美濃 2013	肥前 184	京、信楽 127		54	2378
近世磁器	肥前 553	関西系 48	瀬戸 3		35	639
近世土師器	416				0	416
瓦器	34				0	34
近代	陶器 223	磁器 416	ガラス器 420		0	1059
瓦	平瓦 16847	丸瓦 2327	軒瓦 225	古代 3	531	19933
石材	自然石 6001	玉石 1875	湖石 326	製品 172	0	8374
金属	製品 1875	関連資料 34			0	1909
木材	製品 62	加工材 670			0	732
その他不明					444	444
総合計						74489

第 6 表 出土遺物組成表（接合前破片数）

		名古屋城三の丸遺跡 (御屋形地点)の時期区分		土師器皿	土師器銅類		
	猿投窯				1期1段階 1期2段階	400年	
第I期	第1小期 (+)			A-1期	1期3段階		
	第2小期 (H-111)						
	第3小期 (H-48)						
	第4小期 (H-2)						
	第5小期 (H-11)			A-2期	1期4段階	500年	
第II期	第1小期 (H-61)						
	第2小期 (+)						
	第3小期 (H-44)			A-3期	1期5段階	600年	
第III期	第1小期 (H-50)						
	第2小期 (I-17)				1期6段階	700年	
	第3小期 (I-41)			A-4期			
	第4小期 (C-2)				1期7段階		
第IV期	第1小期 (I-25)						
	第2小期 (NN-32)						
	第3小期 (O-10)					800年	
	第4小期 (IG-78)						
第V期	第1小期 (K-14)			A-5期	1期8段階		
	第2小期 (K-90)					900年	
第VI期	第1小期 (O-53)						
	第2小期 (H-72)			A-6期 (B-0期)	1期9段階	1000年	
	第3小期 (百代寺)					1100年	
第VII期	第1型式	瀬戸窯					
	第2型式	第3型式					
		第4型式	瀬戸美濃窯				
		第5型式	古瀬戸前I期				
		第6型式	前II期				
		第7型式	前III期				
		第8型式	前IV期		B-1期	1期1段階 2期1段階	1200年
			中I期				
			中II期				
		第9型式	中III期				
		中IV期		B-2期	1期2段階 2期2段階		
	第10型式	後I期					
		後II期				1400年	
		後III期					
	第11型式	後IV期古		B-3期	1期3段階 3期1段階		
	第12型式	後IV期新			3期2段階		
		大窯 第1段階		B-4期	2期1段階 3期3段階	1500年	
		第2段階					
		第3段階		B-5期			
		第4段階					
	登案 第1小期			C-1期	2期3段階 4期1段階	1600年	
	第2小期						
	第3小期				2期4段階		
	第4小期			C-2期	2期5段階 4期2段階	1700年	
	第5小期				3期1段階		
	第6小期						
	第7小期			C-3期	3期2段階 4期3段階		
	第8小期				3期3段階		
	第9小期					1800年	
	第10小期			C-4期	3期4段階		
	第11小期						
				D-1期		1900年	
				D-2期			

第7表 時期区分対照表

第2節 A期の遺物

A期は古墳時代中期～平安時代（5世紀～12世紀）の段階である。遺物には須恵器・灰陶器・土師器などの焼物類の他、石製品なども存在する。須恵器はほとんど全て猿投窯系須恵器である。

第1項 SK308出土遺物

（第69～71図1～70）

SK308からは土師器小片734点、須恵器1211点など1952点の遺物が出土した。この中には中世の遺物が混入していた。須恵器には杯蓋（1～17）、杯身（18～29）、はそう（広口有孔壺30）、高杯（31～38）、広口壺（39・46）、甌または鉢（47～51）など多様な器種が存在する。全て猿投窯系須恵器で大半は東山44号窯式期（H-44）に属し、一部に東山50号窯式期（H-50）に属するものがある。須恵器杯身外面に焼成前刻書が施されたもの（25～27・29・45）がある。土師器には杯類（52）、小型壺（53）、甕（54～64）などがあり、土製品として勾玉（65）、小玉（66～69）がある。土製勾玉や小玉は土壌篩別作業によって発見された遺物であり、本来はさらに多く存在した可能性がある。52は口縁端部が丸められたもので表面は橙色を呈する。甕は口縁端部を積み上げるもの（54・55）と外反するもの（56・57・60）などがある。底部は平底のもの（61・62）と台付のもの（63・64）の両者がある。A-3期に属する資料で7世紀中葉に位置づけられる。

第2項 SB02出土遺物（第72図71～98）

SB02からは土師器325点、須恵器206点など580点の遺物が出土した。この中には中世の遺物など49点が混入していた。須恵器には杯蓋（71～74）、杯身（75～79・81・83・84）、碗（80・82）、壺（87）、甌（96）などがある。多くは高

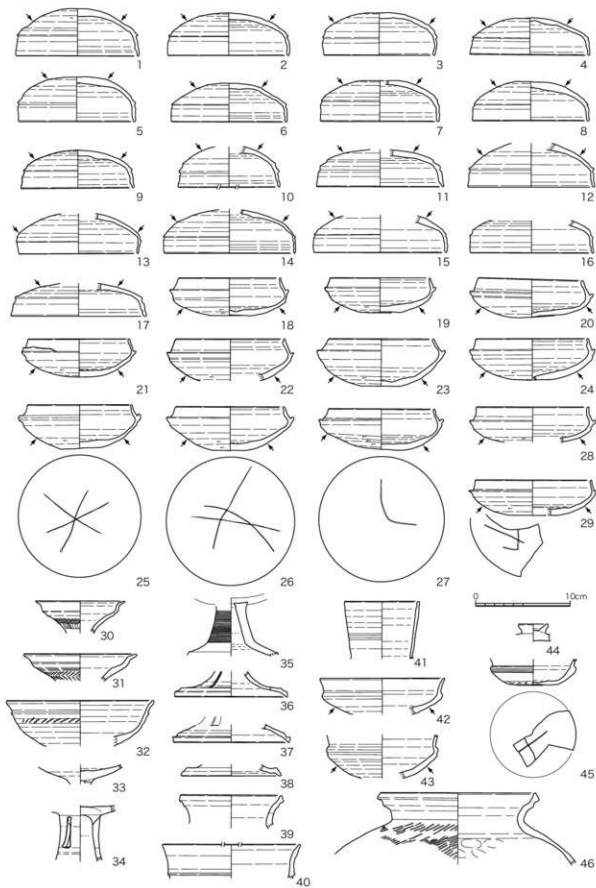
蔵寺2号窯式期（C-2）または折戸10号窯式期（O-10）に属するものである。土師器には甕（88～95・97・98）がある。甕は折り返された口縁部が肥厚し荒いハケ調整が施されるもの（89など）と屈曲した口縁部が直線的に伸びるもの（88・90）などがある。底部は平底のもの（97・98）ばかりである。A-4期後半に属する資料で8世紀後半に位置づけられる。

第3項 SB07出土遺物（第72図99～118）

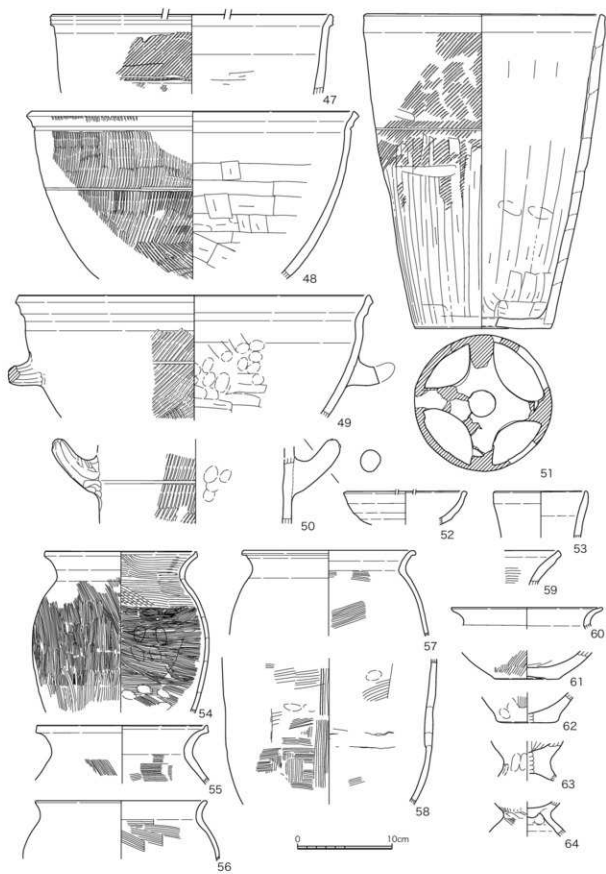
SB07からは土師器280点、須恵器167点など482点の遺物が出土した。この中には中世の遺物など9点が混入していた。須恵器には杯蓋（99～101）、杯身（102～110）、鉢（111）、甌（112）などがある。多くは岩崎17号窯式期（I-17）または高蔵寺2号窯式期（C-2）に属するものである。土師器には甕（113～115・117・118）と製塩土器（116）がある。甕は折り返された口縁端部がやや積み上げられたもの（114など）と屈曲した口縁部が直線的に伸びるもの（117・118）などがある。A-4期前半に属する資料で8世紀前葉に位置づけられる。

第4項 SB09出土遺物（第72図119～120）

SB09からは土師器11点、須恵器10点など22点の遺物が出土した。須恵器には壺蓋（119）、杯身（120）がある。前者は鳴海32号窯式期（NN-32）に属するもので、これを信用すればA-4期中頃（8世紀中葉）に位置づけられてしまう。遺構の重複が激しく遺物が少ないことから切り合い関係を重視して、遺構の時期はA-3期に属すると考えたい。



第 69 図 A 期の遺物実測図 (1) SK308 (1)



第70図 A期の遺物実測図(2) SK308(2)

第5項 SB03 出土遺物

(第73図 121～135)

SB03からは土師器346点、須恵器261点など611点の遺物が出土した。須恵器には杯蓋(121)、杯身(122)、碗(123・124)、はそう(広口有孔壺125)、鉄鉢形鉢(126)、高杯(127～130)、壺(131・132)、甗(133・134)などがある。遺物の時期は多様であるが概ね高蔵寺2号窯式期(C-2)までに収まっている。土師器には甗(135)がある。A-4期前半に属する資料で8世紀前半に位置づけられる。

第6項 SB05 出土遺物

(第73図 136～145)

SB05からは土師器128点、須恵器151点など280点の遺物が出土した。須恵器には杯蓋(136)、杯身(137・138)、高杯(139・140・143・144)、壺(141)、甗または鉢(142)、甗(145)などがある。多くは東山44号窯式期(H-44)に属していることから、A-3期(7世紀前半)に位置づけられる。土師器には図化に耐える資料は存在しなかった。

第7項 SB04 出土遺物

(第73図 146～158)

SB04からは土師器48点、須恵器90点など171点の遺物が出土した。この中には灰軸陶器皿(149)、東濃型山茶碗(157)、尾張型小皿(158)など新しい遺物が33点混入していた。柱穴など新しい時期の遺構が多数重複した影響かもしれない。

い。須恵器には杯蓋(146)、杯身(147・148)、高杯(150～153)、甗(156)などがある。時期は多様であるが、最も多く存在するのは東山44号窯式期(H-44)に属するものであることから、A-3期(7世紀前半)に位置づけたい。土師器には甗(154)と高杯(155)がある。

第8項 SB08 出土遺物

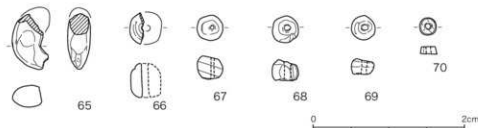
(第73図 159～175)

SB08からは土師器275点、須恵器215点など499点の遺物が出土した。須恵器には杯蓋(159～162)、杯身(165)、高杯(166・168・169)、壺(167)、甗(171)などがある。159は摘み付近で放射状に伸びるミガキによる施紋が存在する。灰軸陶器には碗(163・164)があり、これは黒笹90号窯式期(K-90)に属するものである。土師器には甗(172～175)と土鍾(170)がある。甗は折り返された口縁部の屈曲が急なもの(173)と丸みを持って屈曲するもの(174)などがある。前者は三河型、後者は尾張型に属し、両者とも8世紀から9世紀に属する資料である。古い時期のものが含まれるが、A-5期に属する資料(9世紀)に位置づけられる。

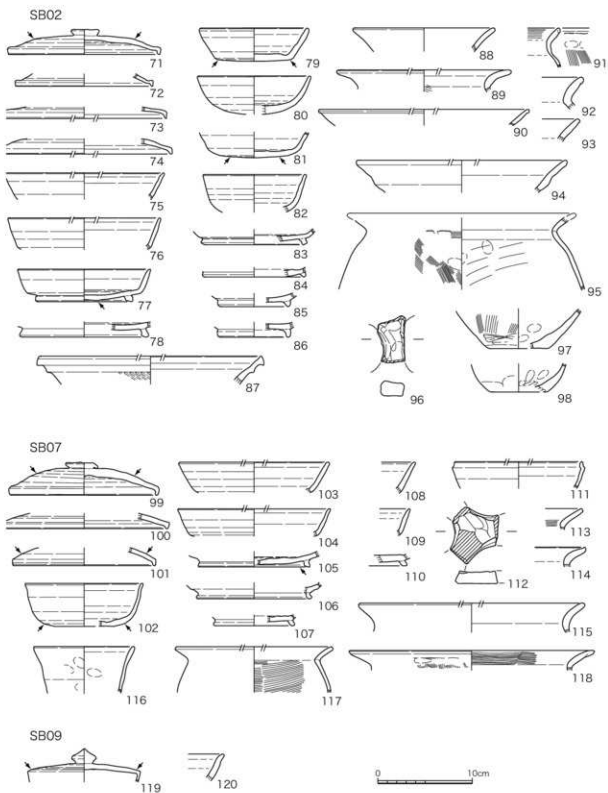
第9項 SB06 出土遺物

(第73図 176～179)

SB06からは土師器48点、須恵器28点など77点の遺物が出土した。須恵器には杯蓋(176)、杯身(177)、壺(178)などがある。杯類は東山61号窯式期(H-61)に属するものである。土師

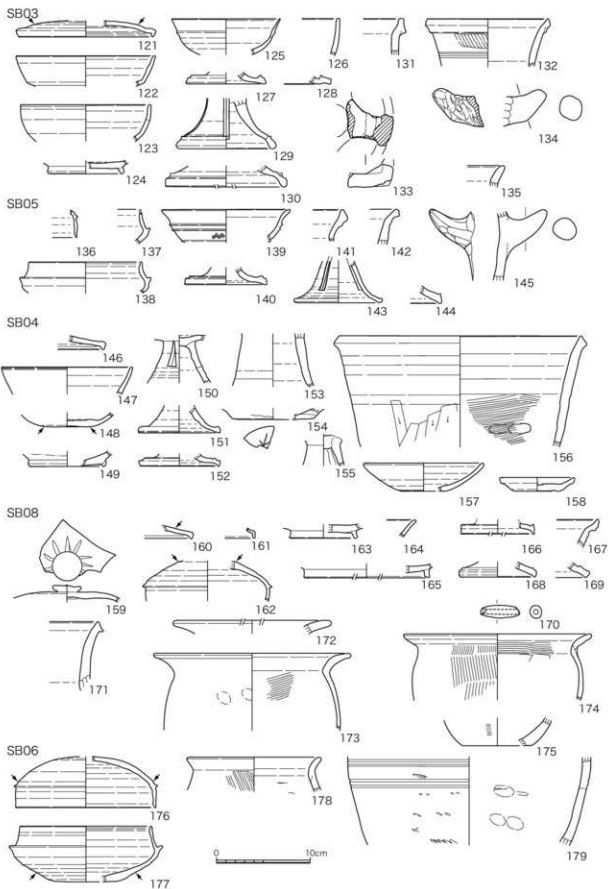


第71図 A期の遺物実測図(3) SK308(3)



第72図 A期の遺物実測図(4) SB02・SB07・SB09

名古屋城三の丸遺跡 VII



第73図 A期の遺物実測図(5) SB03・SB05・SB04他

器には甕(178)があり、緩やかに口縁部が屈曲し体部外面に荒いハケ調整が施されている。A-2期に属する資料で6世紀前半に位置づけられる。

第10項 土坑出土遺物

(第74図180～202)

180はSK331から出土した土師器小型壺で古墳時代中期に属する。181～183はSK339から出土した資料で、杯蓋は東山11号窯式期(H-11)に属するもの(181)と城山2号窯式期に属するものである。A-1期に属する資料で5世紀後半に位置づけられる。184はSK359から出土した杯蓋で東山50号窯式期(H-50)に、185はSX08から出土した高杯で東山11号窯式期(H-11)に属する。186～189はSK353から出土した資料で、土師器台付甕は松河戸Ⅱ式に属する。190は器台の一部と思われる。191はSK425出土杯身で高蔵寺2号窯式期(C-2)に位置づけられる(A-4期)。192はSK412から出土した土師器甕で口縁部が横に伸びる三河型に属するものである。193～195はSK589から出土した土師器甕で概ね8世紀代に属する。196と197はSK188から出土した灰釉陶器と白色軟質陶器で10世紀に属する。灰釉陶器段階の遺物は、他にSK582出土資料(198)、SD32出土資料(199)、SK235出土資料(200～202)などがあるが、SK235はB期の遺構である。

第11項 包含層など出土遺物

(第75～78図203～413)

今回の調査でA期に属する遺物の大部分は、B期以降の遺構や包含層から出土した資料である。これらは本来同時期の遺構や包含層に含有されていたものと推察されるが、B期以降の度重なる開発や視乱により移動してしまったものと思われる。A期の遺構出土資料に比べると一括性においてその資料的価値が低くなるが、豊富な出土量を

誇るこれらの遺物を紹介しないのは遺跡全体の様相を考える上で適切ではない。ここでは種別に紹介していきたい。なお、埴輪と古代～中世の瓦については別に項目を設けて報告したい。

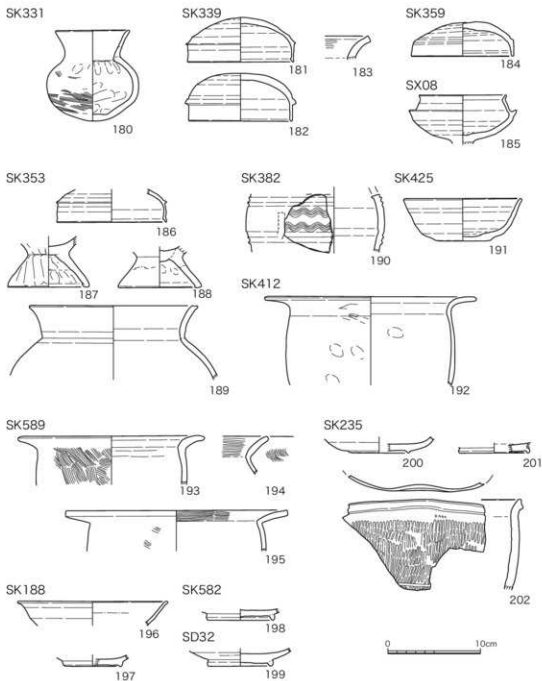
203～242はA期に属する土師器類である。この中で最も古い資料は高杯(217)、甕(220)、筒型製品(221)であり、弥生時代後期中式期の新段階から廻間Ⅰ式期に属する。203～206はいわゆるS字状口縁台付甕D類、207は宇田型甕、213～216は台付甕脚部、210～212は高杯で、いずれも松河戸Ⅱ式期に属する。これら松河戸Ⅱ式期の資料が、SK353以外にも一定量あることから、当地点ではこの段階から遺跡が本格的に機能していたことが考えられる。古墳時代後期以降の土師器は甕が主体となっている。6～7世紀代は口縁端部を積み上げた伊勢型の甕(226等)、8世紀代は口縁部が肥厚し荒いハケ調整が残る尾張型(228等)と口縁部が直線的に横に開く三河型(231)が存在する。この他に支脚の一部と推測される粘土塊(239)、穿孔された摘みを持つ鐺状土製品(240)、製塩土器の脚部(241)、土鍾(242)などがある。240は下半が欠損し破断面が磨耗しており、摘み部に線刻が施されている。

243～366は一部を除き須恵器類である。243～246と249は有蓋高杯蓋、247・248・250～255・269～291は杯蓋、256～268・292～309は杯身、310・311は碗、312～330は高杯、331は合子、332ははそう(広口有孔壺)、333は短頸壺、343は横瓶、348・349は摺鉢、354は甕、355～366は鉢または甗である。336と子持器台などの杯部、353は装飾須恵器の造形部分の一部と想定される。351は外面に縄溝紋が施された甕である。345～347・352は焼成が甘い白色軟質陶器に分類される陶器群である。時期は東山11号窯式期(H-11)から折戸10号窯式期(O-10)に概ね位置づけられ、特に時期的な偏りは認められない。

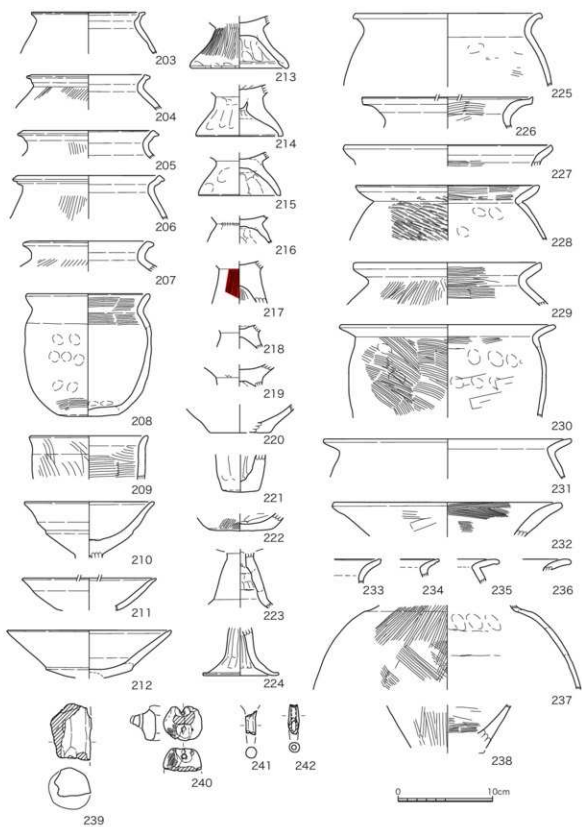
名古屋城三の丸遺跡 VII

367～413は一部を除き灰軸陶器類である。大部分は碗と皿であり、373は小碗、388は耳皿、368は長頸瓶、367は壺類である。370は白色軟質陶器の皿で、口縁端部内面に沈線が、底部外面に刻線が施されている。413は緑軸陶器皿で黒笹90号壺式期(K-90)に属する。緑軸陶器は全部で10点が出土している。灰軸陶器を含む遺構出土資料は、良好な竪穴建物跡や土坑に恵まれな

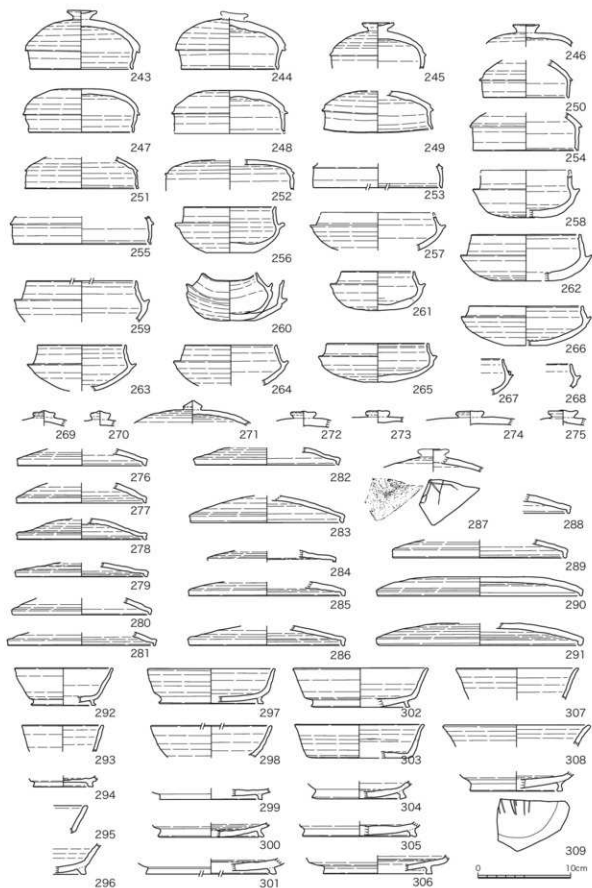
かったために、他に比べ非常に少ないのが実情である。しかし、黒笹90号壺式期(K-90)から広久手72号壺式期(H-72)の資料が一定量存在することから、この時期でも一定程度遺跡が継続したことが推測される。一方、百代寺壺式期や山茶碗第3型式期の資料も存在するが少ない傾向が読み取れる。



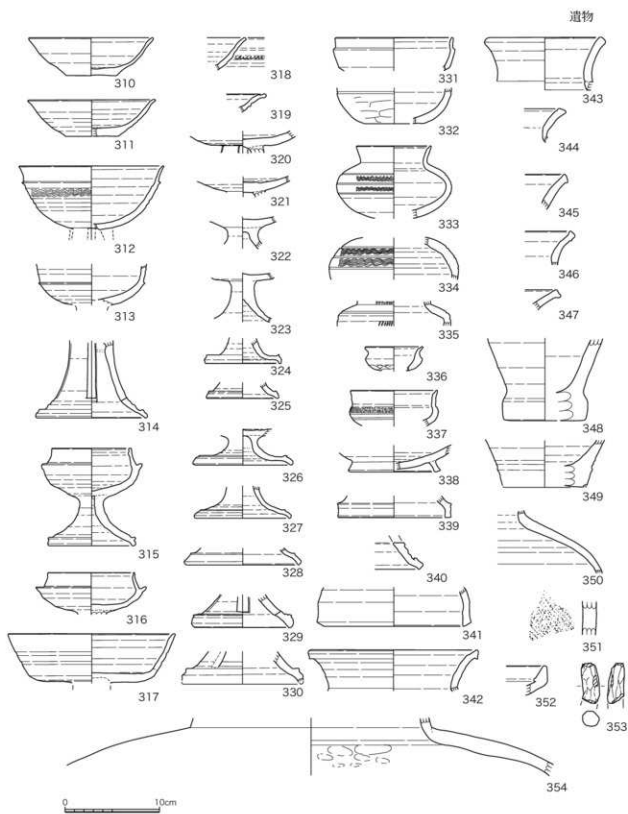
第74図 A期の遺物実測図(6)土坑出土遺物



第75図 A期の遺物実測図(7) 包含層他出土遺物(1)



第76図 A期の遺物実測図(8) 包含層他出土遺物(2)



第77図 A期の遺物実測図(9) 包含層他出土遺物(3)

第12項 埴輪 (第79・80図414～452)

1 概要

埴輪はすべて無黒斑である。円筒埴輪が大部分で、器種を特定しえない形象埴輪がわずかに認められる。円筒埴輪は92点(接合前破片数)、4,588.3gが出土したが、2段以上遺存する個体がなく、基部、口縁部、突帯が確認できる個体を中心として39点を抽出、図化した。

2 資料

(1) 円筒埴輪の分類

各個体に説明を加えるに際して、円筒埴輪を須恵器系、タテハケ系、ナデ系、ヨコハケ系の4系統に分類し、さらに須恵器系は須恵器系1～4類、ナデ系はナデ系1～2類、ヨコハケ系はヨコハケ系1～2類に細別した。分類においては、主として製作技法、突帯形状、器壁の厚さ、胎土を考慮した。以下、各分類に則して資料を提示する。

(2) 須恵器系埴輪

須恵器系埴輪は、原則として外面に1次調整としてのタテハケ後、2次調整として回転ヨコハケを施すもので、出土した埴輪の多数を占める。ここでは、24点(414～437)を図示した。

須恵器系1類は2点(414・415)である。淡橙色系の色調を示し、胎土中に砂粒をほとんど含まない。器壁は薄手で、やや低平ながらも鋭利な突帯を付す。3は基部で、底径が14cm前後と小さく、外面の回転ヨコハケは部分的に施されるのみ。底部調整としてのヨコケズリは、回転動作によらない曖昧なものである。

須恵器系2類は、基部2点(416・417)を抽出した。灰白～淡黄色系の色調で、砂粒をやや多く含む胎土である。重厚な器壁で、やや粗雑な印象を与える。外面には回転ヨコハケが施されるも、底部調整としてのヨコケズリは顕著でない。

須恵器系3類は19点(418～436)で、個体

数が最も多いと思われる。同一個体が少なからず含まれると思われるが、接合しなかったため、それぞれの破片を図化した。硬質に焼成され、赤～紫褐色を基調とする。色調からは、さらに418～425(赤褐色)と426～436(紫褐色)に分類される。胎土中には砂粒を多く含む。器壁はやや厚く、鋭利で高く突出する断面M字形の突帯を付す。ほぼ例外なく外面に回転ヨコハケ、内面に直線的なヨコハケを全面に施す。418～420は基部で、底部調整としてヨコケズリを内外面に施す。418は底径18.8cmで、筒形の器形。421、431は口縁部で、421は内面が段状に肥厚する。

須恵器系4類としたものは1点(437)で、内面には細かいヨコハケを断続的に施す。須恵質に焼成され、色調は灰色を呈する。

タテハケ系埴輪

タテハケ系埴輪としたものは1点(438)で、外面2次調整としての回転ヨコハケを省略する。内面は断続的なナメハケ調整を施す。須恵質に焼成され、色調は灰色を呈する。突帯は偏平で鋭利さを欠く。須恵器系埴輪の退化した型式と考えられる。

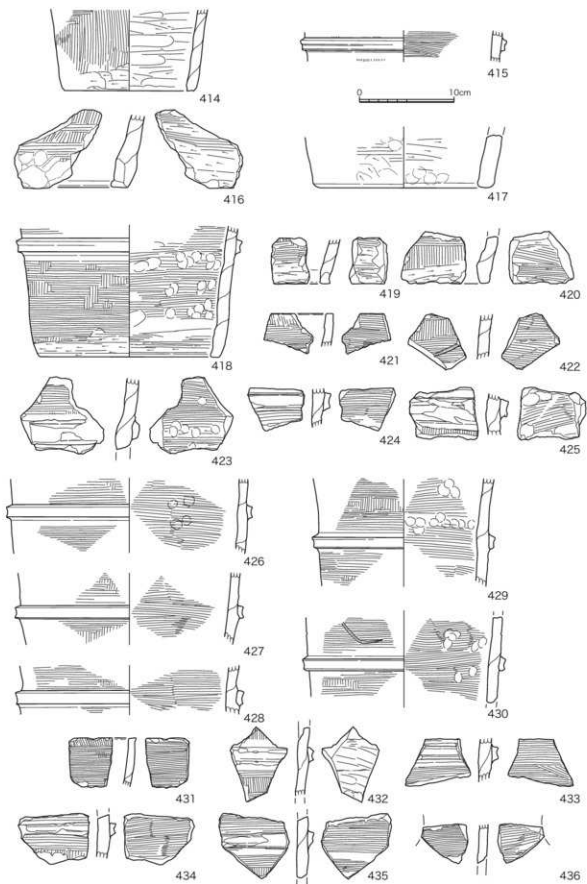
(3) ナデ系埴輪

ナデ系埴輪は、内外面の調整をナデ基調とするもので、6点(439～444)を図示した。

ナデ系1類は3点(439～441)で、灰白～淡黄色系の色調を基調とし、胎土中には砂粒をほとんど含まない。器壁は薄手で、低平な突帯を付す。26には径0.8cmの焼成前の小孔がある。ナデ系2類は3点(442～444)で、灰白～淡橙色系の色調を基調とし、胎土中に砂粒をやや多く含む。器壁はやや厚手で、高く突出する突帯を付すもの(442)と、低平な突帯を付すもの(443)がある。444は基部で、底部調整は認められない。

(4) ヨコハケ系埴輪

ヨコハケ系埴輪は、5点の破片(445～449)



第79図 A期の遺物実測図(11) 埴輪(1)

を図化したのみで、ヨコハケの静止痕が確認できる個体はない。

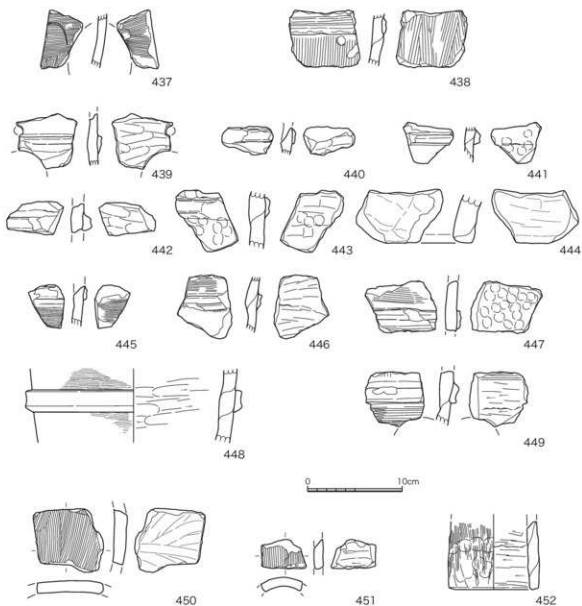
ヨコハケ系1類は3点(445～447)で、外面に細かなヨコハケを施す。淡黄～淡橙色系の色調で、断面の中間に黒色層を形成するものがある。胎土中には砂粒をほとんど含まない。器壁は薄手で、低平な突帯を付す。446の外面にはベンガラを塗布した痕跡を残す。

ヨコハケ系2類は2点(448・449)で、外面

にやや粗いヨコハケを施す。色調は淡黄～橙色系で、1類と類似する。1類と比較して、器壁が厚く、突帯が突出する傾向にある。

(5) 器種を特定しえない形象填輪

形象填輪の可能性がある個体として3点(450～452)を図示した。いずれも器種、部位の特定には及んでいない。450は円弧を有さない破片で、外面をハケ、内面を丁寧なナデによって調整する。胎土や色調は須恵器系3類に共通する。451



第80図 A期の遺物実測図(12) 填輪(2)

は径が著しく小さい筒状の形状で、外面をハケ、内面をナデによって調整する。胎土や色調は450に共通する。452は筒状を呈する基部で、外面は細かいタテハケとナデによって調整する。灰白色の精良な胎土が特徴的である。

3 小結

(1) 各系統の関係

須恵器系1類は、ナデ系1類、ヨコハケ系1類と、須恵器系2類はナデ系2類とそれぞれに共通する属性も少なくない。この理解は、それぞれの系統の円筒埴輪が製作環境において相互に排他的ではなかったことを示す。この理解は、円筒埴輪の埴属時期を推測するうえでも重要な要素となりえよう。

(2) 埴属時期

ナデ系、ヨコハケ系、須恵器系1・2類と須恵器系3類は、前三者が古相、後者が新相の要素をそれぞれ内包する傾向にあるが、これらは総体として単一時期の製作と理解しても差し支えないと考えられる。推測される埴属時期は、須恵器系埴輪（なかでも須恵器系3類）を主体として、他系統の埴輪が混在する点、須恵器系埴輪の技法にやや不安定さが看取される点などから、赤塚次郎による円筒埴輪編年のIV期2段階、須恵器型式

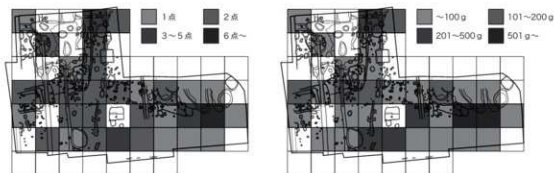
では城山2号竈期に相当する。底部設定技法が積極的に認められないこと、整形段階のタキ調整が認められないことも、埴属時期を推測するうえで参考となる。また、この推測は、本報告が対象とする調査区から、城山2号竈期、東山11号竈期の須恵器が出土している事実、周辺調査区で検出された古墳の築造時期が、東山111号竈期～城山2号竈期に求められる点とも調和する。一方、須恵器系4類、タテハケ系の各1点は時期が下降する可能性が高く、円筒埴輪編年のV期、須恵器型式では東山11号竈期以降に位置づけおきたい。

(3) 出土分布

第81図に、グリッド別の出土点数と重量の分布を示した。埴輪は、二次的な移動の結果、調査区のほぼ全域に散漫に分布してはいるものの、相対的には調査区の東半から多く出土する傾向にある。すなわち、古墳群の痕跡は調査区の東半からより東に残されている可能性が指摘できる。

参考文献

- 斉藤孝正 1983 「竈投成初期の様相」『名古屋大学文学部研究論集』LXXXVI (史学29) 名古屋大学文学部
 赤塚次郎 1991 「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第24集



第81図 埴輪出土分布図

第13項 古代～中世の瓦

SK155からは古代～中世の瓦が若干数であるが出土した。内訳は古代の平瓦1点、中世の軒平瓦1点、平瓦1点、時期不明の丸瓦2点である。各破片で全く色調が異なる。

軒平瓦(453)は、瓦当面の状態が不良であるが、紋様は唐草紋と判断される。もともと瓦当范の押し当てが充分でなかったようである。比較的単純化の進んだ唐草紋と考えられ、尾張地域で類例を探すと名古屋市・八事堂野古窯跡出土の軒平瓦と、同范とは言い切れないがほぼ同じ紋様であることが判明した(註)。素材は糸で切り出された粘土板で、凸型成形台で成形し、瓦当部を折り曲げる。頸部には粘土を付加し指ナデ調整をおこなう。凸面タタキ痕はみえない。瓦当范は面に対しややずれて押し当てられる。焼成は硬質で色調は赤褐色である。以上の製作技法上の特徴は八事堂野古窯跡出土の唐草紋軒平瓦と共通しており、当該瓦がこの窯の製品である可能性はきわめて高いといえる。

なお、八事堂野古窯の製品は、軒丸瓦に三巴紋2種と二巴紋1種の計3種類、軒平瓦に連続三巴紋1種と均整唐草紋2種の計3種類がある。灰釉の掛かる三巴紋軒丸瓦と連続三巴紋軒平瓦で組み合わせが想定でき、それ以外の無釉のものと区分される。唐草紋は仮にA・B類とするが同じ製作技法である。そのうち453に近似する紋様はA類(図83-3)である。

唐草紋軒平瓦の年代であるが、抽象化された唐草紋と瓦当部の折り曲げ技法から、12世紀末～13世紀初頭の時期を考えることができよう。なお京都(平安京)での出土は確認されていない。

平瓦(454)は凸面縄タタキの後に指ナデをおこない、凹面に桶状模様の痕跡がある。焼成がやや軟質で厚み(2.3cm)もあるため古代のものと考えられる。455は凸面縄タタキ。離れ砂はないが灰釉系陶器に近い焼成であるため、中世のもの

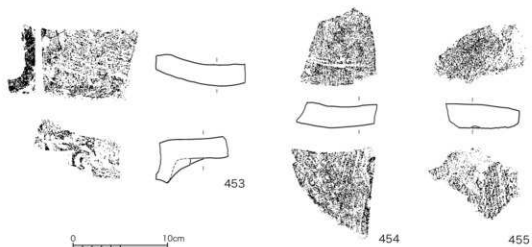
と考えられる。なお図示していない丸瓦は、古代とも中世とも判じがたい。

以上の瓦はSK155以外の遺構や整地層・表土層からは出土していない。この状況は円筒埴輪のそれとは対称的で、後者が調査区近辺に古墳の存在を想定せしめるのに対し、古代～中世の瓦葺き建物の存在については否定的である。SK155出土遺物は古瀬戸末期を下限とする雑多な時期を示し、それ以前から存在した瓦礫を片付けた土坑とみられるが、瓦に関していえば、ここから離れた地点からもたらされたものと考えられる。なお、これまでの名古屋城三の丸遺跡の調査では、台地西縁に近い古代集落が確認された地点で古代～中世の瓦が出土しているが、台地の奥まった地点ではみられない。つまり分布に偏向がうかがえ、台地西縁に古代～中世の瓦葺き建物を想定することも可能であろう。これに関して、名古屋城三の丸には天王社があったが、その前身は中世の「安養寺」になる可能性があり、『尾張国風土記逸文』に記される古代の「福興寺」との関わりも指摘されている(三渡1986)。名古屋城前史のひとつとして今後探索を続ける必要があらう。

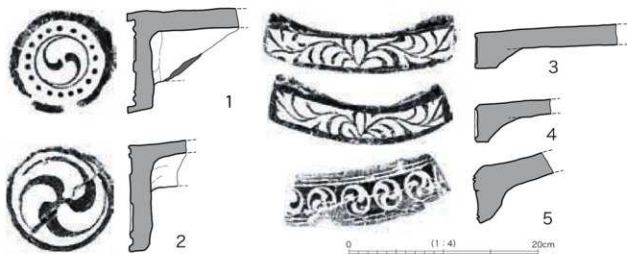
(註) 八事堂野古窯跡出土資料の調査にあたっては名古屋博物館館山勝氏・瀬川貴文氏の御協力と御教示をいただいた。

参考文献

三渡俊一郎 1986 『千種・東・中区の遺跡』名古屋文化財調査第88集



第 82 図 A 期の遺物実測図 (12) 古代～中世の瓦



第 83 図 八事堂野古窯出土瓦実測図

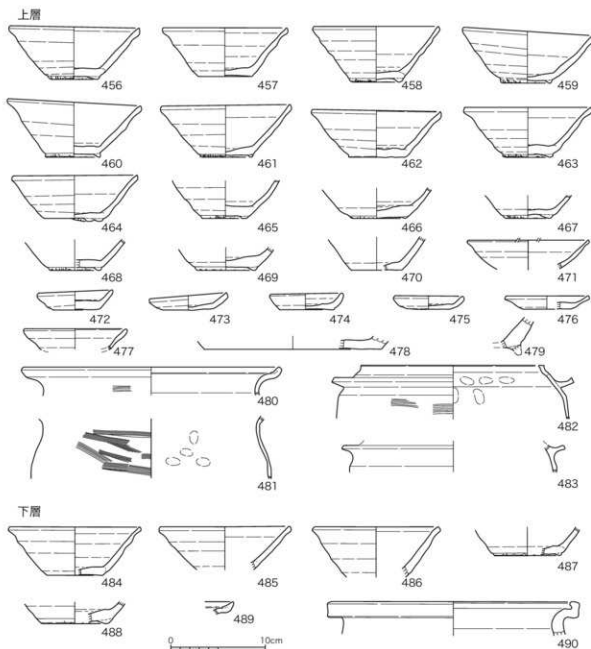
第3節 B期の遺物

B期は鎌倉時代中頃～戦国時代（13世紀～16世紀）の段階である。遺物には山茶碗類・瀬戸美濃窯産陶器・土師器などの焼物類の他、石製品や金属製品などがある。ここでは主要な遺構出土資料を中心に記述する。

第1項 SK226出土遺物

（第84図456～490）

井戸SK226は上層をSK226、下層をSK310として掘削しており、ここでは両者を併記して報告する。SK226からは山茶碗類と土師器などが398点出土した。この中には一部近世に属する瓦類が混入していたが、大半は山茶碗類（134点）



第84図 B期の遺物実測図 (1) SK226

である。須恵器や灰軸陶器など古い遺物も多数含まれていたが、古瀬戸製品は全く認められない。

上層出土の山茶碗類には尾張型 118 点と東濃型 16 点があり、尾張型は瀬戸窯産と推測される製品が多い。尾張型山茶碗 (456～470) と小皿 (472～475) は 466 を除き藤澤良祐編年の第 7～8 型式に属する。東濃型小皿 (476) は明和 2 号窯式期に属する。この他に、尾張型鉢 (478・479)、土師器非ロクロ調整皿 (477)、土師器南伊勢系鍋 (480・481)、土師器内彎型羽釜 (鈔付鍋: 482・483) などが存在する。482 は口縁部が内傾するがその長さは長く、北村編年 A3 類に属する。

下層出土の山茶碗類は尾張型が多く (484～488)、486～488 は上層よりも古い第 6 型式に属する資料である。490 は常滑窯産陶器甕で中野編年の 6a 期に属する。下層の方がやや古い段階

の山茶碗を含むものの、埋没時期がそれ程異ならないと思われる。B-1 期に属する資料で 13 世紀中葉に位置づけられる。

第 2 項 SD18 出土遺物

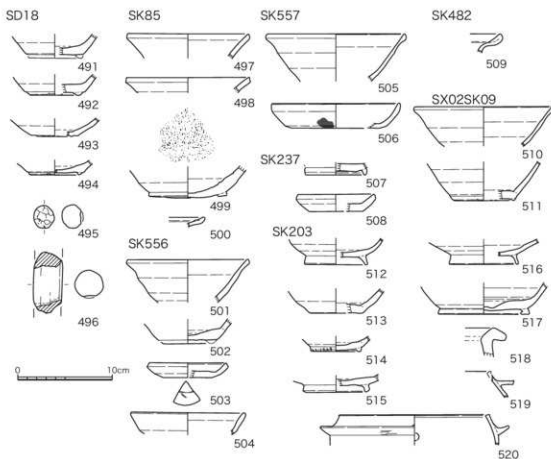
(第 85 図 491～496)

SD18 は SD17 に切られる東西方向に走る小規模な溝で山茶碗類などが出土した。山茶碗類は尾張型 (491・492) と東濃型 (493・494) があり、後者には大洞東窯式期に属する (493)。496 は棒状の上製品で支脚の一部かも知れない。B-2 期 (14 世紀末から 15 世紀初頭) に位置づけられる。

第 3 項 B-1,2 期の土坑出土遺物

(第 85 図 497～520)

497～500 は SK85 から出土した資料で、尾張型山茶碗 (497・498) は第 7～8 型式に属する。



第 85 図 B 期の遺物実測図 (2) 溝・土坑出土遺物

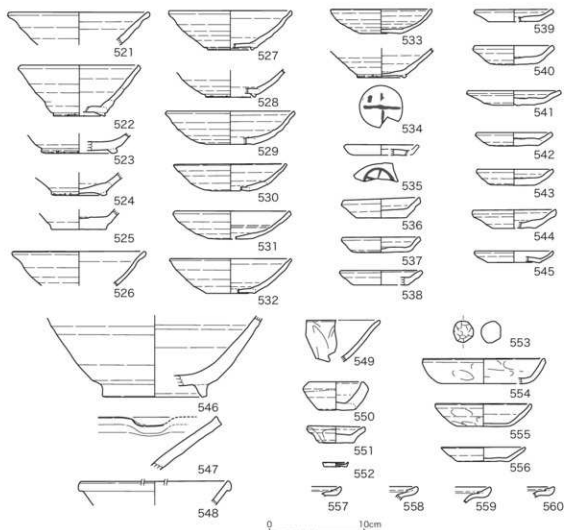
499 は東濃型山茶碗の卸碗で、内面に刻線が施され自然軸がかかる。白土原窯式期に属する。501～504 はSK556 出土資料で、503 の底部外面には墨書が記されている。505・506 はSK557 出土遺物で505 は明和2号窯式期に属する東濃型山茶碗、506 は白色で均質な胎土の土師器皿である。506 は口縁部がやや肥厚しながら内彎し底部に黒色のしみが存在する。507・508 はSK237 出土資料、512～520 はSK203 出土資料で、両者とも灰軸陶器類などの古い時期の遺物を含有する。518 は灰軸陶器類の時期に属する土師器清輝型甕である。519 と520 は土師器内彎型羽釜（鈔付鍋）で鈔の状態から両者は別系統の製品と考えられる。

第4項 SK155 出土遺物

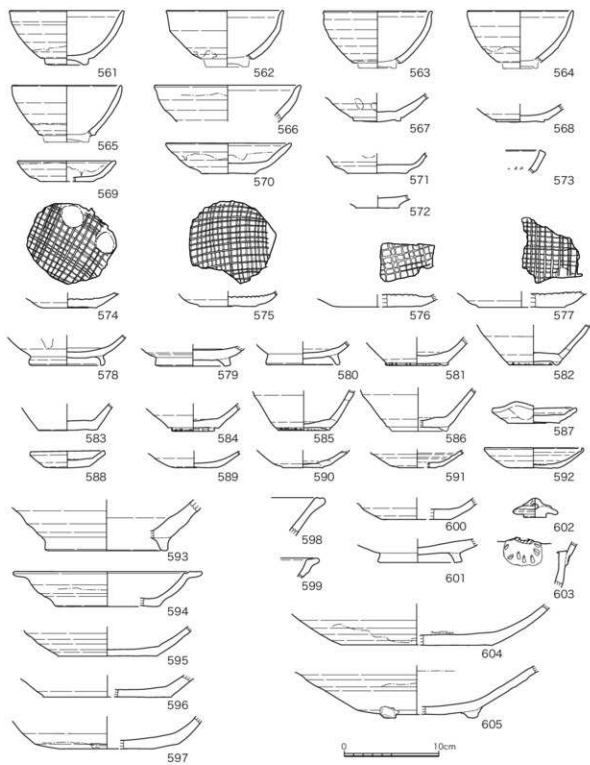
(第87～89図 561～645)

SK155 からは瀬戸美濃窯産陶器や常滑窯産陶器、土師器などの遺物が761点出土した。遺構の時期はB期に属するが、須恵器230点、古代までの土師器59点など約半数がA期に属する資料であった。ここでは遺構の時期に近い資料を中心に報告する。

瀬戸美濃窯産陶器には天目茶碗(561～565)、平碗(566・567)、緑釉小皿(568～572)、卸皿(573～577)、折縁中皿(594)、折縁深皿(599・606) 合子蓋(602)、水注(603・627)、播鉢(607～611・616～618)、直縁大皿(612)、緒桶(613・614)、根来型広口瓶子(622)、祖母懷壺(623)、



第86図 B期の遺物実測図(3) 包含層他出土遺物



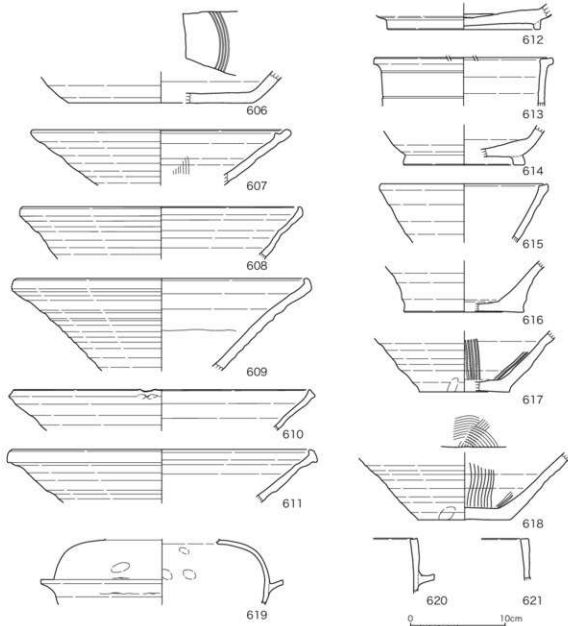
第 87 図 B 期の遺物実測図 (4) SK155 (1)

四(三) 耳壺 (624～626)、花瓶 (628)、瓶子 (629～632・634～636)、獨台 (637) など多様な器種が存在する。出土量は接合前破片数で碗・小皿類は 25 点、中皿・鉢類は 25 点、播鉢は 22 点、壺・瓶類は 55 点、その他は 24 点であり、壺・瓶類の出土量が多い傾向が認められる。時期別に検討すると、古瀬戸前 1 b 期の資料 (603) が最も古く、古瀬戸後 IV 期新段階の資料が最も多くかつ最新資料である。

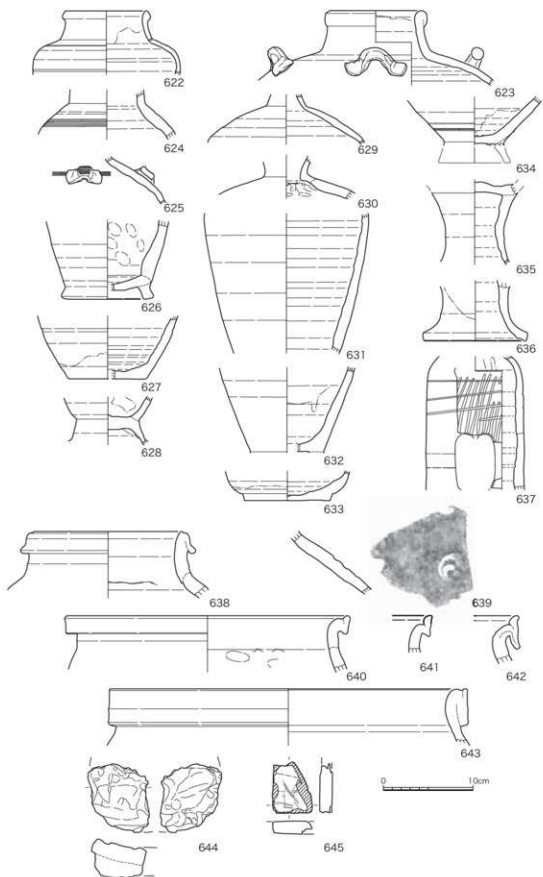
常滑窯産陶器は接合前破片数で 81 点出土し

ており、大半が甕または壺の破片と考えられる。638 は 10 型式新段階の壺口縁部、640・641 は 5 型式新段階の甕口縁部、642 は 7 型式新段階の甕口縁部、643 は 9 型式新段階の甕口縁部である。639 は甕の肩部付近の破片で三つ巴紋の印が施されている。この他に陶器類では山茶碗類も 72 点が確認されている。尾張型山茶碗は第 3～8 型式が、東濃型山茶碗では浅間窯下甕式期から生田甕式期までが出土した。

土師器には皿と釜・釜類が存在し、後者には羽



第 88 回 B 期の遺物実測図 (5) SK155 (2)



第89図 B期の遺物実測図(6) SK155(3)

付鍋(620・621)と羽付釜(619)が認められる。羽付鍋は口縁部が高く直立することからこの種では最も古い資料と考えられる。この他に重複椀型鉄滓(644)や砥石(645)なども出土した。

古瀬戸後IV期新段階の資料と直立する羽付鍋の存在から、B-3期(15世紀後半)に位置づけられる。

第5項 SK147 出土遺物

(第90～92図646～764)

SK147からは瀬戸美濃窯産陶器や土師器などの遺物が2671点出土した。このうち半数以上は土師器皿で全体の約73%(1940点)を占める。古い包含層などを壊したため混入したと思われる須恵器230点、古代以前の土師器187点、灰釉陶器57点、山茶碗類83点を除くと、土師器皿の占める割合は更に高く約91%と計算される。ここでは遺構の時期に近い資料を中心に記述を進めたい。

瀬戸美濃窯産陶器には天目茶碗(646～649)、仏師具(650)、緑釉小皿(651・652)、重圈皿(東濃型山茶碗653)、水注(744)、四(三)耳壺(745)、播鉢(746・750)、釜(748・749)などがある。接合前破片数では天目茶碗が25点、皿類が13点、播鉢が16点、甕が21点、その他が14点である。甕は全ての破片が同一個体と思われるので、天目茶碗の占める割合が高いことがいえよう。時期は古瀬戸前期から大窯第4段階まで分布するが、大窯第4段階の志野丸皿と大窯第2段階の播鉢などを除くと、古瀬戸後IV期から大窯第1段階までに集中する傾向がある。

土師器には大量の皿類と内耳鍋がある。土師器皿は大きくロクロ調整皿と非ロクロ調整皿に分けられ、形状でさらに細分される。

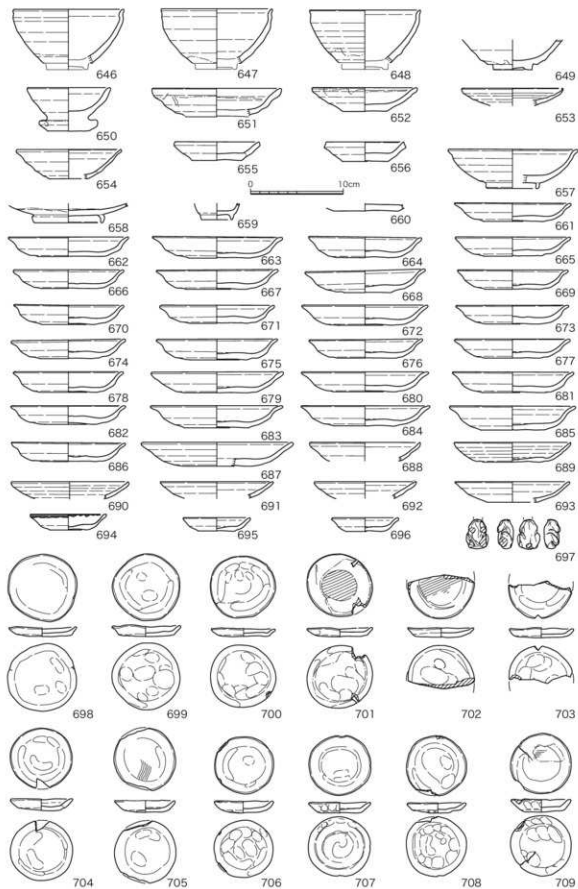
ロクロ調整皿1類(661～686)は口径が11～14cmで体部を2段にナデて口縁端部を大きく外反させたものである。ロクロ調整皿2類

(687)は口径が約16cmで体部が逆八字状に開き口縁端部までおおよそ直線的になるものである。ロクロ調整皿3類(688～693)は口径が11～13cmで体部が逆八字状に開き口縁端部までおおよそ直線的になるものである。比較的器壁が薄く作られている。ロクロ調整皿4類(694～696)は口径が7～8cmで体部を2段にナデて口縁端部を外反させるものである。外反が弱いもの(695)も存在する。

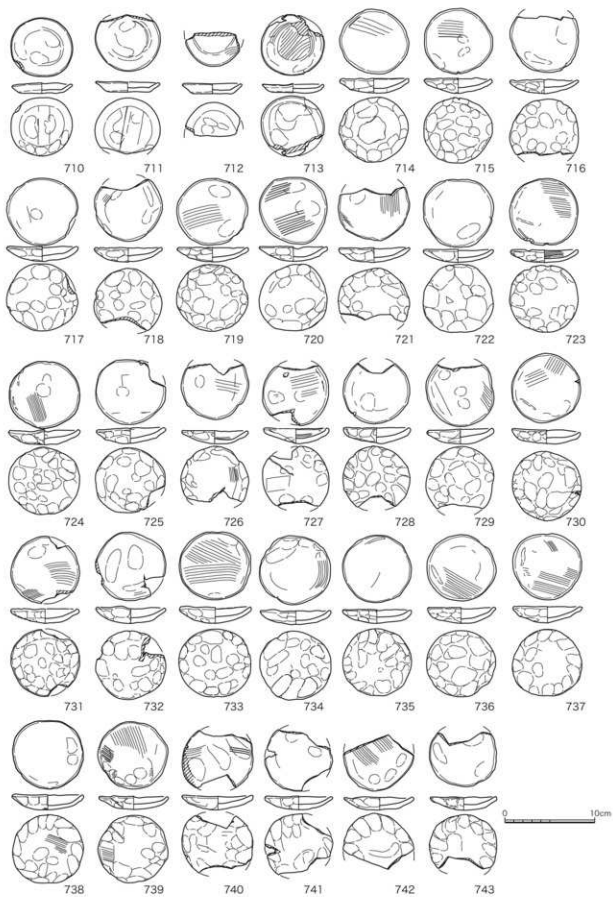
非ロクロ調整皿1類(698～713)は口径が6.0～7.3cmで内外面ともに口縁端部に横ナデを施して体部を立ち上げさせたものである。底部内面には一方にナデた痕跡や指頭圧痕が残る、底部外面には指頭圧痕または手掌痕が残存する。非ロクロ調整皿2類(714～743)は口径が6.8～7.6cmで口縁端部に全く横ナデ調整を施さないものである。内面全体に一方にナデた痕跡が残るものが多く、底部外面には多数の指頭圧痕または手掌痕が残存する。円盤状の粘土板に椀形に加工するための切れ目を入れて繋ぎ合わせた痕跡が残るもの(727など)も認められ、指押さえが口縁端部に沿って円周上に巡る形で施されたものが多い。

土師器内耳鍋(752～758)は全て半球形内耳鍋であり、体部はやや直立気味に直線的に立ち上がるものである。口縁端部は方形に作られ、体部外面に1条の沈線が巡っている。この他に土製形代(697)、板材(759)、鉄鎌(760)、砥石(761～764)などがある。697は頭部が欠損する土製形代で座った姿勢が表現されている。尾を持つことなどから動物(猿)を模ったものと思われる。砥石は肌理が細かい石材が使用され薄いものが多いことから仕上げ砥と思われる。

この資料は、古瀬戸後IV期新段階と大窯第1段階の資料が多く存在し、土師器皿の形状などからみて、B-4期(15世紀末～16世紀前葉)に位置づけられる。

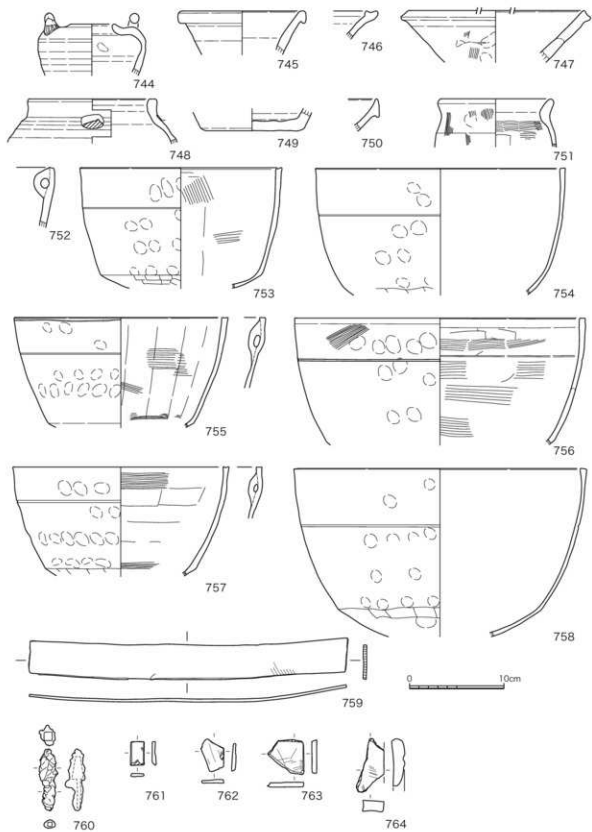


第90図 B期の遺物実測図(7) SK147(1)



第91図 B期の遺物実測図 (8) SK147 (2)

名古屋城三の丸遺跡 VII



第92図 B期の遺物実測図(9) SK147(3)

第6項 SD39 出土遺物

(第93・94図 765～802)

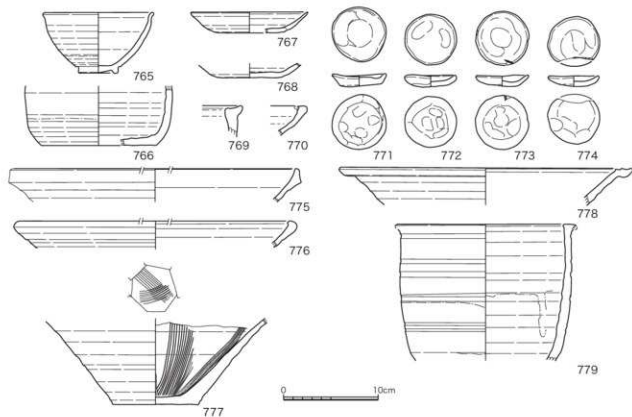
SD39からは瀬戸美濃窯産陶器や土師器などの遺物が807点出土した。このうち半数以上は土師器鍋で全体の約72% (583点) を占める。

瀬戸美濃窯産陶器には天目茶碗(765)、瓶(766)、緒桶(769・779)、播鉢(770・775～777)、折縁深皿(778)などがある。図示しなかったが灰軸丸皿が最新資料で大窯第2段階に位置づけられ、この他は古瀬戸後IV期から大窯第1段階までに集中する傾向がある。

土師器には皿類と内耳鍋などがある。土師器皿は体部が直線的に逆ハ字状に開くロクロ調整皿(767・768)と、内外面とも横ナデ調整が施された非ロクロ調整皿(771～774)がある。後者は口径が5.2～5.5cmに分布しSK147出土資料よりも小さい。土師器内耳鍋は全て半球形内耳鍋に属し、その形状から3類に分類できる。内耳鍋1

類(789～799)は体部が緩やかに湾曲し口縁部がやや内傾するもので、器高が高いものである。体部上位(体部と口縁部の境界)外面に浅い沈線が巡るもの(798・799)がある。また、特殊なものとして体部に2ヶ所穿孔されたもの(798)も存在する。内耳鍋2類(788)は体部が緩やかに湾曲し口縁部がやや急に折れ曲がり内傾するものである。内耳鍋3類(801)は体部が緩やかに湾曲し口縁部がやや内傾するものうち、器高が比較的低いものである。これらの内耳鍋は口縁部外面は横ナデ調整、体部外面は指オサエ調整、底部周縁外面はヘラケズリ調整、内面上半はハケ調整が施される。この他に土師器釜(787)が存在し、口縁部がやや内傾するものである。

この資料は、土師器鍋・釜類は鈴木1996によれば1-3期に属すること、大窯第2段階の資料をわざわざ含むことなどから、B-4期(16世紀前半～中頃)の資料と位置づけられる。



第93図 B期の遺物実測図(10) SD39(1)

第 7 項 SD06 出土遺物

(第 95 図 803 ~ 806)

SD06 からは大竈第 1 段階までの瀬戸美濃窯産陶器や常滑窯産陶器、土師器などが出土した。

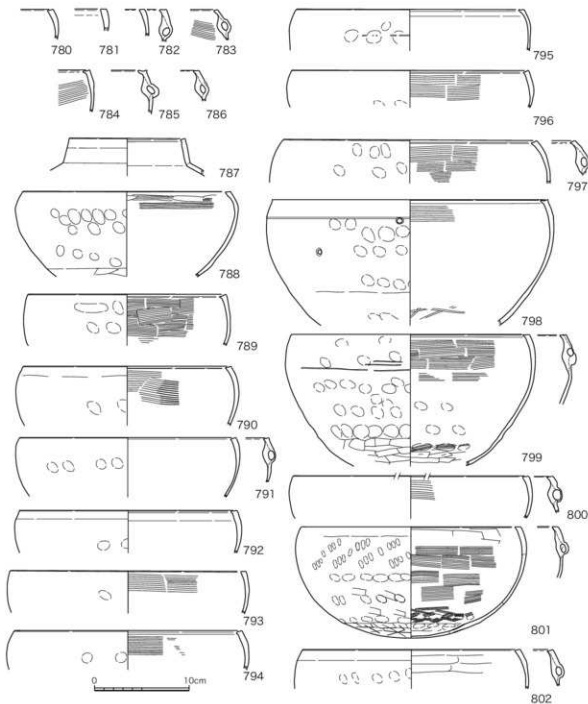
804 は中国龍泉窯系青磁蓮弁紋碗である。

第 8 項 SD17 出土遺物

(第 95 図 807 ~ 815)

SD17 からは大竈第 2 段階までの瀬戸美濃窯産陶器や土師器などが出土した。807 は中国景德鎮

窯系青花碗、808 は大竈第 2 段階に位置づけられる鉄軸椀皿である。814 は常滑窯産陶器鉢で焼



第 94 図 B 期の遺物実測図 (11) SD39 (2)

成が甘い赤物製品で赤羽・中野編年の9型式に属する。

するタイプである。

第9項 SD29 出土遺物

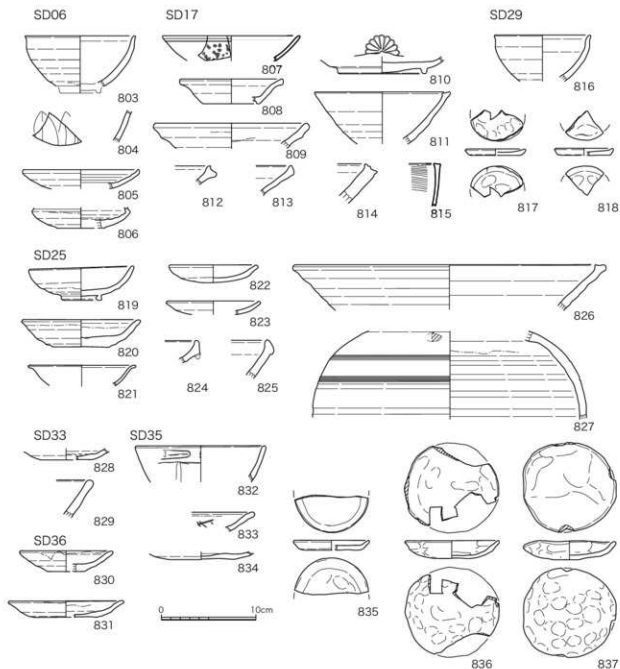
(第95図 816～818)

SD29からは瀬戸美濃窯産陶器天目茶碗(816)や土師器皿などが出土した。817・818は非ロクロ調整土師器皿で、口縁部外面のみを横ナデ調整

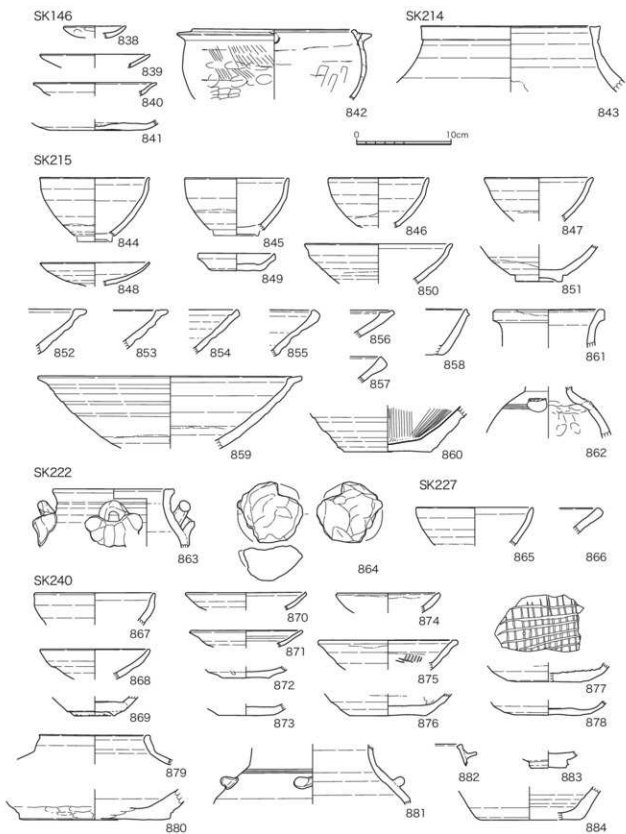
第10項 SD25 出土遺物

(第95図 819～827)

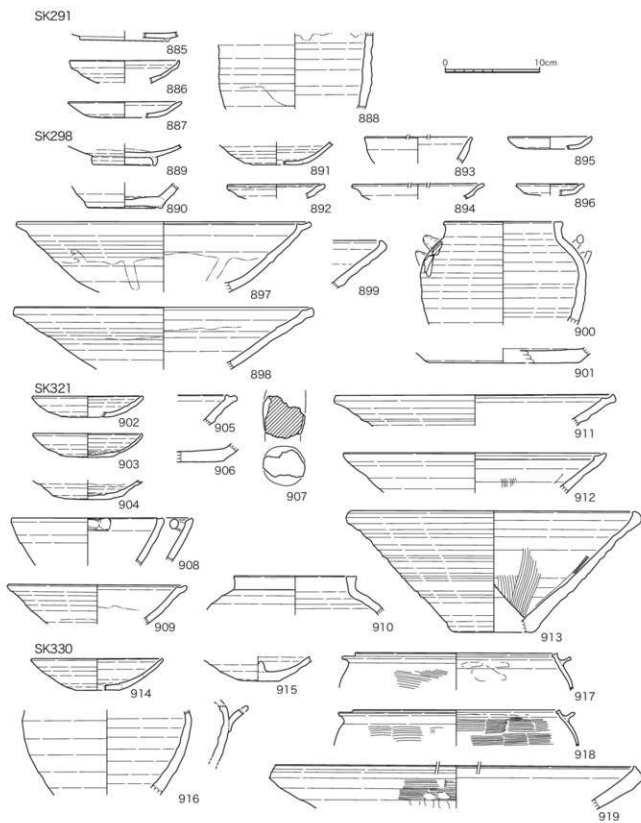
SD25からは瀬戸美濃窯産陶器や土師器などの遺物が出土した。819はほぼ完形の丸皿で高台は付高台で古瀬戸後IV期新段階に位置づけられる。この遺構における最新資料は大窯第2段階に位



第95図 B期の遺物実測図(12) 溝出土遺物



第96図 B期の遺物実測図(13) 土坑出土遺物(1)



第97図 B期の遺物実測図(14) 土坑出土遺物(2)

置づけられる播鉢 (824) である。821 は中国産白磁端反皿、822・823 は口縁部内外面に横ナデ調整が施された土師器非ロクロ調整皿である。播鉢と土師器皿の時期は合わないかもしれない。

第 11 項 SD35 出土遺物

(第 95 図 832～837)

SD35 からは瀬戸美濃窯産陶器 9 点や土師器 60 点などの遺物が合計 176 点出土した。瀬戸美濃窯産陶器には古瀬戸後 IV 期古段階の緑釉鉦皿 (833) が存在する。土師器皿はロクロ調整皿 (834) と非ロクロ調整皿があり、後者は口縁部内外面に横ナデ調整が施されたもの (835) と横ナデ調整が施されないもの (836・837) がある。836・837 は口径が 9～10cm を測る大きなものである。この他に中国龍泉窯系青磁碗も出土した。瀬戸美濃窯産陶器と土師器皿の特徴が SK147 より古いことから、B-3 期 (15 世紀中頃) と位置づけられよう。

第 12 項 SK146 出土遺物

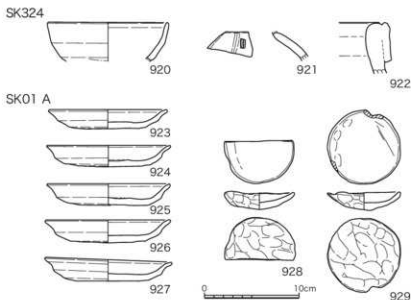
(第 96 図 838～842)

土師器ロクロ調整皿や土師器内彎型羽釜などの遺物が出土した。842 は焼成前に穿たれた孔が存在する。B-3 期 (15 世紀中頃) と位置づけられよう。

第 13 項 SK215 出土遺物

(第 96 図 844～862)

SK215 からは瀬戸美濃窯産陶器や土師器などの遺物が 122 点出土した。瀬戸美濃窯産陶器には天目茶碗 (844～847)、平碗 (850・851)、折縁深皿 (852・853・856・859)、播鉢 (854・855・857・860)、洗 (858)、四耳壺 (861)、水注 (862) などがある。858 が古瀬戸前 III 期、862 が古瀬戸中前半、844 が大窯第 1 段階に位置づけられる他は古瀬戸後 III 期～後 IV 期に属する資料である。B-3 期から B-4 期 (15 世紀中頃～16 世紀中頃) の資料と位置づけられる。



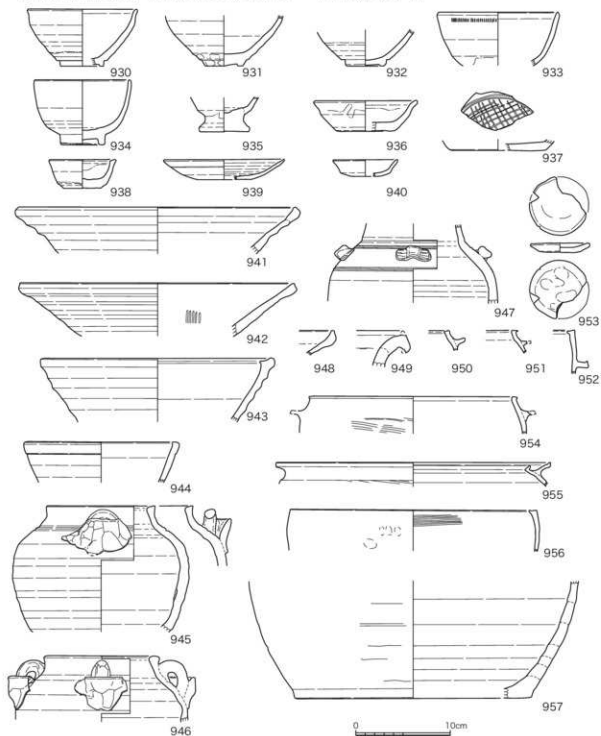
第 98 図 B 期の遺物実測図 (15) 土坑出土遺物 (3)

第14項 SK240 出土遺物

(第96図867～884)

SK240からは瀬戸美濃窯産陶器や土師器などの遺物が138点出土した。山茶碗類や灰軸陶器類を多数含んでいる。瀬戸美濃窯産陶器には浅碗(867)、緑釉皿(872・873)、はさみ皿(874)、

卸皿(875・877)、折縁中皿(876)など多数の器種がある。図示しなかったが灰軸丸皿が最新資料で大窯第2段階に位置づけられ、この他は古瀬戸後IV期から大窯第1段階までに集中する傾向がある。874が大窯製品である他は、多くは古瀬戸後期に属する。



第99図 B期の遺物実測図(16) 包含層他出土遺物

第 15 項 SK291 出土遺物

(第 97 図 885 ~ 888)

瀬戸美濃窯産陶器有耳壺 (888) や土師器ロクロ調整皿 (887) などの遺物が出土した。887 は口縁部がわずかに外反するもので、比較的新しいものと思われる。B-5 期 (16 世紀中頃以降) の資料と位置づけられる。

第 16 項 SK298 出土遺物

(第 97 図 889 ~ 901)

瀬戸美濃窯産陶器や土師器などの遺物が 179 点出土したが、最も出土量が多いのは須恵器であった。瀬戸美濃窯産陶器には天目茶碗 (893)、緑釉皿 (892)、卸目付大皿 (897・898)、插鉢 (899)、釜 (888) などが出土した。時期は古瀬戸後IV期新段階までの遺物が包含されることから B-3 期 (15 世紀中頃) と位置づけられよう。

第 17 項 SK321 出土遺物

(第 97 図 902 ~ 913)

瀬戸美濃窯産陶器などの遺物が 69 点出土した。902 ~ 904 は東濃型山茶碗、908 は瀬戸美濃窯産陶器内耳鍋、909 は卸目付大皿、910 は釜である。陶器類は大窯段階に下るものは存在せず、B-3 期 (15 世紀中頃) と位置づけられよう。

第 18 項 SK330 出土遺物

(第 97 図 914 ~ 919)

瀬戸美濃窯産陶器や土師器などの遺物が 140 点出土したが、最も出土量が多い種別は須恵器である。瀬戸美濃窯産陶器には蓋 (915)、釜 (916) があり、古瀬戸後IV期に属する。土師器には内彎型羽釜 (917・918) があり、北村分類 A4 類に相当する。以上の所見から B-3 期 (15 世紀中頃) と位置づけられよう。

第 19 項 SK01 A 出土遺物

(第 98 図 923 ~ 929)

SK01 A からは近世に属する遺物の他に多くの土師器皿などの遺物が出土した。土師器皿には口縁部が外反するロクロ調整皿 (923 ~ 927) と口縁部に横ナデ調整が施されない非ロクロ調整皿 (928・929) が存在する。土師器の様相は SK147 と類似していることから、本来は SK147 に属する遺物が SK01 の開削により多量に混入したものと考えられる。

第 20 項 包含層出土遺物 (第 86・99 図 521 ~ 560・930 ~ 957)

今回の調査で B 期に属する遺物の多くは遺構に伴うものであるが、C 期以降の遺構や包含層から出土した資料も多数存在する。これらは本来同時期の遺構や包含層にされていたものと推察されるが、C 期以降の度重なる開発や乱掘により移動してしまったものと思われる。このうちの一部を紹介しておきたい

933 は大窯第 1 段階に属する灰軸丸碗、937 は内面に灰軸が切かる卸皿で古瀬戸前II期に属する。瀬戸美濃窯産陶器の煮炊具には内耳鍋 (943) と釜 (945・946) がある。950 ~ 956 は土師器で 955 は口縁部が鈎部より下位に位置する内彎型羽釜で 15 世紀後半から 16 世紀に属するものである。957 は産地不明陶器の壺底部である。灰軸陶器類の可能性も考えられる。

第4節 C期の遺物

C期はおおよそ江戸時代(17世紀～19世紀中頃)を通じた段階である。遺物には瀬戸美濃窯産陶磁器・肥前窯産陶磁器・土師器などの焼物類の他、木製品や石製品や金属製品など多様な種類の製品がある。ここでは主要な遺構出土資料を中心に記述するが、瓦類については記述の都合上別途項目を設けて報告したい。

第1項 SK185 出土遺物

(第100～101図958～1010)

SK185からは瀬戸美濃窯産陶器を中心に219点が出土した。この中には一部古い時期に属する遺物が混入しており、瓦類は10点が出土した。

瀬戸美濃窯産陶器には天目茶碗(958・959)、丸碗(960～967・969～971・973)、端反碗(968・972)、小杯(976・977)、志野丸皿(978～986)、蓋(990)、黄瀬戸鉢(996・998)、志野折縁鉢(997)、搦鉢(999)、茶入(1000)などがある。丸碗は口縁部に灰釉を流し掛けた鉄釉丸碗(961～966)が非常に多い。灰釉丸碗(987)と有耳壺(1005)は大窯段階に属する他は、大半が連房式登窯第1小期～第2小期に属する。961のみが登窯第3小期に属しこの資料群の最新資料と位置づけられる。この他には常滑窯産陶器の赤物製品(1001・1002・1006・1007)や土師器皿・焙烙・焼塩壺、中国産青花小杯・大皿などがある。土師器皿(988・989)は口縁部が内彎する器壁が比較的厚いものである。土師器焙烙(991～993)は体部が緩やかに彎曲しながら口縁部が逆八字状に開く古いタイプのものである。土師器焼塩壺は蓋と身ともに手づくね成形である。青花は974が景徳鎮窯系の他は漳州窯系の製品(975・1003・1004)である。これらはC-1期に属する資料で17世紀第2四半期に位置づけられる。

第2項 SK156 出土遺物

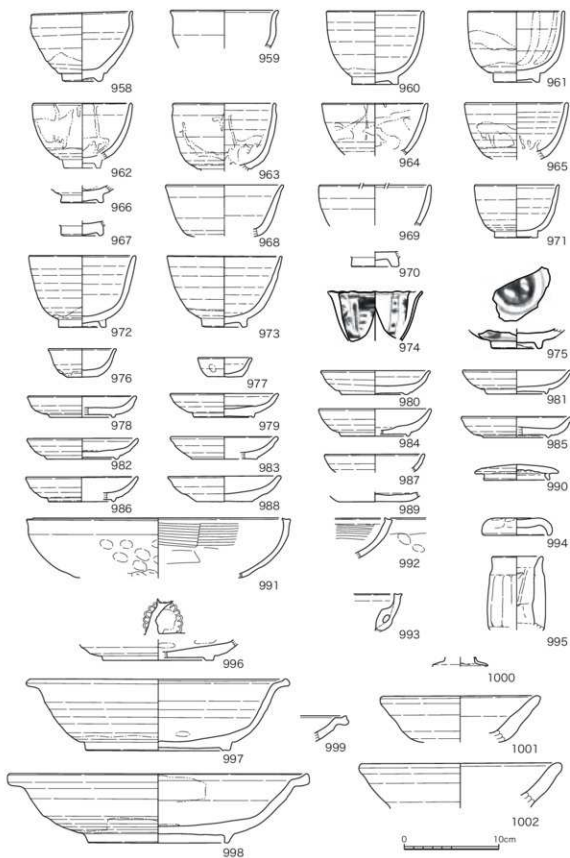
(第102図1011～1044)

SK156からは瀬戸美濃窯産陶器75点を中心に235点が出土した。近世に属する土師器は確認されなかった。瀬戸美濃窯産陶器には天目茶碗(1011・1012)、丸碗(1013)、小碗(1014)、志野丸皿(1018～1023)、反り皿(1024・1026)、折縁皿(1029)、志野大皿(1031)、搦鉢(1032・1033)、香炉(1039)、笠原鉢(1040・1041)などがある。大半が連房式登窯第1小期～第4小期に属する。1032のみが登窯第5小期に属しこの資料群の最新資料と位置づけられる。1030は白濁した灰釉が施された陶器蓋で、摘みは手づくね成形であるが、底部には回転系切り痕が残存する。褐灰色の胎土を持つもので瀬戸窯または美濃窯の製品とはいえない。おそらく尾張国あるいはその周辺で生産された特産品である可能性が考えられる資料である。1015・1016・1037・1038・1042・1043など古瀬戸後期の製品も含まれているが、全体としてはC-2期に属する資料で17世紀第4四半期に位置づけられる。

第3項 SD12 出土遺物

(第103図1052～1086)

SD12からは瀬戸美濃窯産陶器や肥前窯産磁器、土師器など791点が出土した。このうち瓦類が557点を占めている(後述)。瀬戸美濃窯産陶器には筒形碗(1052)、丸碗(1053)、志野丸皿(1059～1061)、反り皿(1057・1062)、瓶類(1070・1071)、釜(1072)、土瓶(1073)、火鉢(1075)、志野鉄絵鉢(1076・1077)笠原鉢(1078)などがある。これらは連房式登窯第1小期～第4小期に属するものが多いが、1072・1073・1075などは江戸時代後期に属する資料と考えられる。肥前窯産磁器には染付丸碗(1054・



第 100 図 C 期の遺物実測図 (1) SK185 (1)

1055) などがある。土師器には皿、焙烙、釜、焼塩壺が存在する。土師器皿は口縁部が内彎するロクロ調整皿(1068・1069)と口径が約3.5～4.2cmを測る横ナデ調整を施さない非ロクロ調整皿(1063～1067)がある。土師器釜(1079)は体部と口縁部の境界部の屈曲が緩くなったもので、やや内傾気味に直立する口縁部は比較長。17世紀か。土師器焙烙は口縁部が内傾するタイプで18世紀のものかもしれない。土師器焼塩壺はロクロ調整による蓋(1082)と手づくね成形による身(1083)があり、前者の上面には「イツミ 花 ッタ」の刻印が残存する。

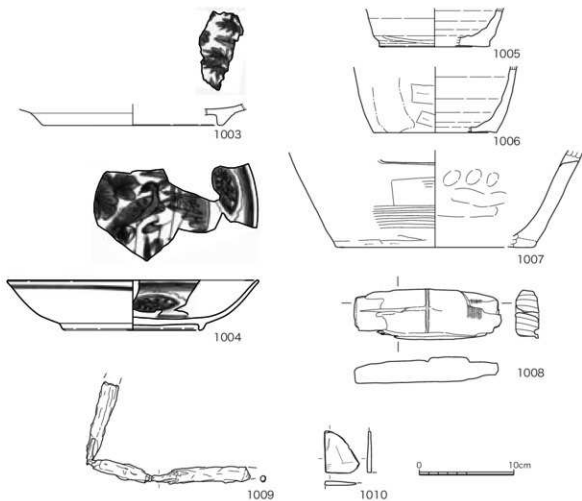
資料の多くはC-2期に属する資料で17世紀第4四半期に位置づけられるが、最終的に遺構が埋没した年代を示す資料としてはC-4期(19世紀

初頭)に属する一群が存在する。

第4項 SD14出土遺物

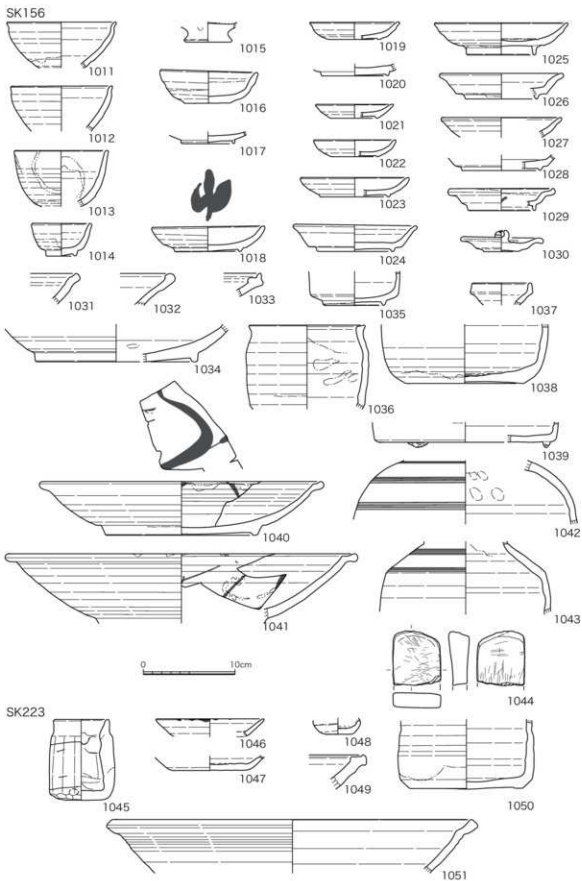
(第104図 1087～1106)

SD14からは瀬戸美濃産陶器74点や瓦類121点を中心に370点が出土した。瀬戸美濃産陶器には天目茶碗(1088)、丸碗(1087・1089)、小碗(1090)、志野丸皿(1092)、輪売げ皿(1093・1094・1097)、反り皿(1096)、志野鉄絵皿(1098)、志野鉄絵鉢(1099)、笠原鉢(1100)、揃鉢(1103・1104)などがある。大半が連房式登窯第1小期～第3小期に属し、一部に登窯第4小期に属する可能性があるものがある。肥前産磁器には染付香炉(1091)などが、土師器には皿と焼塩壺身などがある。土師器皿に



第101図 C期の遺物実測図(2) SK185(2)

名古屋城三の丸遺跡 VII



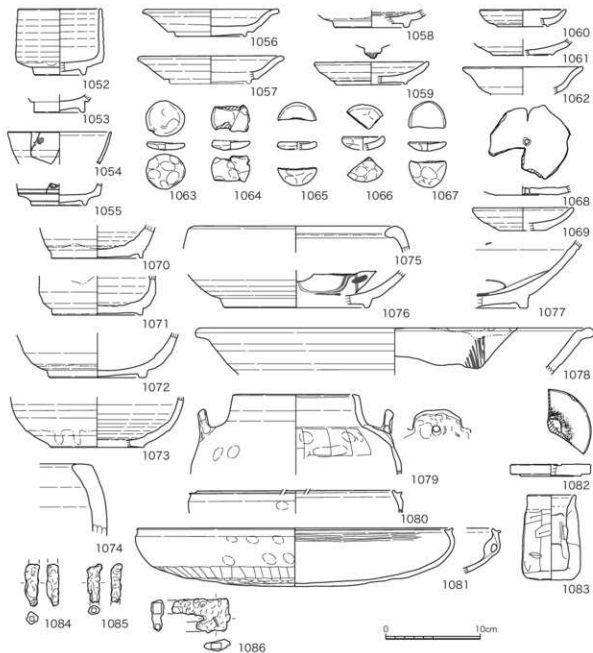
第 102 図 C 期の遺物実測図 (3) SK156・SK223

は、横ナデ調整を施さない非ロクロ調整皿(1101)の他に、瀬戸美濃窯産陶器反り皿の形状に類似したロクロ調整皿(1095)がある。1095は素焼き(無釉)で口縁部が玉縁状に作られており、形状から見て連房式登窯第3または4小期ものを模倣したものと考えられる。1105は碗型鉄滓、1106は用途不明の板状鉄製品である。これらの資料群はC-2期に属する資料で17世紀第3または4四半期に位置づけられる。

第5項 SK163出土遺物

(第105図 1107～1143)

SK162はSK163の陥没部分の堆積であったが、ここではSK162とSK163を合わせてその出土遺物をSK163出土遺物として報告する。SK163からは616点の遺物が出土した。瀬戸美濃窯産陶器には天目茶碗(1107・1108)、丸碗(1109～1111)、志野丸皿(1118)、反り皿(1117)、蓋(1134)、鉢類(1135～1137)、黄瀬戸鉢(1138)、



第103図 C期の遺物実測図(4) SD12

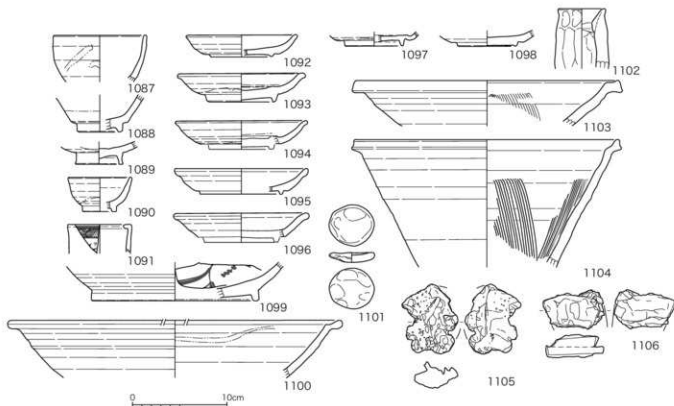
笠原鉢 (1139)、播鉢 (1140・1141) などがある。多くが連房式登窯第 1 小期～第 4 小期に属する。肥前窯産陶磁器には染付丸碗 (1115～1116)、陶器鉄絵丸碗 (1112) が、中国産磁器には白磁小杯 (1113・1114) などがある。土師器には皿や焼塩壺、銅網などがある。土師器皿は破片数で 284 点が出土しており、次の 5 類に分類できる。1 類は口径が 10.5cm 前後で体部から口縁部にかけて丸みを持つもの (1119・1120)、2 類は口径が 10.5cm 前後で体部が直線的に開き口縁部がわずかに外折するもの (1121)、3 類は口径が 8cm 前後で体部から口縁部にかけて丸みを持つもの (1122～1124)、4 類は口径が 13cm 前後で体部がやや急に立ち上がり深いもの (1125)、5 類は口径が 13cm 前後で体部が直線的に開き口縁部がわずかに外折するもの (1126・1127) である。焼塩壺は手づくね調整の製品ばかりである。内耳鍋は口縁部が内彎する半球形内耳鍋であるが、詳細な時期は特定できない。1142 は高台

が低いタイプの木胎漆器椀で外面に草花紋が描かれている。

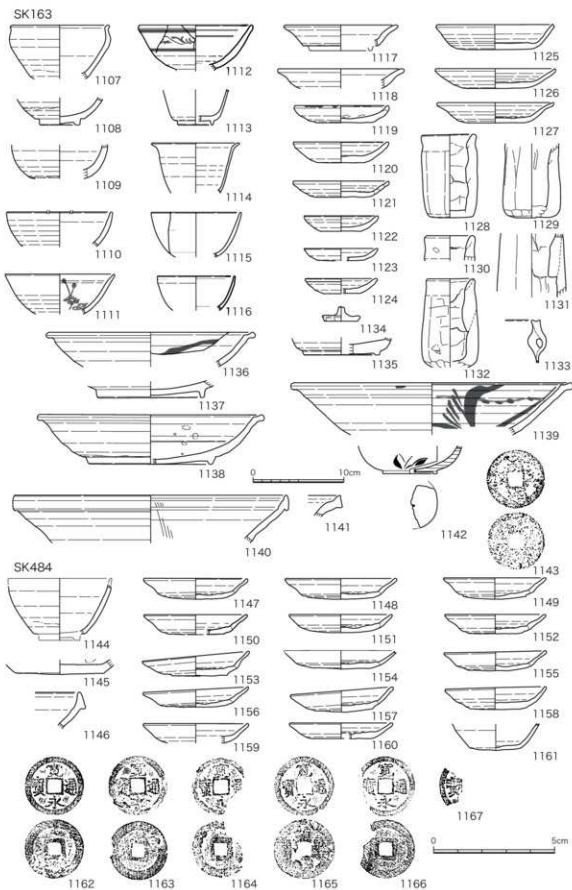
第 6 項 SK484 出土遺物

(第 105 図 1144～1167)

SK484 からは土師器皿 768 点を中心に 885 点が出土した。江戸時代に属する陶磁器類はわずかに存在しなかった。瀬戸美濃窯産陶器には天目茶碗 (1144)、折縁中皿 (1145)、播鉢 (1146) などがあり、1144 が連房式登窯第 1 小期～第 2 小期に属するものである。土師器皿は形状を確認できるものは全てロクロ調整であり、4 類に区分できる。1 類は口径が 11～12cm で体部が直線的に開き口縁部がわずかに外折するもの (1147～1157・1159) であり、大半の土師器皿はこのタイプであった。2 類は口径が 11～12cm で口縁部がやや内彎するもの (1158)、3 類は口径が 11～12cm で体部が直線的に開き器高が低いもの (1160)、4 類は口縁部が残存しないが器高



第 104 図 C 期の遺物実測図 (5) SD14



第 105 図 C 期の遺物実測図 (6) SK163・SK484

SK40



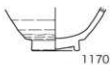
1168



1169



SK49



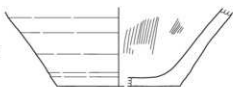
1170



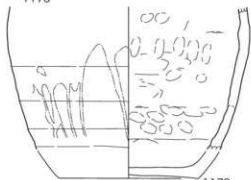
1171



1172



1174



1173



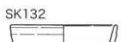
1175

SK90



1176

1177



1178



1179



SK132

SK127



1180



1181



1182



1183



1184



1185



1186

SK202



1187

SK224



1188



SK454

1193

SK270



1189

SK296



1190



1191



1192

SD21



1194



1195

SD22



1196



1197



1198



1199



1200



1201

第 106 図 C 期の遺物実測図 (7) 土坑・溝出土遺物 (1)

が高いもの(1161)である。土師器皿は破片数では多いが、多くは小破片であり実際には30～40個体が存在したに過ぎないと思われる。銭貨は古寛永通宝で全部で6点が確認された。二次的に被熱されたためか脆く小破片に割れている。SK484は遺構としては墓坑としての形状を呈していなかったが、6枚の銭貨と土師器皿の組み合わせからみて、墓またはその他の宗教的な施設の可能性も考慮される。土師器皿の形状と寛永通宝の存在からみて、C-2期に属する資料で17世紀第3四半期に位置づけられる。

第7項 SK94 出土遺物

(第107～109図 1202～1295)

SK94からは瀬戸美濃窯産陶器92点、肥前窯産磁器94点、瓦251点などを中心に873点が出土した。多様な産地の製品が含まれている点が特徴となっている。

瀬戸美濃窯産陶器には御室茶碗(1223)、型打菊皿(1240)、蓋(1249・1250)、汁次(1277)、鍋(1280)、双耳小壺(1281・1282)、御深井大皿(1283)、美濃伊賀水指(1284)、黄瀬戸大皿(1286)、こね鉢(1287)、土瓶(1288)、搦鉢(1289～1293)などがある。碗や皿などの供膳具が非常に少なくやや大型の製品が占める割合が高い点が特色である。連房式登窯第8小期に属するもの(1280・1288・1291・1293など)まで存在する。

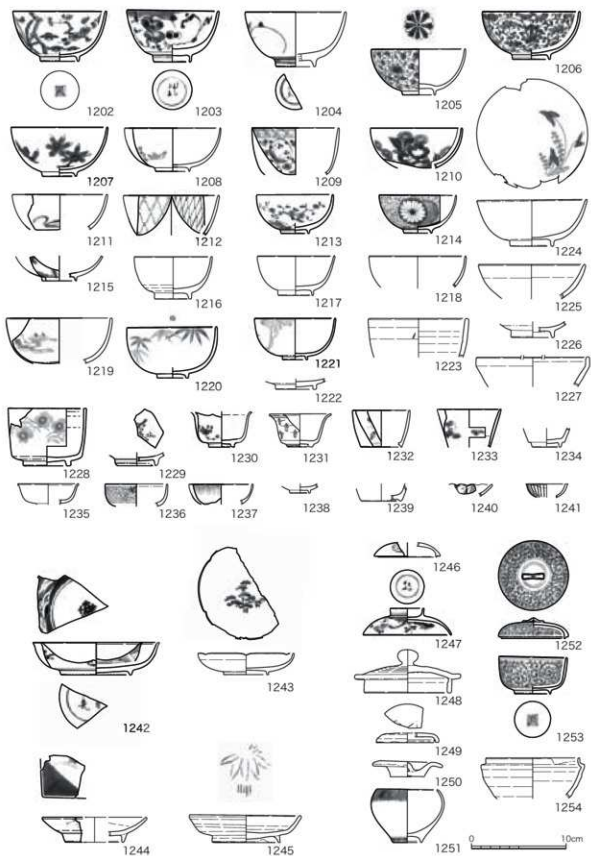
一方、肥前窯産磁器には染付丸碗(1202～1215)、白磁小碗(1216・1217)、染付小杯(1230～1233)、白磁小杯(1234・1238・1239)、染付仏飯具(1236・1237)、白磁紅皿(1241)、染付皿(1242・1244)、染付蓋(1246・1247)、染付無頭壺(1251)、染付合子(1252・1253)などがある。大半は肥前磁器編年のⅢ期からⅣ期に位置づけられ、概ね17世紀末から18世紀前半に属する。全体に法量小さく薄手の有田窯の

製品であり、波佐見窯の製品(1203・1204)もわずかに認められる。

陶磁器類にはこの他に、肥前陶器京焼風丸碗(1219)・刷毛目丸碗(1224)・京焼風蓋物(1228)、京焼陶器丸碗(1221)、信楽窯産陶器丸碗(1220)、京・信楽系陶器丸碗(1222)・輪花皿(1243)、中国産天目茶碗(1227)・青花碗(1229)などがある。いずれも繊細な作風の製品が多い点が特色となっている。

土師器には皿と焙烙が存在する。土師器皿は大きく、ロクロ調整で胎土が橙色を呈するAタイプと非ロクロ調整で胎土が灰白色になるBタイプの2種に分けられる。大多数の皿はAタイプに属しており、これらは法量によって1類(口径が17cm前後:1255・1256)、2類(口径が12.5cm前後:1257～1259)、3類(口径が11cm前後:1260～1264)、4類(口径が10cm前後:1265～1267)、5類(口径が8.5cm前後:1268～1271)、6類(口径が6.2cm前後:1272～1274)の6類に細分される。いずれも体部が逆ハ字状に直線的に開くものである。一方、Bタイプは非常に少なく2点のみが確認された。1275は内面に「寿」字が陽刻状に型打ちされた皿で、口縁部はやや内彎する。1276は口縁部のみ残存する大皿状の製品で口縁部は強く内彎している。

全体としては、肥前窯産陶磁器や京焼製品などの資料はC-2期からC-3期前半に属する年代が与えられ、一方瀬戸美濃窯産陶器ではC-3期後半に位置づけられる資料が多い。前者は破損の度合いが低いことなどから見て、17世紀末から18世紀前半に属する供膳具を中心とした遺物がC-3期後半(18世紀第4四半期)頃に廃棄されたものと考えられる。



第107図 C期の遺物実測図(8) SK94(1)

第8項 SK01 出土遺物 (第110～120図)

1296～1512)

SK01は巨大な廃棄土坑で、下位でSK01AとSK01Bに区分された。遺物の取り上げは上位ではSK01一括で行い、途中からAとBに区分した。しかし、状況からみてSK01とした遺物の大半はSK01Bに属するものと考えられ、ここではSK01とSK01Bで出土した資料をSK01として一括して報告することとした。

SK01から出土した遺物は13173点と遺構一括出土資料としては最も多い。このうち瓦類(5213点)木製品・木材片(7048点)などが含まれている。

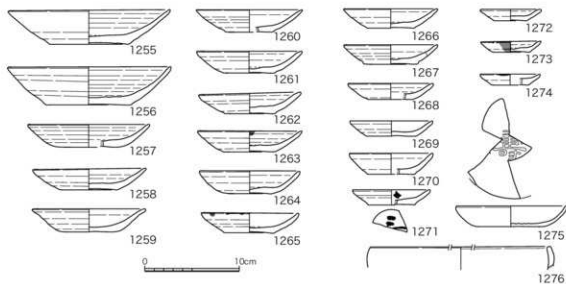
瀬戸美濃産陶器には天目茶碗(1296～1298)、尾呂茶碗(1299・1300)、端反碗(1301)、腰鎔茶碗(1302～1304)、御室茶碗(1305・1400)、丸碗(1306～1309)、染付丸碗(1315)、志野丸皿(1337～1340)、型打皿(1345)、御深井鉢(1349)、織部向付(1351・1352)、笠原鉢(1353～1355)、壺(1358)、香炉(1359)、播鉢(1361～1363)、練り鉢(1364)、などがある。これらは連房式登窯第1小期から第8小期に至る各段階の遺物が存在している。

一方、肥前産陶磁器には灰軸丸碗(1311～1314・1316～1320・1322・1323)、染付丸碗(1324)、白磁丸碗(1325・1326)、染付小杯(1329～1332・1334・1335)、白磁小杯(1333)、染付皿(1347・1348)、青磁大皿(1365・1378)、三島手大皿(1373)、白磁鉢(1377)などがある。大半は肥前磁器編年のⅢ期からⅣ期に位置づけられ、概ね17世紀末から18世紀前半に属する。

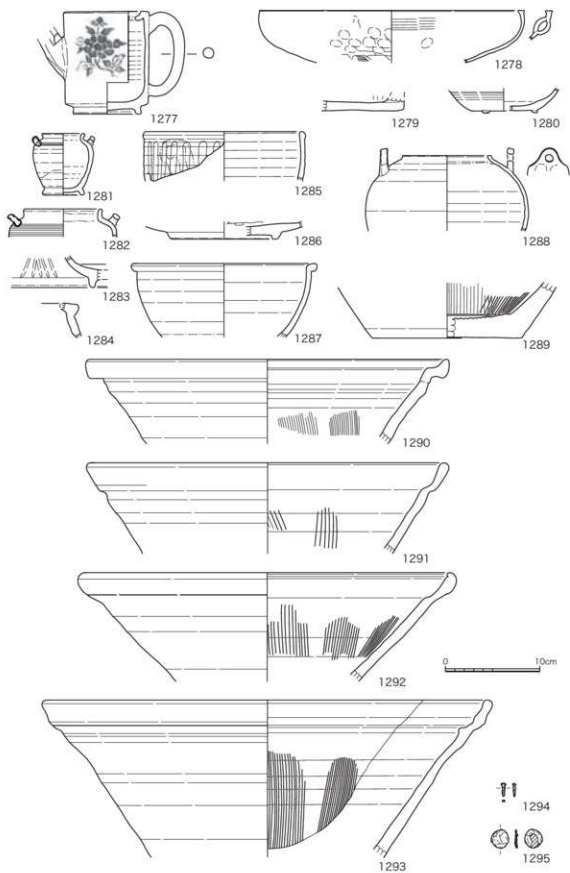
この他の陶磁器類には京焼系の軟質施軸陶器碗(1321)や中国漳州窯系青花大皿(1372)、備前産陶器小瓶(1375)、常滑産陶器赤物甕(1392～1395)、赤物火鉢(1396・1397)などがある。一方、土師器にはロクロ調整皿、半球形内耳鍋(1385・1386)、焼塩壺蓋(1387)と身(1388～1390)などがある。ロクロ調整皿は橙色の胎土を持つものでSK94出土資料と類似する。法量は口径が16cm前後のもの(1381～1384)と11cm前後のもの(1379・1380)に区分できようである。

金属製品には銅製品の銭貨(1401)、鉄製品釘(1402～1405)などの他に、弧状に彎曲した棒状鉛製品(1407)も存在する。

SK01からは木製品および木片が大量に出土し



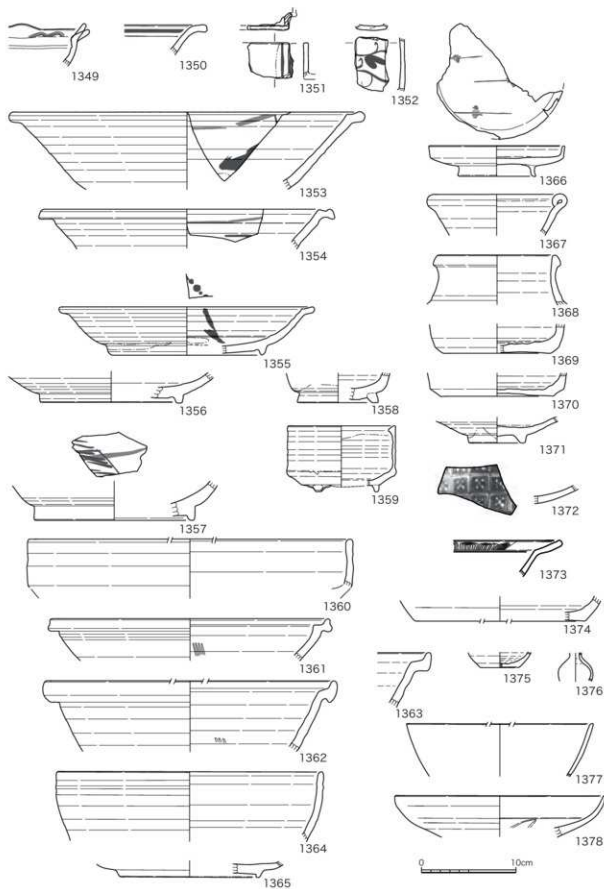
第108図 C期の遺物実測図(9) SK94(2)



第 109 図 C 期の遺物実測図 (10) SK94 (3)



第 110 図 C 期の遺物実測図 (11) SK01 (1)



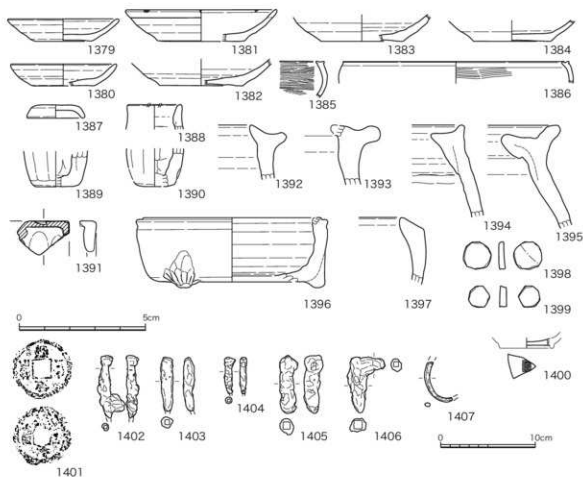
第 111 図 C 期の遺物実測図 (12) SK01 (2)

ている。木製品およびその部材としては楔(1408～1421)、結桶底板(1422・1423)、結桶側板(1424)が存在する。楔は横断面形が正方形に近い角材の一端を斜めに削り取ったもの(1408～1417・1419・1420)と横断面形が長方形の板材の一端を斜めに削り取ったもの(1418、1421)に区分できる。この他には用途を特定できない加工された板材や角材(建築部材片)と、木材加工の過程で産出された端切れ材などが大量に認められる。後者の端切れ材にはチョウナやノミなどで削り取られた木片(1425～1427)と台カンナ屑(1428・1429)がある。また、特別なものとして植物質の繊維を編んだ紐状のもの(1501・1502)も認められる。

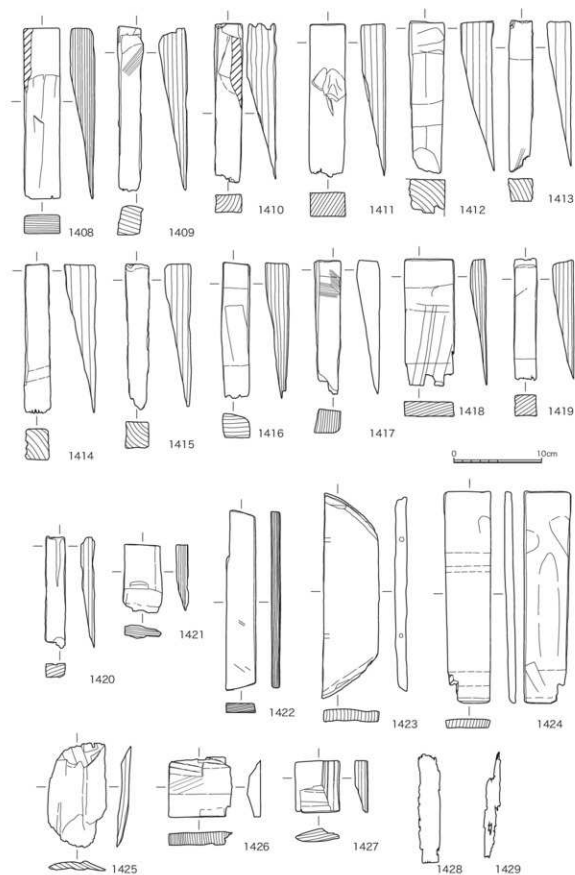
建築部材片は大きく角材系と板材系に大別で

き、形状から細分できる。角材系1類は1～数ヶ所に穿孔が認められるもの(1436・1442・1444・1447・1453)である。多くは平面形が長方形の孔が設けられている。角材系2類は一方の先端を尖らせた杭状のもの(1439)、角材系3類は一方の先端を斜めに削り取った楔状のもの(1441・1453)、角材系4類は両端の先端にほぞ加工が施されたもの(1431)、角材系5類は鉄釘が打ち込まれたもの(1455)である。この他の特別な特色がない角材を角材系6類として一括しておく。これらの角材系建築部材片の多くは表面にノコギリ痕が残存している。また、例外としてL字状の角材に孔が設けられたもの(1499)も存在する。

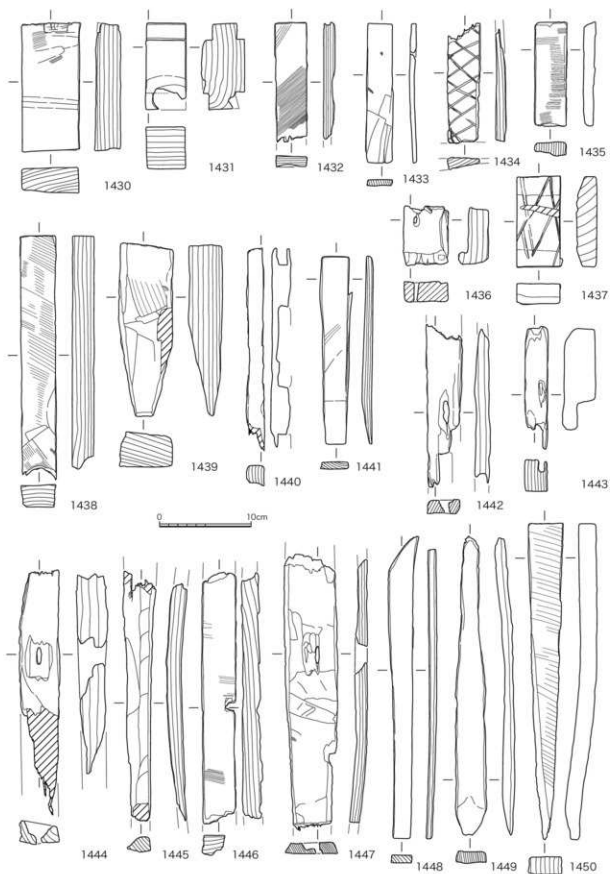
一方、板材系建築部材片は4類に分類できる。



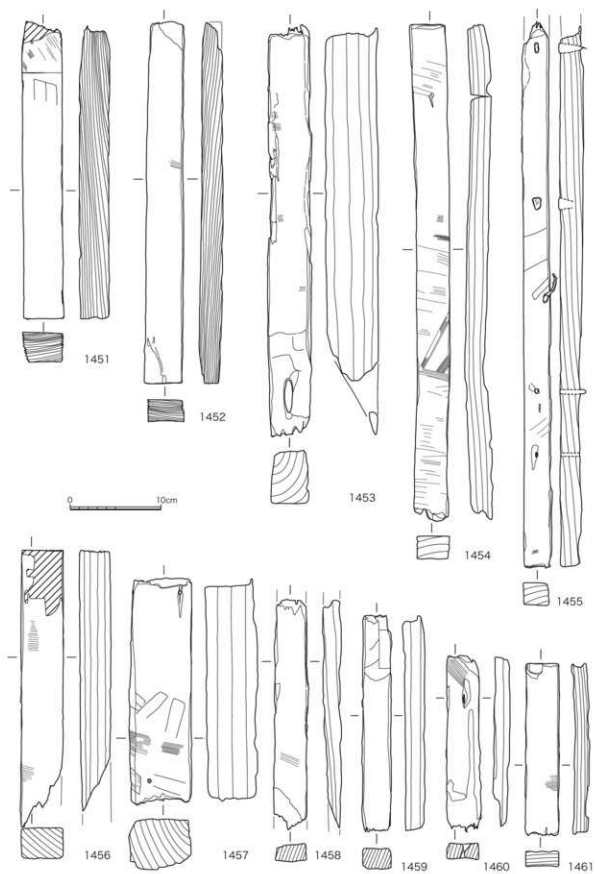
第112図 C期の遺物実測図(13) SK01(3)



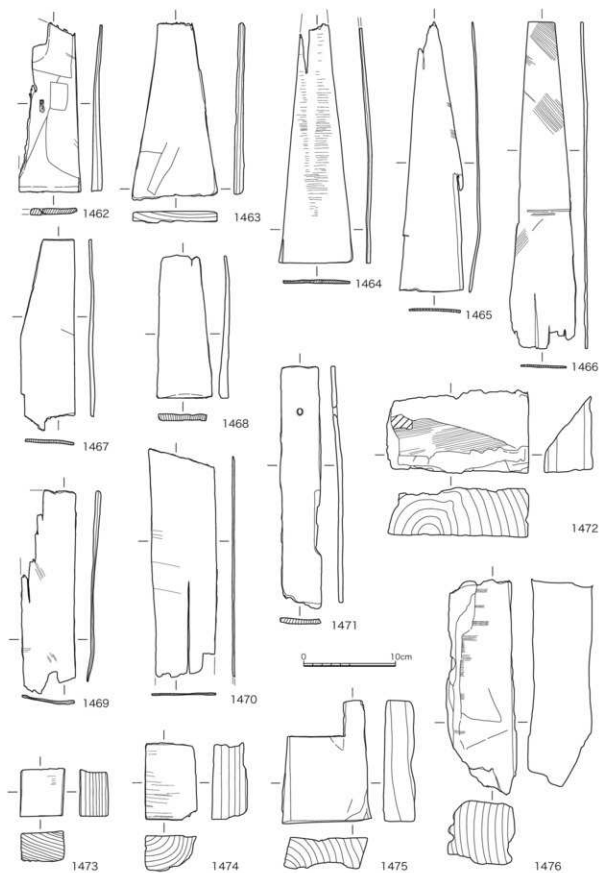
第113図 C期の遺物実測図(14) SK01(4)



第 114 図 C 期の遺物実測図 (15) SK01 (5)



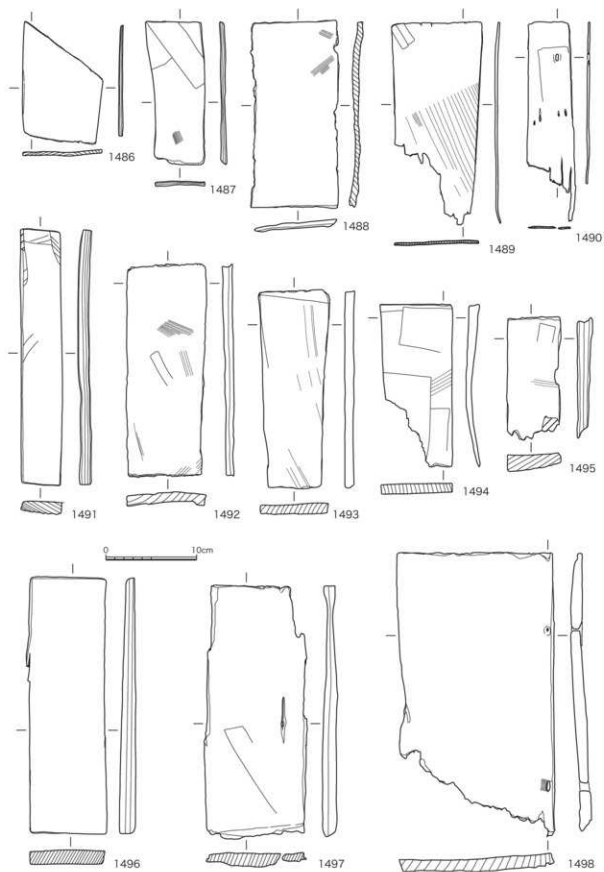
第 115 図 C 期の遺物実測図 (16) SK01 (6)



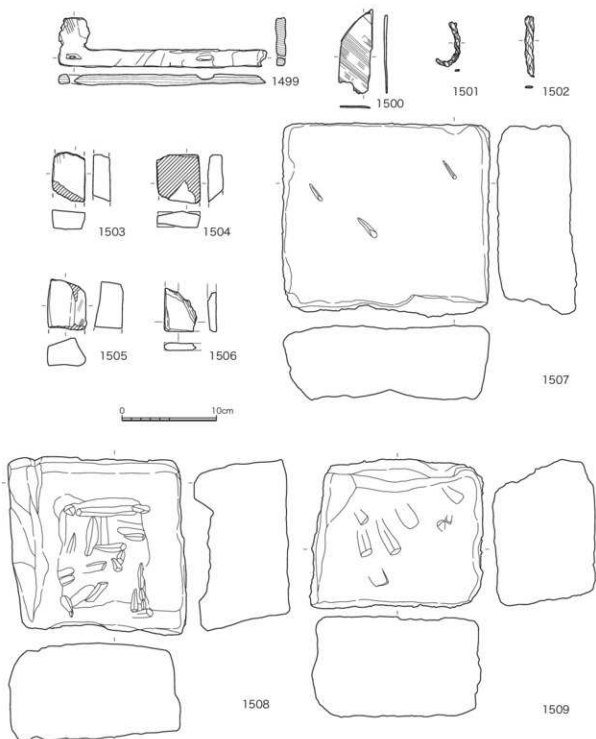
第116図 C期の遺物実測図(17) SK01(7)



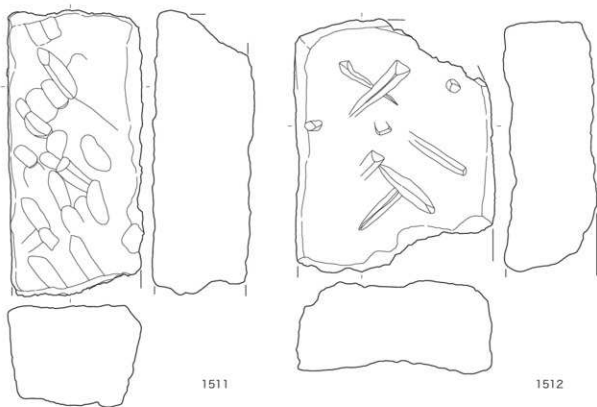
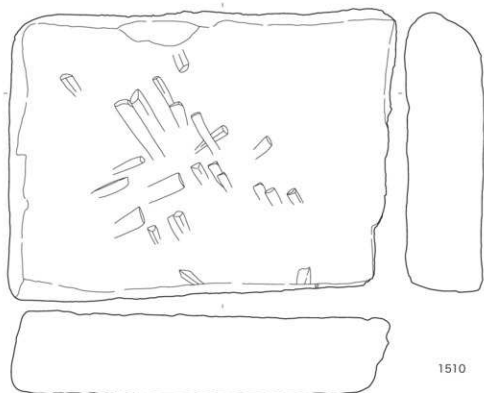
第 117 図 C 期の遺物実測図 (18) SK01 (B)



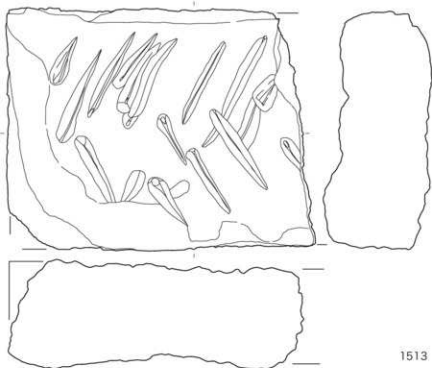
第118図 C期の遺物実測図(19) SK01 (9)



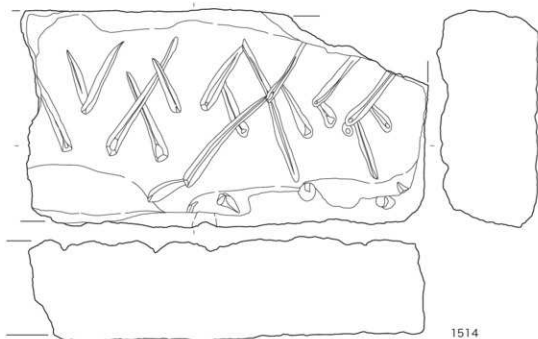
第119図 C期の遺物実測図(20) SK01(10)



第120図 C期の遺物実測図(21) SK01(11)



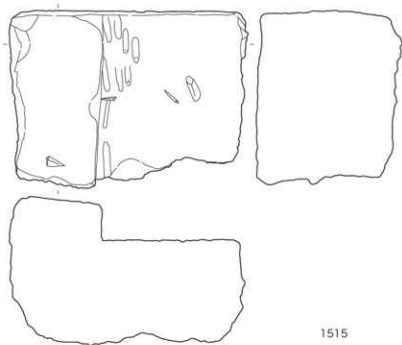
1513



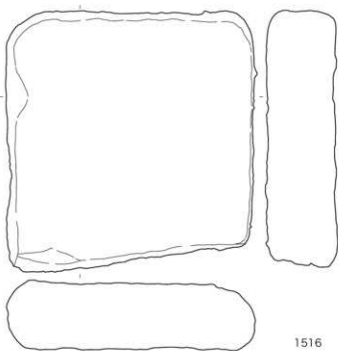
1514



第 121 図 C 期の遺物実測図 (22) SX09



1515



1516

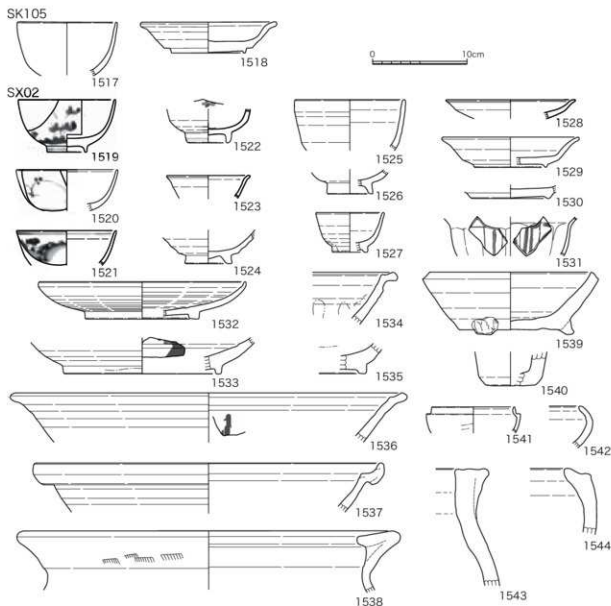


第 122 図 C 期の遺物実測図 (23) SK47・SK63

板材系1類は平面形が高さの高い台形状の板材(1462~1468)である。これらは本来二等辺三角形を形成していた可能性も考えられる。板材系2類は多数の小さな孔が穿たれたもの(1479~1481・1490)である。孔は木釘や竹釘の痕跡と思われ屋根板などの部材の可能性はある。板材系3類は材の長辺に沿う形で穿孔されたもの(1497・1498)である。この他の特別な特色がない板材を板材系4類として一括しておく。これらの板材は長さが50cmを超える大型のもの

は少なく、製材の方法はノコギリ法と割製法の両者がある。

石製品には砥石と切り石がある。砥石は凝灰質泥岩などで作られた中砥または仕上げ砥と見られるもの(1503~1506)である。切り石は凝灰岩または凝灰質砂岩を直方体に切り出して建築用資材として利用されたものと想定される。表面にノミ痕が残存するものが多い。平面形が正方形に近い厚手のもの(1507~1509)と平面形が長方形で大きく厚さはやや薄いもの(1510~



第123図 C期の遺物実測図(24) SK105・SX02(1)

1512) に区分できる。

この資料群は陶磁器や土器類からみてC-3期に属する資料で18世紀に位置づけられる。陶磁器類は相対的に少なく、瓦や建築部材片が多く、建築用資材と思われる切り石などの存在からみて、この資料群は何らかの普請に付随する廃材を処理したものと考えられる。

第9項 SX02 出土遺物

(第123～124図 1519～1550)

SX02からは瀬戸美濃窯産陶器などを中心に2837点が出土した。最も多い資料は近世に属する瓦で2382点で全体の約84%を占めている。

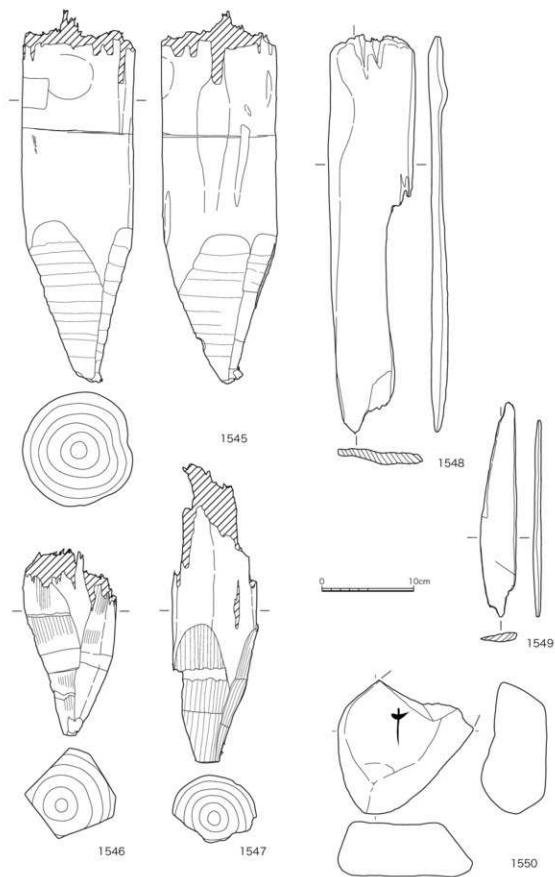
瀬戸美濃窯産陶器には丸碗(1524)、小碗(1526)、志野皿(1529・1530)、中皿(1532)、鉢(1533・1535)、笠原鉢(1534・1536)、搦鉢(1537)、蜜茶入(1541)、火鉢(1542)などがある。最新資料は1532で連房式登窯第7小期～第8小期に属する。一方、肥前窯産陶器には染付丸碗(1519～1522)、灰軸丸碗(1525・1527)、染付小杯(1523)、染付皿(1528)などがある。大半は肥前磁器編年のⅢ期からⅣ期に位置づけられ、概ね17世紀末から18世紀前半に属する。この他の陶磁器類には中国景德鎮窯系青花輪花鉢(1531)、常滑窯産陶器真焼甕(1538)・真焼火鉢(1539)、赤物甕(1543)・赤物火鉢(1544)などがある。一方、土器器は皿や鍋類は比較的少なく、他に焼壺壺身(1540)がある。この他に木製品杭や用途不明の板材などがある。このうち少なくとも杭についてはSX02が埋積した後に打ち込まれたものと考えられ、本来のSX02の埋積段階に伴う資料ではない。この資料群全体としては以前の段階の資料を多く含むもののC-3期に属する資料で18世紀に位置づけられる。

第10項 SD01 出土遺物

(第125～127図 1551～1630)

SD01からは瀬戸美濃窯産陶器108点や瓦類1053点を中心に2226点が出土した。中でも鉄製品釘の出土量(239点)が非常に多い点がこの資料の特色となっている。瀬戸美濃窯産陶器には平碗(1564)、碗(1557・1560・1563・1565・1566)、志野丸皿(1569・1570)、搦鉢(1586・1587)、煙硝搦(1572)、匣鉢(1582)、笠原鉢(1583)、内耳鍋(1581)などがある。大半が連房式登窯第1小期～第6小期に属するが、1581は第8小期に属する。一方、肥前窯産陶器には染付丸碗(1551・1552・1554)、上絵付丸碗(1553)、鉄軸丸碗(1556)、灰軸丸碗(1562)、染付皿(1567)、染付蓋(1568)、青磁皿(1573)、灰軸水指(1585)などがある。大半は肥前磁器編年のⅣ期に位置づけられ、概ね18世紀代に属する。この他の陶磁器類には中国景德鎮窯系青花碗(1555)・青花小杯(1558)、常滑窯産陶器真焼甕(1593)・真焼火鉢(1580)、赤物甕(1592)、産地不明陶器碗(1559・1561)などがある。1593はほぼ完形のもので破損して出土した。土器器はロクロ調整皿や焙烙、焼壺壺などがある。ロクロ調整皿は橙色の胎土を持つ体部が直線的に開くものである。口径は約16cmのもの(1574)、約13cmのもの(1575)、約12cmのもの(1576)などに分けられる。1590と1591は瓦器の大型筒状製品である。内面は非常に摩滅して白色の胎土が露出しており、外面には格子紋状の刻線が施されている。用途は特定できないが、おそらく井戸側の部材であった可能性がある。

SD01から出土した資料にはこの他に大量の鉄製品釘がある。長さは10cmを超えるものはなく小型の製品ばかりである。頭部は平たく伸ばした後折り曲げた形状である。軸部上位の錆膨れした部分に繊維状の痕跡が付着したものが多く、木材に打ち込まれた状態で錆びたものと考えられ



第 124 図 C 期の遺物実測図 (25) SX02 (2)

る。織維痕の方向は釘の主軸と約30度斜めとなっていることから、釘は材に対して斜めに打ち込まれたことが想定される。

全体的に見ると、C-3期に属する資料で18世紀第3四半期頃に位置づけられる。

第11項 SD03 出土遺物

(第127図 1631～1647)

SD03はSD01と連続する溝であり、SD01と遺物の様相はそれほど相違しない。ロクロ調整皿は橙色の胎土を持つ体部が直線的に開くものである。口径は約12cmのもの(1634)、約11cmのもの(1635)、約8cmのもの(1636)などに分けられる。美濃窯産陶器灯明皿(1633)が連房式登窯第8小期に属することから、C-3期に属する資料で18世紀第4四半期に位置づけられる。

第12項 SK23 出土遺物

(第128図 1648～1692)

SK23からは瀬戸美濃窯産陶器75点を中心に235点が出土した。近世に属する土師器は確認されなかった。瀬戸美濃窯産陶器には碗(1662)、丸碗(1663)、箱型湯呑(1664)、蓋(1682・1683)、徳利(1685)、搦鉢(1686～1688)、火鉢(1690)、箸置(1684)などがある。大半が連房式登窯第5小期～第8小期に属する。1683は再興織部の製品で19世紀初頭に位置づけられる。肥前窯産陶磁器には染付丸碗(1649～1660)、染付蓋物(1661)、京焼風丸碗(1668)、染付猪口(1670)、染付皿(1671～1676)、染付蓋(1681)などがある。大半は18世紀代に属する。この他の陶磁器類には関西系?磁器染付丸碗(1648)、信楽窯産陶器丸碗(1665)、常滑窯産陶器真焼甕(1689)などがあり、産地不明陶器も一定量存在する。土師器は皿や焼壺などがある。土師器ロクロ調整皿は橙色の胎土を持

ち、口径は10～12cmを測る(1677・1678・1680)。非ロクロ調整皿も橙色の胎土を持つもの(1679)である。C-4期に属する資料で19世紀第1四半期に位置づけられる。

第13項 SK93 出土遺物

(第129図 1702～1705)

SK93からは正位置に設置された瀬戸美濃窯産陶器水指(1703)が出土した。水指内部から水指に伴う蓋(1702)と石材(1703・1704)が出土した。水指と蓋は連房式登窯第8小期に属し、C-3期(18世紀第4四半期)に位置づけられる。

第14項 SK60 出土遺物

(第130図 1718～1735)

SK60からは常滑窯産陶器233点や瓦529点を中心に1023点が出土した。瀬戸美濃窯産陶器には丸碗(1720)、皿(1721)、搦鉢(1722)、匣鉢(1731)、肥前窯産陶磁器には染付丸碗(1719)、京焼風丸碗(1718)などがあるが、他の遺構に比べ出土割合は少ない。連房式登窯第6小期までに属する資料群である。常滑窯産陶器には真焼甕(1733～1735)や赤物甕(1732)がある。土師器ロクロ調整皿は胎土が橙色を呈する体部が逆ハ字状に開くもので、口径は17.5cm前後のもの(1724・1725)、14cm前後のもの(1726)、12cm前後のもの(1727)の3種に区分できる。C-3期に属する資料で18世紀中頃に位置づけられる。

第15項 C期の遺構出土遺物

1170～1175はSK49から出土した遺物であり、このうち1173は体部に自然釉がかかる信楽窯産陶器甕である。1513と1514はSX09を構成する石材である。直方体を形成する切り石で表面に多数のノミ痕が残存する。1515はSK47、1516はSK64から出土した切り石である。1755

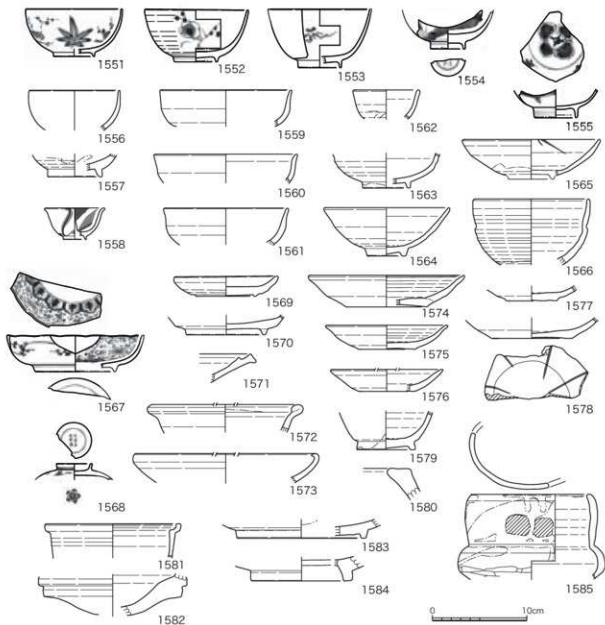
～1765はSD13出土資料である。1758は美濃窯産陶器の破片で葉状の装飾の一部であるが器種は特定できない。1759は瓦器の灯火具と推測される。1762は常滑窯産陶器赤物製品で、内面に「井」字状に線刻が施されており鉢状の製品と推測される。

第16項 包含層出土遺物

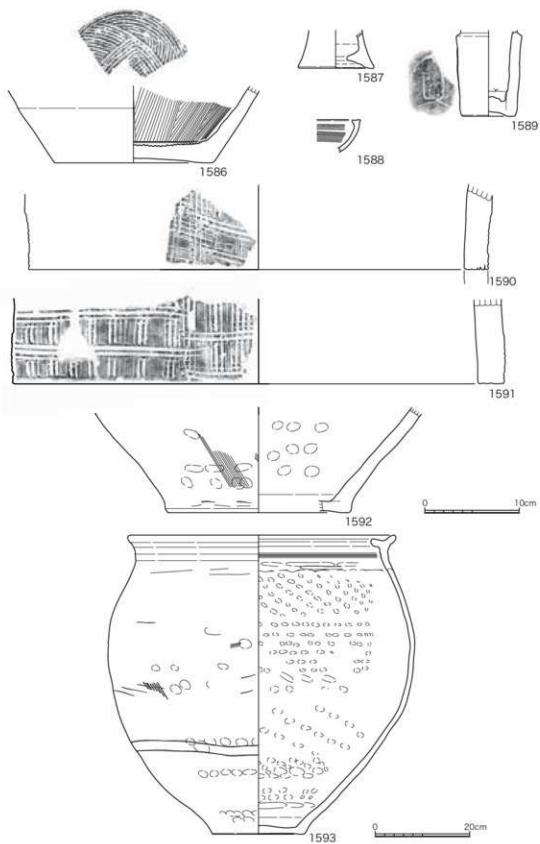
(第132図 1766～1814)

上記で説明した以外にも、C期の遺構に伴わないC期の資料も多数存在する。このうち主要なものの一部を紹介しておきたい

1766は瀬戸美濃窯産陶器白目茶碗で登窯第2小期に、1767は同じく黒織部香茶碗で登窯第1小期に、1769は同じく京焼写しの碗で登窯第



第125図 C期の遺物実測図 (26) SD01 (1)

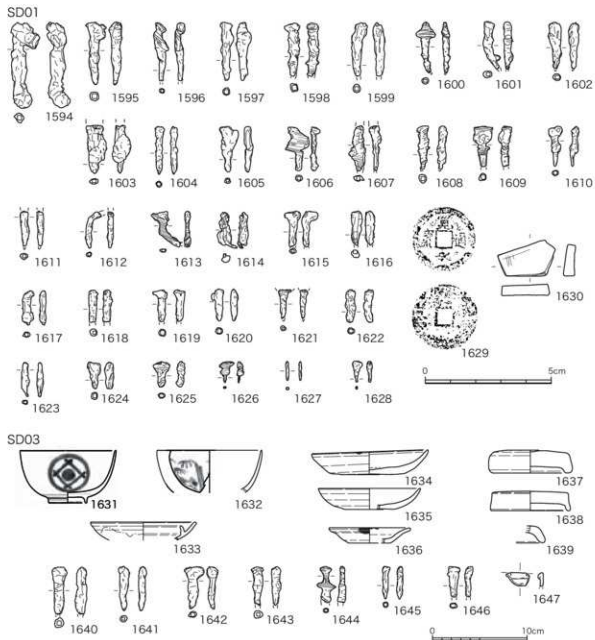


第126図 C期の遺物実測図(27) SD02(2)

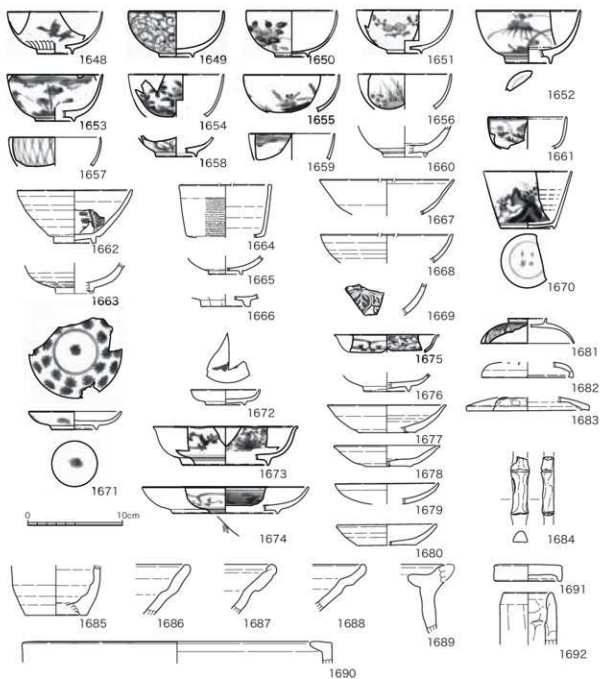
名古屋城三の丸遺跡 VII

5 小期に属する。1781 は瓦器（瓦質土器）の腰折皿で瀬戸美濃窯産陶器の製品を模倣したものと考えられる。1786 は土師器ロクロ調整皿で口縁部が内彎するタイプである。焼成後に穿孔され口

縁部付近が厚けている。1789 は肥前窯産磁器染付皿で 17 世紀中頃に位置づけられる古い資料である。1809 は土人形で鳥形である。

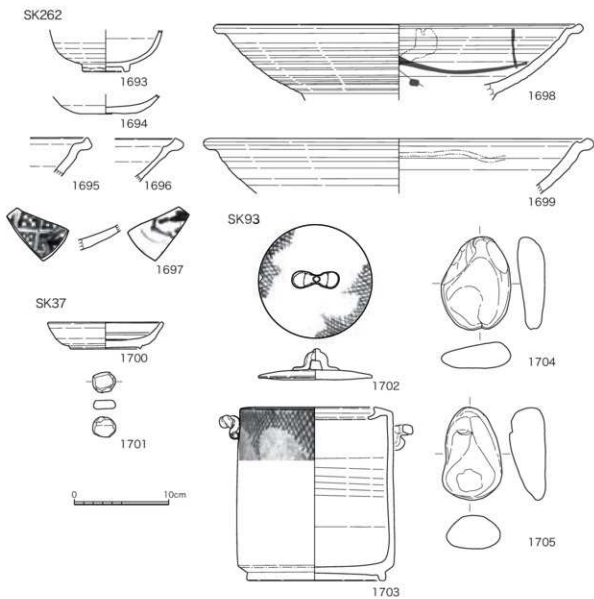


第 127 図 C 期の遺物実測図 (28) SD01 (3)・SD03

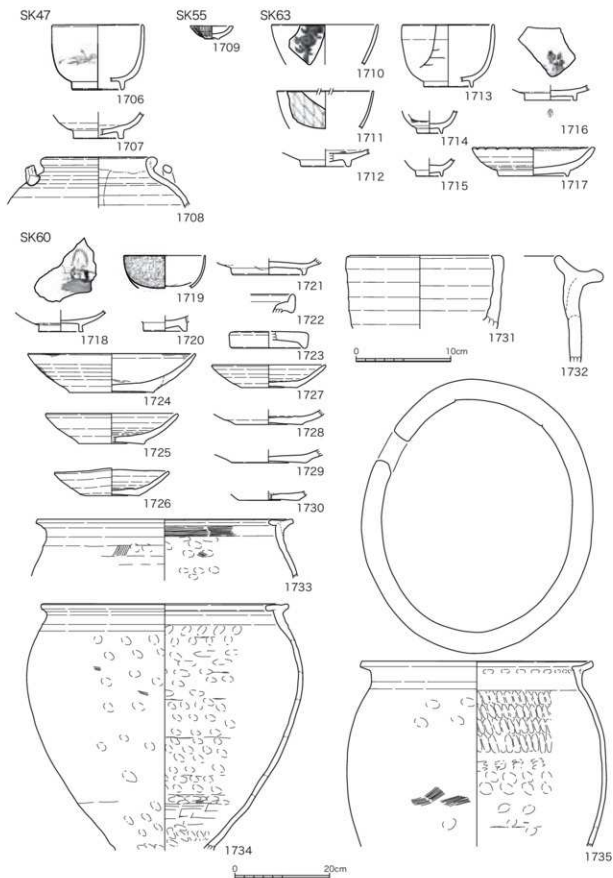


第 128 図 C 期の遺物実測図 (29) SK23

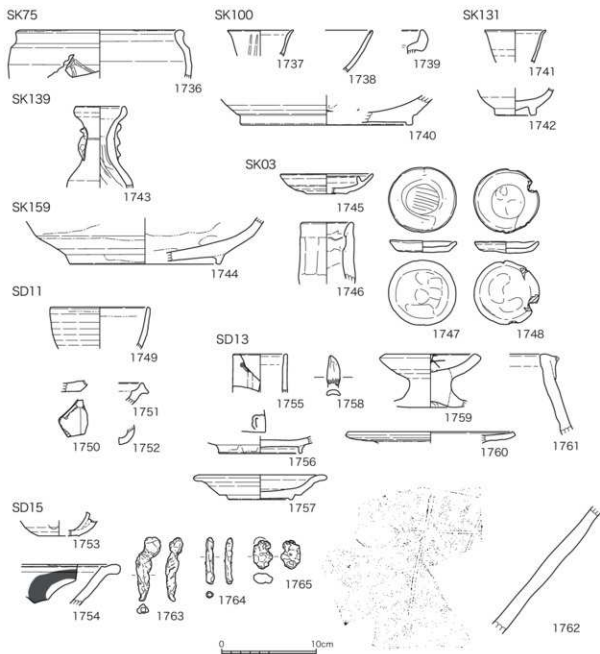
名古屋城三の丸遺跡 VII



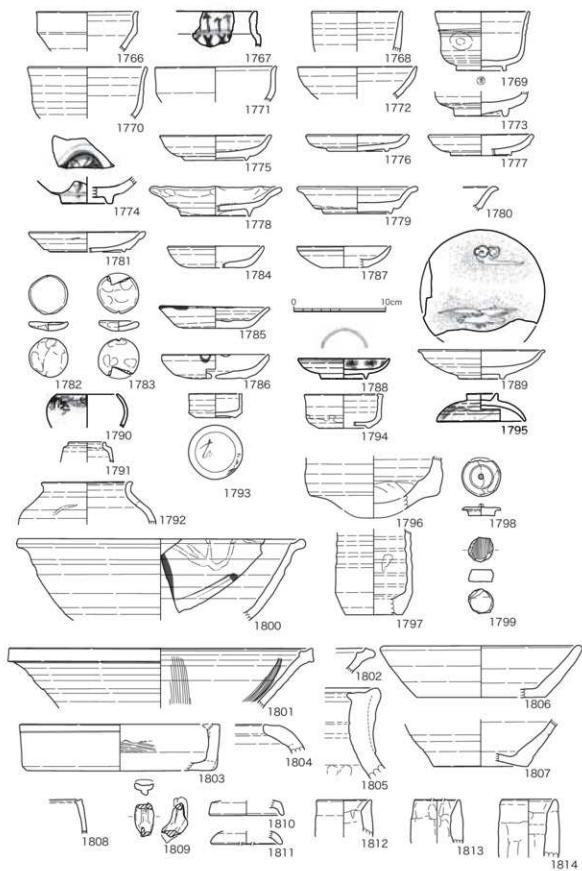
第 129 図 C 期の遺物実測図 (30) SK262・SK37・SK93



第130図 C期の遺物実測図(31) SK47・SK55・SK63・SK60



第 131 図 C 期の遺物実測図 (32) 土坑・溝出土遺物 (2)



第 132 図 C 期の遺物実測図 (33) 包含層他出土遺物

第 17 項 軒丸瓦

(第 133～136 図 1815～1858)

この項目から C 期に属する瓦類を種類ごとに紹介する。瓦類は 27 リットル入りコンテナで約 176 箱、19930 点、約 2500kg 出土し、軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、丸瓦、平瓦、棧瓦、鬼瓦、飾瓦、輪違い瓦、面戸瓦、道具瓦などが存在する。軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦などの本瓦葺きの瓦類が圧倒的多数を占め、棧瓦葺きの瓦類が少ないことが江戸時代の瓦としてはやや異質な出土状況を呈している。分析や計量の方法は『清洲城下町遺跡 VII』に準拠した。

軒丸瓦と分類されたものは全部で 103 点が出土した。この中で瓦当が残存しある程度瓦当面の紋様が特定できるものが 66 点存在する。瓦当面に金箔押などの装飾が施されたものは 1 点も存在しなかった。ここでは瓦当面の紋様構成により分類を行い、その類別ごとに特徴を記述する。これまで名古屋城関連遺跡出土瓦の分類はいくつかの報告書ごとに行われているが、今回は独自に分類を設定した。分類の方法は瓦当面径により大分類を行い、紋様構成により細分類を実施した。瓦当面径はおおよそ、直径 17.5～19cm 前後、直径 14.5cm 前後、直径 11cm 前後の 3 類に区分できる。この瓦当面径による分類は瓦当面周縁幅が異なる場合があるため範の規模と必ずしも一致しないが、おおよそ丸瓦部の規模と連動すると考えられる。ここでは瓦当面径の規模の大きいものから順にそれぞれ 00 番台、10 番台、20 番台と名づけ、特定できないものを 90 番台とした。また、瓦当面径が特定できない資料の中で紋様構成が巴紋と珠紋の組み合わせでないものが若干量存在し、これらを特別に 30 番台の一群として一括しておきたい。紋様構成による分類は統一的な分類方式は用いず大別ごとに個別に実施することとした。このレベルの分類では下 1 桁の番号を付けて表記した。なお、同紋および同范関係によ

る細分類は出土量がそれほど多くないため今回は実施することを見合わせた。

M01 型式 (左巻三巴紋に 12 珠紋軒丸瓦:

第 133・134 図 1815～1824)

瓦当面径が約 18cm で、紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を 12 個配置するものである。巴の形状が円形の体部に尾部が取り付くような形となっており、巴の内側外郭線が鋭角に屈曲している。圏線を持たず、珠紋はそれほど大きくはない。今回の調査では 9 点が出土した。丸瓦部裏面の調整痕にはコビキ B 手法の痕跡が確認される (1815・1816・1821)。丸瓦部には釘孔の存在が確認できるものもある (1815・1821)。

M02 型式 (左巻三巴紋に 12 珠紋軒丸瓦:

第 135 図 1828～1835)

瓦当面径が約 19cm で、紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を 12 個配置するものと推定される。巴の形状が全体としてなだらかであり、特に巴の内側外郭線が弧状になっている。圏線を持たず、珠紋はそれほど大きくはない。今回の調査では 8 点が出土した。丸瓦部裏面の調整痕にはコビキ B 手法の痕跡が確認されるものがある (1829)。

M03 型式 (右巻三巴紋に 12 珠紋軒丸瓦:

第 135 図 1836～1841)

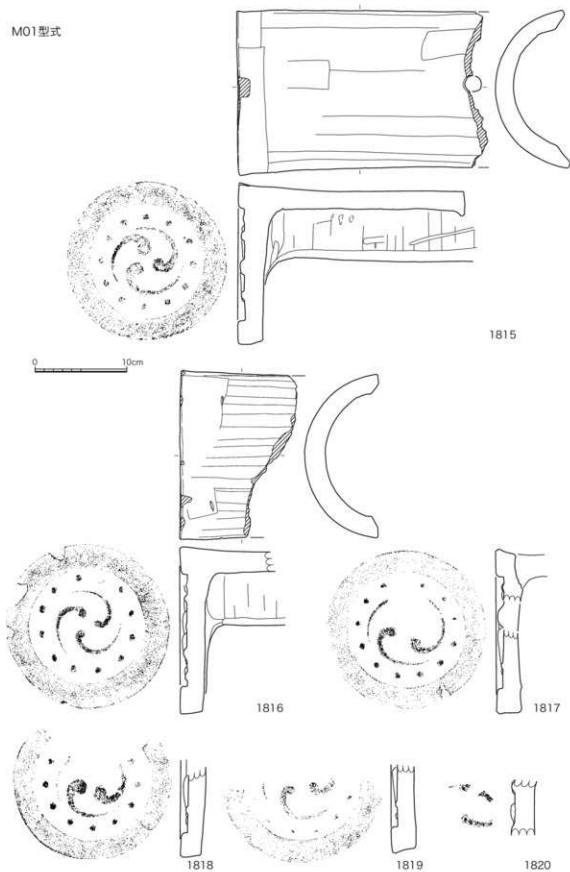
瓦当面径が約 18cm で、紋様構成は中心に右巻三巴紋、外区に珠紋を 12 個配置するものである。巴の形状が円形の体部に尾部が取り付くような形となっており、巴の内側外郭線が鋭角に屈曲している。圏線を持たないが、尾部先端が別の巴紋と近接している。珠紋はあまり大きくはない。今回の調査では 6 点が出土した。

M04 型式 (左巻三巴紋に 12 珠紋軒丸瓦:

第 134 図 1825・1826)

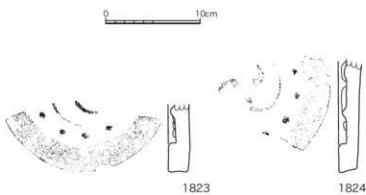
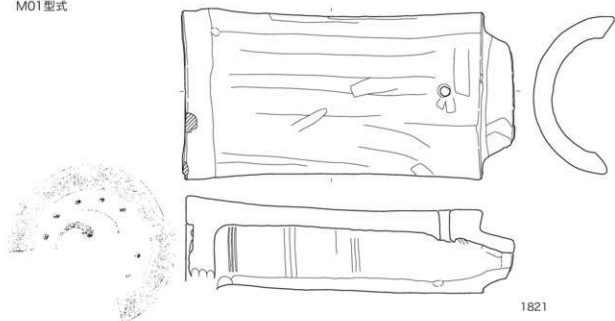
瓦当面径が約 18cm で、紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を 12 個配置するものである。巴の形状が円形の体部に尾部が取り付くよう

M01型式

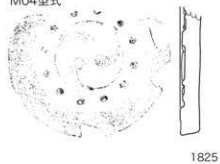


第 133 図 C 期の遺物実測図 (34) 軒九瓦 (1)

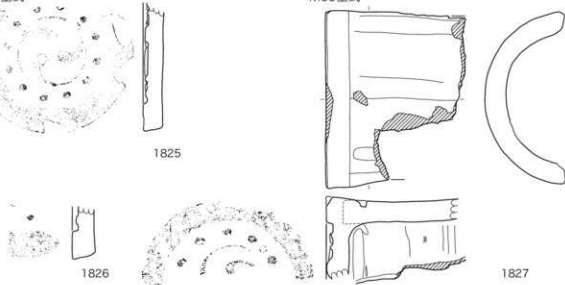
M01型式



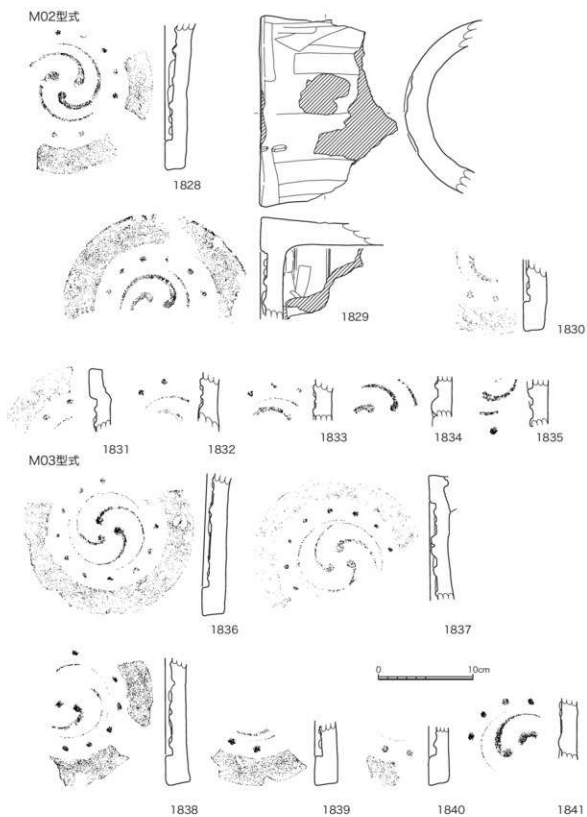
M04型式



M05型式



第134図 C期の遺物実測図(35)軒九瓦(2)



第135図 C期の遺物実測図(36)軒九瓦(3)

な形で、巴の内側外郭線がほぼ直角に屈曲している。尾部の先端が別の巴に接続し圈線を形作っている。珠紋は直径が大きく高い。今回の調査では2点が出土した。

M05 型式 (右巻三巴紋に 12 珠紋軒丸瓦 :

第 134 図 1827)

瓦当面径が約 18cm で、紋様構成は中心に右巻三巴紋、外区に珠紋を 12 個配置するものと思われる。巴の形状は特定が難しいが全体としてなだらかであり、特に巴の内側外郭線が弧状になっ

ている。圈線を持たず、珠紋は直径が 14mm と大きめである。今回の調査では 2 点が出土した。

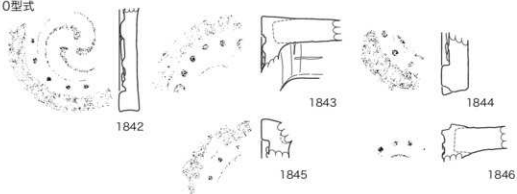
M09 型式

瓦当面径が約 17 ~ 19cm で紋様構成が特定しがたいものを 09 型式として一括した。図示はしなかった。今回の調査では 30 点が出土している。

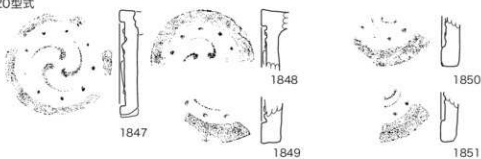
M10 型式 (第 136 図 1842 ~ 1846)

瓦当面径が 14cm 前後のものをここでは一括して M10 型式群として報告する。1842 (M11 型式) の紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠

M10型式



M20型式



M30型式



その他



第 136 図 C 期の遺物実測図 (37) 軒丸瓦 (4)

紋を12個配置するものと思われる。巴の形状は全体としてなだらかである。1843 (M12 型式)の紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を16個?配置するものと思われる。珠紋が大振りな点特徴である。1844 (M13 型式)の紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を12個配置するものと思われる。巴紋の先端が別の巴に極めて近接し、珠紋が大振りである。1845と1846は残存状況が不良で紋様構成を推測することが難しいものである。M10 型式群は今回の調査では9点が出土した。

M20 型式 (第136図 1847～1851)

瓦当面径が11cm前後のものをここでは一括してM20 型式群として報告する。1847 (M21 型式)の紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を9個配置するものである。巴の形状は全体としてなだらかである。1848 (M22 型式)の紋様構成は中心に左巻三巴紋、外区に珠紋を9個?配置するものと思われる。1849～1851は残存状況が不良で紋様構成を推測することが難しいものである。M20 型式群は今回の調査では5点が出土した。

M30 型式 (第136図 1852～1855)

中心に三巴紋、外区に珠紋を配置するもの以外のものをここでは一括してM30 型式群として報告する。1852 (M31 型式)は花卉状の紋様が残存しており、紋様構成は外区を持たないものと思われる。1853 (M32 型式)の瓦当面径は比較的大きく、紋様構成は全体に桐紋を配置したものと思われる。五五桐紋あるいは五三桐紋と推定される。1854と1855 (M33 型式)は円形紋に直線が接続する花紋状の紋様構成を持っている。M30 型式群は今回の調査では4点が出土した。

M99 型式 (第136図 1856～1858)

瓦当面径が特定できず紋様構成も推測しがたいものを一括して99 型式とする。99 型式の丸瓦部裏面の調整痕にはコビキ B 手法の痕跡が確認

される。

第18項 軒平瓦

(第137～140図 1859～1909)

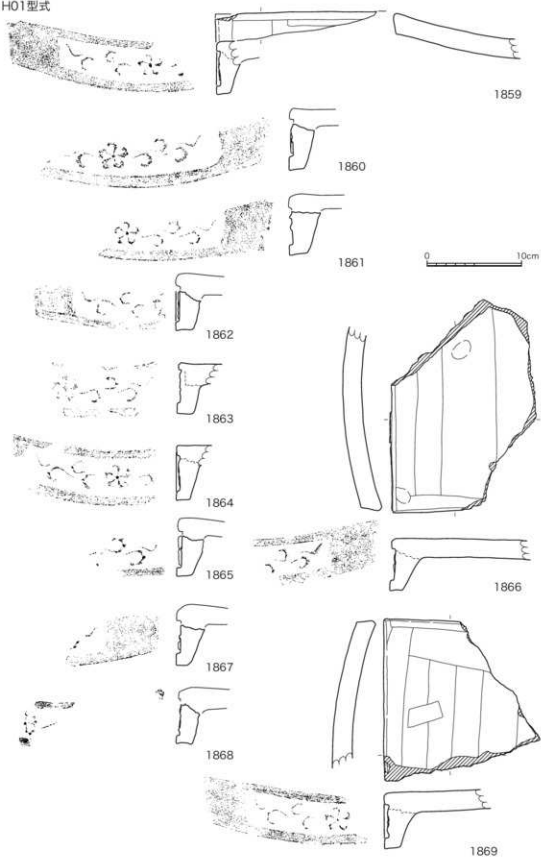
軒平瓦と分類されたものは全部で82点が出土した。この中で瓦当面が残存しある程度瓦当面の紋様が特定できるものが47点存在する。瓦当面に金箔押などの装飾が施されたものは1点も存在しなかった。ここでは瓦当面の紋様構成により分類を行い、その類別ごとに特徴を記述する。分類の方法は瓦当面幅により大分類を行い、紋様構成により細分類を実施した。瓦当面幅はおおよそ、28cm前後と、21cm前後の2類に区分できる。この瓦当面幅による分類は瓦当面脇の幅が異なる場合があるため規模と必ずしも一致しないが、おおよそ平瓦部の規模と連動すると考えられる。ここでは瓦当面径の規模の大きいものから順にそれぞれ00番台、10番台と名づけ、特定できないものを90番台とした。紋様構成による分類は統一的な分類方式は用いず大別ごとに実施することとした。このレベルの分類では下1桁の番号を付けて表記した。なお、同紋および同範囲係による細分類は出土量がそれほど多くないため今回は実施することを見合わせた。なお、今回の資料の中には錆や栈がつく製品は確認されなかった。

HO1 型式 (花紋に4反転均整唐草紋軒平瓦)

第137図 1859～1869)

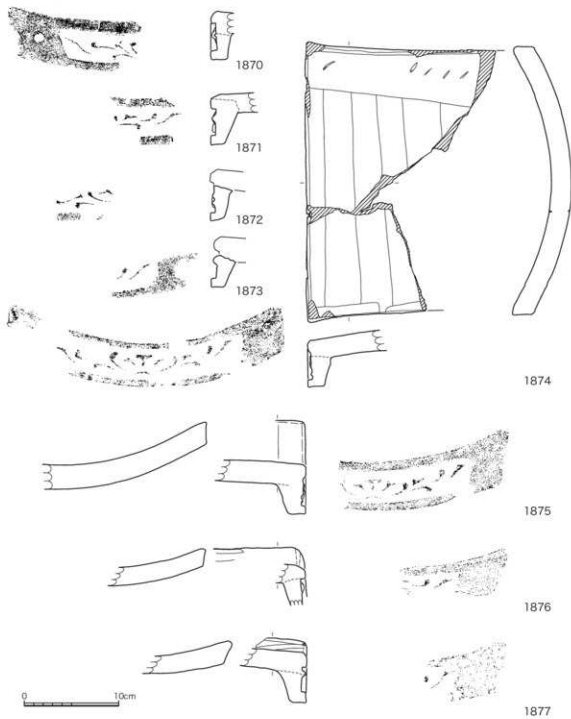
瓦当面幅が約28cmと思われ、紋様構成は花紋の中心飾りに4反転の均整唐草紋を配置するものである。花紋は中心の珠紋に5枚の唐草紋状の花弁が放射状に取り付く構成で左巻きとなっている。均整唐草紋は上下2段に交互に配置され、内側3つの唐草紋は内側に大きく巻き込み、4番目の唐草は先端が外反する。今回の調査では11点が出土した。このうち瓦当面に木目痕が残存するものが5点存在する。11点は細部にわたり類

H01型式



第137図 C期の遺物実測図(38) 軒平瓦(1)

H02型式



第 138 図 C 期の遺物実測図 (39) 軒平瓦 (2)

似することから同紋あるいは同範である可能性が高い。

H02 型式（三子葉紋に 4 反転均整唐草紋軒平瓦：
第 138 図 1870～1877）

瓦当面積が約 28cm と思われ、紋様構成は三子葉紋の中心飾りに 4 反転の均整唐草紋を配置するものである。三子葉紋の中心の葉は T 字状を呈し、唐草紋は短く折れる形状となっている。1 番目と 2 番目の唐草紋の間には上方に伸びる葉紋が存在する。今回の調査では 8 点が出土した。このうち瓦当面に木目痕が残存するものが全く存在しない。8 点は細部にわたり類似することから同紋あるいは同範である可能性が高い。

H03 型式（三子葉紋に均整唐草紋軒平瓦：
第 139 図 1878～1880）

瓦当面積は特定できないが 28cm 前後と推測されるもので、紋様構成は三子葉紋の中心飾りに均整唐草紋を配置するものである。唐草紋が順転するのか反転するのか、あるいは唐草紋の数は特定できない。三子葉紋は下位に配置された珠紋から子葉が伸び、外側の子葉は外折する。唐草紋は内側に大きく巻き込む。今回の調査では 3 点が出土した。

H04 型式（3 反転均整唐草紋？軒平瓦：
第 139 図 1881～1884）

瓦当面積は特定できないが 28cm 前後と推測されるもので、中心飾りは遺存しなかった。均整唐草紋は 3 反転以上を有し、最も外側の唐草紋の下位には小規模の唐草紋が付随する。中心に近いほど唐草紋は内側に大きく巻き込む傾向がある。今回の調査では 4 点が出土した。

H05 型式（3 反転均整唐草紋軒平瓦：
第 139 図 1885～1887）

瓦当面積は特定できないが 28cm 前後と推測されるもので、中心飾りは遺存しなかった。横一列に配置された均整唐草紋は 3 反転以上を持ち、内側に大きく巻き込んでいる。今回の調査では 3

点が出土した。このうち瓦当面に木目痕が残存するものが 1 点存在する。

H06 型式（反転均整唐草紋軒平瓦：
第 139 図 1888・1889）

瓦当面積は特定できないが 28cm 前後と推測されるもので、中心飾りは遺存しなかった。均整唐草紋は 2 反転以上を持ち、内側に大きく 1 回転以上巻き込んでいる。今回の調査では 2 点が出土した。このうち瓦当面に木目痕が残存するものが 1 点存在する。

H07 型式（唐草紋軒平瓦：第 139 図 1890）

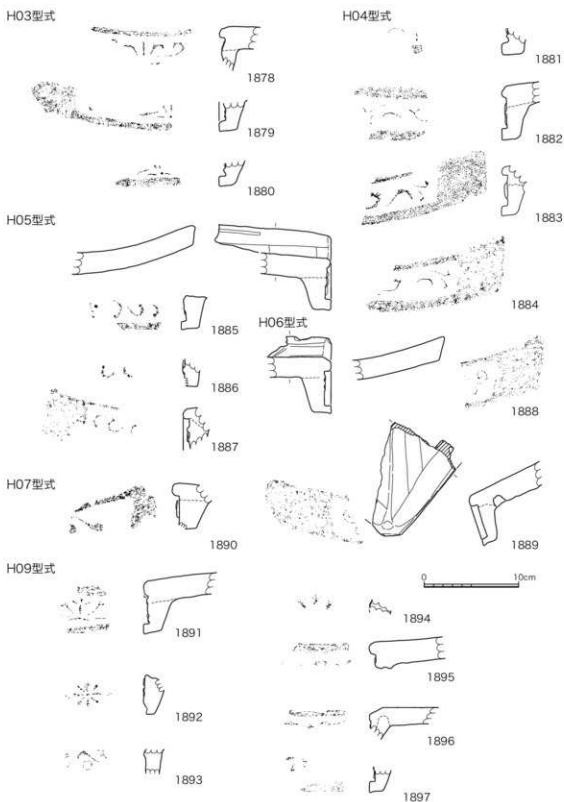
瓦当面積は特定できないが 28cm 前後と推測されるもので、中心飾りは遺存しなかった。唐草紋は太くて短く折れ曲がるものである。今回の調査では 1 点が出土した。

H09 型式（第 139 図 1891～1897）

瓦当面積が 28cm 前後と推測されるもののうち型式を特定できないものを一括して報告する。H04～07 型式は両脇の唐草紋を中心に区分をしたが、ここでは中心飾り部の資料が主体となる。おそらく H04～07 型式には H09 型式のいずれかが組み合わさるものと思われる。1891 と 1894 は三子葉紋の中心飾りをもつもので、各子葉は先端が明瞭に三又に分岐している。ただし両者の子葉先端の形状は異なり、別型式である。1892 は 8 枚の花弁が直線的に伸びる花紋を中心飾りに持つものである。

H11 型式（三子葉紋に 3 反転均整唐草紋軒平瓦：
第 140 図 1898～1900）

瓦当面積が約 20cm を測り、紋様構成は三子葉紋の中心飾りに 3 反転の均整唐草紋を配置するものである。子葉紋は珠紋状となり、唐草紋は上下に交互に配置され先端はやや弱く巻き込んでいる。今回の調査では 4 点が出土した。このうち瓦当面に木目痕が残存するものが 1 点存在する。



第 139 図 C 期の遺物実測図 (40) 軒平瓦 (3)

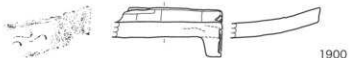
H11型式



1898

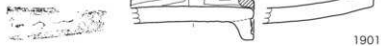


1899



1900

H12型式



1901



1902

H13型式



1903



1904

H19型式



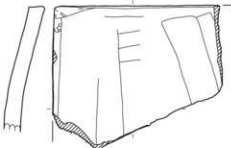
1905



1906



1907



1908

0 10cm



1909

第140図 C期の遺物実測図(41) 軒平瓦(4)

H12 型式 (三子葉紋に 3 反転均整唐草紋軒平瓦:

第 140 図 1901・1902)

瓦当面幅が約 21cm と思われ、紋様構成は三子葉紋の中心飾りに 3 反転の均整唐草紋を配置するものである。三子葉紋は H11 型式と同様の形状であるが規模が小さい。今回の調査では 2 点が出土した。このうち瓦当面に木目痕が残存するものが 1 点存在する。

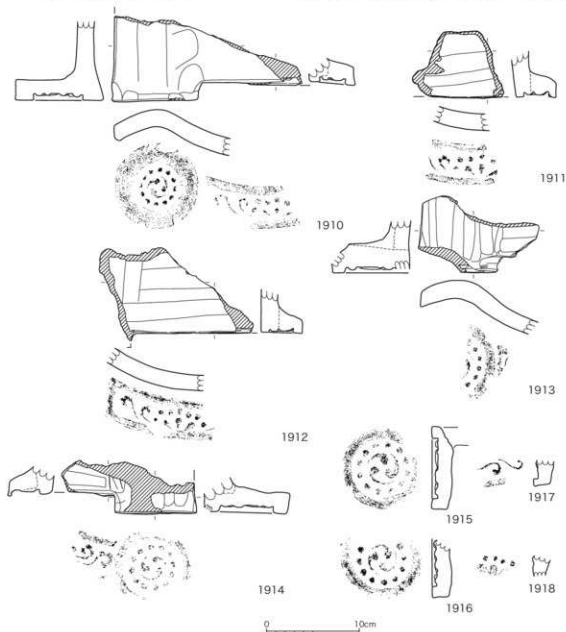
H13 型式 (3 反転唐草紋? 軒平瓦:

第 140 図 1903・1904)

瓦当面幅が約 21cm と推測されるもので、中心飾りは残存していない。唐草紋は上下 2 段に配置され大きく巻き込むものである。今回の調査では 2 点が出土し、全て瓦当面に木目痕が残存する。

H19 型式 (第 140 図 1905～1909)

瓦当面幅が約 21cm と思われるが、上記の紋様構成に属さない一群を一括して報告する。1909 は中心飾りが不明であるが 3 反転の唐草紋を配置するもので、唐草は大きく巻き込み一列に配置



第 141 図 C 期の遺物実測図 (42) 軒平瓦

される。これは軒棧瓦に属するものかもしれない。

第 19 項 軒棧瓦 (第 141 図 1910～1918)

軒棧瓦と分類されたものは全部で 9 点が出土した。これらは瓦当面 (特に丸瓦部) の紋様構成により分類を行い、その類別ごとに特徴を記述する。

S01 型式 (第 141 図 1910～1912)

丸瓦部は左巻三巴紋に 12 珠紋が配置され、平瓦部は三子葉紋に 2 反転唐草紋が組み合わせられたものである。丸瓦部の紋様部分が直径約 5cm と小さい点が特徴である。今回の調査では 3 点が確認された。

S02 型式 (第 141 図 1913)

丸瓦部は左巻三巴紋に 16 珠紋が配置されると推定されるもので、平瓦部の紋様構成は不明である。今回の調査では 1 点が確認された。

S03 型式 (第 141 図 1914)

丸瓦部は右巻三巴紋に 12 珠紋が配置され、平瓦部は中心飾りは不明だが 2 反転唐草紋が施されたものである。今回の調査では 1 点が確認された。

S04 型式 (第 141 図 1915・1916)

丸瓦部は左巻三巴紋に 12 珠紋が配置され、平瓦部の紋様構成は不明である。丸瓦部の紋様部分が直径約 7cm と大きい点が特徴である。今回の調査では 2 点が確認された。

第 20 項 丸瓦

(第 142～145 図 1919～1927)

丸瓦と分類できたものは、接合前破片数で 1484 点、総重量で約 253kg が出土した。この中には軒丸瓦の丸瓦部や丸瓦に類似した形態の道具瓦などが含まれている可能性が高い。大多数の丸瓦は玉縁を有する丸瓦であり形態的なバリエーションは少ない。ここでは代表的な事例を数点取り上げて報告とする。

丸瓦は内面 (裏面) に残存する調整痕で分類が可能である。まず、粘土塊から粘土板を成形する際の切断方法には、糸を張った弓状工具で切断し弧状の糸切り痕が残存するコピキ A 手法と鉄線や張った張力の強い工具で切断し平行する直線状の痕跡が残るコピキ B 手法の二者がある。コピキ A 手法はわずかに 2 点存在するのみで、コピキ B 手法は 460 点存在し圧倒的多数を占めている。これは江戸時代の瓦として通有の状況を呈している。次に、粘土板を丸瓦の形状にするために用いる成形台と粘土板との脱着を容易にするために成形台に布を被せるが、その被せ方によって分類が可能である。丸瓦の玉縁側の布には吊り紐を刺し込ませるためにその痕跡が丸瓦内面に残存するもの (1921・1924) と、残存しないもの (1919・1920・1922・1923・1925～1927) がある。両者の比率は今回算定しなかったが、残存しないものの方が多いと思われる。また、布を補強するために糸を刺したもの (1919・1923) や、太い糸で縦方向に比較的緊密に刺して莫塵状の痕跡が残存するもの (1920・1926) もある。成形台から粘土板を外した後はほとんど手を加えられていないものと考えられ、一部のわずかな資料に棒状工具によるタタキ痕が残存するものがある。

一方、外面は最終的に縦方向に丁寧に磨くようなヘラケズリ調整が施されており、それ以前の作業工程の痕跡を見出すことは困難である。側端面は 2 段にヘラケズリ調整が施されて側端面と胴部裏側面が形成される。側端面は瓦を葺く際に平瓦と接触する部分で、その内側に胴部裏側面よりも幅は狭い。尻小口面裏面は幅広く面取りされ下位に葺かれる丸瓦玉縁部とうまく重なるようになっている。この面取りの幅は約 40mm であり、清須城下町から出土する縄文期の資料よりも狭い傾向がある。

丸瓦の規模は、筒部の長さは 23～33cm に分布し、平均約 28cm を測る。筒部径について

合計：破片		簡部逐						
遺 構	11	13	15	17	19	不明	総 計	
SD01			2	30	45	10	32	119
SD02				1	2		2	5
SD03		1	5	22	24	3	34	89
SD12			3	18	22	3	22	68
SD13				2	14	4	10	30
SK01,SK47		1	27	164	334	34	149	709
SK127				2			28	30
SK163			2	2	12		11	27
SK23		1	8	43	36	1	51	140
SK262				5	7	2	2	16
SK60			3	15	33	3	18	72
SK63		1	2	11	26	1	16	57
SK94				10	9	1	5	25
SX02		5	30	83	116	22	95	351
SX04			1	5	25	3	19	53
他の遺構			13	66	88	8	131	306
検出等		1	18	53	83	13	85	253
総 計		10	114	532	876	108	710	2350

合計：重量 (g)		簡部逐						
遺 構	11	13	15	17	19	不明	総 計	
SD01			335	5095	11025	3625	1530	21610
SD02				205	400		60	665
SD03		40	560	5155	7615	920	1175	15465
SD12			305	3095	7880	800	970	13050
SD13				215	3615	3100	375	7305
SK01,SK47		85	3200	28805	105180	21180	7980	167430
SK127				310			1880	2190
SK163			170	155	2270		525	3120
SK23		215	1250	6840	5775	145	2170	16395
SK262				505	1340	385	110	2340
SK60			140	2765	11300	2055	785	17045
SK63		40	105	1155	7610	115	1095	10120
SK94				1155	1600	270	280	3305
SX02		670	3095	12335	15995	10555	3985	46635
SX04			60	800	8345	1240	1315	11760
他の遺構			1095	7930	13070	1260	4600	27955
検出等		35	1895	9620	17935	5805	3460	38750
総 計		1085	12210	87140	220955	51455	32295	405140

第 8-1 表 丸瓦出土量一覧表 (1)

名古屋城三の丸遺跡 VII

合計・破片 階部厚

遺 構	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	不明	総 計
SD01			4	1	6	8	6	16	11	15	10	6	4	5		1		26	119
SD02				1			1		1									2	5
SD03				3	3	5	4	11	15	8	11	4	2	1				22	89
SD12				2	1	3	4	7	9	8	8	5	3	2			1	15	68
SD13						4	2	5	3	2	4	1	1					8	30
SK01・SK47	1	3	4	7	13	34	68	97	117	96	79	39	27	8	5	2		109	700
SK127						1	1	2	2	1		1	1					21	30
SK163				1		3	2	2	6	1	1	1	2		1			7	27
SK23		1	1	1	2	14	22	25	14	9	5	9	5				1	31	140
SK262						2	5	2	1		3	1	1					1	16
SK60				2	1	4	5	12	13	3	5	10	1	2	1	1		12	72
SK63				2	3	3	5	6	7	5	9	4	1	1				11	57
SK04							5	6	2	3	2		1	1	1			4	25
SX02	1		7	8	13	18	15	41	50	32	46	13	9	1	3	1		93	351
SX04						3	2	2	5	12	3	1	2	1	1			21	53
他の遺構		1	2	4	4	19	19	40	36	29	22	12	7	6		1		114	306
検出等			1	3	6	16	23	18	42	23	21	15	9	3	2	1		70	253
総 計	2	5	19	35	52	133	191	280	326	248	227	125	76	32	14	7	2	567	2350

合計・重量 (g) 階部厚

遺 構	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	不明	総 計	
SD01			365	35	1280	1420	1405	6345	2835	1840	1475	1000	1530	895		195		1100	21610	
SD02				205			105		295										60	665
SD03				215	200	285	530	2640	3690	840	4240	875	1080	315					555	15465
SD12				100	120	195	320	1985	2065	1025	1370	2410	2020	305			410		725	13050
SD13							1505	340	2320	1045	545	835	70	405					240	7305
SK01・SK47	55	145	185	505	1455	5495	12235	27340	36540	23080	25970	15455	10010	1680	1415	565		5280	167430	
SK127						40	200	200	160	40		700	60						790	2190
SK163			70		150	225	295	730	110	60	70	950			200			260	3120	
SK23		80	15	80	210	1085	2745	5410	1475	1430	745	1230	485				120	1285	16395	
SK262						175	625	245	120		570	355	190						60	2340
SK60				90	50	605	385	2165	4580	1395	2160	4485	175	365	70	140		380	17045	
SK63				85	430	370	565	1230	3120	515	3545	470	140	160				490	10120	
SK04							395	1395	175	455	150		300	150	70			215	3305	
SX02	15		495	895	1180	2155	2610	5625	8155	4450	12805	2565	865	115	595	130		3980	46635	
SX04						325	310	750	995	4385	360	2160	780	385	245				1055	11760
他の遺構		35	85	435	505	1300	1660	4925	2895	4235	3680	2420	1060	935		50		3795	27955	
検出等			100	215	475	4065	2975	2010	9550	5865	4890	2760	1165	1745	390	130		2415	38750	
総 計	70	200	1245	2030	5905	17905	28815	62900	78500	50720	62565	37680	20880	7455	2985	1210	530	22595	405140	

第 8-2 表 丸瓦出土量一覧表 (2)

合計：破片 厚さ

遺構	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	37	40	不明	総計	
SD01				2	9	26	30	71	110	179	152	77	38	16	4	4									225	944
SD02				1	4	1	6	6	11	15	4	1					1								22	72
SD03				2	7	6	12	18	21	35	37	16	12	2	1	1	1								46	217
SD12				3	9	18	30	56	78	63	33	19	8	3	2										113	435
SD13							3	8	18	30	32	12	6	6	3	1									107	226
SK01, SK47	2		3	34	47	95	252	529	1141	1061	532	246	63	21	11	1	1								562	4611
SK127						1		3	5	24	17	11	6	4											155	220
SK163				3	3	5	18		17	21	15	11	4	2	1										16	110
SK23	1	1	3	16	17	19	50	62	112	103	41	18	3	4											208	658
SK262	1					9	24	47	34	34	26	11	4	1		2									103	296
SK60				1		11	17	23	42	83	65	33	24	9	2	1	1								113	445
SK63			1	4	6	2	22	56	75	74	31	11	5	1											86	374
SK94				3	5	4	15	23	36	31	20	5	2	2											77	223
SX02			3	8	23	66	106	162	239	326	320	188	84	30	17	9	1	1					1	1	484	2069
SX04				1	2	8	20	37	109	109	62	22	10	2	2										210	593
他の遺構	1	18	34	77	126	148	204	276	295	170	96	38	20	7	2	1	1								919	2433
検出等		1	4	29	67	119	138	176	264	241	118	52	26	9	8	2								1	535	1790
総計	2	2	6	42	157	356	589	1031	1637	2834	2655	1406	648	225	96	49	8	3	1	1	1	1	1	1	3975	15722

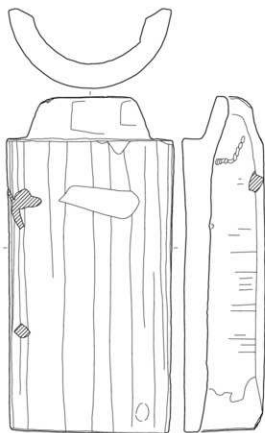
合計：重量 (g) 厚さ

遺構	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	37	40	不明	総計		
SD01				175	1295	3290	4465	9070	18905	33730	32900	16065	8629	3550	1230	640								65	4698	138508	
SD02					110	285	60	1175	385	1370	2115	565	100			370										389	6915
SD03				40	905	1000	1850	2135	2295	5105	6280	3290	2880	229	215	215	159									1170	27670
SD12					315	790	2360	5215	11605	16445	15980	9330	5485	2735	810	255										1545	72660
SD13							545	495	3120	3700	6420	2010	540	1025	450	120										1065	20030
SK01, SK47	125		130	2495	6625	12895	41170	104295	240061	246955	118775	52465	14300	4630	4045	330	545									10776	862219
SK127						30		270	1650	2080	1910	1665	2070	900												2735	13910
SK163				505	155	265	2010	1820	3090	1970	1500	525	345	145												275	12835
SK23	40	45	280	1605	1580	1395	5365	8665	13550	11175	5540	3590	375	1025												3410	57610
SK262	125					940	3240	6785	6170	4025	5365	2650	950	400		1295										2525	35430
SK60				260		1505	5355	3630	10290	20930	21000	12790	7295	1620	120	215	195									1860	87475
SK63				25	200	630	270	3225	6810	15815	12610	5445	4825	725	245											1495	52380
SK94				100	190	740	2000	3155	4630	5560	4200	1220	765	250												1610	25130
SX02			60	740	1400	6785	10105	19135	31335	38345	45105	30850	13860	4900	3940	1780	125	140						415	325	9317	218802
SX04				65	155	830	3180	4020	18695	20300	13300	4290	1915	300	700											4820	73560
他の遺構	40	1215	2185	5765	10740	12285	19410	26995	35615	18820	11215	4915	2460	2000	600	190	15									19830	167948
検出等	40	725	3140	9445	15815	15880	21845	34885	32775	18340	7500	4285	1560	705	290										22	6471	173773
総計	165	125	185	3590	14790	30070	70120	136625	256405	487621	504005	265255	127400	43035	17410	13000	1689	875	65	15	415	325	22	65547	2046855		

第9表 平瓦厚さ別出土量一覧表



1919

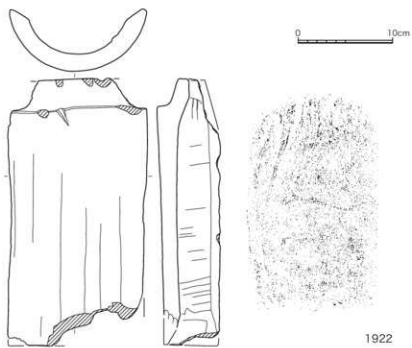
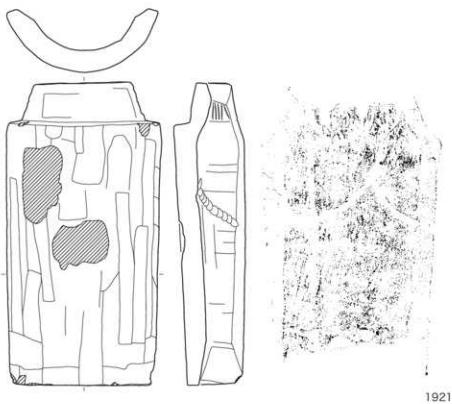


0 10cm

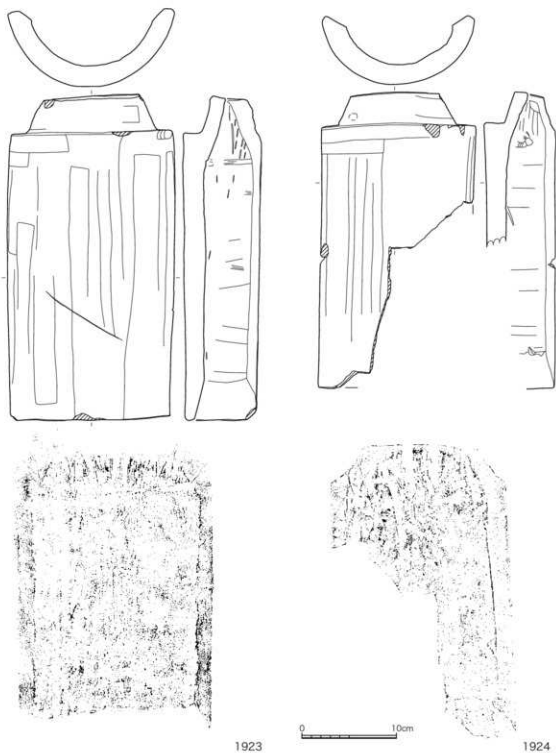


1920

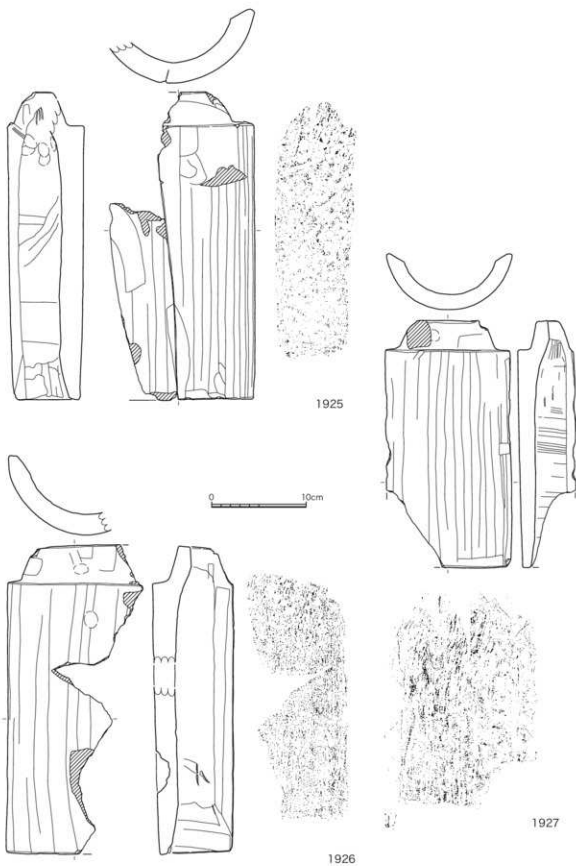
第 142 図 C 期の遺物実測図 (43) 丸瓦 (1)



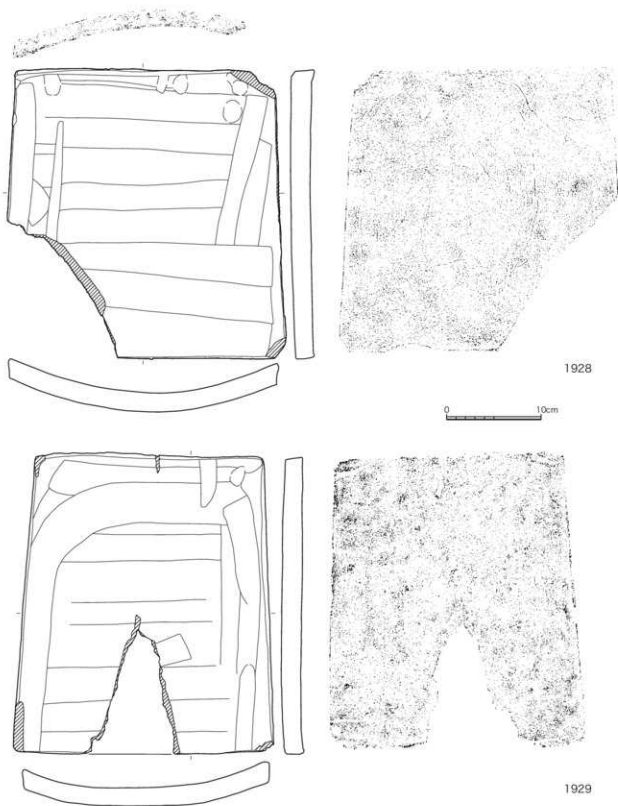
第 143 図 C 期の遺物実測図 (44) 丸瓦 (2)



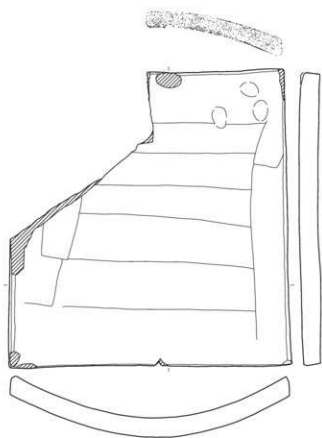
第 144 図 C 期の遺物実測図 (45) 丸瓦 (3)



第 145 図 C 期の遺物実測図 (46) 丸瓦 (4)

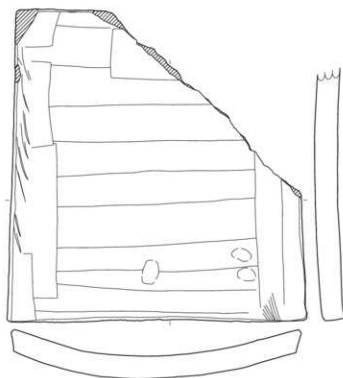


第 146 図 C 期の遺物実測図 (47) 平瓦 (1)



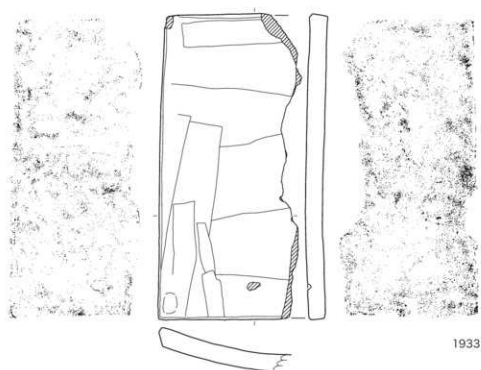
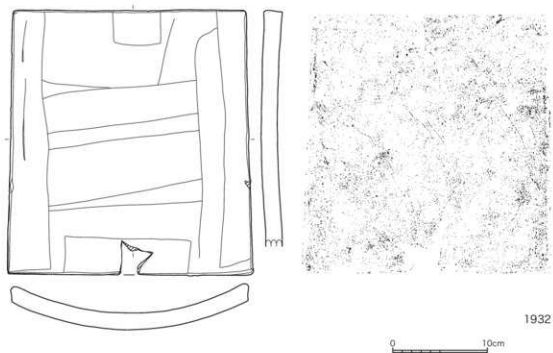
1930

0 10cm

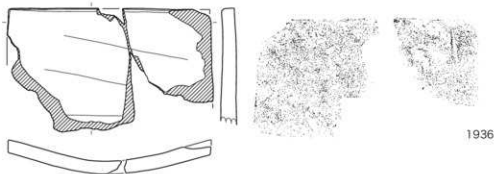
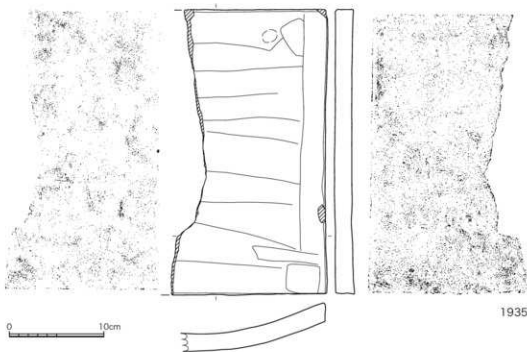
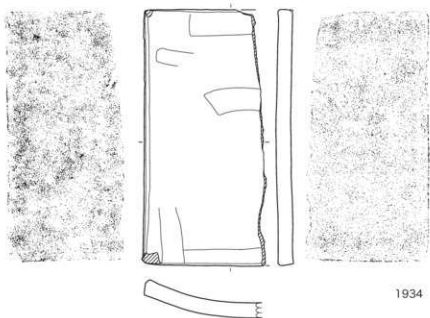


1931

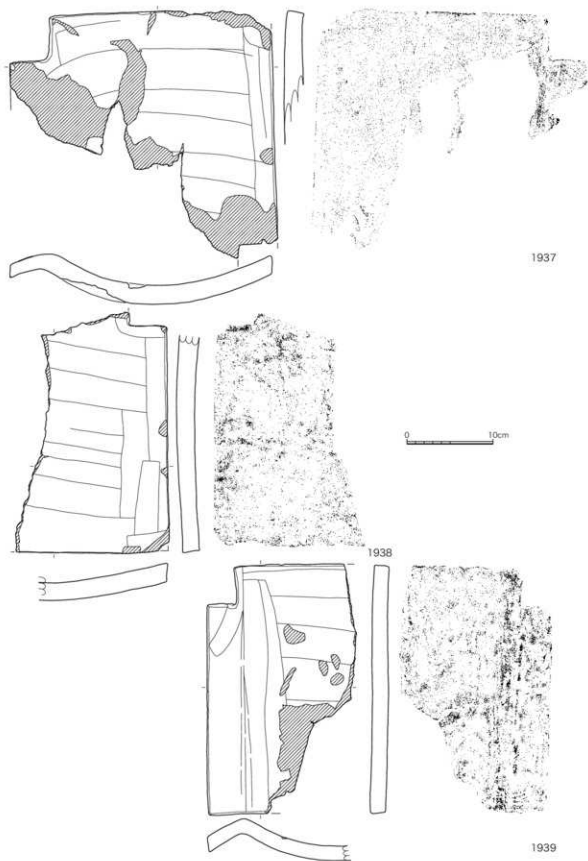
第 147 図 C 期の遺物実測図 (48) 平瓦 (2)



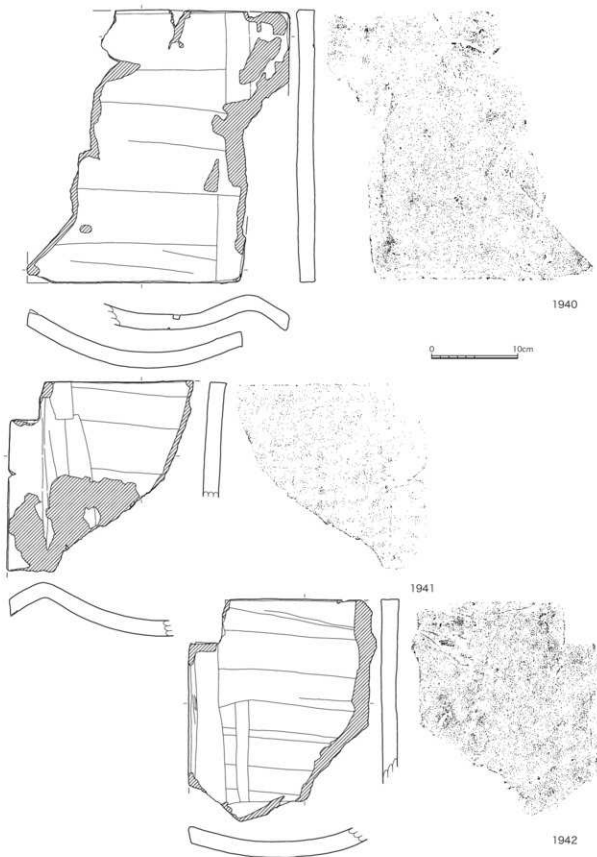
第 148 図 C 期の遺物実測図 (49) 平瓦 (3)



第 149 図 C 期の遺物実測図 (50) 平瓦 (4)



第150図 C期の遺物実測図(51) 棧瓦(1)



第151図 C期の遺物実測図(52) 椽瓦(2)

は『清洲城下町遺跡VII』と同様に型枠による測定で11cm以下、13cm、15cm、17cm、19cm以上の5種に区分してその出土量を算定した。結果、11cm以下は6点(0.67kg)、13cmは68点(7.65kg)、15cmは338点(55.27kg)、17cmは529点(141.36kg)、19cm以上は56点(26.69kg)となっている。筒部径と厚さの関係は一定度の相関関係が認められ、厚いものほど筒部径が大きくなる傾向を読み取ることができる。

第21項 平瓦

(第146～149図1928～1936)

平瓦と分類できたものは、接合前破片数で15722点、総重量で約2047kgが出土した。この中には軒平瓦の平瓦部や平瓦に類似した形態の道具瓦、場合によっては飾瓦や棧瓦などが含まれている可能性が高い。大多数の平瓦は彎曲した方形板状の形態を持ち、バリエーションは少ない。ここでは代表的な事例を数点取り上げて報告とする。

平瓦は、表面に磨くようにヘラケズリ調整が施され、裏面には離れ砂が付着しているものが多い。表面のヘラケズリ調整は、まず全体を横方向に削った後に側端部を削る手法がとられている。表面上端部には平瓦を重ね置くために面取りするといった織豊期の資料によく見られる加工は施されていない。また、裏面には上端部または下端部に弧状沈線が残存するものがある。側面および上下端面はヘラケズリ調整痕が残り、一部の資料で「○」の刻印が存在するもの(1930)も認められる。

丸瓦の規模は、長さは26～33cmに分布し平均約30cmを測る。また頂幅は平均約26cm、厚さは平均約21cmを測る。厚さ別に出土量を検討すると、20～21cmの厚さで分布のピークを持つほぼ正規分布となっていることがわかる。

第22項 棧瓦

(第150・151図1937～1942)

棧瓦と分類できた資料は、接合前破片数で165点、総重量で約30.8kgが出土した。実際には平瓦に誤って分類されたものも少なからずあると考えられ、実際にはもっと多く出土した可能性がある。ただし、丸瓦や平瓦などの本瓦葺きの瓦に比べると、胎土が緻密で灰色が濃い傾向が認められ、分類が可能な場合も存在する。

棧瓦は四隅のうち対角線の位置にある二期に切り込みがある。表面は磨くように丁寧なヘラケズリ調整が施され、裏面は離れ砂が付着している。規模は長さで幅が両者とも31cm前後を測るもの(1937・1940)と29cm前後を測るもの(1939)がある。

第23項 飾瓦

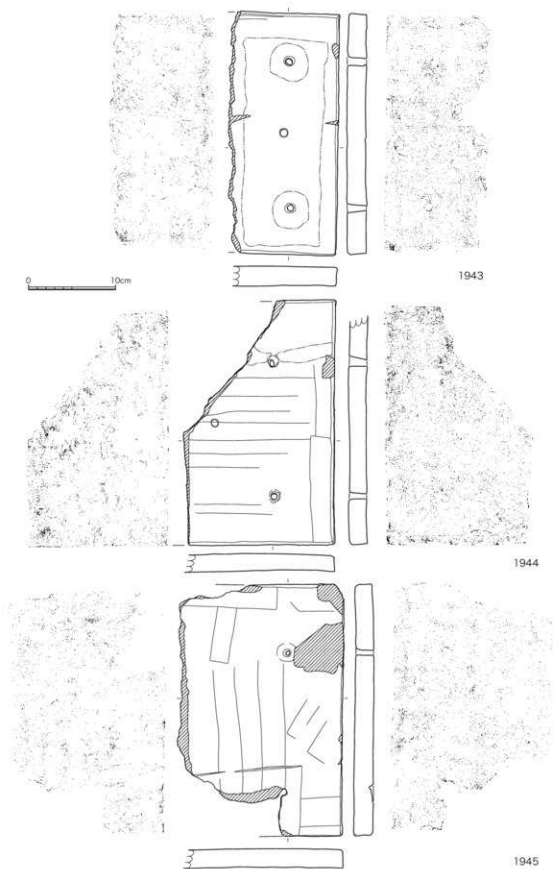
(第152～161図1943～1980)

飾瓦と分類できたものは、接合前破片数で150点、総重量で約57.0kgが出土した。紋様が施されたものは少なく、大部分は瓦葺やタイルのような使用方法が想定されるものである。表面に金箔などが施されたものは認められなかった。飾瓦はその形状から4型式に大別できる。

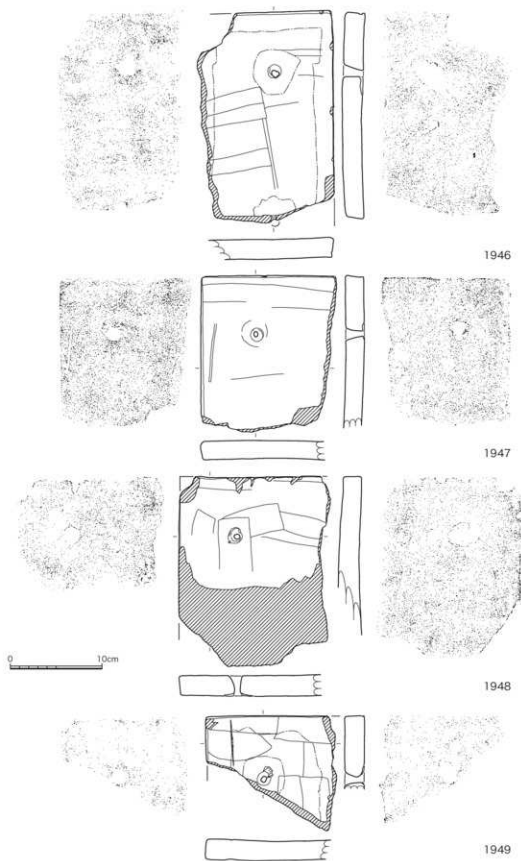
K01型式(第152～155図1943～1955)

平面形が方形または長方形の板状瓦で厚さが20mm前後のものである。残存状況が良好な資料で見ると長さは約28cmを測る。幅は全部が遺存する資料が無く不明であるが、多くの資料は一边が焼成後直線的に破断された状態となっており、その状態での幅は12～19cmを測る。表面の状態からみて破断された状態で使用されたものと推測される。今回の調査では93点が確認された。1953は破断面からみて屈曲した粘土板が折損したものと考えられる資料である。

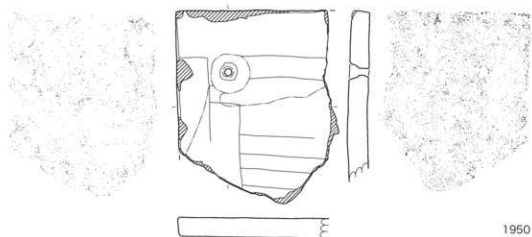
このK01型式には上下一対の位置に孔が穿たれている。表面には黒灰色に焼された部分と焼さ



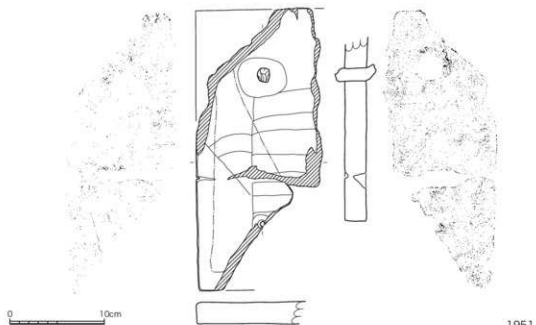
第 152 図 C 期の遺物実測図 (53) 飾瓦 (1)



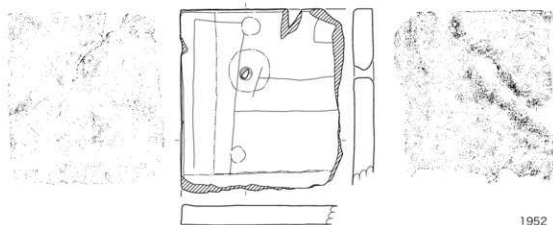
第153図 C期の遺物実測図(54) 飾瓦(2)



1950



1951



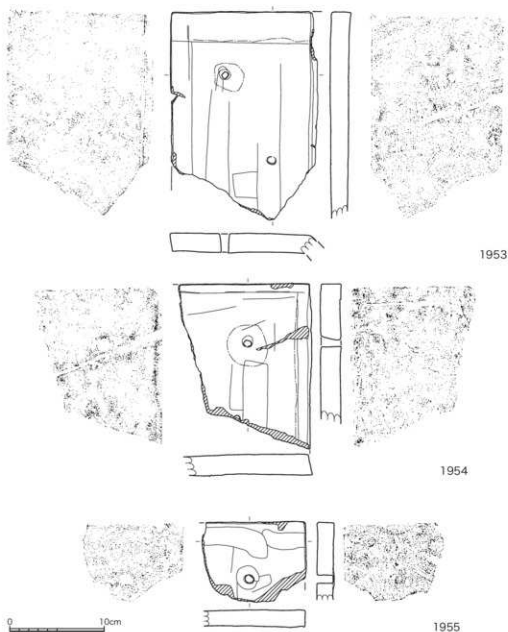
1952

第 154 図 C 期の遺物実測図 (55) 飾瓦 (3)

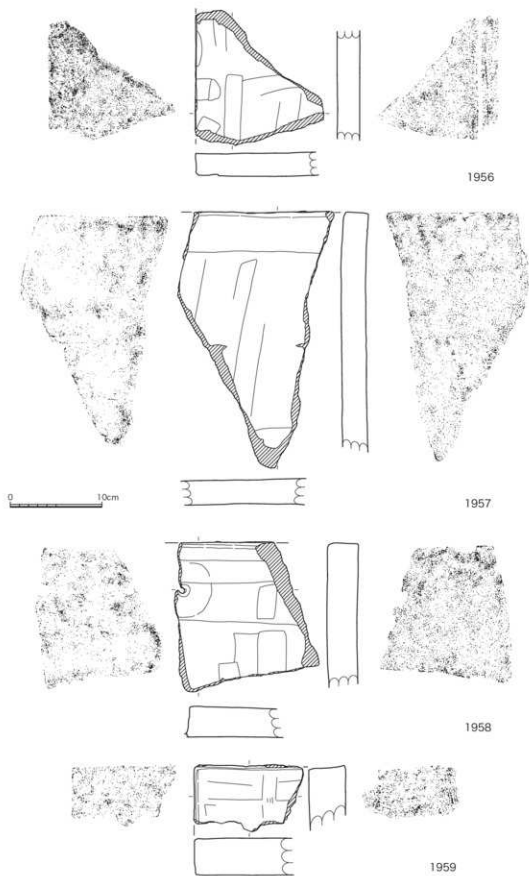
れていない灰色に発色した部分が意図的に明瞭に区分されているものが多い(図では一点破線でその境界を表記した)。1943 は表面の外周部と孔の周囲のみが黒灰色に燻されている資料で、「○」の刻印が残存する。1953 も表面の外周部と孔の周囲のみが黒灰色に燻されている資料であるが、外周部の色分けされた部分に刻線が認められるものである。1955 は孔が貫通せず途中で止まっているものである。

K02 型式 (第 156・157 図 1956～1965)

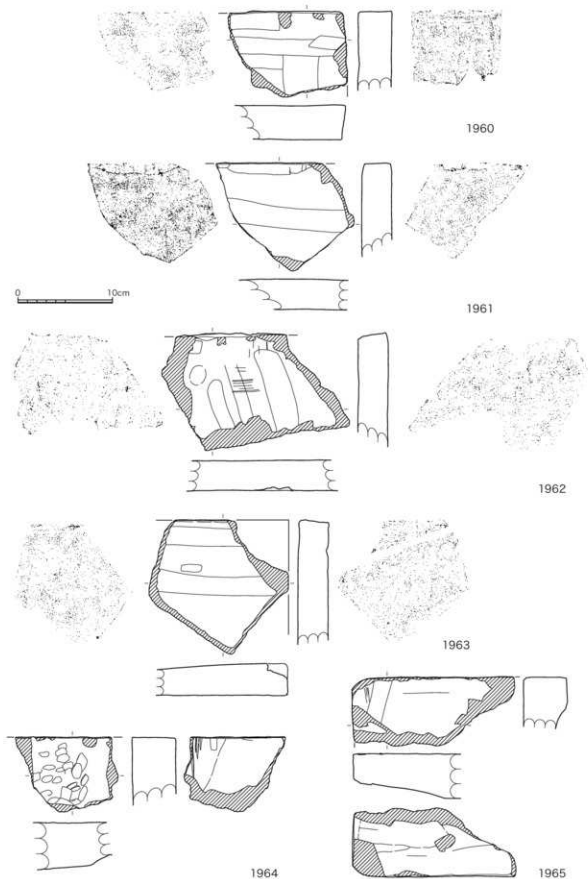
平面形が方形または長方形の板状瓦で厚さが 24mm 以上のものである。残存状況が不良なものばかりで全体の形状は不明である。この型式に分類したものは厚さが様々で本来はさらに細分が必要と思われる。K01 型式のような燻し範囲を分けたものは存在せず、紋様も全く存在しない。1964 と 1965 は厚さが 4cm を超えるもので裏面が斜めに削られた形状を呈している。今回の調査



第 155 図 C 期の遺物実測図 (56) 飾瓦 (4)



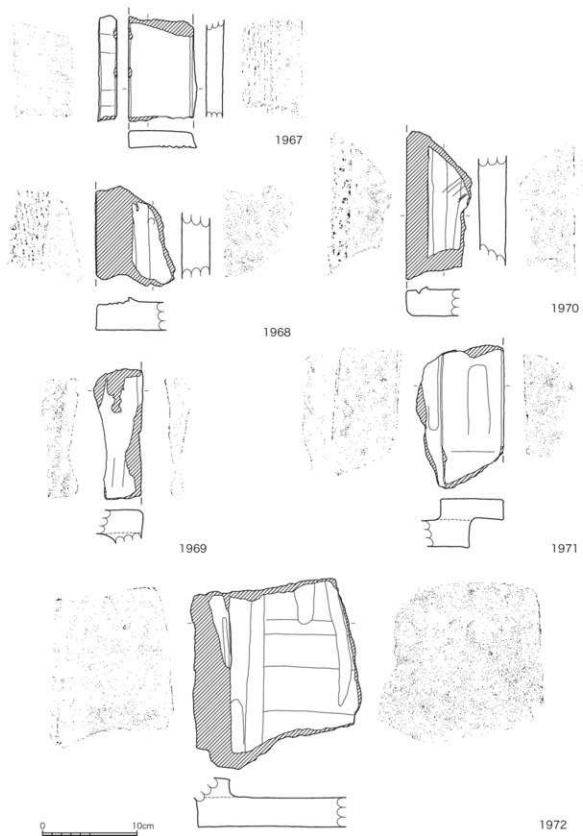
第156図 C期の遺物実測図(57) 飾瓦(5)



第 157 図 C 期の遺物実測図 (58) 飾瓦 (6)



第158図 C期の遺物実測図(59) 飾瓦(7)



第159図 C期の遺物実測図(60) 飾瓦(8)

では32点が確認された。

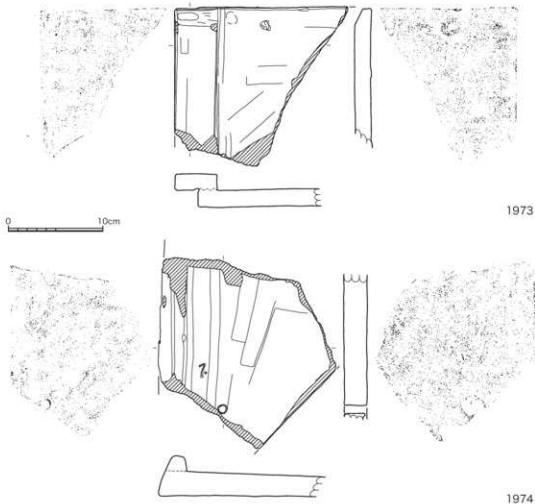
K03 型式 (第158～160図 1966～1974)

横断面形がクランクする形状のもので、平面形は方形または長方形と推測される。板状粘土の一边上面に細長い長方形板状粘土を継ぎ合わせたもので、接合面に接合を容易にするための傷(刻線)が施されている(1967・1968・1970)。K01型式のような傾し範囲を分けたものは存在せず、紋様も全く存在しない。今回の調査では16点が確認された。1966はK03型式の中で最も残存状況が良好なもので、2箇所に穿孔が認められる。側端面には弧状に傾し範囲が分かれた部分が存在しており、平瓦系統の瓦と重ね焼かれたものと推測される。1974はK03型式とは異なり端辺に突帯が取り付けられている。穿孔が認められ、「下」と記

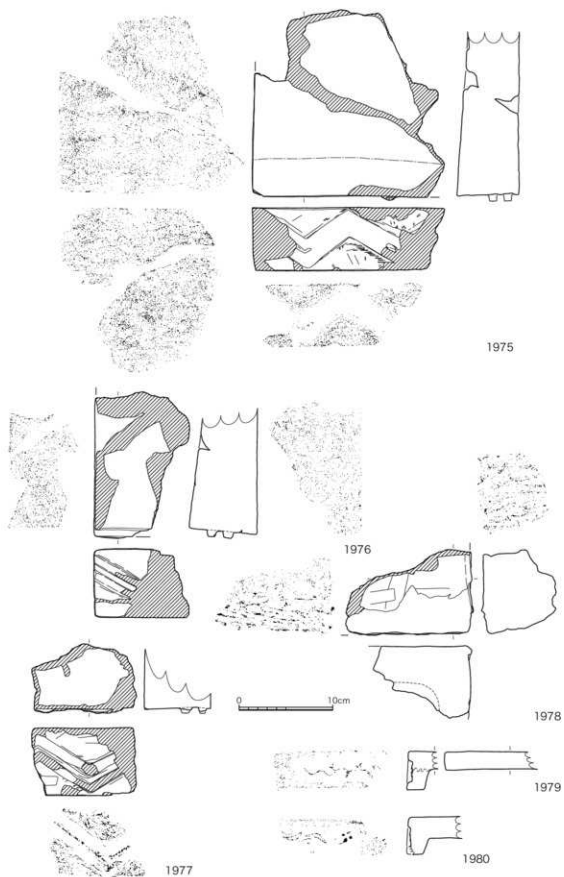
された刻書が存在する。

K04 型式 (第161図 1975～1980)

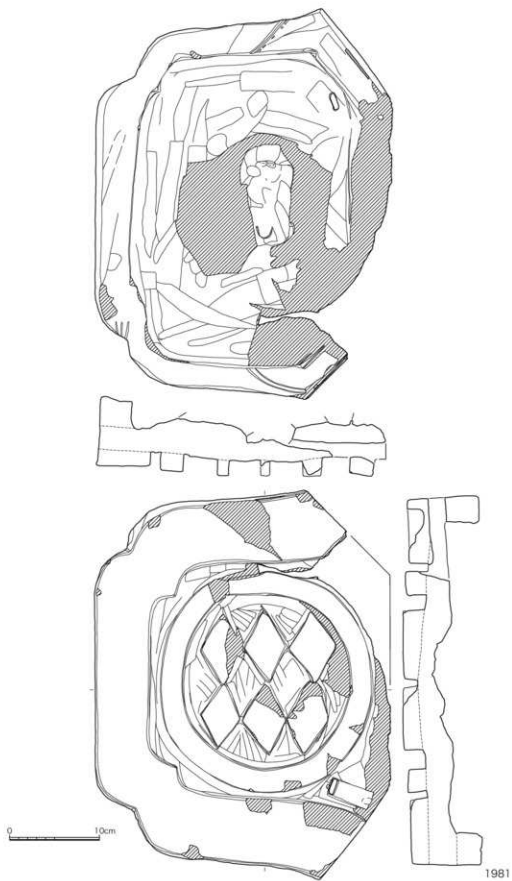
側面に紋様が施されたタイプの飾瓦をK04型式と分類する。このタイプは2種類が存在し、厚さが6cm前後の粘土板の側面に二重線の鋸歯状紋が施されたもの(1975～1977)と、板状粘土の一边に軒平瓦状の頸を付けて側面を内区と外区に分け内区に紋様が施されたもの(1979・1980)がある。前者は粘土を貼り付けて二重突帯を形作っている。一方、1979は中心飾りが不明であるが4反転の唐草紋が施されている。1980も中心飾りが不明であるが、唐草紋が上下に多数存在するものである。



第160図 C期の遺物実測図(61) 飾瓦(9)



第 161 図 C 期の遺物実測図 (62) 飾瓦 (10)



第 162 図 C 期の遺物実測図 (63) 鬼瓦 (1)

第24項 鬼瓦

(第162～164図 1981～1993)

鬼瓦と分類できたものは総数で14点を数える。紋様の全体が判明するものは少なく、大部分は小破片となっている。これらはほとんどが、粘土板の表面に紋様を貼り付け裏側には外周部に厚い突帯を付けたものと考えられる。結果として、外周部端部の断面形はL字状に屈曲する形となっている。

1981はSD12から出土したほぼ完形の鬼瓦である。粘土板の表面に粘土を貼り付けて外区と内区の紋様を形成し、裏面外周部に厚い突帯を付けている。表面の中心に丸に六菱紋を形作り、下部に釘孔が設けられている。丸に六菱紋は調査区付近に屋敷が存在したといわれる寺西藤左衛門の家紋である。1982は鬼瓦右袖端部の破片、

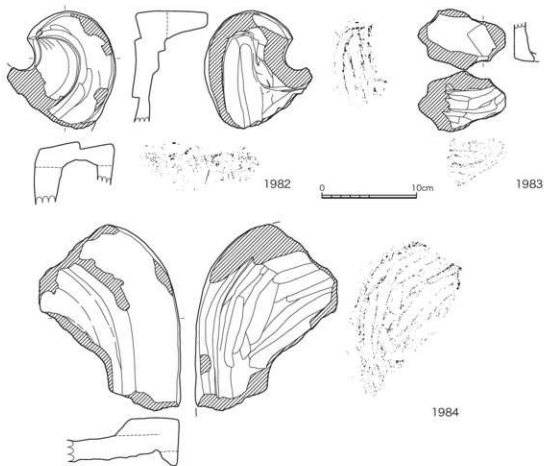
1989は鬼瓦左袖端部の破片と推測されるもので、それぞれ雲紋（渦巻き状紋）が形成されている。1984と1988は鬼瓦右上部の破片、1993は鬼瓦左上部の破片で、裏面はノミ状工具で削られている。1985は表面に大きな珠紋が、1987は表面に葉紋が施されている。1990は突起を有する粘土板で表面に波状の刻線が施されている。

第25項 菊丸瓦 (第165図 1994～2002)

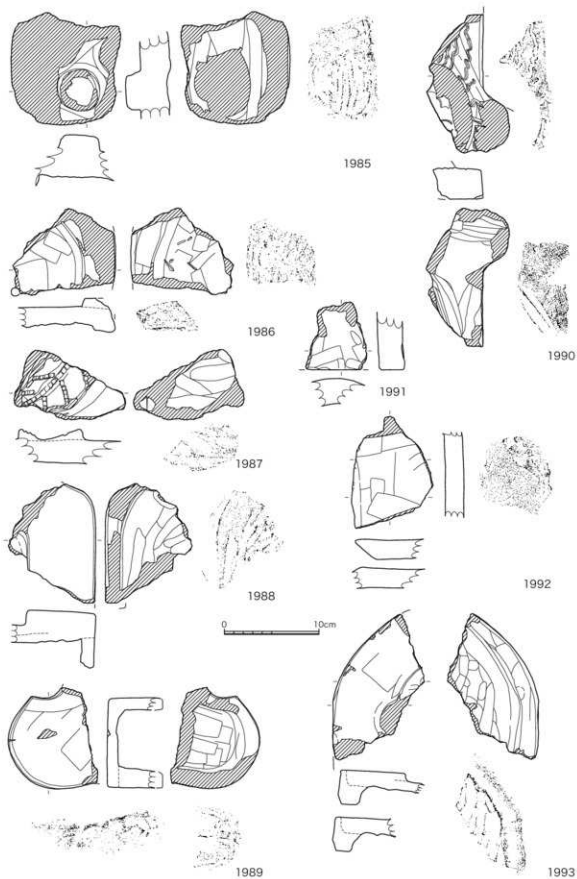
菊丸瓦は棟込瓦の一種で、紋様の存在する瓦当面と棟に差し込まれる筒部によって構成される。全て瓦当面の直径は約9cmを測り、16花卉の菊花紋が施されている。この瓦当面の菊花紋の中心部の円紋の形状から3類に分類が可能である。

Z01型式 (第165図 1994～1998)

16花卉の菊花紋の中心にある円紋に9個の凹



第163図 C期の遺物実測図(64) 鬼瓦(2)



第 164 図 C 期の遺物実測図 (65) 鬼瓦 (3)

名古屋城三の丸遺跡 VII

部を持つものである。円紋の直径は約2cmを測る。今回の調査では5点が出土した。

Z02 型式 (第165図 1999～2001)

16 花卉の菊花紋の中心にある円紋に4個の方形凹部を持つものである。円紋の直径は約1.5cmを測る。今回の調査では3点が出土した。

Z03 型式 (第165図 2002)

16 花卉の菊花紋の中心にある円紋に1個の凹部を持つものである。円紋の直径は約1cmを測る。今回の調査では1点が出土した。

第26項 面戸瓦 (第165図 2003・2004)

面戸瓦は瓦を葺いた場合に地葺瓦(平瓦)と棟瓦の間にできる隙間を埋める瓦の総称である。今回の調査では、横長の蟹面戸瓦が1点出土した(2003)。この他に、表面に櫛目紋を持つ板状瓦(2004)があり、これも面戸瓦の可能性もある。

第27項 輪違い瓦

(第166・167図 2005～2018)

輪違い瓦は棟込瓦の一種で、丸瓦の形態を短く小型にしたものである。今回の調査では44点が出土した。これらは大きく4類に分類できる。

輪違い瓦 A 類 (第166・167図 2005～2020・2012～2015)

平面形が台形状になるものである。上部の高さが低く下部が高くなっており、23点が存在する。裏面にはほとんどがコビキ B 手法の調整痕が残存する。最大幅が約14cmを測るもの(2005など)と約10cmを測るもの(2015)がある。2014は中央部に細長い孔が穿たれたものである。

輪違い瓦 B 類 (第166・167図 2011・2016～2018)

丸瓦胴部のみを切断したような形状のものである。斜めにヘラケズリ調整された頭部を持たず、小口裏面のみ面に面取りが施されている。12点が存在する。裏面にはコビキ B 手法の調整痕が残

存する。

輪違い瓦 C 類 (第166図 2009)

平面形が六角形状になるものである。裏側面のヘラケズリ調整の範囲が広がっている。4点が存在する。

輪違い瓦 D 類 (第166図 2008・2010)

平面形が平行四辺形状になるものである。丸瓦胴部のみを斜めに平行な形で切断したような形状となる。5点が存在する。裏面にはコビキ B 手法の調整痕が残存する。

第28項 丸瓦系道具瓦

(第168図 2019～2026)

輪違い瓦などを除く、丸瓦の形状をベースにした様々な形態の瓦を丸瓦系道具瓦として一括し報告する。

丸瓦系道具瓦 1 類 (第168図 2019・2020・2025)

丸瓦を斜めに切断した形状のものである。裏面に残された調整痕は丸瓦とほぼ同様なものが残存しており、基本的には丸瓦を焼成前に切断して製作されたものと考えられる。

丸瓦系道具瓦 2 類 (第168図 2023)

丸瓦の裏面に粘土板で仕切りを設けたものである。いわゆる谷丸瓦と呼ばれるものである。

丸瓦系道具瓦 3 類 (第168図 2021)

通常の丸瓦よりも器壁が著しく薄いものである。

丸瓦系道具瓦 4 類 (第168図 2024・2026)

丸瓦の形状に穿孔が施された形状のものである。2024は行基葺丸瓦の頭部を持つと思われる丸瓦の形状に細長い孔が穿たれているものである。2026は比較的大きな円形の孔が存在するものと考えられる。

第29項 平瓦系道具瓦

(第169・170図 2027～2038)

平瓦の形状をベースにした様々な形態の瓦を平瓦系道具瓦として一括し報告する。全体の形状を明らかにできる資料は少なく、実際には分類は難しい。

平瓦系道具瓦 1 類 (第 169・170 図 2027～2029・2034)

平瓦を斜めに切断したもので、切断された辺に粘土板で仕切りを設けたものである。仕切り部の下端は直線的に作られている。

平瓦系道具瓦 2 類 (第 170 図 2035・2038)

平瓦を斜めに切断したままの形状のものである。基本的には平瓦を焼成前に切断して製作され

たものと考えられる。

平瓦系道具瓦 3 類 (第 169 図 2030・2033)

平瓦の一边が緩やかに彎曲し上面に突帯を取り付けた形状のものである。2033 には穿孔が認められる。

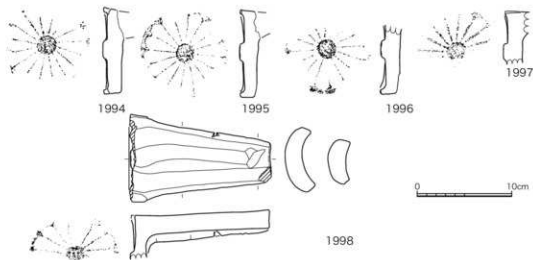
平瓦系道具瓦 4 類 (第 170 図 2037)

平瓦の上面に粘土を貼り付けて突帯を設けて水返しにしたものである。軒平瓦の一部である可能性も考えられる。

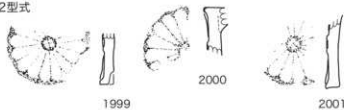
平瓦系道具瓦 5 類 (第 170 図 2036)

通常の平瓦に比べ器壁が非常に薄いものである。

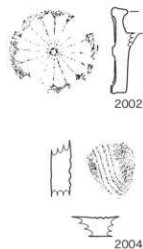
Z01 型式



Z02 型式



Z03 型式



第 165 図 C 期の遺物実測図 (66) 第九瓦

平瓦系道具瓦 6 類 (第 169 図 2031・2032)

全体の形状は不明であるが、横断面形が八角形の筒状になるものである。穿孔が施されている。

第 30 項 陶器瓦 (第 171 ~ 172 図 2039 ~ 2059)

今回の調査では、大量の種し瓦の他に瀬戸窯産と推定される陶器瓦が 29 点出土している。ここではこれら陶器瓦を一括して報告したい。

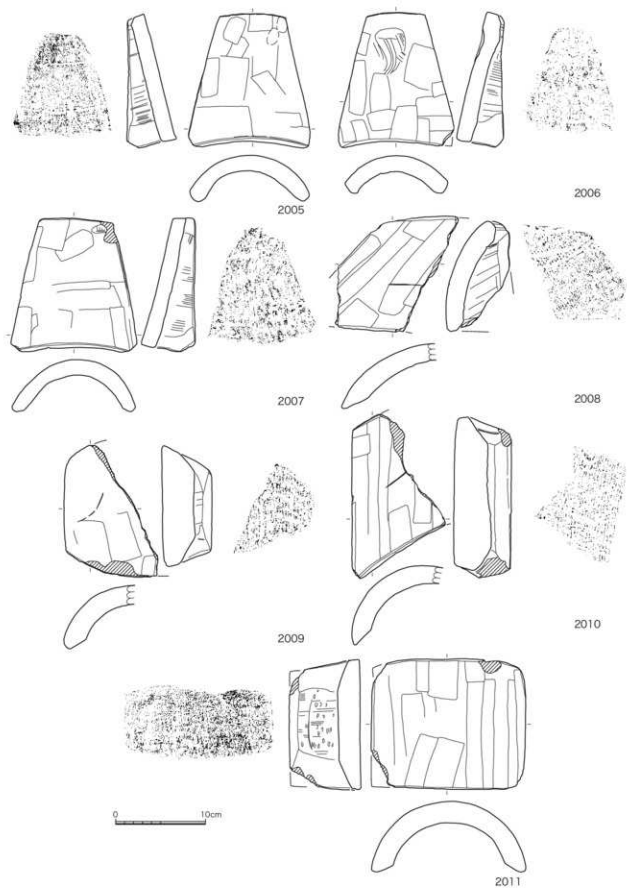
陶器瓦は 1 点のみ白色の長石釉が施された (2056) 他は全て緑釉が施された緑釉陶器瓦である。器種は丸瓦、平瓦、飾瓦 (瓦埴) などがある。2039 ~ 2048 は緑釉陶器丸瓦である。頭部は玉緑を有するもの (2039・2040) であり、尻部の縦断面形は方形となっている (2046 ~ 2049)。瓦を葺いた時に表に見える部分のみが施釉され、側面や裏面は露胎となっている。裏面の露胎部には墨書が存在するものがあり、2041 は「中」、2042 は「西カ」と読める。2050 ~ 2054 は緑釉陶器平瓦である。2055 と 2056 は部位が特定できない資料であるが、2055 は軒平瓦の棧である可能性が考えられる。2057 ~ 2059 は飾瓦 (瓦埴) である。2057 はわずかに曲面となっており鬘斗瓦の可能性も捨てきれない。2058 は平面形が長方形の板状瓦で表面は緑釉が均半分塗布されている。2059 は平面形が直角二等辺三角形の厚手の飾瓦で、床面に敷き並べられた敷瓦と考えられる。表面に緑釉が施され、裏面は露胎で「水野

久之丞 (花押)」と記された墨書が存在する。

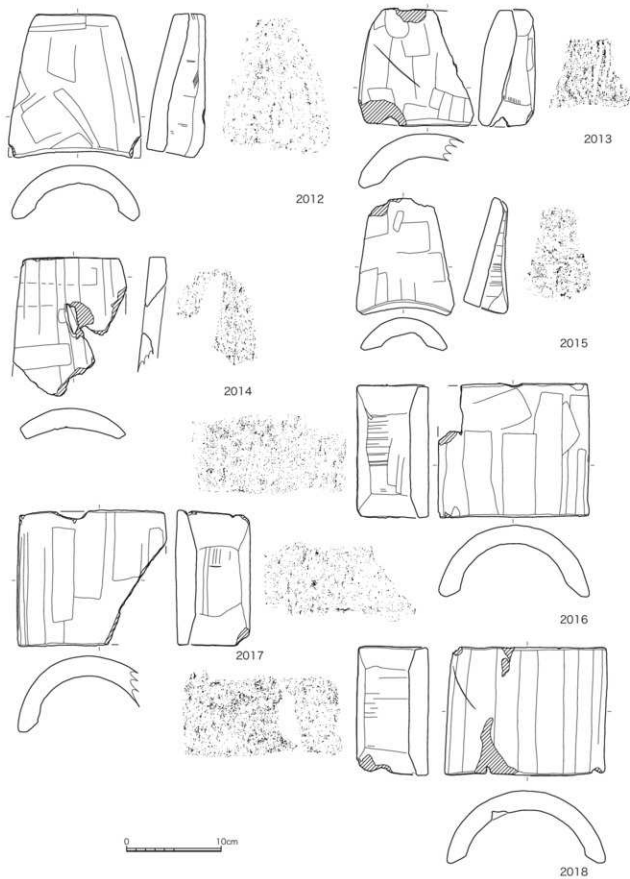
水野久之丞正勝は寛永 19 (1642) 年から寛文 12 (1672) 年まで御林奉行に任じられた人物である。瀬戸上水野村にある穴田窯では様々な陶器瓦が生産されていることが判明しており、穴田 1 号窯跡から出土した灰釉無紋の飾瓦 (敷瓦 II 類) にも「水野久之丞」と記されたものがある。このことから敷瓦 II 類は水野久之丞の注文によって穴田窯の陶工が焼成したと考えられ、瓦類の生産に水野久之丞が大きく関与した可能性は否定できないだろう。藤澤良祐はさらに検討を進め、水野久之丞が上水野村の窯業生産の直接の管掌者であった可能性が極めて高いと論じている (藤澤 1998)。したがって、今回出土した墨書瓦は水野久之丞の注文により穴田窯で生産されたものである可能性が高く、逆に穴田窯で生産された瓦類の一部が御屋形などにも利用されていたことが推測される。既に、穴田窯で生産された瓦類は尾張藩関係の建造物に使用されたことが判明しており、穴田窯の御用窯的な性格が推定されてきたが、今回の事例はそのことを追認する形となったといえる。

引用文献

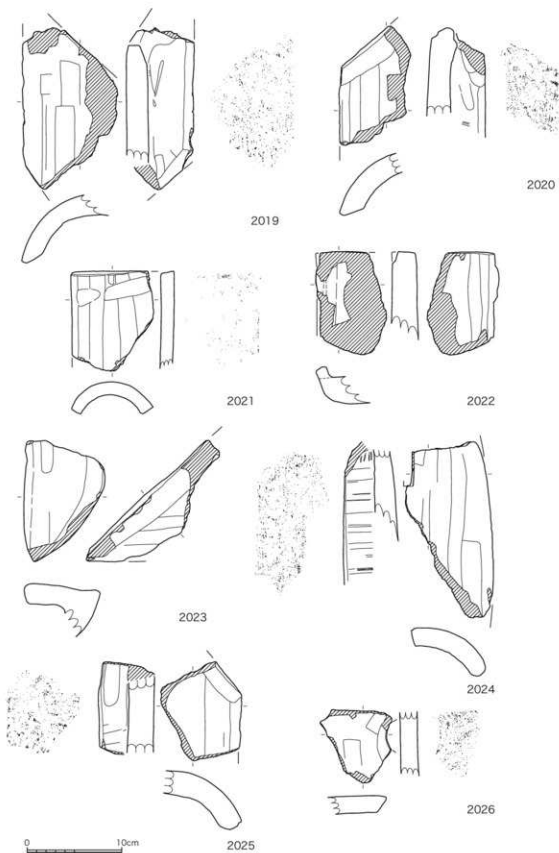
- 鈴木正貴編 2002 『清洲城下町遺跡VII』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 99 集
藤澤良祐編 1998 『瀬戸市史 陶磁史篇六』



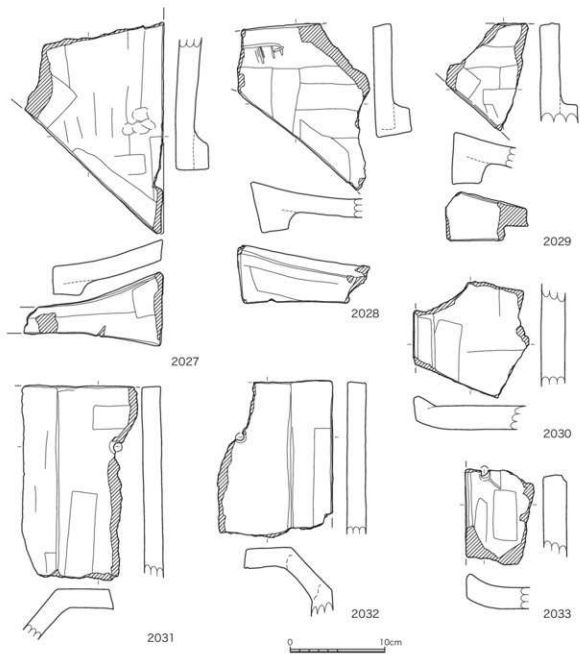
第166図 C期の遺物実測図 (67) 輪造り瓦 (1)



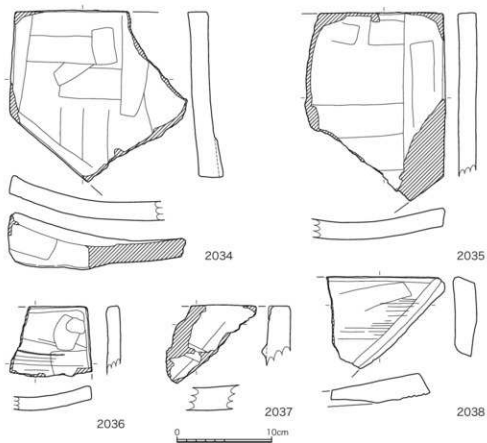
第 167 図 C 期の遺物実測図 (68) 輪造り瓦 (2)



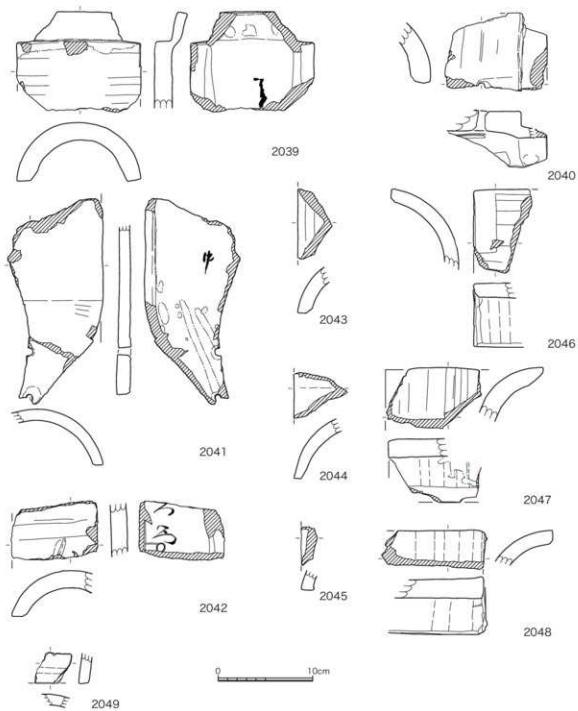
第168図 C期の遺物実測図(69)丸瓦系道具瓦



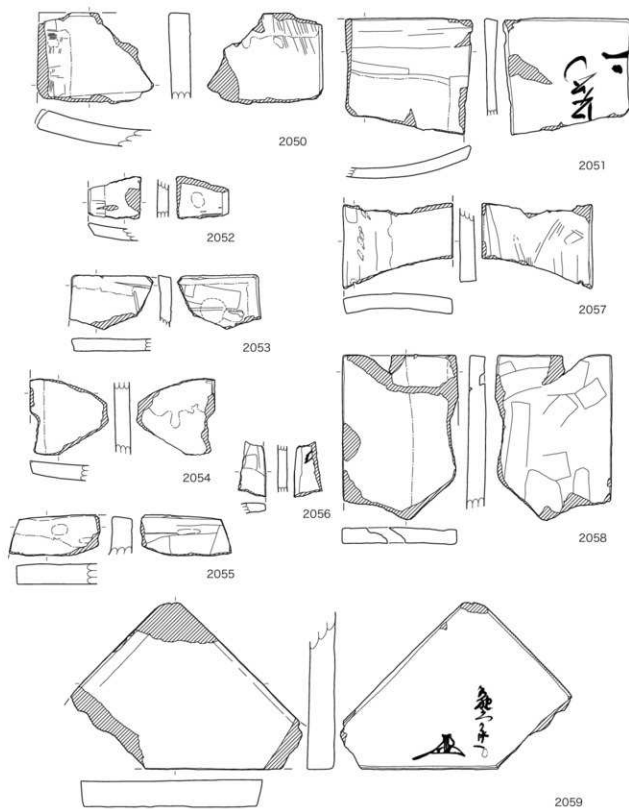
第 169 図 C 期の遺物実測図 (70) 平瓦系道具瓦 (1)



第170図 C期の遺物実測図(71) 平瓦系道具瓦(2)



第 171 図 C 期の遺物実測図 (72) 緑釉陶器瓦 (1)



第172図 C期の遺物実測図(73) 緑釉陶器瓦(2)

第5節 D期の遺物

D期は明治時代から昭和時代中頃まで(1874年頃～1945年頃)の段階である。遺物には瀬戸美濃窯産陶磁器・常滑系窯産陶器などの焼物類の他に、ガラス製品や石製品や金属製品など多様な種類の製品がある。ここでは主要な遺構出土資料を中心に記述するが、包含層中出土遺物に注目すべき一括資料が存在するので、これについても項目を設けて報告したい。

第1項 SK96出土遺物

(第173～176図 2060～2182)

SK96からは瀬戸美濃窯産磁器やガラス製品を中心に433点が出土した。金属製品や板ガラスなどを除く大部分の製品が完形品であることが、この資料群の最大の特徴となっている。状況からみて、埋納時点では遺物は全く破損していなかったと思われる。

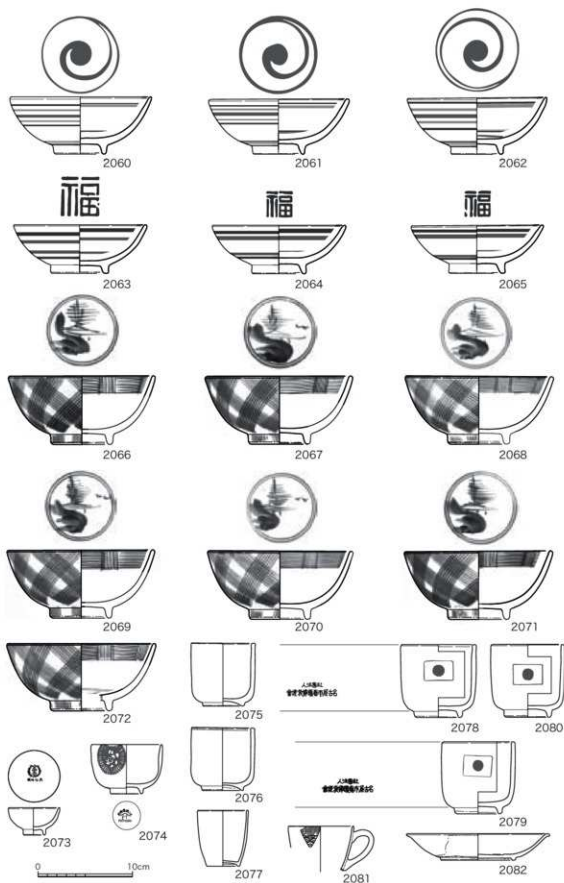
磁器には大碗(丼碗:2060～2072)、湯呑碗(2075・2076・2078～2080)、小碗(2073・2074)、小杯(2077)、ティーカップ(2081)、白磁受皿(2082)、色絵徳利(2086)、青磁灰皿(2093)、白磁汚物入れとその蓋(2094・2095)などがある。大碗は口径が15cm前後を測るもので3種存在する。大碗1類(2060～2062)は体部内外面にコバルト・鉄・酸化クロムで團線が描かれ、見込み(底部内面)に酸化クロムで巴紋が施されているものである。大碗2類(2063～2065)は体部内外面にコバルトと酸化クロムで團線が描かれ、見込みにコバルトで福字紋が施されているものである。大碗3類(2066～2072)はコバルトで体部内外面が施紋され、見込み(底部内面)もコバルトで山水紋が施されているものである。湯呑碗は白磁のもの(2075・2076)と上絵付けのもの(2078～2080)がある。後者は赤色上絵で日の丸紋を、青色上絵で「社

團法人名古屋看護婦救済会」と記されている。2073は内面に上絵で「正宗 高田吟種」と記され、2074は体部外面に上絵で印刷された施紋があり、高台裏には「不二硬質陶器 FT. FUJICHU」と書かれている。

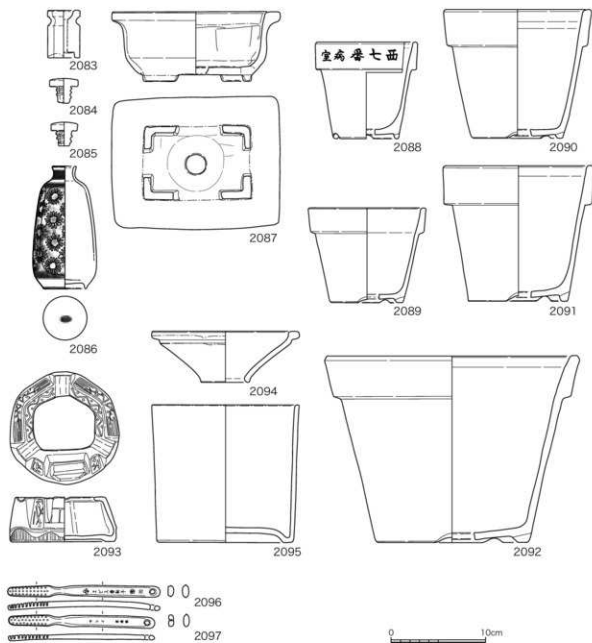
罫子製品にはノップ罫子(2083)と栓(2084・2085)があり、後者は螺子が切られている。陶器には植木鉢が存在する。2087は瀬戸美濃窯産の製品でなまこ箱が施されている。2088～2092は常滑系窯の植木鉢で機械クロロにより成型されている。規模から口径が10.4cmのもの、12.0cmのもの、15.4cmのもの、26.6cmのものに区分できる。2088の口縁部外面に黒書で「西七番病室」と記されており、陸軍名古屋病院の病室で使用された植木鉢と特定できる。現在は入院病室での植木鉢は「根付く」というイメージから忌避される傾向があるが、この資料では植木鉢が一定量使用されていたことを窺い知れる。

ガラス製品は陶磁器類よりも多種多様で量も多く、瓶類、コップ(2126・2127)、試験管、スライドガラス、板ガラスなどがある。これらは無色透明なガラスから青色や緑色に発色した半透明なガラスで作られたものがある。これらはガラスに含有された金属元素によって異なる。

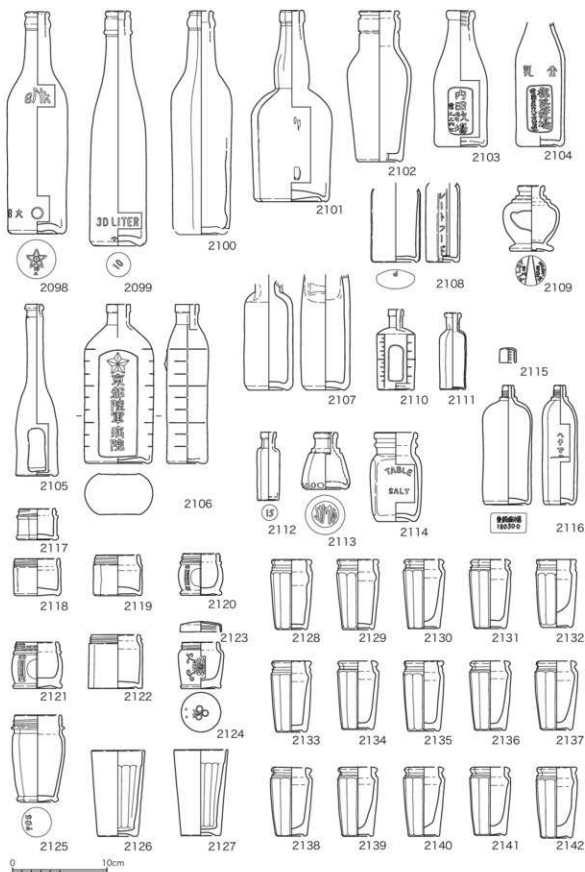
ビン類にはビール瓶(2098～2100)、ウイスキー瓶(2101)、牛乳瓶(2102～2104)、みかん水瓶(2105)、ラムネ瓶(2107)、インク壺(2109・2113)、食卓塩瓶(2114)、糸瓜コロン瓶(2116)、薬瓶(2106・2110～2112)、軟膏壺(2117～2124)などがある。ガラス瓶類は型作りで製作されたと考えられ、体部の上端から下端まで対の位置に2本の型の合わせ目の突線が残存するものが大半を占める。この特徴からこれらの瓶はその外形を縦に半分に割った状態の型で成形されたと思われる。例えば2128～2142



第173図 D期の遺物実測図(1) SK96(1)



第 174 図 D 期の遺物実測図 (2) SK96 (2)

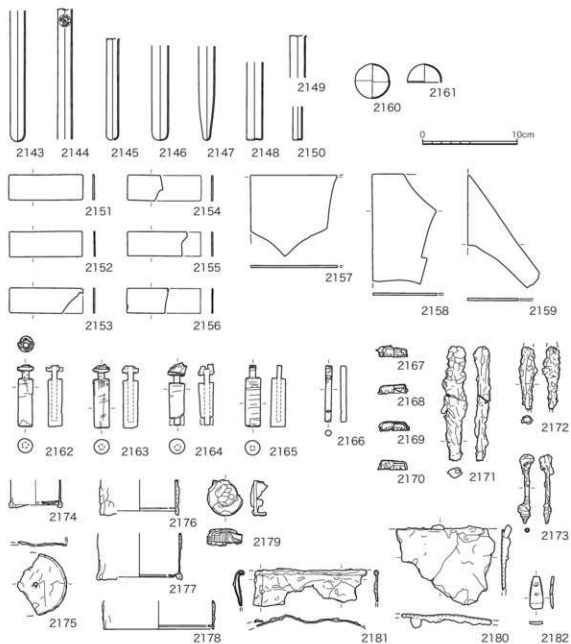


第 175 図 D 期の遺物実測図 (3) SK96 (3)

は用途を特定できない小壺で、体部が多角柱状に面取りされておりほぼ同じ形状の合わせ型で成形されているが、器壁の厚さは各々異なっている。2132などは図の右側にガラスが著しく偏っていて底部の厚さは均一ではない。また、口縁部と底部が体部とは別の型もしくは別の製法で製作されたものがあり、これに着目して分類することが可能である。1つは底部が別型で製作されたもの

(2098 など)、もう1つは口縁部と底部が別型で製作されたもの(2117 など)である。

2098は「大日本麦酒株式会社」と陽刻されている。この会社は1943年～1945年まで操業されていた企業で製造年が特定される。2103は「内田牧場」、2104は「都築牧場」と記されるが、この報告では牧場を特定するまで至ることができなかった。2106は「京都陸軍病院」と陽刻された



第176図 D期の遺物実測図(4) SK96(4)

薬瓶である。陸軍病院間での物資の流れを窺い知ることができる資料である。2109は隔刻からパイロット製インク壺と思われる。2116は側面に「ヘチマコ」、底部に「登録商標」と記されている。試験管は底部が球形の丸底となるもの(2143・2145・2146)、先端が緩やかに尖り丸底となるもの(2147)、平底のもの(2148・2150)に分類できる。2144の口縁部付近には白色インクによるプリントが存在する。2151～2156は緑が透明な無色の板ガラスで作られたスライドガラスである。

プラスチック製品には、ガラス瓶の蓋(2115・2123)、蓋(2179)、歯ブラシの柄(2096・2097)、ピンポン球(2160・2161)がある。2096には「エビス歯刷子」と記されている。金属製品には、鉄製王冠(2167～2170)、鉄製釘(2171～2173)、鉄製円筒容器(2174～2178)、鉄製箱(2181・2182)がある。王冠は2098などのビール瓶に伴うものと推測される。鉄製円筒容器は電池の外周部である可能性が考えられる。この他の素材の製品としては、2162～2166は黒色の心棒に黒色の物質が円柱状に取り巻くもので、物質の素材同定を行っていないが乾電池の中身と想定される。2182は革製品で靴の留め具と考えられる。

これらSK96出土遺物は多様な種類の遺物がほぼ完全な形で一定量存在していることから、再利用を前提とした埋納遺構に保管された一括資料とみることができる。資料の内容は大碗やコップや歯ブラシなど日常生活用品、薬瓶や試験管やスライドガラスなど病院に直接関連する物品、汚物入れや墨書植木鉢など病室の生活を窺わせる資料など、1943年頃に急造された名古屋陸軍病院第二分院の病室に関連する一括資料として位置づけられる。

問題はこうした物品が埋納された経緯と再利用されなかった事情である。当時、軍の諸施設での

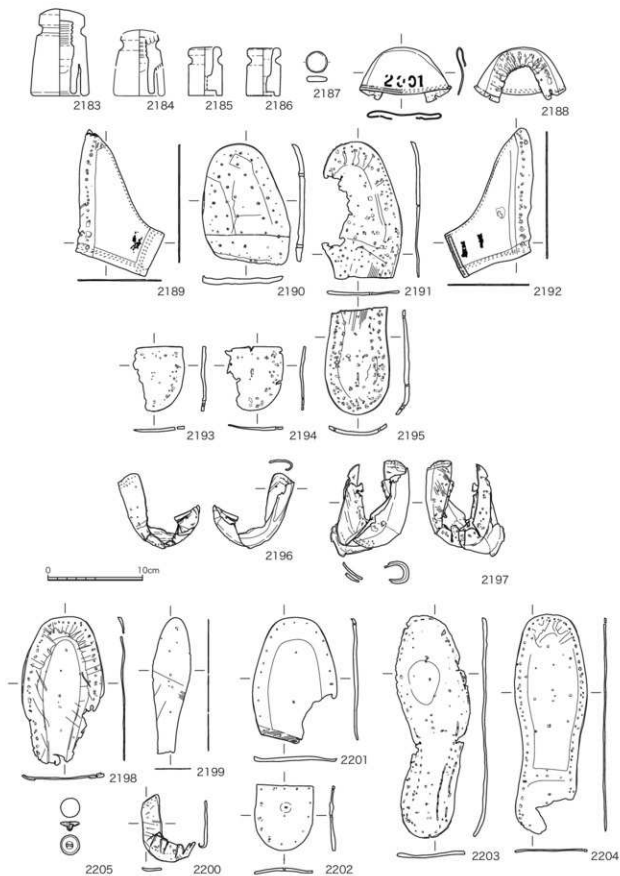
物品は戦況が逼迫する中相当に厳しく管理統制されていたと思われ、上官による抜き打ちの持ち物検査が頻繁に行われていたといわれる。品物が欠落すると厳しい処分が下されるため品物の不足が生じたため目数外の備品や持ち物をなんとか確保しておき、検査の際にその余分に確保した品物を一時的に隠匿したことが様々な証言によって明らかになっている。SK96は検査の時に地下に穴を穿ち物資を隠匿した土坑で、物資を隠匿した隊が急速移動などしたためその存在が忘れられたものと推測される。こうした事情を鑑みると、1943～1945年の一括資料と推測される。

第2項 SK56出土遺物

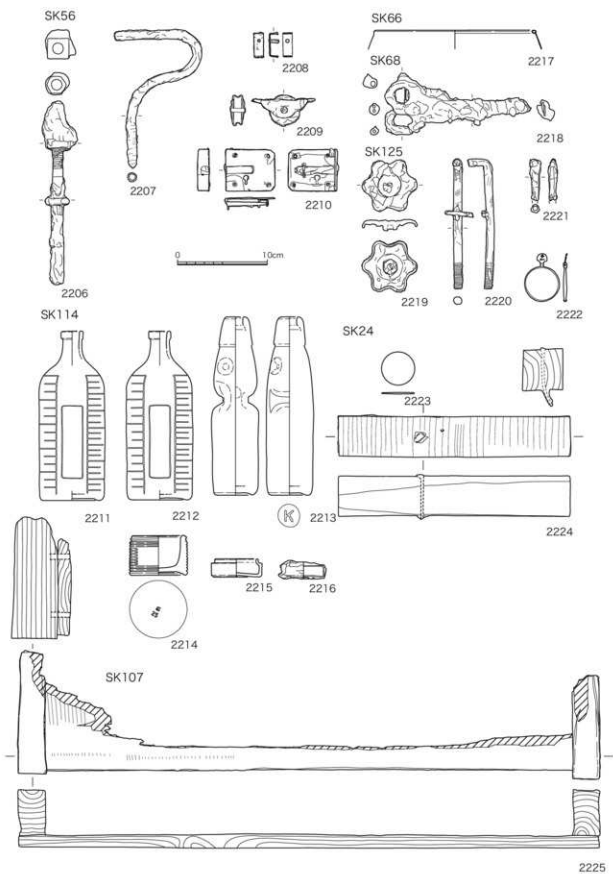
(第177～178図 2183～2210)

SK56からは革製品を中心に175点が出土した。

革製品は全て革靴であり、外履きである編上靴と上履きである宮内靴が存在する。2188は豚革製の宮内靴であり墨書で「2001」と記されている。この数字は病室番号や医師などの部屋番号の可能性が高い。2190・2191は昭五式編上靴で鉾の痕跡が認められる。革は厚く毛穴が見られないことから牛革と推測される。2189・2192は豚革製編上靴の側面部分で、革1枚の面積が小さい粗製品である。裏面(内面)に赤色塗料が認められるが、これは縫製工場で部分を示すために記入された記号と思われる。2193・2194・2197は牛革製編上靴の踵部分で、2193・2194は5～6枚を重ねて踵部分を作ったものである。2197は革の裏を使用するバックスキンのものである。2195・2196は牛革製宮内靴で、2195は踵部の一番内側の部分で編上靴の可能性も捨てきれない。2196はつま先部分で牛の裏革を利用している。2198は宮内靴の一種で足幅が狭いことから、女性(看護婦)用の上履きの可能性が考えられる。2199は牛革製の靴中敷が縮んだもの、2200は



第177図 D期の遺物実測図(5) SK56(1)



第178図 D期の遺物実測図(6) SK56(2)他

牛革製つま先、2201は牛革製営内靴の前半分でスリッパ状のものである。2202は豚革製編上靴の踵部分であるが、この種の豚革製の製品は珍しい。2203・2204は牛革製営内靴の底全体で直接足が触れる部分と考えられる。今回出土した革靴はパーツが小さく細かく継いで製作されたものが多く、豚革が使用された事例も多い。これらのことから、大半は物資が乏しい昭和19～20年に製作された可能性が高い。

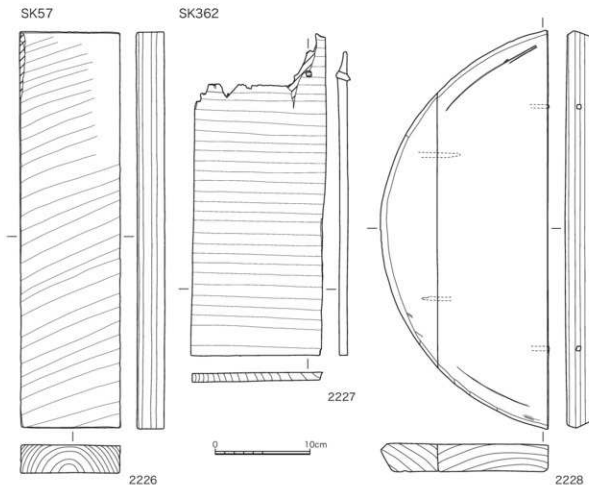
この他には罫子製品(2183～2186)、石製品(2187)、金属製品などがある。2205は真鍮製と思われる兵用軍服のボタンである。2208は留金具、2209は戸車、2210は銅製鍵の一部と思われ、木製箱物に付随する部品と考えられる。箱物そのものは遺存状態が不良で形状を復元できない。

SK56出土資料は靴やボタンなど身に付ける品物が多い特徴がある。遺物として取り上げることができなかったが、土坑内には繊維状炭化物の存在が視認されていたことや、金属製金具から木製箱物が存在した可能性が考えられることなどから、想像を逞くすれば木製箱に衣類などの装身具を納めて埋納したことも推測できる。時期は革靴の特徴から太平洋戦争末期の資料と位置づけられ、SK96の事例と同様、持ち物検査の際に一時的に隠匿された物品と推測される。

第3項 SK114 出土遺物

(第178図 2211～2216)

SK114からはガラス瓶や鉄製品などが出土した。ガラス瓶には目盛り入り薬瓶(2211・2212)



第179図 D期の遺物実測図(7) SK57・SK362

とラムネ瓶(2213)と筒型容器(2214)がある。瀬戸窯産磁器には白試合子身(2215)、鉄製品には鉄製の小型筒型容器がある。時期は詳細には特定できないが、SK96とあまり変わらないものと思われる。

第4項 SK25 出土遺物

(第178図 2219～2222)

SK25からは鉄製品やガラス製品などが出土した。2219は鉄製蛇口摘み部、2222はガラス製レンズで外周は銀色金属で縁取られ一端に突起を持っている。突起部に「+8.50」と陰刻されており眼鏡視力検査用レンズと思われる。

第5項 活字関連出土遺物

(第180～187図 2229～2515)

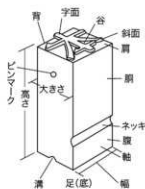
調査区西部中央の包含層中から鉄製箱形容器(2252)が出土した。出土状況について詳細な記録が無いが、近代に属する堆積層から出土したものであると思われる。鉄製容器は長さ14.6cm×幅9.2cm×高さ11.1cmの規模を持ち、蓋が錆び付いて固着してしまっている。側面の一部が破損しており、内部から活字312本などの遺物を採取することができた。しかし、まだ容器内に固着したまま取り出せない資料も相当量存在しており、ここでは取り出した資料のみを分析した。

金属性活字は鉛とアンチモンと錫の合金で製作されたものである。活版印刷に使用された活字で、大きさや形状など様々な要素から分類が可能である。まず、字面はおおよそ正方形となっているが、その規模は一辺が約2.8mm、3.7～4.0mm、4.2～4.7mm、4.9～5.0mm、約6.0mm、約7.4mmの6類に区分できる。このうち一辺が3.7～4.0mmのものが大多数を占めており、この規模は五号活字(鯨尺1分角大で約3.79mm四方)に対応し、ディードー式ポイント活字で10Pに相当する。高さ(活字の最大長)は23.3～

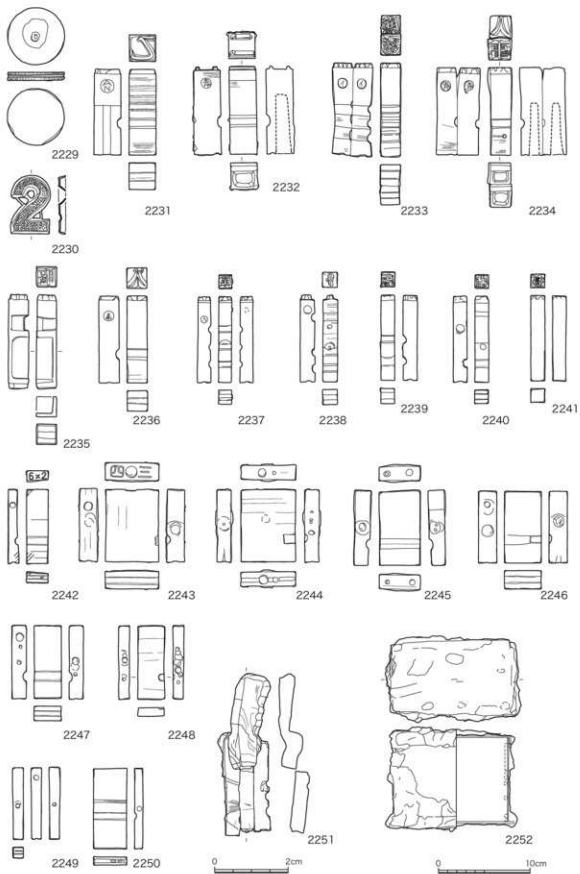
24.0mmに分布するものが多く、これはJIS規格23.45mmに近似する。

また、活字の腹(側面)に設けられた溝「ネッキ」の状態から4類に分類ができる。1類は一つの側面に3本の溝がほぼ等間隔に配置されるもの(2237など)である。2類は一つの側面に3本の溝が間隔を違えて配置されるもの(2238など)である。3類は一つの側面に2本の溝が配置されるもの(2239など)である。4類は一つの側面に1本の溝がほぼ等間隔に配置されるもの(2240など)である。ネッキのある側面に隣接する側面に円形の穴(ピンマーク)を有するものがあり、その中に「AN」(2231など)、「青」(2232など)、「イ」(2233など)などの文字が入るものがある。字面の反対の面である足には溝が存在するものが多いが、内部が空洞の状態になったもの(2232など)もいくつか存在する

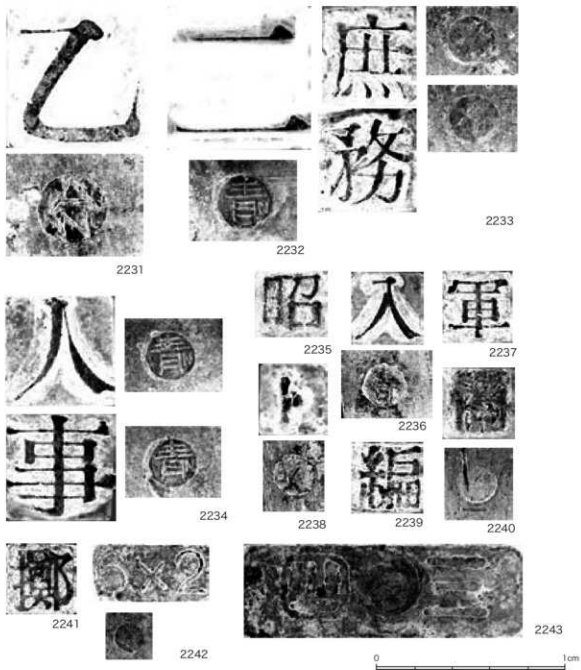
字面の字体は全部が明朝体であり、その書体は築地5号の字体に類似する。このうち「年」や「第」など同じ文字の活字が複数本出土した文字が存在し、明瞭に書体が異なるものがある。第182～186図は字面を顕微鏡写真で撮影し、この画像をモノクロ二階調にし、左右反転および白黒反転処理した後に大きさを画面上で合わせたものである。これを見ると、例えば「年」の場合、2416は一画目の「ノ」の角度が2449よりも急であり、2404は3本の横棒の間隔が広がっていて、3



第180図 活字模式図



第181図 D期の遺物実測図(8)活字(1)他



第 182 図 D 期の遺物実測図 (9) 活字 (2)



第 183 図 D 期の遺物実測図 (10) 活字 (3)



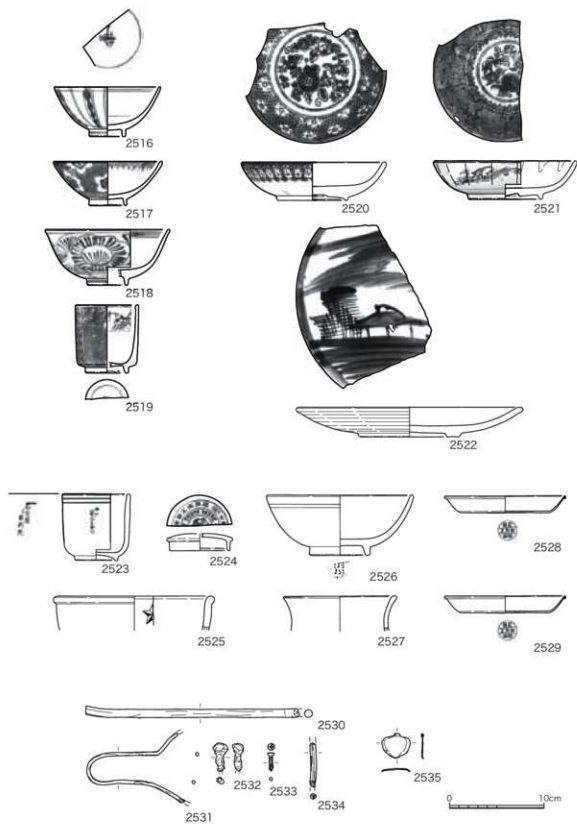
第184図 D期の遺物実測図(11)活字(4)



第185図 D期の遺物実測図 (12) 活字 (5)



第186図 D期の遺物実測図(13)活字(6)



第 187 図 D 期の遺物実測図 (14) 包含層他出土遺物

点の書体は明瞭に異なる。これら書体の相違は、上述のネッキによる分類におおよそ対応すると思われるが、必ずしも全てが該当するわけではない。

2251は4本の活字は溶着して重複したものである。高温に晒され活字は変形していた。

2508～2513は記述記号や数字記号などの文字を字面とする約物と呼ばれるものである。「()」(2509など)や句読点(2513など)が見られる。一方、2242～2250は「込めもの」で空白を埋めるためのものである。通常の場合は高さが活字より低く、今回の事例も高さは20mm前後を測り活字よりも3mmくらい低い。平面形の大きさは様々であり、溝やピンマークも多様な位置に設けられていた。大半は字間調節のための「スペース」と思われる。2242には「6×2」、2243には「四三」の文字が認められる。

活字以外には銅製門板(2229)や徽章(2230)などがあるが、他の製品はごく少量である。2230は軍服の襟などに着用した人物の所属(連隊番号)を示すための徽章と考えられ、「2」と造形されている。孔を利用して衣服に縫い込まれた縫い付け式のものと考えられ、全部で2点出土した。

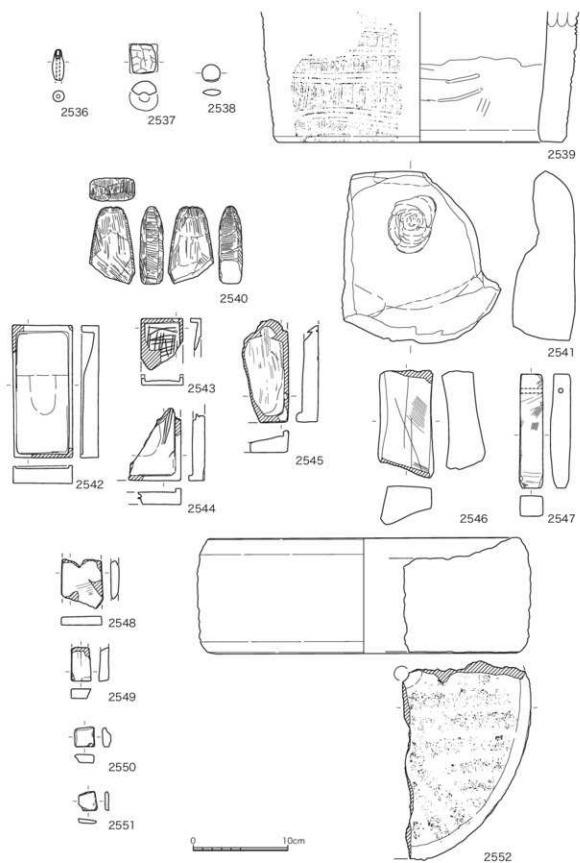
これらの鉄製箱物に収納された活字は300点以上を数えるが、まとまった文章を作成するに

ては字数が少なすぎる。文字の内容は、「衛」「醫」「藥」「骨」などの病院関連文字、「軍」「陸」「兵」「歩」「佐」などの軍隊関連文字、「區」「亞」「哈」「週」「昭」「和」などの地名や時間を示す文字、「庶務」「人事」「部」「特」「官」「勤」「號」「免」「乙」などの職制や文書に使用される文字などがあり、総体的に考慮すると陸軍病院に関連する内部印刷物に使用されたものと推察される。文字数が少なすぎる点とかな文字や約物が少ない点を考慮すると、名刺や軍用備品ラベルなど小型印刷に用いられた活字の可能性が考えられよう。

第6項 包含層出土遺物

(第188図 2516～2535)

表土掘削や遺構検出の際に出土した近代遺物のうち代表的なものを取り上げ報告する。2516～2522は瀬戸窯産磁器染付碗皿類で、コバルトで紋様が施されている。2516～2518は明治10年～20年くらいまでの時期に属し、2519～2521は型紙刷りで施された製品である。2523・2524はクロム緑軸で施されたもので、2524は型紙刷りで明治20年代～大正くらいに位置づけられよう。2528・2529はアルミ製器皿で裏面に「名古屋国立病院」と隠刻されている。太平洋戦争後の資料である。



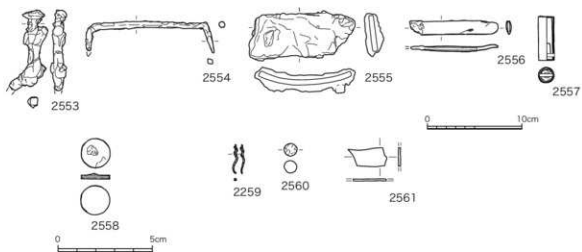
第 188 図 時期不明の遺物実測図 (1)

第6節 時期不明の遺物 (第189図 2536～2552)

良好な遺構一括資料として認識できなかった資料のうち時期を特定できないもの、その他の時期のものをご報告する。

2536・2537は土鍾、2538は碁石状土製品で時期は特定できない。2539は瓦質製品で内面は著しく磨耗し外面は刻線が施された円筒状遺物である。井戸側の可能性が高くC期以降のもの

と推測される。2540は石斧の可能性も考えられたが、細かな擦痕が全面に存在することから砥石と推定しておきたい。2541は中央付近が窪む平坦な石であるが、原始時代のものではないと推測される。2542～2545は硯、2546～2551は砥石、2552は石臼で、中世以降と思われる。



第189図 時期不明の遺物実測図(2)

第4章 自然科学的分析

第1節 名古屋城三の丸遺跡地下の層序、堆積環境と地形解析

鬼頭 剛(愛知県埋蔵文化財センター)・古澤 明(古澤地質調査事務所)

はじめに

名古屋城三の丸遺跡では、その地下層序について2001年に行なった調査結果が既に報告されている(鬼頭ほか, 2003)。今回、2002年に実施された調査区において地下層序を観察する機会を得た。その層序解析と放射性炭素年代測定から新たな知見が得られたので報告する。

試料および分析方法

調査地周辺における現在の詳細な等高線図作成のため、財団法人名古屋都市整備公社発行の1/5,000「用途地域指定図」にプロットされた標高値を用い、等高線図を作成した(第190図)。等高線図上には伊藤・川合(1993)、安達(1997)、川添(2000)、伊藤(2003)を参考にして、調査地周辺の主要な縄文時代遺跡をプロットした。図の作成は鬼頭が行なった。

名古屋城三の丸遺跡の地下層序解析のため、調査区の南端において遺構検出面からバックホーにより掘削し、層序断面を露出させ、柱状図の作成と放射性炭素年代測定の試料を採取した。柱状図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からはテフラ分析として16試料、放射性炭素年代測定に有効な植物片や土壌を7試料採取した(第10表)。また、庄内川沖積低地の地下層序解析のため、都市基盤整備公団と愛知県建設技術研究所から調査地周辺のボーリング・データを得た。柱状図の作成と分析試料の採取は鬼頭が行なった。

テフラ分析の試料は洗浄・篩別し、極細粒砂サイズ(1/8~1/16)に粒度調整し、この粒度調整試料中の火山ガラスおよび自形で新鮮な角閃石や斜方輝石の含有率を測定した。粒子組成の把握には通常の200粒子の観察とともに、微量含まれる特徴的なテフラ起源鉱物を識別するため、2000粒子中のテフラ起源鉱物含有量も把握した。屈折率の測定には液浸の温度を直接測定して屈折率を求める温度変化型測定装置 MAIOT(古澤, 1995)を使用した。測定精度は火山ガラスで ± 0.0001 、斜方輝石および角閃石で ± 0.0002 程度である。分析は古澤が行なった。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析(AMS)法により測定を行なった。分析方法は125 μm の篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨(グラファイト)に調整後、加速器質量分析計にて測定した。測定された ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した ^{14}C 濃度を用いて ^{14}C 年代を算出した。 ^{14}C 年代値の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。 ^{14}C 年代の暦年代への校正にはCALIB4.3を使用した。測定は株式会社パレオ・ラボ(Code No.; PLD)に依頼した。

分析結果

調査地周辺の等高線図

作成した現在の等高線図を第190図に示す。等高線間隔は標高8mまでが0.5m(一部では1.0m)、標高8~14mまでは1m、標高14m以

上では0.5mである。標高8m以上で等高線間隔が狭い部分は急傾斜であり、急崖を形成する。この標高8m以上を示す範囲には第四紀更新統の熱田層が分布し、熱田台地（あるいは名古屋台地）とよばれる。台地の北西端頂部は標高約10mで、東へ向かい標高16mないしは17mまで徐々に標高をあげる。現在、名古屋城の南には東西方向に出来町通（主要地方道白壁・三の丸線）が、名古屋城の東には南北方向の大津通がある。それらの道路が交差する北側に調査地点は位置し、調査地点周辺（名古屋市中区丸の内4丁目）では標高8mから13mに谷地形が認められる。周囲よりも低いこの谷地形部分に大津通がのびている。また、先の出来町通と国道41号線とが交差する名古屋市東区白壁4丁目では、標高10mから15mに谷地形が認められる。さらに東側、名古屋市東区芳野2丁目には標高16mから17mの小丘状を呈する地形の間に標高10mから15mで谷地形が認められる。標高16～17mの小丘状の上には長久寺貝塚や片山神社遺跡といった縄文時代遺跡が知られている。熱田台地の北縁に沿って北区大杉一丁目（標高6.0m）から西区城西三丁目（標高3.5m）にいたる明瞭な谷部が認められる。

名古屋城三の丸遺跡の深掘層序

名古屋城三の丸遺跡02区においてバックホーにより遺構検出面（標高11.96m）から深度約3.5mまでの地下層序断面を得た（第191図）。下位層より、標高8.50～8.85mまでは粗粒砂層からなる。風化の程度が進行し、含まれる鉱物粒子は指や手刈り等により容易に破砕される。標高8.85～9.58mまでは全体に粘土層からなり、標高8.85～8.94mは紫灰色を呈する塊状かつ均質な粘土層である。標高8.94～9.22mはともに層厚約1cmの黒褐色と紫灰色を呈する粘土層の互層からなる。標高9.22～9.58mは灰褐色を呈する塊状・均質な粘土層である。植物片が混じる。

標高9.58～9.76mは粗粒砂層からなり、標高9.58～9.63mは黒褐色の粘土ブロックが混じる粗粒砂である。本層下底面には下位層を削削した浸食面がみられる場合もある。標高9.63～9.76mは淘汰良好な粗粒砂層からなる。全体に黄褐色を帯びており、含まれる鉱物の風化の程度も著しい。

標高9.76～10.20mは塊状・均質な灰褐色を呈する粘土層からなり、植物片を含む。標高10.00～10.20mも塊状・均質な灰褐色を呈する粘土層であるが、植物の根跡が認められる。標高10.20～10.35mともに層厚約1cmの黒褐色と灰褐色を呈する粘土層の互層である。標高10.35～10.60mは黒褐色粘土層とシルト層との互層からなり、平行層理を基本とするが、一部シルト層にレンズ状の部分もみられる。

標高10.60～10.78mは黒褐色粘土層、標高10.78～10.98mは粘土ブロックの混在層である。粘土ブロックは黒褐色あるいは黄褐色を呈するものがみられる。基質は粘土からなる。

標高10.98～11.96mは全体に粘土層からなり、標高10.98～11.37mは塊状・均質な灰色粘土層、標高11.37～11.77mは褐色粘土層であり、土壌化の程度が著しい。標高11.77～11.96mは黒褐色粘土層で、土壌化の程度が著しく、近世の遺物・遺構が確認される。

テフラ分析

深掘層序断面から計16試料を採取した。分析結果を第192図に示す。試料1（標高8.52m）～14（標高11.08m）には光沢を帯びた緑褐色普通角閃石が微量含まれる。この角閃石の屈折率は1.682-1.697である。また、試料1～14にはさまざまな形態の火山ガラス・斜方輝石・単斜輝石および角閃石が含まれる。火山ガラスの屈折率は1.500-1.5090とブロードで明瞭なモードはみられない。斜方輝石の屈折率も1.701-1.721とブロードで明瞭なモードが識別できない。試料番号16（標高11.89m）にはバブルウォールタイ

名古屋城三の丸遺跡 VII

ブの火山ガラスが1%程度含まれる。このガラスの屈折率は1.495-1.500である。

放射性炭素年代測定

深掘層序断面から計7試料の放射性炭素年代値を得た(第10表)。下位層では標高8.94~9.23mの黒褐色粘土と紫灰色粘土の互層で採取した土壌(標高9.00m)で5725 cal yrs BP(PLD-2147)。上位層では標高11.77~11.96mの黒褐色粘土層から採取した木片(標高11.95m)で650, 575 cal yrs BP(PLD-2153)であった。

考察

2001年調査区地下の熱田層

深掘層序断面の粒度組成をみると、層序全体では粘土粒子が卓越し細粒堆積物により構成され、標高8.50~8.85mと標高9.58~9.76mに粗粒砂層が認められるのみである。対して、今回の調査地点から南西方向へおよそ900m隔たった2001年の調査区(第190図)において、深掘層序(標高7.97~11.20m)には粗粒砂層が卓越していたことと比べると、あきらかに層相を異にしている。

ところで、名古屋市および周辺地域の地下地質は全体として砂礫・泥互層からなり、下位より東海層群(第三紀)、海部・弥富累層(中部更新統)、熱田層下部(上部更新統)、熱田層上部(上部更新統)、第一礫層(上部更新統)、濃尾層(最上部更新統)、南陽層(完新統)などの第四系の累層から構成される。それらの自然地理学的分布は、丘陵~高位段丘が中部更新統、中・低位段丘は上部更新統、沖積低地は上部更新統最上部~完新統より構成される。名古屋城三の丸遺跡は熱田台地上に立地し、熱田台地は上部更新統の熱田層により構成されている。この熱田層および周辺地域の地形・地質に関しては松澤・嘉藤(1954)による詳しい記載以来、多くの研究・報告が行われてきた(総理府資源調査会、1956; 桑原、1968、

1975; 名古屋地盤調査会、1969; 濃尾平野第四系研究グループ、1977; 桑原ほか、1982; 坂本ほか、1984)。桑原(1975)は熱田層を最下部層・下部層・上部層に区分した。熱田層最下部層は濃尾平野の中央部の地下にのみみられる砂層である。下部層は濃尾平野の地下全域に分布し、地表では熱田台地にのみ露出する海成粘土層である。熱田海進(濃尾平野地下第四系研究グループ、1977)とよばれる最終間氷期の海進堆積物と考えられる。本層上界面の深度は濃尾平野西縁部では-140mにおよぶが、熱田台地では10m以下である。上部層も濃尾平野の地下全域に分布する。地表では熱田台地と守山台地に露出する。主に砂層からなり、シルト・粘土層やレンズ状の礫層も挟まれる。層厚は濃尾平野西縁部で60m以上、熱田台地で30~40mであるという特徴をもつ。

さて、名古屋城三の丸遺跡の2001年の調査では標高7.97~11.20mまでに、粗粒砂層と粘土層からなる深掘層序が得られ、堆積相解析から河川流路(チャンネル)と後背湿地とをくり返す河川卓越環境が推定された(鬼頭ほか、2003)。また、堆積年代の推定のためテフラ分析を行ない、標高7.97~8.30mにみられる粗粒砂層中の標高8.01mの層準からは阿蘇4テフラ(Aso-4)が、その直上の標高8.18mの層準からは大山生竹テフラ(DNP)が識別できた。それらの降灰年代について、阿蘇4テフラは86~90 ka (kaは10³年前を表す地質年代単位)、大山生竹テフラは木村ほか(1999)により80±40 kaとされた。このことから砂層は9~8万年前以降に堆積したと思われる。とくに大山生竹テフラの識別できる層準からは斜方輝石および単斜輝石を主体として角閃石を含む御岳火山起源の御岳-奈川(0n-Ng)も含まれる。標高8.18m付近の(中村ほか、1992)砂層上部は5万年前以降に堆積したものと思われる。

標高8.47~9.63mにも粗粒砂層が認められ、

標高 8.70m と標高 9.18m の層準からは御岳火山起源のテフラ（御岳・奈川 (On-Ng), 御岳辰野 (On-Tt), 御岳三岳 (On-Mt)）の岩石記載（町田・新井, 1992）に類似することから、5 万年前以降のテフラを混在した木曾川泥流堆積物と考えられた。

標高 11.11 ~ 11.20m は黒褐色シルト質粘土層で、標高 11.14m の層準からは屈折率 1.495-1.500 のバブルウォールタイプの火山ガラスが含まれた。この火山ガラスの屈折率と木曾川泥流堆積物の層準よりも上位にあるというその層位関係から、始良 Tn テフラ (AT) 起源と考えられた。その年代は村山ほか (1993) により 24,330 yrs BP とされ、約 2 万 4 千年前以降に堆積したことがわかった。本層では放射性炭素年代測定も実施し、標高 11.19m で 10890-10755 cal yrs BP(PLD-1594)であった。

熱田層で確認される広域テフラについて、熱田層上部には畠界・葛原テフラ (KTz) が挟まれており（諏訪ほか, 1995）、木曾川御岳起源の On-PmI (Pm-I), On-Tt (Pm-III) などを含む（小林ほか, 1967; 水野, 1996）という報告がある。また、その堆積環境について森 (1980) や Mori (1986) は珪藻分析に基づいて、熱田層の最下部砂泥互層は泥炭湿地の発達した河川下流域での堆積と考えられ、海進の証拠は得られていない。下部層では、その下部で海成種が急激に増加し、下部から中部にピークがあり、上部へ漸減して、盆地の縁辺部よりの基目寺・稲沢では上部層準で小海退・小海進がみられた。上部層では淡水性群集がみられ、泥炭湿地の発達した河川下流域での堆積環境が推定された。また、砂礫層の

発達が少ない、縁辺部に限られることから、このときの海水準低下はそれほど大きくなかったと推定した。さらに名古屋地盤調査研究会 (1969) は、熱田層下部の第 5、第 4 粘土層には貝化石が含まれるもの、第 4 粘土層の中・北部の地域では海成層の証拠に乏しいこと、熱田層上部では砂層と泥層が交互に堆積しており、海水準の変化が反映していると考えられること、また、最上部の砂層は浅海～海浜または三角州ないし河床性の砂層であると考えられることを述べている。

2001 年実施の調査では、標高約 8 ~ 11m までに約 8 ~ 9 万年前から約 2 万年前までの河川卓越環境が推定できた。その結果は上で述べたような既に報告されている熱田層上部の特徴と一致しており、2001 年の調査区地下には典型的な熱田層上部層が分布することがわかった。

2002 年調査区の地下層序に記録される堆積環境

2001 年の調査区では堆積相解析とテフラ分析、放射性炭素年代測定から、調査区の地下は熱田層上部層の分布域であることがわかった。

2002 年の調査でも、いわゆる熱田台地として区分される台地上に調査区が立地することから、その地下には熱田層上部層の分布が予想された。ところが、7 試料から得られた結果は、標高 9.00m の土壌が 5725 cal yrs BP(PLD-2147)、標高 9.60m の土壌が 5705, 5695, 5675, 5660 cal yrs BP(PLD-2149)を示した。また、標高 9.10m の土壌で 6445, 6420, 6410 cal yrs BP(PLD-2148)、標高 9.60m の土壌で 5705, 5695, 5675, 5660 cal yrs BP(PLD-2149)、標高 11.90m で 6170, 6140, 6110, 6065, 6060,

標高 (m)	堆積物	試料の種類	¹⁴ C年代 (yrs BP)	δ ¹³ C(PDB) (‰)	暦年代校正値 (±σ, cal yrs BP)	1σ 暦年代範囲 (cal yrs BP)	Lab Code No.(method)
9.00	黒褐色粘土と紫褐色粘土の互層	土層	4995±30	-23.0	5725	5745-5660(90.0%)	PLD-2147(AAS)
9.10	黒褐色粘土と紫褐色粘土の互層	土層	5665±35	-23.5	6145, 6130, 6110	6175-6110(90.0%)	PLD-2148(AAS)
9.60	黒褐色粘土と泥じり堆積物	土層	4970±30	-22.8	5705, 5695, 5675, 5660	5725-5655(90%)	PLD-2149(AAS)
10.25	黒褐色粘土と灰褐色粘土の互層	土層	5165±30	-23.2	5920	5935-5905(85.3%)	PLD-2150(AAS)
10.60	黒褐色粘土	土層	5200±30	-23.1	5930	5950-5920(85.2%)	PLD-2151(AAS)
11.00	黒褐色粘土	土層	5330±30	-22.8	6170, 6140, 6110, 6065, 6060, 6005	6075-6000(84.7%)	PLD-2152(AAS)
11.95	黒褐色粘土	木片(マウラ)	655±30	-22.2	650, 575	595-565(67.2%)	PLD-2153(AAS)

第 10 表 名古屋城三の丸遺跡 O2 区深掘地点のテフラ分析結果

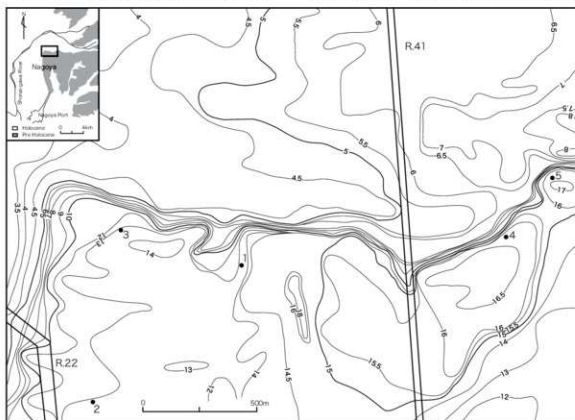
名古屋城三の丸遺跡 VII

6005 cal yrs BP(PLD-2152)と、一部では年代値の逆転が生じている。

ところで、現在の地形解析のため等高線図を作成したが、先にも述べたように今回の調査地点付近には標高8mから13mに谷地形が認められた。いっぽう、テフラ分析からは標高8.52m(試料1)から標高11.08m(試料14)までにはさまざまな形態の火山ガラス、斜方輝石、単斜輝石および角閃石といった多量のテフラ起源粒子を混在した。また、火山ガラスの形態から木曾川泥流堆積物のそれと一致した。最上部の標高11.89m(試料16)からは屈折率1.495-1.500のパブルウォールタイプの火山ガラスが検出された。この火山ガラスは屈折率から始良Tnテフラ(AT)起源と考えられる。

さて、テフラ分析からは御岳火山起源のテフ

ラと始良Tnテフラが検出された。御岳火山起源のテフラは約5万年前(中村ほか, 1992)、始良Tnテフラから約2万4千年前(村山ほか, 1993)の噴出年代が報告されている。いっぽう、放射性炭素年代測定では約5000~6000年前の値が得られ、テフラ分析と放射性炭素年代測定との分析結果には相違がみられる。違いの生じた原因について、作成した等高線図の調査地点にみられる標高8~13mの谷地形に注目したい。谷地形の推定される場所には現在、南北方向にのびる大津通があり、道路は現在でも低角度で北へ傾斜する様子が観察できる。この傾斜は、大津通を建設する際に、台地面を開削してできたものとも考えられる。しかし、もし熱田層上部層が露出する台地を削って道路建設が行なわれたとすれば、その地下には2001年に調査したときと同様な層序



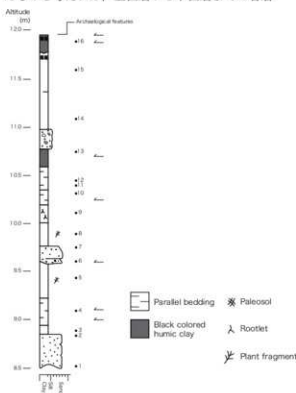
第190図 調査地点位置図

黒丸は調査地点と周辺の主な遺跡を示す

1. 名古屋城三の丸遺跡VII
2. 名古屋城三の丸遺跡VI
3. 名古屋城天守閣貝塚
4. 長久寺遺跡
5. 片山神社遺跡

等高線(m)は財団法人名古屋都市整備公社発行の「用途地域指定図(1/5000)」の標高値を基に作成。等高線間隔は標高8mまでが0.5m(一部では1.0m)、標高8~14mまでは1m、標高14m以上は0.5m

断面の露出が期待されよう。ところが、実際にはそれとは異なる層序を示した。また、数値年代も5000～6000年前を示し、あきらかに熱田層上部層とは年代を異にする堆積物であるといえる。以上のことから、2002年の調査地区付近にみられる標高8～13mの谷地形は、現在の道路建設といった人工的な要因で形成されたものではなく、もともと本地点に生じていた原地形であった可能性が指摘できる。深掘層序の最下位層で5725 cal yrs BP(PLD-2147)を示したことから、少なくとも約5700年前以前に当地には谷が存在しており、その谷を細粒堆積物が埋積していったものと推定できる(第193図)。また、今回の調査区で標高8.52m(試料1)から標高11.08m(試料14)までの層序で木曽川泥流堆積物に同定できる火山ガラスが混在した事実は、周囲と比較して地形的に低い場所に、台地上や谷壁に露出していた木曽川泥流堆積物が削剥され二次的に堆積したものと考えれば、上位層から下位層までの各層



第191図 名古屋城三の丸遺跡O2区における深掘柱状図
黒丸はテフラ分析、矢印は放射性炭素年代測定の試料採取層序を示す。

序で検出された理由として矛盾なく説明できる。

熱田台地北西端部の人工改変地

今回、等高線間隔0.5mないし1mで標高3.5～17mまでの等高線図を作成し、標高8m以上を示す熱田層の台地縁辺部には小規模な谷地形が存在することがわかった。

ところで、熱田台地の北西端に突きでた形の尾根部分が、名古屋城築城の際に盛り土された人工改変地の可能性があるとの指摘があった(鈴木正貴氏私信)。このことについて、名古屋城に関する史料のひとつである絵図「御城取大体之図」をみると、直線の組み合わせのみで境される城の範囲と、それを囲む道路の様子がみとれる。それらの直線や道路と交点をもちながら、絵図の南西側から北側を通して東側にいたる曲線がみられる。この曲線が描く形状は、本論の等高線図で示した標高8m以上で示される熱田台地と沖積低地との境界線に類似しており、沖積低地と台地との境界を描いたものと推定できる。いっぽう、現在の等高線図(第190図)には名城公園の南西側にあたる名古屋市西区堀場町と同市西区樋の口町に、標高8～10mで北西方向へ張り出した熱田台地の尾根部分がみられる。ところが、絵図ではこの尾根の存在が予想される範囲に「ふけ」という文字の記載とともに、直線で境された城の範囲と思われる境界線が描かれるのみである。絵図において熱田台地と沖積低地との境界線と推定した曲線は、今回作成した等高線図と比較すると、台地の北西端部分でのみ大きな相違が認められる。その理由について、熱田台地の縁辺を掘削した堀川や名古屋城築城の際に掘りだされた堆積物を、熱田台地の北西側に人工的に盛り土したため、現在の等高線図に表現されるような尾根状の張り出し部分となったと推定できるようである(鈴木正

名古屋城三の丸遺跡 VII

貴氏私信)。この推定について、地質学側からは提示できるデータがまったくなく、今のところ肯定も否定もできない。台地北西端部付近のボーリングコア資料の検討や、人工改変地との解釈が妥当であれば熟田層との境界面の発見が必要であると思われる。いずれにせよ、自然科学的には予想されなかったたいへん興味深い問題であり、今後の課題としたい。

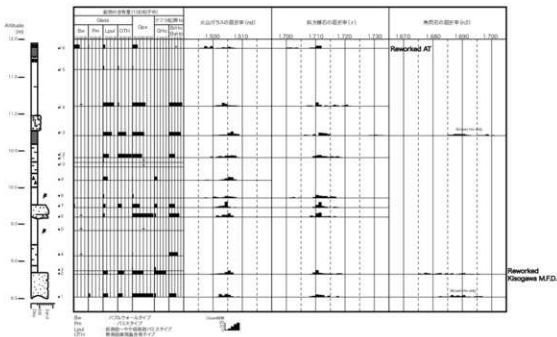
謝辞

本論を作成するにあたり、放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ東海支店の山形秀樹氏にお世話になった。愛知県建設技術研究所の滝本守氏、都市基盤整備公団の由見慎一氏には名古屋市北区地域のボーリング・データを供与していただいた。愛知県埋蔵文化財センター調査研究員の鈴木正貴氏には名古屋城の築城に関わる問題提議と参考文献をご紹介いただいた。図面の整理では愛知県埋蔵文化財センター研究補助員の尾崎和美氏・上田恭子氏、トレース作業では研究補助員の阿部佐保子氏、試料の整理・保管では元整理補助員の服部恵子氏・宇佐美美幸氏・山口きみ代氏、

整理補助員の服部久美子氏・村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

- 安達厚三, 1997, 縄文時代, 新修「名古屋史 1」, 名古屋市, 45-165.
- 古澤 明, 1995, 火山ガラスの屈折率測定・形態分類とその統計的な解析, 地質学雑誌, 101, 123-133.
- 伊藤正人・川合 剛, 1993, 特別展名古屋の縄文時代資料集, 名古屋市見晴台考古資料館, 147p.
- 伊藤正人, 2003, 縄文時代の名古屋-地形変遷と遺跡立地-, 名古屋市見晴台考古資料館研究紀要, 5, 1-16.
- 川添和暁, 2000, 愛知県の縄文遺跡(1)-尾張北部地域について-, 研究紀要 第1号, 愛知県埋蔵文化財センター, 1-8.
- 木村純一・岡田昭明・中山勝博・梅田浩司・草野高志・麻原慶憲・館野満美子・檀原 徹, 1999, 大山および三瓶火山起源テフラのフィッシュトラック年代とその火山活動史における



第 192 図 名古屋城三の丸遺跡 O2 区深堀地点のテフラ分析結果

意義, 第四紀研究, 38, 145-155.

鬼頭 剛・森 勇一・上田恭子, 2003, 第VI章 自然科学分析 名古屋城三の丸遺跡地下で確認された熱田層最上部層の層序と古埋, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第115集「名古屋城三の丸遺跡(VI)」, 愛知県埋蔵文化財センター, 46-56.

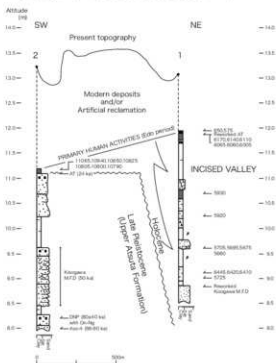
小林国夫・清水英樹・北沢和男・小林武彦, 1967, 御岳火山第一浮石層・御岳火山第一浮石層の研究その1, 地質雑, 73, 291-308.

柔原 徹, 1968, 濃尾盆地と傾動地塊運動, 第四紀研究, 7, 235-247.

柔原 徹, 1975, 濃尾傾動盆地の発生と地下の第四系, 愛知県地盤沈下研究会報告書, 愛知県, 109-182.

柔原 徹・松井和夫・吉野道彦・牧野内 猛, 1982, 熱田層の層序と海水準変動, 第四紀, 第四紀総研連絡紙, 22, 111-124.

町田 洋・新井房夫, 1992, 火山灰アトラス [日本列島とその周辺], 東大出版会, 276p.



第2節 名古屋城三の丸遺跡の埋桶の埋土より産出した双翅目のサナギについて

森 勇一 (愛知県立明和高等学校)・上田恭子 (同)

1. はじめに

昆虫は、発生の過程で変態をする節足動物として知られる。キチン質で構成された昆虫(とくに成虫)の外骨格は化学的にきわめて安定であり、酸に侵されることが少ない。このため、日本のように雨が多く湿潤で、酸性に傾いた土壌中には昆虫化石は鞘翅目 Coleoptera を中心によく保存されている。昆虫の体サイズが適度に小さく、外骨格が多くの関節で連結しており、そして、これが死後もバラバラに分離することも昆虫の体節が土圧による破壊を免れる要因となっている。

双翅目 Diptera に属するハエ類では、羽化の際、サナギ Pupa の殻が環状に割れて成虫を生ずる。サナギは3齢幼虫の外皮が硬化したものであり、外見的には米俵状で通常黒褐色である。サナギの皮殻はキチン質に似た化合物によって造られており、圓蛹 Coarctate pupa と呼ばれる。双翅目の圓蛹も鞘翅目の体節片と並んで、遺跡中より検出される可能性が高い昆虫化石の一群である。

2. 分析試料

本報告に述べる名古屋城三の丸遺跡(II NS02区)の試料は、2002(平成14)年4月より9月にかけて実施された国立名古屋病院看護婦養成所大型化整備のための事前調査に際し、採取されたものである。本遺跡は、名古屋台地の北西端に位置し、弥生時代・古代・中世から近世に至る複合遺跡である。調査地点の現地表面の標高は約13mであり、遺跡の基盤層は第四紀更新世末に堆積した熱田層上部に由来する非海成の砂層である。調査面積は1,100 m²である。

分析試料は、調査地点の南端に掘削された江戸時代前期から後期にかけての埋桶(SK37)を埋積する堆積物中より採取されたものである。埋桶は直径1.1m、深さ約3mにわたって基盤層を掘り窪め、内部に板材を配置して桶状にしたものであり、従来の見解ではこの種の構造物は「井戸」と解釈されてきた。

本分析試料は、埋桶の下端にたまった黒褐色礫まじり砂質シルト層を水洗浮遊選別したもので(試料A)と、これに先だってブロック削り法にて検出したもの(試料B)の2試料に分類される。なお、分析に供した試料の湿潤重量は、27リットル入りコンテナ2箱、計21.2kgであった。

3. 分析結果

試料A

(標本の状況)

分析試料のうち試料Aは、2003年5月より7月の約3ヶ月間にわたり、この当時愛知県埋蔵文化財センター研究補助員であった上田恭子氏(現在明和高校非常勤講師)により、水洗浮遊選別法にて抽出されたものである。抽出後の昆虫化石は、40×50mmの小型シャーレに並べられ、エチルアルコールと蒸留水を等量混ぜた液体に浸して冷暗所に保存されている。これらのシャーレには、同一種と考えてよい中型のサナギが多数含有され、これ以外にサイズを異にする小型のサナギ、および大型のサナギのほか、甲虫目に分類される複数種の体節片が検出されている。

試料A中のサナギの総個体数は、ほぼ完形のものについての顕微鏡下で計数した結果、計1,092点であり、うち暗褐色の中型のサナギ(サ

ナギ 1) が 729 点, 黄褐色の小型のサナギ (サナギ 2) が 234 点, 黒褐色の大型のサナギ (サナギ 3) が 95 点, これ以外に微小なサナギ (サナギ 4) が 34 点確認された。甲虫目の検出点数は, 計 246 点であった。

(標本の記載)

以下に, 試料 A 中より検出された双翅目の圏蝸 (サナギ 1 ~ 3) について, その形態的特徴などについて述べる。

(1) 双翅目の圏蝸

標本 1 (II NS02K-01; サナギ 1)

長さ 6.2mm, 最大幅 2.8mm の暗〜黄褐色の標本である。体は紡錘形であり, 背および腹方向に扁平につぶれた形状を呈する。体表に多数の長い突起を有する。第 2 節には前部に 1 対, 第 3 節には背面に長短各 1 対, 側面に長短各 1 対, 腹面に微小な 1 対, 第 4 節から第 11 節までは背面に 1 対, 側面に 2 対, 腹面に微小な 1 対, 第 12 節 (末節) には 3 対の突起を有し, 腹面には微小な 1 対の突起を備える。各突起の基部にはさらに小棘を有し, 突起は全体として針状を呈する。環節には腹側の環節後部に疣状の匍匐隆 (素木, 1958) を生じている。匍匐隆は, 各節とも一列に計 6 個ずつ配されており, これらは幼虫が匍匐運動する際利用される (河田, 1959)。

前方気門は第 2 節に 1 対認められ, 5 ~ 8 個の分岐を有する。後方気門は末節背面基部に 1 対認められ, これらは長く突出し先端が 3 つに分岐している。咽頭骨格は不明瞭で小さい。

標本 2 (II NS02K-02; サナギ 2)

長さ 6.8mm, 最大幅 3.1mm で, 標本は黄褐色ないし褐色である。後方にやや膨らんだ長卵形を呈する。標本は, 9 ないし 10 枚の環節と, 頭部および尾節により構成される。頭部後方の 2 ~ 3 節は, 本来胸部に相当するものと考えられるが,

鏡下では胸部と腹部との区別が困難であり, 本論では腹部環節として一括して扱った。高倍率で観察すると, 環節に背側および腹側ともに直線的に平行して配列する短刺状の微刺列が認められる。微刺列は, 標本 1 に述べた匍匐隆同様, 幼虫の運動器官として重要である。

尾端には, 斜め後方に向かって強く突出する 1 対の後気門が認められる。他の標本には, 頭部付近に前気門が認められるものも存在する。頭部付近より第 2 環節ないし第 3 環節にかけての部分には, 咽頭骨格が皮殻を通して透けて観察される。咽頭骨格は黒化しており, 後方で 4 裂し湾曲して鋭い針状となる。うち 2 本は細く長大であり, 残る 2 本は太くて短い。

標本 3 (II NS02K-03; サナギ 3)

長さ 12.5mm, 最大幅 5.8mm, 黒褐色の大型のサナギである。著しく圧密が進み, 中央部が膨らんだ依形を呈する。12 節からなり, 1 節が頭部, 2 ~ 4 節が胸部, 5 節以下が腹部とみなすことができる。腹部の環節には, 多数の微刺列が配され, これらが集合し鮫肌状を呈する。この鮫肌状の環節を地面に押し当てることにより, 匍匐運動することを可能にしている。

前気門に相当する部分には, 痕跡的な小突起が認められる。また, 末端節後面に 6 対の輪状突起を有し, これらに囲まれた中央部付近には 2 個の後気門が配される。後気門は円形であり, この内部に 3 条の平行する裂孔と 1 個の明瞭なボタンを有している。

(標本の同定)

平嶋ほか (1989) によれば, 双翅目は長角 (カ) 亜目 Nematocera と短角 (ハエ) 亜目 Brachycera に分類され, うち短角亜目は圏蝸を形成し羽化に際して圏蝸殻の先端が環状に裂ける環縫群 Cyclorrhapha と, 圏蝸を作らず

裸蛹のまま背面中央部が縦裂して羽化する直縫群 Orthorrhapha とに区別される。環縫群は、世界で計 93 科を含む大群であり、これらは 73 科からなる無弁翅類 Acalytrata, 16 科からなる有弁翅類 Calytrata, 4 科からなる蛹生類 Pupiparia に 3 分されている (平嶋ほか, 1989)。なお、短角亜目環縫群の終令幼虫の形態的分類については、Okada(1968), Smith(1989) などの研究がある。

試料 A から得られたサナギ 1 は、各環節に 6 個の疣状の御伽隆が認められ、体表上に多数の長い突起を配するという特徴的な形状より、ハナバエ科 Anthomyiidae のヒメイエバエ *Fannia caniculari* に同定される。

また、サナギ 2 は、環節上に短刺状の明瞭な微刺列を有し、尾端に斜め後方に向かって強く突出する 1 対の後気門と気門周囲の環節上に一列の乳頭状突起が認められること、頭部付近に短い指状突起を有する 1 対の前気門が存在する特徴から、ショウジョウバエ科 Drosophilidae のキイロショウジョウバエ *Drosophila melanogaster* かこの近縁種に分類される可能性が高い。

サナギ 3 については、長さ 12.5mm, 最大幅 5.8mm と大型であり、かつ末端節後面に 6 対の輪状突起に囲まれた 2 対の後気門が認められ、後気門に 3 条の平行する裂孔と 1 個の明瞭なボタンが配されることから、クロバエ科 Calliphogidae のオオクロバエ *Calliphora lata* ないしはケバククロバエ *Aldrichina grahami* に同定される。なお、微小なサナギ 34 点 (サナギ 4) については、詳細な同定作業を行っていないが、ショウジョウバエ科 Drosophilidae に属するものである可能性が高い。

(2) 甲虫類など

試料 A より検出された双翅目の圍蛹以外の昆虫片は、以下のとおりであった。

マグソガムシ <i>Pachysternum haemorrhoum</i>	計 12 点
ハネカクシ科 Staphylinidae	計 45 点
オサムシ科 Carabidae	計 3 点
エンマコガネ属 <i>Onthophagus sp.</i>	計 1 点
アリ科 Formicidae	計 1 点
ゾウムシ科 Curculionidae	計 8 点
コクゾウ Sitophilus zeamais	計 32 点
ハムシ科 Chrysomelidae	計 4 点
コガネムシ科 Scarabaeidae	計 3 点
オトシブミ科 Attelabidae	計 2 点
不明甲虫 Non identified beetles	計 22 点

試料 B (ブロック割り法で得られた昆虫化石)

次に、試料 B より産出した昆虫化石について述べる。ブロック割り法により得られた昆虫化石は、以下のようなものであった。

サナギ 1 と同一種→ヒメイエバエ <i>Fannia caniculari</i>	24 点
サナギ 3 と同一種→オオクロバエ <i>Calliphora lata</i> かケバククロバエ <i>Aldrichina grahami</i>	19 点
コアオハナムグリ <i>Oxycteniona jucunda</i>	2 点
ヒメコガネ <i>Anomala rufocuprea</i>	1 点
コガネムシ科 Scarabaeidae	2 点
オサムシ科 Carabidae	4 点
ハネカクシ科 Staphylinidae	3 点
ゾウムシ科 Curculionidae	1 点

4. 考察

名古屋城三の丸遺跡の埋桶 (江戸時代前期～後期) の埋土中より発見された昆虫片には、ヒメイエバエ (サナギ 1), ショウジョウバエ科のキイロショウジョウバエ (サナギ 2), およびクロバエ科のオオクロバエかケバククロバエ (サナギ 3) の 3 タイプのサナギが多数含有されることが明らかになった。中でも、サナギ 1 のヒメイエバエが試料 A の 66.8% を占め圧倒的に多かった。この

ほか、水洗浮遊選別法およびブロック削り法を通じて、マグソガムシやハネカクシ科・オサムシ科・ゾウムシ科・コクゾウ・ハムシ科。コガネムシ科などの昆虫片が検出された。

最も多く認められたヒメイエバエは、近似種のイエバエとともに主に室内内に生息し、イエバエが食卓上や畳の上で日中活動するのに対し、ヒメイエバエは部屋内の空間をたえず輪舞する習性が観察されている(鈴木・緒方, 1968)。日本国内では北日本に多く、また市街地や住宅地に多くに多い。季節的には春秋に多く認められるという(鈴木・緒方, 1968)。

ハエ類は人間生活に深く関わる生活をしているため、比較的自然環境の影響を受けることが少なく、また交通機関の発達によりハエ類の普通種は世界共通種が多い。日本でも大部分のハエは全土に分布する。しかし、密度は必ずしも均一ではなく、ヒメイエバエが北海道に多いのに対し、イエバエは九州に多いなど、分布には偏りが見られる(鈴木・緒方, 1968)。また、市街地と農村部を比較してみると、市街地ではヒメイエバエが90.8%、イエバエが5.8%、その他のハエが3.7%、半農半住宅地ではヒメイエバエが78.3%、イエバエが16.8%、その他のハエが4.9%、農村部ではヒメイエバエが22.5%、イエバエが76.1%、その他のハエが1.4%(鈴木・緒方, 1968)と、ヒメイエバエは市街地に多く、市街地に適応したハエであるということが出来る。

発生源についての嗜好性をみると、他のハエ類が生ゴミや糞尿・動物の死体などに誘引されるのにくらべ、ヒメイエバエ・オオイエバエの2種はこれらに集まるのが少なく、たくあん漬のぬかに特徴的に発生することが知られる(鈴木・緒方, 1968; 林・藤永, 1979)。なお、ヒメイエバエは少し黒く腐りかかった表層のぬかの部分に多く、オオイエバエは表面よりややもぐった水っぽいぬかのところに発生する傾向があるとい

う(鈴木・緒方, 1968)。一般家庭や商業利用などの場面において、漬物桶や漬物樽などの減少に伴って、近年ではヒメイエバエの発生は鶏舎や鶏舎付近の施設に移ってきているという(日本家屋害虫学会編, 1995; 田中, 2003)。

また、2番目に多く産出したキイロショウジョウバエについては、ショウジョウバエ科に属する双翅目幼虫の祖先種が主として樹液に適応していたとされ(西治, 1978)、その後ショウジョウバエ類の仲間は腐敗したり発酵したりした食物中のイーストや細菌などを食べるべく進化したと考えられている(素木, 1958; Okada, 1968; 安富・梅谷, 1983; 平嶋ほか, 1989; Smith, 1989; 松崎・武衛, 1993)。昆虫分析試料内より各種発酵物に集まるキイロショウジョウバエを多産したことから、本遺跡の埋桶内には何らかの事情で発酵食品が存在した可能性がきわめて高いと考えられる。

その他の昆虫のうち、獣糞に多いマグソガムシ(試料Aで計125点)や同じく人糞や獣糞に誘引されるエンマコガネ属(同じく試料Aより1点)などは、昆虫分析試料を産出した周辺環境の人為的汚染について、またハエ類のウジやサナギを捕食することが多いハネカクシ科(試料Aで45点、試料Bで3点)やオサムシ科(試料Aで3点、試料Bで4点)などの食わないし食屍性甲虫は、発酵物にたかったヒメイエバエやキイロショウジョウバエ、あるいはこれより大型のオオクロバエ・ケバクロバエなどの幼虫を求めて集まってきたものと考えればよく理解される。

また、穀類に特徴的なコクゾウ(試料Aで32点)は、この埋桶内に穀物や米ぬかなどが認められたことを示唆している。

本分析試料に、ヒメコガネ(試料Bで1点)やコアオハナムグリ(試料Aで2点)、ハムシ科(試料Aで4点)、コガネムシ科(試料Aで3点、試料Bで2点)、オトシブミ科(試料Aで2点)な

名古屋城三の丸遺跡 VII

ど、人為度の高い畑作地に生息する食植性昆虫が認められたことは、名古屋城三の丸遺跡を取り巻くバックグラウンドの植生環境を考察するうえで興味深い。

5. まとめ

名古屋城三の丸遺跡の埋桶の埋土より発見された双翅目のサナギの中に、たくあん漬けをはじめ発酵した漬物に特有のヒメイエバエが多数認められたことより、本遺跡の埋桶内に何らかの発酵物が存在した可能性が考えられる。こうした推定は同じ試料中に発酵食品に集まるショウジョウバエ属のサナギが相当数検出されたことから支持される。

謝 辞

昆虫分析にあたり、愛知県埋蔵文化財センターの鈴木正貴および鬼頭 剛の両氏に大変お世話になった。記してお礼申しあげる。

文 献

河田 薫 (1959) 日本幼虫図鑑, 北隆館, 712p.
林 晃史・篠永 哲 (1979) ハエ-生態と防除-, 文永堂, 228p.

平嶋義宏・森本 桂・多田内修 (1989) 昆虫分類学, 川島書店, 597p.
松崎沙和子・武衛和雄 (1993) 都市害虫百科, 朝倉書店, 236p.
素木得一 (1958) 衛生昆虫, 北隆館, 1966p.
日本家屋害虫学会編 (1995) 家屋害虫事典, 井上書院, 468p.
西治 敏 (1978) ショウジョウバエの食性と進化, 遺伝, 32(10), 12-20.
Okada Toyohi (1968) Systematic study of the early stages of Drosophilidae, Bunka Zugsisyu, 188p.
Smith K.G.V. (1989) An introduction to the immature stages of British flies, Royal entomological society of London, Handbooks for the identification of British insects, 10, 280p.
鈴木 猛・緒方一喜 (1968) 日本の衛生害虫-その生態と防除-, 新思想社, 245p.
田中和夫 (2003) 屋内害虫の同定法 (3) 双翅目の主な屋内害虫, 家屋害虫-日本家屋害虫学会誌, 67-111.
安富和男・梅谷献二 (1983) 衛生害虫と衣食住の害虫, 全国農村教育協会, 310p.

第3節 名古屋城三の丸遺跡出土の漆喰等の科学分析

堀本真美子・小村美代子(パレオ・ラボ)

1. はじめに

名古屋城三の丸遺跡の2002年度調査区は、17世紀中頃から幕末まで尾張徳川家の親族らが居住したといわれる「御屋形」と考えられている(鈴木2003)。この発掘調査において「御屋形」の庭園に伴うと思われる池状遺構(SX02)が検出された。この池状遺構SX02は周囲に石を配置し、その隙間には漆喰が充填されていた。

ここでは、池状遺構SX02で検出された漆喰を中心に、蛍光X線分析およびX線回折分析を行った。比較試料として、名古屋城三の丸遺跡と同じ尾張の清洲城下町遺跡の本丸の渡櫓等の建物に付随したと推測される建物壁、三河の西尾城下級武家屋敷または町屋と推定される和泉町遺跡(西尾

市)の漆喰について分析した。

2. 試料と方法

試料は名古屋城三の丸遺跡池状遺構出土の漆喰とその床壁18点(No.1~18)、SK114より出土した井戸(近代)の円筒形副材の漆喰1点(No.19)、大型廃棄土坑(SK01)より出土した漆喰塊1点(No.20)、清洲城下町遺跡本丸東側の瓦溜まり(SX01)より出土した建物壁2点(No.21・22)、和泉町遺跡(西尾市)より出土した漆喰や廃材4点(No.23~26)の計26点である。名古屋城三の丸遺跡は江戸時代中期頃(1点のみ江戸時代後期以降)、清洲城下町遺跡は戦国時代末期~江戸時代初期、和泉町遺跡は江戸時代末期(1点のみ

No.	遺跡名	遺構番号	内容	時期
1	名古屋城三の丸	02区SX02	北西入江部壁の粘土。漆喰裏の粘土層材か?	江戸時代中期頃
2	名古屋城三の丸	02区SX02	北西入江部壁の裏込め粘土塊	江戸時代中期頃
3	名古屋城三の丸	02区SX02	西側より出た部屋の漆喰本体	江戸時代中期頃
4	名古屋城三の丸	02区SX02	南西導水部北壁の漆喰のうち表層部分	江戸時代中期頃
5	名古屋城三の丸	02区SX02	南西導水部北壁の漆喰のうち奥層部分	江戸時代中期頃
6	名古屋城三の丸	02区SX02	南西導水部床壁の漆喰本体	江戸時代中期頃
7	名古屋城三の丸	02区SX02	南西導水部南壁の漆喰本体	江戸時代中期頃
8	名古屋城三の丸	02区SX02	南壁西部巨石直上の漆喰本体	江戸時代中期頃
9	名古屋城三の丸	02区SX02	東側出し部屋の新設階漆喰壁本体	江戸時代中期頃
10	名古屋城三の丸	02区SX02	東側出し部屋の中段階漆喰壁本体	江戸時代中期頃
11	名古屋城三の丸	02区SX02	東側出し部屋の新設階床壁本体	江戸時代中期頃
12	名古屋城三の丸	02区SX02	東側出し部屋の古設階床壁本体	江戸時代中期頃
13	名古屋城三の丸	02区SX02	北東入江部壁の漆喰本体、階段脇部分	江戸時代中期頃
14	名古屋城三の丸	02区SX02	北壁直下の新設階床壁本体	江戸時代中期頃
15	名古屋城三の丸	02区SX02	北壁漆喰壁本体、中段階か?	江戸時代中期頃
16	名古屋城三の丸	02区SX02	中央部床壁層上位、新設階か?	江戸時代中期頃
17	名古屋城三の丸	02区SX02	中央部床壁中位、中段階か?	江戸時代中期頃
18	名古屋城三の丸	02区SX02	中央部床壁下位、古設階か?	江戸時代中期頃
19	名古屋城三の丸	02区SK114	近代井戸の円筒形副材の漆喰	江戸時代後期以降
20	名古屋城三の丸	02区SK01	大型廃棄土坑中出土の漆喰塊	江戸時代中期頃
21	清洲城下町	96区SX01-1層	本丸東側の瓦溜り中、建物壁か?	戦国時代末期~江戸初期
22	清洲城下町	96区SX01-1層	本丸東側の瓦溜り中、建物壁か?	戦国時代末期~江戸初期
23	和泉町(西尾市)	SK30	廃棄土坑中から出土、廃材残葉?	江戸時代末期
24	和泉町(西尾市)	SE06	井戸の内筒形副材の漆喰	江戸時代末期
25	和泉町(西尾市)	SX05	漆喰で作成された腰状容器が埋設される	江戸時代末期
26	和泉町(西尾市)	井戸	近代井戸円筒形副材の漆喰、エンビの魚斑	明治以降

*「内容」中の「古設階・中段階・新設階」の表記は、塗り重ねと推測したものを。

*「表層・奥層」は同時に作られたものの漆喰の使い分けが想定されることを示す。

第11表 漆喰の分析試料一覧

名古屋城三の丸遺跡 VII

明治以降)に属する試料である。試料の詳細については第 11 表に示す。

a. 成分分布

各試料をおおむね 2×3cm の小片に切り出し、エポキシ樹脂で硬化させた後、#3000 のカーボラダムを用いて表面を研磨した。分析装置は光学および偏光顕微鏡、蛍光 X 線分析装置 (エネルギー分散型、堀場製作所 (株) 製 XGT-5000) である。測定条件は管電圧 30kV、管電流 1.00mA。分析は著者の一人堀本が行った。

b. X 線回折分析

試料は分析する前に、スサ・石灰粒子と思われる白色粒子の量・砂粒の量等について肉眼観察による記載を行った (第 12 表)。その後、各試料の平均的な箇所を約 1g 採取し乳鉢で粉末化した。この粉末をプレバラート上にアルコールで溶きな

が乾燥させ測定用試料を作成した。分析装置は、リガク (株) 製の X 線回折装置 MiniFlex である。測定条件は、X 線発生部の管球は銅 (Cu)、電流 15mA、電圧 30kV、走査モードは連続、スキャンスピード 5,000°/min、サンプリング幅 0.020°。分析は同じく著者の一人である小村が行った。

また、X 線回折分析で方解石の検出限界を把握する為に実験を行うことにした。試料は石灰岩と砂質土の 2 点である。この 2 点を適量粉末化し、先述と同様の X 線回折分析測定用試料を作成して石灰岩からは方解石のピークを確認する。その後、砂質土粉末に石灰岩粉末を 3%・5%・10% の割合で混ぜたものを用いて X 線回折分析測定用試料を作成し、どの程度の石灰岩の割合で方解石と同定することが可能かを検討した (第 13 表)。

c. 成分分析

試料は X 線回折分析に用いたものと同じ粉末

No	遺跡名	スサ(痕跡も含む)	石灰粒子	砂粒	備考
1	名古屋城三の丸	—	—	—	シルト質土の塊
2	名古屋城三の丸	—	—	—	粘土塊
3	名古屋城三の丸	+	++	++	
4	名古屋城三の丸	—	+++	++	
5	名古屋城三の丸	—	+++	++	
6	名古屋城三の丸	—	++++	++	
7	名古屋城三の丸	—	++++	++	
8	名古屋城三の丸	—	++++	++	
9	名古屋城三の丸	—	++++	+	
10	名古屋城三の丸	—	+++	+	
11	名古屋城三の丸	—	+	+	
12	名古屋城三の丸	—	+	+	
13	名古屋城三の丸	—	++++	+	
14	名古屋城三の丸	—	+	+	
15	名古屋城三の丸	—	++++	+	
16	名古屋城三の丸	—	—	+	
17	名古屋城三の丸	—	—	+	
18	名古屋城三の丸	—	—	+	粘質土
19	名古屋城三の丸	+	++++	+++	硬質
20	名古屋城三の丸	—	—	—	硬質、岩石か
21	清洲城下町	—	—	—	白色粘土塊
22	清洲城下町	+++	—	—	白色粘土塊
23	和泉町(西尾市)	—	++	+++	
24	和泉町(西尾市)	—	++	+++	硬質
25	和泉町(西尾市)	—	—	+++	
26	和泉町(西尾市)	—	+++	+++	硬質

* 「石灰粒子」とは肉眼観察で石灰と思われる白色の粒子を指す。

* 「石灰粒子」と「砂粒」の割合は肉眼観察による相対評価で+の数が多ほど、その割合が多いことを示す。

第 12 表 肉眼観察結果

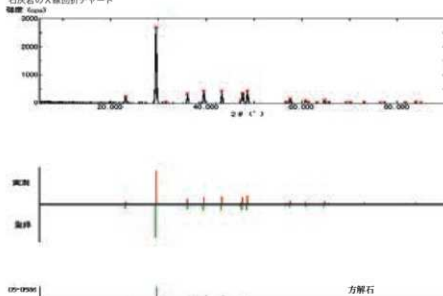
である。これら粉末を、直径2cmの塩化ビニール製のリングに無水四ホウ酸リチウム(LiB₄O₇)を詰めて10tの圧力をかけたものの上に約0.2gの試料を薄く展開して、更に20tの圧力をかけてブリケットを作成した。蛍光X線分析装置(エネルギー分散型、堀場製作所(株)製

XGT-5000)である。測定条件は管電圧30kV、管電流1.00mA、測定時間100秒。またこの装置は大気中で測定することから、測定値の平均値および分散を把握するために、1サンプルにつき50点の測定点を設定した。分析者は堀木である。

石灰岩と砂質土の化学組成(単位:%)

試料	Al ₂ O ₃	SiO ₂	K ₂ O	CaO	TiO ₂	MnO	Fe ₂ O ₃
石灰岩	0.00	1.31	0.00	98.61	0.00	0.00	0.09
砂質土	14.55	79.17	2.50	0.63	0.44	0.04	2.67

石灰岩のX線回折チャート



方解石のX線回折強度(一部)

相対強度	100	18	18	17	17	14	12	8	5
2θ	29.404	39.399	43.143	47.487	48.510	35.964	23.021	57.398	47.121

石灰岩と砂質土の混合試料による方解石の検出強度及び同定の不可

試料	相対強度	100	検出強度	同定
	2θ	29.404		
石灰岩3%	強度(cps)	172	確認不可	不可
石灰岩5%		198	確認不可	不可
石灰岩10%		364	確認可	可

方解石の同定基準の設定

相対強度17以上を同定基準に設定したのは、相対強度100のピークが360cps付近の場合。

相対強度14以下のピークはバックグラウンドと同程度で識別が困難なためである。

相対強度	100	18	18	17	17	
2θ	29.404	39.399	43.143	47.487	48.510	
強度(cps)	360以上	3つ以上が約100cps以上				

第13表 X線回折結果

3. 分析結果

a. 成分分布

第198～200図に測定試料およびCaの分布図を示す。No.3, 11, 12, 14においては、Caが粒状をなしている。No.1, 4, 5, 6, 7, 8, 13, 15は、部分的に濃縮した状態で分布している。またNo.9, 19, 26では鉱物等以外の部分を占めるように分布している。No.20, 21, 22は、ほぼ全体に均一に分布している。なおNo.2, 25ではCaの分布を把握することができなかった。また、No.16, 17, 18は試料の調整ができなかった。

b. X線回折分析

第12表には肉眼観察による試料の状態を示す。肉眼観察では貝片は全ての試料で確認されなかった。石灰粒子と思われる白色粒子は、No.1, 2, 16～18, 20～22, 25では確認されず、No.4～7の漆喰は石灰粒子の割合が相対的に高い。また、スサと思われる草本植物の痕跡はNo.3, 19, 22で確認され、No.19では稲藁と思われる草本植

物が付着していた。砂粒は、No.23～26が全体の中で相対的に高く含まれる。次いでNo.4～7が砂粒の割合が多い。また、No.19, 24, 26は砂粒の割合が多く硬質であった。No.20は非常に硬質で一般的な漆喰や石灰の塊のような外観を示さないものであった。

第13表にはX線回折分析における方解石の検出限界実験結果を示す。この実験において石灰岩10%中の方解石の相対強度100($2\theta = 29.404$)のピークは364cpsで、ほかに相対強度18($2\theta = 39.399$)や相対強度17($2\theta = 47.487, 48.510$)のピークも確認できた。X線回折分析の鉱物同定は1本のピークのみで判断すると別の鉱物ピークと御認識する恐れがあるため、複数のピークと照合する必要がある。このため、方解石の相対強度100($2\theta = 29.404$)のピークが360cps以上で、この他に相対強度18($2\theta = 39.399, 43.413$)や相対強度17($2\theta = 47.487, 48.510$)のピークのうち3つ以上のピークが約100cps

No.	石英強度	方解石強度
1	1543	0
2	2407	0
3	2632	482
4	2733	421
5	2935	735
6	3099	0
7	2165	375
8	2123	1520
9	1913	973
10	1518	1266
11	1652	948
12	3817	108
13	2068	1102
14	2969	110
15	2175	1166
16	2465	0
17	2778	0
18	2890	0
19	3356	509
20	249	0
21	90	44
22	97	0
23	2733	343
24	4487	546
25	3654	0
26	2046	882

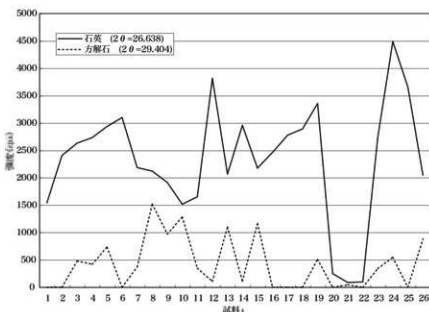


図1 X線回折分析による石英と方解石の最高強度(相対強度100)

第14表 石英と方解石の最高強度

以上確認されれば方解石と同定することにした。また、石灰岩3%・5%中の方解石の相対強度100($2\theta = 29.404$)は172cps・198cps 確認されたが、これ以外のピークはバックグラウンドと同程度のため確認できなかった。このことは10%未満しか石灰灰が含まれない漆喰は、今回のX線回折分析では検出限界をこえ同定不能であることを示している。

以上の同定基準に基づき試料から方解石が同定されたのはNo.3～5・7～10・13・15・19・24・26である。これら以外の試料では方解石は同定されなかった。石英は土壌や砂粒の主要鉱物であるため全ての試料から同定された。方解石と同じ化学組成の霏石(化学式:CaCO₃、英名: aragonite)や石灰(化学式 CaO、英名:lime)や石

膏(化学式:CaSO₄・2H₂O、英名:gypsum)等は全ての試料で確認されなかった。この他にクリストバライト・灰長石・曹長石・正長石等が確認された。特定の鉱物を同定したものは「○」、同定されなかったものは「—」と記載した(第15表)。

また、試料に含まれる方解石の割合を大まかに把握する為に、石英の相対強度100($2\theta = 26.638$)と方解石の相対強度100($2\theta = 29.404$)の強度(cps)を比較した。この結果、No.8～10,13,15が方解石の検出強度が高いことが確認された。

c. 成分分析

第195～197図に各試料の代表的なスペクトル図を示す。また第16表にはNa, Mg, Al, Si, S, K, Ca, Ti, Mn, Feについて、それぞれのピーク

記号 ○: 同定, —: 未検出または同定不可

J	通称名	方解石	石英	クリストバライト	灰長石	曹長石	正長石
1	名古屋城三の丸	—	○	○	○	○	○
2	名古屋城三の丸	—	○	○	—	—	—
3	名古屋城三の丸	○	○	○	—	○	—
4	名古屋城三の丸	○	○	—	—	○	○
5	名古屋城三の丸	○	○	○	—	○	—
6	名古屋城三の丸	—	○	○	—	○	○
7	名古屋城三の丸	○	○	—	—	○	○
8	名古屋城三の丸	○	○	○	—	○	○
9	名古屋城三の丸	○	○	—	—	○	○
10	名古屋城三の丸	○	○	—	—	○	○
11	名古屋城三の丸	—	○	○	—	○	○
12	名古屋城三の丸	—	○	○	—	—	—
13	名古屋城三の丸	○	○	—	—	○	○
14	名古屋城三の丸	—	○	○	—	○	—
15	名古屋城三の丸	○	○	—	—	○	○
16	名古屋城三の丸	—	○	○	—	—	○
17	名古屋城三の丸	—	○	○	—	○	○
18	名古屋城三の丸	—	○	○	—	—	—
19	名古屋城三の丸	○	○	—	—	—	○
20	名古屋城三の丸	—	○	○	○	○	—
21	清洲城下町	—	○	—	—	—	—
22	清洲城下町	—	—	—	—	—	—
23	和泉町(西尾市)	—	○	—	—	—	○
24	和泉町(西尾市)	○	○	—	—	—	○
25	和泉町(西尾市)	—	○	—	—	—	○
26	和泉町(西尾市)	○	○	—	—	—	○

和名	英名	化学式
方解石	calcite	CaCO ₃
石英	quartz	SiO ₂
クリストバライト	crystalite	α -SiO ₂
灰長石	anorthite	$m\text{CaAl}_2\text{Si}_2\text{O}_8 \cdot n\text{NaAlSi}_3\text{O}_8$
曹長石	albite	$m\text{NaAlSi}_3\text{O}_8 \cdot n\text{CaAl}_2\text{Si}_2\text{O}_8$
正長石	orthoclase	CaMg(Si ₃ O ₉) ₂

第15表 方解石の検出限界実験結果

名古屋城三の丸遺跡 VII

の大きさを示したものである。Tr. はかろうじてピークをとらえることができたものである。「+」および「++」などはピークの大きさを表している。

これらの結果より、いずれの試料においても Si, Al, K, Ca, Ti, Fe のピークが確認することができた。特に、No.8,9,10,13,15,21,22,26 では Ca のピークが、No.11,12,14,20,16,17,18,21,22 では Fe が、No.26,24,25,26 では K がそれぞれ特徴的に大きなピークとしてとらえられている。

4. 考察

a. 各試料の分析結果

No.1,2：成分分布による Ca の分布も明瞭ではなく、X 線回折においても方解石が確認できず、Al が多いことから漆喰ではなく、土壌であると判断。

No.3, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 13, 14, 15, 19, 24,

25, 26：粒状もしくは濃縮した Ca と方解石が確認されたことから、漆喰試料と判断。No.10 は成分分布が測定できなかった。

No.6：粒状もしくはレンズ状に濃縮した Ca が確認された。X 線回折による方解石は確認されなかったが、Ca の分布状態から漆喰を含むと判断。X 線回折において方解石が確認されなかったのは、Ca が分布が著しく偏っているため、X 線回折用の試料に方解石が含まれなかったと考えられる。

No.11, 12：レンズ状に濃縮した Ca が確認されているため漆喰試料と判断。X 線回折においては方解石は確認されない。

No.16, 17, 18：成分分布の試料が作成できなかったもの。肉眼観察により、土壌と判断された。

No.20, 21, 22:Ca がほぼ均一に分布する試料。方解石は確認されていない。21,22 では他の鉱物

名古屋城三の丸遺跡		Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	SO3	K2O	CaO	TiO2	MnO	Fe2O3
3	池状遺構 西東出し部壁	TR	TR	+	+++	Tr.	+	++	+	+	++
4	池状遺構 南西導水部北壁 (表層)	TR	TR	+	+++	Tr.	+	++	+	+	Tr.
5	池状遺構 南西導水部北壁 (奥層)	TR	TR	+	+++	Tr.	+	+++	+	+	Tr.
7	池状遺構 南西導水部南壁	TR	TR	+	+++	Tr.	+	++	+	+	Tr.
8	池状遺構 西部南壁	TR	TR	+	+++	Tr.	+	++++	+	+	Tr.
9	池状遺構 東東出し部壁 (新段階)	TR	TR	+	+++	Tr.	+	++++	+	+	Tr.
10	池状遺構 東東出し部壁 (中段階)	TR	TR	+	+++	Tr.	+	++++	+	+	Tr.
13	池状遺構 北東入江部壁	TR	TR	+	+++	Tr.	+	++++	+	+	Tr.
15	池状遺構 北壁 (中段階)	TR	TR	+	+++	Tr.	+	++++	+	+	Tr.
19	近代井戸 円筒形側材	TR	TR	+	+++	Tr.	+	+++	+	+	Tr.
6	池状遺構 南西導水部床	TR	TR	+	+++	Tr.	+	+	+	+	Tr.
11	池状遺構 東東出し部床 (中段階)	TR	TR	++	+++	Tr.	+	++	+	+	+++
12	池状遺構 東東出し部床 (古段階)	TR	TR	++	+++	Tr.	+	+	+	+	+++
14	池状遺構 北壁直下床 (新段階)	TR	TR	++	+++	Tr.	+	+	+	+	+++
20	大型廃棄土坑	+	+	+	+++	Tr.	Tr.	++	+	+	+++
1	池状遺構 北西入江部 壁粘土	TR	TR	++	+++	Tr.	+	+	+	+	Tr.
2	池状遺構 北西入江部 裏込粘土	TR	TR	++	+++	Tr.	+	Tr.	+	+	Tr.
16	池状遺構 中央部 (新段階)	TR	TR	++	+++	Tr.	+	Tr.	+	+	+++
17	池状遺構 中央部 (中段階)	TR	TR	++	+++	Tr.	+	Tr.	+	+	+++
18	池状遺構 中央部 (古段階)	TR	TR	++	+++	Tr.	+	Tr.	+	+	+++
清洲城下町遺跡											
21	本丸東 瓦葺まり出土壁材	TR	+	+	+++	Tr.	Tr.	+++	+	+	+++
22	本丸東 瓦葺まり出土壁材	TR	+	+	+++	Tr.	Tr.	+++	+	+	+++
和家町遺跡											
23	廃棄土坑出土漆喰片	TR	TR	+	+++	Tr.	++	++	+	+	Tr.
24	近世井戸 円筒形側材	TR	TR	+	+++	Tr.	++	+++	+	+	Tr.
25	近世 壁状容器	TR	TR	+	+++	Tr.	++	Tr.	+	+	Tr.
26	近世井戸 円筒形側材	TR	TR	+	+++	Tr.	++	++++	+	+	Tr.

第 16 表 蛍光 X 線分析結果

類も観察することができなかった。

No.23：成分分布の試料が作成できなかった。
方解石は確認されなかった。

b. 名古屋城三の丸遺跡 池状遺構 側壁と床壁の相違について

側壁 (No.3, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 13, 15) と床壁 (No.6, 11, 12, 14, 16, 17, 18) の比較を行うと、側壁の試料にはいずれも粒状もしくは濃縮したCaと方解石が確認されるが、床壁については多様である。

No.6は池の導水部の床壁の試料であり、X線回折で方解石が確認されなかったが、表面の特徴やCaの分布状況が同じ導水部の南側壁試料のNo.7とよく似ていることから、ともに同一素材で作成された可能性が考えられる。ただし、試料中にCaが全く含まれない部分もあることから、側壁と床壁の差がなかったとは断言できない。No.11, 12は東張り出し部の段階の異なる床壁試料、No.14は北壁直下の床壁である。No.12の方が古い段階の床壁と判断されるが、分析の結果においてはNo.11と12に大きな違いは認められなかった。No.11, 12, 14のいずれもCaがレンズ状の分布を示す。これら床壁 (No.6, 11, 12, 14) の試料について、側壁試料に比べてCaが少なく方解石の強度が低いという共通した特徴が挙げられる。このことは側壁と床壁の材料を違えていた可能性を示していると考えられる。

No.16, 17, 18はいずれも漆喰ではなかった。

c. 名古屋城三の丸遺跡 池状遺構

側壁の相違について

側壁 (No.3, 4, 5, 7, 8, 9, 10, 13, 15) の試料について、No.5, 9以外のものでは、共通して以下の特徴が認められる。成分分布をみるとCaが粒状に分布し、肉眼においても白色角礫状のものを観察することができる。No.5, 9については、

肉眼において白色角礫状のものを観察することができず、Caの分布も他と異なっている。

No.5はレンズ状の粘土部分が存在している。No.5は南西導水部北壁の漆喰でNo.4の奥に存在したものである。No.4と比較すると、表層部のNo.4にはレンズ状の粘土部分は含まれない。粘土以外の部分はNo.4, 5ともによく似た組織を呈する。またNo.5とよく似た組織を持つ試料は、今回の試料中には含まれていない。No.9は東張り出し部の新段階の漆喰側壁。他の側壁と異なりCaが粒状ではなく全面に均等に分布している。

また、X線回折において方解石の強度の違いを見てみると、No.3, 4, 5, 7はNo.8, 9, 10, 13, 15よりも強い。No.3は西張り出し部側壁の試料、No.4, 5, 7は南西導水部の側壁試料。No.8は南側壁試料。No.9, 10は東張り出し部側壁試料。No.13は北東入り江部の側壁。No.15は北側壁試料。つまり南西導水部および西張り出し部の試料について、方解石の強度がやや弱い傾向が認められた。

d. 名古屋城三の丸遺跡 池状遺構 塗り重ねと推測される各段階による相違について

塗り重ねと推測される試料は、No.4, 5(南西導水部の表層と奥層) およびNo.9, 10(東張り出し部側壁の新段階と中段階)、No.11, 12(東張り出し部床壁の新段階と古段階)、No.16, 17, 18(中央部床壁の新段階、中段階、古段階)である。

これらのうち、No.4, 5については、先述のとおりNo.5にはレンズ状の粘土が認められた以外に、大きな相違は認められなかった。またNo.9, 10やNo.11, 12についても先述の通り大きな相違は認められなかった。No.16, 17, 18については土壌であることから、相違を確認することはできなかった。

名古屋城三の丸遺跡 VII

e. 名古屋城三の丸遺跡 池状遺構とその他の遺構について

No.19 は近代井戸の円筒形側材の漆喰試料。No.20 は大規模廃棄土坑内から出土した試料。このうち No.19 は含まれる元素の割合では他の試料と違いが認められないが、Ca が小岩片を取り囲むように分布している様子はこれまでの試料と大きく異なっている。この試料は近代井戸の円筒形側材の漆喰で江戸時代後期以降のものとされ、No.1～18(SX02)の漆喰とは用途も時期も異なる。No.20 では Ca が少なく、Mn, Fe が多い。

f. 名古屋城三の丸遺跡の池状遺構と清洲城下町遺跡の試料について

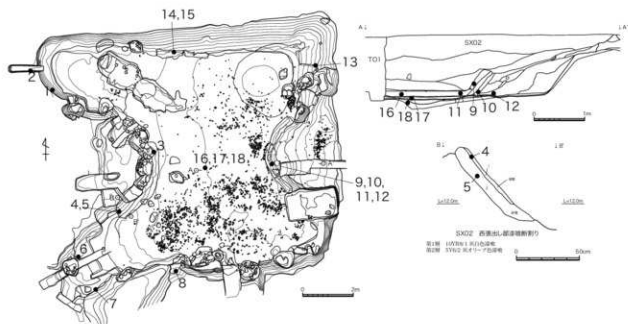
No.21, 22 は清洲城本丸東側の調査区において、大量の瓦とともに出土した建物の壁と推測される試料である。製作時期は戦国時代末期から江戸時代初期と考えられる。まず Ca などの成分分布をみると均一に分布しており、名古屋城三の

丸遺跡の試料ではみられなかった分布を示す。また、X線回折では共に方解石は同定されず、全体的な検出強度そのものが低かった。これは試料中の鉱物の殆どが風化等の影響で結晶構造を持たなくなったものと考えられる。成分分析のスペクトルをみると2試料とも Ca と Fe のピークが大きくなっている。なお No.22 からは多数の草本植物の痕跡が確認された。

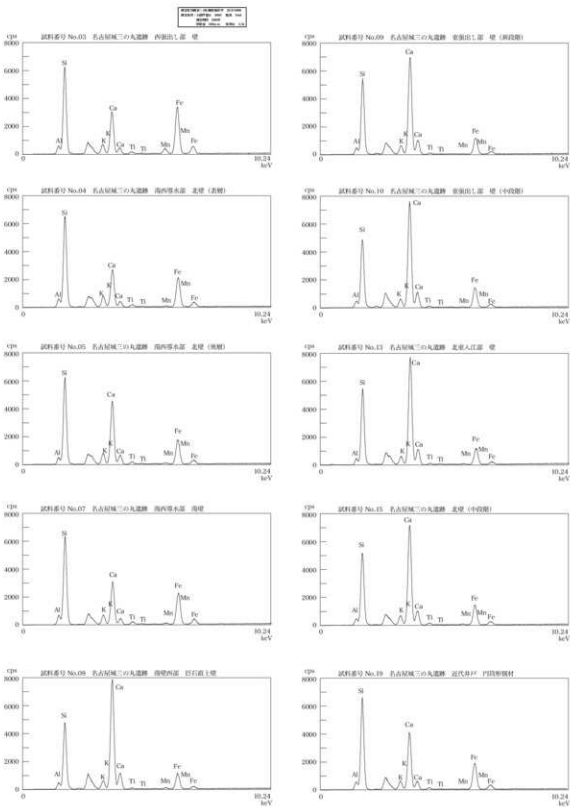
g. 名古屋城三の丸遺跡の池状遺構と和泉町遺跡の試料について

No.23～26 は和泉町遺跡の試料である。和泉町遺跡は下級武家屋敷または町屋が存在したと考えられる江戸時代末期の遺跡である。No.23 は廃棄土坑より出土した廃材と考えられる。No.24 は井戸の円筒形側材の漆喰。No.25 は漆喰製の壺状容器の試料。No.26 は近代の円筒形側材の井戸の壁。

これらの試料のうち、No.23 については、成分

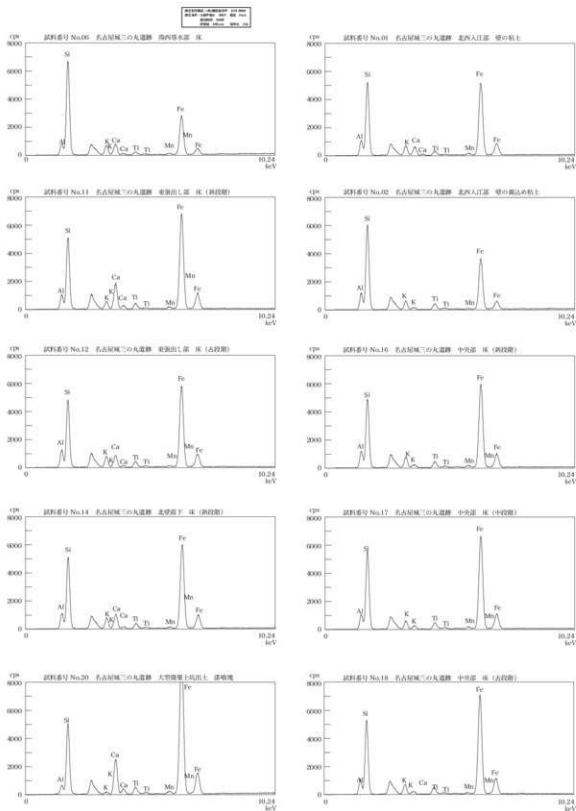


第 194 図 試料採取位置



第 195 図 蛍光 X 線スペクトル (1)

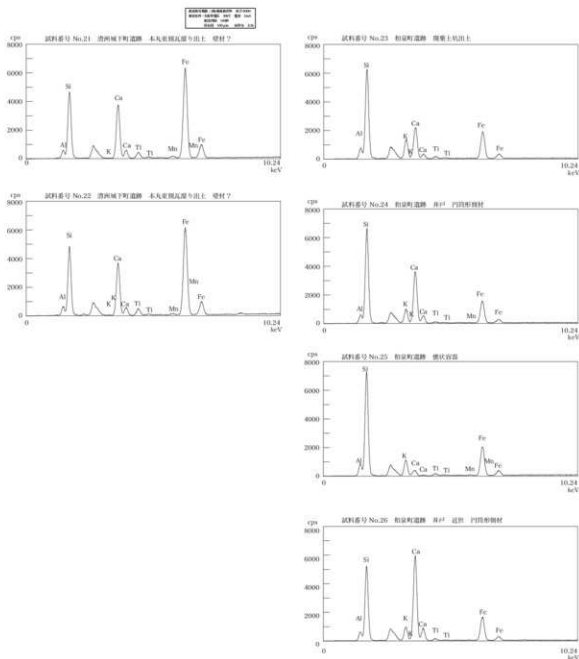
名古屋城三の丸遺跡 VII



第196図 蛍光X線スペクトル(2)

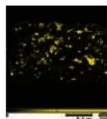
分布が実施できなかった。他の試料における成分分布の結果を見ると、いずれの試料もCaは砂礫を取り囲むように分布している。またX線回折では、No.24、26で方解石が同定され、No.23・25では同定されなかった。ただし、No.23からは方解石の相対強度100のピークが343cps確認されている(第14表)。これ以外の方解石のピークは確認されず同定には至らなかったが、わずかに

石灰が含まれている可能性はある。肉眼観察では、和泉町遺跡の試料は名古屋城三の丸遺跡の試料に比べ砂粒の割合が多い(第12表)。No.25は漆喰で作成された甕状容器とされるが、肉眼観察では石灰粒子は確認されずX線回折分析でも方解石は同定されず漆喰と判断することはできなかった。定性分析のスペクトルをみると、CaとK、Feのピークが他の試料と異なっている。

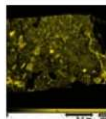


第197図 蛍光X線スペクトル(3)

名古屋城三の丸遺跡 VII



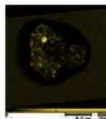
3 池状遺構 西面出し部壁



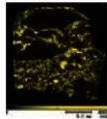
9 池状遺構 東面出し部壁 (新段階)



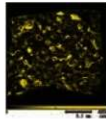
4 池状遺構 南西縁水部北壁 (表層)



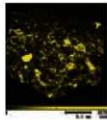
10 池状遺構 東面出し部壁 (中段階)



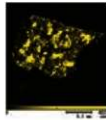
5 池状遺構 南西縁水部北壁 (表層)



13 池状遺構 北東入口部壁



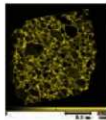
7 池状遺構 南西縁水部南壁



15 池状遺構 北壁 (中段階)

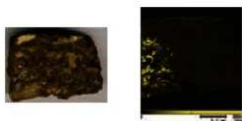


8 池状遺構 西面南壁

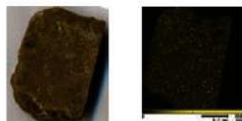


19 近代井戸 円筒形素材

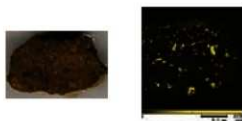
第 198 図 Ca の分布状況 (1)



6 池状遺構 東西溝水部床



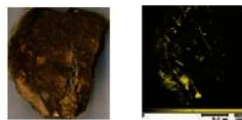
1 池状遺構 北西入江部 壁粘土



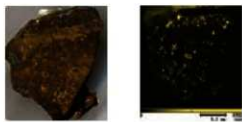
11 池状遺構 東張出し部床 (中段階)



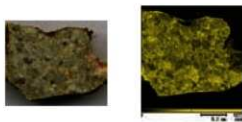
2 池状遺構 北西入江部 裏込粘土



12 池状遺構 東張出し部床 (古段階)



14 池状遺構 北壁直下床 (新段階)



20 大京南裏土坑

第 199 図 Ca の分布状況 (2)

5. まとめ

今回の分析では、名古屋城三の丸遺跡の池状遺構から出土した漆喰試料を中心に清洲城下町遺跡、和泉町遺跡の試料を取り扱った。名古屋城三の丸遺跡における池状遺構の漆喰試料の相違について、漆喰と認識されたものに成分や Ca の分布状況に大きな違いは認められなかった。また、時期による差も認められなかった。しかし、清洲城下町遺跡や和泉町遺跡などとの比較のように時期や地域が異なると、漆喰試料に Ca の分布の様子や Mn, Fe などの成分の違い、砂礫の入り方など明確な違いがあることが確認された。

今後、漆喰の分析試料数を増やすことにより、漆喰の利用法の歴史が解明されると期待される。

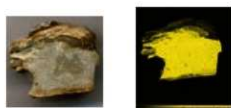
なお、今回の分析を行うにあたり、和泉町遺跡

出土漆喰については、西尾市教育委員会から試料の提供を受けた。記して感謝します。

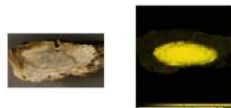
引用文献

馬淵久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊編 (2003)、文化財科学の事典、朝倉書店、522p.

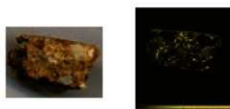
鈴木正貴 (2003) 名古屋城三の丸遺跡、愛知県埋蔵文化財センター 年報 平成 14 年度、8-15.



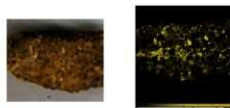
2.1 本丸東 瓦溜まり出土土壁材



2.2 本丸東 瓦溜まり出土土壁材



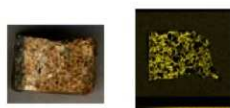
2.3 南瀬土坑出土漆喰片



2.4 近世井戸 内周土壁材



2.5 近世 鑄鉄容器



2.6 近世井戸 内周土壁材

第 200 図 Ca の分布状況 (3)

第4節 名古屋城三の丸遺跡出土の石材について

堀木真美子

名古屋城三の丸遺跡の2002年度の調査区は尾張徳川家の親族らが居住した「御屋形」と考えられている(鈴木2003)。今回の分析は「御屋形」の庭園に伴うと考えられる池状遺構および他の遺構から出土した岩石類について、岩石学的な観察を行い、その入手先を推測することを目的とした。

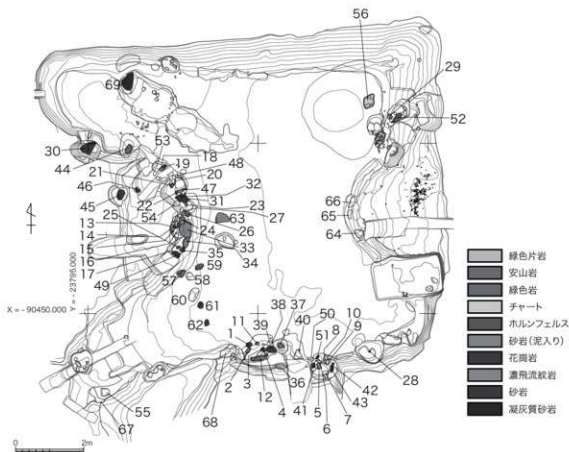
1. SD01～04出土の岩石

SD01～04は、調査区の南部にほぼ東西に走る石組溝(SD01)とそれにつながる石組溝(SD02～04)である。SD01は内法幅が約65cmで、内法面が平面をなすように岩石を削って成形された溝である。江戸時代前期～後期にかけての建物

に伴う遺構と考えられている。

SD01～04遺構を形成していた岩石は、内法面より観察できるものとしては2点をのぞき、すべて同一の岩石であった。その岩石は、5～10mmの長柱状～レンズ状の泥のチップ1%程度含んでいる硬砂岩である。残る2点は、黒雲母と角閃石を含む粗粒の花崗閃緑岩であった。

石組溝の内法面および裏込めの岩石を観察したところ、内法面は人工的に砕石された面であり、裏側には自然面が残されていた。また裏込めには同一の硬砂岩の破片や、拳大の亜角～亜円礫状のチャートがみつめられていた。裏込めの硬砂岩の破片の一つが内法面の一つに接合できたことや、内



第201図 池状遺構の巨礫の配置

名古屋城三の丸遺跡 VII

法面が比較的新鮮な砕石された面であることから、溝を形成している硬砂岩は、長径50cm程度の垂角礫として現地に搬入され、溝の形成時に砕石されたものと考えられる。花崗閃緑岩については砕石された形跡は認められなかった。

この溝を形成した岩石類を遺跡近隣で入手されたものと仮定すれば、硬砂岩およびチャートはいずれも美濃帯に産するものであり、濃尾平野の西部～北東部にかけて広く分布していることから、木曾川などの河川を利用して搬入された可能性が考えられる。花崗岩の供給岩体は不明である。

硬砂岩の産地について、今回は近隣の産地として考察を行ったが、他地域からの搬入である可能性を否定しきれない。硬砂岩という岩石が堆積岩である上、火成岩のように特徴的な鉱物や組織を持つことは考えにくい。産地を特定するのは困難である。

2. 池状遺構 (SX02) にみられたおもな巨礫

調査区の北部において約10m四方で深さ1.2mを測る池状の遺構が検出された。この池は、底部および側面を漆喰で塗り固め、所々に異なる岩石を意図的に配した様子がうかがえるものであった。池状遺構より出土した巨礫を第17表に示し、主な岩石について記載とその産地の推定を試みる。

a. 緑色岩

導水部と考えられる南西部分の底部には緑色岩および緑色片岩が使用されている。これらの岩石は全体が灰緑色を呈し、部分的に石英もしくは方解石の白色脈が入る。肉眼で観察できる鉱物類はない。垂角～角礫。平均径約25cm。出土個数10個。現在でも底石としてよく利用されているものと同様の岩石と思われる。この岩石は三波川帯に産するものと考えられ、現在においては山梨県や三重県で採取されたものが造園資材として流

通している。

b. ホルンフェルス

池状遺構の南の側壁には直径60cmほどの垂角礫がはめ込まれていた。長径5mm程度の莖青石がみられる泥岩を原岩とする黒色のホルンフェルスである。ホルンフェルスは、名古屋城三の丸遺跡の北部を流れる庄内川の upstream に分布していることから、比較的近隣よりたらされたと推測できる。他に長径15cm程度の角礫が4点出土している。

遺構番号	石材名	長さ	径の形状	個数	産地番号
SX02-5-01	砂岩	18	垂角	1	5-01
SX02-5-02	濁泥質砂岩	20	垂角	1	5-02
SX02-5-03	砂岩	30	垂角	1	5-03
SX02-5-04	緑色岩	20	角	1	5-04
SX02-5-05	砂岩(搬入り)	18	垂角	1	5-05
SX02-5-11	砂岩(搬入り)	20	角	1	5-11
SX02-5-12	砂岩(搬入り)	50	垂角	1	5-12
SX02-5-13	チャート	13	垂角	1	5-13
SX02-5-14	ホルンフェルス	15	垂角	1	5-14
SX02-5-15	ホルンフェルス	10	垂角	1	5-15
SX02-5-16	チャート	12	垂角	1	5-16
SX02-5-17	ホルンフェルス	12	垂角	1	5-17
SX02-5-17	ホルンフェルス	30	垂角	1	5-17
SX02-5-18	砂岩(搬入り)	20	角	1	5-18
SX02-5-19	花崗閃緑岩	17	角	1	5-19
SX02-5-20	濁泥質砂岩	30	角	1	5-20
SX02-5-21	濁泥質砂岩	30	角	1	5-21
SX02-5-23	緑色岩	25	角	1	5-23
SX02-5-23	緑色岩	12	角	2	5-23
SX02-5-24	ホルンフェルス	15	垂角	1	5-24
SX02-5-25	砂岩(搬入り)	18	角	1	5-25
SX02-5-26	砂岩(搬入り)	30	垂角	1	5-26
SX02-5-27	緑色岩	17	垂角	1	5-27
SX02-5-28	砂岩(搬入り)	20	角	1	5-28
SX02-5-29	砂岩(搬入り)	18	角	1	5-29
SX02-5-30	花崗閃緑岩	30	角	1	5-30
SX02-5-32	緑色片岩	25	垂角	1	5-32
SX02-5-33	砂岩	50	垂角	1	5-33
SX02-5-34	砂岩	30	垂角	1	5-34
SX02-5-35	砂岩	40	垂角	1	5-35
SX02-5-36	砂岩(搬入り)	12	角	1	5-36
SX02-5-37	砂岩(搬入り)	40	角	1	5-37
SX02-5-38	砂岩	28	垂角	1	5-38
SX02-5-40	砂岩(搬入り)	20	垂角	1	5-40
SX02-5-41	砂岩	30	垂角	1	5-41
SX02-5-42	砂岩	35	垂角	1	5-42
SX02-5-44	濁泥質砂岩	20	垂角	1	5-44
SX02-5-45	花崗閃緑岩	40	角	1	5-45
SX02-5-46	砂岩	25	垂角	1	5-46
SX02-5-47	安山岩	30	垂角	1	5-47
SX02-5-48	砂岩	20	垂角	1	5-48
SX02-5-49	砂岩	30	垂角	1	5-49
SX02-5-50	砂岩(搬入り)	30	垂角	1	5-50
SX02-5-51	砂岩(搬入り)	30	垂角	1	5-51
SX02-5-52	砂岩	25	垂角	1	5-52
SX02-5-53	砂岩	25	角	1	5-53
SX02-5-54	砂岩	30	垂角	1	5-54
SX02-5-55	緑色岩	40	角	1	5-55
SX02-5-56	緑色岩	20	垂角	1	5-56
SX02-5-57	砂岩(搬入り)	40	垂角	1	5-57
SX02-5-58	砂岩	30	垂角	1	5-58
SX02-5-59	緑色岩	30	垂角	1	5-59
SX02-CB-101	砂岩	20～30	垂角	5	5-60
SX02-AE-10ヤンブル	濁泥質砂岩	30	角	1	

第17表 SX01より出土した巨礫

c. 硬砂岩

池状遺構の南部および西部に、亜角～角礫が堆積された状態の硬砂岩が多数出土した。これらの硬砂岩は、溝状遺構を形成していたものと同様に泥のチップを含むもので、美濃帯に属する硬砂岩と推測される。平均粒径30cm程度の角～亜角礫が14個出土。

d. 砂岩

前述の硬砂岩と同様に平均粒径30cm程度の角～亜角礫の砂岩が18個出土した。これらの砂岩には泥のチップは含有されておらず、前述の硬砂岩とは異なるものと考えられる。供給地を近隣

に求めるならば、美濃帯の古生層に含まれるものと思われる。

e. 凝灰質砂岩

池状遺構の各所に、平均粒径30cm程度の凝灰質砂岩が4点出土している。亜角～角礫。この凝灰質砂岩は先の硬砂岩および砂岩よりも形成時期の新しい第三紀堆積層中の凝灰質砂岩と考えられる。その供給地は瑞浪層群に求められると考えられる。

f. 凝灰岩?

池状遺構の東張り出し部の壁面に漆喰に塗り込

遺構	石材	長さ	形状	個数
SK02 床1層	チャート	3-5	亜角	多数
SK02 南東床1層	チャート	5	亜角	多数
SK02 床	チャート	4	亜角	多数
SK02 床1層	ホルンフェルス	3-7	亜角	30
SK02 南東床1層	ホルンフェルス	5	亜角	多数
SK02 床	ホルンフェルス	5	亜角	多数
SK02 床1層	緑色片岩	1-4	亜角～角	多数
SK02 南東床1層	緑色片岩	5	亜角	5
SK02 床	緑色片岩	5	亜角	1
SK02 床1層	緑色岩	1-3	亜角～亜角	9
SK02 南東床1層	緑色岩	3	亜角	5
SK02 床	緑色岩	3	亜角	多数
SK02 床1層	濃褐色砂岩	3-5	亜角～亜角	32
SK02 南東床1層	濃褐色砂岩	4	亜角	4
SK02 床	濃褐色砂岩	4	亜角	5
SK02 床1層	アフライト	3-5	亜角～亜角	28
SK02 南東床1層	アフライト	5	亜角	10
SK02 床	アフライト	5	亜角	2
SK02 床1層	砂岩	3-5	亜角～亜角	12
SK02 南東床1層	砂岩	4	亜角	4
SK02 床1層	凝灰質砂岩	3-5	亜角～角	11
SK02 南東床1層	凝灰質砂岩	4	亜角	4
SK02 床	凝灰質砂岩	3-5	亜角	5
SK02 床1層	凝灰質砂岩	1-3	亜角	8
SK02 床1層	珪質岩	3	亜角～亜角	7
SK02 南東床1層	珪質岩	3	亜角	2
SK02 床	珪質岩	3	亜角	1
SK02 床1層	灰岩	1-3	亜角	7
SK02 南東床1層	灰岩	3	亜角	1
SK02 床	灰岩	3	亜角	多数
SK02 床1層	花崗岩	3	亜角～角	6
SK02 南東床1層	花崗岩	3	角	2
SK02 床	花崗岩	5	角	1
SK02 床1層	安山岩	3	亜角～亜角	4
SK02 床	安山岩	3	亜角	1
SK02 床1層	凝灰質泥岩	3	亜角	1
SK02 南東床1層	凝灰質泥岩	6	亜角	1
SK02 床	凝灰質泥岩	4	亜角	1
SK02 床1層	砂質凝灰岩	7	亜角	1
SK02 床1層	長石	3	亜角	1
SK02 南東床1層	長石	4	角	1
SK02 床	長石	3	亜角	3
SK02 床1層	輝岩	3	亜角	1
SK02 南東床1層	石灰岩	2	角	2
SK02 南東床1層	結晶片岩	5	亜角	1

第18表 池状遺構の床面より出土した礫

遺構	石材	長さ	形状	個数
SK02 東張り出し 遺構中D	凝灰岩	30	亜角	1
SK02 東張り出し 遺構中C	凝灰岩	30	亜角	1
SK02 東張り出し 遺構中B	S-凝灰岩	20	亜角	1
SK02 東張り出し	チャート	20	亜角	多数
SK02 東張り出し	ホルンフェルス	20	亜角	多数
SK02 東張り出し	砂岩	10	亜角	1
SK02 東張り出し	緑色片岩	15	亜角	1
SK02 東張り出し	濃褐色砂岩	17	亜角	1
SK02 東張り出し	砂岩	20	亜角	1
SK02 東張り出し	凝灰岩	20	角	1
SK02 東張り出し	チャート	3-12	亜角	多数
SK02 東張り出し	珪質岩	1-3	亜角～亜角	多数
SK02 東張り出し	ホルンフェルス	3-12	亜角～角	35
SK02 東張り出し	アフライト	3-7	亜角～亜角	21
SK02 東張り出し	泥岩	1	亜角～亜角	11
SK02 東張り出し	砂岩	3-12	亜角～角	9
SK02 東張り出し	緑色岩	0.5-3	亜角～亜角	7
SK02 東張り出し	凝灰質砂岩	2-5	亜角～角	4
SK02 東張り出し	濃褐色砂岩	3-7	亜角	4
SK02 東張り出し	花崗岩	5	亜角	2
SK02 東張り出し	安山岩	3	亜角	1

第19表 池状遺構東張り出し部より出土した礫

遺構	石材	長さ	形状	個数
SK20	アフライト	5-10	亜角	多数
SK20	チャート	5	亜角～亜角	5
SK20	珪質岩	3	亜角	3
SK20	濃褐色砂岩	3	亜角	2
SK20	ホルンフェルス	5	亜角	2
SK20	凝灰質泥岩	3	亜角	1
SK20	砂岩	12	亜角	1
SK20	泥岩	3	亜角	1
SK20	緑色片岩	3	亜角	1

第20表 SK20より出土した礫

名古屋城三の丸遺跡 VII

まれた状態の垂角礫3点が出土した。この岩石は保存状態が不良で岩石薄片などの作成もできなかったため、造岩鉱物などは不明である。しかし、石基部分が凝灰質であることや灰色の異質岩（泥岩？）片を含んでいることから凝灰岩と判断した。産地は不明である。

g. その他の岩石

上記以外に池状遺構でみられた巨礫には、濃飛流紋岩（長径約20cm、垂門礫、1個）および花崗岩（長径20～40cm、角礫、3個）、安山岩（長径30cm、垂門礫、1個）が挙げられる。

3. 玉石

池状遺構およびSK20からは、垂門～門礫（いわゆる玉石）がまとまった状態で出土した。

a. 池状遺構（SX02）の東張り出し部

この地区では、拳大程度の垂角礫と長径3cm

程度の垂角礫が多数出土した。また池の側面には漆喰で張り込められた巨礫が3点認められた。

拳大の垂角礫の石材はチャートが大半を占め、次いで珪質岩および泥岩起源のホルンフェルスが多く、砂岩や濃飛流紋岩、緑色岩、硬砂岩などが含まれていた。

大半を占めているチャートは長径3cm程度の垂角礫である。珪質岩は白色で直径3cm程度の垂門～垂門礫である。黒色のホルンフェルスは垂角～角礫、泥岩、砂岩、緑色岩、濃飛流紋岩などは垂門～垂角礫である。またチャートの色調は、赤褐色、黄褐色、灰色など多様である。

b. 池状遺構（SX02）の床面

池状遺構の床面からは長径3～5cm程度の垂角～垂門礫が大量に出土した。石材はチャート、ホルンフェルスが多く、次いで緑色岩、緑色片岩、濃飛流紋岩、アプライト、砂岩などである。長径が大きいものほど垂角礫が多くなっている。層ご

堆積岩

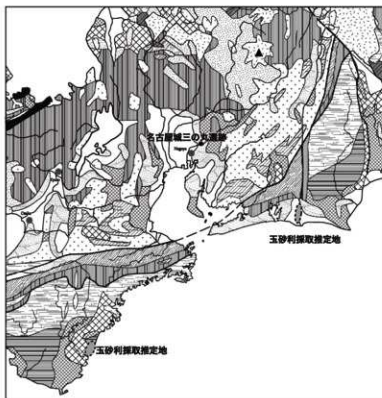
- 更新世
- ▨ 新第三紀
- ▩ 新第三紀 堆積前期
- ▧ 古第三紀～新第三紀堆積前期（55万～更新世上部）
- ▦ 白垩紀 堆積前期（55万～更新世下部）
- ▥ ジュラ紀 堆積前期
- ▤ 二叠紀～中生代中期 堆積前期

火成岩

- ▧ 更新世後期～更新世 火山前期
- ▦ 新第三紀 火山前期
- ▥ 白垩紀～古第三紀後期 花崗岩類
- ▤ 白垩紀後期～古第三紀前期 火山前期
- ▣ 中生代～中生代前期 花崗岩類（肥後花崗岩類）
- ▢ 中生代～中生代前期 雲母質岩（肥後花崗岩類）

変成岩（※参考参照）

- ▧ 構造変成岩類（白垩紀）
- ▦ 三浦川変成岩類（ジュラ紀～白垩紀）
- ▥ 角閃変成岩類（二叠紀）



第202図 愛知県周辺の地形図と礫採取推定地

との石材を比べてみると、SX02 床 1 層・南東床 1 層ではチャートや緑色片岩、アブライトが多いのに対し、SX02 床では緑色岩およびホルンフェルス、泥岩が多数出土している。

c. SX03

長径 5～7cm 程度の角～亜角礫が多数出土した。石材はチャートが大半を占め、緑色岩、砂岩、凝灰質砂岩、凝灰質泥岩などが数点確認された。

d. SK20

この遺構からは鶏卵大のアブライトが大量に出土した。長径 10cm 程度の亜円礫で円磨度は良い。石英や長石に縞状の配列が確認できるものもある。黒雲母やざくろ石を含有しているものもある。アブライトの他には、長径 5cm 程度の亜円～亜角礫のチャートや長径 3cm 程度の珪質岩、ホルンフェルス、濃飛流紋岩などが数点ずつ確認された。

e. 玉石類の入手先について

池状遺構からは、3cm 程度の亜円礫で、茶褐色、緑色、黒色など色彩豊かな小さな玉石類、同様に 3cm 程度の亜円礫で白色の珪質岩ばかりの玉石類、鶏卵大のアブライトの亜円礫からなる大きめの玉石、長径 5cm 程度の亜角礫と大きく分けて 4 種類の玉石類が出土した。それぞれの玉石の産地について、若干の考察を試みた。

まず色彩豊かな小さな玉石類について考察する。これらの玉石類は池状遺構の SX02 の床面よりまとまって出土している。これら色彩豊かな小さな玉石の石材をみるとチャートやホルンフェルスに混じり、白色の珪質岩、泥岩および緑色岩、緑色片岩が含まれている。全体の淘汰度は良好で円磨度も高いことから、河川の下流域もしくは海岸付近の砂利であると推測させられる。また緑色片

岩および緑色岩の礫を含むことから、外帯と呼ばれる地域に深く関わる地域より産出したものと考えられる。

そこで、これらの岩石が含まれる河川もしくは海岸を推測した場合、東海地域での採取地を推定するならば、三重県熊野市の七里御浜が候補地として挙げられる。熊野市周辺の地質をみると、中生界では四万十累層が、中新統では熊野層群および尾鷲層群、熊野酸性岩類が分布している。このうち四万十累層中には緑色片岩および緑色岩が、熊野層群には那智黒と呼ばれる泥岩や、礫岩砂岩などが含まれる。尾鷲層群にはチャートや砂岩を礫とする大曾根層や砂岩やシルト岩からなる行野浦層が含まれている。また熊野酸性岩類と呼ばれるものには、神ノ木流紋岩および凝灰岩類、花こう斑岩が含まれている。これらの地質の情報から、色彩豊かな亜円～円礫類が入りやすい地域と推測される。また、熊野市の七里御浜海岸は玉砂利の海岸でよく知られている。現地において採取した小礫の礫種および礫形、石材などの観察を行うと、発掘調査で得られた小礫とよく似ていることが確認された。

次に白色の珪質岩の長径 3cm ほどの亜円～亜角礫の供給地の推定を試みる。ここでいう珪質岩とは大理石やアブライト、石英、長石などいわゆる珪質な岩石の総称として用いているが、現在の地質図より珪質岩のみの亜円礫を産する地域は存在しない。つまり、出土した礫類は自然状態では存在せず、人為的な行為により白色のものだけを取り集めた状態であると考えられる。

鶏卵大のアブライトの採取地について述べる。これらは SK20 より、多数がまとまって出土したものである。大きさは鶏卵大のものから長径 10cm 程度であり、円磨度は高い。このような礫の形状より、採取地点は大きな河川の下流域もしくは海岸と推測される。そこで近隣の河川より観察を行ってゆくと、静岡県天竜川においてよく

名古屋城三の丸遺跡 VII

似た礫を採取することができた。採取地は静岡県浜松市新貝町の河川敷である。この河川敷ではアブライトや花崗岩、緑色片岩、凝灰岩、安山岩など多様な岩石を採取することができる。礫形は円～亜角礫で、様々な大きさのものが得られるが、20cm程度程度の亜角礫が最も多くみられる。この地で採取できるアブライトは石英や長石に配列がみられ、まれに黒雲母やざくろ石が含まれているなど、遺跡で出土したアブライトによく似ている。天竜川は長野県駒ヶ根市付近に源流を持ち、駒ヶ根花崗岩や太田切花崗岩、天竜峡花崗岩など、複数の花崗岩体を削りながら、太平洋へ注ぎ込んでいる。この地においてアブライトだけを採取したと仮定することは可能であろう。ただし、天竜川の礫を造園に利用したとの資料を発見するには至っていないため、今回は採取候補地の一つとして提示するにとどめたい。

最後に池状遺構の床面より出土した5cm程度の亜角礫について、入手地域を推測する。これら

の亜角礫の石材はチャートおよびホルンフェルス、緑色岩、緑色片岩、濃飛流紋岩、泥岩、砂岩である。これらの礫は淘汰があまり良くなく、円磨度もばらつきが大きいことから、遺跡周辺の礫層中より採取された可能性が高いと推測される。

以上遺跡より出土した玉石類について、それぞれの採取地の推定を行った。しかしここで挙げた採取地が必ずしも、最有力な候補地であるとは限らない。今回は遺跡に近い地域に限り採取できる箇所を地質背景から推測したにすぎない。今後は江戸時代の造園技術および造園材料についての文献資料などとの比較検討が必要となるであろう。

参考文献

原色玉石図鑑(2001)建築資料研究社、CONFORT No.50, 49-63.

日本の地質5 中部地方II(1988)共立出版社、310pp.



1 池状遺構 SX01 底部出土礫

*長径3～5cmの垂角～垂円礫。石材はチャート、ホルンフェルス、泥岩など



2 緑色岩
(長径21.7mm)



3 緑色岩
(長径22.8mm)



4 緑色岩
(長径33mm)



5 砂岩
(長径29.5mm)



6 砂岩
(長径23mm)



7 砂岩
(長径23mm)



8 泥岩
(長径28.4mm)



9 泥岩
(長径21.7mm)



10 泥岩
(長径24.7mm)



11 アプライト (長径28.8mm)



12 アプライト (長径71.2mm)



13 アプライト (長径72mm)



14 アプライト (長径52.7mm)



15 アプライト (長径61mm)



16 アプライト (長径73.1mm)

第5節 名古屋城三の丸遺跡出土木製品の樹種同定

植田弥生(パレオ・ラボ)

1. はじめに

ここでは、調査区東側の大形廃棄土抗群(SK01ほか)から出土した木製品(主に廃材)78点の樹種同定結果を報告する。出土した木製品は、板材・薄い板材(屋根)・角材などの建築廃材が多く、そのほかに箱物・折敷・曲物・結桶など容器類も検出された。

大形廃棄土抗群は、有力家臣たちが居住した武家屋敷時代(江戸時代初期:1610年~1650年頃)の後に、藩主一族や側室の屋敷などが存在した御屋形時代(1650年頃~幕末)の遺構である。御屋形時代の遺構には、庭園に伴う池・石組溝・地下室・掘立柱建物・井戸・礎石などが検出されている。調査区東側に位置する大形廃棄土抗群からは、大量の瓦・石材・大工仕事に伴う廃材などが出土し、建物の増改築時の廃棄土抗と推測されている。今までの調査では、木製品などが検出される機会はほとんどなかったため、今回の廃棄土抗群の検出により名古屋城内の藩主一族や側室などの居住区で、使用された木材利用に関する資料を得る目的で、この調査は実施された。

2. 試料と同定方法

木製品から材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクローラールで封入し、永久プレパレート(材組織標本)を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40~400倍に拡大し観察した。

なお試料は針葉樹材がほとんどであった。針葉樹材の樹種同定には、放射断面の分野壁孔の観察が重要である。従って特に放射断面については、異なる部分から、また安定した形質が発見されて

いる年輪幅の広い部分を選び、複数の破片を採取するよう心掛けた。また、観察時には早材部の分野壁孔の特徴や、多数の分野壁孔を観察するように心掛けた。

材組織標本は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

同定結果の一覧を第21表に示し、第22表では検出樹種と器種ごとに集計した。検討試料数は81点であるが、実測番号97結桶底板と実測番号99大型箱物?に木釘があり、合計数が2点多く、83点となっている(第22表)。

主に板材・薄い板材(屋根)・角材などの建築廃材と、箱物・折敷・曲物・結桶など容器類などから検出された樹種は、ヒノキ(29点)・サワラ(16点)・ヒノキ属(1点)・アスナロ(8点)・ネズコ(5点)・ヒノキ科(4点)・モミ属(9点)・ツガ属(4点)・スギ(3点)の針葉樹材と、単子葉類のタケ亜科(1点)であった。材はすべて針葉樹材であった。ヒノキ(30点)が最も多く全体の約30%を占め、ヒノキとサワラを含めヒノキ属(48点)としてみると全体の約60%を占め、特にヒノキ科(ヒノキ・サワラ・ヒノキ属・アスナロ・ネズコ・ヒノキ科)に属する材は66点と全体の約80%弱を占めていた。ヒノキ属と同定したものは、ヒノキまたはサワラであるが、保存が悪く特定できなかったものであり、ヒノキ科も保存が悪いため科の同定レベルに留めた。タケ亜科の木釘は、いわゆる竹類の稈(茎)から作られたものであり、桶底の板を繋ぐ木釘によく使用されているものである。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、

3方向の材組織写真を提示した。なお、針葉樹材の同定には、分野壁孔の特徴が重要であるが、判断に迷うことが多い。従って、横断面や接線断面は同定根拠の決定にあまり重点がないと思われる分類群については写真掲載を省略し、その代わりにより多くの試料の放射断面を掲載した。

樹種記載

(1) モミ属 *Abies* マツ科 第204図 1a-1c (図版番号 1446)

仮道管・放射柔細胞からなり、樹脂細胞はない針葉樹材。概して早材から晩材への移行はゆるやかである。放射柔細胞の壁は厚く、放射断面において接線壁に数珠状肥厚が見られ、上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は小型のスギ型やヒノキ型が雑然と配置し、1分野に1～6個ある。放射組織の細胞高は比較的高い。

モミ属は常緑高木で、暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの5種がある。いずれの材も組織は類似しており区別はできない。材質はやや軽軟で加工は容易であるが保存性は低い。

(2) ツガ属 *Tsuga sieboldii* Carr. マツ科 第204図 2a-2c (図版番号 1495)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞・放射仮道管からなる針葉樹材。放射柔細胞の壁は厚く、放射断面において接線壁に数珠状肥厚がみられる。放射断面において、放射柔組織の上下端に、有縁壁孔を持つ放射仮道管がある。分野壁孔は小型で2～4個ある。

モミ属の材と類似するが、ツガ属には樹脂細胞と放射仮道管がある点が異なる。

ツガ属には本州の福島県以南の暖帯から温帯下部の山地に普通のツガと、本州・四国・九州の温帯上部の深山に生育するコマツガがあるが、材組

織からは2種を区別することはできない。材は重硬で割裂性も大きく耐久性もよい。

(3) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don

スギ科 第204図 3a-3c (図版番号 2228)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量はやや多く、晩材の仮道管壁も肥厚している。樹脂細胞は年輪の後半に散在する。分野壁孔は大型、孔口は大きく開いたスギ型、開口の幅は壁孔縁の幅より広く、1分野に2～3個が水平に並ぶ。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。材はやや軽軟で加工は容易である。

(4) ネズコ *Thuja standishii* Carr. ヒノキ科

第205図 4a-4b (図版番号 1458) 5

(図版番号 1427) 6 (図版番号 1437)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は比較的小さい。分野壁孔はヒノキ型、1分野に2～6個あり、ヒノキ属(ヒノキやサワラ)に比べ分野壁孔数が多い。

ネズコ(別名クロベ)は本州・四国の温帯上部の山中に生育する常緑高木であり、特に中部地方以北に多く分布する。材は耐朽性・切削性・割裂性にすぐれる。

(5) アスナロ *Thujopsis dolabrata* sieb. et

Zucc. ヒノキ科 第205図 7a-7b (図版番

号 1421) 8a-8b (図版番号 1432) 9 (図版番号 1457)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は概して少ない。分野壁孔は小型のヒノキ型やスギ型、1分野に2～5個、やや雑然と配置している。実測番号26では、数箇所で放射仮道管の出現が観察された。

アスナロは日本特産で1属1種である。本州・四国・九州の温帯の山中に生育する常緑高木である。材質は良く建築材として有用であるがヒノキよりやや劣る。

(6) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl.

ヒノキ科 第206図 10a-10b (図版番号 1459)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は少ないが、早材から晩材への移行は緩やかな材と急な材がある。分野壁孔は孔口がやや斜めに細く開いた典型的なヒノキ型、1分野に主に2個が水平に配列する。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれ、建築材・曲物などによく使われる。

(7) サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Sieb.

et Zucc.) ヒノキ科 第206図 11 (図版番号 1464) 12a-12c (図版番号 1477) 13a-13b (図版番号 1461) 14 (図版番号 759)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は概して少ないが、早材から晩材への移行は緩やかな材と急な材がある。分野壁孔はヒノキよりやや大きく、ヒノキより孔口は大きく開いたヒノキ型(開口の幅は、壁孔縁の幅より少ない)、1分野に主に2個、時に3個が水平に配列する。実測番号58では、数箇所で放射仮道管の出現が観察された(写真13b)。

サワラはヒノキより分布域は狭くおもな分布域は東北部から中部地方の沢沿いの岩上に生育する。材はヒノキよりやや軽軟で劣るといわれる。

4. まとめ

名古屋城三の丸遺跡の御屋形時代の大型廃棄土抗群から出土した建築廃材などの樹種は、ヒノキ・サワラ・アスナロ・ネズコ・モミ属・ツガ属・スギの針葉樹材であった。ヒノキ科に属する材が全体の80%を占め、次にマツ科(モミ属・ツガ属)が多く、スギは意外と少なく、マツ属複雑維管束亜属(アカマツとクロマツ)は検出されなかった。

特にヒノキが多く、板材・角材・楔・削り屑?・端切れ材?・容器類(箱?・折敷・曲物など)・遺構建築材(地下室?)など、様々な用途に使用されおり、ヒノキ材が強く選択使用されていた傾向が認められた。ヒノキの次に多いサワラも、ヒノキと同様に様々な木製品から検出された。しかし屋根材にはヒノキよりサワラの方が多く、サワラの方が選択使用されていた傾向が見られた。現在でも屋根材の棟板は、木曾産のサワラが主に使われるようである。名古屋城三の丸遺跡の屋根板材は、板より厚い板材であるが、やはりサワラが選択使用されていたようである。東京江戸では地下室の構築材は、文献ではアスナロが主に使われていた記録があり、近世江戸の遺跡でも地下室の構築材にはアスナロが多い。地下室と推定されるSX100の側板と底板は、当遺跡ではヒノキであった。

県内では、街道筋の集落遺跡である荊安賀遺跡(一宮市)において江戸時代の漆喰や著などの樹種調査結果がある。漆喰はトチノキ・ブナ属・カエデ属などの広葉樹材がほとんどである。それ以外の多くは著であるが、ヒノキとサワラがほとんどである(愛知県埋蔵文化財センター、2001)。また大雑把な比較ではあるが、近世江戸城周辺の遺跡においても、ヒノキ科の材が多く、特にヒノキは様々な製品で多く使われ、サワラは桶・木桶などから多く検出されている(松葉、1999など)。権威ある特別な区域の城内遺跡であっても、時代的な樹種利用の傾向はおおよそ同じようであったことが判った。

引用文献

- 小沢詠美子 1998『災害都市江戸と地下室』吉川弘文館
 松葉礼子 2001『飯田町遺跡』千代田区飯田町遺跡調査会
 愛知県埋蔵文化財センター 2001『荊安賀遺跡』

標本分析番号	図版番号	アレット	遺物	種別	樹種	本取り	備考
1	2226	8d	SK57	厚い板材	サワラ	板目	年輪観察
2	1451	11b	SK01B	内材	ツグ属	板目	実測3と同一?
3	1452	11b	SK01B	内材	赤松属	板目	実測2と同一?
4	1422	11b	SK01B	下層 曲物縁板?下	ヒノキ	板目	
5	1475	11b	SK01B	下層 加工板材(部分)	ヒノキ	跡め板目	年輪観察
6	1426	11b	SK01B	下層 端切石?下	ヒノキ	板目	
7	1421	11b	SK01B	下層 板	アスナロ	板目	年輪観察
8	1464	11b	SK01B	下層 薄い板材(屋根)	サワラ	跡め	平面三角形
9	1446	11b	SK01B	下層 厚い板材	ヒノキ	板目	
10	1447	11b	SK01B	下層 加工板材(部分)	サワラ	板目	
11	1449	11b	SK01B	下層 加工板材	ヒノキ	板目	
12	1483	11b	SK01B	下層 薄い板材(屋根)	ヒノキ	板目	
13	1484	11b	SK01B	下層 薄い板材(屋根)	ヒノキ	跡め	
14	1477	11b	SK01B	下層 薄い板材(屋根)	サワラ	板目	
15	1406	11b	SK01B	下層 厚い板材	アスナロ	跡め	
16	1420	11b	SK01B	下層 厚い板材	ヒノキ	板目	
17	1411	11b	SK01B	下層 厚い板材	ヒノキ	跡め	年輪観察
18	1408	11b	SK01B	下層 板	ヒノキ	板目	年輪観察
19	1434	11b	SK01B	下層 加工板材(部分)	赤松属	跡め	
20	1467	11b	SK01B	下層 薄い板材(屋根)	ヒノキ	板目	
21	1441	11b	SK01B	下層 許巻板?下	ヒノキ	板目	
22	1412	11b	SK01B	下層 板	ヒノキ	跡め	年輪観察
23	1482	11b	SK01B	下層 薄い板材(屋根)	サワラ	跡め	平面三角形
24	1466	11b	SK01B	下層 薄い板材(屋根)	サワラ	跡め	平面三角形
25	1481	11b	SK01B	下層 薄い板材(屋根)	サワラ	跡め	
26	1432	11b	SK01B	下層 厚い板材	アスナロ	板目	年輪観察
27	1410	11b	SK01B	下層 板	アスナロ	跡め	
28	1472	11b	SK01B	下層 厚い板材	ヒノキ	板目	年輪観察
29	1403	11b	SK01B	下層 厚い板材	ヒノキ	跡め	
30	1473	11b	SK01B	下層 内材片	ツグ属	板目	
31	1450	11b	SK01B	下層 内材	赤松属	板目	
32	1459	11b	SK01B	下層 内材	ヒノキ	跡め	
33	1443	11b	SK01B	下層 加工内材(部分)	赤松属	板目	
34	1491	11b	SK01B	下層 加工板材	ヒノキ	跡め	
35	1433	11b	SK01B	下層 加工板材	ヒノキ	板目	
36	1474	11b	SK01B	下層 内材片	ヒノキ	1/4分譲	
37	1446	11b	SK01B	下層 内材	赤松属	板目	
38	1457	11b	SK01B	下層 内材	アスナロ	跡め	
39	1458	11b	SK01B	下層 厚い板材	赤松属	跡め	
40	1435	11b	SK01B	下層 厚い板材	ヒノキ	板目	
41	1425	11b	SK01B	下層 張り屑?	ヒノキ	跡め	
42	1498	11b	SK01B	下層 端切石?	ヒノキ	板目	
43	1438	11b	SK01B	下層 加工内材(部分)	赤松属	板目	
44	1476	11b	SK01B	下層 内材片	ヒノキ材	板目	
45	1461	11b	SK01B	下層 内材	サワラ	板目	
46	1453	11b	SK01B	下層 加工内材	ヒノキ	跡め	
47	1444	11b	SK01B	下層 加工内材	ヒノキ材	跡め	
48	1423	11b	SK01B	下層 曲物縁板?下	サワラ	板目	
49	1465	11b	SK01B	下層 薄い板材(屋根)	サワラ	板目	平面三角形
50	1430	11b	SK01B	下層 加工内材	ヒノキ	板目	
51	1431	11b	SK01B	下層 加工板材	ヒノキ	板目	積加工
52	1424	11b	SK01B	下層 粘輪板	アスナロ	板目	
53	1440	11b	SK01B	下層 加工内材(建具)	ヒノキ	板目	
54	1463	11b	SK01B	下層 板材	サワラ	板目	平面三角形
55	1436	11b	SK01B	下層 内材片	ヒノキ	跡め	
56	1454	11b	SK01B	下層 内材	ヒノキ	板目	
57	1455	11b	SK01B	下層 内材(釘)	ヒノキ	板目	
58	2224	11e	SK24 (バネ)	内材(釘)	スギ	板目	
59	750	11i	SK147	薄い板材	サワラ	板目	
60	1008	12f	SK185	内材片	赤松属	板目	
61	104	10d	SK212	端切石	ヒノキ材	板目	
62	2228	10b	SK362	粘輪板	ヒノキ	板目	
63	2228	10b	SK362	粘輪板の木釘	タケ虫釘	板目	
64	2227	10b	SK362	大型動物感?下	スギ	板目	
65	2225	10d	SK107	大型動物?	ヒノキ	板目	
66	2225	10d	SK107	大型動物?の木釘	ヒノキ材	板目	
65	1548	8c	SX02 北東	不明材	アスナロ?	板目	
66	1549	8c	SX02 北東	不明材	アスナロ	跡め	
67	1547	8c	SX02 北西	板	ヒノキ材	跡め	
68	1546	8c	SX02 北西	板	サワラ	跡め	忘れ丸木
69	1545	8c	SX02 北西	板	サワラ	跡め	忘れ丸木 樹皮付
70			SB01	張り屑?	サワラ	跡め	
71	1442	11b	SK01B	下層 加工内材	赤松属	跡め	
72	1460	11b	SK01B	下層 加工内材	サワラ	板目	
73	1407	11b	SK01B	下層 薄い板材(屋根)	アスナロ	跡め	
74	1427	11b	SK01B	下層 加工内材	ヒノキ	板目	少し厚い
75	1445	11b	SK01B	下層 加工内材	ヒノキ	跡め	
76	1437	11b	SK01B	下層 内材片	ヒノキ	板目	
77	1456	11b	SK01B	下層 内材	ツグ属	跡め	
78	1495	11b	SK01B	下層 部材	ツグ属	跡め	
年代判定	13c	SK28	網(すくか?)	サワラ			PLD-2153
	9a	SX100	粘輪板(地下室?)	ヒノキ			
	9c	SX100	粘輪板(地下室?)	ヒノキ			

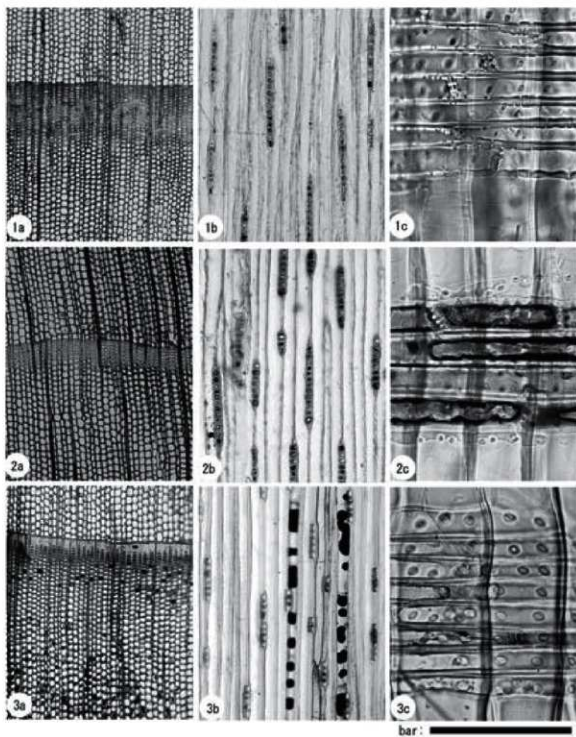
第 21 表 名古屋城三の丸遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧

名古屋城三の丸遺跡 VII

松葉礼子 1999『溜池遺跡・汐留遺跡・墨田区三遺跡から出土した木製品の樹種から類推される近世江戸城周辺の木材消費』59-70『植生史研究 第7巻第2号』日本植生史学会。

種別	樹種	ヒノキ科					マツ科		スギ科		合計	
		ヒノキ	サワラ	ヒノキ属	アスナロ	ネズコ	ヒノキ科	モミ属	ツガ属	スギ		タケ亜科
厚い板材		3	1		2		1				7	
板材			1								1	
薄い板材		1	1								2	
薄い板材 (屋根)		2	6		1	1					10	
加工板材		5	1				1				7	
加工角材		4	1	1		2	3				11	
角材		3	1		1		3	2	1		11	
角材片		2				1	1	1			6	
楔		3			2						5	
杭			2				1				3	
削り屑?		1	1								2	
端切れ材?		1									1	
部材								1			1	
礎板?							1				1	
不明材					2						2	
箱物?		1									1	
大型箱物?	本体					1					1	
	木釘						1				1	
大型箱物底板?									1		1	
折敷底板		1									1	
曲物桶底板?		1	1								2	
結桶	側板				1						1	
	底板								1		1	
	底板の木釘									1	1	
遺構構築材	側板 (井戸枠か?)		1								1	
	箱物側板 (地下室?)	1									1	
	箱物床板 (地下室?)	1									1	
合計		30	17	1	9	5	4	9	4	3	1	83

第 22 表 名古屋城三ノ丸遺跡出土木製品の種別の樹種集計

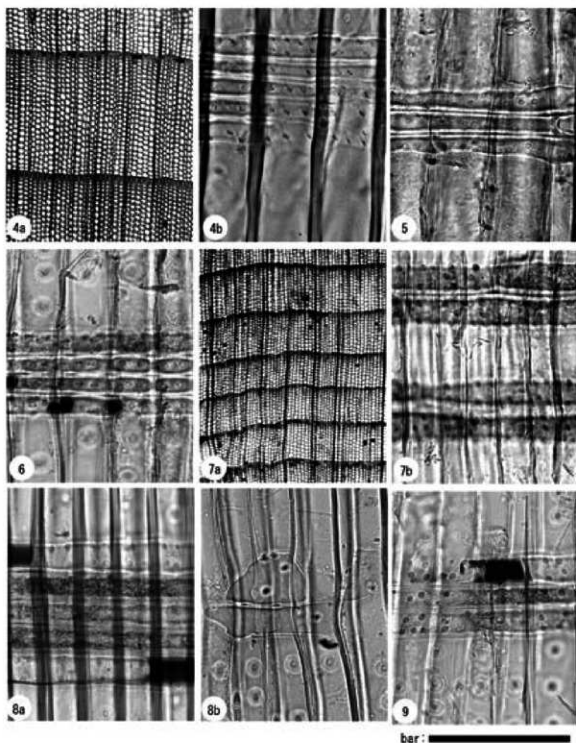


第 204 図 名古屋城三の丸遺跡出土木製品材組織の光学顕微鏡写真 (1)

1a-1c: モミ属 (図版番号 1446) 2a-2c: ツガ属 (図版番号 1495) 3a-3c: スギ (図版番号 2228)

1a・2a・3a: 横断面 1b・2b・3b: 接線断面 1a・2b・3c: 放射断面

bar: 横断面 = 1mm, 接線断面 = 0.4mm, 放射断面 = 0.1mm

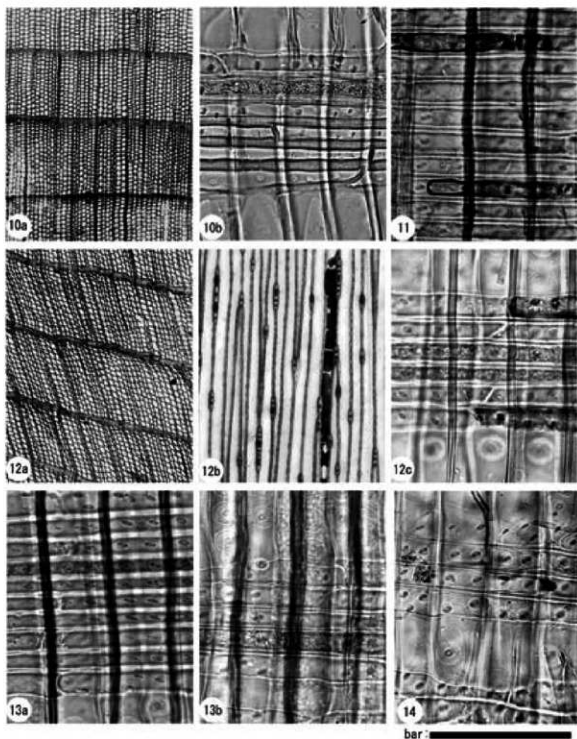


第 205 図 名古屋城三の丸遺跡出土木製品材組織の光学顕微鏡写真 (2)

4a-4b: ネズコ (図版番号 1458) 5: ネズコ (図版番号 1427) 6: ネズコ (図版番号 1437)

7a-7b: アスナロ (図版番号 1421) 8a-8b: アスナロ (図版番号 1432) 9: アスナロ (図版番号 1457)

4a・7a: 横断面 4b・5・6・7b・8a・9: 放射断面 bar: 横断面=1mm, 放射断面=0.1mm



第 206 図 名古屋城三の丸遺跡出土木製品材組織の光学顕微鏡写真 (3)

10a-10b: ヒノキ (図版番号 1459) 11: サワラ (図版番号 1464) 12a-12b: サワラ (図版番号 1477)

13a-13b: サワラ (図版番号 1461) 14: サワラ (図版番号 759)

10a・12a: 横断面 12b: 接線断面 10b・11・12c・13a・13b・14: 放射断面

bar: 横断面 = 1mm, 接線断面 = 0.4mm, 放射断面 = 0.1mm

第5章 考察とまとめ

第1節 文献から見た御屋形の歴史

はじめに

今回の調査区は名古屋城三の丸の北東隅、「御屋形」と呼ばれた屋敷地の一部である。御屋形は慶安4(1651)年名古屋に迎えられた廣幡忠幸の屋敷を嚆矢とし、藩主の一族・側室らが居住したことで古くから知られている。御屋形およびその周辺については、江戸末期奥村得義により編纂された『金城温古録』に区画および居住者の変遷に関する記事があり、詳細な検討が行われている。その後大正5(1916)年に編纂された『名古屋市史』地理編などに御屋形の記述があるものの、具体的に検討されてきたとは言いがたい。また近年三の丸の居住者の変遷(伊藤、1995)や名古屋城下絵図に関する検討(山本、1993)が試みられており、それらの成果を採り入れた御屋形の新しい研究が求められている。

ここで小稿では、御屋形及びその周辺の区画の形成過程について、蓬左文庫が所蔵する御屋形絵図、および名古屋城下絵図を題材に検討する。また御屋形の居住者の変遷を整理し、御屋形がどのように利用されてきたかを検討する。

1 御屋形成立以前

名古屋城は慶長15(1610)年に築城が始まり、初代藩主徳川義直が本丸御殿で居住を始める元和2(1616)年までには城下の整備が進んだ。「清須越」により家臣団・町人等の移住が行われ、大身の家臣は三之丸、それ以外の家臣には曲輪の周辺に屋敷地が与えられた。また『金城温古録』所載「三之丸内邸宅古図」(以下、「邸宅古図」と略す)によると、御付家老である成瀬半人正と竹腰山城

守は二之丸、志水甲斐守は二之丸のうち西之丸に屋敷地を与えられたが、志水家は寛永3(1626)年に、成瀬・竹腰両家は寛文3(1663)年にそれぞれ三之丸に移った。

さて「邸宅古図」によると、御屋形が位置した東鉄門（東門）の東には武家屋敷が展開しており、南北に1筋、東西に1筋小路が通じていたとされる。東鉄門（東門）に面して寺西藤左衛門、石川市正、津田太郎左衛門が屋敷を構え、その裏手には一色電雲、粟生将監の名を見出すことができる。南北の小路をはさんで東側には普請奉行の小屋場と御蔵があったが、その後武家屋敷となっている。

2 御屋形空間の形成

慶安2(1649)年義直の娘京姫と八条宮智仁親王の第二王子幸丸との婚約が決まり、「石川伊賀屋敷替被仰付 御厩之内差添御作事」(『編年大略』)が行われた。この記事により、石川伊賀守正光らを屋敷替えの上、御屋形の区画の原型が成立したことがわかる。義直の逝去をはさんで慶安4(1651)年正月、京都より幸丸が迎えられ、翌2月に京姫との婚約が執り行われた。幸丸の屋敷は東鉄門向屋敷と呼ばれ、『金城温古録』によると、門は幸丸・京姫別々に設けられていたが、内部は一続きになっていたといわれている。また万治3(1660)年には東北隅の区画で屋敷替えが行われ、新たな屋敷の作事が行われた。義直の側室貞松院が二之丸から移り住んだため、貞松院屋敷あるいは東御屋敷と呼ばれるようになった。

寛文3(1663)年、幸丸は清華に列せられた上廣幡忠幸を名乗り京都に戻るようになったが、

京姫と4人の娘は上京せず、向屋敷にそのまま留まった。忠幸の明屋敷には寛文4(1664)年松平出雲守義昌が「御城内二而火之元等如何敷」(「御国御領分御殿・御屋敷等当時存亡吟味之留」、旧蓬左文庫所蔵資料一三九一三〇)ため、二之丸より移り住んだ。義昌は向屋敷に寛文6(1666)年まで住み、城の西南に新たに設けられた廣井屋敷に移り住んだ。また京姫はのちに普峯院と呼ばれ、寛文13(1673)年に廣井下屋敷へ移った。このため向屋敷はしばらく空館となった。

延宝3(1675)年、2代藩主光友の嫡子綱誠が部屋住の身分で入国することになり、これに伴い向屋敷が東隣の武家屋敷を取り込んで拡張・整備された。綱誠は同年5月向屋敷に入り、諸文獻によるとこの時点で御屋形の称が始まったとされる。また『金城温古録』によると、御屋形の区画は貞享2(1685)年に「御春屋」ほかの武家屋敷を組み込む形で拡張されている。一方東御屋敷は貞松院が貞享元(1684)年に逝去し、翌2年に光友の末子六郎友重が二之丸から移り住んだ。六郎は貞享4(1687)年春日井郡水野村へ盤居となり、翌元禄元(1688)年には松平摂津守義行の仮の館として、同5(1692)年まで利用された。

元禄6(1693)年4月、光友は幕府に自らの隠居と綱誠への家督相続を願い出、許しを得た。この間御屋形に東御屋敷を組み込む作事が行われ、8月に完成した。御屋形・東御屋敷は一続きの区画となった。光友は翌9月に名古屋に入国して御屋形へ入り、夫人の松壽院も二之丸から移り住んだ。こうして御屋形は元禄8(1695)年、大曾根下屋敷が完成するまでの間、隠居所として利用された。

3 御屋形区画の変遷

前節では御屋形の区画が形成される過程を文獻から確認したが、ここでは御屋形及び周辺の区画

の変遷を、名古屋城下絵図と蓬左文庫が所蔵する御屋形絵図の検討を中心に、「金城温古録」の記述と照らしあわせて試みる。

名古屋城下絵図のうち慶安2年以前における三之丸の区画を示す絵図としては、正保4(1647)年作成とされる徳川美術館所蔵「名古屋城絵図」(以下、「正保4年絵図」と称す)がある。「正保4年絵図」は尾張藩が幕府に提出した城絵図の控とされ、現存最古のものである(『新修名古屋史』第3巻付図解題)。絵図の性格上堀の深さ・幅や石垣の高さを記し、隅櫓・枳形なども立体的に描かれている。しかし三之丸やその周辺の武家地は重臣の屋敷を除いて「侍町」「鷹師町」とのみ記され、1軒ごとの区画も省略されている。

慶安2年の東鉄門向屋敷の時代の城下絵図としては、名古屋城管理事務所蔵「万治年間名古屋城下絵図」(以下、「万治年間絵図」と略す)がある。同図は記入内容から寛文8(1668)年から延宝3年の間に描かれたと考えられ、向屋敷には「普峯院様」「出雲守様」の名が、東隣には「貞松院様」の名も見られる。また「既」は清水門の北いわゆる土居下に描かれており、「金城温古録」の記述を裏付ける。

前節でも述べたように、東鉄門向屋敷は延宝3年綱誠の入国により御屋形と呼ばれ、区画は周辺の武家屋敷を囲い込むように拡張する。この時期における区画の変化を、蓬左文庫所蔵の絵図のうち、次の3点について検討を進めることにする。

「三之丸絵図」(蓬左文庫 図444)

御屋形・武家屋敷の区画を描写し、土居・道筋を貼紙で表現している。土居・道筋は黄色の貼紙で表しているが、「貞松院様」と「御春屋」の間に新たに設ける道筋は青色の貼紙で表している。区画の大きさを1軒ごとに間数で表し、「御屋形」・「御馬屋」・「御春屋」の名称や、武家屋敷の居住者が記されている。

「御屋形并東御殿御絵図」（蓬左文庫 図417）

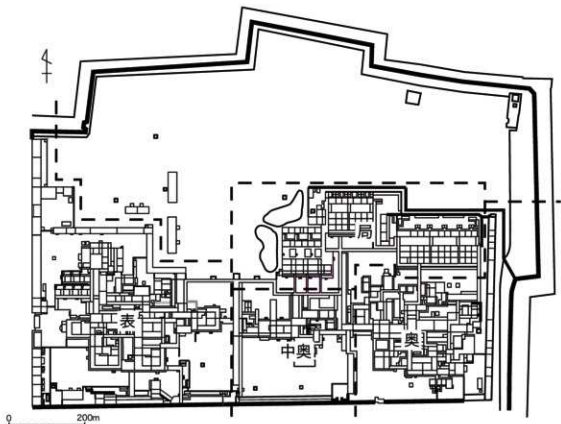
指図であり、1間を3分（約0.9cm）で描く三分計の図である。御屋形・東御殿と長屋を黄色の貼紙、厩を青色の貼紙で表す。間取りの表現は詳細であるが、外堀は簡略化されている。御屋形の北に「御厩」および「別当屋敷」があり、武家屋敷の区画を1軒ごとに表現し、「南御屋敷」・「御春屋」や居住者が記されている。

「御屋形御絵図」（蓬左文庫 図416）

御屋形の区画を描く2枚の絵図からなり、袋には「御屋形御絵図」と表記する。1間を8分（約2.4cm）で描く八分計の図である。部屋は黄色・青色の貼紙で色分けして表し、部屋の名称を付箋で表している。また板張・畳敷の区別が描かれている。3点の中ではもっとも詳細な情報を持つ。

まず「御屋形御絵図」は「御屋形」を1区画

で描いていること、御土居東北隅に描かれた社殿が「荒神社」であることから、同図が元禄6年に完成した光友隠居所の指図である可能性が高い。残る2点の前後関係は、「御春屋」とその周辺の区画に注目して検討することができる。「三之丸絵図」では、「御春屋」は「貞松院様」の西に隣接している。これに対し「御屋形并東御殿御絵図」では、「御春屋」は「御屋形」の南「南御屋敷」に隣接している。また『金城温古録』の記述によると、「御春屋」は貞享2年2月に取壊された後評定所へ一時的に寓居し、5月に松平図書屋敷南に移転したとある。さらに同書「御屋形御曲輪 其三 延宝3卯年以後変化」では、松平図書の屋敷が延宝6（1678）年に移転し、跡地は「南御屋敷」となっている。これらのことから、「三之丸絵図」は貞享2年以前に、「御屋形并東御殿御絵図」は貞享2年以降、元禄6年までに作成されたと考えるのが自然となる。したがって



第207図 御屋形の機能（『御屋形御絵図』をトレースして編集・改変を加えたものである）

御屋形の区画は「万治年間絵図」の段階、「三之丸絵図」の段階、「御屋形并東御殿御絵図」の段階、「御屋形御絵図」の段階の順で拡張されたと考えられる。

次に、御屋形の内部空間について概略する。本丸御殿・二之丸御殿は先行研究でも明らかにされている通り、公的機能を持つ「表」と住居に相当する「中奥」「奥」「奥」に隣接し女中の居住空間である「局」の大きく3種類の空間から成り立つ（『新修名古屋市史』第3巻）。第208図は「御屋形御絵図」をトレースしたものである。御屋形は東西2棟の建物を中核に、間に1棟の建物をはさんで構成される。先に述べたように同絵図は部屋を2色の貼紙で表しているが、部屋の名称を検討すると次のようなことがわかる。まず西側の建物には「表御門」「御広間」「御書院」「御墨絵之間」のほか、家老・用人・書院番・小姓の「休所」があり、西側の建物が「表」の機能を有していたことがわかる。一方東側の建物には「御口部屋」「片岡部屋」など、「奥」を表す名称が目立つ。間にある建物は「御座之間」「御湯殿」「御持仏堂」など「中奥」の機能を有すると言え、したがって西から「表」「中奥」「奥」と並ぶことになる（第207図）。また、「奥」の北隣には「長御局」「中御局」「奥御局」が位置する。したがって2色の貼紙は「表」「奥」を黄色で、その他の部屋を青色で表したことがわかる。

4 その後の御屋形

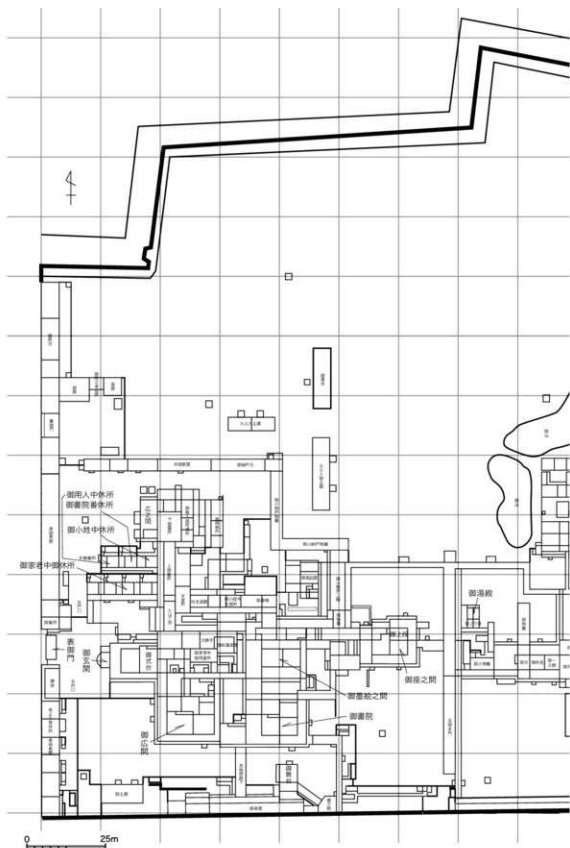
2節でも述べたように、光友は元禄8(1695)年3月御屋形を離れ、新たに完成した大曾根下屋敷に移り住んだ。しかし松蔭院は御屋形に留まり、宝永2(1705)年に逝去するまで東側の建物で暮らした。西側の建物はしばらく居住者がなく空館となるが、「表」としての機能を有していたため、しばしば利用されていることが文献からわかる。一例を挙げると、元禄12(1699)年3代藩

主嗣誠逝去の際、光友と出雲守義昌は幕府の弔喪使黒田甲斐守を御屋形で迎えたとする（『尾藩世記』五）。またこの時期に内寄舎の場として利用されていたことが特筆される。内寄舎とは、評定所のメンバーが評議以外におこなった内輪の会合である（林、1956）が、元禄14(1701)年「年寄役、月番宅寄舎を廃止し、向後屋形に於て会合候様」申し達した（『尾藩世記』六）とあり、文中の「月番宅寄舎」が内寄舎を指すと考えられる。その後内寄舎は正徳3(1713)年に瑞祥院が御屋形に居住することになったため、以後は評定所で行われるようになったとされる（林、同上書）。

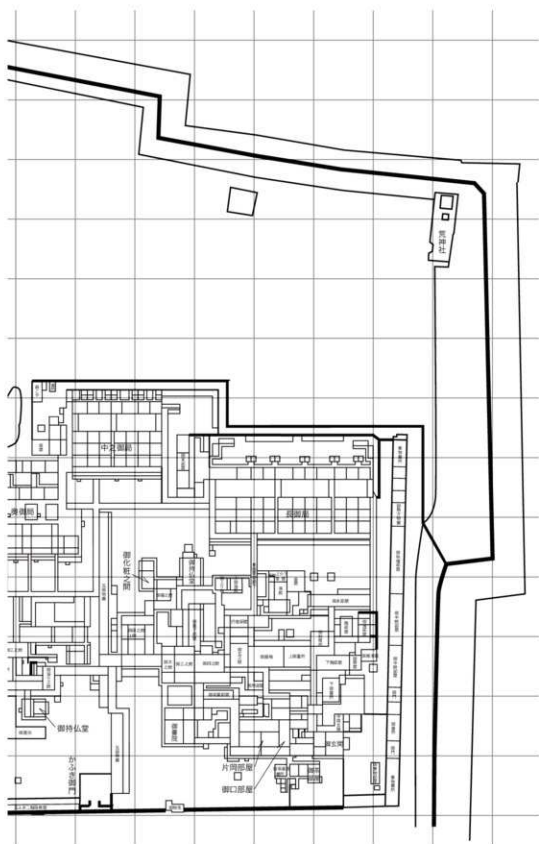
元禄15(1702)年、4代藩主吉通との婚礼のため九条輔実の娘輔子か江戸に下向するが、途中3月18日から25日にかけて名古屋を訪れ、御屋形に滞在した。正徳3(1713)年吉通が逝去し、落飾して瑞祥院と呼ばれた輔子は翌4(1714)年9月娘千姫とともに御屋形に入り、少なくとも享保8(1723)年まではここで暮らした可能性がある。また東の建物には宝永6(1709)年吉通の側室梅昌院が二之丸から移り、享保15(1730)年の逝去まで暮らしている。梅昌院の後には7代藩主宗春の生母宣揚院が享保16(1731)年に移り住んだが、元文5(1740)年4月には宗春の娘傳姫（頼姫）が8代藩主宗勝の養女となり、同年10月に「尾州へ御登、宣揚院様御殿に御同居」したとある。宣揚院は寛保3(1743)年に逝去するが、傳姫は近衛内前との婚礼のため上京する延享3(1746)年ごろまで、ここで過ごしたと考えられる（『尾張徳川家系譜』所収「御系譜」）。

5 御屋形の終焉

延享3年以降の御屋形がどのように利用されたか、文献から確認できることは少なくなる。「金城温古録」によると、東の建物は藩主が江戸へ参勤中、御城女中の飯居の局になったとき、この



第 208 図 御屋形の内部空間（『御屋形御絵図』をトレースして編集・改変したものである）



ことは名古屋市鶴舞中央図書館蔵「寛政前後 名古屋城三の丸図」で確認できる。なお建物は嘉永年中に「毀取」られた(『金城温古録』)。一方西側の建物では、享和2(1802)年松平治行の夫人聖聡院が「源明様、源白様御朝江御参詣被成度旨」(「御系譜」)として、文化元(1804)年に逝去するまで御屋形で過ごした。また文化5(1808)年、高須松平家松平勝富の娘維姫が近衛基前との婚礼のため京都に向かう途中、宿館として利用した。天保7(1836)年、近衛忠恕の妹福君が11代藩主齊温の夫人となるため江戸に向かう途中、御屋形を宿館として利用している。福君は天保10(1839)年齊温が逝去すると落飾して俊恭院と号し、翌11(1840)年に逝去するまで御屋形で過ごした。

天保14(1843)年12代藩主齊荘は御屋形をお供の江戸定府衆および御広敷付役人の詰所として利用した(『金城温古録』)。この時点で御屋形は藩主一族の居館、および宿館としての機能を失ったとみなすことができるが、同書の「御屋形曲輪 後」によると、御屋形を隠居所として使用した人物が居る。15代藩主茂徳である。彼は14代藩主慶勝の弟にあたり、慶勝が安政の大獄に連座して隠居した安政5(1858)年、藩主の座に就いた。しかし文久3(1863)年隠居して玄同を名乗り、御屋形へ移ったと考えられる。玄同は幕末の混乱した政局の中慶応2(1866)年一橋家を相続して御屋形を離れ、御屋形は空館となった。

明治4(1871)年廃藩置県により、16代藩主義宣をはじめ尾張徳川家の人々は名古屋を離れ、東京へ移り住んだ。翌5(1872)年東京鎮台第3分営が名古屋城に置かれ、御屋形をはじめ三の丸の武家屋敷は取り壊された(『新修名古屋市史』第5巻)。

6 まとめ

前節まで文献・絵図から御屋形の変遷をたどってきたが、御屋形の区画は両者の検討をまとめる、次のように変遷する(第209図)。

武家屋敷期(空間A) 1610年～1651年

東鉄門向屋敷成立以前の状況。名古屋開府当初は武家屋敷のほかには普請奉行の小屋場・御蔵が並んだ。その後小屋場・御蔵も武家屋敷として利用される。

東鉄門向屋敷期(空間B) 1651年～1675年

廣幡忠幸・京姫の屋敷(東向屋敷)および貞松院屋敷の普請に伴い、武家屋敷の移転が始まる。

御屋形Ⅰ期(空間C) 1675年～1684年

徳川綱誠の入国に伴って御屋形の称が始まり、区画も東側に拡張される。向屋敷の北側は既に利用される。残った武家屋敷も御春屋を除いて移転が進む。

御屋形Ⅱ期(空間D) 1684年～1693年

御春屋が御屋形南に移転し、御屋形の拡張が進む。

御屋形Ⅲ期(空間E) 1693年～1695年

御屋形・貞松院屋敷が一続きの区画となり、一体化。光友の隠居所として利用される。

御屋形Ⅳa期(空間F) 1695年～18世紀半ば

御屋形の機能が分化。瑞祥院が居住した時期を除き、御屋形の公的施設の性格が強まる。一方もと貞松院屋敷の部分は藩主の御室らが居住する。

御屋形Ⅳb期(空間F) 18世紀半ば～1872年

御屋形の機能が衰退する過程。貞松院屋敷の部分は嘉永年中(1850年前後)に取り壊され、御屋形も福君の逝去とともに事実上役割を終える。

ただし、時期区分については残された課題も多い。江戸中・後期（御屋形Ⅳa期、Ⅳb期）の御屋形については、『金城温古録』その他の文献でも記述が少ないため、特に18世紀後半の状況が明らかにできなかった。また今回の検討は御屋形の区画に重点を置いたため、御屋形Ⅲ期に成立した東御殿や御用地について十分検討を進めなかった点などが挙げられる。さらに城下絵図にはいくつかのバリエーションがあり、絵図が作成された目的を含め、検討の対象を三之丸全体に広げることがあるといえる。今後さらに検討を進めたいと思う。

最後になったが、蓬左文庫職員の下村信博氏には絵図の閲覧を含め、数多くの助言をいただいた。厚く感謝の意を表する次第である。（鶴飼雅弘）

参考文献

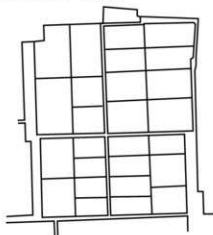
伊藤秀紀 1995 「三の丸に居住した人々」『名古屋城三の丸遺跡（Ⅴ）』愛知県埋蔵文化財センター

山本祐子 1993 「名古屋城下図の年代比定と編年について」『名古屋市博物館研究紀要』第17

巻

- 太田尚宏 2003 「尾張藩邸・御殿の概略・変遷に関する史料」『金城叢書 史学美術論集』第三十輯 徳川黎明会
- 林董一 1962 『尾張藩公法史の研究』日本学術振興会
- 濱島正士 1992 『設計図が語る古建築の世界 もうひとつの「建築史」』彰国社
- 『新修名古屋市史』第三巻 名古屋市 1999
- 『新修名古屋市史』第五巻 名古屋市 2000
- 『日本名城集成 名古屋城』小学館 1985
- 『蓬左文庫名古屋移管五十周年 尾張徳川家の絵図-大名がいただいた世界観-』名古屋市博物館 2000
- 『太陽コレクション 城下町古地図散歩2 名古屋・東海の城下町』平凡社 1995
- 『名古屋叢書続編 十六 金城温古録 四』名古屋市教育局
- 『名古屋叢書三編 一 尾張徳川家系譜』名古屋市教育局
- 『名古屋叢書三編 四 尾藩世記 上』名古屋市教育局

空間 A (1610~1651)



空間 B (1651~1675)



空間 C (1675~1684)



空間 D (1684~1693)



空間 E (1693~1695)



空間 F (1695~1872)



※文化14年以降は御屋形南の区画が再び武家屋敷となる

時期区分	空間	居住者		絵図	藩主
		御屋形	東御屋敷		
1651	武家屋敷期 A			貞松院 (1660~84)	義直
	東鉄門 向屋敷期 B	広幡幸丸 (忠平) (1651~63)	京姫 (晋孝院) (1651~73)		
1675	御屋形I期 C	出雲守義昌 (1664~66)			光友
1684	御屋形II期 D	徳川調誠 (1675~93)	既	万治年間 名古屋城下図 城	
1693	御屋形III期 E	光友隠居所 (1693~95)		三之丸絵図 蓬	綱誠
1695	御屋形IVa期 F	九条輔子宿館 (1702)	松寿院 (1693~1705) 柳昌院 (1707~30)	御屋形御絵図 蓬 名古屋城下図 鶴 名古屋城下図 德	
1700年代 半ば	御屋形IVb期	瑞祥院 (輔子, 1714~23?)	宣揚院 (1731~43) 傳姫 (60歳, 1740~46)	尾府名古屋図 蓬 名古屋城三之丸図 鶴 享保十四年名護屋絵図 園	吉通 五郎太 織友 宗春 宗勝 宗睦
		〔空白期〕		名古屋并熱田図 德 名古屋図 岩 名古屋城三之丸図 鶴 名古屋三之丸諸役所持場分図 鶴	
1800	御屋形IVb期	聖聡院 (1802~04) 維摩宿館 (1808) 福君宿館 (1836) 俊恭院 (80歳, 1839~40) 江戸定府衆御込敷役人詰所 徳川玄同 (玄玄, 1863~66)	二之丸女中在居 毀取 (嘉永年中)	名古屋并熱田図 德 名古屋図 岩 名古屋城三之丸図 鶴 名古屋三之丸諸役所持場分図 鶴 名古屋図 岩 尾府全図 鶴	斉朝 斉温 斉任 慶城 慶勝 茂栄 義直

※御屋形IVa、IVb期は機能の違いにより分けた

参照絵図一覧 (所蔵機関別)

徳川美術館 (徳)	正保4年 名古屋城下図 名古屋城下図 名古屋并熱田図 名古屋管理事務所 (城) 万治年間名古屋城下絵図 蓬左文庫 (蓬)	正保4年 元禄13年頃 寛延元年~宝暦13年 寛文7年~延宝元年	名古屋市鶴舞中央図書館 (鶴) 名古屋城下図 元禄 名古屋城三之丸図 名古屋城三之丸図 寛政前後 名古屋三之丸諸役所持場分図 尾府全図 西尾市岩瀬文庫 (岩)	元禄7年 享保元年~6年 寛政7年~9年 文政6年 明治元年~2年
	三之丸絵図 御屋形并東御殿御絵図 御屋形御絵図 尾府名古屋図	正徳4年	延宝名古屋屋敷図 名古屋図 名古屋図 愛知県図書館 (図)	延宝9年~元禄2年 天明6年~寛政6年 弘化2年 享保14年
			愛知県図書館 (図) 享保十四年名護屋絵図	享保14年

※絵図の年代は山本祐子「名古屋城下図の年代比定と編年について」
内藤昌ほか「日本名城集成 名古屋城」を参照した

第23表 三の丸御屋形居住者の変遷

第2節 名古屋城三の丸遺跡の土師器皿の変遷 (御屋形地点出土資料を中心に)

1 はじめに

今回の発掘調査では古墳時代から現代に至るまで連続と遺跡が継続していたことが判明している。ここでは、数多くある遺物のうち土師器製品について概観しその変遷を明らかにしたい。ここでは、まず土師器皿類の変遷を検討する。

2 ロク口調整土師器皿の分類

土師器皿類は大きくロク口調整土師器皿と非ロク口調整皿に区分できる。

このうち、ロク口調整皿は底部外面に回転糸切り痕が残存するもので、形状と規模から9類に大別され、それぞれについてさらに細区分が可能である。

ロク口調整皿A類：口径が11～14cmで口縁端部を外反させたものである。体部外面を2段にナデ調整を施し口縁端部が大きく外反するもので、今回の資料では細分できなかった。SK147ロク口調整皿1類などが該当する。

ロク口調整皿B類：口径が10～16cm前後で体部が逆ハ字状に開き口縁端部までおおよそ直線的になるものである。底部と体部との境界部の形状から3型式に細分できる。

ロク口調整皿B類第1型式：底部と体部との境界部内面がやや凹むものである。SK147ロク口調整皿2類などが該当する。

ロク口調整皿B類第2型式：底部と体部との境界部がやや緩やかに屈曲するものである。SD39ロク口調整皿などが該当する。

ロク口調整皿B類第3型式：底部と体部との境界部が屈曲し体部がやや短いものである。SK223ロク口調整皿などが該当する。

ロク口調整皿C類：口径が10～13cm前後で体部が逆ハ字状に開いて内彎するものである。細部の形状から3型式に細分できる。

ロク口調整皿C類第1型式：底部がやや突出し器壁が厚く、体部から口縁部にかけて緩やかに内彎するものである。SK185ロク口調整皿などが該当する。

ロク口調整皿C類第2型式：底部は突出せず器壁がやや薄く、体部から口縁部にかけて緩やかに内彎するものである。SK484ロク口調整皿2類などが該当する。

ロク口調整皿C類第3型式：底部と体部との境界部が屈曲し、体部から口縁部にかけてわずかに内彎するものである。SK163ロク口調整皿1類などが該当する。

ロク口調整皿D類：口径が7～8cm前後の小型皿を一括してD類とする。体部から口縁部の形状から2型式に細分できる。しかし、本来はもう少し多くの型式が存在したと推測されるが、実際には資料的な制約のため確認できなかった。

ロク口調整皿D類第1型式：口縁部が外反するものである。SK147ロク口調整皿4類などが該当する。

ロク口調整皿D類第2型式：口縁部がやや内彎するものである。SK163ロク口調整皿3類などが該当する。

ロク口調整皿E類：口径が11～13cm前後で体部が逆ハ字状に直線的に開き口縁部が外折するものである。細部の形状から2型式に細分できる。

ロク口調整皿E類第1型式：外折した口縁部がやや長くわずかに受け口状になるものである。SK484ロク口調整皿1類などが該当する。

ロク口調整皿E類第2型式：外折した口縁部

が短いものである。SK163 ロクロ調整皿 5 類などが該当する。

ロクロ調整皿 F 類：ロクロ調整皿 F 類から 1 類までは体部が逆八字状に直線的に開き口縁部に向けて緩やかに内彎するもので、橙色を呈する胎土を持つものである。このうち口径が 15～18cm の規模を持つ大型サイズのものをロクロ調整皿 F 類とする。この F 類は G 類から I 類までと比べて器高が高い傾向がある。口径と口縁部などの細部の形状から 4 型式に細分できる。

ロクロ調整皿 F 類第 1 型式：口径が 17.5cm 前後の規模を持つもので、口縁部はやや内彎ぎみに尖るものである。SK60 ロクロ調整皿の大型タイプなどが該当する。

ロクロ調整皿 F 類第 2 型式：口径が 17.2cm 前後の規模を持つもので、口縁部は直線的に尖るものである。SK94 ロクロ調整皿 1 類などが該当する。

ロクロ調整皿 F 類第 3 型式：口径が 15.8cm 前後の規模を持つもので、口縁部が尖らず面を持つものである。SK01 ロクロ調整皿の大型タイプなどが該当する。前二者に比べると横ナデ調整が雑で粘土組織み上げ痕跡も認められるほどである。

ロクロ調整皿 F 類第 4 型式：口径が 12.2cm 前後となるもので、ロクロ調整皿 F 類の定義には該当しないが、型式学的な変遷を考慮してこの類に含めて分類しておきたい。口縁部は尖り器高がやや高いものである。SK23 ロクロ調整皿などが該当する。

ロクロ調整皿 G 類：体部が逆八字状に直線的に開き口縁部に向けて緩やかに内彎する橙色を呈する胎土を持つもののうち、口径が 11～14cm 前後の規模を持つ中型サイズのものである。細部の形状から 4 型式に細分できる。

ロクロ調整皿 G 類第 1 型式：口径が 13.8cm 前後の規模を持つもので、口縁部がやや尖るも

のである。SK60 ロクロ調整皿の中型タイプなどが該当する。

ロクロ調整皿 G 類第 2 型式：口径が 12.6cm 前後の規模を持つもので、口縁部はやや尖り器高がやや低いものである。SK94 ロクロ調整皿 2 類などが該当する。

ロクロ調整皿 G 類第 3 型式：口径が 11.5cm 前後の規模を持つもので、口縁部が尖らないものである。SK01 ロクロ調整皿の小型タイプなどが該当する。

ロクロ調整皿 G 類第 4 型式：口径が 11.0cm 前後の規模を持つもので、口縁部が尖らないものである。SK23 ロクロ調整皿などが該当する。

ロクロ調整皿 H 類：体部が逆八字状に直線的に開き口縁部に向けて緩やかに内彎する橙色を呈する胎土を持つもののうち、口径が 10～12cm 前後の規模を持つ小型サイズのものである。細部の形状から 2 型式に細分できる。

ロクロ調整皿 H 類第 1 型式：口径が 12.0cm 前後の規模を持つもので、口縁部がやや尖るものである。SK60 ロクロ調整皿の小型タイプなどが該当する。

ロクロ調整皿 H 類第 2 型式：口径が 10.8cm 前後の規模を持つもので、口縁部はやや尖るものである。SK94 ロクロ調整皿 3 類などが該当する。

ロクロ調整皿 I 類：体部が逆八字状に直線的に開き口縁部に向けて緩やかに内彎する橙色を呈する胎土を持つもののうち、口径が 6～10cm 前後の規模を持つ小型サイズのものを一括する。今回の調査では SK94 出土資料のみが確認された。

ロクロ調整皿は上記の 9 類に大別されたが、このうち A 類から E 類までは胎土がにぶい黄橙色を呈するもの、F 類から I 類までは橙色を呈するものである。

3 非ロクロ調整皿の分類

次に、非ロクロ調整皿を分類する。非ロクロ調整皿は底部外面に回転系切り痕が残存しない手づくね成形のもので、形状と規模から6類に大別され、それぞれについてさらに細区分が可能である。

非ロクロ調整皿A類：口径が12～14cmを測り、体部が直立ぎみに立ち上がり、口縁端部がやや内彎するものである。底部が残存する良好な資料は存在しないが、白色の均質な胎土が特色となっている。口径と細部の形状から2型式に細分できる。

非ロクロ調整皿A類第1型式：口径が13.4cm前後を測り、口縁端部がやや尖るものである。SK557非ロクロ調整皿などが該当する。

非ロクロ調整皿A類第2型式：口径が12.8cm前後を測り、口縁端部に面を持つものである。遺構から良好な状態で出土した資料は存在しない。

非ロクロ調整皿B類：口径が10～11cm前後で体部から口縁部にかけて2段にナデ調整が施されたものである。口縁部の形状から2型式に細分できる。

非ロクロ調整皿B類第1型式：口径が10.8cm前後を測り、口縁端部がやや肥厚し外折するものである。SK226非ロクロ調整皿が該当する。

非ロクロ調整皿B類第2型式：口径が10.0cm前後を測り、口縁端部があまり外折しないものである。遺構から良好な状態で出土した資料は存在しない。

非ロクロ調整皿C類：口径が5～9cm前後を測り、体部から口縁部にかけて1段にナデ調整が施されたものである。細部の形状から4型式に細分できる。

非ロクロ調整皿C類第1型式：口径が8.8cm前後を測り、口縁部が逆ハ字状にやや長く開くものである。遺構から良好な状態で出土した資料は存在しない。

非ロクロ調整皿C類第2型式：口径が7.8cm

前後を測り、口縁部は逆ハ字状に開くがその長さが短いものである。SD35非ロクロ調整皿の一部などが該当する。

非ロクロ調整皿C類第3型式：口径が6.0～7.3cm前後を測り、口縁部は横ナデ調整により短く直立ぎみに立ち上がるものである。SK147非ロクロ調整皿1類が該当する。

非ロクロ調整皿C類第4型式：口径が5.4cm前後を測り、口縁部が横ナデ調整により短く直立ぎみに立ち上がるが、横ナデ調整は弱く底部と体部の境界部は不明瞭なものである。SD35非ロクロ調整皿などが該当する。

非ロクロ調整皿D類：口径が3.5～10cm前後を測り、体部から口縁部にかけてナデ調整が全く施されないものである。外面には指頭圧痕や掌圧痕などが残存するのみで、底部と口縁部の境界は不明瞭となっている。細部の形状から4型式に細分できる。

非ロクロ調整皿D類第1型式：口径が9～10cmを測る大きなもので、口縁部が逆ハ字状にやや長く開くものである。底部と体部の境界を認識することができるものである。SD35非ロクロ調整皿の一部(836・837)などが該当する。

非ロクロ調整皿D類第2型式：口径が6.8～7.6cmを測り、口縁部は逆ハ字状に開くものである。底部は丸底となっている。SK147非ロクロ調整皿2類が該当する。

非ロクロ調整皿D類第3型式：口径が4.0cm前後を測り、体部をほとんど形成しないものである。中央部がわずかに窪み皿の形状を作り出している。SD14非ロクロ調整皿などが該当する。

非ロクロ調整皿D類第4型式：口径が3.8cm前後を測り、体部をほとんど形成せず、中央部もほとんど窪まない平坦な円盤状のものである。SD12非ロクロ調整皿などが該当する。

非ロクロ調整皿E類：口径が11.6cmを測り、内型成形で丁寧に製作されたものである。内面に

「寿」が陽刻されており、SK94 出土資料でのみ確認された。

非ロクロ調整皿は上記の5類に大別されたが、このうちA類とE類は胎土が灰白色を呈するもの、B類からD類までは胎土がぶい黄橙色を呈するものである。

4 土師器皿の変遷

上記のように、ロクロ調整皿と非ロクロ調整皿を14類に大別し、それぞれに型式区分を試みた。各々の型式区分は、法量の小規模化や形状のシャープさが無くなるなどの傾向を考慮すると、概ね第1型式から第2型式、第3型式へと順に変化していくものと想定される。これを遺構からそれぞれの型式が共存して出土する事例を集めて順に配列し、同じく共存して出土するその他の陶磁器類を参考にして検討した結果、以下の3期12段階に変遷をまとめることができた(第210図)。

その概要を記すと、1期は非ロクロ調整皿のみで構成される段階、2期はロクロ調整皿と非ロクロ調整皿の両方で構成される段階、3期は非ロクロ調整皿がわずかに存在するが基本的にはロクロ調整皿のみで構成される段階とまとめることができる。特に2期から3期への変遷においては、土師器皿の胎土がぶい黄橙色を呈するものから橙色を呈するものへ変化するという、見た目の大きな相違を見出すことができる。以下、各段階の詳細を説明していく。

1期1段階：非ロクロ調整皿A類第1型式と非ロクロ調整皿B類第1型式が伴う段階。ただし、実際に共存して出土した事例は無いので時期は相前後する可能性は捨てきれない。SK226・SK557 出土資料などを基準とする。山茶碗第7・8型式が共存する。

1期2段階：非ロクロ調整皿A類第2型式・非ロクロ調整皿B類第2型式・非ロクロ調整皿

C類第1型式が伴う段階。これらは遺構に伴う良好な資料は存在しないので、詳細な様相は不明である。1期1段階と1期3段階の間を埋める時期として設定しておきたい。このため、山茶碗第9～11型式が共存する段階と推測しておく。

1期3段階：非ロクロ調整皿A類とB類は認められず、非ロクロ調整皿C類第2型式と非ロクロ調整皿D類第1型式が伴う段階。SD35 出土資料などを基準とする。瀬戸窯産陶器古瀬戸後IV期古段階が共存する。

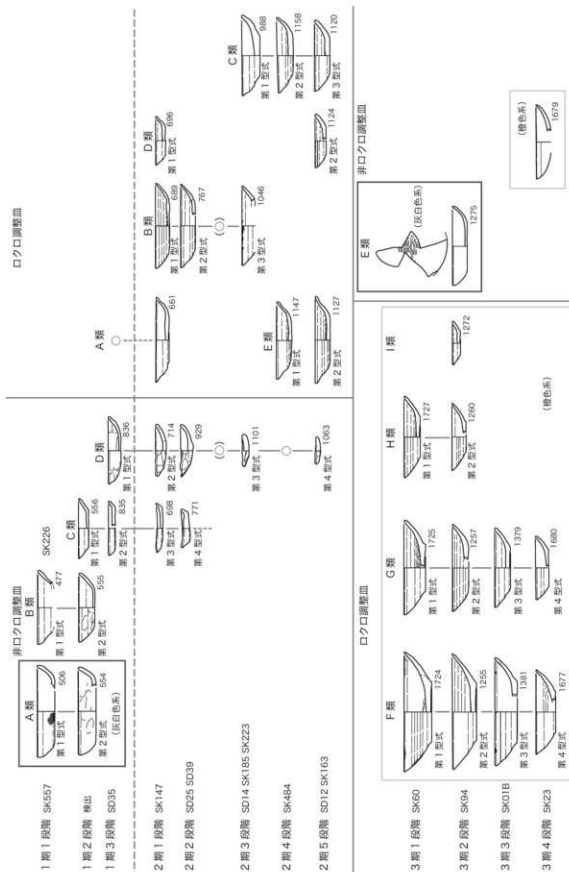
2期1段階：ロクロ調整皿A類第1型式・ロクロ調整皿B類第1型式・ロクロ調整皿D類第1型式、非ロクロ調整皿C類第3型式・非ロクロ調整皿D類第2型式が伴う段階。数量的にはロクロ調整皿A類と非ロクロ調整皿C類と非ロクロ調整皿D類が多い。SK147 出土資料などを基準とする。瀬戸美濃窯産陶器古瀬戸後IV期新段階と大窯第1段階が共存する。

2期2段階：(ロクロ調整皿A類第1型式・)ロクロ調整皿B類第2型式、非ロクロ調整皿C類第4型式(・非ロクロ調整皿D類第2型式)が伴う段階。SD25やSD39 出土資料などを基準とする。瀬戸美濃窯産陶器大窯第2段階が共存する。

2期3段階：非ロクロ調整皿D類第3型式とロクロ調整皿B類第3型式・ロクロ調整皿C類第1型式が伴う段階。SK223・SK185・SD14 出土資料などを基準とする。瀬戸美濃窯産陶器登窯第1・2小期が共存する。

2期4段階：(非ロクロ調整皿D類第3型式・)ロクロ調整皿C類第2型式・(ロクロ調整皿B類第3型式・)ロクロ調整皿E類第1型式が伴う段階。SK484 出土資料などを基準とする。古寛永通宝が共存する。

2期5段階：非ロクロ調整皿D類第4型式とロクロ調整皿C類第3型式・ロクロ調整皿D類第2型式が伴う段階。SK163・SD12 出土資料な



第210図 名古屋城三の丸遺跡(御園形地点)の土師器皿の変遷

などを基準とする。瀬戸美濃窯産陶器登窯第4小期が共伴する。

3期1段階：ロクロ調整皿F類～H類の各第1型式が伴う段階。SK60出土資料などを基準とする。瀬戸美濃窯産陶器登窯第6小期が共伴する。

3期2段階：ロクロ調整皿F類～H類の各第2型式・ロクロ調整皿I類と非ロクロ調整皿E類が伴う段階。SK94出土資料などを基準とする。瀬戸美濃窯産陶器登窯第8小期が共伴するが、土師器皿はもう少し前の段階に属する可能性もある。

3期3段階：ロクロ調整皿F類・G類の各第3型式が伴う段階。SK01B出土資料などを基準とする。瀬戸美濃窯産陶器登窯第8小期が共伴する。

3期4段階：ロクロ調整皿F類・G類の各第4型式が伴う段階。SK23出土資料などを基準とする。瀬戸美濃窯産陶器登窯第9小期が共伴する。

以上3期12段階に区分したが、これらは必ず連続的に変遷が追えるものではないことを念頭に置く必要があるだろう。前述したように1期2段階の様相は資料的な制約のため詳らかにできない。また2期2段階と2期3段階の間には、土師器皿の形状の変遷から見ても共伴資料の編年表的検討からみても、資料的な空白が存在する可能性がある。

これらを勘案した上で、その他の共伴する陶磁器の年代観を用いて年代を比定すると、以下のように想定できる。また、遺構の時期区分との対応関係は以下のとおりである。

土師器皿	遺構	年代
1期1段階	B-1期	13世紀後葉
1期2段階	B-2期	14世紀～15世紀中葉
1期3段階	B-3期	15世紀後葉
2期1段階	B-4期前	16世紀第1四半期
2期2段階	B-4期後	16世紀第2四半期
2期3段階	C-1期	17世紀前半
2期4段階	C-2期前	17世紀第3四半期

2期5段階	C-2期後	17世紀第4四半期
3期1段階	C-3期前	18世紀前葉
3期2段階	C-3期中	18世紀中葉
3期3段階	C-3期後	18世紀後葉
3期4段階	C-4期	19世紀前葉

5 土師器皿にみる画期の意義

以上の分析の結果、土師器皿の変遷には15世紀末と17世紀末の2つの大きな画期が存在することが明らかとなった。これらの画期の意義について次に考察したい。

まず、前者の15世紀末の画期について検討したい。この画期は非ロクロ調整皿のみで構成される1期からロクロ調整皿が加わる2期への変化といえる。今回の調査資料の中ではSD35出土資料を基準とする段階までがロクロ調整皿が認められないことから、この時期を1期とした。しかし、SD35出土資料を基準とする段階を1期に含めて1期3段階に位置づけることについては若干の問題が存在していることも指摘しておかなければならないだろう。

問題は2点に要約される。まず、第一はSD35出土資料の土師器皿出土量が少ないことから、正しく1期3段階の様相を示した一括資料と認定できるかという問題である。偶然にロクロ調整皿の存在が欠落した可能性が捨てきれないことである。第二は非ロクロ調整皿の組成と形状が1期2段階よりも2期1段階に近似していることである。1期3段階と2期1段階はともに非ロクロ調整皿はC類とD類で構成されており、型式学的な形状の変化は認められるものの組成は近似する。加えて尾張平野の土師器皿編年(佐藤1986)やこれまでの名古屋城三の丸遺跡における土師器皿の変遷の分析結果(尾野1997)から見ると、ロクロ調整皿の出現は15世紀後半に位置づけられているという成果が得られている。これらのことから、名古屋城三の丸遺跡全体で見た

場合、ロクロ調整皿が出現する1期から2期への画期は15世紀中頃に位置づけられ、今回の調査における1期2段階と1期3段階の間に設定すべきであろう。ただし、ここではこうした事情を承知した上で、出土資料に忠実に検討した結果を提示しておくこととしたい。

さて、土師器皿における15世紀末(全体としては15世紀中頃)の画期は、既に多くの研究者によって検討が進められ、京都系土師器の影響を受けた第二波であると位置づけられている。この説を覆す新たな資料や情報はなく、この見解を今回も引き継いで行きたい。

次に、後者の17世紀末の画期について検討したい。これは、ロクロ調整皿と非ロクロ調整皿の両者で構成される2期から、非ロクロ調整皿が激減し基本的にはロクロ調整皿のみで構成される3期へと変化する画期である。この画期は15世紀末の画期よりも大きな断絶が認められる画期であった。15世紀末の画期と17世紀末の画期との間で異なる点は次の2点である。

その第一は、3期の土師器皿に2期から継続する形式が存在しないことである。ロクロ調整皿のみならず、わずかに存在する非ロクロ調整皿も2期の皿とは全く異なる形状のものが存在するのである。第二は、胎土が2期と3期の両者で大きく異なる点である。大部分の土師器皿の胎土がにぶい黄褐色を呈する2期から、大部分の土師器皿が橙色を呈する3期への変化は、使用者の見た目において大きな相違として認識されたに相違ないと思われる。

この画期の意義を考えるためには、新たに出現した土師器皿の出自を検討することが重要であると思われる。3期に突然出現したロクロ調整皿F類～I類は旧来存在した土師器皿とは大きく相違し、体部から口縁部にかけて直線的に比較的長かつ高く伸び、胎土が橙色を呈するものである。この種の土師器皿に類似したものを近隣の地域

で17世紀以前に認められるのは、西三河の中世段階のロクロ調整皿がある。体部から口縁部にかけて直線的に比較的長かつ高く伸びる形状は比較的近似するが、胎土は橙色となっていない点が異なる。むしろ、江戸遺跡群で出土するロクロ調整皿が卵形状と胎土の色調とも近似しているといえる。(江戸陶磁土器研究グループ1992,1996など)江戸時代の土師器皿を通して検討していない現在において即断をするのは非常に危険ではあると考えられるが、ここでは江戸遺跡群で出土する土師器皿の影響を受けて、名古屋城三の丸遺跡(御屋形地域)でロクロ調整皿F類～I類が出現したものと理解しておきたい。

もしこの想定が正鵠を射ているのであれば、3期の画期は江戸系土師器皿を受容した結果成立した土器様相と評価することができる。これは2つの意味で重要な意義を持つと考えられる。一つは、尾張地域において中世前期と後期の2回にわたり大きく影響を受けたといわれる京都系土師器皿の系譜を絶ち、新たに江戸系土師器皿を受容したという、モデルの源泉の大きな変換を認めることである。土師器皿という文化の中でのわずかな一局面で、その規範が京都から江戸へ転換していることであり、この中において京都的な文化を脱して新たな武家文化の一端相を確立したものと評価することもできるのである。そしてもう一つは、そのような大きな変革が名古屋(名古屋城三の丸遺跡)においては17世紀初頭に成立するのではなく、17世紀末にならないと成立しないことである。江戸幕府が開府して約100年を経ないと京都の影響を脱し得ないことは注目に値することであろう。

以上、名古屋の土師器皿の理解について、極めて重要な問題を提起したが、他の調査地点の成果を未だ十分に咀嚼していない段階での仮説にしか過ぎないことを最後に断っておきたい。

6 土師器皿にみる地域性

先に今回出土した土師器皿をロクロ調整皿と非ロクロ調整皿を14類に大別し、それぞれに型式区分を試み変遷を3期12段階に整理した。ここでは、このうち2期の土師器について、同時期の尾張地域の遺跡と比較し、その分布状況を検討する。その結果、尾張地域において土師器皿の様相が異なるいくつかのエリアを設定することができ、土師器皿の研究はこうした細かい地域ごとに検討していくことが必要であることを検証していきたい。

まず、今回の調査で出土した土師器皿の分類を用いて、これと近似する土師器皿が他の遺跡でどのように出土しているかを検討する。

ロクロ調整皿A類は体部外面を2段にナデ調整を施し口縁端部が大きく外反するものである。このタイプは清須城下町で出土事例がある他に、名古屋台地に分布する遺跡で認められるケースが多い。主に15世紀後半から16世紀前半までに属する遺構や遺跡から大量出土する事例が多い。

ロクロ調整皿B類は体部が逆八字状に開き口縁端部までおおよそ直線的になるものである。このタイプは清須城下町や岩倉城など尾張平野部でまとめて出土する事例が多い。一方、このタイプの土師器皿は今回の調査でも少数しか出土しておらず、名古屋台地に分布する遺跡ではあまり認められないものである。

ロクロ調整皿C類は体部から口縁部にかけて内彎するものである。このタイプは清須城下町で出土事例がある他に、名古屋台地に分布する遺跡で認められるケースが多い。主に16世紀後半から17世紀前半までに属する遺構や遺跡から大量出土する事例が多い。

ロクロ調整皿D類は小型皿を一括しており、本来的には体部や口縁部の形状から細分して検討する必要がある。資料的な制約もあるため、ここでは分析の対象としないこととした。

ロクロ調整皿E類は体部が逆八字状に直線的に開き口縁部が外折するものである。このタイプは清須城下町など尾張平野部でまとめて出土する事例が多い。一方、名古屋台地に分布する遺跡でもそれなりに認められるものである。主に16世紀後半から17世紀前半までに属する遺構や遺跡から大量出土する事例が多い。

非ロクロ調整皿C類は体部から口縁部にかけて1段にナデ調整が施されたものである。このタイプは清須城下町など尾張平野部でまとめて出土する事例が多い。一方、名古屋台地に分布する遺跡でもそれなりに認められるものである。主に15世紀後半から16世紀中葉までに属する遺構や遺跡から出土する事例が多い。

非ロクロ調整皿D類は体部から口縁部にかけてナデ調整が全く施されないものである。このタイプは15世紀後半から16世紀中葉までは清須城下町など尾張平野部で出土する事例が存在しない。むしろ、名古屋台地や知多半島に所在する遺跡で主体的に認められる土師器皿である。その後、16世紀後葉になると清須城下町など尾張平野部を含めた尾張の広い範囲で出土する事例が多くなる。

以上の結果を、次は地域ごとに整理すると次のようになる。なお、ここで提示する土師器皿はそれぞれの地域で主体となる形状を抽出したものであり、少量しか出土しないものは除外していることを断っておく(第211図)。

知多：非ロクロ調整皿D類が主体となる。

名古屋台地：ロクロ調整皿A類と非ロクロ調整皿D類が主体となる。非ロクロ調整皿C類も認められ、16世紀後半からはロクロ調整皿A類が減少しロクロ調整皿C類が出現する。

尾張平野北部：ロクロ調整皿B類・非ロクロ調整皿C類などが主体となる。16世紀後半からはロクロ調整皿B類が減少しロクロ調整皿E類が出現する。

清須：ロクロ調整皿 A 類・ロクロ調整皿 B 類・非ロクロ調整皿 C 類が主体となる。16 世紀後半からはロクロ調整皿 A 類・ロクロ調整皿 B 類が減少しロクロ調整皿 C 類・ロクロ調整皿 E 類非ロクロ調整皿 D 類が出現する。ただし、ロクロ調整皿 A 類とロクロ調整皿 B 類は共伴する事例もあるが、遺構によってはいずれかのみが偏在して出土するケースが多い。

このように、尾張地域において土師器皿の様相が異なるいくつかのエリアを設定し得る可能性を指摘することができた。今回は各地域の範囲の特定と、各地域ごとの編年作成を行うことができず、非常に中途半端な状態となってしまったが、土師器皿の研究はこうした細かい地域ごとに検討していくことが必要であることを強調しておきたい。

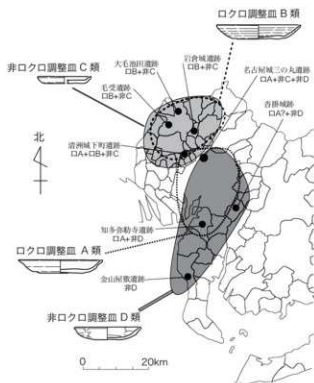
7 まとめ

今回出土した土師器皿を素材に 14 類に分類し 3 期 12 段階に変遷を把握して、そこから派生する諸問題を若干考察した。しかし、分析の素材はあくまで今回の調査地点のデータを基準にしたものであり、周辺の資料やデータを十分に見渡した検討ではない点が最大の問題となっている。ここで導かれた論点を批判的に検討した上で大方のご叱正とご教示を賜りたく思う。

江戸陶磁土器研究グループ 1992・1996 『シンポジウム江戸出土陶磁器・土器の諸問題 1・II』

尾野善裕 1997 「中世食器の地域性—4 東海・濃飛—」『中世食文化の基礎的研究』国立歴史民俗博物館研究報告書 第 71 集

佐藤公保 1986, 1987 「中世土師器研究ノート (1)・(2)」『年報昭和 60・61 年度』(財)愛知埋蔵文化財センター
名古屋教育委員会 1995 『名古屋城三の丸遺跡 第 4・5 次発掘調査—遺物編—』



第 211 図 尾張における戦国時代の土師器皿の地域性
15 世紀後葉から 16 世紀前葉の主要な土師器皿の分布範囲をイメージとしてまとめた。

第3節 名古屋城三の丸遺跡の土師器鍋類の変遷 (御屋形地点出土資料を中心に)

1 はじめに

今回の発掘調査では古墳時代から現代に至るまで連続と遺跡が継続していたことが判明している。先の考察で土師器皿を検討したので、次は土師器鍋類（ここでは甕や釜などを含む煮炊具全般を指す）の変遷を検討する。

本来は土師器皿と同様に初めに分類を行いそれから段階区分などの検討を実施するのが順当な分析方法であるが、ここでは、説明の煩雑さ避けるためにあえて結果のみを提示していくこととしたい。

2 土師器鍋類の変遷

今回の調査で出土した土師器の鍋類は、以下の4期17段階に変遷をまとめることができる。

その概要を記すと、1期は口縁部が屈曲する土師器甕のみで構成される段階、2期は鈎を持つ羽釜などで構成される段階、3期は鉢形の内耳鍋などで構成される段階、4期は浅鉢の焙烙が主体となって構成される段階とまとめることができる。以下、各段階の詳細を説明していく（第212図）。

1期1段階：S字状口縁台付甕D類（204）が伴う段階。遺構に伴う良好な資料は存在しない。

1期2段階：宇田型甕（207）が伴う段階。遺構に伴う良好な資料は存在しない。

1期3段階：口縁部に跳ね上げ口縁を持つ甕（183）が伴う段階。SK339出土資料などを基準とする。東山11号窯式期前後の須恵器が共存する。

1期4段階：口縁部が緩やかに屈曲し体部外面に荒いハケ調整が施される甕（178）が伴う段階。SB06出土資料などを基準とする。東山61号窯式期の須恵器が共存する。

1期5段階：口縁部が緩やかに屈曲する甕（56）の他に、口縁端部が断面三角形形状に摘み上げる伊勢系甕（54）などが伴う段階。SK308出土資料などを基準とする。東山44号窯式期前後の須恵器が共存する。

1期6段階：伊勢系甕（114）の他に、口縁部が肥厚する濃尾系甕（115）や口縁部が屈曲して外折する甕（117）などが伴う段階。SB07出土資料などを基準とする。岩崎17号窯式期前後の須恵器が共存する。

1期7段階：体部外面に荒いハケ調整が施された濃尾系甕（193）の他に、口縁部が鋭角に折れる三河系甕（195）などが伴う段階。SK589・SB02出土資料などを基準とする。折戸10号窯式期前後の須恵器が共存する。

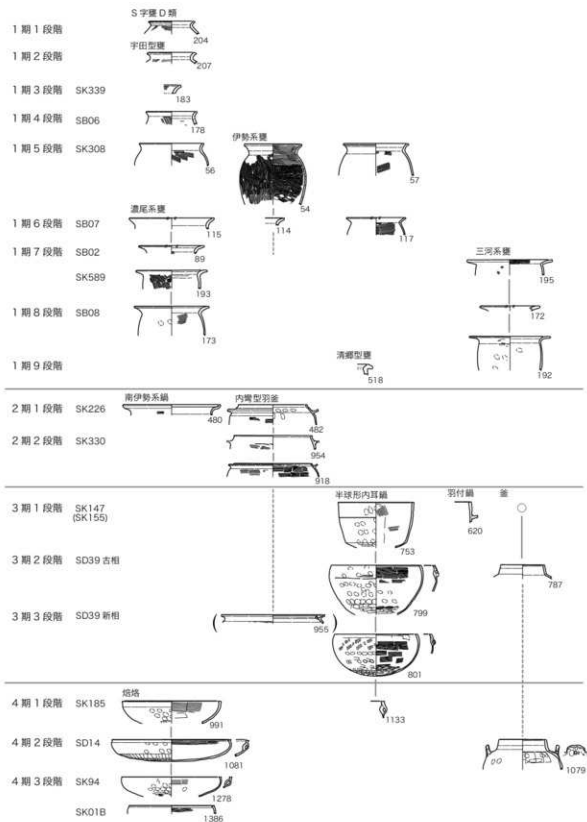
1期8段階：口縁部が屈曲し緩やかに外反する甕（173）などが伴う段階。前代の濃尾系甕の変化したものと推測したい。SB08出土資料などを基準とする。黒笹90号窯式期前後の灰釉陶器などが共存する。

1期9段階：口縁部が厚くて短く屈曲する清郷型甕（518）が伴う段階。遺構に伴う良好な資料は存在しない。

2期1段階：口縁端部を内側に折り返した南伊勢系鍋（480）と口縁部が内傾する内甕型羽釜（482）が伴う段階。内甕型羽釜は鈎の端部径と胴部最大径がほぼ同じとなるものである（北村羽釜A2類）。SK226出土資料などを基準とする。山茶碗第7・8型式が共存する。

2期2段階：内甕型羽釜が伴う段階。内甕型羽釜は短く上方に突出した鈎が付くものである（918：北村羽釜A4類）。SK330出土資料などを基準とする。瀬戸美濃窯産陶器古瀬戸後IV期が共

名古屋城三の丸遺跡 VII



第212図 名古屋城三の丸遺跡（御屋形地点）の土師器銅類の変遷

伴する。

3期1段階：半球形内耳鍋(753)と戦国型羽付鍋(620)と釜(787)が伴う段階。半球形内耳鍋は体部から口縁部が直立気味に直線的に立ち上がるものである(鈴木尾張内耳鍋A類)。SK147出土資料などを基準とする。瀬戸美濃窯産陶器大窯第1段階が伴する。

3期2段階：前代と同様、半球形内耳鍋と戦国型羽付鍋と釜が伴う段階。半球形内耳鍋は体部から口縁部が内彎して丸みを帯びるもので、口縁部直下に沈線を持つものである(799：鈴木尾張内耳鍋B1類)。SD39出土資料古段階などを基準とする。瀬戸美濃窯産陶器大窯第2段階が伴する。

3期3段階：前代と同様、半球形内耳鍋と戦国型羽付鍋と釜が伴う段階。半球形内耳鍋は体部から口縁部がさらに内彎して浅くなり、口縁部直下に沈線を持たないものである(801：鈴木尾張内耳鍋B2類)。SD39出土資料新段階などを基準とする。瀬戸美濃窯産陶器大窯第2段階が伴する。

4期1段階：焙烙と釜が伴う段階。半球形内耳鍋(1133)も残存している。焙烙は口縁部が逆ハ字状に開くもの(991：金子分類B類)である。SK185出土資料などを基準とする。瀬戸美濃窯産陶器登窯第2小期が伴する。

4期2段階：前代と同様、焙烙と釜が伴う段階。焙烙は口縁部が緩やかに屈曲し内傾するもの(1081：金子分類J類?)である。SD14出土資料などを基準とする。瀬戸美濃窯産陶器登窯第4小期が伴する。

4期3段階：焙烙が伴う段階。おそらく釜は著しく減少するか消滅するものと推測される。焙烙は口縁部が緩やかに屈曲するタイプ(1278・1386)であるが、形態的な変化はこの資料では不明点が多い。SK94・SK01出土資料などを基準とする。瀬戸美濃窯産陶器登窯第8小期が

伴する。

3 各段階の年代と遺構時期区分との対応関係

以上4期17段階に区分したが、これらは土師器皿と同様に、必ずしも連続的に変遷が追えるものではないことを念頭に置く必要があるだろう。1期8段階から2期1段階にはかなり時間的な空白が存在しており、その他の段階でも連続的な土器様相の変化を辿ることができない部分は随所で認められる。もとより資料的な制約のため完全な形で構成できないことを承知していただきたい。その上で、その他の伴する陶磁器の年代観を用いて年代を比定すると、以下のように想定できる。また、遺構の時期区分との対応関係は以下のとおりである。

土師器鍋類 : 遺構 : 年代

1期1段階：A期以前：4世紀後葉?

1期2段階：A期以前：5世紀前半?

1期3段階：A-1期 : 5世紀後半?

1期4段階：A-2期 : 6世紀前半

1期5段階：A-3期 : 7世紀

1期6段階：A-4期前：8世紀前葉

1期7段階：A-4期後：8世紀後半

1期8段階：A-5期 : 9世紀

1期9段階 : : 10世紀

2期1段階：B-1期 : 13世紀中葉

2期2段階：B-2期 : 15世紀前半

3期1段階：B-3期前：15世紀後葉

3期2段階：B-3期後：16世紀前葉

3期3段階：B-4期 : 16世紀中葉

4期1段階：C-1期 : 17世紀前半

4期2段階：C-2期 : 17世紀後半

4期3段階：C-3期 : 18世紀

4 まとめ

以上のように、土師器鍋類の変遷を概観した。この結果、13世紀代が一部判明するものの10

世紀から 15 世紀の間、および 19 世紀以降で土師器鍋類の様相が今ひとつ判然としない状況が読み取れる。

19 世紀以降については、陶器鍋の存在が大きくなることや鉄鍋との関係などから土師器鍋類が減少する理由を提示することは可能である。一方、10 世紀から 15 世紀の間の空白は、特に 10 世紀から 13 世紀の間においては他の種類の遺物もほとんど認めることができないことからみて、遺跡の空白期が存在したものとしてみてもよいと思われる。これに対し、良好な資料が認められる 13 世紀中頃から 15 世紀前半までの空白については、なお検討を要する。空白期に該当する内鬘型羽釜が良好な状態ではないとは言え少なからず存在するからである。これまで名古屋台地では、東濃

型山茶碗が流通しない地域であることが災いして 13 世紀中頃から 15 世紀前半までの集落遺跡の存在が認められにくい状態が続いていた。今回の調査でも同様の結果が得られることとなったが、認められにくいからといって集落が存在しなかったと即断することは危険であると考えたい。おそらくわずかに出土する内鬘型羽釜や東濃型山茶碗や瀬戸窯産陶器古瀬戸段階などの資料からみて、13 世紀中頃から 15 世紀前半に集落としての断絶が存在したと決めつけるわけにはいかないと思われる。

主要参考文献

東海考古学フォーラム 1996 『瀬と奥—そのデザイン—』

第4節 御屋形庭園の意義

1 はじめに

今回の調査で18世紀に位置づけられる庭園に伴う池SX02が発見された。名古屋城三の丸遺跡ではこれまでに20箇所前後の発掘調査が行われてきたが、今回の事例が初めての資料となった。ここでは、名古屋城およびその城下や関連する地域における庭園も合わせて検討し、今回発見された御屋形庭園の位置づけと発見の意義を明らかにしていきたい。

2 御屋形庭園の復元

庭園に伴う池SX02は、少なくとも19世紀には廃絶・埋没したものであり、発見された時点では遺構は主要な石材や構築物および植生は全く遺存しない状態であった。また、この庭園に関連する文献や絵図は全く残存しておらず（つまり今回存在が初めて明らかになった庭園遺構である）、庭園の全貌を明らかにすることは難しい。しかし、全く手がかりが無いわけではなく、少ない資料を基に大胆に景観の復元を試みたい。

(1) 池SX02の復元

まず、池SX02そのものの復元について検討を加える。池SX02の検出状態は、主要な石材が抜き取られており、その痕跡が抜き取り穴という土坑の状態に残存するに過ぎないものである。しかし、一部で石材や漆喰壁と玉石などが良好な状態で残存する部分もあり、また石材の抜き取り穴についてもその分布や規模などからある程度本来配置されていた石材の様子を想定することが可能である。庭園制作における作法や流儀を加味して行けば、実際に近い形で池の構造を復元することができる可能性が高いといえる。

そこで仲隆裕氏のご指導を受け、筆者が想定した池復元案を提示する。復元案の具体的なグラ

フィック表現は朝日航洋株式会社の協力を得た。（第213図）

池は南西に所在する導水部から水を引き入れ、北壁東側のSD41に排水する構造である。導水部は漆喰壁に覆われ、所々に緑色石などの石材を配置して装飾されていた。SK20・21はその抜き取り穴と考えられる。導水部の末端（池本体と接する部分）漆喰壁が直線的に壊されている部分があり、ここにわずかな段差を有しており石材が配置されたものと想像される。池本体の床は漆喰ではなく粘土で覆われチャートを中心とした玉石が敷かれていた。池正面に相当する南壁部では、中央部に規模の大きな抜き取り穴が数個存在し背後が粘土の盛土で充填されていたことから、築山が構築されその前面に三尊石が配置されていた可能性が高い。おそらくSK03は裏込めの石材も充実にしていることからそこに主石が配置されていたのだろう。三尊石の両脇にある抜き取り穴に配置された石材は、南西部に残存する巨石と同様に、漆喰壁に埋め込まれその天場は高く設定されていたいなかったらう。東西両張り出し部の前面部分は北側に書院を設定すると真側に相当して見えない部分であるため、西張り出し部では漆喰壁のみが残存していた。東張り出し部はSK100で破壊され不明であるが、西張り出し部と同様特別な構造を持たずに漆喰壁で覆われていたと思われる。

導水部に近接する西張り出し部はその先端に多くの抜き取り穴が残存しており、池岸部分には石材が隙間無く配置されていたと考えられる。西張り出し部中央にも土坑があり高い部分にも数個の石材が配置されていたのだろう。石材が配置されていない部分は芝生または苔などが生えていたのではなかろうか。このように規模の大きな石材を配置した西張り出し部（脚）はその先端を中心に

は磯浜が表現されていると考えられる。

対する東張り出し部では、その先端に黒色の切石を整然と配置して漆喰壁に埋め込まれていた状態が確認され、抜き取り穴となる土坑は階段状遺構の付近以外では確認されていない。東張り出し部の上位でも抜き取り穴となる土坑は発見されず、白色の玉石が敷かれていた状態が確認された。このことから、東張り出し部では規模の大きな石材は一切使用されず、上面に玉石が敷き並べられ先端が整然とした石材が埋め込まれた漆喰壁で覆われていた状態と復元される。従って、東張り出し部では州浜（洲浜）が表現されているものと理解でき、東西の畔で相対する浜の表現が施されたことが判明する。

池 SX02 の東側に接する部分で石敷遺構 SX03 が存在しており、これは池に伴う装飾あるいは通路などと想定される。東張り出し部北部には階段（階段状遺構）が設置されており、周囲には石材が数個配置されていたと思われる。階段の先にはチャートの巨石が底面に組み込まれて配置されており、その上に手水鉢などが置かれていた可能性も考えられる。これらの想定を勘案すると、石敷遺構 SX03 は通路と考えられよう。

池底の大部分は玉石が敷かれている状態であったが、部分的に浅い土坑が存在する。これらの土坑は鰻などの魚を休ませる施設や池底に蓮などの植物を生育させる施設などの可能性がある。

総体的に見て、池 SX02 は南西の導水部から磯浜と州浜を経由して手前の排水溝に水を流す池と復元され、北側から鑑賞するために構築され、東北部で手水鉢を利用し得る構造となっている。座観式池泉庭園と位置づけられ、書院庭園の一部を構成すると評価される。

2 (2) 池周囲の復元

次に池 SX02 に関連する周辺遺構を検討し、池 SX02 を中心とした庭園全体の構造を復元する。まず、庭園に関連する遺構の分布範囲について検

討する。

池 SX02 の西側と南側は同時期の遺構である石組溝 SD01～04 によって囲まれたエリアが庭園に関わる空間であったと思われる。また、池 SX02 の北側は未調査区域が広がるが、池 SX02 の北壁の状態からみて書院などの建造物が存在し、北側から庭園を眺める形態であったことが想定される。東側については様相を明らかにし得ない部分があり、検討を要する。ここでは次の理由により、地下室 SK94 などの遺構を含んでしまうものの石組溝 SD01 が終焉する部分までと想定したい。その理由の第一は池 SX02 の周辺に分布する土坑群の範囲と一致することである。第二はその外側では大型の廃棄土坑 SK01 など明白に庭園とは関わない遺構が展開することである。この結果、池 SX02 の北岸および石組溝で囲まれた約 25m × 30m の空間が庭園に関連する遺構が分布するエリアであり、すなわち庭園の範囲そのものである可能性が高いといえよう。

このように設定された区域に池 SX02 と同時期と考えられる遺構は多数存在するが、前述したように不定形の土坑群の存在が特徴的である。第 55 図で示したように、SK64、SK88、SK99、SK105、SK117、SK132、SK134、SK135、SK136 は平面形が楕円形などが崩れた不定形な形状となり、深さはそれほど深くなく土質が充填されている。確証は全く存在しないが植生痕である可能性もあり、注目される。これらの土坑は池 SX02 の東側や導水部付近に展開しない点も注意したい。

また、今回の池 SX02 の最大の問題点は水の供給源である。直接の導水施設は、導水部との接合部分の状況が残存していないため明確にはし得ないが、最終的にはおそらく SK23 によって破壊された石組溝 SD03 の延長部分であったと思われる。石組溝 SD03 に流れる水については、現状のところではその供給源は明らかにできないが、地

形的に見て安定した水源は存在しなかったと思われる。御屋形が存在する名古屋台地北縁部が近隣では比較的高くなっており、そこへ水を供給できるほどの背後の高い地形が存在しないのである。また、御屋形付近では上水道施設の遺構は全く確認されていない。こうした状況からみて、池SX02は雨水を上手に利用したか、あるいは必要な場合のみ人力で水を汲み入れたかのいずれかではないかと思われる。このことは、同様の地形的条件に所在する名古屋城二の丸庭園が本来は池泉庭園として構築されていたながらも現在は枯山水庭園となっている点からも背負できよう。そして、池SX02を含めた御屋形庭園が短期間に存在した後すぐに消滅してしまうのも、こうした水利問題が影響したのかもしれない。

さて、先に設定した区域は石組溝で囲まれた範囲を根拠としたが、実際の庭園遺構が機能した段階で視覚的に境界を示した施設は石組溝ではなく、おそらくそれに平行して構築された塀や欄あるいは建物であったと考えられる。石組溝の外側に御屋形に関連する建物群が展開したと仮定してみると、池SX02の北側に所在した書院からみえる風景は次のようになるだろう。御屋形御殿などの建物群を背景にして約25m四方程度の範囲に木々が植えられ、手前には約10m四方の方形の池が設置され、右手奥の上流から下流へ水が流れる景色の変化を愉しんだといえよう。



3 尾張藩徳川家の庭園における御屋形庭園の位置づけ

御屋形庭園は近世大名尾張藩徳川家の一族が居住した御屋形に所在する庭園であり、大名庭園の一種と位置づけられる。しかし、一口で大名庭園といってもその機能や形態・規模は様々なものがある。ここでは、御屋形庭園の尾張藩徳川家の庭園における位置づけを明らかにするために、他の伝来する庭園遺構を検討し、御屋形庭園の性格と意義を考察したい。

現在まで存在が確認される尾張藩徳川家における庭園のうち主要なものを紹介する。

1) 名古屋城二の丸庭園

(国指定特別名勝 第215図)

名古屋城二の丸庭園は文字通り名古屋城二の丸に所在し、元和3(1617)年に徳川義直が完成させた二の丸御殿に付随するものである。当主の居所「中奥」の中心的な座敷である「御座之間」を挟んで南庭と北庭があり、二の丸庭園はこの両者を指す。義直在世時の二の丸御庭を描いた『中御座之間北御庭惣絵図』や十代斉朝により改変された様子を描いた『御城御庭絵図』などの絵図が残されている。明治初頭の版籍奉還の際に二の丸御殿取り払いの結果、南庭と北庭の東一部が撤去となり、現在は北庭の一部が往時の姿を偲ばせる形で残され特別名勝に指定されている。南庭の一部は陸軍将校集会所(後の名古屋偕行社)の



第213図 池SX02の復元想定イメージ

名古屋城三の丸遺跡 VII

庭として移築したと伝えられ、現在は名古屋城三の丸庭園として残されている。この二の丸庭園は1977年から1978年にかけて名古屋市教育委員会によって発掘調査が行われ、多くの成果が発見されている。残念ながらその成果は概要報告書(名古屋市教育委員会1976)に一部が報告されているに過ぎず、その全貌を知ることは難しい。

二の丸庭園のうち北庭の規模は1554坪に及び、北庭の池の全長は約40m、南庭の池の直径は約35mの規模を持つ。現在残る北池の石組は勇壮で高さが高く、猛々しい印象を受けるものである。残存する北池の側壁を観察すると石組の隙間を埋める形で漆喰状の壁面を観察することができる。名古屋市教育委員会の発掘調査の結果でも、

北池と南池ともに池側面は厚い漆喰壁で覆われていたことが判明している(第214図)。このような特徴は今回発見された御屋形庭園に伴う池でも確認することができ、共通点が高いといえよう。両者とも水を供給することが難しい立地であることから、汲み入れた水をできるだけ漏らさないように維持するための工夫ではないかと想定しておきたい。

2) 名古屋城三の丸庭園

名古屋城三の丸庭園は現在名古屋市公館の南側に残存する庭園遺構である。三の丸庭園そのものは陸軍時代に名古屋警務社の庭園として構築されたもので、尾張藩徳川家とは全く関係がない。ただし、構築に際しては名古屋城二の丸庭園の石材



1



2



3



4



5

- 1: 南池全景 (北東からみる)
- 2: 南池護岸の巨石と漆喰
- 3: 北池東端部 (東から見る)
- 4: 北池東端部の漆喰壁
- 5: 南池中島の漆喰壁

第214図 名古屋城二の丸庭園の発掘調査状況写真は所蔵者である名古屋市見附台考古資料館から提供を受けた。

が使用されたと伝えられており、この一点において関係があるといえる。石材が二の丸庭園のものを使用したため江戸初期まで三の丸庭園を遡らせる見解が散見されるが、誤解であるといえる。念のため確認しておきたい。

3) 名古屋城下御深井庭園 (第216図)

名古屋城に北接して所在する庭園で、初代義直が造営され十代斉朝により改造されたといわれる。現在は名城公園となっており、往時の光景を偲ばせるものは少ない。十代斉朝の改修後の様子が『源順様御代下御庭図面』に描かれている。広大な運池に伴い茶屋や杜、門前町「達磨町」や宿場町「杉股町」なども設けられていた。

名古屋台地が崖を形成して終わり沖積低地になる部分でこの下御深井庭園は構築されており、水を豊富に蓄えた池泉を構築しやすい立地である。加えて御用水の水も導入されており、常時池泉回遊式庭園として楽しめたものと思われる。池泉の規模は非常に大きく東西長は100m近くに及ぶ。

4) 名古屋城下御下屋敷庭園 (第217図)

名古屋市東区の名古屋城下に二代光友が休息と養応の場として、延宝7(1679)年に御下屋敷を設けた。そこには池を中心とする池泉回遊式庭園が存在したという。現在はその往時の姿を思わせる遺構は全く残存していない。宝暦元(1751)年に描かれた『御下屋敷図』が大いに参考になる。

64000坪の広大な敷地に設けられた庭園は、数寄屋風の御殿をはじめとする町屋があり、御菜園や御人参畑なども存在した。江戸にある尾張藩下屋敷の戸山屋敷にある庭園と趣向は共通するものがあるという。庭園に伴う池の水源については明らかではないが、十分に水を供給する水源が存在したと思われる。

5) 名古屋城下大曾根御屋敷庭園 (第218図)

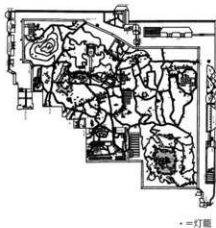
名古屋市東区に所在する大曾根御屋敷庭園は、現在「徳川園」として新規に庭園が築造されている。往時の正確な庭園の様相は現地ではうかがい

知ることは非常に難しいが、『大曾根屋敷之図』などの絵画資料である程度復元できる。二代藩主徳川光友が元禄6(1693)年に家督を譲ると隠居所として大曾根御屋敷を構えた。当初は総面積13万坪という広大な敷地を持ち、庭園は大池を中心とした郊外の風情あるものであったという。現在の徳川美術館や蓬左文庫や徳川園は大曾根御屋敷の極一部にあたる。

広大な敷地に設けられた庭園は名古屋台地の縁辺部の崖を利用した起伏に富んだ趣向を凝らしたものと想定される。庭園に伴う池は崖下の低地に存在していたと思われ、水は安定して供給されたものと推察される。平成11年に徳川園の整備に伴い、トレンチ調査が行われ、滝口部分の石組や土管などが確認された。他の地点では大正時代から戦前にかけての宅地整備工事等のために往時の状況があまり残っていないかったという(水野2001)。

6) 江戸市ヶ谷屋敷

東京都新宿区にある市ヶ谷屋敷は江戸における尾張徳川家当主が居住する上屋敷として機能していた。総面積は78000坪を持ち、「葉々園」と呼ばれる御庭が存在した。葉々園は東御殿と西御殿の間に所在し御泉水と呼ばれる大池を中心とした庭園である。



第215図 名古屋城二の丸庭園
『御城御庭絵図』(蓬左文庫蔵)をトレースして
改変した。

名古屋城三の丸遺跡 VII

現在は防衛庁の諸施設が設置されたこの屋敷は、東京都埋蔵文化財センターにより発掘調査が行われており、屋敷の様相が明らかになっている。注目すべき点は、栗々園以外にも小規模な池状遺構が数基確認されており、石組みで護岸されたものや漆喰壁で覆われたものなどがある。これらの小規模な庭園に伴う池が、今回確認された御屋形庭園と類似するものかもしれない。

7) 江戸山屋敷

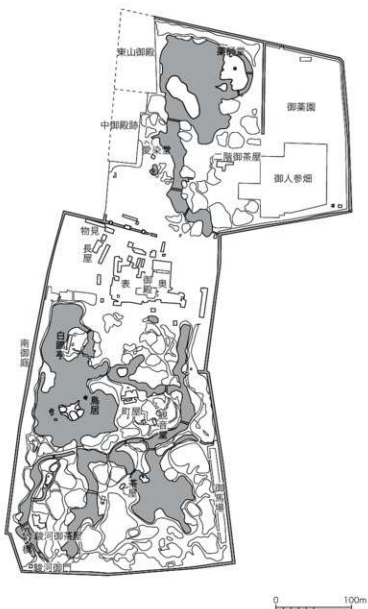
尾張徳川家の江戸屋敷の中で最も規模が大きい屋敷が江戸山屋敷である。総面積は136000坪余りを誇り、当主の休息と饗応の場として機能していた。中央に大規模な池を配置し、江戸で一番高い築山「玉門峰」や宿場町などが構築された。

この他に尾張徳川家が所持する御屋敷には、領国内に「熱田御殿」「小牧御殿」「横須賀御殿」な



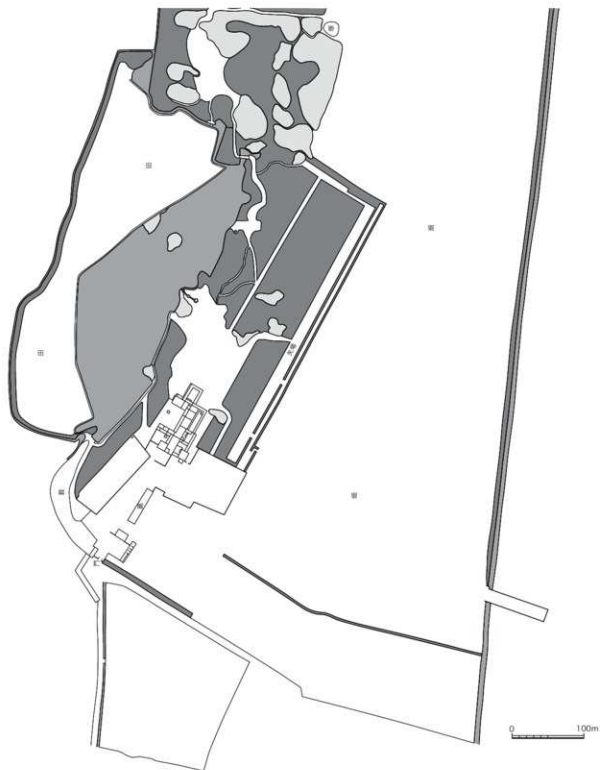
第216図 名古屋城御深井庭園

『源順様御代下御庭図面』（徳川林政史研究所蔵）をトレースして改変した。



第 217 図 名古屋城下御下屋敷底面

『御下屋敷御殿奥表御庭絵図』（徳川林政史研究所蔵）をトレースして改変した。



第218図 名古屋城下大曾根屋敷庭園

『成瀬半人正上ヶ屋敷絵図』および『石河大和守・渡辺半蔵上ヶ屋敷絵図』（ともに蓬左文庫蔵）をトレースして改変した。

ど、江戸に「築地御殿」「麹町御殿」などがあり、京都や大阪にも御屋敷が存在したという。これらの御屋敷にも庭園があったと考えられる。

さて、このように検討していくと、尾張藩の大名屋敷には庭園遺構が付随し規模や用途も様々であることがうかがい知れる。大きな池を伴い町屋の再現など大掛かりな趣向を凝らした大規模な庭園が一般的には著名であるが、それ以外にも中庭的なもので小規模な庭園遺構も一部では発見されている。ここで庭園の機能と規模などから次のように分類して整理してみたい。

A 類) 表御殿に伴う庭園: 尾張徳川家当主が居住し政治や外交の場として機能した御殿に付随する庭園遺構をこの種に含める。名古屋城二の丸庭園や江戸市ヶ谷屋敷楽々園がこれに相当する。規模は中規模であったと考えられ、名古屋城二の丸庭園でみるように勇壮な石組を持つ庭園が多いのではないかと想像される。

B 類) 郊外にある屋敷に伴う大規模庭園: 尾張徳川家当主が休息や養心 of 居住の場として活用した屋敷に付随する庭園遺構をこの種に含める。名古屋城御深井庭園、名古屋城御下屋敷庭園、名古屋城大曾根屋敷庭園や江戸戸山屋敷庭園がこれに相当する。規模は大規模であったと考えられ、規模が大きいが故に変化に富み趣向を凝らした庭園が多いと思われる。

C 類) 屋敷の一角に伴う中庭的庭園: 尾張徳川家当主およびそれに近い方の屋敷のみに付随する小規模な庭園遺構をこの種に含める。今回確認された名古屋城御屋形庭園はこれに該当すると考えられる。庭園遺構が現在も残存するケースが少な

く、絵図などの記録にも残されないケースが多いため、不明な点が多い。発掘調査によりその遺構の痕跡が発見される場合が多いだろう。

4 まとめ

以上の考察により、今回確認された池状遺構を主体とした御屋形庭園は、中庭的な池泉鑑賞式書院庭園と位置づけられよう。最後に確認しておきたい点は、こうした庭園遺構は名古屋城三の丸遺跡では初めて発見された点である。つまり、徳川家に従属する武家屋敷の中ではこれまで庭園遺構が発見されていないのである。未発見の遺構が本当に存在しなかったことを証明することはできないが、せいぜい大身の家臣が有ることができた程度ではないかと思われる。庭園遺構の有無においても武家の身分的格差が如実に反映していることがうかがい知れる。

最後に、庭園遺構の解釈については仲隆裕氏に多大なご教示を得た。また、名古屋城二の丸庭園の状況については小島一夫氏と野口泰子氏のご教示とご協力を得た。記して感謝したい

白幡洋三郎 1997『大名庭園 江戸の甕室』

徳川美術館 2004『江戸のワンダーランド 大名庭園』

名古屋市教育委員会 1976『名古屋城二ノ丸庭園発掘調査 概要報告書』

名古屋博物館 2000『尾張徳川家の絵図—大名がいだいた世界観』

名古屋城振興協会 1967『名古屋城叢書 3. 増補新版 名
脚史蹟 名古屋城の庭園』

水野裕之 2001『徳川園』『愛知県埋蔵文化財情報 16』

第5節 遺構の変遷

本節では、今回確認された遺構の変遷を、出土遺物の変遷と遺構の検出状況などから推測し、今回の調査地点の歴史的な変遷を考察したい。

既に第2章遺構で詳述したように、今回の調査で確認された遺構と遺物は大きくA期からD期の4期に大別されている。さらに、既存の研究で明らかになっている須恵器・灰軸陶器・山茶碗・瀬戸美濃窯産陶磁器などの編年と、本章第2節や第3節で検討した土師器皿・鍋類の変遷を考慮した結果、これらは16小期に細別できた。この時期区分を用いて、各時期に同時に存在したと推測された遺構の主要なものを集め編集したものが、第219～222図である。

A-1期 (5世紀代)

東山11号窯式期前後の須恵器を伴う段階である。これ以前の宇田型甕などを伴う段階も含めて、確認された遺構は少なく、SK339やSK353などの小型の土坑が数基存在する程度である。遺物には城山2号窯式期から東山11号窯式期の須恵器杯類などの他に、この段階に属する円筒埴輪が約90点出土している。埴輪の出土分布の検討から、調査区東側に円筒埴輪を伴う古墳の存在が予測される。こうした状況から、わずかに認められた小型の土坑の存在は集落に伴うものではないと評価しておきたい。

A-2期 (6世紀前半)

東山61号窯式期前後の須恵器を伴う段階で、土師器鍋類1期4段階に相当する。確認された遺構は少なく、SB06が確認される程度である。このSB06は柱穴を持たない小型の竪穴状遺構であり、建物跡と認定できない可能性もある。従って、この段階では何らかの人々の存在した痕跡を認めることができるものの、居住域であったとは評価できない状況である。

A-3期 (7世紀前半)

東山44号窯式期前後の須恵器を伴う段階で、土師器鍋類1期5段階に相当する。この段階では確認された遺構が増加し、竪穴建物跡SB04・SB05・SB09、掘立柱建物跡SB11・SB13および土坑SK308などが存在する。建物の方位は、東半部に存在するものはおよそN-70°-Wを、西半部に存在するものはおよそN-80°-Eを測る。土坑SK308の性格の特定は難しいが、玉類や比較的完形に近い須恵器を大量に伴うことから、ごみ処理の廃棄土坑とは考えにくい。竪穴建物と掘立柱建物の登場からみて、居住域として機能し始めた段階といえる。

A-4期 (8世紀代)

岩崎17号窯式期から折戸10号窯式期までの須恵器を伴う段階を一括する。岩崎17号窯式期前後（土師器鍋類1期6段階）の前半と、折戸10号窯式期前後（土師器鍋類1期7段階）の後半に分離することも可能であるが、ここでは合わせて表記する。この段階では、前段階に比べ遺構の数は減少し、竪穴建物跡SB02・SB03、掘立柱建物跡SB10・SB14などが存在する。小型の土坑類は建物跡に付随する遺構の可能性もある。居住域として機能は依然として継続していたと考えられる。

A-5期 (9～10世紀)

黒笹14号窯式期から折戸53号窯式期までの須恵器や灰軸陶器を伴う段階を一括する。本来は時期をさらに細区分すべきと思われるが、遺構出土遺物は小破片が多いため区分できなかった。この段階では、前段階に比べ遺構の数は減少し、竪穴建物跡SB08、掘立柱建物跡SB12・SA02や小規模な土坑などが存在する。小型の土坑は建物跡の柱穴である可能性も考えられる。居住域として

機能はかろうじて継続していたと考えられる。

B-1 期 (13 世紀後半)

山茶碗第 7・8 型式に属する陶器を伴う段階である。土師器皿 1 期 1 段階、土師器鍋類 2 期 1 段階に相当する。この時期では掘立柱建物跡 SB15・SB16、井戸 SK226、溝 SD18 など多くの遺構が存在する。調査区東部では、東西方向に SD18 などの溝が存在し空間を区画しているが、これ以外に区画施設は見当たらない。溝と掘立柱建物跡 SB15 が重なることと掘立柱建物の方位がバラバラであることなどから、これらが同時期に存在しなかった可能性もある。これらの状況から見て、建物跡や井戸が明瞭な区画施設で区切られない形で展開するものと見られる。溝などで囲まれない屋敷が散在していたものと思われる。

なお、A-5 期と B-1 期の間、すなわち広久手 72 号窯式期から山茶碗第 6 型式期までに属する遺構はほとんど存在せず、該当する遺物も僅少である。12 世紀末から 13 世紀初頭の唐草紋軒平瓦がわずかに出土したことから、その時期の瓦葺き建物が付近に存在した可能性を考えることもできるが、基本的には居住域の機能はいったん途絶えたものと理解しておきたい。

B-2 期 (14 世紀～15 世紀中頃)

山茶碗第 9～11 型式に属する陶器を伴う段階で、土師器皿 1 期 2 段階に相当する。この時期に属する遺構は希薄で、掘立柱建物跡、井戸、溝などの遺構は全く存在しない。土坑類が調査区中央部に散在する程度である。これらの土坑の一部は掘立柱建物跡の柱穴と考えることができ、B-2 期の遺構や遺物を識別しにくい状況を考慮すればこの段階も少なからず居住域であった可能性がある。ただし、現状の検出状況からみると、やはり B-1 期よりも遺構密度が低かったと言わざるを得ないだろう。少なくとも溝などの明瞭な区画施設で屋敷が囲まれていたとは考えにくい。

B-3 期 (15 世紀後半)

古瀬戸後 IV 期古段階に属する瀬戸窯産陶器を伴う段階で、土師器皿 1 期 3 段階に相当する。この時期では掘立柱建物跡は確認されなかったが、井戸 SK146、溝 SD34・SD35・SD38 など多くの遺構が存在する。調査区中央部では、方形地割を形成するようにはば東西方向と南北方向に走る溝群（方位はおおよそ N-6°-E）が展開し、一定度の区画割が行われていたことを予感させる。建物遺構を確認することができないものの、井戸や廃棄土坑と思われる土坑群（SK155 など）の存在から居住域であった可能性が高く、溝によって区画された屋敷が展開したものと想定できる。これらの状況から見て、建物跡や井戸が明瞭な区画施設で区切られない形で展開するものと見られる。溝などで囲まれない屋敷が散在していたものと思われる。

B-4 期 (16 世紀前半)

古瀬戸後 IV 期新段階から大窯第 2 段階に属する瀬戸美濃窯産陶器を伴う段階である。土師器皿 2 期 1・2 段階、土師器鍋類 3 期 1・2 段階に相当する。土師器などにより時期を細分することも可能と考えられるが、具体的な遺構の展開を説明しにくいためここでは合わせて検討したい。この段階では、掘立柱建物跡 SB17、井戸 SK147、溝 SD17・SD25・SD27・SD29・SD36・SD39 などの遺構が存在する。溝群はおおよそ N-10°-E の方位で方形地割を形成するように走り、区画 01～04 を作る。特に SD17・SD25・SK222 は規模がやや大きく、これらで囲まれた区画 04 は他の区画に比べ区画施設が強固であると評価できる。区画内部の構造は不明である。区画 02 では井戸 SK147 や建物跡 SB17 が展開したことが判明する。建物跡 SB17 はその配置と規模からみて主屋とは考えにくい。こうした状況からみて、B-4 期は B-3 期と同様に、溝による方形地割によって区画された屋敷群が展開したと復元される。B-3 期と異なる点は、やや規模の大きな区画

名古屋城三の丸遺跡 VII

施設で囲まれた屋敷が登場し、そこに見られる格差が生じた可能性があることである。ただし、今回の調査区域では屋敷の規模そのものの比較はできなかった。

B-5期 (16世紀中葉)

大竈第2段階以降に属する瀬戸美濃窯産陶器を伴う段階で、土師器鍋類3期3段階に相当する。この段階の遺物は意外と少なく遺構の時期は他の遺構との重複関係などを参考しているケースも多い。B-5期では、掘立柱建物跡SB18・SB19、溝SD06・SD24・SD31、掘立柱柵列跡SA03・SA05などの遺構が存在する。溝群はおおよそN-6°-Eの方位で平行して走り、区画05～08を形成する。東西方向に走る溝を検出することはできなかった。SD31とSD24の間は約22m、SD24とSD06の間は約13mを測る。SD24には門SB20が付随することから、SD24の西側が道路であった可能性も存在する。ただし、道路を想定するとSB19の存在が矛盾しており、SB19の時期あるいはSB20の性格を検討し直す必要があるだろう。区画07はSA05により区画07aと区画07bに細分できる。

上述のように、区画05～08は平行する溝により計画的に構築されたもので、基本的には屋敷地であったと推定される。ただし、それぞれの区画には必ずしも井戸や建物跡が確認されておらず、遺物の出土量も少ない印象があることからみて、生活感や常住性を感じさせない様相を呈していると思われる。

C-1期 (17世紀前半)

登窯第1・2小期に属する瀬戸美濃窯産陶器を伴う段階である。土師器皿2期3段階と土師器鍋類4期1段階に相当する。この時期は、SD22とSK185が重複することやSD12とSD14の間に井戸SK163などが存在することなどから、遺構変遷を細分する必要があると思われるが、実際に遺構の時期細分を全体に行うことが困難であ

るために便宜上一括して様相を説明することとしたい。この段階では、掘立柱建物跡SB22、溝SD12・SD14・SD22、掘立柱柵列跡SA08など多くの遺構が存在する。溝群はおおよそN-3°-Wの方位またはこれに直交する方位に展開し、大きく区画09～11を形成する。SD12とSD14の間は約4mを測り、道路状の遺構であったと推測される。SD27の東側は区画施設の延長を確認することができず、その様相は不明である。溝群は遺構の重複関係からみると、C-1期の初頭から存在したもの（特にSD22）が途中で消えている可能性も考えられる。SD14とSD22で囲まれた区画10の内部には多くの土坑類が分布している。明瞭な建物跡の存在はSA08がある程度で、それより南側では建物遺構は展開せず廃棄土坑類が掘削された場所であったと想定しておきたい。

区画溝が屋敷を囲む施設かあるいは屋敷内部を区分する施設かを識別することは難しいが、ここでは南北方向の区画施設については屋敷を囲む溝と考えておきたい。C-1期の遺構全体としてみると、B-5期の方向と同様の方向を持つ方形地割の中に屋敷地が展開していたと評価できよう。

C-2期 (17世紀後半)

登窯第3・4小期に属する瀬戸美濃窯産陶器を伴う段階である。土師器皿2期4・5段階と土師器鍋類4期2段階に相当する。この時期も、SD12・SD14・SA06などの区画施設が近接して平行する形で存在していることなどから、遺構変遷を細分する必要があると思われるが、実際に遺構の時期細分を全体に行うことが困難であるために便宜上一括して様相を説明することとしたい。この段階では、掘立柱建物跡SB21、溝SD12・SD14、掘立柱柵列跡SA06、井戸SK163・SK49など多くの遺構が存在する。溝はC-1期に存在したものを引き継いで存在したものと推測され、SD14は南方向に伸びる形に変更された可能性がある。SA06を含めてこれらの区画施設はおおよ

そN-3°-Wの方位を持つ。区画施設群の東部には掘立柱建物跡や廃棄土坑群が展開し、屋敷を形成していたと考えられる。SD12はC-2期末期(あるいはC-3期初頭)には池SX02に接続し導水路として利用された可能性も存在する。

区画溝や柵列跡の性格にはわかに判別し難いが、これらの区画施設に近接して井戸が展開することを考慮すると屋敷を囲む施設とは考えてにくい。従って、調査区は大きく広がる屋敷の一部分である可能性が高い。広大な屋敷のどのような位置に相当するかについては今回の調査成果のみでは読み解くことは難しい。

C-3期(18世紀)

登窯第5～8小期に属する瀬戸美濃窯産陶器を伴う段階である。土師器皿3期1～3段階と土師器鍋類4期3段階に相当する。この時期は一部の遺構について着目すると遺構変遷を細分することができるが、説明の煩雑さを避けるためあえて一括して様相を説明することとしたい。この段階では、池SX02、石組溝SD01～04、地下室SK94、巨大廃棄土坑SK01、石列SX09など多くの遺構が存在する。石組溝群で囲まれた空間は池SX02を中心としていくつかの不定形土坑とセットになって庭園遺構を形成していたと考えられる。庭園遺構と地下室との関係は今ひとつ明らかではない。調査区東部には非常に巨大な廃棄土坑SK01が存在しており、他の遺構はほとんど認められない。SK01からは瓦や石材や木材などの廃材が大量に投棄されていたことから普請や作事に伴うものと推測され、屋敷内では建造物などは存在しない空白地を利用した作業場的な用途を想定しておきたい。石組溝群の外側の様相は調査区外に当たり不明な点が多いが、建物遺構の周囲に並べられたものと想定される石列SX09の存在から恒久的な建造物があったことが想定される。SK01などから大量に本瓦葺きの瓦類が出土したことからみて、建造物は瓦葺きの礎石建物であっ

たものと思われる。

調査区は大きく広がる屋敷の一部分と考えられ、本格的な建造物すなわち御殿などの北端部に隣接する石組溝と庭園などが展開した地点であると評価できる。庭園の規模は非常に小さくこじんまりとしたもので、表の庭園遺構とは考えにくく建物群の空隙にできた中庭的な書院庭園であった可能性が高い。さらに付け加えるべき点は、これらの遺構は部分的には約80cmの盛土を行った上で全く新たに構築された点であり、今回の調査地点の遺構変遷の中では最も大きく変貌を遂げた段階の一つと評価できよう。

C-4期(19世紀前半)

登窯第9～11小期に属する瀬戸美濃窯産陶器を伴う段階で、土師器皿3期4段階に相当する。該当する時期の遺物が少ないことからこの時期の遺構は少ない。掘立柱柵列跡SA09や石組溝の石材を抜き取った廃棄土坑SK23などの遺構が存在する程度である。池SX02は埋め立てられ、地下室SK100が構築された。この他の遺構は調査上のミスもあって不明な点が多いと言わざるを得ない。石列SX09はC-4期まで存在したものと推測され、引き続き南側に御殿状の建造物が存在したのだろう。大きくはC-3期の遺構展開と変わらないが、今回の調査地点で見ると遺構と遺物は希薄で低調な段階と評価される。

D-1期(19世紀後葉～20世紀前葉)

この段階は遺構や遺物は非常に少ない。遺構は土坑が数基存在する程度である。この時期の遺構面は人工的に展延された硬化面を形成しており、固い地盤が広大に広がる広場であったと推測される。陸軍第三師団が入部した際に調査地点は東練兵場に相当することが判明しており、その地面が検出されたといえる。

D-2期(1945年直前)

この段階は遺構や遺物はD-1期に比べると増加している。遺構は礎石建物跡SB01、掘立柱建

物跡 SB25、井戸 SK114、土坑 SK96 などが存在する。建物の方位は、C 期の遺構と同様の方位を持つ。建物跡は近代以降のものとしては脆弱な基礎構造であり、急遽建造された感が否めない。建物の構造などからみて陸軍名古屋病院第二分院の病棟と推測される。また、土坑の一部には完形の遺物が埋蔵されたものがあり、物資を隠匿するための土坑と思われる。遺物ではガラス瓶や磁器類や活字などに陸軍名古屋病院に関連する製品を認めることができることから、調査地点が陸軍名古屋病院第二分院に相当することを証明できよう。

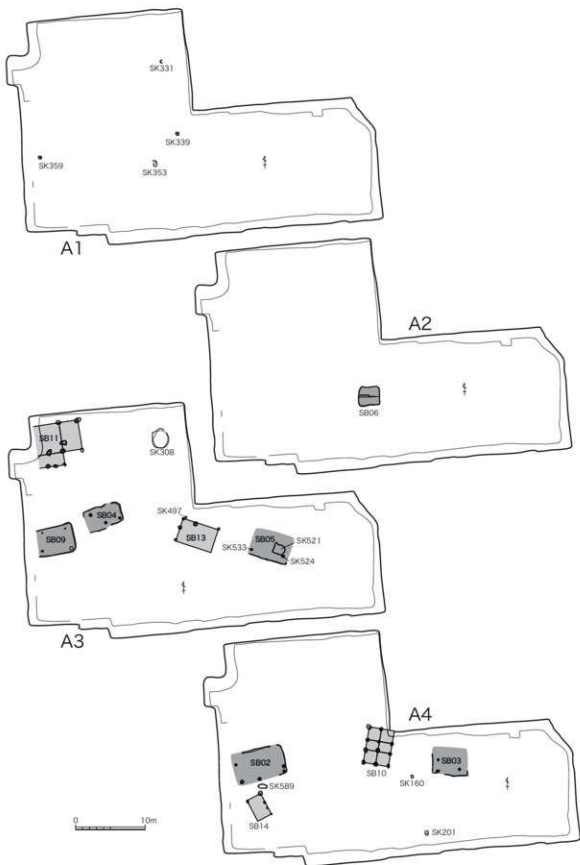
以上の遺構変遷を考察した結果、今回の調査地点の歴史的な変化を復元すると、次のようにまとめることができる。

- 1、4 世紀の遺物が散見されることから、4 世紀には付近に人々の活動が行われるようになったといえる。それ以前における人間の活動の痕跡は確認することができなかった。
- 2、5 世紀には小規模の土坑が散見され、埴輪の存在から付近に古墳があったと推測される。
- 3、6 世紀には確実な居住域とは評価できないが、遺構や遺物が散見されることから、少なくとも付近に人々の活動が存在したといえる。
- 4、7 世紀前半から 10 世紀までは堅穴建物と掘立柱建物の両者が混在する集落が展開した。特に 7 世紀から 8 世紀にかけて遺構は多いが、建物遺構の密集度はそれほど高くないと考えられる。
- 5、11 世紀から 13 世紀前半までは遺構や遺物はほとんど見られず、集落は存在しない。人々の活動もあまり感じられない。
- 6、再び調査地点に人々が居住し始めるのは、13 世紀後半からである。掘立柱建物と井戸がセットになって認められる集落が展開した。
- 7、14 世紀から 15 世紀中頃までは遺構や遺物が

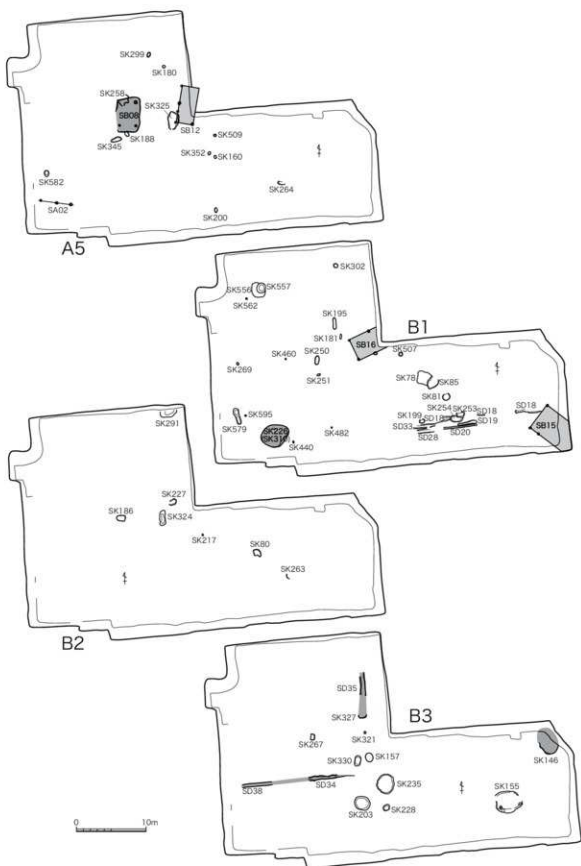
散見される状態であるが、おそらくは掘立柱建物を中心とした集落が継続していたと想像される。

- 8、15 世紀後半になると、溝で区画された空間が設定され井戸などが存在するようになる。建物は確認できなかったが、おそらく掘立柱建物を中心とした屋敷が散在する集落が展開し始めたものと思われる。溝はほぼ東西南北の方位で展開する。今川那古野荘の段階に当たると思われ、荘園に関連する村落の一部を確認したものであろうか。
- 9、上記のような遺構のあり方は 16 世紀前葉でも継続するが、部分的に区画溝の規模がやや大きくなるものが登場する。なお、15 世紀後半の地割と 16 世紀前葉の地割は異なっていることから、地割の変更という画期が認められる。今川氏が那古野城を築城した段階に相当しており、地割の変更はその影響を受けたものであろうか。
- 10、16 世紀中葉には、再度地割の変更が行われて長方形の屋敷が展開したものと思われる。織田氏が那古野城に入城した際に城下の構成を変更した可能性も考えられよう。
- 11、16 世紀後葉では遺構や遺物が激減し様相は不明であり、人々の活動がほとんど感じられない状態と評価される。1582 年頃には那古野城は廃城になったと推測されており、その状況を示したものと評価できる。
- 12、17 世紀前半には、方位は共通するものの新たに溝による区画が設定され、屋敷が展開したものと推定される。調査地点は『金城温古録』によると石川光忠、粟生将監、一色竜雲が居住した名古屋城三の丸の武家屋敷が展開したと思われる。
- 13、17 世紀後半では地割が変更され、区画施設が存在するものの、調査区全体が広大な屋敷の一部であった可能性が高いと評価された。調査

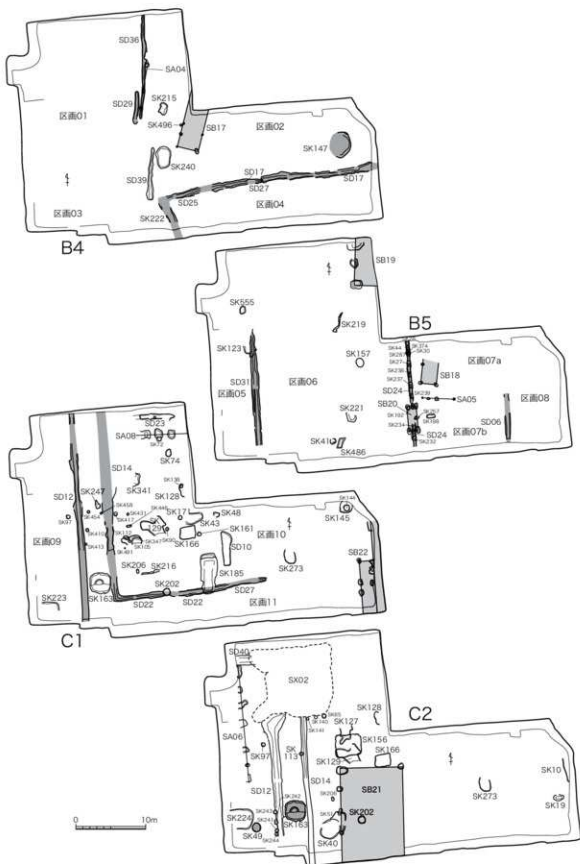
- 地点は、慶安2(1649)年に御屋形区画の原型が成立して以来、徳川義直娘婿広幡忠幸、松平義昌、徳川綱誠らが居住した屋敷が展開したことが判明しており、その一部が確認されたものと考えられる。
- 14、18世紀になると、17世紀に存在した区画溝が廃絶され、厚い盛土による整地が行われ石組溝や庭園が構築された。調査地点は広大な屋敷の一角に相当すると思われ、中庭的な場所が想定された。文献などの検討から、この段階は御屋形の機能が分化して御屋形の公的施設の性格が強まった時期と考えられている。
- 15、19世紀には入ると、広大な屋敷の一角である様相は変わらないと思われるが、遺構や遺物が減少している。このことは、文献などの検討から18世紀半ば以降は御屋形の機能が衰退する過程と位置づけられていることと符合するといえる。
- 16、19世紀後葉から20世紀前葉では、遺構や遺物は激減し硬化した地盤のみが確認された。1872年に入部した陸軍第三師団の東錬兵場として機能していたといえる。
- 17、太平洋戦争終戦の1945年直前では、当時としては脆弱な建物が建造され、部分的に物資を隠匿した土坑なども確認された。建物の規模や形状から病室に相当するものと考えられ、陸軍名古屋病院に関連する遺物も豊富に出土していることなどから、陸軍名古屋病院第二分院の病棟とそれに関連する遺構が展開したと推定される。
- 18、その後の状況については、考古学的なデータを採取していないが、1m以上の厚い盛土整地を経た上で国立名古屋病院(現独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター)が建造され、2004年には調査地点に看護婦養成所が新規建設されて今日に至る。



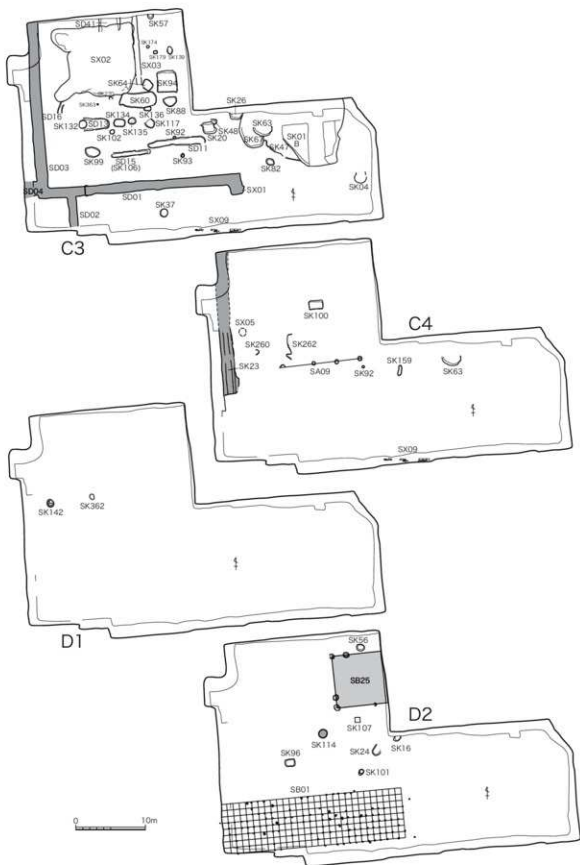
第 219 図 遺構変遷図 (1)



第220図 遺構変遷図(2)



第221図 遺構変遷図(3)



第 222 図 遺構変遷図 (4)

名古屋城三の丸遺跡 VII

SK01								
接合面破片数	I期	II期	III期	IV期	V期～	近代	不明	総計
縄			6	15	1		19	42
			1					
小縄			1				4	5
小杯			2				1	3
皿				1		1	1	3
鉢							1	1
仏飯具							1	1
不明						2		2
総計	0	0	9	16	1	3	27	57
	0		26					

SK04								
接合面破片数	I期	II期	III期	IV期	V期～	不明	総計	
縄			4	2		7	16	
				3				
小縄				1			1	
小杯				1			1	
皿				1			1	
総計	0	0	4	5	0	7	19	
	0		12					

SK01								
接合面破片数	I期	II期	III期	IV期	V期～	不明	総計	
縄			11	3		22	45	
			9					
小杯		2	4				9	
			2					
			1					
大皿			5	1			6	
中皿			2	1			8	
			5					
相打皿						1	1	
皿			1			2	3	
皿?						1	1	
鉢			3			2	5	
蓋						1	1	
壺?						2	2	
人形?						1	1	
不明						3	3	
総計	0	2	26	5	0	35	85	
			47					
			50					

SK23								
接合面破片数	I期	II期	III期	IV期	V期	近代	不明	総計
縄			3	24			15	42
陶瓦縄					2			2
陶縄				1				1
煎茶缶				1				1
壺口				1				1
中皿				1			2	3
紅皿				1				1
皿				1			4	5
蓋					1			1
鉢							1	1
瓶?							3	3
不明						2	2	4
総計	0	0	3	30	3	2	27	65
	0		36					

第 36 表 主要遺構出土肥前産磁器類組成表

付 表

遺構一覽表

遺構番号	グランド	1画	2画	3画	長軸(m)	短軸(m)	面積(m ²)	プラン	断面形	埋土	備考	時期
SK01	11b, 11c, 12b, 12c	×	○	○	A-500 B-602	A-235 B-487	A-177 B-212	不整三角形	複形	図面に記入	東西にSK 01AとSK01Bに分かれる。四方とも調査区外北に伸びている。	C3
SK02	11a	×	×	×	248	168	22	幅門形	複形	7.5V3/2粘土、中粒砂、炭灰物、粘土、埋土見出し。	SK02Bを切っている。	C4?
SK03	11j	×	○	×	311	125	55	長方形	複形	5V3/1粘土、2.5V7/4粘土、プロック見、炭灰物わずかに混、奥土わずかに混。	トレンチ、視見の可能性が高い。	B3
SK04	12j	×	○	×	170	162	60	幅門形	複形	10V4/2中粒砂、シルト混、地山プロック多量。		C2?
SK05	12b	×	○	×	230	119	34	長方形	複形	10V4/2中粒砂、シルト混、地山プロック多量。		D
SK06	13b	×	○	×	97	60	4	中幅門形	断面が欠片	2.5V3/1細粒砂、粘土混、埋土見出し。		D3
SK07	13c	×	○	×	73	50	45	中幅門形	台形	10V3/3粘土、細粒砂。	柱穴の可能性あり。SK22柱穴。	C1
SK08	13j	×	○	×	150	70	6	中幅門形	複形	10V3/3細粒砂、粘土混。	明治のプリント出た。調査区外へ東にのびる。SK05とつながっている。	D1
SK09	11j	×	○	×	328	42	9	幅門形	複形	10V3/1粘土、地山プロック多量。	調査区外へ東へ伸びる。SK22柱穴。	C1
SK10	11a, 12a	×	○	×	130	50	51	幅門形	複形	2.5V3/1粘土、地山プロック多量。	調査区外へ東へ伸びる。	C2
SK11	12j	×	○	×	105	60	77	方形	複形	図面に記入	瓦、遺物土層、調査区外へ東に伸びる。SK22柱穴。	C1
SK12	12b, 13j	×	○	×	70	33	56	方形	複形	10V3/2粘土、細粒砂。	瓦(小片)多い。調査区外へ東にのびる。SK22柱穴。	C1
SK13	12j	×	○	×	99	60	55	幅門形	複形	10V3/1粘土、細粒砂、地山プロック多量。	SK17を切っている。SK22柱穴。SK04に切られている。	C1
SK14	12j	×	○	×	91	41	70	方形	複形	10V3/1土、細粒砂、中粒砂多量。	調査区外へ東にのびる。SK22柱穴。	C1
SK15	13j	×	○	×	80	45	32	幅門形	複形	10V3/1粘土、細粒砂、地山プロック多量。	SK05上の埋土層は不明。SK22柱穴。	C1
SK16	10c, 10d, 11a, 11f	○	○	×	89	75	14	中幅形	複形	10V3/1中粒砂、粘土混。	調査区外へ北にのびる。	D2
SK17	11f	○	×	×	180	14	8	狭長方形	複形	10V3/2シルト、細粒砂。	SK27, 28を切っている。	D
SK18	11a	○	○	×	62	52	22	幅門形	複形	10V3/2中粒砂、シルト混。		D
SK19	12j	×	○	×	—	—	—	—	—	—	—	C2
SK20	11f	○	○	×	193	78	26	幅門形	複形	10V3/1細粒砂、シルト、地山プロック混。	SK16, 17, 20に切られる。白色土層有り。	C2
SK21	11a	×	×	×	28	28	1	1門形	複形	10V3/1土、細粒砂		D
SK22	11f	×	×	×	—	—	—	—	—	—	—	D
SK23	10a, 11a, 12a	○	○	○	1800	118	43	長方形	複形	図面に記入	SK20東西	D
SK24	11e	○	×	×	2060	100	20	幅門形	複合形	10V3/1中粒砂、粘土、炭灰物少し混。	SK03の石層を抜き取った後の遺構	C4
SK25	10e, 11e	○	×	×	162	122	20	幅門形	—	—	SK25を切っている。	D2
SK26	10f, 10g, 11f, 11g	○	○	×	130	90	30	方形?	複形	10V3/3中粒砂、粘土混、地山砂、炭灰物少し混。	ガラス、コンクリート含む。	D3
SK27	11f	○	○	×	80	43	16	長方形	複形	10V4/1シルト、細粒砂。	SK17に切られている。SK03柱穴。	C
SK28	11f	○	○	×	224	43	25	長方形	複形	黄土、7.5V3/1細粒砂、2.5V7/3粘土に混。	SK24を部分的に壊したものを、調査区外へ北へ伸びる。瓦、遺物、山手焼、SK03柱穴。	B3
SK29	11f	×	×	×	72	66	6	幅長方形	複形	10V4/2粘土、細粒砂、粘土かアサカに混。		B?
SK30	11f	○	×	×	21	13	—	幅門形	—	—	柱穴を遺構としていた。一面では掘削しなかつた。後にSK27Aの柱穴として掘削した。	C3
SK31	11e	○	×	×	30	21	2	幅門形	複形	—	北をSK43に切られる。	?
SK32	11e	×	×	×	25	25	2	1門形	複形	10V3/1土、細粒砂	SK33を切っている。	?
SK33	11e	×	×	×	30	28	1	1門形	複形	10V3/1土、細粒砂	SK33に切られている。	?
SK34	11e	○	×	×	26	23	1	幅門形	複形	10V3/1土、細粒砂	SK33を切っている。	?
SK35	13a	○	×	×	80	70	4	1門形	複形	2.5V4/1シルト、炭灰物わずかに混。	SK41を切る。SK21柱穴。	C2
SK36	13a	×	×	×	143	96	6	幅門形	複形	2.5V4/1シルト、細粒砂。	瓦、正灰、瓦、SK38を切っている。	C3, 4
SK37	13d	×	○	×	112	109	186	1門形	図面に記入	図面に記入	門柱の骨を配置、埋土遺物。	C5
SK38	13a, 13b	×	○	×	650	285	20	長方形	複形	土層?/1中粒砂、鉄分を含む。	整地有り。	C3
SK39	13c	×	×	×	87	85	13	不正1門形	複合形	10V3/2中粒砂、炭灰物混。	埋土有り。	C3
SK40	13c, 13d	×	○	×	285	263	20	1門形	複形	2.5V3/1シルト、粘土混。	SK40の時点で掘りかき残った部分がある箇所でもSK44と確認されなかった。	C1
SK41	13d	×	○	×	80	70	20	幅長方形	複形	右側?2.5V3/2シルト、中粒砂、地山プロック混。右側?10V3/4細粒砂。	SK35に切られる。SK03柱穴。	B4?
SK42	13f	×	×	×	100	41	10	狭長長方形	複形	2.5V3/3細粒砂、粘土混、炭灰物混。		?
SK43	11e	○	×	×	242	142	20	不整長方形	複形	10V3/1細粒砂、粘土混、炭灰物少し混。	SK24, SK18に切られている。	C?
SK44	10e, 11f	○	○	×	125	42	30	長方形	複形	10V3/2粘土、細粒砂。	SK28の子午線混。SK03柱穴。	B3
SK45	13c	×	×	×	62	58	4	1門形	複形	7.5V3/3粘土、細粒砂。	柱石のあつまり。SK38を切っている。	C4?
SK46	13e	×	×	×	61	58	12	1門形	複形	7.5V3/3粘土。	SK38を切っている。遺物の集まり。	C4?
SK47	11a, 11b, 12b	×	○	○	6130	1770	52	—	—	—	SK01を切っている。	C1
SK48	11f	○	○	×	81	61	23	狭長方形	複形	7.5V4/1細粒砂、粘土混。	SK03柱穴。	C3
SK49	13a, 13b	×	○	×	127	126	185	1門形	複形	図面に記入	北側にあり。	C2
SK50	13f	×	×	×	298	171	18	長方形	複形	10V3/3シルト、粘土混。	SK38に切られている。	C2
SK51	13d	×	○	×	181	221	15	—	—	—	SK40を切っている。	C2?

名古屋城三の丸遺跡Ⅶ

遺跡番号	アゾッド	1画	2画	3画	長軸(m)	短軸(m)	厚さ(m)	ブロン	陶磁器	埴土	備考	時期	
SK52	13e	○	×	×	—	—	—	—	—	—	遺土、5VRC1磁器砂、粘土、粘土土 2.5V4/2磁器砂、粘土	SD22を部分の掘ったもの。	?
SK53	8d	○	×	×	65	56	9	角門部	陶器	10V9b/1磁器砂。	—	C	
SK54	8d	○	×	×	104	160	11	門部	埴土	7.5V9/4/2磁器砂、粘土	SK58を穿っている。	C	
SK55	8d	○	○	×	80	71	45	門部	埴土	1層1 10V9/5/2磁器砂、下層1 SK1粘土。	粘土有り、SK25粘土。	DE	
SK56	8d, 8e	○	○	×	113	96	56	角門部	埴土	10V9/2/2中砂、粘土土。	—	DE	
SK57	8d	○	○	×	96	89	39	突如内角部	埴土	2.5V4/2磁器砂、粘土土	—	C3	
SK58	11b, 11c	○	×	×	134	66	—	不明	—	—	—	?	
SK59	8d	○	○	×	121	101	70	門部	埴土	2.5V4/2磁器砂、粘土土	SK68粘土。	C1	
SK60	10c, 10d	○	×	×	514	220	19	長方形	埴土	10V9/5/1磁器砂、粘土土、鉄分、焼 土土質。	北寄り	A3	
SK61	8d	×	×	×	25	24	5	門部	陶器	2.5V5/2粘土、磁器砂。	—	C5	
SK62	8d	×	×	×	28	37	10	門部	陶器	10V9/4/1磁器砂、粘土土。	—	C3	
SK63	11g, 11h	○	○	×	281	(117)	215	角門部	陶器	埴土に記入	調査区外へ北へ伸びる。	C4, 4	
SK64	8d, 10d	○	×	×	147	130	21	門部	陶器	5V3/1磁器砂、粘土土。	—	C3	
SK65	10c	○	×	×	56	55	22	門部	埴土	10V9/3/3中砂。	SK60に切られている。壁引らしきもの あり。	C2?	
SK66	8d	○	○	×	72	63	31	門部	陶器	2.5V6/2磁器砂。	SK63を穿っている	DE	
SK67	11g	×	○	○	241	225	64	角部	陶器	埴土に記入	調査区外へ北へ伸びる。	C3	
SK68	8d	○	○	×	66	59	45	角門部	陶器	埴土に記入	SK63を穿っている	DE	
SK69	10d, 8e	○	○	×	76	67	40	角門部	陶器	埴土に記入	SK63を穿っている	DE	
SK70	8d, 8e, 8c, 8e	○	○	×	—	—	—	—	—	—	—	DE	
SK71	8d	○	○	×	50	60	41	門部	陶器	埴土に記入	SK64粘土。	B3	
SK72	8d	○	○	×	50	44	24	角門部	陶器	5V9b/1/2粘土、磁器砂。	SK73の礎石土上。	C1	
SK73	8d	○	○	×	125	113	7	不整形	埴土	10V9/4/1磁器砂、シルト土。	SK66粘土。	C1	
SK74	8d, 8e	○	○	×	107	74	7	角門部	埴土	10V9/4/2シルト土、粘土土。	—	C1	
SK75	8c	○	○	×	124	114	23	角門部	陶器	10V9/3/1粘土、磁器砂、焼土土質、 アゾッド。	SK68粘土。	C1	
SK76	8d	○	×	×	97	75	2	門部	埴土	10V4/1シルト。	—	B3	
SK77	11f	○	○	×	75	74	16	門部	陶器	10V9/4/2磁器砂、粘土土、焼土土質、 アゾッド。	SD11を穿る、SK21粘土。	C3	
SK78	11f, 11g, 12g	○	○	×	150	182	9	角門部	埴土	10V9/4/2磁器砂、粘土土。	SK85が穿る。	B3	
SK79	12f, 12g	○	○	×	168	160	25	門部	陶器	10V9/4/2磁器砂、粘土土。	—	B3	
SK80	12g	×	○	×	90	80	15	不整形	V字部	10V9/5/2磁器砂、粘土土。	—	B2	
SK81	12g	×	○	×	102	101	9	門部	陶器	7.5V9/3/2磁器砂、炭化物少し混 入。	—	B2	
SK82	12g, 12b	○	○	×	107	80	20	角門部	陶器	2.5V4/1磁器砂、粘土土、炭色土、アゾ ッド土。	—	C3	
SK83	12b	×	×	×	20	20	12	門部	埴土	10V9/5/2磁器砂、粘土土。	—	C7	
SK84	12b	×	○	×	30	27	12	角門部	埴土	10V9/3/1粘土、磁器砂。	—	?	
SK85	11g, 12a	×	○	×	150	140	14	角門部	陶器	10V9/3/1粘土、磁器砂、炭化物混 入。	SK87に切られる、SK79を穿る。 SK94が穿る。	B1	
SK86	10c	×	×	×	56	42	4	方形	埴土	2.5V4/1磁器砂、粘土土、炭化物少し混 入。	SK94が穿る。	C4	
SK87	10c	×	×	×	68	39	7	角門部	陶器	—	SK94が穿る。	C4	
SK88	10d, 10e	○	×	×	184	144	26	隅丸方形	陶器	2.5V5/1磁器砂、粘土土、炭化物少し混 入。	—	C3	
SK89	11d	○	×	×	71	56	5	隅丸二角部	埴土	10V9/6/2磁器砂。	—	?	
SK90	11d, 11e	○	×	×	45	43	13	門部	陶器	10V9/5/2磁器砂、粘土土。	—	C1	
SK91	11e	○	×	×	30	25	13	角門部	陶器	10V9/2/2磁器砂、粘土土。	—	C	
SK92	11e	○	×	×	30	36	12	門部	陶器	2.5V4/1中砂、粘土土。	SD11を穿っている。	C4, 4	
SK93	12e	○	×	×	54	51	17	門部	埴土	2.5V3/1磁器砂、粘土土。	陶磁器類。	C3	
SK94	9d, 9e, 10d, 10e	○	○	×	287	279	165	不整形	埴土	埴土に記入	地下室。	C3	
SK95	11e	○	×	×	66	63	47	門部	陶器	2.5V6/2磁器砂、粘土土。	近代遺物出土、SK99粘土。	C4	
SK96	11b, 11c	○	×	×	146	79	70	方形	埴土	5V9/3/1粘土、磁器砂含む。	埋納遺物。	DE, C1, 2	
SK97	11b	○	×	×	68	60	21	角門部	埴土	10V9/4/1磁器砂、粘土土。	SK123を穿る。	?	
SK98	11b	○	×	×	70	65	23	門部	陶器	10V9/6/6粘土。	—	?	
SK99	11b, 11c, 12b, 12c	○	×	×	206	149	15	角門部	埴土	10V9/3/1粘土、磁器砂、焼土土質、 アゾッド、炭化物少し混入。	—	C4	
SK100	8c, 8d	○	○	×	100	94	25	角門部	埴土	1層1 2.5V5/2粘土、下層1 7/4粘土、 アゾッド。	SK92を穿っている。地下室。	C3	
SK101	11d, 11e	○	×	×	95	62	31	角門部	陶器	2.5V5/2磁器砂、粘土土。	—	DE	
SK102	11c	○	×	×	70	68	5	門部	埴土	10V9/5/2磁器砂、粘土土。	粘土遺物。	C3	
SK103	11b	×	×	×	72	65	17	角門部	陶器	10V9/6/4	—	?	
SK104	11b	○	×	×	65	(28)	25	角門部	陶器	2.5V4/2磁器砂、粘土土。	南をSK90に切られる、SK99粘土。	C4	
SK105	11c, 11d	○	×	×	147	98	16	角門部	埴土	5V9/2磁器砂、シルト土粘土土。	—	C1	
SK106	12c	○	×	×	114	70	33	長方形	陶器	10V9/5/3磁器砂、粘土土、炭化物少し混 入の砂少し混入。炭化物若干混入。	SD15の一部	C3	
SK107	10d	○	○	×	84	84	36	不整形	埴土	埴土に記入	—	DE	
SK108	11d	○	×	×	40	33	3	角門部	埴土	2.5V4/1磁器砂、粘土土。	—	?	
SK109	11d, 12d	○	×	×	30	25	2	角門部	埴土	2.5V4/1	—	DE	
SK110	11d	○	×	×	65	53	3	隅丸方形	埴土	10V9/4/2磁器砂、炭化物少し混入に 焼土土質少し混入、シルト土。	—	?	
SK111	10e	×	×	×	60	53	18	長方形	埴土	2.5V4/2磁器砂、粘土土、炭化物少し混 入。	—	B3	
SK112	11c	○	×	×	32	31	3	門部	陶器	10V9/5/3磁器砂、シルト土、炭化物少 量混入。	—	C1	
SK113	11c	○	×	×	56	45	25	角門部	埴土	10V9/4/1磁器砂、粘土土。	溝を穿っている。	C2	
SK114	10c	○	○	×	160	150	80	門部	埴土	2.5V4/1磁器砂、粘土土、炭化物若干混 入。	—	DE	
SK115	8e, 10e	○	×	×	28	34	8	長方形	埴土	10V9/5/2磁器砂。	本跡が残存する。	D	
SK116	11d	×	×	×	62	53	10	角門部	陶器	7.5V9/3/1粘土、磁器砂含む。	SK117を穿っている。	C3	
SK117	11d	○	×	×	140	120	9	隅丸方形	陶器	10V9/7/2/2中砂、粘土土。	SK116に切られている。	C4	
SK118	11c	○	×	×	34	33	9	門部	陶器	10V9/5/4磁器砂、シルト土。	—	?	
SK119	11c	○	×	×	51	49	3	門部	陶器	10V9/7/1中砂。	SK99粘土。	C4	
SK120	11b	○	×	×	33	32	28	門部	陶器	10V9/6/3磁器砂、シルト土。	砂質の炭石を含む。	?	
SK121	11a	○	×	×	90	80	28	角門部	陶器	5V9/1磁器砂、炭化物少し混入。	SK99粘土。	C1	

遺構番号	グライダー	1面	2面	3面	長軸(m)	短軸(m)	厚さ(m)	プラン	断面形	埋土	備考	時期
SK122	11a	○	×	×	50	49	9	側門形	矩形	2.5V4/1 縦砂鉄、粘土層、埋物わずかに見。	SA06 埋土。	C1
SK123	11a	○	×	×	82	77	9	埋砂	矩形	2.5V5/2 粘土。		B4
SK124	9d, 9d	○	×	×	61	(55)	53	側門形	矩形	2.5V7/1 シェト。鉄分若干含む。	SK59 に切られる。SK59 埋砂。	B3
SK125	11a, 12a	○	○	×	94	72	24	側門形	矩形	2.5V0/2 縦砂鉄、埋山ブロッコ若干含む。	SK29 に切られる。SA09 埋土。	C1
SK126	9e	○	×	×	(56)	50	12	側門形	矩形	10V9/2 縦砂鉄、粘土層。	北側溝に5面に伸びる。	B2
SK127	10d, 11d	○	×	×	170	130	16	中敷形	矩形	2.5V5/1 縦砂鉄、粘土層。炭化物少量見。鉄分少量見。		C2
SK128	10e	○	×	×	172	(53)	11	中敷形	矩形	2.5V4/2 粘土。縦砂鉄。	東トレンチに切られる。	CL 2
SK129	11d	○	×	×	203	280	17	中敷形	矩形	2.5V5/1 縦砂鉄、シェト層。		CL 2
SK130	10d	○	×	×	34	22	3	内形	矩形	10V9/2 縦砂鉄、シェト層。		7
SK131	11d	○	×	×	60	52	12	側門形	矩形	2.5V5/2 シェト。	SK129 を知っている。SA09 埋土。	C4
SK132	11b	○	×	×	114	(104)	15	内形	矩形	上層：2.5V12/2 粘土。下層：2.5V0/1 縦砂鉄、粘土層。	SD13, SD12 に切られている。	C3
SK133	11c	○	×	×	110	80	4	中敷形	矩形	2.5V5/2 縦砂鉄。	SD14 に切られている。	C
SK134	11c	○	×	×	161	109	13	側門形	矩形	上層：2.5V12/2 粘土。下層：10V9/1 縦砂鉄、粘土層。炭化物少量見。		C3
SK135	11c, 11d	○	×	×	107	104	9	内形	矩形	上層：2.5V5/4 粘土。右層：2.5V0/1 縦砂鉄、粘土層。炭化物少量見。		C3
SK136	11d	○	×	×	93	53	7	側門形	矩形	2.5V5/1 粘土。縦砂鉄。	SK127 に切られている。	C3
SK137	11c	○	×	×	32	25	3	内形	矩形	2.5V 4/1 粘土。縦砂鉄。		C
SK138	10e	○	×	×	48	37	11	内形	矩形	2.5V5/2 縦砂鉄、粘土層。炭化物多く含む。	SK128 に切られている。	C1
SK139	9c, 9e	○	○	×	113	73	41	差形	差形	10V9/1 縦砂鉄、粘土層。	SR24 埋土。	C3
SK140	10e	○	○	×	52	48	13	内形	矩形	2.5V4/1 縦砂鉄、シェト層。	SK141, SK140, SK65 と同層の可能性。	C2
SK141	10c	○	×	×	49	47	14	内形	矩形	2.5V4/1 縦砂鉄、シェト層。	積石有り。	C2
SK142	10a	○	○	×	111	99	66	内形	四角に記入	2.5V4/2 粘土。縦砂鉄含む。埋山ブロッコ若干含む。	積石有り。	D1
SK143	10a	○	×	×	105	98	4	方形	矩形	未記入		C1
SK144	10c	○	○	×	88	86	—	内形	四角に記入	四角に記入	SK145 の埋土。	C1
SK145	10c, 10k, 11b, 11j	○	○	×	(187)	(93)	214	内形	四角に記入	四角に記入	SK01 A に切られる。埋砂。	C1
SK146	10c, 11j	○	○	○	342	268	470	側門形	矩形	四角に記入	空白。	B3
SK147	11b, 11j, 12b, 12j	○	×	○	391	371	(424)	内形	四角に記入	四角に記入	空白。	B3
SK148	12b	×	×	×	81	62	4	側門形	矩形	2.5V5/2 縦砂鉄、シェト層。炭色土粒見。		C
SK149	12j	○	○	×	(36)	(25)	38	側門形	矩形	埋土層のため未記入		7
SK150	12j	○	○	×	(32)	(29)	16	内形	矩形	埋土層のため未記入	SD15 埋土。	C1
SK151	13j	○	×	×	22	19	10	内形	矩形	2.5V2/1 縦砂鉄、粘土層。	SR15 埋土。	B1
SK152	13j	○	○	×	28	25	3	内形	矩形	2.5V4/1 縦砂鉄、粘土層。鉄土若干見。	SR15 埋土。	B1
SK153	13c	○	○	×	69	49	9	中敷形	矩形	10V9/2 縦砂鉄、粘土層。		7
SK154	12c, 13c	○	○	×	119	69	13	中敷形	矩形	2.5V4/1 縦砂鉄、粘土層。		B3
SK155	12b, 12d, 13b, 13c	○	○	×	323	311	58	側門形	矩形	10V9/2 縦砂鉄、粘土層。		7
SK156	10d, 11d	○	○	×	315	289	12	正方形	矩形	四角に記入		C2
SK157	11e	○	○	×	133	105	7	側門形	矩形	10V9/2 シェト。縦砂鉄少量見。	SK166 を切る。	B3, 4
SK158	11e	○	○	×	150	63	4	側門形	矩形	10V9/2 縦砂鉄、シェト層。	SK166 を切る。	C1
SK159	11f	○	○	×	153	49	8	側門形	矩形	10V9/2 中砂鉄、粘土層。		C4
SK160	12f	○	○	×	46	33	9	側門形	矩形	10V9/2 中砂鉄、粘土層。炭化物少量見。		A4, 5
SK161	11e	○	○	×	58	57	16	内形	矩形	四角に記入		C1
SK162	12b, 12c, 13b, 13c	○	○	×	124	124	67	内形	矩形	四角に記入	SK163 の割罫による。SD01 の落ち込み。	CL 2
SK163	12b, 12c, 13b, 13c	○	○	×	204	202	(411)	側門形	不正差形	四角に記入	空白。	CL 2
SK164	12g	×	×	×	84	50	16	側丸方形	矩形	2.5V4/1 縦砂鉄、粘土層。		B4
SK165	13g	○	○	×	63	50	19	内形	矩形	2.5V4/2 中砂鉄、粘土層。鉄分見。		C
SK166	11e	○	○	×	229	177	3	方形	矩形	2.5V4/2 粘土。中砂鉄見。		CL 2
SK167	13g	○	×	×	30	29	8	側門形	矩形	10V9/2 縦砂鉄、粘土層。		A5
SK168	13g	○	×	×	31	31	9	内形	矩形	2.5V9/2 粘土。中砂鉄見。		7
SK169	13g	○	×	×	31	25	13	内形	矩形	10V9/2 中砂鉄、シェト層。白色粘土層。		B1
SK170	13c	○	×	×	—	—	—	—	—	—	欠番	—
SK171	11e	○	×	×	50	57	13	内形	矩形	2.5V4/2 シェト。縦砂鉄。		C1
SK172	11e	○	○	×	86	23	11	側門形	矩形	2.5V4/1 縦砂鉄。粘土層。炭色土ブロッコ見。		C
SK173	11e	○	○	×	33	27	8	内形	矩形	10V9/2 中砂鉄。粘土層。		A, A
SK174	9d	○	○	×	28	28	7	内形	矩形	10V9/2 埋砂鉄。シェト層。埋土見。	SR24 埋土。	C2
SK175	9d	○	○	×	63	53	8	中敷形	矩形	10V9/1 縦砂鉄、シェト層。		B
SK176	9d	○	○	×	46	42	5	側丸方形	矩形	2.5V4/1 縦砂鉄、シェト層。		7
SK177	9d	○	○	×	38	33	12	内形	矩形	2.5V4/2 縦砂鉄、粘土層。炭色粘土粒見。炭化物少量見。		B3
SK178	9d	○	○	×	38	35	10	内形	矩形	10V9/2 縦砂鉄、粘土層。焼土少量見。		C
SK179	9d	○	○	×	58	23	42	側門形	矩形	10V9/2 縦砂鉄、シェト層。埋土見。		C3
SK180	9d	○	○	×	46	39	9	側門形	矩形	10V9/2 縦砂鉄、粘土層。焼土わずかに見。		A5
SK181	10d	○	○	×	109	29	2	側門形	矩形	10V9/2 縦砂鉄、粘土層。炭化物わずかに見。		B1
SK182	10d	○	○	×	50	32	25	側門形	矩形	10V9/2 縦砂鉄、粘土層。中砂土見。		A
SK183	10d	○	○	×	22	20	13	内形	矩形	10V9/2 中砂鉄。粘土層。		A
SK184	10d	○	○	×	46	43	4	内形	矩形	10V9/2 縦砂鉄、粘土層。		C
SK185	12c, 12f	○	○	×	489	235	182	側丸長方形	矩形	四角に記入	地下室跡遺構。	C
SK186	11e	○	○	×	123	78	8	側丸長方形	矩形	2.5V9/2 縦砂鉄、粘土層。中砂土見。		B2

名古屋城三の丸遺跡Ⅶ

遺跡番号	アゾッド	1画	2画	3画	基軸(m)	短軸(m)	厚さ(m)	アザン	西面形	埋土	備考	時期
SK187	11c	×	○	×	95	65	3	箱門形	箱形	10F9A③埋粉砂、粘土少し混。		A
SK188	11c	×	○	×	68	45	40	箱門形	箱形	10F9A②埋粉砂、粘土やや多く混。		A5
SK189	11d	×	○	×	90	86	11	不整形	箱形	10F9A②埋粉砂、粘土多く混。		C
SK190	10d	×	○	×	—	—	—	—	—	掘込くぼりのみ、遺構とせず。文書		—
SK191	12f	×	○	×	82	41	10	箱門形	箱形	10F9A②埋粉砂、粘土混。	SK203 柱元。	BC3
SK192	12f	×	○	×	95	41	52	箱門形	箱形	同様に記入	SK203 柱元。	BC3
SK193	12f	×	○	×	70	58	73	門形	V字形	同様に記入	SK203 柱元。	BC3
SK194	13f	×	○	×	70	39	19	箱門形	箱形	10F9A①粘土、シルト混、焼土混、焼土少し混。		BE1
SK195	10d	×	○	×	170	42	11	箱門形	箱形	7.25F3②埋粉砂、粘土、焼土少し混、焼土混混混。		BE1
SK196	10d	×	○	×	70	65	14	門形	箱形	10F9A②埋粉砂、粘土少し混。	SK204 柱元。	BC3
SK197	—	×	×	×	—	—	—	—	—	—	—	—
SK198	13f、13g	×	○	×	96	56	7	隅丸長方形	箱形	埋立壁のため未注記	布張りか?	B4
SK199	12g、13f、13g	×	○	×	73	59	4	箱門形	箱形	埋立壁のため未注記		BE1
SK200	13f	×	○	×	70	41	7	箱門形	箱形	10F9A②埋粉砂、粘土混。		A5
SK201	13f	×	○	×	62	43	54	箱門形	箱形	10F9②埋粉砂、粘土混、中砂少し混。		A4、5
SK202	13d、13e	×	○	×	108	103	(289)	門形	同様に記入	同様に記入	布張り、	C1、2
SK203	12d、12e	×	○	×	227	196	(284)	箱門形	同様に記入	同様に記入	布張り、	BC3
SK204	12d	×	○	×	67	25	50	箱門形	箱形	2.5V②中砂混、シルト、粘土混、黄色土少し混。	SK21 柱元。	C3
SK205	12d	×	○	×	52	40	2	箱門形	箱形	10F9A②埋粉砂、粘土やや多く混。		A
SK206	12d	×	○	×	58	34	16	箱門形	箱形	10F9A③埋粉砂、粘土少し混。		—
SK207	12e	×	○	×	52	36	8	門形	箱形	2.5V②埋粉砂、粘土やや多く混。		—
SK208	12d	×	○	×	22	21	1	不整形	箱形	10F9A③埋粉砂、粘土若干混。		—
SK209	12d	×	○	×	34	32	5	不整形	箱形	2.5V②埋粉砂、粘土混。		—
SK210	12f	×	○	×	69	49	90	箱門形	V字形	同様に記入		BC3
SK211	13f	×	○	×	103	59	25	箱門形	箱形	同様に記入	SK20 柱元。	BC3
SK212	9d、10d	×	○	×	130	103	20	不整形	箱形	10F9A②埋粉砂、粘土混、黄色土混、焼土少し混。		BC3
SK213	10d	×	○	×	58	55	15	門形	箱形	10F9A②埋粉砂、粘土多く混、焼土少し混。		BE1
SK214	10d	×	○	×	48	45	7	門形	箱形	10F9A③埋粉砂、粘土混。	SK204 柱元。	BC3
SK215	10d、20e	×	○	×	155	165	35	不整形方形	箱形	10F9A②埋粉砂、粘土、黄色土少し混。		BE2
SK216	12e、12d	×	○	×	282	19	6	縦長の不整形	箱形	10F9A②埋粉砂、粘土、焼土少し混。	遺構残っている	BE1
SK217	11e、11f	×	○	×	25	22	11	門形	箱形	埋立壁のため未注記		C2
SK218	10d	×	○	×	145	45	25	箱門形	箱形	10F9A②埋粉砂、粘土、焼土、黄色土少し混。		—
SK219	10d	×	○	×	210	23	10	不整形	箱形	10F9A②埋粉砂。		B4
SK220	13d	×	○	×	120	67	19	長方形	箱形	2.5V②埋粉砂、粘土少し混。		—
SK221	12d、12e、13d、13e	×	○	×	110	(91)	30	門形	箱形	10F9A①埋粉砂、シルト混。		B4
SK222	13d、13e	×	○	×	285	112	110	箱門形	箱形	10F9②埋粉砂、粘土混。	SK202に穿られている。SD17(SD25)が土層間に露出した部分とSK222としていた。	—
SK223	13a	×	○	×	220	165	30	長方形	箱形	2.5V②中砂混、粘土、焼粉砂混。		C1
SK224	13a	×	○	×	200	280	23	長方形	箱形	10F9②中砂混、粘土少し混、黄化物、焼土、黄色土少し混。		C2
SK225	13d	×	○	×	108	47	14	長方形	箱形	10F④2 埋立壁、埋粉砂、中砂混、埋粉砂混。		C3
SK226	13e、13e	×	○	×	382	355	43	門形	箱形	2.5V①埋粉砂、粘土混。	SD01の柱と同日付貫。SD01の落ち込み部分か?	BE1
SK227	10e	×	○	×	95	72	16	箱門形	箱形	埋立壁のため未注記	西をSK215と張り合う。	BE2
SK228	12e、13e	×	○	×	88	83	27	門形	箱形	10F9A③埋粉砂、粘土混、中砂混、黄化物少し混。	本層に5号入貫が入る。SD01とは材質異なる貝層石などがある。手取をSK229とした。	BE3
SK229	13f	×	○	×	446	(44)	46	箱門形	箱形	埋立壁のため未注記	SD17及びSD27と張り合う。SK203 柱元。	—
SK230	12a	×	○	×	95	70	21	台形	箱形	10F9A②埋粉砂、白色シルトアゾッド、黄色土少し混。	SK203に穿られている。	—
SK231	12f	×	○	×	46	39	10	箱門形	箱形	10F9A①粘土、シルト混、焼土少し混。		BE3
SK232	13f	×	○	×	88	54	41	箱門形	箱形	10F9A②埋粉砂、粘土、シルト混、焼土少し混。		SK203 柱元。
SK233	13e	×	○	×	46	46	22	門形	箱形	埋立壁のため未注記		BE3
SK234	13f	×	○	×	69	49	34	箱門形	V字形	同様に記入		BE3
SK235	11e、12e	×	○	×	303	263	41	門形	箱形	10F9A②埋粉砂、粘土、シルト混、焼土少し混。	西に溝跡のかたまり有り。	B37
SK236	12d	×	○	×	40	56	11	門形	箱形	10F9A②埋粉砂、粘土少し混、白色シルトアゾッド少し混。		B
SK237	12f	×	○	×	71	49	48	箱門形	箱形	同様に記入		BE3
SK238	11f	×	○	×	68	38	48	箱門形	箱形	同様に記入		SK203 柱元。
SK239	12f	×	○	×	70	36	38	箱門形	箱形	同様に記入		SK203 柱元。
SK240	11d、11e、12d、12e	×	○	×	307	283	32	隅丸長方形	箱形	7.25F3②埋粉砂、黄色土若干混。		BE3
SK241	13e	×	○	×	50	49	58	門形	箱形	5V④粘土、埋粉砂、白色シルトアゾッド混。		C2
SK242	13e	×	○	×	62	52	62	箱門形	箱形	5V④粘土、埋粉砂、白色シルトアゾッド混。		SK207 柱元。
SK243	13e	×	○	×	58	55	78	門形	箱形	5V④粘土、埋粉砂、白色シルトアゾッド混。		SK207 柱元。
SK244	13e	×	○	×	48	46	31	門形	箱形	7.25F3①焼土、埋粉砂混、黄化物少し混。		SK207 柱元。
SK245	11b、11c	×	○	×	80	50	14	方形	箱形	10F9A②中砂混、粘土混。		A
SK246	11b、11c	×	○	×	50	24	3	箱門形	箱形	10F9A③埋粉砂、粘土混。		B
SK247	10e、10e	×	○	×	56	30	5	不整形	箱形	10F9A②埋粉砂、黄色シルト、粘土混。		C1
SK248	11c	×	○	×	54	45	4	門形	箱形	10F9A②埋粉砂、粘土、焼土少し混。		A5

遺構番号	グレイド	1面	2面	3面	長軸(m)	短軸(m)	プラン	断面形状	埋土	備考	時期
SK249	10c	×	○	×	200	97	8 不整形	地原	10VR4(2) 凝結砂、粘土、焼土少し混、黄色シロトブロッコ		D
SK250	11c, 11d	×	○	×	115	67	20 側門形	複形	10VR2(2) 凝結砂、粘土、黄色土粒混		B1
SK251	11c, 11d	×	○	×	50	250	14 側門形	複形	10VR5(2) 凝結砂		B1
SK252	13f	×	×	×	30	20	3 側門形	—	焼瓦間のための土記	SK24・SK27が突出する場所が存在。	B1
SK253	12b	×	○	×	111	89	24 柱方形	地原	7.5V3(2) 凝結砂、粘土混		B1
SK254	12a, 12b, 12c, 13b	×	○	×	168	100	20 不整形側門形	複形	10VR3(2) 凝結砂、粘土、黄色土粒混		B1
SK255	11d	×	○	×	60	25	11 側門形	複形	10VR4(2) 凝結砂		B2
SK256	11d	×	○	×	162	112	20 側門形	複形	10VR4(2) 凝結砂、シロト少し混、黄色土粒混	SK21 柱穴。	C3
SK257	13f	×	○	×	73	29	19 側門形	複形	10VR2(2) 凝結砂、粘土、凝結砂、黄色土粒混		B3
SK258	10e	×	○	×	162	160	12 不整形	複形	10VR5(2) 凝結砂、粘土混	SK22に穿られる。	A5
SK259	13d	×	○	×	55	34	13 隅丸柱方形	地原	10VR4(2) 凝結砂、焼土混、白色シロトブロッコ少し混	SK21 柱穴。	C3
SK260	11b	×	○	×	115	100	19 側門形	複形	10VR5(2) シロト、粘土混		C4
SK261	11b	×	○	×	28	21	6 側門形	複形	10VR6(2) 中粒砂、凝結砂混	SK21を切っている。	C
SK262	10c, 11c	×	○	×	200	179	22 不整形	地原	同前に記入	SK14上の瓦葺をSK262とした。	C4
SK263	12b	×	○	×	67	42	14 側門形	複形	10VR3(1) シロト、粘土混		B2
SK264	12b	×	○	×	75	53	18 側門形	複形	10VR4(2) 凝結砂、粘土少し混、黄色シロト少し混		A5
SK265	11a	×	○	×	40	20	4 側門形	複形	7.5V3(2) 凝結砂、黄色土粒、白色シロト少し混		—
SK266	11a	×	○	×	63	48	11 側門形	複形	10VR4(2) 凝結砂		A1
SK267	10c	×	○	×	87	60	26 柱方形	複形	10VR4(2) 凝結砂、粘土、焼土、黄色土混、炭化物少し混		B3
SK268	11a	×	○	×	40	41	6 側門形	複形	10VR5(2) 中粒砂、粘土、凝結砂混		—
SK269	11a	×	○	×	69	28	2 側門形	複形	10VR4(1) 凝結砂、シロト混		B1
SK270	10c	×	○	×	43	30	11 側門形	複形	10VR2(1) 凝結砂、粘土混	SK22内のピット、SK22基礎部分で覆覆。	C3
SK271	10c	×	○	×	125	57	14 不整形	複形	10VR3(1) 凝結砂		A1
SK272	11a, 12g	×	○	×	185	98	6 側門形	複形	10VR3(1) 凝結砂、粘土混、焼土多量混		C2, 2
SK273	12b	×	○	×	178	157	2 不整形側門形	複形	10VR2(1) 凝結砂、粘土混、焼土、炭化物若干混	SK47に穿られる。	C1, 2
SK274	11g	×	○	×	31	25	6 側門形	複形	10VR5(2) 凝結砂、炭化物を少量含む		B3
SK275	11g	×	○	×	38	36	10 側門形	複形	焼土(10VR3(1) + 10VR6(1)) 凝結砂、粘土混		—
SK276	11g	×	○	×	30	20	2 側門形	複形	10VR4(2) 凝結砂、粘土混		B1
SK277	12f	×	○	×	50	42	6 側門形	複形	10VR3(1) 粘土質シロト	SK18 柱穴。	B4
SK278	12a	×	○	×	76	62	9 方形	地原	10VR3(1) 粗質シロト、焼土の塊上、凝結砂含む		A
SK279	12f	×	○	×	44	37	7 側門形	複形	10VR2(1) 粗質シロト、炭化物、焼土若干含む		A
SK280	12f	×	○	×	40	35	3 側門形	複形	10VR4(2) 粘土質シロト、炭化物、焼土若干含む		—
SK281	12f	×	○	×	34	28	5 側門形	複形	10VR3(2) 粘土質シロト、焼土若干含む		A
SK282	11f	×	○	×	43	33	4 側門形	複形	10VR3(2) 粘土質シロト	SK18 柱穴、SK215と隣一帯。	B4
SK283	11f	×	○	×	18	16	12 側門形	複形	10VR3(2) 粘土質シロト、炭化物、焼土若干含む		B
SK284	11f	×	○	×	18	16	5 側門形	複形	10VR2(2) 粘土質シロト		A
SK285	12a	×	○	×	50	50	9 方形	地原	10VR4(2) 凝結砂、粘土混、黄色土粒若干混	南に伸びる可能性有り、SK25柱穴。	B4
SK286	11g	×	○	×	68	67	13 側門形	複形	10VR2(1) 凝結砂、粘土混、黄色土粒若干混	北に溝道区外へ、東はSK27に穿られている。	A
SK287	11f	×	○	×	75	52	40 側門形	複形	同前に記入	SK23 柱穴。	B3
SK288	8e	×	○	×	40	35	6 門形	複形	2.5V4(1) 凝結砂、粘土混	SK23 柱穴。	—
SK289	8d	×	○	×	41	20	21 門形	V字形	NS1 凝結砂、炭化物を若干含む	SK73に穿られる。	B3
SK290	8d	×	○	×	(34)	24	28 側門形	同前に記入	同前に記入	溝道区外へ北に伸びる。SK19 柱穴。	B3
SK291	8d, 8e	×	○	×	121	49	44 不整形	同前に記入	同前に記入	溝道区外へ北に伸びる。	B2
SK292	12b	×	○	×	24	23	23 門形	複形	10VR4(2) 凝結砂、粘土混、若干焼土を含む		A
SK293	8d	×	○	×	31	30	36 門形	複形	10VR2(2) 凝結砂、黄色ブロッコ		A
SK294	8d	×	○	×	28	21	10 門形	複形	2.5V3(1) 凝結砂、粘土混		—
SK295	8d	×	○	×	28	27	13 門形	複形	2.5V4(1) 凝結砂、粘土混		A
SK296	8d, 8e	×	○	×	130	130	47 隅丸方形	地原	7.5V3(2) 凝結砂、粘土混、焼土少量混	SK291と切り合っている。	B3
SK297	8d	×	○	×	120	53	11 柱方形	地原	2.5V4(2) 凝結砂、粘土混	SK19 柱穴、SK291と隣一帯。	B3
SK298	8d, 8e	×	○	×	205	95	93 不整形	地原	10VR4(2) 凝結砂、粘土混、炭化物、焼土少量混	SK19 柱穴。	B3
SK299	8d	×	○	×	70	46	6 側門形	複形	7.5V2(2) 凝結砂、粘土混		A5
SK300	8d	×	○	×	63	43	7 側門形	複形	10VR3(2) 凝結砂、粘土混、焼土混		—
SK301	8d	×	○	×	62	50	11 不整形	地原	—	穴蔵。	—
SK302	8d	×	○	×	61	52	16 門形	複形	焼瓦間のための土記		B1
SK303	8e, 9e	×	○	×	295	89	37 不整形側門形	同前に記入	同前に記入	SK139の残部の可能性あり、SK227に穿られる。	B1
SK304	9d	×	○	×	118	68	— 不整形	—	—	焼瓦間の遺構か? SK257と埋土は隣接。	C3
SK305	9d	×	○	×	41	40	7 門形	複形	10VR4(2) 中粒砂、粘土混		—
SK306	9d	×	○	×	30	34	3 門形	複形	2.5V4(1) 凝結砂、粘土混		A
SK307	9d	×	○	×	35	25	9 門形	複形	2.5V5(2) 凝結砂、粘土混		B3
SK308	8d, 9d	×	○	×	273	40	側門形	複形	同前に記入		A2
SK309	8d	×	○	×	46	40	22 不整形側門形	V字形	10VR6(2) シロト、凝結砂まじり、白色シロトブロッコ		C3
SK310	13b, 13c, 13d	×	○	×	298	250	278 不整形	同前に記入	同前に記入	SK226が1層である。溝戸。	B1
SK311	9d	×	○	×	60	31	5 方形	地原	10VR1(1) 凝結砂、粘土混		—
SK312	9d	×	○	×	29	27	8 門形	複形	10VR1(1) 凝結砂、粘土混、2cm 程度の焼土を含む	SK26を切っている。	B3

名古屋城三の丸遺跡 VII

遺跡番号	アゾーフ	1画	2画	3画	基輪(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	ブロン	西面形	埋土	備考	時期
SK313	10e	×	×	○	26	26	9	円形	鏡形	10YR2/2 磁器粉, 焼土わずかに混, 黄色土多量。		A
SK314	10e	×	×	○	52	46	7	楕円形	鏡形	5Y2/2 磁器粉, 粘土, 焼土。		A
SK315	10e	×	×	○	42	37	30	楕円形	鏡形	10YR2/1 磁器粉, 粘土, 黄色土粒, 焼土。	SK10 柱元。	A5
SK316	10e	×	×	○	43	34	12	楕円形	鏡形	7.5YR3/1 磁器粉, 粘土, 焼土, 黄褐色土わずかに混。		A5
SK317	10e	×	×	○	31	29	15	円形	鏡形	10YR2/3 磁器粉, 粘土。	SK12 柱元。	A5
SK318	10e	×	×	○	35	21	12	楕円形	楕形	10YR2/3 磁器粉, 粘土, 黄色土粒わずかに混。		B17
SK319	10e	×	×	○	29	23	33	楕円形	鏡形	10YR2/3 磁器粉, 粘土, 黄色土粒わずかに混。		A5
SK320	10d	×	×	○	23	21	12	円形	鏡形	10YR2/2 磁器粉, 粘土。	SK10 柱元。	B17
SK321	10e	×	×	○	29	24	19	楕円形	鏡形	10YR2/2 磁器粉, 粘土, 黄色土粒。		B3
SK322	10e	×	×	○	32	21	18	楕円形	鏡形	10YR2/2 磁器粉, 粘土, 黄色土粒。	SK12 柱元。	A
SK323	10e	×	×	○	55	12	2	楕円形	楕形	10YR2/2 磁器粉, 粘土, 黄色土粒, 白色土多量。		A
SK324	10d, 11d	×	×	○	212	82	—	長方形	—	7.5YR3/2 磁器粉, 粘土, 黄色土粒多量。		B2
SK325	10e, 11e	×	×	○	259	66	—	楕円形	—	7.5YR3/2 磁器粉, 粘土, 黄色土粒多量。		A5
SK326	11e	×	×	○	30	30	26	円形	鏡形	10YR2/2 磁器粉, 粘土, 黄色土粒わずかに混。	SK16 柱元。	B17
SK327	10e	×	×	○	115	42	15	楕円形	楕形	10YR2/2 磁器粉, 粘土, 黄色土粒わずかに混。	SK34 にかかり半分は混している。	A3
SK328	10d	×	×	○	96	81	4	長方形	鏡形	10YR3/1 磁器粉, 粘土。		—
SK329	11e	×	×	○	61	61	42	円形	V字形	10YR2/1 磁器粉, 粘土, 焼土, 黄褐色土多量。		SK10 柱元。
SK330	11d	×	×	○	147	86	53	長方形	—	同様に記入。		B2
SK331	9d	×	×	○	—	—	—	—	—	—	SK35 にかつられている。	A1
SK332	10d	×	×	○	99	36	17	長方形	不整形	10YR4/2 磁器粉, 中粒砂, 黄色土粒, 白色シルト多量。		B3
SK333	11e	×	×	○	57	45	9	楕円形	楕形	10YR4/2 磁器粉, 粘土。	SK10 柱元。	A5
SK334	11e	×	×	○	48	46	0	円形	楕形	10YR4/2 磁器粉, 粘土, 黄色土粒わずかに混。	SK13 柱元。	A3
SK335	11e	×	×	○	50	49	27	円形	楕形	10YR4/2 磁器粉, 粘土, 黄色土ブロック多量。	SK10 柱元。	A5
SK336	11e	×	×	○	44	44	32	円形	鏡形	10YR4/2 磁器粉, 粘土, 黄色土ブロック多量。	SK10 柱元。	A5
SK337	11e	×	×	○	56	52	26	楕円形	鏡形	10YR4/2 磁器粉, 粘土, 黄色土粒わずかに混。	SK10 柱元。	A5
SK338	10e	×	×	○	120	101	14	楕円形	楕形	10YR4/2 磁器粉, 粘土, 黄色土粒, 焼土わずかに混。		A3
SK339	11e	×	×	○	51	41	68	楕円形	楕形	10YR2/2 磁器粉, 粘土, 白色土粒多量。	SK13 柱元。	A2
SK340	10e	×	×	○	31	28	5	方形	楕形	10YR4/2 磁器粉, 粘土, 黄色土粒。		—
SK341	9d, 10d	×	×	○	161	45	—	不整形	—	—	西側に SK 02 にかつられている。	C1
SK342	11d	×	×	○	85	63	3	楕円形	楕形	10YR4/2 磁器粉, 粘土, 焼土。		—
SK343	11c	×	×	○	42	36	19	楕円形	鏡形	10YR4/2 磁器粉, 粘土, 焼土多量。		A
SK344	9d	×	×	○	22	21	9	円形	鏡形	10YR2/2 磁器粉, 中粒砂, 焼土。		A
SK345	11c	×	×	○	160	65	11	楕円形	楕形	10YR4/2 磁器粉, 粘土, 黄色土粒, 焼土わずかに混。		A5
SK346	11c	×	×	○	41	32	5	楕円形	楕形	10YR4/2 磁器粉, わずかに焼土。		A
SK347	11c	×	×	○	97	59	10	楕円形	楕形	10YR4/2 磁器粉, 黄色シルトブロック多量。	SK23 柱元。	C1
SK348	11c	×	×	○	—	—	—	—	—	—	焼土と混濁せず。欠落。	A
SK349	11e	×	×	○	61	34	13	楕円形	鏡形	10YR4/2 磁器粉, 黄色土粒わずかに混。		A
SK350	11e	×	×	○	76	44	21	楕円形	鏡形	10YR4/2 磁器粉, 黄色土粒わずかに混。	SK17 柱元。	B3
SK351	11f	×	×	○	76	54	10	楕円形	鏡形	10YR4/2 磁器粉, 粘土, 黄色土粒, 焼土多量。		A
SK352	11f	×	×	○	53	41	9	楕円形	楕形	10YR4/2 磁器粉, 粘土, 焼土。		A5
SK353	12d	×	×	○	88	54	—	不整形	—	—	張り込みは確認できず。遺物集積層と混濁した。	A2
SK354	9d	×	×	○	26	21	6	楕円形	楕形	10YR4/2 磁器粉, 黄色土粒わずかに混。		A
SK355	11a	×	×	○	24	23	10	円形	V字形	10YR2/2 磁器粉。	SK07 柱元。	A4
SK356	11a, 11b	×	×	○	30	30	27	楕円形	V字形	10YR2/1 磁器粉, 粘土。	SK07 柱元。	—
SK357	11a	×	×	○	29	27	6	不整形円形	鏡形	10YR2/3 磁器粉, 粘土, 黄色土粒, 黄色土粒, 焼土わずかに混。	SK35 と重なっている。SK09 柱元。	A3
SK358	12a	×	×	○	45	34	19	楕円形	鏡形	10YR2/1 磁器粉, 粘土, 焼土。		A
SK359	12a	×	×	○	37	16	19	楕円形	鏡形	10YR2/1 磁器粉, 粘土。	SK09 柱元。	A3
SK360	12a	×	×	○	51	34	32	楕円形	鏡形	10YR2/2 磁器粉, 粘土, 黄色土ブロック, 白色シルトブロック, 焼土わずかに混。	SK303 と重なっている。	A
SK361	11a	×	×	○	—	—	—	—	—	SK304 土層+カフ。		D1
SK362	10e	×	×	○	59	59	—	円形	同様に記入。	焼石有り。セクション図面あり。		D1
SK363	10e, 10c	×	×	○	95	76	16	方形	楕形	10YR3/1 磁器粉, 粘土。	粘土・焼石有り。	C3
SK364	11d	×	×	○	19	14	—	楕円形	—	—	未観	—
SK365	11e	×	×	○	25	23	—	円形	—	—	—	—
SK366	11e	×	×	○	24	24	—	円形	—	—	SK17 柱元。	B3
SK367	11e	×	×	○	41	29	12	楕円形	鏡形	10YR2/2 磁器粉, 粘土, 黄色土粒。	SK16 柱元。	A
SK368	11e	×	×	○	68	46	13	楕円形	楕形	10YR2/2 磁器粉, 粘土わずかに混, 中粒砂, 黄色土, 黒土, 白色シルト多量。		C5
SK369	11f	×	×	○	24	23	13	円形	鏡形	10YR4/2 磁器粉, 黄色土わずかに混。	SK17 柱元。	B3
SK370	11f	×	×	○	22	21	6	円形	楕形	10YR2/2 磁器粉, 黄色土多量。		A
SK371	11e	×	×	○	36	35	17	長方形	鏡形	10YR3/2 磁器粉, 黄色土ブロック, 焼土わずかに混。	SK17 柱元。	B3
SK372	9d	×	×	○	31	30	—	円形	—	—	—	—
SK373	9e	×	×	○	—	—	—	円形	—	—	—	—

遺構一覧表

遺構番号	グリップ	1面	2面	3面	異軸(60)	距離(30)	厚さ(30)	プラン	断面形	埋土	備考	時期
SK374	11f	×	×	○	44	—	—	5f 内郭	竪形	図面に記入	セクション図面有り、SA02 埋込、SA05 埋込。	B3
SK375	12a	×	×	○	35	33	—	内郭	—	—	—	B4
SK376	10d	×	×	○	46	43	—	隅丸正方形	—	—	—	—
SK377	11a	×	×	○	76	65	—	5f 内郭	—	—	壁上部、遺構群 S020 に埋れる、前土壌の層分、ビレットでない。	—
SK378	11d	×	×	×	43	41	—	隅丸方形	—	—	前土壌の層分、ビレットでない。	A
SK379	10d	×	×	×	—	—	—	—	—	—	前土壌の層分、ビレットでない。	—
SK380	10d	×	×	×	—	—	—	—	—	—	前土壌の層分、ビレットでない。	—
SK381	10d	×	×	×	—	—	—	—	—	—	ビレットの層分を遺構と認識。	—
SK382	11a	×	×	×	41	36	26	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、褐色砂。	—	A
SK383	11b	×	×	○	40	29	20	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、褐色砂。	—	A
SK384	10c	×	×	○	37	31	29	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、黄色土プロット。	SK363 の	A
SK385	11a	×	×	○	36	32	14	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、白色シムトプロット。	SK357、SK400 と重なっている。	—
SK386	11a、11b	×	×	○	36	32	33	半整三角形	V 字形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土プロット。	SK388 と重なっている。	A
SK387	11b	×	×	○	32	29	3	内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土。	—	—
SK388	11a、11b	×	×	○	29	45	16	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄土、黄色土。	SK386 にかかっている。SK007 埋込。	A3
SK389	11a	×	×	×	—	—	—	—	—	—	SK007 内に半埋込入っていたが遺構と認められなかったため欠番。	A
SK390	11b	×	×	○	34	29	17	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土、黄色土プロット、白色シムトプロット。壁土の小ずかに。	—	A
SK391	11a	×	×	×	25	24	19	内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土、黄色土プロット。	—	—
SK392	11b	×	×	○	25	23	5	内郭	竪形	図面に記入	—	A
SK393	12a	×	×	○	30	24	13	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄土。黄色土プロット多量。	—	—
SK394	11a、12a	×	×	○	27	26	15	内郭	V 字形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄土。	—	A
SK395	12a	×	×	○	27	23	10	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄土多量。	—	A
SK396	12a	×	×	○	45	37	44	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土プロット、黄色土、黄土。	—	A
SK397	11a	×	×	○	22	18	27	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土、黄土。	—	A
SK398	11a	×	×	○	22	20	13	内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土、黄土。	—	A
SK399	12a	×	×	○	21	19	13	内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土。	—	—
SK400	12a	×	×	○	44	41	5	内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄土の小ずかに。	—	A4
SK401	12a	×	×	○	53	39	30	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土、白色シムトプロット、黄土。	SK405 にかかっている。SK007 埋込。	A4
SK402	12b	×	×	○	61	59	2	内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土。黄土の小ずかに。	—	A3
SK403	12a	×	×	○	41	24	5	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土。黄土の小ずかに。	SK360 と重なっている。	—
SK404	11a	×	×	○	28	24	23	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土、白色シムトプロット。	—	—
SK405	12a、12b	×	×	○	30	26	23	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土、白色シムトプロット。	SK401 と重なっている。	—
SK406	12a	×	×	○	46	41	23	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土プロット、黄土。黄土の小ずかに。	—	A
SK407	11a	×	×	×	40	33	32	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土プロット。	SK408 と重なっている。	—
SK408	11a	×	×	×	32	31	19	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土プロット。	SK407 と重なっている。	—
SK409	11c	×	×	×	34	24	13	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土プロット。黄土の小ずかに。	SK385 と重なっている。	—
SK410	11b	×	×	○	20	37	16	内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、白色シムトプロット、黄色土。	SK23 埋込。	C1
SK411	11b	×	×	○	37	36	5	内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土。	—	A4
SK412	11b	×	×	○	29	27	7	内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土。南北部分有り。	—	A4
SK413	11b	×	×	○	29	28	48	内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土。黄土多量。	SK23 埋込。	C1
SK414	11b	×	×	○	41	39	19	内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土プロット。	SK04 埋込。	A3
SK415	11b、11c	×	×	○	35	34	23	内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土プロット。	—	A3
SK416	11c	×	×	○	33	27	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土プロット、黄色土。	SK461 と重なる。	A	
SK417	11c	×	×	○	51	43	54	半整前内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土プロット多量。	SK23 埋込。	C1
SK418	10c	×	×	○	43	35	6	内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土プロット多量。	—	A
SK419	10c、11c	×	×	○	40	22	22	10f 内郭	V 字形	10YR2-3 顔面砂、粘土、褐色砂。黄色土プロット多量。黄土の小ずかに。	SK14 にかかり切れている。	A
SK420	11c	×	×	×	30	29	31	内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土。黄土の小ずかに。	SK04 埋込。	A3
SK421	11c	×	×	○	22	21	13	内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土プロット、白色シムトプロット。黄色土。	SK08 埋込。	A2
SK422	10c	×	×	○	24	19	18	10f 内郭	V 字形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土。黄土の小ずかに。	—	—
SK423	10c	×	×	○	28	27	53	内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土プロット、白色シムトプロット、黄土、褐色砂。	SK453 と重なる。	A
SK424	10c	×	×	×	27	24	36	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土。	SK04 埋込。	A3
SK425	10c、10d	×	×	○	43	38	40	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土。	—	A
SK426	10d	×	×	○	40	38	49	内郭	V 字形	10YR2-3 顔面砂、粘土、白色シムトプロット、黄土。	—	A
SK427	10d	×	×	○	42	38	45	半整前内郭	V 字形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土プロット、黄土。	SK06 埋込。	A2
SK428	10c、10d	×	×	○	43	28	13	10f 内郭	竪形	10YR2-3 顔面砂、粘土、黄色土、黄土。	—	—

名古屋城三の丸遺跡 VII

遺跡番号	アゾッド	1画	2画	3画	基軸(m)	短軸(m)	厚さ(m)	プラン	西面形	埋土	備考	時期
SK429	10d	×	×	○	40	34	48	箱門形	V字形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土、黄土。		A
SK430	10d	×	×	○	36	35	32	門形	V字形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック、白色シムトブロック。焼土。焼土わずかに混入。		A
SK431	11c, 11d	×	×	○	38	33	32	箱門形	V字形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土、黄土。	SK23 柱穴。	C1
SK432	11d	×	×	○	31	29	12	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色ブロック多量。	SK06 土柱穴。	A2
SK433	11c	×	×	○	33	33	32	箱門形	V字形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土、白色シムトブロック。		—
SK434	11c	×	×	○	38	31	9	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土、黄土。		—
SK435	12b	×	×	○	29	22	14	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック、白色シムトブロック。		—
SK436	12b, 12c	×	×	○	105	100	23	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック。	裾部に SK439 有り。	A
SK437	12c	×	×	○	14	14	14	門形	V字形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック。		—
SK438	13c	×	×	○	18	18	7	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック。焼土。焼土部分有り。	SK14 にかなり傾いている。	—
SK439	12c	×	×	○	33	28	32	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土。		—
SK440	12c	×	×	○	36	21	14	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土、黄土。		B1
SK441	13c	×	×	○	62	46	8	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック。	裾部に SK442 有り。	—
SK442	12c	×	×	○	22	20	5	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土。		—
SK443	11c, 11d	×	×	○	(110)	38	9	平型形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、白色、黄色シムトブロック。		—
SK444	11d	×	×	×	50	43	22	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック。		A
SK445	11c	×	×	○	62	25	28	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄土。		—
SK446	11c	×	×	○	75	31	19	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、白色、黄色シムトブロック。焼土。焼土わずかに混入。	SK23 柱穴。	C1
SK447	11c	×	×	○	51	46	68	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック。焼土。焼土わずかに混入。		—
SK448	11c	×	×	○	35	25	4	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック、黄色土。		—
SK449	11c	×	×	○	28	24	7	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック、黄色土、黄土。		—
SK450	11c	×	×	○	25	20	6	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土、黄土。		—
SK451	10c, 11c	×	×	○	230	165	7	平型門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック、黄土。	SK422 中に含む。SK430、SK452、SK453 と重なる。	A3
SK452	11c	×	×	○	29	19	3	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック。	SK451 と重なる。	—
SK453	10c	×	×	○	42	30	20	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄土。	SK423、SK451 と重なる。	—
SK454	10b, 11b	×	×	○	43	43	28	平型門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色ブロック、黄土。	SK23 柱穴。	C1
SK455	10b	×	×	○	40	30	38	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土、白色シムト。焼土。焼土わずかに混入。		A
SK456	10b	×	×	○	95	62	5	平型方形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄土。	SK457 と重なる。	—
SK457	10b	×	×	○	41	33	49	箱門形	V字形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土ブロック。	SK456 と重なる。	A
SK458	11c	×	×	○	37	28	3	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土ブロック。	SK23 柱穴。	C1
SK459	11b	×	×	○	24	23	28	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土、黄色土。焼土。焼土わずかに混入。		—
SK460	11c	×	×	○	24	19	28	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土ブロック。		B1
SK461	11c	×	×	○	38	37	42	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック、黄色土。焼土。焼土わずかに混入。	SK410 と重なる。	—
SK462	11c	×	×	○	35	30	48	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土。		—
SK463	11c	×	×	○	19	16	5	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土。焼土。焼土わずかに混入。		—
SK464	11c	×	×	○	50	39	27	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土、黄色シムト。		A
SK465	11c	×	×	○	23	21	7	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土。		—
SK466	11c	×	×	○	24	24	4	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック。		—
SK467	11c	×	×	○	28	28	6	平型門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック。焼土。		—
SK468	11c	×	×	○	21	18	10	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土。		A
SK469	12d	×	×	×	25	25	15	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土。		—
SK470	12c	×	×	○	114	82	8	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック、黄色土。		—
SK471	12d	×	×	○	11	16	6	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄土、炭化物質。		—
SK472	12d	×	×	○	33	33	6	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色土。		—
SK473	11d, 12d	×	×	○	34	24	12	箱門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック。		—
SK474	11d, 12d	×	×	○	21	21	18	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック。		—
SK475	12d	×	×	○	21	21	11	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土。焼土。焼土わずかに混入。		—
SK476	12d	×	×	×	12	11	2	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄色シムトブロック。		—
SK477	12d	×	×	×	11	11	2	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄土、炭化物質。		—
SK478	12d	×	×	×	12	10	2	門形	筒形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄土、炭化物質。		—
SK479	12d	×	×	○	20	18	30	門形	V字形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、白色、黄色シムトブロック。焼土。焼土わずかに混入。		A
SK480	12d	×	×	○	25	23	27	門形	V字形	10YR3/2 煉瓦積砂、粘土、黄土、黄色シムト、炭化物質。		—

遺構一覧表

遺構番号	グリッド	1面	2面	3面	基礎幅(m)	基礎長さ(m)	厚さ(m)	プラン	断面形	埋土	備考	時期
SK481	13d	×	×	○	20	18	12	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、焼土、黄色シルトブロック、炭化物混入。		—
SK482	13d	×	×	○	21	21	2	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、焼土、炭化物混入。		B1
SK483	12b, 13d	×	×	○	13	10	5	方形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、焼土、炭化物混入。		—
SK484	13c, 13d	×	×	×	430	300	25	不整形門	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、焼土、黄色シルトブロック、炭化物混入。	断面にSK485より、直中にSK22が1つ入っている。SK40と同じ。	C1
SK485	13d	×	×	×	60	47	9	階門形	鏡形	埋土(10VRC1+7.5VRC4基礎形砂)粘土、白色、黄色シルトブロック、炭化物混入。		—
SK486	13d	×	×	○	160	62	12	平T形階門	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、焼土、黄色シルトブロック、炭化物混入。		B4
SK487	13d	×	×	○	22	29	7	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルトブロック、炭化物混入。		—
SK488	12c	×	×	○	170	52	10	不整形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルトブロック。		—
SK489	12c	×	×	○	128	92	30	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、白色、黄色シルトブロック、炭化物混入。		A
SK490	12c	×	×	○	38	29	—	—	—	—	—	—
SK491	11d	×	×	○	18	15	10	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、炭化物混入、焼土および炭。	SK23柱穴。	C1
SK492	11d	×	×	○	16	13	8	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、焼土混。		—
SK493	12c	×	×	×	33	31	9	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルト、炭化物混入。焼土および炭。		—
SK494	11c	×	×	×	21	19	17	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルトブロック、焼土多量混入。		—
SK495	11c	×	×	○	38	36	11	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルトブロック、炭化物混入。	SH10柱穴。	A5
SK496	11c	×	×	○	30	30	22	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色土、焼土混。	SH17柱穴。	B3
SK497	11c	×	×	○	25	23	8	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色土、焼土混。	SH13柱穴。	A3
SK498	11c	×	×	○	32	40	24	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、白色、黄色シルト、黄色土混。焼土および炭。		B1
SK499	11c	×	×	○	41	39	16	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルトブロック、黄色土、焼土混。	SH12柱穴。	A5
SK500	11c	×	×	○	40	38	26	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルトブロック、黄色土、焼土混。	SH10柱穴。	A5
SK501	11c	×	×	○	36	30	17	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルト、焼土混。		A
SK502	11c	×	×	○	27	27	9	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルト混。焼土および炭。		A
SK503	11c	×	×	○	38	38	14	不整形門	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルト、黄色土、焼土混。	SH10柱穴。	A5
SK504	11c	×	×	○	35	31	6	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルトブロック混。		A
SK505	11c	×	×	○	23	19	5	階門形	鏡形	7.5VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルトブロック、焼土混。		—
SK506	11f	×	×	○	38	28	5	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、焼土混。		—
SK507	11f	×	×	○	58	58	28	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、白色、黄色シルトブロック、黄色土混。		B1
SK508	11f	×	×	○	52	38	5	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、白色、黄色シルトブロック混。焼土および炭。		—
SK509	11f	×	×	○	30	37	14	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、白色、黄色シルトブロック混。		A5
SK510	11f	×	×	○	33	32	5	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルトブロック、焼土混。	SH13柱穴。	A3
SK511	11f	×	×	○	26	25	11	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルトブロック混。焼土および炭。		—
SK512	11c, 12f	×	×	○	26	25	17	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルト混。		—
SK513	12f	×	×	○	60	60	50	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、焼土混。	SK514と重なる。柱間有り、柱間部分が深い。	—
SK514	12f	×	×	○	53	32	26	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルトブロック混。	SK513と重なる。	A
SK515	11f	×	×	○	31	29	10	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルト混。	SH18柱穴。SK282と同じ形状。	B4
SK516	11g	×	×	○	44	42	10	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、焼土混。		—
SK517	11g	×	×	○	20	22	12	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、焼土混。	SK63柱穴。	A4
SK518	11g	×	×	○	—	—	—	—	—	未定形	柱間と遺構ではない。	—
SK519	11g	×	×	○	33	30	33	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、焼土、焼土および炭。	柱間有り。SK63と同一。	A4
SK520	12g	×	×	○	38	21	7	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色土混。		A3
SK521	11b, 12b	×	×	○	161	131	17	方形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、白色シルトブロック混。焼土多量混入。		A
SK522	12b	×	×	○	30	34	3	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、焼土、焼土および炭。		—
SK523	12b	×	×	○	29	24	46	階門形	V字形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色土混。焼土および炭。		A
SK524	12b	×	×	○	28	26	28	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、焼土、焼土および炭。	SK65柱穴。	A3
SK525	12c	×	×	○	120	100	15	方形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、焼土混。		—
SK526	12c, 13c	×	×	○	95	88	54	門形	鏡形	同面有り。	柱間有り。SK228と同じ遺構。	A
SK527	9d, 9e	×	×	○	170	119	40	方形	鏡形	同面有り	SK35に切られている。SH19柱穴。	B3
SK528	11f	×	×	○	32	32	41	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルト混。焼土多量混入。		—
SK529	11c, 12f	×	×	○	25	27	10	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、黄色シルト混。		—
SK530	11g, 12g	×	×	○	48	29	21	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土、焼土混。		—
SK531	12f	×	×	○	21	18	6	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土混。		—
SK532	12f	×	×	○	116	107	8	階門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土混。および炭。		A
SK533	12g	×	×	○	24	24	24	門形	鏡形	10VRC2基礎形砂、粘土混。	SK534と重なる。SK65柱穴。	A3

名古屋城三の丸遺跡 VII

遺跡番号	アゾド	1画	2画	3画	基軸(m)	短軸(m)	厚さ(m)	ブロン	西面形	埋土	備考	時期
SK534	12g	×	×	○	62	46	8	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメントブロック、焼土	SK533 と重なる、SH18 柱元。	B4
SK535	12g	×	×	○	58	53	23	不整形形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、焼土		A
SK536	12g	×	×	○	103	102	5	不整形形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメント、焼土		A
SK537	12g	×	×	○	43	28	21	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメント	SA05 柱元。	B4
SK538	12f	×	×	○	22	18	16	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメント	SA05 柱元。	B4
SK539	11f	×	×	○	(28)	74	12	不整形形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメント、焼土		A
SK540	11g	×	×	○	34	33	16	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメント	SK03 土柱元。	A4
SK541	11d	×	×	×	32	30	39	門形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメントブロック		—
SK542	11e	×	×	○	32	30	18	門形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメント、焼土	SH12 柱元。	A5
SK543	10c	×	×	×	53	28	37	掘削形	V字形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメント、焼土		A
SK544	10c	×	×	×	48	34	55	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメント、焼土		—
SK545	11e	×	×	○	24	23	5	門形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメントブロック、焼土		—
SK546	11c, 11d	×	×	○	34	26	19	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメント		—
SK547	9a	×	×	○	180	65	40	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメントブロック、小石	SK23 にかかり切れている、SA06 柱元。	C1
SK548	8a, 8b	×	×	○	140	136	50	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、白色、黄色シメントブロック、赤色粘土、黄化砂	SK567 と重なる。	C3
SK549	8a	×	×	○	77	49	14	不整形形	矩形	10VRC2、10VRC1 雑礫砂、焼土、灰瓦砂	SH11 柱元。	A3
SK550	8a	×	×	○	65	62	6	門形	矩形	焼土、10VRC2、10VRC1 雑礫砂、黄化砂、焼土	SK23 にかかり切れている、SA06 柱元。	C1
SK551	8a	×	×	○	53	36	41	門形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、白色、黄色シメントブロック、赤色粘土	SH11 柱元。	A3
SK552	8a	×	×	○	55	35	28	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、赤褐色土	SH11 柱元。	A3
SK553	8a	×	×	○	—	—	—	—	—	—	—	—
SK554	8a, 10a	×	×	○	120	55	48	掘削形	矩形	左側：10VRC1 雑礫砂、粘土、赤褐色土、右側：10VRC4 雑礫砂、粘土、黄色シメントブロック、赤色粘土	SA06 柱元。	C1
SK555	8a, 10a	×	×	○	110	60	11	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメント、小石		B4
SK556	9b	×	×	○	200	133	100	掘削形	矩形	7.5VRC2 雑礫砂、粘土	SH12、SK557、SK560 と重なる。	B1
SK557	9b	×	×	○	70	40	30	掘削形	矩形	10VRC1 雑礫砂、黄色シメント、焼土	SH12、SK556 と重なる。	B1
SK558	8a	×	×	○	25	21	12	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、白色シメントブロック、焼土		—
SK559	8a	×	×	○	26	24	6	門形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色土、黄化砂		—
SK560	8a, 9b	×	×	○	67	53	32	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメントブロック、赤褐色土、黄色土	SH11 柱元。	A3
SK561	8a	×	×	○	31	31	—	門形	—	10VRC2 雑礫砂、粘土、焼土		—
SK562	8a	×	×	○	25	23	21	門形	—	10VRC2 雑礫砂、粘土、焼土		B1
SK563	9b	×	×	○	23	20	25	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色土	SK565 と重なる。	—
SK564	8a, 9b	×	×	○	63	56	22	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、赤褐色土、焼土	SK565 と重なる。	A
SK565	8a, 9b	×	×	○	69	46	31	掘削形	矩形?	10VRC1 雑礫砂、粘土、黄色土、焼土	SK563、SK564 と重なる、SH11 柱元。	A3
SK566	9b	×	×	○	49	40	22	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメントブロック、黄色土		—
SK567	8a	×	×	○	90	56	41	不整形掘削形	矩形	10VRC1 雑礫砂、粘土、黄色シメントブロック、赤褐色土	SK548 と重なる。	—
SK568	8a	×	×	○	65	55	40	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、白色シメント、赤褐色土	SH11 柱元。	A3
SK569	8b	×	×	○	60	55	43	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、白色シメント、黄色シメント	SH11 柱元。	A3
SK570	9c, 9d	×	×	○	123	53	—	—	—	—	SK02 掘削面南のセット。	—
SK571	13b	×	×	○	46	44	28	門形	—	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色土、黄色シメントブロック、焼土	SA02 柱元。	A5
SK572	13b	×	×	○	24	22	23	門形	V字形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色土、焼土		A
SK573	13b	×	×	○	28	25	60	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色土、白色土、焼土	SH14 柱元。	A4
SK574	13a	×	×	○	28	26	25	門形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、白色シメントブロック、焼土		—
SK575	13a	×	×	○	18	16	9	門形	矩形	10VRC1 雑礫砂、粘土、黄色土、黄色シメント、黄化砂		—
SK576	13a	×	×	○	30	18	15	門形	矩形	10VRC1 雑礫砂、粘土、焼土		—
SK577	13a	×	×	○	30	23	51	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、白色シメントブロック、黄色土	SA02 柱元。	A5
SK578	13a	×	×	○	36	35	34	門形	—	10VRC2 雑礫砂、粘土、白色シメントブロック、黄化砂		A
SK579	12a, 13a	×	×	○	241	55	35	五方形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、白色シメント、焼土		B1
SK580	12a, 13a	×	×	○	136	96	23	門形?	矩形	10VRC1 雑礫砂、粘土、黄化砂		—
SK581	12a	×	×	×	35	30	19	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメント、焼土		—
SK582	12a	×	×	○	100	65	32	掘削形	矩形	10VRC1 雑礫砂、粘土、焼土		A5
SK583	13b	×	×	○	30	24	23	掘削形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメントブロック		—
SK584	12b	×	×	○	32	26	34	掘削形	V字形	10VRC2 雑礫砂、粘土	SH14 柱元。	A4
SK585	12b	×	×	○	28	27	19	門形	矩形	10VRC2 雑礫砂、粘土、黄色シメント		—

遺構番号	グリップ	1面	2面	3面	長軸(m)	短軸(m)	厚さ(m)	プラン	断面形	埋土	備考	時期
SK580	12b	×	×	○	30	18	30	側門形	V字形	10V形2層積層砂、粘土、黄色シロトゾック混、礫化部分有。		—
SK307	12b	×	×	○	36	32	22	側門形	横形	10V形1層積層砂、粘土、黄色シロトゾック混、礫化部分有。		A
SK588	12b	×	×	○	63	54	4	門形	横形	10V形2層積層砂、粘土、黄色シロトゾック混、礫化部分有。	SB14 柱穴。	A4
SK589	12b	×	×	○	41	40	20	門形	横形	10V形2層積層砂、粘土、白色シロトゾック混、礫土多量。		A4
SK590	12a	×	×	○	43	28	4	側門形	横形	10V形2層積層砂、粘土、白色シロトゾック混、礫土多量。	SB14 柱穴。	A4
SK591	13a	×	×	○	52	37	22	側門形	横形	10V形2層積層砂、粘土、白色シロトゾック混、礫化部分有。		—
SK592	13a	×	×	○	40	35	—	側門形	—	未注記	SA02 柱穴。	A5
SK593	12b	×	×	○	22	20	—	門形	—	未注記	SB14 柱穴。	A4
SK594	12a	×	×	○	40	28	—	側門形	—	未注記		—
SK595	12a	×	×	○	25	16	—	側門形	—	未注記		B1
SK596	12a	×	×	○	31	22	—	側門形	—	未注記		—
SK597	12a	×	×	○	14	12	—	門形	—	未注記		—
SK598	12b	×	×	○	22	21	—	門形	—	未注記		—
SK599	12b	×	×	○	20	14	—	門形	—	未注記		—
SK600	12b	×	×	○	31	20	—	門形	—	未注記		—
SK601	13c	×	×	○	19	16	—	方形	—	未注記		—
SK602	10b	×	×	○	39	37	—	門形	—	未注記		—
SK603	0b	×	×	○	39	37	—	門形	—	未注記		—
SK604	10b	×	×	○	33	23	—	側門形	—	未注記		—
SD01	12b ~ 12c, 13a ~ 13b	○	×	×	2811	162	48	溝状	横形	同面に記入	東西に走る溝の断面。石積溝、埋戻あり。	C3
SD02	13b	×	×	×	441	316	23	溝状	横形	同面に記入	行徳溝 S001 に接続し、池上にある。調査区外側に伸びる。調査有り。	C3
SD03	12a, 13a	○	×	×	340	59	17	長方形	横形	同面に記入	行徳溝 S001 に接続し、SD01 より東に伸びる。	C3
SD04	13a	×	×	×	80	162	48	溝状	横形	同面に記入	行徳溝 S001 に接続し調査区外側に伸びる部分。	C3
SD05	13j	×	○	×	320	52	11	溝状	横形	上層1.5V4C1シロト、埋戻砂を含む。ボラ土を含む。下層10V形3シロト、埋戻砂を含む。ボラ土含む。	調査区外に伸びる。SD17を切っている。	D
SD06	12c, 13c	×	○	×	680	77	23	溝状	横形	10V形2層土、埋戻砂、10V形6の粘土。		B4
SD07	13j, 13k	×	○	×	356	26	19	溝状	横形	10V形1層埋戻砂、シロト、堆土ボラ土。		—
SD08	9d	×	×	×	232	41	15	溝状	横形	2.5V4C1埋戻砂、粘土、ベースの黄色土ボラ土混。		—
SD09	8d, 9d, 10d	×	×	×	1481	40	13	溝状	横形	10V形2層埋戻砂、粘土土。	SD18に伸びる可能性有り。	B3
SD10	11c, 11f	○	○	×	512	312	14	溝状	横形	2.5V3C1シロト、粘土わずかに混。		C1
SD11	11d, 11e, 11f	○	×	×	840	117	13	長方形	横形	10V形3シロト、埋戻砂混、泥化物質多量。	径 10cm以上の石を多く含む。SD21と同。	C3
SD12	10b, 11b, 12b	○	○	○	209	97	溝状	横形	同面に記入	SK02に切られる。	C1	
SD13	11b, 11c	○	×	×	149	10	長方形	横形	10V形2層埋戻砂、粘土。泥化物質わずかに混。		C3	
SD14	11c ~ 11e	○	○	○	1590	144	81	長方形	V字形	同面に記入	SD22と繋がる区画溝の南東部分。	C1
SD15	11c, 11d, 12c, 12d	○	×	×	385	63	43	溝状	横形	上層2.5V4C1埋戻砂、シロト混。下層2.5V3C1埋戻砂。		C3
SD16	10a, 10b	○	○	×	190	75	24	溝状	横形	同面に記入	SK02に切られ溝の可能性高い。	C3
SD17	12c ~ 12d, 13d ~ 13f	×	○	×	3331	172	115	溝状	V字形		SD25, SK222とは同一遺構となる。	B3
SD18	12g ~ 12h	×	○	×	1672	71	89	溝状	横形	2.5V3C1埋戻砂、シロト混。	SD17の南に伸びて東西に走る溝。	B1
SD19	13b	×	○	×	277	53	10	溝状	横形	2.5V3C1埋戻砂、シロト混。		B1
SD20	12g, 12h, 13f	×	○	×	478	27	6	溝状	横形	2.5V3C1埋戻砂、シロト混。		B1
SD21	11c ~ 11f	×	○	×	142	40	8	溝状	横形	同面に記入	SD11と同じ遺構の可能性高い。	C
SD22	13c ~ 13f	×	○	×	1295	77	47	溝状	横形	同面に記入	SD14と同じ遺構。	C1
SD23	8d, 8e	×	○	○	573	97	36	長方形	横形	同面に記入		C1
SD24	11f ~ 13f	×	○	○	1521	51	14	溝状	横形	10V形2層埋戻砂、粘土土。礫土少し混。	ピット状に作り直。	B3
SD25	13c	×	○	×	5571	84	32	溝状	—	同面に記入	SD22と同じ。SK185を挟んで東側にSD27とした。	B3
SD26	12c, 13c	×	○	×	—	90	—	溝状	—	—	SD01の掘り直しを兼ねる SD28とした。	C3
SD27	13f	×	○	×	195	83	37	溝状	横形	10V形2層埋戻砂、粘土土。	SD22と同じ。SK185を挟んで東側にSD27とした。	B3
SD28	13c, 13g	×	○	×	194	53	27	長方形	横形	2.5V3C1埋戻砂、粘土土。		B1
SD29	10d, 11d	×	○	×	408	60	29	溝状	横形	10V形2層埋戻砂。		B1
SD30	13a, 13b	×	○	×	259	29	12	溝状	横形	10V形2層埋戻砂、粘土土。		C
SD31	10b, 11b, 12b, 13b	○	○	○	1832	123	74	長方形	横形	同面に記入	同面有り。	B3
SD32	11c	×	○	×	108	17	8	溝状	横形	10V形2層埋戻砂、粘土土。		B2
SD33	10f, 11f	×	○	×	305	48	11	溝状	横形	10V形2層埋戻砂、粘土土。中粒砂混。		B1
SD34	12c, 12d	×	○	×	412	19	8	溝状	横形	10V形2層埋戻砂、粘土土。	SD21またはSD15と同じの可能性あり。	B1
SD35	8d, 9d	×	○	○	900	64	16	長方形	溝形	10V形1層埋戻砂。		B3
SD36	8d, 9d, 10d	×	○	○	1481	40	13	溝状	横形	10V形2層埋戻砂、粘土土。		B3
SD37	—	×	×	×	—	—	—	—	—	—	欠番とした	B3
SD38	12a, 12b	×	×	○	429	21	10	溝状	横形	2.5V3A2埋戻砂。		B3
SD39	11d ~ 13d	×	○	×	754	97	17	溝状	横形	10V形2層埋戻砂、粘土土。上層土にボラ土を含む。		B3
SD40	8a	×	×	○	255	180	49	長方形	横形	同面に記入	同面有り。SK02北西部につながる溝。	C2
SD41	8b, 8c	×	○	○	310	192	119	長方形	横形	同面に記入	同面有り。SK02から北に流れる溝本流。	—
SD42	9a	×	×	○	170	20	12	溝状	溝形	10V形2層埋戻砂、粘土。黄褐色土混。		—
SD01	12g, 13g	×	×	×	700	534	18	長方形	—	同面に記入	SD01に関連する石積溝構	C3

名古屋城三の丸遺跡Ⅱ

遺跡番号	アゾッド	1面	2面	3面	長軸(m)	短軸(m)	厚さ(m)	ブロン	西面形	埋土	備考	時期	
S302	8a, 8b, 8c, 8d, 9a, 9c, 9d, 10a, 10c, 10d	○	○	○	998	477	137	不整形	矩形	前面に記入	池伏遺構	C3	
S303	8d, 9d	○	×	×	903	102	13	溝状	矩形	前面に記入	S302 壁による砂利の浅い溝状遺構	C3, 4	
S304	10a	×	×	×	148	91	—	—	—	未注記	S302 と S302 の間に存在した瓦葺りの堀割を S304 とした。	C4	
S305	10a	○	×	×	112	102	—	—	—	未注記	瓦が集中して出土した範囲を S305 とした。	C4	
S306	10a	×	×	×	—	—	—	—	—	未注記	瓦が集中して出土した範囲を S306 とした。	C3	
S307	11c, 12f	×	×	○	—	61	5	溝状	矩形	10YH4②	S324 と並行し東にある浅い溝を S307 とした。	—	
S308	12d	×	×	○	—	—	—	—	—	—	S320 から東に出る南北ライン南の溝の西側を S308 とした。ラインの行き先を導くことができなかった。	—	
S309	14c, 14d, 14g	×	×	○	—	—	—	—	—	—	調査区外南側壁で出土した石列を S309 とした。	C3	
S301	—	×	×	×	2642	780	—	—	—	—	礎石建物	D2	
S302	11a, 11b	×	×	○	6525	446	12	隅丸長方形	矩形	前面に記入	礎石建物。S304 と S307 と S309 を包む。	A4	
S303	11g, 11h, 12g, 12h	×	×	○	512	236	23	隅丸長方形	矩形	前面に記入	礎石建物。S305 を包む。	A4	
S304	10b, 10c, 11b, 11e	×	×	○	548	344	26	隅丸長方形	矩形	前面に記入	礎石建物。S308 を切り S302 に包まれる。	A4	
S305	12a, 12b	×	×	○	6525	1168	21	隅丸長方形	矩形	前面に記入	礎石建物。S303 に包まれる。	A3	
S306	12c	×	×	○	310	264	17	隅丸長方形	矩形	前面に記入	礎石建物としたが、礎石建物跡ではない可能性が高い。	A2	
S307	11a, 11b, 12a, 12b	×	×	○	6506	380	25	隅丸長方形	矩形	前面に記入	礎石建物。S309 を切り、S302 に包まれる。	A4	
S308	10c, 10d, 11c, 11d	×	×	○	494	356	20	隅丸長方形	矩形	前面に記入	礎石建物。S304 に包まれる。	A5	
S309	11a, 11b, 12a, 12b	×	×	○	538	406	14	隅丸長方形	矩形	前面に記入	礎石建物。S302 と S307 に包まれる。	A3	
S310	-	-	-	-	520	270	—	—	—	—	長方形	2階・2階の板立柱建物跡。	A4
S311	-	-	-	-	6883	626	—	—	—	—	長方形	2階以上・2階の板立柱建物跡。	A3
S312	-	-	-	-	500	258	—	—	—	—	長方形	2階・1階の板立柱建物跡。	A5
S313	-	-	-	-	500	330	—	—	—	—	長方形	2階・2階の板立柱建物跡。	A3
S314	-	-	-	-	300	210	—	—	—	—	長方形	1階・2階の板立柱建物跡。	A4
S315	-	-	-	-	1420	410	—	—	—	—	長方形	2階以上・1階の板立柱建物跡。	B1
S316	-	-	-	-	430	300	—	—	—	—	長方形	1階以上・1階の板立柱建物跡。	B1
S317	-	-	-	-	610	300	—	—	—	—	長方形	3階以上・1階の板立柱建物跡。	B4
S318	-	-	-	-	280	220	—	—	—	—	長方形	1階・2階以上の板立柱建物跡。	B5
S319	-	-	-	-	6540	1276	—	—	—	—	長方形	2階以上・1階以上の板立柱建物跡。	B5
S320	-	-	-	-	360	130	—	—	—	—	長方形	1階・1階の板立柱建物跡。	B5
S321	-	-	-	-	626	910	—	—	—	—	長方形	3階以上・1階の板立柱建物跡。	C2
S322	-	-	-	-	1056	1236	—	—	—	—	長方形	3階以上・1階以上の板立柱建物跡。	C1
S323	-	-	-	-	570	486	—	—	—	—	長方形	3階・2階の板立柱建物跡。	C1
S324	-	-	-	-	6900	1468	—	—	—	—	長方形	2階以上・2階以上の板立柱建物跡。	C4
S325	-	-	-	-	6500	750	—	—	—	—	長方形	2階以上・2階以下の板立柱建物跡。	D2
S401	-	-	-	-	460	—	—	—	—	—	—	2階の板立柱建物跡。	A3
S402	-	-	-	-	1440	—	—	—	—	—	—	2階以上の板立柱建物跡。	A5
S403	-	-	-	-	11520	—	—	—	—	—	—	10階以上の板立柱建物跡。	B5
S404	-	-	-	-	620	—	—	—	—	—	—	2階の板立柱建物跡。	B3
S405	-	-	-	-	460	—	—	—	—	—	—	2階の板立柱建物跡。	B4
S406	-	-	-	-	1350	—	—	—	—	—	—	6階以上の板立柱建物跡。	C2
S407	-	-	-	-	250	—	—	—	—	—	—	2階以上の板立柱建物跡。	C1
S408	-	-	-	-	1420	—	—	—	—	—	—	2階以上の板立柱建物跡。	C1
S409	-	-	-	-	1120	—	—	—	—	—	—	3階の板立柱建物跡。	C4

遺物一覧表

調査年	発掘調査 No.	目録 No.	産地・材質	器種	時期	口径(mm)	最大径(mm)	底径(mm)	高さ(mm)	内径	内容	動土(西暦)	層1	備考
0001	60	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.44	13.0	5.0	13.0	ヨコナテ	同坑へつぐケズ、 109/87/3に みい遺跡 ヨコナテ			
0002	60	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.44	12.0	4.5	13.0	ヨコナテ	同坑へつぐケズ、 ヨコナテ、自然焼 ヨコナテ			
0003	60	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.50	11.8	4.5	12.1	ヨコナテ	同坑へつぐケズ、 自然焼、ヨコナテ			596/1 灰
0004	60	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.44	12.3	4.0	12.7	ヨコナテ	同坑へつぐケズ、 ヨコナテ			597/1 灰白
0005	60	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.44	12.2	4.8	12.4	ヨコナテ	同坑へつぐケズ、 ヨコナテ			2.59/6/1 灰炭
0006	60	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.44	12.2	4.0	12.4	ヨコナテ	同坑へつぐケズ、 自然焼、ヨコナテ			595/1 灰 1095/2 オリーブ灰
0007	60	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.44	12.4	4.3	12.6	ヨコナテ	同坑へつぐケズ、 自然焼、ヨコナテ			596/1 灰 2.59/6/1 オリーブ灰
0008	60	SK300 5組	020012	須恵焼	作蓋	10.50	12.2	4.2	12.4	ヨコナテ	同坑へつぐケズ、 ヨコナテ			2.597/3 灰炭
0009	60	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.44	11.7	4.0	12.0	ヨコナテ、ややま ス付蓋	同坑へつぐケズ、 ヨコナテ			2.59/6/1 灰炭
0010	60	SK300 1組	020012	須恵焼	作蓋	10.44	10.6	4.3	10.8	ヨコナテ	自然焼、へつぐケ ズ(器蓋不明、並む)			2.59/6/1 灰炭 1094/2 オリーブ灰
0011	60	SK300	020028	須恵焼	作蓋	10.44	13.3	4.9	13.6	ヨコナテ	同坑へつぐケズ、 ヨコナテ			2.59/6/6 灰 ヨコナテ
0012	90	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.44	13.3	4.6	13.5	ヨコナテ	同坑へつぐケズ、 ヨコナテ			109/87/1 灰
0013	60	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.50	12.5	4.3	13.2	ヨコナテ	同坑へつぐケズ、 ヨコナテ			2.59/6/1 灰炭
0014	60	SK300	020027	須恵焼	作蓋	10.50	13.8	4.6	14.0	ヨコナテ	同坑へつぐケズ、 ヨコナテ、自然焼			596/1 灰 2.594/2 灰オリーブ
0015	60	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.50	14.0	4.0	14.2	ヨコナテ	同坑へつぐケズ、 ヨコナテ			109/86/1 灰炭
0016	60	SK300	020027	須恵焼	作蓋	10.44	13.0	4.3	13.2	ヨコナテ	ヨコナテ			2.59/6/1 灰炭
0017	60	SK300 5組	020012	須恵焼	作蓋	10.44	14.0	4.5	14.2	ヨコナテ	同坑へつぐケズ、 ヨコナテ			2.59/5/1 灰炭
0018	60	SK300 5組	020012	須恵焼	作蓋	10.44	10.6	4.0	12.7	ヨコナテ	ヨコナテ、同坑へ つぐケズ			N60 灰 同坑へ つぐケズ
0019	60	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.44	10.5	4.7	11.8	ヨコナテ	ヨコナテ、同坑へ つぐケズ			2.59/5/1 灰
0020	90	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.44	10.8	3.9	13.1	ヨコナテ	口縁部・器底部が り遺残、ヨコナテ、 同坑へつぐケズ			2.59/3/1 灰 同坑へつぐケズ
0021	60	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.50	10.6	4.1	12.1	ヨコナテ	ヨコナテ、自然焼、 同坑へつぐケズ			2.59/6/1 灰炭
0022	60	SK300	020028	須恵焼	作蓋	10.44	11.4	4.4	13.0	ヨコナテ	ヨコナテ、へつぐ ケズ			595/1 灰
0023	60	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.44	11.0	5.0	13.6	ヨコナテ、見込み ヨコナテ	ヨコナテ、同坑へ つぐケズ(器蓋不明)			2.597/2 灰炭 ヨコナテ
0024	60	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.44	11.8	4.4	13.2	ヨコナテ	ヨコナテ、同坑へ つぐケズ			2.59/6/1 灰炭
0025	90	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.44	10.9	4.7	12.0	ヨコナテ	ヨコナテ、同坑へ つぐケズ、自然焼			2.59/6/1 灰炭
0026	60	SK300 5組	020012	須恵焼	作蓋	10.44	11.4	4.7	13.5	ヨコナテ	ヨコナテ、同坑へ つぐケズ、器蓋あり			2.59/5/1 灰
0027	90	SK300	020011	須恵焼	作蓋	10.44	11.1	4.4	13.2	ヨコナテ、指環	ヨコナテ、同坑へ つぐケズ、自然焼			109/87/1 灰 白 109/85/2 蓋
0028	60	SK300	020027	須恵焼	作蓋	10.44	12.0	4.7	12.4	ヨコナテ	ヨコナテ、へつぐ ケズ			109/85/2 蓋 灰炭
0029	60	SK300 5組	020012	須恵焼	作蓋	10.44	12.2	3.7	13.6	ヨコナテ	ヨコナテ、同坑へ つぐケズ			109/86/1 灰 同坑へ つぐケズ
0030	90	SK300	020027	須恵焼	ハコウ	10.44	10.2	4.3	10.4	ヨコナテ	ヨコナテ、器底 ヨコナテ			2.59/6/1 灰炭
0031	60	SK300	020011	須恵焼	高杯	10.44	11.0	4.9	12.0	ヨコナテ	ヨコナテ、自然焼、 轉数文			2.59/6/1 灰炭
0032	60	SK300	020027	須恵焼	高杯	10.44	10.4	4.8	11.6	ヨコナテ	ヨコナテ、轉数文			2.59/6/1 灰炭
0033	90	SK300	020011	須恵焼	高杯	10.44	12.1	4.7	12.1	ヨコナテ	ヨコナテ			109/86/1 灰 同坑へ つぐケズ
0034	60	SK300 5組	020012	須恵焼	高杯	10.44	11.9	5.0	13.0	ヨコナテ	自然焼、器口・器 底にあり			2.59/6/1 灰炭 2.59/3/1 オリーブ灰
0035	60	SK300	020011	須恵焼	高杯	10.11	10.8	4.7	11.7	ヨコナテ	わすれに自然焼、 ヨコナテ			596/1 灰
0036	60	SK300	020027	須恵焼	高杯	10.44	10.2	4.9	11.8	自然焼	自然焼、器口・ 一方のみ残存			597/1 灰
0037	60	SK300	020027	須恵焼	高杯	10.44	11.9	4.8	12.2	ヨコナテ	ヨコナテ			2.59/87/1 灰炭
0038	60	SK300	020027	須恵焼	高杯	10.44	11.2	4.0	10.4	ヨコナテ	ヨコナテ、自然焼			2.59/87/1 灰炭
0039	90	SK300	020027	須恵焼	広口壺?	10.44	10.6	4.5	11.6	ヨコナテ	ヨコナテ、自然焼			2.59/6/1 灰炭
0040	60	SK300 2組	020012	須恵焼	高杯	10.44	11.4	5.0	12.4	ヨコナテ、自然焼	ヨコナテ、自然焼			109/86/1 灰 同坑へ つぐケズ
0041	90	SK300	020011	須恵焼	飯甕	10.44	11.8	6.1	12.0	ヨコナテ	ヨコナテ、自然焼			2.59/6/1 灰炭 59/3/1 オリーブ灰
0042	60	SK300	020027	須恵焼	鉢	10.44	13.1	4.9	13.7	ヨコナテ	ヨコナテ、同坑へ つぐケズ			2.597/2 灰炭
0043	90	SK300	020027	須恵焼	鉢	10.44	11.4	4.6	12.0	ヨコナテ	ヨコナテ、同坑へ つぐケズ			2.59/6/1 灰炭
0044	60	SK300 1組	020012	須恵焼	有蓋圓筒形 缶代	10.44	11.8	4.8	11.8	自然焼	自然焼、自然焼			596/1 灰 1094/2 オリーブ灰
0045	60	SK300	020027	須恵焼	鉢	10.44	11.8	4.8	12.8	ヨコナテ	ヨコナテ、同坑へ つぐケズ			2.59/8/1 灰白 同坑へ つぐケズ
0046	90	SK300	020011	須恵焼	広口壺	10.44	16.2	7.6	17.6	ヨコナテ、器蓋有 ス付蓋	ヨコナテ、ヨコナテ、 ス付蓋			596/1 灰
0047	60	SK300	020011	須恵焼	甕	10.17	10.8	4.8	30.0	ヨコナテ	ヨコナテ、ヨコナテ 器口へつぐケズ			596/1 灰
0048	90	SK300 5組	020011	須恵焼	鉢	10.44?	10.4	4.7	11.6	ヨコナテ、へつぐ ケズ	ヨコナテ、ヨコナテ			2.597/2 灰炭

名古屋城三の丸遺跡Ⅶ

調査号	アノテ	遺跡番号	日付	所在地・材質	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	内径	外径	厚さ	備考
0049	84	SKC08	020011	須磨組 陶器	皿	11-44	27.0	12.9		径27.8	径30.8	厚2.8	ココナデ、オオヤシ、ヘラケモノ
0050	84	SKC08	020012	須磨組 陶器	皿	11-44?		径6.9		径7.8	径8.8	厚2.8	オオヤシ
0051	84	SKC08	020006	須磨組 陶器	皿		24.6	33.2	径14.4	径25.6	径25.6	厚2.6	ココナデ、オオヤシ、オオヤシ、オオヤシ
0052	84	SKC08	020011	土師組 陶器	高脚杯		12.4	径3.5		径3.5	径3.5	厚1.5	ココナデ
0053	84	SKC08	020028	土師組 小壺	小壺		9.6	径4.9		径4.9	径4.9	厚1.9	ココナデ
0054	84	SKC08	020012	土師組 壺	壺		16.0	径17.0		径18.8	径18.8	厚1.8	ハク、白地にコクハク、スズ付
0055	84	SKC08	020027	土師組 壺	壺		18.0	径6.2		径27.7	径27.7	厚6.2	ココナデ、コクハク
0056	84	SKC08	020027	土師組 壺	壺		18.0	径6.3		径27.7	径27.7	厚6.3	ココナデ、スズ付
0057	84	SKC08	020011	土師組 壺	壺		18.0	径6.0		径27.7	径27.7	厚6.0	ココナデ、スズ付
0058	84	SKC08	020011	土師組 壺	壺		15.4			径27.7	径27.7	厚5.4	ハク、オオヤシ
0059	84	SKC08	020028	土師組 壺	壺		3.6			径27.7	径27.7	厚3.6	ココナデ、ハク
0060	84	SKC08	020027	土師組 壺	壺		16.0	径2.3		径27.7	径27.7	厚2.3	ココナデ
0061	84	SKC08	020011	土師組 壺	壺		3.0		径7.0	径7.0	径7.0	厚3.0	調整不明(ヘラケモノ)
0062	84	SKC08	020003	土師組 壺	壺		3.2	径6.1		径6.1	径6.1	厚3.2	調整不明、調整不明
0063	84	SKC08	020011	土師組 台付甕	台付甕		4.7			径6.1	径6.1	厚4.7	調整不明(ヘラケモノ)
0064	84	SKC08	020011	土師組 台付甕	台付甕		3.6			径6.1	径6.1	厚3.6	調整不明、調整不明
0065	84	SKC08	020012	土師組 瓦	瓦		1.45	径0.8	厚0.6			厚0.6	赤瓦
0066	84	SKC08	020012	土師組 瓦	瓦		1.3	径0.9	厚0.9			厚0.9	赤瓦
0067	84	SKC08	020012	土師組 瓦	瓦		1.3	径0.6	厚0.6			厚0.6	赤瓦
0068	84	SKC08	020012	土師組 瓦	瓦		0.55	径0.8	厚0.8			厚0.8	赤瓦
0069	84	SKC08	020012	土師組 瓦	瓦		0.4	径0.4	厚0.4			厚0.4	赤瓦
0070	84	SKC08	020012	土師組 瓦	瓦		0.41	径0.2	厚0.45			厚0.45	赤瓦
0071	11b	S002	020021	須磨組 杯	杯	O-30 前後	16.0	2.6		径16.2	径16.2	厚2.6	ココナデ
0072	11a	S002	020026	須磨組 杯	杯	O-30 前後	14.4	径1.3		径14.6	径14.6	厚1.3	ココナデ
0073	11a	S002	020026	須磨組 杯	杯	C-2	17.3	径1.2		径17.5	径17.5	厚1.2	ココナデ
0074	11b	S002	020021	須磨組 杯	杯	C-2	18.4	径1.6		径18.6	径18.6	厚1.6	ココナデ
0075	11a	S002	020009	須磨組 杯	杯	8c 代	10.8	径2.8		径17.0	径17.0	厚2.8	ココナデ
0076	11b	S002	020026	須磨組 杯	杯	8c 代	10.0	径3.3		径18.2	径18.2	厚3.3	ココナデ
0077	11b	S002	020021	須磨組 杯	杯	O-10 前後	14.0	3.4	径10.0	径14.0	径14.0	厚3.4	ココナデ、調整不明
0078	11a	S002	020026	須磨組 杯	杯	O-30 前後	11.6	径13.0		径11.6	径11.6	厚13.0	ココナデ
0079	11a	S002	020026	須磨組 杯	杯	C-2	11.4	3.5	径7.4	径11.4	径11.4	厚3.5	ココナデ
0080	11b	S002	020021	須磨組 杯	杯	C-2	11.8	4.1		径12.0	径12.0	厚4.1	ココナデ
0081	11a	S002	020026	須磨組 杯	杯	C-2	12.7	径7.2		径12.9	径12.9	厚7.2	ココナデ
0082	11b	S00 下層	020021	須磨組 杯	杯	C-2	10.6	径3.9		径10.8	径10.8	厚3.9	ココナデ
0083	11a	S002	020027	須磨組 杯	杯	O-30 前後	11.6	径10.4		径11.6	径11.6	厚10.4	ココナデ
0084	11a	S002	020026	須磨組 杯	杯	C-2	11.5	径10.6		径11.7	径11.7	厚10.6	ココナデ
0085	11a	S002	020026	須磨組 杯	杯	H-72	11.4	径7.3		径11.4	径11.4	厚7.3	ココナデ
0086	11a	S002	020026	須磨組 杯	杯	H-72	11.4	径7.4		径11.4	径11.4	厚7.4	ココナデ
0087	11b	S002 下層	020021	須磨組 壺	壺	C-2	23.4	径3.0		径23.4	径23.4	厚3.0	ココナデ
0088	11a	S002	020026	土師組 壺	壺		14.6	径2.5		径15.0	径15.0	厚2.5	調整不明、調整不明
0089	11a	S002	020026	土師組 壺	壺		18.2	径2.3		径18.2	径18.2	厚2.3	ココナデ、ハク
0090	11a	S002	020026	土師組 壺	壺	8c 代	22.0	径2.1		径22.0	径22.0	厚2.1	ココナデ
0091	11b	S002 40 層	020010	土師組 壺	壺	8c 代	11.4	径4.1		径11.4	径11.4	厚4.1	ココナデ、ハク
0092	11a	S002	020027	土師組 壺	壺		13.4			径13.4	径13.4	厚3.4	ココナデ
0093	11a	S002	020026	土師組 壺	壺	8c 代	11.4	径2.4		径11.4	径11.4	厚2.4	ココナデ
0094	11a	S002	020026	土師組 壺	壺		22.0	径3.4		調整不明	調整不明	厚3.4	調整不明
0095	11b	S002	020026	土師組 壺	壺	8c 代	11.7			径11.7	径11.7	厚1.7	ココナデ、調整不明
0096	11b	S002 下層	020021	須磨組 壺	壺	7c 代	11.6	径1.6		径11.6	径11.6	厚1.6	ハク、オオヤシ
0097	11b	S002	020026	土師組 壺	壺		4.2	径6.0		径4.2	径4.2	厚6.0	オオヤシ、調整不明
0098	11b	S002	020026	土師組 壺	壺		3.0	径6.0		径3.0	径3.0	厚6.0	調整不明、調整不明

遺物番号	7107	遺物名	目付	所在地・材質	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	内面	外面	備考(1:外部)
0009	12b	S807 IV	020828	銅	作身	C-2 or 1-41	15.4	3.5	16.0		ヨコナデ、入身付	同形へつケズ、 ヨコナデ	2.5V61 表面
0100	12a	S807 III	020902	銅	作身	C-2	長 17.6	幅 1.8	厚 1.6	重 1.6	ヨコナデ	ヨコナデ、自然蝕 同形へつケズ、	2.5V61 表面
0101	12b	S807 IV	020903	銅	作身	C-2	長 15.0	幅 1.9	厚 1.5	重 1.5	ヨコナデ	ヨコナデ、自然蝕 同形へつケズ、	2.5V62 表面
0102	12a	S807 III	020903	銅	作身	1-41	長 12.4	幅 4.5	厚 6.2	重 12.6	ヨコナデ、表面蝕	ヨコナデ、自然蝕 同形へつケズ	2.5V61 表面
0103	11b	S807 IV	020902	銅	作身	不明	長 15.6	幅 3.2	厚 2.0	重 1.6	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5V61 表面
0104	12a	S807 IV	020903	銅	作身	不明	長 15.8	幅 2.0	厚 2.0	重 1.6	ヨコナデ	ヨコナデ、同形へ つケズ	10V87G にぶい・表面
0105	12a	S807 III	020903	銅	作身	C-2		幅 1.8	厚 1.7	重 1.1	ヨコナデ	ヨコナデ、同形へ つケズ	10V85G にぶい・表面
0106	12	S807 IV	020905	銅	作身	1-17 or C-2		幅 1.7	厚 1.7	重 1.2	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5V841 表面
0107	11a	S807 IV	020927	銅	作身	1-17 or C-2		幅 1.2	厚 1.8	重 1.0	ヨコナデ	ヨコナデ、同形へ つケズ	10V85-2 表面
0108	12b	S807 IV	020903	銅	作身	不明		幅 3.3	厚 3.3		ヨコナデ	ヨコナデ、自然蝕	10V841 表面
0109	12a	S807 III	020903	銅	作身	不明		幅 2.8	厚 2.8		ヨコナデ	ヨコナデ、自然蝕	2.5V61 表面
0110	12b	S807 IV	020903	銅	作身	1-17 or C-2		幅 1.2	厚 1.2		ヨコナデ	ヨコナデ、同形へ つケズ	10V86G 1 表面
0111	12b	S807 IV	020903	銅	作身	不明	長 13.4	幅 2.8	厚 1.8	重 1.4	ヨコナデ、へつケ ズ	ヨコナデ	2.5V61 表面
0112	11b	S807 IV	020904	銅	作身	7c		幅 1.3	厚 1.3		ヨコナデ	へつケズ	5V81 表面
0113	12a	S807 III	020903	銅	作身	8c 代		幅 2.2	厚 2.2		ヨコナデ、へつ	調整不明	7.5V87G 表面
0114	11a	S807 I	020905	銅	作身	不明		幅 2.0	厚 2.0		調整不明	調整不明	10V87G にぶい・表面
0115	12b	S807 IV	020905	銅	作身	8c 代	長 23.4	幅 3.2	厚 2.0	重 3.0	調整不明	調整不明	7.5V874 にぶい・表面
0116	12a	S807 III	020903	銅	作身	不明	長 16.4	幅 3.0	厚 3.0	重 1.6	ヨコナデ、指サ ズ	ヨコナデ、指サ ズ	10V87G にぶい・表面
0117	12b	S807 IV	020908	銅	作身	不明	長 16.4	幅 4.8	厚 1.6	重 1.6	ヨコナデ、へつ	ヨコナデ、調整不 明	7.5V87G 表面
0118	12b	S807 IV	020908	銅	作身	不明	長 25.6	幅 2.1	厚 2.1		ヨコナデ、ヨコナ	ヨコナデ、タテハ	10V87G にぶい・表面
0119	11b	S809	020905	銅	作身	NN32		幅 3.5	厚 3.5	重 1.2	ヨコナデ	同形へつケズ、 ヨコナデ、自然蝕	5V81 表面
0120	11b	S809	020905	銅	作身	8c 代		幅 2.8	厚 2.8		ヨコナデ	ヨコナデ	7.5V85G にぶい・表面
0121	11a	S803 III	020921	銅	作身	C-2	長 14.3	幅 1.7	厚 1.7		ヨコナデ	同形へつケズ、 表面腐食部、 ヨコナデ	10V81 表面
0122	11a	S803 IV	020921	銅	作身	7 ~ 8c 代	長 14.6	幅 3.2	厚 1.8	重 1.4	ヨコナデ	ヨコナデ	5V842 表面
0123	11a	S803 IV	020922	銅	作身	1-41 表面	長 13.8	幅 4.0	厚 4.0	重 1.4	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5V85G にぶい・表面
0124	11a	S803 IV	020922	銅	作身	O-53	長 1.4	幅 1.4	厚 7.0		ヨコナデ	ヨコナデ、同形 切欠	7.5V86G2 表面
0125	11a	S803 III	020912	銅	作身	ハコウ	長 11.6	幅 3.8	厚 1.6	重 1.1	ヨコナデ	ヨコナデ	5V81 表面
0126	11a	S803 I	020921	銅	作身	C-2		幅 4.0	厚 4.0		ヨコナデ	ヨコナデ、自然蝕	2.5V41 表面
0127	11a	S803 IV	020922	銅	作身	有蓋筒形	10-11	幅 1.2	厚 8.4		ヨコナデ	ヨコナデ、自然蝕	10V41 表面
0128	11a	S803 IV	020922	銅	作身	6c 代		幅 6.9	厚 6.9		ヨコナデ	ヨコナデ	7.5V41 表面
0129	11a	S803 IV	020911	銅	作身	10-44	幅 5.4	幅 10.0	厚 12.6		へつケズ、リフ、ヨ コナデ	ヨコナデ、自然 蝕、表面腐蝕	5V71 表面 10V87G にぶい・表面
0130	11a	S803 IV	020911	銅	作身	10-44	幅 2.2	幅 2.2	厚 10.6		ヨコナデ	ヨコナデ	5V41 表面
0131	11a	S803 IV	020922	銅	作身	不明		幅 3.8	厚 3.8		ヨコナデ	ヨコナデ、自然蝕	2.5V61 表面
0132	11a	S803 IV	020922	銅	作身	10-44	長 12.8	幅 5.1	厚 5.1		ヨコナデ	ヨコナデ、上サテ	10V85G 表面
0133	11a	S803 III	020921	銅	作身	7c 代? 長軸 4.0	幅 4.2	幅 2.1	厚 2.1		へつケズ	へつケズ	2.5V71 表面 2.5V72 表面
0134	11a	S803 I	020921	銅	作身	7c 代		幅 3.9	厚 3.9		調整不明	調整不明	7.5V874 にぶい・表面
0135	11a	S803 III	020922	銅	作身	不明		幅 2.9	厚 2.9		ヨコナデ	ヨコナデ、一面 自然蝕	7.5V841 表面
0136	12f	S805 III	020923	銅	作身	10-44		幅 2.3	厚 2.3		ヨコナデ	ヨコナデ、一面 自然蝕	5V81 表面
0137	12f	S805 III	020923	銅	作身	10-44		幅 3.2	厚 3.2		ヨコナデ	ヨコナデ	2.5V61 表面
0138	12f	S805 III	020923	銅	作身	10-44	長 12.0	幅 3.3	厚 3.3	重 1.3	ヨコナデ、自然蝕	ヨコナデ、自然蝕	2.5V51 表面
0139	12f	S805 III	020923	銅	作身	10-44	長 13.6	幅 3.5	厚 3.5		ヨコナデ	ヨコナデ、一面 自然蝕、表面欠	C30 3446 Y60 8120
0140	12f	S805 III	020923	銅	作身	10-44		幅 3.8	厚 8.2		ヨコナデ	ヨコナデ	2.5V61 表面
0141	12f	S805 III	020912	銅	作身	10-44		幅 3.3	厚 3.3		ヨコナデ	ヨコナデ	2.5V62 表面
0142	12f	S805 III	020923	銅	作身	長軸 1.5 長軸	不明	幅 3.8	厚 3.8		ヨコナデ	ヨコナデ	5V81 表面
0143	12g	S805 III	020912	銅	作身	6c 代		幅 4.4	厚 8.6		ヨコナデ	ヨコナデ、遺失 2方向にあり	2.5V61 表面
0144	12b	S805 IV	020912	銅	作身	10-11		幅 1.8	厚 1.8		ヨコナデ	ヨコナデ	2.5V61 表面
0145	12b	S805 IV	020912	銅	作身	7c 代		幅 1.5	厚 1.5		ヨコナデ	ヨコナデ、へつケ ズ、自然蝕	10V86G2 表面
0146	11b	S804 III	020922	銅	作身	C-2		幅 1.4	厚 1.4		ヨコナデ、一面 欠	ヨコナデ	10V854 表面
0147	11b	S804 III	020922	銅	作身	不明	長 13.8	幅 2.9	厚 2.9	重 1.4	ヨコナデ	ヨコナデ、自然蝕	7.5V841 表面
0148	10c	S804 I	020923	銅	作身	1-41		幅 1.5	厚 3.9		ヨコナデ	ヨコナデ、へつケ ズ、表面未 腐蝕	7.5V87G 表面 10V85-2 表面
0149	11c	S804 IV	020923	銅	作身	10-72		幅 1.6	厚 7.7		ヨコナデ	ヨコナデ、表面 同形切欠	10V87G2 表面
0150	11c	S804 II	020922	銅	作身	10-44		幅 5.1	厚 5.1		ヨコナデ	ヨコナデ、一面 自然蝕、2方向 にあり	2.5V61 表面 2.5V62 表面
0151	10c	S804 II	020923	銅	作身	不明		幅 2.9	厚 8.6		ヨコナデ	ヨコナデ	2.5V61 表面
0152	11c	S804 II	020903	銅	作身	10-50		幅 1.3	厚 8.4		ヨコナデ	ヨコナデ	2.5V51 表面
0153	10d	S804 I	020922	銅	作身	10-44		幅 5.6	厚 5.6		ヨコナデ、自然蝕	ヨコナデ、自然蝕 遺失にあり	2.5V61 表面
0154	10d	S804 I	020922	銅	作身	不明		幅 1.1	厚 5.6		調整不明	調整不明、表面 欠	5V86G 表面
0155	10e	S804 I	020923	銅	作身	不明		幅 3.3	厚 3.3		調整不明	調整不明	10V874 にぶい・表面

名古屋城三の丸遺跡 VII

調査年	期	遺跡番号	日付	所在地・材質	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	用途	内面	外面	附1 (作部)	附1	備考
0156	11c	S804 IV	020825	須志跡	礎石	礎石	14.44	幅 25.8	厚 1.8	表 27.0	コナナデ、ハツテ	コナナデ、ナナ方ハツテ	10Y88/3		
0157	10c	S804 B	020825	東邊惣山石敷	山石敷	礎石	幅 12.9	厚 3.0	表 4.9	表 13.4	コナナデ	コナナデ	2.5Y7/2 表裏		
0158	10c	S804	020825	東邊惣山石敷	小礎	7物式	幅 7.9	1.5	表 8.0		コナナデ、自然跡	コナナデ、自然跡あり、自然跡	5Y7/1 表		
0159	10c	S808 I	020829	須志跡	礎石	6c 代	幅 6c	厚 1.8			コナナデ	同様にナナズリ、もれ割状エダ	5Y5/1 表		
0160	10a	S808 B	020910	須志跡	礎石	C-2		厚 1.4			コナナデ	同様にナナズリ、にふい直積	10Y87/3		
0161	10c	S808 I	020829	須志跡	礎石	O-10		厚 1.1			コナナデ、自然跡	コナナデ、自然跡	7.5Y8/4 表		
0162	11c	S808 基	020910	須志跡	礎石	H-44 以降		厚 4.3		表 13.8	コナナデ	同様にナナズリ、コナナデ	2.5Y7/1 表裏		
0163	10c	S808 I	020825	兵船跡	礎	K-90		厚 1.5	表 6.8		コナナデ	コナナデ、同様に割取、黒色付着物あり	5Y7/1 表		
0164	10a	S808 B	020827	兵船跡	礎	K-90		厚 1.9			兵船	兵船	2.5Y6/1 表裏		
0165	10a	S808 B	020827	須志跡	礎石	O-10 以降		厚 1.5	表 13.2		コナナデ	コナナデ、同様にナナズリ	2.5Y8/6 表裏		
0166	10a	S808 B	020827	須志跡	高枠	H-11 前後		厚 1.6	表 7.6		コナナデ	コナナデ	2.5Y5/1 表裏		
0167	10c	S808 I	020909	須志跡	礎	H-11 前後		厚 2.9			自然跡跡、コナナデ	同様に自然跡、コナナデ	2.5Y4/1 表裏		
0168	11a	S808 IV	020904	須志跡	高枠	H-11 前後		厚 1.7	表 8.0		コナナデ	コナナデ	10Y85/1 表裏		
0169	10c	S808 I	020917	須志跡	高枠	H-11 前後		厚 1.6			コナナデ	コナナデ	10Y81/1		
0170	10c	S808 I	020829	土製品	土器	土器	幅 4.1		1.3		割取不明	割取不明	2.5Y6/2 表裏		
0171	10a	S808 B	020827	須志跡	礎	O-10 以降		厚 7.3			コナナデ、自然跡	コナナデ、自然跡	C40-M30-Y40 表裏		
0172	10c	S808 I	020829	土器跡	礎	河野	幅 16.0	厚 1.4			割取不明	割取不明	10Y86/2 表		
0173	10c	S808 I	020829	土器跡	礎		幅 20.0	厚 8.2		表 20.8	コナナデ、ハツテ、コナナデ	コナナデ、割取不明(ハツテ)、割取不明	2.5Y7/2 表裏		
0174	10a	S808 I	020917	土器跡	礎	9c 代	幅 19.8	厚 7.1		表 20.1	コナナデ、ハツテ、コナナデ	コナナデ、ハツテ、コナナデ	2.5Y8/6 表裏		
0175	10a	S808 B	020829	土器跡	礎	8c 代	幅 3.6	厚 3.0			割取不明	割取不明(ハツテ)	5Y8/4 にふい直積		
0176	12c	S806 基	020825	須志跡	礎石	H-61	幅 14.8	厚 7.2		表 13.4	コナナデ	同様にナナズリ、コナナデ、若干自然跡	2.5Y5/1 表裏		
0177	12c	S806 基	020825	須志跡	礎石	H-61	幅 13.8	厚 6.0		表 16.4	コナナデ	コナナデ、同様にナナズリ	2.5Y6/1 表裏		
0178	12c	S806	020904	土器跡	礎		幅 13.8	厚 3.7			割取不明(コナナデ)	割取不明(コナナデ)	10Y87/2 表		
0179	—	S806	020917	須志跡	礎	7~8c	幅 9.4	厚 0.4			割取不明(コナナデ)	割取不明(コナナデ)	2.5Y6/1 表裏		
0180	—	S8231	020910	土器跡	小型土器		幅 7.7	0.8	10.0		コナナデ、割取不明	コナナデ、割取不明	7.5Y87/6 表		
0181	11c	S8239	020909	須志跡	礎石	H-11	幅 11.2	4.8	11.8		コナナデ	同様にナナズリ	2.5Y6/1 表裏		
0182	11c	S8239	020909	須志跡	礎石	堀山 2	幅 11.0	5.2	表 12.0		コナナデ	同様にナナズリ	2.5Y6/1 表		
0183	11c	S8239	020909	土器跡	礎		幅 2.5				コナナデ、コナナデ	同様にナナズリ	7.5Y86/6 表		
0184	12c	S8259	020909	須志跡	礎石	H-50	幅 10.8	3.7	11.1		コナナデ	同様にナナズリ	2.5Y6/1 表裏		
0185	—	S308	020910	須志跡	高枠	H-11	幅 9.2	厚 5.2			コナナデ	コナナデ、同様にナナズリ	5Y5/1 表		
0186	—	S8253	020910	須志跡	礎石	6c 表	幅 11.8	厚 3.6			コナナデ	ナナズリ、コナナデ	C40-M30-Y30 表裏		
0187	—	S8253	020910	土器跡	台付置	物付 ¹⁾ 目式	幅 5.5	8.6			割取不明、割取不明	割取不明(コナナデ)	7.5Y86/4 にふい直積		
0188	—	S8253	020910	土器跡	台付置	物付 ¹⁾ 目式	幅 4.4	8.2~8.6			割取不明	割取不明	7.5Y86/3 にふい直積		
0189	—	S8253	020910	土器跡	礎	物付 ¹⁾ 1c 目式	幅 18.0	厚 7.9			コナナデ、割取不明	コナナデ、割取不明	10Y88/3 表裏		
0190	11a	S8262	020903	須志跡	礎石	6c	幅 6.2	厚 6.2			溝あり、コナナデ	溝あり、コナナデ、溝状	10Y86/1	2.5Y3/2 オリーブ色	
0191	10a	S8425	020911	須志跡	礎石	C-2	幅 12.6	4.6	5.9	12.8	コナナデ	コナナデ、同様に割取	2.5Y5/1 表裏		
0192	11b	S8412	020909	土器跡	礎		幅 22.0	厚 9.5			コナナデ、割取不明	コナナデ、部分的にハツテ残存、割取不明	10Y87/4 にふい直積		
0193	12b	S8289	020917	土器跡	礎	8c 前下	幅 19.0	厚 5.3		表 20.2	コナナデ、ナナズリ	コナナデ、ハツテ	10Y86/3 にふい直積		
0194	12b	S8289	020917	土器跡	礎	8c 代	幅 4.2	厚 4.2			コナナデ、不明	コナナデ、ハツテ	10Y87/2 にふい直積		
0195	12b	S8289	020917	土器跡	礎	8c 代	幅 23.8	厚 4.4		表 24.0	ハツテ、不明	ナナデ、ハツテ	10Y87/3 にふい直積		
0196	11c	S8188	020725	兵船跡	礎	O-53 以降	幅 16.0	厚 2.6		表 16.2	コナナデ、兵船	コナナデ、兵船	10Y86/2 表裏		
0197	11c	S8188	020725	兵船跡	礎	1c 色付置	幅 1.2	厚 5.8			コナナデ	コナナデ、割取不明	5Y8/1 表		
0198	13a	S8382	020910	兵船跡	礎	K-90	幅 1.3	厚 7.0			コナナデ	コナナデ、同様にナナズリ	2.5Y7/1 表		
0199	11c	S8382	020730	兵船跡	礎	H-72	幅 1.9	厚 6.6			コナナデ	コナナデ、同様に割取	10Y87/2 にふい直積		
0200	12c	S8235	020729	兵船跡	礎	表 8.90 以降	幅 1.8	厚 6.0			コナナデ、兵船(堀)	コナナデ、同様にナナズリ、兵船、堀	2.5Y5/1 表裏	10Y4/2 オリーブ色	
0201	12c	S8235	020730	兵船跡	礎	K-90	幅 1.1	厚 7.4			コナナデ	コナナデ、同様に割取	5Y7/1 表		
0202	12c	S8235	020730	須志跡	礎石	7c 代	幅 9.7	厚 4.4			コナナデ、浅い溝	コナナデ、ナナズリ	5Y5/1 表		
0203	—	表取	020920	土器跡	S字書目形 目式		幅 11.8	厚 0.4			コナナデ、若干割取不明、スズ付着	コナナデ、若干割取不明、スズ付着	7.5Y87/3 にふい直積		
0204	10c	表取	020514	土器跡	S字書目形 目式		幅 12.0	厚 3.7			コナナデ、若干割取不明	コナナデ、若干割取不明	10Y87/2 にふい直積		
0205	10a	表取	020906	土器跡	S字書目形 目式		幅 13.8	厚 2.9			コナナデ	コナナデ、あらいハツテ	10Y87/4 にふい直積		

図番	品名	通称	日付	産地・材質	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	内面	外面	取付(内面)	取付(外面)	備考
0206	10c	NK215	020720	土師陶	5字直口器	弥生	15.0	4.6			ヨコナデ、下半調ハク	ヨコナデ、あらいハク	10YR7/3	にじい・赤褐色	
0207	12b	焼出器	020812	土師陶	宇田型器	弥生	12.2	4.2			ヨコナデ	ヨコナデ、あらいハク	7.5YR7/6 緑		
0208	11b	焼出器	020808	土師陶	儀	弥生	12.7	12.9	6.0	13.4	ハク、下半調赤	ヨコナデ、粗ササエ、ハク、本葉取あり	7.5YR8/4	灰褐色	
0209	11a	焼出器	020808	土師陶	鉢?	7c 代	12.4	4.6			ヨコナデ、ハク	ヨコナデ、ハク	7.5YR6/4	にじい・赤褐色	
0210	9a	焼出器	020806	土師陶	高杯	弥生	13.6	4.9			ヨコナデ	ヨコナデ	10YR6/3	にじい・赤褐色	
0211	13f	NK50	020613	土師陶	高杯	弥生	14.0	4.3			ヨコナデ	ヨコナデ	5YR7/6 緑		
0212	9a	焼出器	020806	土師陶	高杯	弥生	17.2	4.9			ヨコナデ	ヨコナデ	10YR5/3	にじい・赤褐色	
0213	12c	焼出器	020808	土師陶	儀	弥生	10.0	4.5			上部調整不明、粗ササエ	ハク、粗ササエ	10YR6/3	にじい・赤褐色	
0214	12b	焼出器	020911	土師陶	儀	弥生	11.5	4.9			上部調整不明、粗ササエ	粗ササエ	10YR6/2	灰褐色	
0215	—	SK02 高杯	020624	土師陶	儀	弥生	10.5	4.5	8.8		上部調整不明、粗ササエ	粗ササエ	10YR6/3	にじい・赤褐色	
0216	10c	NK215	020720	土師陶	儀	弥生	10.0	4.5			上部調整不明、粗ササエ	ハク	10YR7/3	にじい・赤褐色	
0217	13c	SK28 (小)	020712	土師陶	高杯?	弥生	10.5	4.5			上部調整不明、ハク	赤灰、ハク	10YR7/2	にじい・赤褐色	
0218	11a	焼出器	020927	土師陶	儀	弥生	12.5	4.5			上部調整不明	上部調整不明	10YR6/4	にじい・赤褐色	
0219	10c	焼出器	020607	土師陶	儀	弥生	10.5	4.3			上部調整不明、粗ササエ	上部調整不明、ハク	7.5YR6/6 緑		
0220	11a	焼出器	020808	土師陶	儀	山手へ調整	10.0	3.8			調整不明	調整不明	10YR8/3	灰褐色	
0221	11c	焼出器	020808	土師陶	同形土師品	山手へ調整	10.9	6.4			しぼり	ナデ?	5YR6/6 緑		
0222	12b	焼出器	020805	土師陶	儀	弥生	1.8	2.0			粗ササエ	ハク、本葉取あり	10YR6/2	灰褐色	
0223	9d	焼出器	020806	土師陶	高杯	弥生	10.5	4.8			しぼり、ヘラケズリ	タテ折ヘラケズリ、ヨコナデ	7.5YR6/6 緑		
0224	10d	焼出器	020806	土師陶	高杯	弥生	10.0	5.0	2.4		ヘラケズリ、ヨコナデ	タテ折ヘラケズリ、ヨコナデ	10YR6/3	にじい・赤褐色	
0225	8d	NK73	020624	土師陶	儀	7c 代	19.4	4.7	7.2		調整不明	調整不明	10YR7/1 灰		
0226	11f	焼出器	020812	土師陶	儀	伊勢型	18.0	4.3			ヨコナデ、ハク	ヨコナデ	10YR7/4	にじい・赤褐色	
0227	11g	焼出器	020812	土師陶	儀	伊勢 6c~7c 代	21.8	4.4			ヨコナデ、ハク	ヨコナデ	10YR6/3	にじい・赤褐色	
0228	11j	NK147	020705	土師陶	儀	尾形型	19.0	4.8			ハク、粗ササエ	ヨコナデ、ハク	5YR6/6 緑		
0229	12g	焼出器	020813	土師陶	儀	尾形型	19.4	4.5			ヨコナデ、ハク	ヨコナデ、ハク	7.5YR6/4	にじい・赤褐色	
0230	11f	焼出器	020812	土師陶	儀	尾形型	22.6	4.8	9.8		面2.0 粗ササエ、ヘラケズリ	ヨコナデ、ハク	10YR6/6	褐色	
0231	8b	焼出器	020808	土師陶	儀	二河型	26.0	4.2			調整不明	調整不明	2.5Y/2	褐色	
0232	12b	焼出器	020822	土師陶	儀	不明	24.0	4.6			細かいハク	粗ササエの後ハクまたはヘラケズリ	10YR7/2	にじい・赤褐色	
0233	11f	焼出器	020809	土師陶	儀	伊勢型	16.7	4.6			調整不明	調整不明	10YR7/3	にじい・赤褐色	
0234	11g	焼出器	020812	土師陶	儀	7c 代	19.1	4.9			ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR7/6 緑		
0235	11e	焼出器	020809	土師陶	儀	二河型	16.0	4.6			調整不明	調整不明	2.5YR/1 灰		
0236	10c	焼出器	020814	土師陶	儀	二河型	18.0	4.3			調整不明	調整不明	2.5Y7/1 灰		
0237	16	器トレン ド	020514	土師陶	儀	弥生	8.9	4.9			ヨコナデ、粗ササエ	ハクの後ヨコナデ	10YR5/3	にじい・赤褐色	
0238	13f	器トレン ド	020507	土師陶	儀	弥生	4.6	4.6			ケズリ、ハク	ケズリ	5YR6/6 緑		
0239	—	古銭	—	土師品	瓦割?		4.9	5.9			—	—	ヘラケズリ?	2.5YR/8	褐色
0240	9d	焼出器	020813	土師品	上部または 器状土師品		10.4	4.4			—	—	粗ササエ、粗ハク	2.5YR/3	にじい・赤褐色
0241	9d	焼出器	020720	土師品	器状土師		10.4	4.4			—	—	粗ササエ	2.5Y/2	褐色
0242	12a	焼出器	020822	土師品	土師		10.1	4.5			—	—	粗ササエ	7.5YR6/2	灰褐色
0243	11e	焼出器	020808	銅器	有蓋高脚器	10-11	11.1	6.3		12.3	ヨコナデ	同色ヘラケズリ、ヨコナデ	N6 灰		
0244	12b	焼出器	020827	銅器	有蓋高脚器	10-11	10.5	4.5		11.0	ヨコナデ	同色ヘラケズリ、ヨコナデ	2.5YR/1 灰		
0245	11e	焼出器	020808	銅器	有蓋高脚器	10c 代	10.4	4.9		10.4	ヨコナデ	同色、ヨコナデ	2.5Y/1 灰		
0246	11e	焼出器	020808	銅器	有蓋高脚器	10-11	10.4	4.9		12.4	ヨコナデ	同色、同色ヘラケズリ	2.5Y/1 灰		
0247	11e	焼出器	020809	銅器	作蓋	10-11	11.2	4.7		12.6	ヨコナデ	同色ヘラケズリ、ヨコナデ、自然熱、磨面	2.5Y/1 灰	7.5Y/3 粗ササエ	
0248	11e	焼出器	020808	銅器	作蓋	10-11	11.1	4.4		12.6	ヨコナデ	同色ヘラケズリ、ヨコナデ	5Y/1 灰		
0249	11e	焼出器	020808	銅器	有蓋高脚器	10-61	11.6	4.5		12.0	ヨコナデ、赤七	同色ヘラケズリ、ヨコナデ、自然熱	2.5Y/1 灰		
0250	11e	焼出器	020808	銅器	作蓋	10-44	10.2	4.0		10.0	ヨコナデ	同色ヘラケズリ、ヨコナデ	2.5Y/1 灰		
0251	12f	器トレン ド	020507	銅器	作蓋	10-44	12.2	4.4		12.2	ヨコナデ	同色ヘラケズリ、ヨコナデ	5Y/1 灰		
0252	13f	器トレン ド	020507	銅器	作蓋	10-44	10.3	4.3		13.0	ヨコナデ	同色ヘラケズリ、ヨコナデ	5Y/1 灰		
0253	11b	焼出器	020813	銅器	作蓋	10-11	11.0	4.6		14.0	ヨコナデ	ヨコナデ	5YR5/4	にじい・赤褐色	
0254	11e	焼出器	020809	銅器	作蓋	10-11	11.2	4.1		12.0	ヨコナデ	ヨコナデ	5Y/1 灰		
0255	13f	器トレン ド	020507	銅器	作蓋	10-11	14.8	4.0		11.4	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5YR/1 灰		
0256	10c	器トレン ド	020514	銅器	作蓋	10-11	4.6~5.0	4.9	5.2	15.8	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5Y/4	にじい・赤褐色	
0257	13f	器トレン ド	020507	銅器	作蓋	10-11	4.6	4.6	3.6	14.6	ヨコナデ	ヨコナデ、同色ヘラケズリ	2.5Y/1 灰		

名古屋城三の丸遺跡 VII

調査年	アノ	遺跡番号	日 付	区域・材質	種 別	時 期	位置 (m)	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	内 容	所 出	貯 子 (件数)	備 考
0254	11e	秋田道	020827	銅器類	棒 錐	H11		残 4.5	幅 3.6	厚 11.4	ヨコナテ	ヨコナテ。一部白粉。同転ヘラケズリ	10Y86/1	
0259	8e	SK291	020823	銅器類	棒 錐	H11	東 11.8	残 4.4		厚 14.6	ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	2.5Y8/6 積	
0260	10d	秋田道	020906	銅器類	棒 錐	H11	東 5.8 ~ 11.8	5.1	5.4	厚 9.2 ~ 12.4	ヨコナテ、古刀	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	5Y4/1 灰	
0261	10d	SK240	020730	銅器類	棒 錐	H11	東 7.8	4.2	幅 6.4	厚 19.2	ヨコナテ	ヨコナテ。わずかに白粉。同転ヘラケズリ	7.5Y4/1 灰	
0262	12e	秋田道	020808	銅器類	棒 錐	山山 2	東 11.8	4.0		厚 14.2	ヨコナテ	ヨコナテ。ヘラケズリ	5Y6/1 灰	
0263	13e	南トレンチ	020507	銅器類	棒 錐	H13	東 9.6	残 4.9		厚 11.8	ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	7.5Y8/4 におい	
0264	9d	秋田道	020806	銅器類	棒 錐	H13	東 9.0	残 4.3		厚 12.4	ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	N5/1 灰	
0265	9d	秋田道	020906	銅器類	棒 錐	H44	東 10.9	4.2	3.4	厚 12.8	ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	N6/1 灰	
0266	8d	SK73	020624	銅器類	棒 錐	H44	東 12.2	4.2	幅 4.6	厚 14.0	ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	10Y86/1	
0267	10d	秋田道	020906	銅器類	棒 錐	H44		残 3.8			ヨコナテ	ヨコナテ。表面自然酸。ヘラケズリ	10Y86/1 灰	
0268	13e	南トレンチ	020507	銅器類	棒 錐	H44		残 2.6			ヨコナテ	ヨコナテ。ヘラケズリ	10Y85/2	
0269	—	秋田道	020906	銅器類	棒 錐	C-2		残 1.7			ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	2.5Y4/2	
0270	9d	秋田道	020906	銅器類	棒 錐	不明		残 1.6			ヨコナテ	ヨコナテ	5Y8/6 積	
0271	11e	秋田道	020802	銅器類	棒 錐	C-2		残 2.7			ヨコナテ	ヨコナテ。ヘラケズリ。ヨコナテ	2.5Y3/1 灰	
0272	11e	秋田道	020809	銅器類	棒 錐	C-2		残 1.7			ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	10Y85/6 積	
0273	12e	秋田道	020807	銅器類	棒 錐	C-2		残 1.3			ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	2.5Y6/1 灰	
0274	11e	秋田道	020808	銅器類	棒 錐	C-2		残 1.6			ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	5Y6/1 灰	
0275	11c	秋田道	020916	銅器類	棒 錐	不明		残 1.6			ヨコナテ	ヨコナテ	10Y86/1 積	
0276	11e	秋田道	020906	銅器類	棒 錐	C-2	東 13.8	残 1.8		厚 14.0	ヨコナテ	同転ヘラケズリ。ヨコナテ	7.5Y8/6 積	
0277	11e	秋田道	020908	銅器類	棒 錐	O-10	東 13.8	残 2.2		幅 14.1	ヨコナテ	同転ヘラケズリ。ヨコナテ	2.5Y85/6	
0278	11e	秋田道	020909	銅器類	棒 錐	O-10	東 13.8	残 2.3		幅 14.2	ヨコナテ	同転ヘラケズリ。ヨコナテ	10Y86/3 におい	
0279	11f	秋田道	020812	銅器類	棒 錐	O-10	東 14.2	残 1.5		幅 14.4	ヨコナテ	同転ヘラケズリ。ヨコナテ	10Y86/3 におい	
0280	11c	秋田道	020802	銅器類	棒 錐	O-10	東 14.8	残 1.8		幅 15.2	ヨコナテ	ヨコナテ	5Y8/4 におい	
0281	12b	秋田道	020828	銅器類	棒 錐	O-10	東 15.6	残 1.4		幅 16.2	ヨコナテ	ヨコナテ	10Y86/3 におい	
0282	12e	秋田道	020807	銅器類	棒 錐	O-10	東 15.4	残 1.8		幅 15.0	ヨコナテ、自然酸	同転ヘラケズリ。ヨコナテ	5Y3/1 灰	
0283	11b	秋田道	020908	銅器類	棒 錐	C-2	東 16.3	残 2.9		幅 16.8	ヨコナテ、若干欠片	同転ヘラケズリ。ヨコナテ	5Y6/1 灰	
0284	12b	SK38	020827	銅器類	棒 錐	C-2		残 1.3			ヨコナテ	ヘラケズリのみ。自然酸。ヨコナテ	7.5Y8/2 積	
0285	11g	秋田道	020812	銅器類	棒 錐	C-2	東 16.8	残 1.5		幅 17.0	ヨコナテ	ヘラケズリ。自然酸。ヨコナテ	2.5Y6/1 灰	
0286	16c	秋田道	020807	銅器類	棒 錐	C-2	東 16.6	残 2.1		幅 17.0	ヨコナテ	ヘラケズリ。表面欠片。ヨコナテ	10Y86/1 灰	
0287	13d	SK30	020610	銅器類	棒 錐	O-10		残 1.6			ヨコナテ、表面欠片	ヘラケズリ。ヨコナテ	7.5Y85/2 におい	
0288	12f	SK27	020721	銅器類	棒 錐	8e 後半		残 2.6			同転ヘラケズリ	10Y86/1 積		
0289	11b	秋田道	020908	銅器類	棒 錐	C-2	東 18.4	残 2.0		幅 19.0	ヨコナテ	同転ヘラケズリ。ヨコナテ	10Y85/2 灰	
0290	11b	秋田道	020908	銅器類	棒 錐	C-2	東 22.0	2.1		幅 22.2	ヨコナテ	同転ヘラケズリ。ヨコナテ	10Y85/3 におい	
0291	11d	秋田道	020908	銅器類	棒 錐	C-2	東 21.7	残 2.4		幅 22.4	ヨコナテ	同転ヘラケズリ。ヨコナテ	10Y85/3 におい	
0292	10c	秋田道	020807	銅器類	棒 錐	I-17	東 10.4	4.0	幅 6.8	厚 19.6	ヨコナテ	ヨコナテ。ヘラケズリ。ヨコナテ。同転ヘラケズリ	5Y5/1 灰	
0293	12b	秋田道	020828	銅器類	棒 錐	不明	東 8.6	残 2.8		幅 8.8	ヨコナテ	ヨコナテ。自然酸	5Y3/1 オイ	
0294	11b	秋田道	020823	銅器類	棒 錐	不明	残 1.2	幅 6.4			ヨコナテ	ヨコナテ。表面欠片	10Y86/3 におい	
0295	11f	秋田道	020812	銅器類	棒 錐	不明	残 1.0				ヨコナテ	ヨコナテ	7.5Y85/2 灰	
0296	11c	秋田道	020908	銅器類	棒 錐	O-10		残 3.3			ヨコナテ	ヨコナテ。表面欠片	2.5Y6/1 灰	
0297	11d	SK156	020722	銅器類	棒 錐	O-10	東 13.4	3.8	幅 11.2	厚 13.8	ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	10Y86/3 におい	
0298	12a	秋田道	020822	銅器類	棒 錐	不明	東 13.0	残 3.4		幅 13.1	ヨコナテ	ヨコナテ	10Y87/4 におい	
0299	12b	秋田道	020908	銅器類	棒 錐	O-10		残 1.2	幅 11.0		ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	2.5Y85/3 におい	
0300	12b	秋田道	020811	銅器類	棒 錐	C-2	残 1.6	幅 11.0			ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	10Y85/4 灰	
0301	11b	秋田道	020813	銅器類	棒 錐	O-10		残 1.7	幅 14.0		ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	5Y85/2 灰	
0302	11c	秋田道	020807	銅器類	棒 錐	O-10	東 14.4	4.2	幅 9.7	厚 14.6	ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	2.5Y6/1 灰	
0303	11f	秋田道	020812	銅器類	棒 錐	C-2	東 13.6	3.6	幅 10.0	厚 14.0	ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	5Y8/3 におい	
0304	10c	秋田道	020807	銅器類	棒 錐	O-10	残 2.0	厚 9.0			ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	7.5Y84/2 灰	
0305	—	秋田道	020930	銅器類	棒 錐	O-10	残 1.6	幅 12.0			ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	10Y86/1 灰	
0306	11e	秋田道	020908	銅器類	棒 錐	O-10	残 2.0	幅 11.8			ヨコナテ	ヨコナテ。同転ヘラケズリ	2.5Y6/1 灰	

遺物一覧表

図番	種別	遺物名	目付	所在地・材質	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	内面	外面	出土(内面)	出土(外面)	備考
0307	11c	鏡出部	020908	銅	作部	4世紀	13.0	径 3.4		重 13.2	ヨコナテ	ヨコナテ	10VRS/2 既出		
0308	11b	鏡出部	020908	銅	作部	4世紀	15.6	径 2.3		重 16.0	ヨコナテ	ヨコナテ	10VRS/1 既出		
0309	11c	鏡出部	020902	銅	作部	0-10		径 2.1		重 9.8	ヨコナテ	ヨコナテ、同様に ヘラケズリ付	5VRS/3に よ	10VRS/1 既出	
0310	11d	SK1	020908	銅	鏡	8-14	13.0	4.0		重 13.2	ヨコナテ	ヨコナテ、跡は 切取			
0311	10c	鏡トレン ド	020514	銅	鏡	10-78	13.2	3.9		重 5.6	ヨコナテ	ヨコナテ、同様に 切取	10VRS/1 既出		
0312	11c	鏡出部	020908	銅	高杯	6c代 後半	15.2	径 6.7			ヨコナテ	ヨコナテ、自然蝕 過かしの内面あり	N3/順灰 3.5V2/2 オリーブ片	114と同 心しない	
0313	10d	鏡出部	020908	銅	高杯	10-11 前期		径 4.3			ヨコナテ	ヨコナテ、同様に ヘラケズリ	10VRS/7 既出		
0314	13f	鏡トレン ド	020507	銅	高杯	6c代 後半		径 8.2	重 11.6		ヨコナテ、自然蝕	ヨコナテ、自然蝕、 過かしの内面あり	2.5V3/1 既出	5V3/2 オリーブ片	112と同 心しない
0315	10e	SK240	020718、 020908	銅	高杯	10-11	16.2	10.3		重 9.0	ヨコナテ	ヨコナテ	2.5VRS/3 に よ		
0316	10d	SK240	020730	銅	高杯	9c 後半	9.0	径 4.4		重 11.7	ヨコナテ	ヨコナテ、自然蝕、 ヘラケズリ	2.5V3/1 既出	10V4/2 オリーブ片	
0317	12b	鏡出部	020928	銅	高杯	10-50	12.6	径 5.2		重 17.8	ヨコナテ、ヘラケ ズリ	ヨコナテ、同様に ヘラケズリ	2.5V3/1 既出		
0318	11b	鏡出部	020907	銅	高杯	10-50		径 3.4			ヨコナテ	ヨコナテ	5V3/1 既出		
0319	11f	鏡出部	020812	銅	高杯	10-44		径 1.9			ヨコナテ	ヨコナテ、表面文 様	10V3/1 既出		
0320	13f	鏡トレン ド	020507	銅	高杯	10-44 前期		径 2.3			ヨコナテ	同様にヘラケズリ、 自然蝕、過かしの 内面あり	5V3/1 既出	10V4/2 オリーブ片	
0321	9d	鏡出部	020906	銅	高杯	4世紀		径 2.2			ヨコナテ	同様にヘラケズリ、 ヨコナテ	2.5V7/3 既出		
0322	12c	鏡出部	020903	銅	高杯	4世紀		径 1.4			ヨコナテ	ヨコナテ、自然蝕 痕	10VRS/6/1 既出		
0323	11a	鏡出部	020909	銅	高杯	4世紀		径 5.1			ヨコナテ	同様にヘラケズリ、 ヨコナテ	2.5V3/1 既出		
0324	11a	鏡出部	020908	銅	高杯	10-11 既		径 2.7	重 8.0		ヨコナテ	ヨコナテ、自然蝕	2.5V3/1 既出		
0325	10d	鏡出部	020921	銅	高杯	10-44		径 1.7	重 7.6		ヨコナテ、自然蝕	5V3/1 既出			
0326	12e	鏡出部	020908	銅	高杯	10-44		径 3.8	重 10.0		ヨコナテ	ヨコナテ	10VRS/4 既出		
0327	13f	鏡トレン ド	020507	銅	高杯	10-44		径 3.5	重 10.0		ヨコナテ	ヨコナテ	N3/既出		
0328	10c	鏡出部	020814	銅	高杯	10-44		径 1.8	重 11.8		ヨコナテ	ヨコナテ、外側に 自然蝕	10V3/1 既出		
0329	11c	鏡出部	020928	銅	高杯	10-11		径 3.5	重 10.0		ヨコナテ、自然蝕	ヨコナテ、過か しの内面あり	2.5V3/1 既出		
0330	11b	鏡出部	020923	銅	高杯	10-44 前期		径 3.1			ヨコナテ	ヨコナテ、過か しの内面あり	2.5V7/1 既出		
0331	11c	鏡出部	020909	銅	合子	1-25	12.4	径 3.3		重 12.8	ヨコナテ	ヨコナテ、一面自 然蝕	2.5V4/1 既出		
0332	13f	鏡トレン ド	020507	銅	ハコ	6c代		径 3.8	重 6.4		ヨコナテ	ヨコナテ、跡はヘ ラケズリ	5V4/1 既出	5V3/1 オリーブ片	
0333	12c	SK155	020711	銅	加飾鏡	6c前 後半	7.8	径 7.6		重 12.2	ヨコナテ	ヨコナテ、表面 加飾、高杯の 内面あり	N6/既出	10V4/2 オリーブ片	
0334	11f	鏡出部	020909	銅	加飾	5-6c 代		径 4.5			ヨコナテ、表面 加飾、自然蝕	5V6/1 既出			
0335	10e	鏡出部	020908	銅	加飾鏡	7c代		径 2.7			ヨコナテ	ヨコナテ、表面 加飾、自然蝕	2.5V3/1 既出		
0336	10c	鏡出部	020907	銅	不明	6c代		径 2.0			ヨコナテ	ヨコナテ、自然蝕、 ヘラケズリ	7.5V4/1 既出	子持まじり 鏡	
0337	9d	鏡出部	020929	銅	鉢	10-44	9.0	径 3.8		重 9.4	ヨコナテ、一部自 然蝕	ヨコナテ、一面自 然蝕、オキテ、表 面	5V3/1 既出	10V4/1 既出	
0338	11d	鏡出部	020905	銅	鏡	0-10		径 2.8	重 8.8		ヨコナテ	ヨコナテ、同様に ヘラケズリ	2.5V3/2 既出		
0339	11e	鏡出部	020909	銅	高杯	10-44 前期		径 2.3	重 11.0		ヨコナテ	ヨコナテ	5V6/1 既出		
0340	11d	鏡出部	020814	銅	加飾鏡	6c代		径 2.8			ヨコナテ	ヨコナテ、過か しの内面あり	2.5V3/1 既出		
0341	11b	鏡出部	020908	銅	不明	4世紀		径 4.1	重 14.0		ヨコナテ	ヨコナテ	5V3/1 既出		
0342	11e	鏡出部	020927	銅	加飾	5-6c 代	12.6	径 4.3			ヨコナテ	ヨコナテ	2.5V3/1 既出		
0343	12f	SK155	020712	銅	加飾	8c 前半	12.8	径 3.5			ヨコナテ、自然蝕	ヨコナテ	10VRS/3 に よ	10V4/2 オリーブ片	
0344	11f	鏡出部	020812	銅	加飾	7c代		径 3.6			ヨコナテ	ヨコナテ	10VRS/7 に よ		
0345	11b	鏡出部	020929	銅	不明	4世紀		径 3.7			ヨコナテ	ヨコナテ	2.5VRS/2 既出		
0346	11e	鏡出部	020909	銅	加飾	10-44		径 3.6			ヨコナテ	ヨコナテ	2.5VRS/2 既出		
0347	12a	鏡出部	020927	銅	加飾	7c代		径 2.1			ヨコナテ	ヨコナテ	10VRS/2 既出		
0348	10d	SK215	020721	銅	鉢	NN-32		径 8.7	重 8.0		ヨコナテ	ヨコナテ、ヘラケ ズリ	5V4/1 既出		
0349	11e	鏡出部	020908	銅	加飾	0-10		径 4.9	重 8.9		ヨコナテ	ヨコナテ、同様に 切取	10VRS/4 既出		
0350	11b	鏡出部	020908	銅	加飾	4世紀		径 6.6			ヨコナテ	ヨコナテ、表面、 オキテ	5V4/1 既出		
0351	10d	SK240	020730	銅	加飾	4世紀		径 3.5			ヨコナテ	加飾	5V3/1 既出		
0352	9e	鏡出部	020929	銅	不明	4世紀		径 3.1			ヨコナテ	ヨコナテ	5V8/1 既出		
0353	11d	鏡出部	020905	銅	不明	4世紀		径 4.2			—	加飾	5V7/1 既出		
0354	12c	鏡出部	020923	銅	加飾	4世紀		径 6.0			ヨコナテ、加飾 文	ヨコナテ、オキテ、 自然蝕	2.5V3/1 既出	7.5V4/3 加飾	
0355	11b	鏡出部	020908	銅	加飾	1-17 前期	23.4	径 5.1		重 24.8	ヨコナテ	ヨコナテ、オキテ、 表面	5V3/1 既出		
0356	11e	鏡出部	020909	銅	加飾	1-17 前期	29.2	径 12.7		重 29.4	ヨコナテ	ヨコナテ、オキテ	2.5V3/1 既出		
0357	12f	SK155	020712	銅	加飾	7c代		径 6.9			加飾	ヘラケズリ、オキ テ	2.5V7/3 既出		
0358	11d	鏡出部	020812	銅	加飾	6c代		径 5.6			ヨコナテ	ヨコナテ	5V3/1 既出		
0359	11d	鏡出部	020812	銅	加飾	10-11 前期		径 3.5			ヨコナテ	ヨコナテ、オキテ	7.5VRS/3 に よ		

名古屋城三の丸遺跡 VII

調査年	アノテ	遺跡番号	日付	所在地・材質	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	内径	外径	貯り(内容)	備考	
0300	丸	020086	020718	瓦葺	瓦	O-II		残5.8		ヨコナデ	ヨコナデ	2.5V1/1 青灰		
0301	11c	020807	020807	瓦葺	瓦	7~8c		残5.9		ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラウ	5V4/1 瓦		
0302	11d	020829	020829	瓦葺	瓦	6c 代		残5.8		ヨコナデ	ヨコナデ、タナシ	7.5V8/3 にかい青 2.5V3/1 青灰		
0303	9d	020906	020906	瓦葺	瓦	6c 代		残6.1		ヨコナデ	ヨコナデ、タナシ	2.5V3/1 青灰		
0304	11e	020808	020808	瓦葺	瓦	7c 代		残8.3		ヨコナデ、ヨコハ	ヘラウタテリ、タナシ	5V6/1 瓦		
0305	10d	SK240	020730	瓦葺 or 土葺	瓦 or 土葺	7~8c		残3.8		—	敷オキエ	5V6/1 瓦		
0306	10d	SK196	020726	瓦葺	瓦	7~8c 代		残9.0		ヨコナデ	ヨコナデ、自然敷	2.5V1/1 青灰	5V4/2 灰 オリーブ	
0307	12a	SK22	020906	瓦葺	瓦	K-90	残8.0	残7.1		瓦敷、ヨコナデ	瓦敷、ヨコナデ	2.5V1/1 青灰	10V5/2 オリーブ灰	
0308	8d	020906	020906	瓦葺	瓦	K-90	残9.3	残9.2		ヨコナデ、瓦敷	ヨコナデ、瓦敷	5V7/1 瓦	5V6/4 オリーブ青	
0309	11e	020718	020718	瓦葺	瓦	不明	残9.2	残9.5		ヨコナデ	ヨコナデ、瓦敷	5V7/1 瓦		
0310	12f	SK195	020724	瓦葺	瓦	不明	残12.8	残2.8	残5.6	残13.0	ヨコナデ、瓦敷	ヨコナデ、瓦敷→ タテリ、敷オキエ	10V8/2 にかい青	
0311	11c	020807	020807	瓦葺	瓦	H-72	残16.0	残5.1	残7.0	残16.2	瓦敷→タテリ、ヨコナデ	瓦敷→タテリ、ヨコナデ、 瓦敷→タテリ、ヨコナデ	2.5V7/2 瓦敷	
0312	11d	020906	020906	瓦葺	瓦	K-90	残14.8	残3.0	残13.0	瓦敷→タテリ、ヨコナデ	瓦敷→タテリ、ヨコナデ	10V8/2 にかい青		
0313	11d	020906	020906	瓦葺	瓦	O-53	残13.2	残3.6	残6.0	残12.4	瓦敷、ヨコナデ	瓦敷、ヨコナデ、 瓦敷→タテリ	10V8/2 瓦敷	2.5V7/1 瓦
0314	11j	SK147	020708	瓦葺	瓦	O-53	残13.2	残4.4	残5.2	残13.8	ヨコナデ、自然敷	ヨコナデ、瓦敷→ タテリ	2.5V7/1 瓦	
0315	11c	020807	020807	瓦葺	瓦	K-90	残14.6	残3.1	残13.0	瓦敷→タテリ、ヨコナデ	瓦敷→タテリ、ヨコナデ	2.5V7/2 瓦敷		
0316	11b	020920	020920	瓦葺	瓦	O-53	残11.9	残7.4		瓦敷、ヨコナデ	ヨコナデ、瓦敷	10V8/1 瓦		
0317	8c、 9d	020820	020820	瓦葺	瓦	K-90	残2.5	残8.4		瓦敷、ヨコナデ	瓦敷、ヨコナデ、 瓦敷→タテリ	10V8/2 瓦		
0318	11e	020908	020908	瓦葺	瓦	K-90	残3.1	残6.0		ヨコナデ、瓦敷→ タテリ	ヨコナデ、瓦敷→ タテリ	7.5V8/2 瓦		
0319	10d	SK240	020730	瓦葺	瓦	K-90	残1.8	残7.4		ヨコナデ	ヨコナデ、瓦敷	2.5V6/2 瓦敷		
0320	12b	020906	020906	瓦葺	瓦	O-53	残2.0	残7.2		ヨコナデ	ヨコナデ	5V7/1 瓦		
0321	11c	020718	020718	瓦葺	瓦	O-53	残4.2	残8.0		瓦敷、ヨコナデ	ヨコナデ、瓦敷	2.5V6/2 瓦敷		
0322	10d	SK240	020730	瓦葺	瓦	山手側 3形式	残2.7	残8.0		ヨコナデ、瓦敷、 瓦敷→タテリ	ヨコナデ、瓦敷	2.5V5/2 瓦敷		
0323	10d	SK240	020730	瓦葺	瓦	O-53	残2.4	残7.5		ヨコナデ、瓦敷	ヨコナデ、瓦敷	2.5V6/2 瓦敷		
0324	11c	020807	020807	瓦葺	瓦	O-53	残2.2	残7.9		瓦敷、ヨコナデ、 瓦敷→タテリ	ヨコナデ、瓦敷→ タテリ	2.5V6/1 青灰		
0325	11c	020906	020906	瓦葺	瓦	K-14	残2.0	残8.4		ヨコナデ	ヨコナデ	2.5V6/2 瓦敷		
0326	11b	020908	020908	瓦葺	瓦	白代寺	残1.8	残6.6		ヨコナデ	ヨコナデ、瓦敷	10V8/2 瓦		
0327	11c	020907	020907	瓦葺	瓦	O-53	残2.4	残7.2		瓦敷、敷オキ敷、 一方タテリ	ヨコナデ、敷オキ敷、 瓦敷→タテリ	2.5V6/2 瓦敷		
0328	10d	SK240	020730	瓦葺	瓦	白代寺	残2.0	残5.7		ヨコナデ、瓦敷	ヨコナデ、瓦敷	2.5V7/1 瓦		
0329	11g	020812	020812	瓦葺	瓦	白代寺	残2.1	残7.0		ヨコナデ	ヨコナデ、瓦敷	2.5V7/1 瓦		
0330	11e	020907	020907	瓦葺	瓦	H-72	残2.0	残6.8		ヨコナデ	ヨコナデ、瓦敷	2.5V6/2 瓦敷		
0331	10d	SK240	020730	瓦葺	瓦	山手側 3形式	残2.0	残7.2		ヨコナデ、敷オキ敷	ヨコナデ、瓦敷	2.5V6/1 青灰		
0332	10d	SK240	020730	瓦葺	瓦	H-72	残1.8	残7.8		ヨコナデ、瓦敷	ヨコナデ、瓦敷	2.5V7/1 瓦		
0333	11c	020907	020907	瓦葺	瓦	H-72	残1.8	残6.3		瓦敷、ヨコナデ	瓦敷、ヨコナデ	2.5V6/2 瓦敷		
0334	11g	020812	020812	瓦葺	瓦	H-72	残2.1	残8.0		ヨコナデ	ヨコナデ	5V6/1 瓦		
0335	8d	020906	020906	瓦葺	瓦	H-72	残2.5	残7.8		ヨコナデ、敷オキ敷	ヨコナデ、瓦敷	2.5V7/1 瓦		
0336	11c	020907	020907	瓦葺	瓦	K-90	残1.8	残7.4		ヨコナデ、瓦敷→ タテリ	ヨコナデ、瓦敷	10V8/1 瓦		
0337	11a	020827	020827	瓦葺	瓦	山手側 2形式	残1.9	残6.2		ヨコナデ、自然敷	ヨコナデ	2.5V7/1 瓦		
0338	10d	SK240	020730	瓦葺	瓦	山手側 3形式	残2.0	残6.6		ヨコナデ	ヨコナデ、瓦敷	2.5V6/1 青灰		
0339	10d	020906	020906	瓦葺	瓦	O-53	残2.0	残8.4		ヨコナデ	ヨコナデ	7.5V8/2 瓦		
0400	11a	SK01	020906	瓦葺	瓦	K-90	残1.9	残7.0		ヨコナデ、敷オキ敷	ヨコナデ、瓦敷	2.5V7/1 瓦		
0401	11c	020807	020807	瓦葺	瓦	H-72	11.3	2.1	6.2	11.6	瓦敷、ヨコナデ	瓦敷、ヨコナデ	2.5V6/2 瓦敷	
0402	11a	020821	020821	瓦葺	瓦	H-72	残1.5	残7.4		ヨコナデ	ヨコナデ、瓦敷	2.5V7/1 瓦		
0403	11c	020907	020907	瓦葺	瓦	O-53	残1.2	残6.4		ヨコナデ、表面が 黒色化する	ヨコナデ、瓦敷	2.5V6/1 瓦	白色敷瓦敷	
0404	11c	020907	020907	瓦葺	瓦	H-72	残1.2	残6.2		ヨコナデ	ヨコナデ、瓦敷	10V8/2 瓦		
0405	9d	020813	020813	瓦葺	瓦	H-72	残1.2	残6.4		ヨコナデ、瓦敷	ヨコナデ、瓦敷	10V8/2 にかい青		
0406	10d	SK240	020730	瓦葺	瓦	O-53	残1.3	残5.3		ヨコナデ、敷オキ敷	ヨコナデ、瓦敷	2.5V7/1 瓦		
0407	11c	020907	020907	瓦葺	瓦	O-53	残1.3	残6.6		ヨコナデ	ヨコナデ、瓦敷	10V8/2 にかい青		
0408	12b	020906	020906	瓦葺	瓦	H-72	残1.4	残6.0		ヨコナデ	ヨコナデ、瓦敷	10V8/2 にかい青		
0409	9d	020813	020813	瓦葺	瓦	K-90	残1.7	残6.8		ヨコナデ、瓦敷	ヨコナデ、瓦敷	2.5V7/1 瓦		
0410	13c	SK38	020727	瓦葺	瓦	H-72	残1.4	残5.2		ヨコナデ	ヨコナデ、瓦敷	2.5V7/1 瓦		

遺物一覧表

図番	7107	遺物番号	日付	所在地・材質	品類	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	内面	外面	出土(内面)	出土(外面)	備考
0411	11a	SK136	020725	長島岡南	小銅	1472		4.6			ヨコナデ、自然蝕	ヨコナデ、自然蝕	2.5V(2)	2.5V(2)	
0412	12a	梶山B	020827	長島岡南	銅	6.90		残2.3			長島ハヤタリ、ヨコナデ	長島ハヤタリ、ヨコナデ	2.5V(7) 残(1)		
0413	13a	SD30	020829	長島岡南	銅	6.90 前		残1.0			緑銅、ヨコナデ	緑銅、ヨコナデ	10V(1) 残	C30-MD-Y00(48.30)	留付
0414	12b	SK135	020711	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0415	12b	SD17	020708	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0416	13a	SK480	020912	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0417	13a	SK38	020912	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0418	12b	SK135	020711	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0419	12b	SK135	020712	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0420	12f	SD10	020619	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0421	11g	SK67	020617	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0422	13a	SD25	020729	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0423	12b	SK135	020718	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0424	13a	SK38	020912	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0425	13a	SD22	020729	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0426	12b	SK135	020711	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0427	12b	SK135	020711	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0428	9a	SK56	020621	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0429	12b	SK135	020712	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0430	12b	SK135	020711	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0431	12j	SK04	020605	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0432	12b	SK135	020712	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0433	13a	前1 レンズ	020509	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0434	9b	SD12	020619	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0435	13a	SK38	020912	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0436	11b	SD12	020731	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0437	9a	SK291	020823	長島岡南	門向銅	V形									
0438	9a	SK23	020809	長島岡南	門向銅	V形									
0439	12b	SK135	020711	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0440	11d	梶山B	020805	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0441	12b	SD17	020711	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0442	10a	SD04	020823	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0443	12b	SK135	020715	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0444	9d	梶山B	020711	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0445	11f	SK01	020530	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0446	12b	SK135	020711	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0447	11d	T05	020802	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0448	12f	梶山B	020723	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0449	11a	梶山B	020829	長島岡南	門向銅	古銅2 段銅									
0450	11a	梶山B	020829	長島岡南	形銅	古銅2 段銅									
0451	12b	SK135	020711	長島岡南	形銅	古銅2 段銅									
0452	12b	SK273	020823	長島岡南	形銅	古銅2 段銅									
0453	12b	SK135	020712	長島岡南	瓦										
0454	12b	SK135	020711	長島岡南	瓦										
0455	12b	SK135	020711	長島岡南	瓦										
0456	13b	SK226	020910	短尾野山 山系	山系銅	7型式	13.7	5.7	5.0	13.9	自然蝕、ヨコナデ、 一方ヨコナデ	ヨコナデ、自然蝕、 同軸糸付、溝台 一部欠	2.5V(7) 残(1)		留付
0457	13b	SK226	020910	短尾野山系 山系	山系銅	8型式	13.1	5.1	5.8	13.3	ヨコナデ、一方 ナデ	ヨコナデ、同軸糸 付、同軸糸付、溝台 一部欠	10V(7) 2 12.1(1) 留		留付
0458	13b	SK226	020910	短尾野山系 山系	山系銅	7型式	溝13.2	5.9	5.0	溝13.5	ヨコナデ、一方 ナデ	ヨコナデ、自然蝕、 同軸糸付	2.5V(7) 残(1)		留付
0459	13b	SK226	020910	短尾野山系 山系	山系銅	7型式	13.8	5.9	5.2	14.0	ヨコナデ、内面ナ デ付、自然蝕、 一方ヨコナデ	ヨコナデ、自然蝕、 同軸糸付、溝台 一部欠	7.5V(7) 2		留付
0460	13b	SK226	020910	短尾野山系 山系	山系銅	7型式	14.0	6.2	溝5.7	14.2	ヨコナデ、一方 ナデ	ヨコナデ、自然蝕、同 軸糸付、溝台一部 欠	2.5V(7) 1(1) 留		留付

名古屋城三の丸遺跡 VII

調査号	7/17	遺跡番号	日付	所在地・材質	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	内面	外面	層主(作部)	層1	備考	
0461	130	SK226	020911	尾形惣山斎銅製	山車銅	7型式	13.0	5.6	13.9	ヨコナデ、一方河成本切取、真白一部欠落	ヨコナデ、傾斜、10YR7/1 灰白				
0462	130	SK226	020911	尾形惣山斎銅製	山車銅	8型式	13.0	5.0	6.0	ヨコナデ、一方ヨコナデ、河成本切取	ヨコナデ、河成本切取	2.5Y7/1 灰白			
0463	130	SK226	020911	尾形惣山斎銅製	山車銅	7型式	幅13.3	5.3	幅4.6	13.0	ヨコナデ、一方ヨコナデ、傾斜、河成本切取、真白一部欠落	2.5Y7/1 灰白			
0464	130	SK226	020910	尾形惣山斎銅製	山車銅	7型式	13.2	4.9	6.37	13.4	ヨコナデ	ヨコナデ、傾斜、河成本切取、真白一部に付着	10YR7/1 灰白		
0465	130	SK226	020730	尾形惣山斎銅製	山車銅	7型式		幅4.0	4.8		ヨコナデ、全体にスス付着、一方ヨコナデ、傾斜、河成本切取	10YR6/2 灰黄			
0466	130	SK226	020826	尾形惣山斎銅製	山車銅	6型式		幅3.2	5.7		ヨコナデ、一方ヨコナデ、傾斜、河成本切取	10YR6/1 灰白			
0467	130	SK226	020926	尾形惣山斎銅製	山車銅	7型式		幅2.4	幅5.2		ヨコナデ、一方ヨコナデ、傾斜、河成ハラスイリウにスス付着、真白一部欠落	2.5Y7/1 灰白 10YR4/1 黄			
0468	130	SK226	020727	尾形惣山斎銅製	山車銅	7型式		幅3.3	幅5.3		ヨコナデ、おびんにスス付着、一方ヨコナデ、傾斜、河成本切取	10YR6/2 灰黄			
0469	130	SK226	020826	尾形惣山斎銅製	山車銅	6型式		幅2.4	幅6.0		ヨコナデ、一方ヨコナデ、傾斜、河成本切取	10YR6/1 灰白			
0470	130	SK226	020823	尾形惣山斎銅製	山車銅	7型式		幅3.5	幅5.4		ヨコナデ、おびんにスス付着、一方ヨコナデ、傾斜、河成本切取	2.5Y7/1 灰白			
0471	130	SK226	020727	東濃惣山斎銅製	山車銅	7y8型式	幅12.8	幅3.0	幅13.0	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5Y6/2 灰白			
0472	130	SK226	020727	尾形惣山斎銅製	山車銅	7型式	2.8	2.1	5.0	8.0	ヨコナデ、一方ヨコナデ、河成本切取、真白一部に付着	2.5Y7/1 灰白			
0473	130	SK226	020727	尾形惣山斎銅製	山車銅	8型式	8.0	1.8	5.6	8.3	ヨコナデ、河成本切取、真白一部に付着	2.5Y7/2 灰黄			
0474	130	SK226	020727	尾形惣山斎銅製	山車銅	8型式	7.5	1.8	5.8	7.8	ヨコナデ、一方ヨコナデ、河成本切取、真白一部に付着	2.5Y7/1 灰白			
0475	130	SK226	020823	尾形惣山斎銅製	山車銅	8型式	幅7.2	1.4	幅4.8	幅7.6	ヨコナデ、一方ヨコナデ、河成本切取、真白一部に付着	10YR7/1 灰白			
0476	130	SK226	020727	東濃惣山斎銅製	山車銅	不明	幅8.8	1.4	幅5.2	幅9.0	ヨコナデ、一方ヨコナデ、河成本切取	2.5Y7/1 灰白			
0477	130	SK226	020826	土師器	赤ロクロ調製物		幅10.8	幅2.2	幅11.0	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/3 濃い黄褐色			
0478	130	SK226	020823	東濃陶磁器	甕	不明	幅1.4	幅18.8		ヨコナデ	ヨコナデ、砂付、白化粧	2.5Y7/1 灰白			
0479	130	SK226	020727	尾形惣山斎銅製	鉢	7y8型式		幅3.5			よく磨滅	ヘラズリ、ヨコナデ	10YR7/1 灰白		
0480	130	SK226	020826	土師器	高伊勢赤銅		幅27.0	幅2.9		ヨコナデ	ヨコナデ、ハヤ	10YR7/3 濃い黄褐色			
0481	130	SK226	020727	土師器	高伊勢赤銅			幅6.6			胎オヤス	ハヤ	2.5YR7/3 濃い黄褐色		
0482	130	SK226	020823	土師器	内野型赤銅		幅19.4	幅5.6		ヨコナデ、胎オヤス、スス付着	ヨコナデ、ハヤ	2.5YR7/1 黄			
0483	130	SK226	020823	土師器	内野型赤銅			幅2.8			ヨコナデ	ヨコナデ、スス付着	10YR7/3 濃い黄褐色		
0484	130	SK310	020827	尾形惣山斎銅製	山車銅	7型式	幅13.7	5.1	幅5.8	幅14.0	ヨコナデ、一方ヨコナデ、河成本切取、真白一部に付着	10YR7/1 灰白			
0485	130	SK310	020827	尾形惣山斎銅製(廉1)	山車銅	7y8型式	幅13.6	幅4.6		幅14.0	ヨコナデ	2.5Y7/1 灰白			
0486	130	SK310	020827	尾形惣山斎銅製	山車銅	6型式	幅13.2	幅5.3		幅13.6	ヨコナデ、スス付着	ヨコナデ	10YR7/1 灰白		
0487	130	SK310	020826	尾形惣山斎銅製	山車銅	6型式		幅3.0	幅6.8		ヨコナデ、一方ヨコナデ、傾斜、河成本切取	10YR7/1 灰白			
0488	130	SK310	020827	尾形惣山斎銅製(知多)	山車銅	6型式		幅2.3	幅6.8		ヨコナデ、一方ヨコナデ、傾斜、河成本切取	2.5Y7/1 灰白			
0489	130	SK310	020826	土師器	高伊勢赤銅			幅1.3			ヨコナデ	ヨコナデ、スス付着	10YR7/3 濃い黄褐色		
0490	130	SK310	020826	東濃陶磁器	甕	中野6a型式	幅25.4	幅3.5		自然釉、ヨコナデ	自然釉、ヨコナデ	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y4/3 胎オリーブ		
0491	120	S018	020712	尾形惣山斎銅製(廉1)	山車銅	7型式		幅2.2			ヨコナデ、一方ヨコナデ、真白磨滅、河成本切取	10YR6/2 灰黄			
0492	120	S018	020712	尾形惣山斎銅製(廉1)	山車銅	7型式		幅2.2	幅5.2		ヨコナデ、自然釉、磨滅あり	ヨコナデ、傾斜、河成本切取、真白一部欠落	10YR6/2 灰黄 10YR6/2 灰黄 10YR6/2 灰黄		
0493	120	S018	020712	東濃惣山斎銅製	山車銅	人型大銅造		幅1.5	幅5.0		ヨコナデ、一方ヨコナデ	ヨコナデ、傾斜、河成本切取	2.5Y7/2 灰黄		
0495	120	S018	020718	尾形惣山斎銅製	陶瓦		径大目2.4	径大目2.2	残存厚2.0						
0496	120	S017、18	020711	土製品	瓦葺?			幅2.4		3.0					
0497	11g	SK85	020618	尾形惣山斎銅製	山車銅	7y8型式	幅12.8	幅6.6		幅13.0	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5Y7/2 灰黄		
0498	12g	SK85	020621	尾形惣山斎銅製	山車銅	7y8型式	幅13.0	幅1.6		幅13.2	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5Y6/2 灰黄		
0499	12g	SK85	020621	東濃惣山斎銅製	山車銅	御上原		幅3.3	幅6.4		灰釉、磨滅あり	ヨコナデ、砂付着、河成本切取	5Y7/1 灰白		
0500	12g	SK85	020621	土師器	高伊勢赤銅			幅1.0			ヨコナデ	ヨコナデ	2.5Y7/3 浅黄		
0501	8b	SK356	020919	尾形惣山斎銅製	山車銅	7y8型式	幅12.7	幅4.5		幅13.0	ヨコナデ、自然釉	ヨコナデ、自然釉	10YR8/1 灰白	C10-M4、Y16-816	
0502	8b	SK356	020919	尾形惣山斎銅製	山車銅	7型式		幅2.2			ヨコナデ、一方ヨコナデ	ヨコナデ、河成本切取、真白一部欠落	5Y7/1 灰白		
0503	8b	SK356	020919	尾形惣山斎銅製	山車銅	不明	幅8.2	1.6	幅5.2	幅8.6	ヨコナデ、一方ヨコナデ、傾斜、河成本切取、真白一部欠落	2.5Y7/1 灰白			
0504	8b	SK356	020919	土師器	赤ロクロ調製物		幅11.8	幅2.3		幅12.2	ヨコナデ	ヨコナデ	2.5YR/1 灰白		
0505	9a	SK357	020919	東濃惣山斎銅製	山車銅	不明	幅14.4	幅5.0		幅14.8	自然釉、ヨコナデ	ヨコナデ	5Y7/1 灰白		
0506	9a	SK357	020919	土師器?	赤ロクロ調製物		幅13.4	2.6	幅9.2	幅13.6	ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラズリ、磨滅あり	10YR8/2 灰白		

図番	種別	目録	所在地・材質	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	内面	外面	取寸(内径)	取寸(外径)	備考
0097	121	NK237	020729	尾形山正 銅	0-53	径 1.2	厚 6.2			ヨコナデ	ヨコナデ、同軸切刃	109R7/10 C-10(直線)		
0098	121	NK237	020729	尾形山正 小銅	20x8形式	径 8.0	厚 5.0	径 8.4		ヨコナデ、自然研	ヨコナデ、同軸切刃	109R8/1 R11		鏡戸
0099	111	NK274	020002	土師部 陶伊勢赤土		径 2.0				ヨコナデ	ヨコナデ	2.5X2(1)		
0010	98	NX02	020813	尾形山正 銅	丸型大	径 14.4	径 4.2	径 14.8		ヨコナデ	ヨコナデ	2.5X7(1)		
0011	88	NX02	020812	尾形山正 銅	7型式	径 4.1	厚 6.4			ヨコナデ、一方ナデ	ヨコナデ、研削、同軸切刃	109R7/2 R11		鏡戸
0012	126	NK203	020726	尾形山正 銅	10-72	径 2.8	厚 6.0			ヨコナデ	ヨコナデ	7.5X7(1)		中継 古代巻(4.5×1.00付セル)
0013	126	NK203	020726	尾形山正 銅	丸型式	径 2.6	厚 5.6			ヨコナデ	ヨコナデ、同軸切刃	2.5X6(1)	直戻	鏡戸
0014	126	NK203	020726	尾形山正 銅	丸型式	径 1.6	厚 5.2			ヨコナデ、一方ナデ	ヨコナデ、研削	2.5X7(2)	直戻	
0015	126	NK203	020726	尾形山正 銅	段削	0-53	径 1.8	厚 6.3		ヨコナデ、一方ナデ	ヨコナデ、同軸切刃	2.5X6(2)	直戻	
0016	126	NK203	020726	尾形山正 銅	段削	0-53	径 2.7	厚 7.0		ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ、ヨコナデ	2.5X7(1)		
0017	126	NK203	020726	尾形山正 銅	丸型式	径 3.3	厚 9.4			研削、ヨコナデ	研削、ヨコナデ、同軸切刃	2.5X7(1)		SY44 超オリーブ
0018	126	NK203	020726	土師部 滑磨型		径 3.0				ヨコナデ、ス入研削	ヨコナデ	7.5X4(4)		
0019	126	NK203	020729	土師部 内側研削		径 2.4				ヨコナデ、ス入研削	ヨコナデ、ヨコナデ、ヨコナデ、ス入研削	109R7/3 C-10(直線)		
0020	126	NK203	020726	土師部 内側研削		径 15.8	径 3.2	径 20.0		ヨコナデ、研削	ヨコナデ、研削、研削	109R6/3 直戻		
0021	11a	尾山正	020820	尾形山正 銅	丸型式	径 14.6	径 3.4	径 15.0		ヨコナデ、自然研	ヨコナデ	7.5X7(1)		知多?
0022	11a	尾山正	020820	尾形山正 銅	7型式	径 12.4	径 5.3	径 12.6		ヨコナデ、一方ナデ	ヨコナデ、研削	2.5X7(1)		鏡戸
0023	16b	尾山正	020814	新美濃内寄 尾形山正 銅	5型式	径 2.1	厚 7.0			ヨコナデ、自然研	ヨコナデ、研削、同軸切刃	2.5X7(1)		
0024	11a	SX02	120802	尾形山正 銅	7型式	径 2.4	径 5.0			ヨコナデ、研削	ヨコナデ、研削、研削	7.5X7(1)		鏡戸
0025	16d	尾山正	020814	尾形山正 銅	丸型式	径 2.1	厚 5.8			ヨコナデ、一方ナデ	ヨコナデ、同軸切刃	109R7/2 R11		
0026	11b	SX03	020723	尾形山正 銅	丸型式	径 13.8	径 3.6	径 14.2		ヨコナデ	ヨコナデ	2.5X7(1)		
0027	12c	尾山正	020811	尾形山正 銅	丸型式	径 12.0	径 4.1	径 4.6	径 13.0	ヨコナデ、直戻	ヨコナデ、研削、同軸切刃	109R7/3 C-10(直線)		
0028	16c	尾山正	020814	尾形山正 銅	丸型式	径 2.9	厚 5.2			ヨコナデ	ヨコナデ、研削、同軸切刃	109R8/3 直戻		
0029	12d	尾山正	020822	尾形山正 銅	丸型式	径 13.4	径 3.5	径 5.0	径 13.7	ヨコナデ	ヨコナデ、同軸切刃	109R7/2 C-10(直線)		
0030	16a	尾山正	020806	尾形山正 銅	丸型式	径 11.6	径 2.8	径 4.0	径 12.0	ヨコナデ	ヨコナデ、同軸切刃	2.5X7(1)		
0031	9d	尾山正	020816	尾形山正 銅	丸型式	径 12.4	径 2.9	径 4.8	径 12.8	ヨコナデ	ヨコナデ、同軸切刃	2.5X7(1)		
0032	11e	尾山正	020725	尾形山正 銅	丸型式	径 12.7	径 3.6	径 5.2	径 13.0	ヨコナデ、一方ナデ	ヨコナデ、同軸切刃	2.5X7(1)		
0033	16e	NK324	020827	尾形山正 銅	丸型式	径 10.4	径 2.5	径 4.0	径 10.8	ヨコナデ	ヨコナデ、同軸切刃	2.5X6(2)	直戻	
0034	11a	尾山正	020820	尾形山正 銅	丸型式	径 3.1	径 4.8			ヨコナデ、自然研	ヨコナデ、研削、一方ナデ	2.5X7(2)	直戻	
0035	11b	NK123		尾形山正 銅	丸型式	径 6.6				ヨコナデ、一方ナデ	ヨコナデ、同軸切刃、直戻	2.5X7(1)		
0036	13b	NX12	020727	尾形山正 銅	丸型式	径 8.0	径 2.1	径 5.4	径 8.4	ヨコナデ、自然研	ヨコナデ、同軸切刃	2.5X7(1)		
0037	11a	SX02	120802	尾形山正 銅	7型式	径 8.0	径 1.6	径 8.0	径 8.3	ヨコナデ、一方ナデ	ヨコナデ、同軸切刃	109R7/3 C-10(直線)		知多?
0038	11a	尾山正	020820	尾形山正 銅	20x8形式	径 8.4	径 1.5	径 8.8	径 8.8	ヨコナデ	ヨコナデ	109R6/3 直戻		
0039	11a	尾山正	020820	尾形山正 銅	丸型式	径 8.0	径 1.3	径 5.4	径 8.4	ヨコナデ、一方ナデ	ヨコナデ、同軸切刃	109R8/2 R11		鏡戸
0040	11a	尾山正	020820	尾形山正 銅	丸型式	径 8.2	径 2.0	径 5.0	径 8.6	ヨコナデ、一方ナデ	ヨコナデ、同軸切刃	109R7/3 C-10(直線)		
0041	11b	NK260	020730	尾形山正 銅	丸型式	径 9.6	径 1.5	径 4.4	径 10.0	ヨコナデ、一方ナデ	ヨコナデ、同軸切刃	109R7/3 C-10(直線)		鏡戸
0042	13c	筒トロン	020000	尾形山正 銅	7型式	径 7.9	径 1.4	径 5.2	径 8.2	ヨコナデ、一方ナデ	ヨコナデ、同軸切刃	109R7/2 C-10(直線)		鏡戸
0043	13c	筒トロン	020000	尾形山正 銅	丸型式	径 8.0	径 1.7	径 4.7	径 8.1	ヨコナデ、一方ナデ	ヨコナデ、同軸切刃	109R7/3 C-10(直線)		知多?
0044	11a	尾山正	020821	尾形山正 銅	7型式	径 8.6	径 2.0	径 4.5	径 8.9	ヨコナデ、一方ナデ	ヨコナデ、同軸切刃	109R7/3 C-10(直線)		鏡戸
0045	11a	尾山正	020821	尾形山正 銅	丸型式	径 8.2	径 1.2	径 5.6	径 8.4	ヨコナデ	ヨコナデ、同軸切刃	2.5X7(1)		
0046	11b	T04	020708	尾形山正 銅	丸型式	径 8.8	径 10.0			ヨコナデ	ヨコナデ、ヘラケズリ、同軸切刃	2.5X7(1)		直戻
0047	16a	SX13	020621	尾形山正 銅	丸型式	径 5.9				ヨコナデ、ヘラケズリ	ヨコナデ、直戻	2.5X4(2)		
0048	9c	NK527	020913	尾形山正 銅	丸型式	径 15.6	径 2.5	径 16.2		自然研	自然研	2.5X8(1)		2.5X7(1) 超オリーブ
0049	16c	尾山正	020814	尾形山正 銅	丸型式	径 4.4				自然研	自然研、片研削	2.5X7(1)		2.5X5(2) 超オリーブ
0050	16a	西トロン	020513	尾形山正 銅	丸型式	径 5.8	径 3.0	径 4.0	径 6.0	ヨコナデ、自然研	ヨコナデ、自然研	2.5X8(1)		直戻+知多
0051	10d	SX04	120802	尾形山正 銅	丸型式	径 5.9	径 1.8	径 3.7	径 6.2	自然研	自然研、片研削	109R7/3 C-10(直線)		1097/2 R11
0052	12b	ノット	020823	尾形山正 銅	丸型式	径 2.6	径 6.5	径 2.4	径 2.7	ヨコナデ、自然研	ヨコナデ、片研削、同軸切刃	2.5X8(1)		直戻
0053	9a	NK548	020919	尾形山正 銅	丸型式	径 12.8	径 2.1	径 2.0	径 2.0	ヨコナデ	研削、研削	109R7/2 C-10(直線)		2.5X8(1)
0054	10a	T03	020624	尾形山正 銅	丸型式	径 12.8	径 2.6	径 13.0	径 13.0	ヨコナデ	ヨコナデ、直戻	109R8/2		
0055	11a	尾山正	020820	尾形山正 銅	丸型式	径 10.0	径 2.3	径 10.2		ヨコナデ	ヨコナデ、直戻	2.5X8(1)		

名古屋城三の丸遺跡Ⅶ

調査年	期	遺跡番号	日付	所在地・材質	器種	時期	口径(mm)	底径(mm)	高さ(mm)	内径	外径	形状・(作部)	備考	
0556	11b	020820	1.1.1	土師器	土師器	推定	8.8	1.5	5.6	推定	ヨコナデ、フ	10Y98/2 瓦片		
0557	11b	020820	1.1.1	土師器	陶器・赤土系	推定	1.0			ヨコナデ	ヨコナデ	10Y98/2 瓦片		
0558	11b	020820	1.1.1	土師器	陶器・赤土系	推定	1.5			ヨコナデ	ヨコナデ	10Y97/2 土師器		
0559	11a	020820	1.1.1	土師器	陶器・赤土系	推定	1.7			ヨコナデ	ヨコナデ、わすれにススガ	10Y97/3 土師器		
0560	11a	020724	1.1.1	土師器	陶器・赤土系	推定	1.1			ヨコナデ	ヨコナデ	10Y98/2 瓦片		
0561	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	天目茶碗	古瀬戸器	11.8	5.7	4.5	推定	2.5Y/2 瓦片	7.5Y92/1 瓦		
0562	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	天目茶碗	古瀬戸器	10.8	5.1	1.0	推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0563	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	天目茶碗	古瀬戸器	11.4	5.5	1.0	推定	2.5Y/2 瓦片	5Y/2/1 瓦		
0564	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	天目茶碗	古瀬戸器	11.0	5.5	1.2	推定	2.5Y/2 瓦片	10Y91/2 瓦		
0565	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	天目茶碗	古瀬戸器	11.4	5.4	1.0	推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0566	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	天目茶碗	古瀬戸器	15.2	5.9	1.6	推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0567	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	茶碗	古瀬戸器	3.0	5.0		推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0568	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	1.9	5.1		推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0569	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	10.2	2.2	5.5	推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0570	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	13.2	3.2	5.8	推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0571	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	2.1	6.4		推定	2.5Y/2 瓦片	10Y92/2 瓦		
0572	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	1.3	4.7		推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0573	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	1.1	2.4		推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0574	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	1.6	5.0		推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0575	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	1.6	6.0		推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0576	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	1.3	5.0		推定	2.5Y/2 瓦片	10Y97/2 土師器		
0577	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	1.7	5.2		推定	2.5Y/2 瓦片	10Y97/2 土師器		
0578	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	3.0	3.2	7.4	推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0579	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	2.3	6.6		推定	2.5Y/2 瓦片	5Y/2/1 瓦		
0580	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	2.4	7.6		推定	2.5Y/2 瓦片	10Y97/3 土師器		
0581	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	3.0	6.2		推定	2.5Y/2 瓦片	10Y97/2 土師器		
0582	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	4.2	5.0		推定	2.5Y/2 瓦片	10Y97/2 土師器		
0583	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	2.8	6.2~6.5		推定	2.5Y/2 瓦片	10Y96/3 土師器		
0584	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	2.9	4.3		推定	2.5Y/2 瓦片	10Y97/2 土師器		
0585	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	4.2	5.4		推定	2.5Y/2 瓦片	10Y97/2 土師器		
0586	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	4.2			推定	2.5Y/2 瓦片	10Y96/2 瓦		
0587	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	8.8	1.5~2.3	5.3~5.8	9.0	推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦	
0588	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	8.8	1.8	4.8	9.0	推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦	
0589	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	1.8	5.2		推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0590	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	1.9	4.2		推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0591	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	1.9	5.0		推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0592	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	10.3	2.2	5.0	推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0593	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	5.4	1.8	12.6	推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0594	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	19.4	3.7	10.0	推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0595	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	3.2	10.4		推定	2.5Y/2 瓦片	5Y/2/1 瓦		
0596	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	2.3	13.6		推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0597	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	3.4	10.0		推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0598	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	4.0			推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0599	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	2.1			推定	2.5Y/2 瓦片	5Y/2/1 瓦		
0600	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	2.3	7.2		推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0601	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	2.5	8.0		推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		
0602	12b	SK155	020711	瀬戸瓦器陶器	鉢	古瀬戸器	2.0	2.3	4.8	推定	2.5Y/2 瓦片	2.5Y/2/1 瓦		

遺物一覧表

図番	遺物番号	目付	所在地	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	内面	外面	胎土(内面)	胎土(外面)	備考
0603	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅I	残4.8			磨削、ナメ方内へ ツラキ	灰胎	2.5V71(灰)	3V6/3 オリーブ黄	
0604	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅I へ	残4.3	残10.0		灰胎、トナリ痕	灰胎、下平磨削、 ヘラツキ	10V73/3 にじい青	3V6/6 オリーブ	
0605	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV	残5.5	残6.0		灰胎、下平磨削、 ヘラツキ	灰胎、下平磨削、 ヘラツキ、スス 付着	2.5V73(洗)	3V6/6 オリーブ	
0606	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV	残3.3	残19.4		灰胎、灰胎	灰胎、ヘラツキ、 スス付着	2.5V73(洗)	3V6/2 赤茶	
0607	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残27.0	残5.8		磨削、おひざに磨 削、磨目1単位7 長17cm?1厚 位残	灰胎、ヘラツキ、 スス付着	2.5V72(洗)	2.5V3/2 船赤	
0608	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残29.2	残5.5		磨削	磨削	10V84/4 洗	2.5V3/3 洗	
0609	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残30.6	残4.7		磨削、磨削強い、 スス付着	磨削、スス付着	10V87/3 にじい青	10V83/3 船赤	
0610	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残31.4	残4.4		磨削	磨削	2.5V73(洗)	7.5V3/2 船赤	
0611	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残31.4	残5.6		磨削(磨削?)	磨削(磨削?)	2.5V83(洗)	10V83/2 灰	
0612	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅I へ	残2.7	残10.0		灰胎、ヘラツキ、洗 目	磨削、ヨコナデ、 河原土付着、付着 白	2.5V73(洗)	3V6/2 灰オリーブ	
0613	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残18.6	残5.1		磨削	灰胎、洗	2.5V72(洗)	7.5V84/3 灰	
0614	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残4.2	残12.6		磨削、部分的に磨 削	磨削、河原土付着	2.5V82(灰)		
0615	12b	NK135	020702	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残17.6	残6.2		磨削、スス付着	磨削、スス付着	7.5V81(灰)	10V84/2 灰	
0616	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残5.4	残12.4		磨削、磨し(磨削)	磨削、河原土付着	10V85/2 洗	10V83/2 灰	
0617	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残6.4	9.6		磨削、磨目1単 位(長8.2cm)	磨削、河原土付着 のち表面全体 磨削	2.5V83(洗)	7.5V81/1 船赤	
0618	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残7.1	残9.6		磨削、磨目1単 位(長8.2cm)	磨削、トナリ痕あ り、河原土付着、 磨削後スス付着	2.5V82(灰)	3V8/2 灰	
0619	12b	NK135	020711	土師器	新付着	残6.9		残25.7	磨削不明(指オ エ?)、スス付着	ヨコナデ、 ヘラツキ	10V85/2 洗	10V84/2 灰	
0620	12b	NK135	020711	土師器	新付着				ヨコナデ、スス付 着	ヨコナデ、スス付 着	7.5V84/3 洗		
0621	12b	NK135	020711	土師器	新付着	残4.4			ヨコナデ	ヨコナデ、13磨削 スス付着	10V87/4 にじい青		
0622	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残9.0	残7.1		磨削	灰胎、下平磨削	10V86/3 にじい青	5V3/4 オリーブ	
0623	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残10.2	残6.3		磨削、下平磨削	磨削(部分的に自然 灰胎)	2.5V79/3(洗)	10V84/4 灰	
0624	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残9.5			磨削	灰胎	2.5V73(洗)	2.5V6/6 船赤	
0625	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残5.2			ナメ灰胎	灰胎	2.5V73(洗)	7.5V83/3 オリーブ	
0626	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残7.8	残8.4		磨削	ヘラツキ、ヨコ ナデ、灰胎、磨削?	10V87/4 にじい青	2.5V71/3 灰	
0627	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残7.0	残8.8		磨削	灰胎、下平磨削、 河原土付着、磨削 後スス付着	2.5V73(洗)	3V6/3 灰オリーブ	
0628	12b	NK135	020712	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残5.4			磨削、磨削	灰胎	10V87/2 洗	2.5V2/1 灰	
0629	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残5.5			磨削	灰胎	5V8/1(灰)	5V3/3 灰オリーブ	
0630	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅II	残4.7			灰胎、下平磨削	灰胎(部分的に灰 胎)	2.5V77(灰)	10V82/2 オリーブ	
0631	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残13.6			ヨコナデ、灰胎?	灰胎?、表面風化 する、ヘラツキ	10V87/3 にじい青	10V86/6 船赤	
0632	12b	NK135	020712	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残9.3			磨削、下平磨削	灰胎、ヘラツキ、 内面磨削、ナメ	2.5V83(洗)	7.5V84/4 灰	たふら629 1日-船
0633	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残3.3	残9.6		磨削	灰胎、下平磨削、 ヘラツキ	10V87/6 船赤	10V82/1 灰	
0634	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残3.2			灰胎、下平磨削	灰胎、下平磨削、 内面磨削(部分のみ) ススあり、内面 磨削	2.5V73(洗)	7.5V83/3 オリーブ	
0635	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残9.2			磨削	磨削	10V86/3 にじい青	10V81/7/1 灰	
0636	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残6.7	残11.4		磨削	灰胎、下平磨削	10V88/3 洗	10V82/1 灰	
0637	12b	NK135	020711	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残14.8			灰胎、磨削	灰胎、磨削	10V88/3(洗)	10V81/7/1 灰	
0638	12b	NK135	020711	常陸陶器	中野10 新付着	残16.4	残7.3		ヨコナデ、自然 灰胎	ヨコナデ、自然 灰胎	2.5V3/3 洗	7.5V4/2 灰オリーブ	
0639	12b	NK135	020711	常陸陶器	中野 新付着	残6.9?7			磨削、ヨコナデ	自然灰、自然灰 付着	2.5V3/1(灰)	10V82/2 オリーブ	1040上付-磨 削、河原土 へ加多付
0640	12b	NK135	020711	常陸陶器	中野5 新付着	残31.4	残6.3		自然灰、自然灰、 ヨコナデ	ヨコナデ、自然 灰胎	5V83/4 船赤	5V4/4 船赤	
0641	12b	NK135	020712	常陸陶器	中野5 新付着	残4.1			ヨコナデ、自然 灰胎	ヨコナデ、自然 灰胎	5V83/3 洗	5V4/3 船オリーブ	
0642	12b	NK135	020711	常陸陶器	中野7 新付着	残5.3			自然灰、ヨコナデ	自然灰、ヨコナデ	2.5V84/4 にじい青	7.5V4/3 船オリーブ	
0643	12b	NK135	020711	常陸陶器	中野9 新付着	残40.0	残6.3		自然灰、ヨコナデ	自然灰、ヨコナデ	5V83/3 船赤	5V5/4 オリーブ	
0644	12b	NK135	020711	常陸陶器	中野9 新付着	残5.7	残6.7	磨3.8				10V82/2 オリーブ	
0645	12b	NK135	020711	常陸陶器	中野9 新付着	残5.2	残4.4	磨1.4				10V83/3 船赤	
0646	11	NK147	020703	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残11.8	残5.8		磨削	灰胎、磨削	10V88/3 洗	10V85/3 洗	
0647	11	NK147	020708	船形瓦葺陶器	古銅IV 新	残11.8	残5.9		磨削	灰胎、磨削	2.5V62(洗)	10V83/3 船赤	

名古屋城三の丸遺跡 VII

調査年	アノ	遺跡番号	日付	所在地・材質	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	内蔵	外面	貯水(内蔵)	船1	備考
0648	11	SK147	020806	廻り瓦葺陶器	瓦葺陶器	大1	長さ11.8	幅5.7	高さ0	鉄胎	鉄胎、鉄胎	10YR6/3 にのみ	5Y3/2 ロープ型	
0649	11	SK147	020806	廻り瓦葺陶器	瓦葺陶器	大1	長さ11.8	幅5.7	高さ0	鉄胎	鉄胎、鉄胎、同長 磁粒付、端は白	10YR6/4 にのみ	5YR2/1 瓦型	
0650	11	SK147	020806	廻り瓦葺陶器	瓦葺陶器	大1	長さ11.8	幅5.7	高さ0	鉄胎	鉄胎、下手蓋部、 同長磁胎	2.5YR7/2 灰白 にのみ	10YR2/1 瓦 型	
0651	11	SK147	020706	廻り瓦葺陶器	瓦葺陶器	大1	長さ13.0	幅4.9	高さ0	鉄胎	鉄胎、下手蓋部	10YR7/1 灰白 にのみ	10YR3/4 型	
0652	11	SK147	020806	廻り瓦葺陶器	瓦葺陶器	大1	長さ11.1	幅2.6	高さ4.7	鉄胎	鉄胎、下手蓋部、 同長磁胎	2.5YR7/2 灰白 にのみ	7.5Y5/3 長ロープ	
0653	11	SK147	020806	廻り瓦葺陶器	瓦葺陶器	大1	長さ10.8	幅1.8	高さ11.0	鉄胎	鉄胎	2.5YR7/2 灰白 にのみ		
0654	11	SK147	020806	廻り瓦葺陶器	瓦葺陶器	大1	長さ11.2	幅3.1	高さ4.4	鉄胎	鉄胎、おぼろ に白磁胎、同長磁胎	5Y7/1 灰白 にのみ		
0655	12	SK147	020709	廻り瓦葺陶器	瓦葺陶器	大1	長さ9.0	幅2.0	高さ5.4	鉄胎	鉄胎、一方 コナテ、白磁胎	2.5Y7/1 灰白 にのみ		
0656	11	SK147	020705	廻り瓦葺陶器	瓦葺陶器	大1	長さ9.2	幅2.1	高さ5.0	鉄胎	鉄胎、コナテ、白磁胎、 一方ナテ	10YR7/1 灰白 にのみ		備付
0657	11	SK147	020705	廻り瓦葺陶器	瓦葺陶器	大1	長さ14.0	幅4.2	高さ5.4	鉄胎	鉄胎、コナテ、白磁胎	2.5Y7/1 灰白 にのみ		
0658	11	SK147	020705	廻り瓦葺陶器	瓦葺陶器	大1	長さ8.00	幅2.1	高さ7.4	鉄胎	鉄胎、重んじり 瓦胎、同長磁胎	2.5Y7/2 灰白 にのみ	5YR1 灰白 にのみ	
0659	11	SK147	020906	中国	白磁小作	大1	長さ17.7	幅3.4	高さ0	白磁胎	白磁胎、高台部 磁胎	5YR1 灰白 にのみ	C-AM0 YG- H0.4	
0660	11	SK147	020705	中国	白磁胎	大1	長さ10.7	幅7.0	高さ0	白磁胎	白磁胎	5Y-M4Y4- H0.0	C10-M4- Y10-H0.0	口取付
0661	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ2.0	幅6.6	高さ32.0	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/2 にのみ		
0662	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ12.4	幅2.1	高さ7.2	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/4 にのみ		
0663	11	SK147	020709	土師器	コナテ調整器	大1	長さ13.0	幅2.3	高さ6.7	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/4 にのみ		
0664	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ12.0	幅2.3	高さ6.5	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/3 にのみ		
0665	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ12.4	幅2.1	高さ6.3	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/3 にのみ		
0666	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ11.7	幅2.0	高さ6.0	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/4 にのみ		
0667	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ13.0	幅2.1	高さ6.6	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/4 にのみ		
0668	11	SK147	020819	土師器	コナテ調整器	大1	長さ12.8	幅2.6	高さ5.8	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/4 にのみ		
0669	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ11.8	幅2.6	高さ6.2	コナテ	コナテ、同長 磁胎	2.5YR7/4 にのみ		
0670	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ11.7	幅2.1	高さ6.0	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/3 にのみ		
0671	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ12.1	幅2.0	高さ6.4	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/3 にのみ		
0672	11	SK147	020705	土師器	コナテ調整器	大1	長さ13.4	幅2.2	高さ6.3	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/3 にのみ		
0673	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ11.9	幅2.0	高さ6.4	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/4 にのみ		
0674	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ12.0	幅2.1	高さ6.4	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/4 にのみ		
0675	11	SK147	020906	土師器	コナテ調整器	大1	長さ13.0	幅2.3	高さ6.4	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/4 にのみ		
0676	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ12.1	幅2.1	高さ6.5	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/4 にのみ		
0677	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ12.0	幅2.2	高さ6.2	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/4 にのみ		
0678	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ11.6	幅2.2	高さ6.2	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/3 にのみ		
0679	11	SK147	020708	土師器	コナテ調整器	大1	長さ14.0	幅2.2	高さ7.2	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/3 にのみ		
0680	11	SK147	020819	土師器	コナテ調整器	大1	長さ13.6	幅2.1	高さ6.8	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/3 にのみ		
0681	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ13.0	幅2.2	高さ7.0	コナテ	コナテ、同長 磁胎	7.5YR7/6 磁胎		
0682	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ12.0	幅2.0	高さ6.0	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/3 にのみ		
0683	11	SK147	020819	土師器	コナテ調整器	大1	長さ14.0	幅2.4	高さ7.0	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/4 にのみ		
0684	11	SK147	020705	土師器	コナテ調整器	大1	長さ13.7	幅2.2	高さ6.7	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/4 にのみ		
0685	11	SK147	020708	土師器	コナテ調整器	大1	長さ13.4	幅2.5	高さ7.0	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/3 にのみ		
0686	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ12.1	幅2.0	高さ5.9	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/3 にのみ		
0687	11	SK147	020819	土師器	コナテ調整器	大1	長さ15.0	幅2.6	高さ7.8	コナテ	コナテ、ヌス付	10YR7/4 にのみ		
0688	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ11.8	幅2.0	高さ6.0	コナテ	コナテ	10YR7/3 にのみ		
0689	11	SK147	020705	土師器	コナテ調整器	大1	長さ12.6	幅2.1	高さ6.4	コナテ	コナテ、同長 磁胎	10YR7/3 にのみ		
0690	11	SK147	020705	土師器	コナテ調整器	大1	長さ12.6	幅2.1	高さ6.7	コナテ	コナテ	10YR7/3 にのみ		
0691	11	SK147	020705	土師器	コナテ調整器	大1	長さ12.0	幅2.1	高さ6.2	コナテ	コナテ	10YR7/3 にのみ		
0692	11	SK147	020705	土師器	コナテ調整器	大1	長さ11.0	幅2.1	高さ6.8	コナテ	コナテ	10YR6/3 磁胎		
0693	11	SK147	020705	土師器	コナテ調整器	大1	長さ12.2	幅2.2	高さ6.2	コナテ	コナテ	10YR7/2 にのみ		
0694	11	SK147	020822	土師器	コナテ調整器	大1	長さ8.0	幅1.7	高さ4.0	鉄胎	鉄胎、付着、コ ナテ、同長磁胎 のち磁胎	10YR7/4 にのみ		
0695	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ7.0	幅1.4	高さ4.0	鉄胎	鉄胎	10YR7/4 にのみ		
0696	11	SK147	020820	土師器	コナテ調整器	大1	長さ7.0	幅1.5	高さ4.0	鉄胎	鉄胎	10YR7/4 にのみ		

図録番号	7017	遺跡番号	日付	所在地・材質	原 種	時 期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	内径	内周	取土(内径)	数1	備考
0697	11	SK147	020705	土師器	板代(器7)		3.2							器オキス
0698	11	SK147	020705	土師器	赤土ロコ調 整器		7.0~7.3	1.0	5.8~6.1	7.2~7.5	ヨコナデ			器オキス、器オ キス(内周)
0699	11	SK147	020705	土師器	赤土ロコ調 整器		6.8~7.2	1.2	5.4~5.6	7.0~7.5	ヨコナデ			器オキス、器オ キス、器オキ ス
0700	11	SK147	020708	土師器	赤土ロコ調 整器		6.6~6.9	0.9	5.3~5.7	6.8~7.1	ヨコナデ			器オキス、器オ キス
0701	11	SK147	020705	土師器	赤土ロコ調 整器		6.6~7.1	1.0	5.3~5.7	6.8~7.3	ヨコナデ			器オキス、器オ キス
0702	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.0	1.0	6.3	7.2	ヨコナデ			器オキス、器オ キス
0703	11	SK147	020819	土師器	板 6.8		1.1	厚 5.8	厚 7.0	ヨコナデ				器オキス、器オ キス
0704	11	SK147	020819	土師器	赤土ロコ調 整器		6.3~6.5	1.3	4.7~5.0	6.5~6.7	ヨコナデ			器オキス、器オ キス
0705	11	SK147	020705	土師器	赤土ロコ調 整器		6.4~6.6	1.3	4.7~5.0	6.6~6.8	ヨコナデ、ハケ			器オキス、器オ キス
0706	11	SK147	020708	土師器	赤土ロコ調 整器		6.0~6.2	1.3	4.7~5.0	6.2~6.4	ヨコナデ			器オキス、器オ キス
0707	11	SK147	020705	土師器	赤土ロコ調 整器		6.2~6.4	1.2	4.9~5.2	6.6~6.7	ヨコナデ			器オキス、器オ キス
0708	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		6.2~6.3	1.1	5.0~5.1	6.4~6.5	ヨコナデ			器オキス、器オ キス
0709	11	SK147	020708	土師器	赤土ロコ調 整器		6.2	1.4	4.7~5.0	6.4~6.5	ヨコナデ			器オキス、器オ キス
0710	11	SK147	020705	土師器	赤土ロコ調 整器		6.3~6.7	1.2	4.5~5.0	6.5~6.0	ヨコナデ			器オキス、板取 組、器オキス
0711	11	SK147	020705	土師器	赤土ロコ調 整器		6.8~7.1	1.2	5.1~5.4	7.0~7.3	ヨコナデ			器オキス、板取 組、器オキス
0712	11	SK147	020819	土師器	赤土ロコ調 整器		厚 6.3	1.1	4.8	厚 6.6	ヨコナデ			器オキス、器オ キス
0713	11	SK147	020705	土師器	赤土ロコ調 整器		6.7~6.9	1.0	5.3~5.5	6.9~7.1	ヨコナデ			器オキス、器オ キス
0714	11	SK147	020819	土師器	赤土ロコ調 整器		7.0~7.5	1.6		7.2~7.7	ハケ、ナデ			器オキス
0715	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.0~7.2	1.7		7.3~7.7	ハケ、ナデ			器オキス
0716	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.2~7.5	1.6		7.2~7.5	ナデ?			器オキス
0717	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.1~7.6	1.7		7.5~8.0	ナデ?			器オキス
0718	11	SK147	020705	土師器	赤土ロコ調 整器		7.0~7.2	1.5		7.0~7.2	ハケ、ナデ?			器オキス
0719	11	SK147	020705	土師器	赤土ロコ調 整器		7.2~7.6	1.6		7.4~8.0	ハケ、ナデ?			器オキス
0720	11	SK147	020705	土師器	赤土ロコ調 整器		7.0~7.3	1.7		7.4~7.6	ハケ			器オキス
0721	11	SK147	020705	土師器	赤土ロコ調 整器		7.4~7.8	1.7		7.7~8.0	ハケ、ナデ			器オキス
0722	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.2~7.6	1.4		7.5~7.9	ヨコナデ?			器オキス
0723	11	SK147	020705	土師器	赤土ロコ調 整器		7.0~7.2	1.4		7.4~7.6	ハケ			器オキス
0724	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.2~7.6	1.6		7.5~8.0	ハケ			器オキス
0725	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.2~7.6	1.6		7.3~7.8	ヨコナデ?			器オキス
0726	11	SK147	020819	土師器	赤土ロコ調 整器		7.0~7.3	1.5		7.3~7.6	ハケとヨコナデ?			器オキス
0727	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.0	1.7		7.4	ハケ、スス付着			器オキス
0728	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		6.8~7.0	1.8		7.2~7.5	ヨコナデ?			器オキス
0729	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.2~7.4	1.2		7.6~7.8	ハケ、ヨコナデ?			器オキス
0730	11	SK147	020705	土師器	赤土ロコ調 整器		7.3~7.5	1.6		7.6~7.8	ハケ、ヨコナデ?			器オキス
0731	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.2~7.4	1.6		7.5~7.7	ハケ、ヨコナデ?			器オキス
0732	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.4~7.6	1.9		7.6~7.8	ヨコナデ?			器オキス
0733	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.2~7.6	1.8		7.2~7.6	ハケ			器オキス
0734	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.2~7.6	1.6		7.6~8.0	ハケ、ヨコナデ			器オキス
0735	11	SK147	020708	土師器	赤土ロコ調 整器		7.2~7.4	1.5		7.5~7.7	不明			器オキス
0736	11	SK147	020708	土師器	赤土ロコ調 整器		7.2~7.4	1.7		7.4~7.7	ハケ、ヨコナデ?			器オキス
0737	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.2~7.4	1.8		7.4~7.8	ハケ			器オキス
0738	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.2~7.6	1.7		7.2~7.6	調整不明			器オキス、ハケ?
0739	11	SK147	020708	土師器	赤土ロコ調 整器		7.2~7.4	1.5		7.4~7.7	ハケ、器オキス			器オキス、ハケ?
0740	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.6	1.6		7.9	ハケ、器オキス			器オキス
0741	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		7.2	1.5		7.5	調整不明			器オキス
0742	11	SK147	020820	土師器	赤土ロコ調 整器		厚 7.6	1.5		厚 7.8	ハケ、器オキス			器オキス
0743	11	SK147	020819	土師器	赤土ロコ調 整器		7.1	1.4		7.4	ヨコナデ?			器オキス
0744	11	SK147	020708	陶器(美濃陶器)	板付?		板 4.6	厚 5.7		板 11.4	陶板			2.5V27 板取 5V22 オリブ型
0745	11	SK147	020708	陶器(美濃陶器)	内(コ)耳		厚 13.0	厚 4.9			陶板			2.5V62 板取 7.5V33 板オリブ
0746	11	SK147	020820	陶器(美濃陶器)	板取		板 5.6				陶板			10V746 7.5V33 板取

名古屋城三の丸遺跡Ⅶ

図番	アノ	遺跡番号	日付	所在地・材質	種別	時期	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	最大径	内面	外面	貯り(内面)	船1	備考
0747	111	SK147	020820	堀内瓦葺部	瓦	古殿IV	長18.0	幅4.8		厚28.2		鉄物	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	2.5V4/1 青灰	10R4/2 同左	
0748	111	SK147	020806	堀内瓦葺部	瓦	古殿IV	長13.6	幅4.1				鉄物	鉄物	2.5V6/3 に近い青	10R3/2 船形赤	
0749	111	SK147	020820	堀内瓦葺部	瓦	古殿IV		幅4.8			厚9.8	鉄物	鉄物、同左赤物	2.5V7/2 灰	5VH4/2 同左	
0750	111	SK147	020820	堀内瓦葺部	瓦	大2		幅3.0				鉄物	鉄物	10V00/2 灰	10R3/1 船形赤	
0751	111	SK147	020820	土葺部	土		長11.6	幅4.5				ヨコナデ、ヨコナデ、ハナコナデ、指オオス、ハナコナデ	ヨコナデ、ヨコナデ、ハナコナデ、指オオス、ハナコナデ	2.5V06/4 に近い青		
0752	111	SK147	020806	土葺部	土	平埴市内瓦葺		幅5.6				ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	5VH3/1 灰		
0753	111	SK147	020822	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長21.4	幅11.2		厚21.6		ヨコナデ、ハナコナデ、指オオス、ハナコナデ	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	10V04/2 同左		
0754	111	SK147	020705	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長26.6	幅11.7		厚28.6		ヨコナデ、調整オオス、ハナコナデ	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	10V03/1 同左		
0755	111	SK147	020917	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長22.8	幅10.2		厚22.8		ヨコナデ、ハナコナデ、指オオス、ハナコナデ	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	2.5V03/2 同左		
0756	111	SK147	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長31.0	幅11.7		厚31.1		ヨコナデ、ハナコナデ	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	2.5V04/2 同左		
0757	111	SK147	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長23.0	幅10.1		厚23.0		ヨコナデ、ハナコナデ、指オオス、ハナコナデ	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	10V04/3 に近い青		
0758	111	SK147	020819	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長30.0	幅15.7		厚31.2		ヨコナデ、調整オオス、ハナコナデ	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	10V05/2 同左		
0759	111	SK147	020820	木製品	板材		長さ1 33.5	幅1 3.5	高さ 0.3							備考
0760	111	SK147	020705	調整品	釘		長さ 6.5	幅 2.0	厚 2.0							
0761	111	SK147	020705	堀内瓦葺部	瓦		長さ 2.5	幅 1.4	厚 0.4							
0762	111	SK147	020705	堀内瓦葺部	瓦		長さ 3.5	幅 2.3	厚 0.4							
0763	111	SK147	020705	堀内瓦葺部	瓦		長さ 3.6	幅 3.0	厚 0.5							
0764	111	SK147	020705	堀内瓦葺部	瓦		長さ 5.7	幅 2.9	厚 1.3							
0765	134	S039	020820	堀内瓦葺部	瓦	大1東側	長11.4	幅6.4	厚4.0	厚11.8		鉄物	鉄物、同左	10V08/2 同左	10Y02/3 同左	
0766	134	S039	020820	堀内瓦葺部	瓦	古殿IV	長6.3	厚12.2				鉄物	鉄物、ヨコナデ、同左、同左ハナコナデ	2.5V7/2 灰	5VH2/1 同左	
0767	134	S039	020820	土葺部	土	コナデ調整部	長12.2	幅6.6	厚12.4			ヨコナデ	ヨコナデ、同左	10Y07/4 に近い青		
0768	134	S039	020820	土葺部	土	コナデ調整部	長15.5	幅6.9				ヨコナデ	ヨコナデ、同左	10Y07/4 に近い青		
0769	134	S039	020820	堀内瓦葺部	瓦	古殿IV	長3.3					鉄物	鉄物	2.5V07/4 に近い青	5V6/3 オリーブ青	
0770	134	S039	020820	堀内瓦葺部	瓦	古殿IV	長3.1					鉄物	鉄物	10Y07/4 に近い青	2.5V03/1 船形赤	
0771	134	S039	020820	土葺部	土	コナデ調整部	5.5	幅1.4	厚5.8			ヨコナデ	ヨコナデ、指オオス	10Y07/2 に近い青		
0772	134	S039	020820	土葺部	土	コナデ調整部	5.2	幅1.3	厚5.5			ヨコナデ	ヨコナデ、指オオス	10Y07/3 に近い青		
0773	134	S039	020820	土葺部	土	コナデ調整部	5.4	幅1.2	厚5.6			ヨコナデ	ヨコナデ、指オオス	10Y07/3 に近い青		
0774	134	S039	020820	土葺部	土	コナデ調整部	5.2	幅1.2	厚5.5			ヨコナデ	ヨコナデ、指オオス	10Y07/3 に近い青		
0775	134	S039	020820	堀内瓦葺部	瓦	古殿IV	長30.0	幅3.5		厚31.0		鉄物	鉄物	2.5V06/4 に近い青	10R3/2 船形赤	
0776	134	S039	020820	堀内瓦葺部	瓦	古殿IV	長28.4	幅2.7		厚30.0		鉄物	鉄物	10Y07/4 に近い青	10R3/2 船形赤	
0777	134	S039	020820	堀内瓦葺部	瓦	古殿IV	長さ 9.2	幅 9.2				鉄物、内径17cmに鉄釘、縦目1単位17本、3.0cm、7.2cmあり	鉄物、同左赤物	10Y07/3 に近い青	2.5V01/1 船形赤	
0778	134	S039	020919	堀内瓦葺部	瓦	古殿IV	長30.6	幅3.9		厚31.0		鉄物	鉄物	2.5V7/2 灰	5V6/3 オリーブ青	
0779	134	S039	020919	堀内瓦葺部	瓦	古殿IV	長18.0	幅14.3				鉄物、調整、一歩調整ハナコナデ	鉄物、ヨコナデ、鉄物、同左	2.5V06/6 同左	2.5V04/4 同左	
0780	134	S039	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長3.1					ヨコナデ、調整オオス	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	10Y05/3 に近い青		
0781	134	S039	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長2.3					ヨコナデ	ヨコナデ	10Y07/3 に近い青		
0782	134	S039	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長3.4					ヨコナデ	ヨコナデ、ハナコナデ	5V06/6 同左		
0783	134	S039	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長4.1					ヨコナデ、ハナコナデ	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	10V06/2 同左		
0784	134	S039	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長4.4					ヨコナデ、ハナコナデ	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	10Y05/2 同左		
0785	134	S039	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長4.6					ヨコナデ、ハナコナデ	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	2.5V06/3 に近い青		
0786	134	S039	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長3.2					ヨコナデ	ヨコナデ、ハナコナデ	10Y07/3 に近い青		
0787	134	S039	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長12.2	幅3.9				ヨコナデ	ヨコナデ	10Y07/4 に近い青		
0788	134	S039	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長21.0	幅9.0		厚23.6		ヨコナデ	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	2.5V06/4 同左		
0789	134	S039	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長21.0	幅5.4		厚22.0		ヨコナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	10Y07/3 に近い青		
0790	134	S039	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長22.0	幅6.3		厚23.6		ヨコナデ、ハナコナデ	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	10Y06/3 に近い青		
0791	134	S039	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長23.8	幅6.2		厚23.8		ヨコナデ、下調整部	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	10Y08/3 同左		
0792	134	S039	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長23.0	幅4.3		厚24.0		ヨコナデ、下調整部	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	10Y06/3 に近い青		
0793	134	S039	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長25.0	幅4.5		厚25.7		ヨコナデ、下調整部	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	10Y07/3 に近い青		
0794	134	S039	020820	土葺部	土	平埴市内瓦葺	長24.0	幅4.1		厚25.6		ヨコナデ、ハナコナデ	ヨコナデ、指オオス、ハナコナデ	2.5V05/3 に近い青		

品番	7107	遺物番号	日付	所在地・材質	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	内面	外面	出土(内面)	巻1	備考
0795	134	SD30	020829	土師器	手取筒内耳 蓋		24.0	7.4	4.3			ヨコナデ、下平調 製。底面、洗滌の 痕跡、スス付着	10YR6/2 灰褐色		
0796	134	SD30	020829	土師器	手取筒内耳 蓋		25.0	7.8	3.8	26.2	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、底オサ エ、スス付着	10YR8/3 灰褐色		
0797	134	SD30	020829	土師器	手取筒内耳 蓋		26.8	7.4	4.5		ヨコナデ、ヨコナ デ	ヨコナデ、底オサ エ、スス付着	5YR7/6 橙 褐色		
0798	134	SD30	020829	土師器	手取筒内耳 蓋		29.0	7.4	3.3	30.4	ヨコナデ、ハケ、 下平調製不特	ヨコナデ、底オサ エ、洗滌、ヘタケ イロ	10YR3/2 灰褐色		
0799	134	SD30	020829	土師器	手取筒内耳 蓋		25.2	7.4	3.8	26.5	ヨコナデ、ハケ、 底オサエ、ヘタケ イロ	ヨコナデ、底オサ エ、スス付着、ヘ タケイロ	10YR8/3 灰褐色		
0800	134	SD30	020829	土師器	手取筒内耳 蓋		25.0	7.4	3.4	25.8	ナデフ、下平調 製(ハケ?)	ナデフ、わずかに スス付着	10YR7/3 灰褐色		293 1号一 ホフ
0801	134	SD30	020829	土師器	手取筒内耳 蓋		23.2	7.4	3.7	24.5	ヨコナデ、ハケ、 底オサエ	ヨコナデ、底オサ エ、ヘタケイロ	7.5YR6/3 灰褐色		
0802	134	SD30	020829	土師器	手取筒内耳 蓋		23.2	7.4	4.1		ヨコナデ	ヨコナデ、底オサ エ、スス付着	5YR7/6 橙 褐色		
0803	134	SD06	020704	瀬戸式瓦器	天目系網	古瓦IV 品	11.5	7.4	5.3	11.7	鉄軸	鉄軸、底・縁部 洗滌	10YR8/2 灰褐色		
0804	134	SD06	020603	中国産瓦器	青磁類	古瓦類		7.4	5.3		青磁類、片切端部 磨光	10YR7/3 灰褐色			10Y5/2 オリーブ系
0805	134	SD06	020604	瀬戸式瓦器	瓦類	大1	12.2	7.4	2.9	12.4	磨光	磨光	7.5YR5/1 灰褐色		
0806	134	SD06	020704	瀬戸式瓦器	瓦類	古瓦IV 品	2.1	7.4	5.0	2.3	磨光	鉄軸、下平調製、 同軸部磨光	10YR7/3 灰褐色		
0807	126	SD17	020711	中国産磁器	青花瓦		14.4	7.4	2.7	14.6	青花	青花	8N 1/1 灰 白色		C10A0 Y40R10
0808	127	SD17	020728	瀬戸式瓦器	瓦類	大要2 段部	10.8	2.0	6.0	11.0	鉄軸	鉄軸	10YR6/4 灰 褐色		2.5YR3/1 粘土赤
0809	126	SD17	020708	瀬戸式瓦器	直線中輪	古瓦IV 品	16.0	7.4	2.7	16.5	鉄軸、下平調製	鉄軸、下平調製	10YR7/4 灰褐色		5YR6/4 オリーブ系
0810	126	SD17	020709	瀬戸式瓦器	瓦類	大1or2	7.4	1.8			鉄軸、トナシ、 磨光	鉄軸、輪トナシ 磨光	10YR7/3 灰褐色		2.5YR3 オリーブ系
0811	127	SD17	020728	瀬戸式瓦器	瓦類	古瓦IV 品	14.2	7.4	2.5	14.4	鉄軸	鉄軸	7.5YR6/6 橙 褐色		
0812	126	SD17	020711	瀬戸式瓦器	瓦類	大1	7.4	2.0	6.0		鉄軸	鉄軸	10YR6/4 灰褐色		10R3/1 粘土赤
0813	127	SD17	020709	瀬戸式瓦器	直線大瓦	古瓦IV 品	7.4	3.2			鉄軸	鉄軸	2.5Y7/3 洗滌 痕跡		2.5YR3/1 粘土赤
0814	126	SD17	020709	瀬戸式瓦器	直線大瓦	古瓦IV 品	7.4	4.2			ヨコナデ	ヨコナデ、底オサ エ	5YR6/6 橙 褐色		
0815	127	SD17	020709	土師器	手取筒内耳 蓋		7.4	4.5			ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、底オサ エ、スス付着	7.5YR4/2 灰褐色		
0816	164	SD29	020727	瀬戸式瓦器	天目系網	古瓦IV 品	10.0	7.4	4.9	10.2	鉄軸	鉄軸、磨光	10YR7/6 灰褐色		2.5YR3/3 粘土赤
0817	164	SD29	020727	土師器	赤ロクロ調 整軸C組		6.2	7.4	0.7	6.4	底オサエ	ヨコナデ、底オサ エ	10YR7/3 灰褐色		
0818	164	SD29	020727	土師器	赤ロクロ調 整軸C組		6.0	7.4	0.8	6.2	底オサエ	ヨコナデ、底オサ エ	10YR7/4 灰褐色		
0819	134	SD25	020729	瀬戸式瓦器	瓦類	古瓦IV 品	11.0	3.6	3.6	11.4	鉄軸	鉄軸、下平調製、 同軸部磨光、ヨコ ナデ	2.5YR2/2 灰 褐色		5Y7/3 洗 滌
0820	134	SD25	020728	瀬戸式瓦器	瓦類	古瓦IV 品	12.2	2.9	6.0	12.6	鉄軸、下平調製	鉄軸、下平調製	10YR8/3 灰褐色		2.5YR2/2 粘土赤
0821	127	SD25	020727	中国	白磁類	古瓦IV 品	11.0	7.4	2.2	11.4	白磁類	白磁類	CO-M0-Y4- R04		CO-M0-Y4- R04
0822	134	SD25	020728	土師器	瓦類		9.1	1.8	9.4	10.4	調整不明	10YR7/3、調整不 明	10YR7/3 灰褐色		
0823	134	SD25	020728	土師器	赤ロクロ調 整軸		9.6	7.4	1.4	10.0	調整不明	10YR7/3、調整不 明	10YR7/3 灰褐色		
0824	127	SD25	020727	瀬戸式瓦器	瓦類	古瓦IV 品	7.4	2.4			鉄軸	鉄軸	7.5YR6/4 灰褐色		2.5YR3/3 粘土赤
0825	127	SD25	020727	瀬戸式瓦器	瓦類	古瓦IV 品	7.4	2.0			鉄軸	鉄軸	10YR7/4 灰褐色		2.5YR3/3 粘土赤
0826	134	SD25	020729	瀬戸式瓦器	瓦類	古瓦IV 品	32.8	7.4	4.8	33.2	鉄軸	鉄軸	2.5YR1/1 灰 白色		2.5YR3/3 粘土赤
0827	127	SD25	020727	土師器	円口耳 蓋	古瓦IV 品	7.4	7.4	9.3		磨光、鉄軸	鉄軸、洗滌	10YR7/1 灰 白色		5Y5/3 粘土赤
0828	134	SD33	020730	奈良県山本 系	山手網	輪之高 古瓦	1.2	5.4			ヨコナデ、磨光	ヨコナデ、同軸部 磨光	2.5Y7/1 灰 白色		5YR6/4 灰褐色
0829	134	SD33	020730	奈良県山本 系	山手網	古瓦IV 品	7.4	3.9			ヨコナデ	ヨコナデ	2.5YR6/1 灰褐色		
0830	84	SD36	020828	瀬戸式瓦器	縁軸小紐	大1	9.8	2.2	4.0	9.9	鉄軸、下平調製	鉄軸、下平調製、 同軸部磨光	2.5Y7/2 灰 褐色		2.5YR3/3 粘土赤
0831	84	SD36	020828	瀬戸式瓦器	縁軸小紐	古瓦IV 品	12.0	1.7	6.8	12.2	鉄軸、下平調製	鉄軸、下平調製、 同軸部磨光	2.5Y7/2 灰 褐色		2.5YR3/3 粘土赤
0832	84	SD35	020825	中国産瓦器	青磁類	古瓦類	3.6	7.4	2.8	3.8			CO-M0-Y0- R04		CO-M0-Y0- R04
0833	84	SD35	020825	瀬戸式瓦器	瓦類	古瓦IV 品	7.4	2.0			鉄軸、下平調製	鉄軸、下平調製	10YR7/2 灰褐色		5Y5/4 オリーブ
0834	84	SD35	020825	土師器	ロクロ調整 皿		6.8	7.0			ヨコナデ、洗滌の 痕跡あり	ヨコナデ、同軸部 磨光	7.5YR7/3 灰褐色		
0835	90	SD35	020823	土師器	赤ロクロ調 整軸		7.8	1.0		8.0	ヨコナデ	ヨコナデ、底オサ エ	7.5YR6/3 灰褐色		
0836	90	SD35	020827	土師器	赤ロクロ調 整軸		9.8	1.9	16.0		底オサエ	底オサエ	7.5YR7/4 灰褐色		
0837	90	SD35	020827	土師器	赤ロクロ調 整軸		9.1	2.0	9.9		底オサエ	底オサエ	7.5YR7/4 灰褐色		
0838	111	SK146	020705	土師器	ロクロ調整 皿		7.4	1.2		6.6	方向ナシ	底オサエ	7.5YR7/4 灰褐色		
0839	111	SK146	020705	土師器	ロクロ調整 皿		11.4	7.4	1.4	11.6	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR7/3 灰褐色		
0840	111	SK146	020705	土師器	ロクロ調整 皿		12.8	7.4	1.4	13.0	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR8/4 灰褐色		
0841	111	SK146	020705	土師器	ロクロ調整 皿		7.4	1.1	10.0		ヨコナデ、デー トナシ	ヨコナデ、同軸部 磨光	7.5YR7/6 橙 褐色		
0842	111	SK146	020705	土師器	内筒製瓦器		17.2	7.4		20.6	ヨコナデ、ナデ フ、磨光	ヨコナデ、ヘタケ イロ、磨光	10YR7/3 灰褐色		

名古屋城三の丸遺跡Ⅶ

図番	ア17	遺跡番号	日付	所在地・材質	部類	時期	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	厚さ(mm)	注記	内径	外径	形状・(内径)	出土・(内径)	備考	
0843	104	SK214	020727	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 18.8	幅 6.9						瓦輪	瓦輪、輪一様遺物	2.5V71 瓦白 2.5V63 オリーブ青	
0844	104	SK215	020729	堀ノ内遺跡	瓦	瓦	長 11.4	幅 6.1				長 11.6		瓦輪	瓦輪、うへい遺物	10Y87/3 瓦白 2.5V65/3 にじい青	
0845	104	SK215	020721	堀ノ内遺跡	瓦	瓦	長 10.8	幅 5.4				長 11.9		瓦輪	瓦輪、下子遺物、 ヘラタビ	2.5V86/4 瓦白 2.5V61 瓦灰 10Y83/2 瓦輪	
0846	104	SK215	020729	堀ノ内遺跡	瓦	瓦	長 10.4	幅 5.2				長 10.7		瓦輪	瓦輪、下子遺物、 ヘラタビ	10Y87/4 瓦白 2.5V62 10Y83/2 瓦輪	
0847	104	SK215	020729	堀ノ内遺跡	瓦	瓦	長 11.4	幅 6.6				長 11.6		瓦輪	瓦輪、下子遺物	5V61 瓦 2.5V63/1 瓦輪	
0848	104	SK215	020721	東濃山山形	山形瓦	山形	長 11.5	幅 2.4	厚 4.2			長 11.6		コソナデ	コソナデ、同転車 切取	10Y86/2 瓦白 2.5V87/1 瓦白	
0849	104	SK215	020729	東濃山山形	山形	山形	長 8.0	幅 1.8	厚 5.2			長 8.2		コソナデ、自然瓦	コソナデ、同転車 切取	10Y87/1 瓦白	
0850	104	SK215	020729	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 15.4	幅 4.2				長 15.6		瓦輪	瓦輪、輪一様遺物	5V81 下 10Y87/2 瓦白	
0851	104	SK215	020721	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 3.9	幅 5.0						瓦輪	瓦輪、下子遺物、 ヘラタビ	10Y87/3 瓦白 10Y88/1 瓦白	
0852	104	SK215	020729	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 4.8							瓦輪	瓦輪、下子遺物	2.5V61 瓦灰 5V62 瓦白	
0853	104	SK215	020729	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 4.1							瓦輪	瓦輪	10Y87/3 瓦白 2.5V62 瓦白	
0854	104	SK215	020729	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 4.6							瓦輪	瓦輪	10Y86/3 瓦白 2.5V84/2 瓦輪	
0855	104	SK215	020729	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 4.9							瓦輪	瓦輪	10Y87/4 瓦白 2.5V83/3 瓦白	
0856	104	SK215	020729	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 2.9							瓦輪	瓦輪	10Y86/3 瓦白 5V64 オリーブ青	
0857	104	SK215	020729	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 2.7							瓦輪	瓦輪	2.5V83/2 瓦白 2.5V82 瓦白	
0858	104	SK215	020729	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 4.8							瓦輪	瓦輪	2.5V61 瓦灰 5V62 瓦白	
0859	104	SK215	020729	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 27.6	幅 7.6				長 28.0		瓦輪	瓦輪、下子遺物	瓦輪、下子遺物	N2 瓦、 10Y87/4 瓦白 2.5V82/2 瓦白
0860	104	SK215	020729	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 4.8	厚 9.2						瓦輪	瓦輪、同転車切取	2.5V84/2 瓦白	
0861	104	SK215	020721	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 11.0	幅 4.0						瓦輪	瓦輪、同転車切取	2.5V71 瓦白 2.5V63 瓦白	
0862	104	SK215	020729	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 5.4							瓦輪	瓦輪、同転車切取	2.5V71 瓦白 C12340 Y4-80.0	
0863	134	SK222	020729	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 12.8	幅 6.2						瓦輪	瓦輪	2.5V82 瓦白 2.5V84/2 瓦輪	
0864	134	SK222	020729	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 7.0	幅 6.0	厚 3.3					瓦輪	瓦輪	2.5V82 瓦白 2.5V84/2 瓦輪	
0865	104	SK227	020727	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 12.2	幅 4.0				長 12.4		瓦輪	瓦輪、下子遺物	5V61 瓦白 2.5V82/2 瓦輪	
0866	104	SK227	020727	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 2.7							瓦輪	瓦輪	2.5V84/2 瓦輪	
0867	104	SK240	020730	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 12.6	幅 3.4				長 12.8		瓦輪	瓦輪	10Y86/1 瓦白 2.5V63 オリーブ青	
0868	104	SK240	020730	東濃山山形	山形	山形	長 11.4	幅 3.2				長 11.6		コソナデ	コソナデ、同転車切取	2.5V81 瓦白	
0869	104	SK240	020730	東濃山山形	山形	山形	長 2.0	幅 4.0						コソナデ、一方用	コソナデ、同転車切取	2.5V71 瓦白	
0870	104	SK240	020730	東濃山山形	山形	山形	長 12.6	幅 1.8				長 12.8		コソナデ	コソナデ	2.5V81 瓦白	
0871	104	SK240	020730	東濃山山形	山形	山形	長 11.6	幅 1.7				長 12.0		コソナデ	コソナデ	2.5V71 瓦白	
0872	104	SK240	020730	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 1.2	幅 5.0						瓦輪	瓦輪、下子遺物	2.5V82 瓦白 同転車切取	
0873	104	SK240	020730	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 1.2	幅 6.0						瓦輪	瓦輪、自然瓦	2.5V87/1 瓦白 10Y88/1 瓦白	
0874	104	SK240	020730	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 10.7	幅 2.1				長 11.0		瓦輪	瓦輪、下子遺物	2.5V81 瓦白 2.5V63 オリーブ青	
0875	104	SK240	020730	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 14.6	幅 3.1				長 14.8		瓦輪	瓦輪、同1、下子遺物	10Y86/3 瓦白 2.5V82 瓦白 2.5V71 瓦白	
0876	104	SK240	020730	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 2.3	幅 8.0						瓦輪	瓦輪、下子遺物	2.5V71 瓦白 同転車切取	
0877	104	SK240	020730	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 2.0	幅 7.0						瓦輪	瓦輪、下子遺物	2.5V72 瓦白 同転車切取	
0878	104	SK240	020730	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 1.5	幅 6.6						コソナデ	コソナデ	2.5V87/6 瓦白 2.5V87/6 瓦白	
0879	104	SK240	020730	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 11.6	幅 3.0						瓦輪	瓦輪	2.5V85/4 瓦白 2.5V82 瓦白	
0880	104	SK240	020730	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 3.2	幅 16.0						瓦輪	瓦輪	10Y85/2 瓦白 同転車切取	
0881	104	SK240	020730	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 6.3							瓦輪	瓦輪	10Y86/1 瓦灰 2.5V86/6 瓦白	
0882	104	SK240	020730	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 2.3							コソナデ	コソナデ	10Y86/3 瓦白 同転車切取	
0883	104	SK240	020730	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 1.7	幅 3.8						瓦輪	瓦輪、同転車切取	10Y87/2 瓦白 同転車切取	
0884	104	SK240	020730	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 3.5	幅 10.8						瓦輪	瓦輪、同転車切取	5V85/4 瓦白 2.5V82 瓦白	
0885	84	SK291	020828	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 0.53	幅 0.8						コソナデ、瓦輪	コソナデ、同転車切取	2.5V81 瓦白 同転車切取	
0886	84	SK291	020828	東濃山山形	山形	山形	長 11.4	幅 2.4				長 11.6		コソナデ	コソナデ	2.5V82/2 瓦白 2.5V82/2 瓦白	
0887	84	SK291	020828	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 11.8	幅 1.7	厚 5.2			長 12.0		コソナデ	コソナデ、同転車切取	10Y87/3 瓦白 同転車切取	
0888	84	SK291	020828	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 8.6							瓦輪	瓦輪、下子遺物	10Y88/6 瓦白 同転車切取	
0889	84	SK298	020828	堀ノ内遺跡	瓦	古瓦	長 2.2	幅 6.6						瓦輪	瓦輪	2.5V82/2 瓦白 同転車切取	

品番	種別	品名	材質	形状	時期	出土層	出土位置	出土層	出土位置	内容	特徴	出土(内)	数量	備考
0890	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	7型式	表 2.7	表 7.6			ヨコナデ、一方 切取の丸紐付	ヨコナデ、同様な 切取の丸紐付	2.5V71(表)		遺戸
0901	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾之島	表 2.4	表 5.2			ヨコナデ	ヨコナデ、同様な 切取	2.5V71(表)		
0902	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾輪小紐	表 10.2	表 1.5		表 10.4	丸紐、下平蓋付	丸紐、下平蓋付	2.5V82(表)		
0903	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 11.2	表 2.8		表 11.4	鉄軸	鉄軸	10V97(表)	5V6+4 オリーブ表	2.5V92/1 遺
0904	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	ロウロ調整 部	表 13.8	表 1.6		表 14.0	ヨコナデ、スス付	ヨコナデ	7.5V97(表)		
0905	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	ボロロ調整 部	表 8.8	表 1.3		表 8.9	ヨコナデ	ヨコナデ、指オ キナフ	10V98(表)		
0906	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	ボロロ調整 部	表 7.0	表 1.3		表 7.2	ヨコナデ	ヨコナデ、指オ キナフ	10V98(表)		
0907	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 10.8	表 7.4		表 11.2	ヨコナデ、丸紐、 下平蓋付	ヨコナデ、丸紐、 下平蓋付、ヘラケ ズリ	10V98(表)	5V6+4 オリーブ表	
0908	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 11.4	表 6.5		表 11.8	丸紐、下平蓋付	丸紐、下平蓋付	10V97(表)		
0909	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 11.2	表 10.8		表 11.6	鉄軸	鉄軸	2.5V82(表)	5V6+4 オリーブ	
0910	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 12.2	表 10.8		表 12.6	鉄軸	鉄軸	10V97(表)	7.5V94(表)	
0911	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 16.0	表 16.0		表 16.2	丸紐、下平蓋付	丸紐、下平蓋付	10V97(表)	2.5V93(表)	
0912	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 11.6	表 2.2	表 3.8	表 11.8	ヨコナデ	ヨコナデ、同様な 切取	2.5V72(表)		
0913	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 11.5	表 2.5	表 4.7	表 11.6	ヨコナデ	ヨコナデ、同様な 切取	10V97(表)	10V98(表)	
0914	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 12.1	表 5.0			ヨコナデ、丸紐付	ヨコナデ、丸紐付	2.5V72(表)		
0915	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 11.1	表 3.1			丸紐	丸紐	5V6(表)		
0916	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 11.1	表 1.9			丸紐	丸紐	2.5V72(表)		
0917	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 11.1	表 4.5	表 4.4	表 11.2	丸紐	丸紐	7.5V97(表)		本家の形が本
0918	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 16.0	表 16.0		表 16.2	鉄軸、内耳あり	鉄軸	10V98(表)	7.5V94(表)	
0919	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 18.6	表 4.1		表 19.0	鉄軸、下平蓋付	鉄軸、ヘラケズリ、 下平蓋付	10V96(表)	5V5+4 オリーブ	
0920	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 12.7	表 4.1			鉄軸	鉄軸	10V97(表)	10V95(表)	
0921	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 20.2	表 3.2		表 20.8	鉄軸	鉄軸	5V64(表)		
0922	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 27.6	表 4.3			鉄軸、目付	鉄軸	10V96(表)	10V94(表)	
0923	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 29.8	表 12.7	表 8.6	表 31.2	鉄軸、一部破損	鉄軸、同様な切取	10V98(表)	2.5V93(表)	
0924	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 13.8	表 3.3	表 4.6	表 14.0	ヨコナデ	ヨコナデ、同様な 切取の丸紐付	2.5V82(表)		
0925	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 2.6	表 4.7			鉄軸、同様な切取	鉄軸	10V97(表)	5V95(表)	
0926	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 9.6	表 9.6		表 17.8	鉄軸	鉄軸	2.5V82(表)	7.5V94(表)	
0927	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 21.2	表 3.9			ヨコナデ、指オ キナフ	ヨコナデ、ハ、 わすかにスス付	10V97(表)		
0928	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 21.8	表 3.8			ヨコナデ、ハ、 わすかにスス付	ヨコナデ、ハ、 わすかにスス付	10V96(表)		
0929	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 37.6	表 4.5		表 39.4	ヨコナデ、ハ	ヨコナデ、ハ、 指オキナフ	2.5V95(表)		
0930	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 12.5	表 4.1		表 12.8	鉄軸	鉄軸	7.5V97(表)	10V93(表)	
0931	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 12.5	表 4.1		表 12.8	鉄軸	鉄軸	2.5V71(表)		
0932	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 11.4	表 3.0			自然脱、ヨコナデ、 指オキナフ	自然脱、ヨコナデ	2.5V61(表)	10V91(表)	
0933	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 12.4	表 2.0	表 6.5	表 12.6	ヨコナデ	ヨコナデ、同様な 切取	10V97(表)		
0934	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 12.9	表 2.3	表 6.7	表 13.1	ヨコナデ	ヨコナデ、同様な 切取	10V97(表)		
0935	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 12.8	表 2.3	表 7.3	表 13.0	ヨコナデ、中央部 色化	ヨコナデ、同様な 切取	10V97(表)		
0936	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 13.0	表 2.5	表 5.4	表 13.2	ヨコナデ	ヨコナデ、同様な 切取	10V97(表)		
0937	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 13.2	表 2.5	表 6.8	表 13.4	ヨコナデ	ヨコナデ、同様な 切取	10V97(表)		
0938	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 7.2	表 1.9	表 7.5	表 7.9	方向ナシ	鉄軸	10V97(表)		
0939	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 7.5	表 1.9	表 7.8	表 7.9	方向ナシ	鉄軸	7.5V97(表)		
0940	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 11.4	表 6.0	表 4.3	表 11.6	鉄軸	鉄軸	7.5V96(表)	7.5V95(表)	
0941	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 5.3	表 4.0			鉄軸、縦部丸紐付	鉄軸、縦部丸紐付	10V96(表)	10V91(表)	
0942	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 3.8	表 4.0			鉄軸	鉄軸	10V96(表)	5V92(表)	
0943	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 12.6	表 5.6	表 5.6	表 13.0	鉄軸	鉄軸	5V91(表)	7.5V97(表)	
0944	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 10.8	表 6.8	表 4.5	表 10.3	自然脱	自然脱、丸紐付	5V91(表)	5V92(表)	
0945	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 3.6	表 5.1			丸紐	丸紐	2.5V96(表)	5V92(表)	
0946	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 10.8	表 3.2	表 6.4	表 11.0	丸紐、下平蓋付	丸紐、下平蓋付	7.5V91(表)	7.5V95(表)	
0947	SA	SK208	020828	尾山山系 山系	尾山山系	表 12.2	表 10.0		表 12.6	丸紐、丸紐付	丸紐、丸紐付	2.5V72(表)		

名古屋城三の丸遺跡Ⅶ

図番	ア/イ	遺跡番号	日付	所在地・材質	部	種	時期	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	厚さ(mm)	内面	外面	層1 (内面)	層1 (外面)	備考
0938	54	020771		堀ノ内遺跡	堀ノ内	古瓦葺	後7.0	3.0	4.0	後7.1	鉄筋、下平敷物(鉄筋、下平敷物、内面に瓦敷)	鉄筋、下平敷物、内面に瓦敷	10YR8/3	2.5YR3/2	2.5YR3/2	2.5YR3/2
0939	54	020808		1.5層部	コテリ調整部		後12.6	2.1	後5.6	後12.8	コテナテ	コテナテ、同色赤土付	10YR7/3	2.5YR4/3	2.5YR4/3	
0940	11b	020823		1.5層部	ボロコテリ調整部		後6.6	1.8		後6.8	調整不明、わずかにコテナテ付	コテナテ、調整不明、わずかにコテナテ付	10YR8/3	2.5YR4/3	2.5YR4/3	
0941	16a	020906		堀ノ内遺跡	堀ノ内	古瓦葺	後29.4	後4.9		後30.2	鉄筋	鉄筋	10YR7/4	2.5YR3/3	2.5YR3/3	短石
0942	16a	020908		堀ノ内遺跡	堀ノ内	古瓦葺	後20.0	後5.6		後20.4	鉄筋、目1ノ草	鉄筋、目1ノ草	2.5YR2/1	5YR4/3	5YR4/3	2.5YR3/3
0943	54	020812		1.5層部	内側調整部		後24.0	後6.7		後24.8	5寸イ鉄筋	5寸イ鉄筋、調整部、スス付	10YR8/3	2.5YR4/3	2.5YR4/3	
0944	11a	SK236	020729	堀ノ内遺跡	鉄	古瓦葺	後15.6	後4.3		後16.4	鉄筋	鉄筋	10YR6/4	5YR4/4	5YR4/4	2.5YR3/2
0945	11a	020906		堀ノ内遺跡	堀ノ内	古瓦葺	後11.4	後13.2		後16.6	5寸イ鉄筋	5寸イ鉄筋、調整部、スス付	10YR8/3	5YR4/4	5YR4/4	2.5YR3/2
0946	11a	105	020802	堀ノ内遺跡	堀ノ内	古瓦葺	後11.4	後6.9			鉄筋	鉄筋	5YR1/1	5YR4/4	5YR4/4	2.5YR3/2
0947	12c	020722		堀ノ内遺跡	堀ノ内	古瓦葺	後9.3	後4.8			鉄筋	鉄筋	10YR7/4	5Y7/3	5Y7/3	2.5YR3/2
0948	54	020906		堀ノ内遺跡	堀ノ内	古瓦葺	後2.6	後2.6			鉄筋	鉄筋	10YR7/4	7.5B/2	7.5B/2	2.5YR3/2
0949	12a	SK236	020729	空堀跡	堀ノ内	古瓦葺	後3.5	後3.5			コテナテ、自然土	コテナテ、自然土	2.5YR1	7.5B/2	7.5B/2	2.5YR3/2
0950	10c	020814		1.5層部	内側調整部		後2.1	後2.1			コテナテ	コテナテ、スス付	10YR7/3	2.5YR3/2	2.5YR3/2	
0951	10a	SK306	020828	1.5層部	内側調整部		後2.5	後2.5			コテナテ	コテナテ、ハタ、スス付	10YR7/3	2.5YR3/2	2.5YR3/2	
0952	16a	020906		1.5層部	目1ノ草		後4.6	後4.6			コテナテ、調整部	コテナテ、調整部	2.5YR6/6	5YR4/4	5YR4/4	2.5YR3/2
0953	10a	020906		1.5層部	ボロコテリ調整部		6.2	1.0	6.4	調整不明(ナゼ?)	コテナテ、目1ノ草	10YR8/3	5YR4/4	5YR4/4	2.5YR3/2	
0954	11a	020821		1.5層部	内側調整部		後21.0	後3.9			調整不明	コテナテ、ハタ	10YR7/3	2.5YR3/2	2.5YR3/2	
0955	11a	020802		1.5層部	内側調整部		後20.0	後2.5			コテナテ	コテナテ、ハタ、スス付	10YR8/3	2.5YR3/2	2.5YR3/2	
0956	16a	020906		1.5層部	目1ノ草		後26.0	後4.3			コテナテ、調整部	コテナテ、調整部	10YR4/2	5YR4/4	5YR4/4	2.5YR3/2
0957	11a	020719	瓦敷跡部7	4層	瓦		後12.4	後24.6			コテナテ	コテナテ	5YR1/1	7.5B/2	7.5B/2	2.5YR3/2
0958	12c	SK185	020728	堀ノ内遺跡	瓦	瓦1小	10.6	7.4	4.0	11.0	鉄筋、石積付付	鉄筋、下平敷物、ヘラケズリ	5YR1/1	7.5B/2	7.5B/2	2.5YR3/2
0959	12c	SK185	020823	堀ノ内遺跡	瓦	瓦2小	後11.4	後4.0		後11.6	鉄筋	鉄筋	2.5Y7/2	5YR3/3	5YR3/3	2.5YR3/2
0960	13c	SK185	020728	瓦敷跡部	瓦	瓦2小	後10.0	後7.8	4.8	後10.4	鉄筋	鉄筋、下平敷物、ヘラケズリ	10YR7/2	5YR3/3	5YR3/3	2.5YR3/2
0961	12c	SK185	020823	瓦敷跡部	瓦	瓦3小	後10.0	後7.5	4.8	後10.3	鉄筋に瓦敷成し	鉄筋に瓦敷成し、下平敷物、ヘラケズリ	2.5YR3/2	7.5Y/2/2	7.5Y/2/2	2.5YR3/2
0962	12c	SK185	020823	瓦敷跡部	瓦	瓦1小	後10.4	後5.9		後10.6	鉄筋に瓦敷成し	鉄筋に瓦敷成し、下平敷物	10YR7/2	10YR4/2	10YR4/2	2.5YR3/2
0963	13c	SK185	020728	瓦敷跡部	瓦	瓦2小	後10.6	後7.1		後11.2	鉄筋に瓦敷成し	鉄筋に瓦敷成し、下平敷物	10YR8/1	5YR4/4	5YR4/4	2.5YR3/2
0964	12c	SK185	020823	瓦敷跡部	瓦	瓦1or2小	後11.6	後5.5		後11.3	鉄筋に瓦敷成し	鉄筋に瓦敷成し、下平敷物	10YR8/2	2.5YR4/3	2.5YR4/3	2.5YR3/2
0965	12c	SK185	020728	瓦敷跡部	瓦	瓦1or2小	後10.6	後6.0		後11.9	鉄筋に瓦敷成し	鉄筋に瓦敷成し、下平敷物	2.5YR1/1	5Y3/1	5Y3/1	2.5YR3/2
0966	12c	SK185	020728	瓦敷跡部	瓦	瓦2小	後11.8	後4.2			鉄筋に瓦敷成し	下平敷物、ヘラケズリ	2.5Y7/2	5YR3/3	5YR3/3	2.5YR3/2
0967	12c	SK185	020728	瓦敷跡部	瓦	瓦2or4小	後11.5	後4.0			鉄筋	調整部、ヘラケズリ	2.5YR1/1	5YR3/3	5YR3/3	2.5YR3/2
0968	13c	SK185	020728	瓦敷跡部	瓦	瓦1or2小	後12.4	後5.4		後12.6	鉄筋	鉄筋	10YR7/1	2.5YR4/4	2.5YR4/4	2.5YR3/2
0969	12c	SK185	—	堀ノ内遺跡	瓦	瓦1or2小	6.0	後4.3			瓦敷	瓦敷	2.5YR2/2	2.5Y7/2	2.5Y7/2	2.5YR3/2
0970	12c	SK185	020728	6年跡部	瓦	瓦1or2小	後11.5	後5.0			瓦敷	瓦敷	10YR8/2	CO-M4Y4-16a	CO-M4Y4-16a	2.5YR3/2
0971	12c	SK185	020728	瓦敷跡部	瓦	瓦1小	後8.8	後5.6	4.5	後9.0	瓦敷	瓦敷、下平敷物、ヘラケズリ、スス付	5YR1/1	5YR2	5YR2	2.5Y7/2
0972	12c	SK185	020728	瓦敷跡部	瓦	瓦2小	後11.2	後7.6	4.9	後11.4	鉄筋	鉄筋、下平敷物、巻目瓦敷	10YR8/3	5YR3/3	5YR3/3	2.5YR3/2
0973	12c	SK185	020728	瓦敷跡部	瓦	瓦1or2小	12	後7.5	3.8	32.2	鉄筋	鉄筋、下平敷物、ヘラケズリ	2.5Y7/2	7.5Y/5/3	7.5Y/5/3	2.5YR3/2
0974	12c	SK185	020728	中目跡部	瓦	瓦1小	後9.7	後5.2		後10.0	瓦敷	瓦敷	CO-M4Y4-16a	CO-M4Y4-16a	CO-M4Y4-16a	2.5YR3/2
0975	12c	SK185	020728	中目跡部	瓦	瓦1小	後7.1	後5.2			瓦敷	瓦敷	NW	CO-M4Y4-16a	CO-M4Y4-16a	2.5YR3/2
0976	12c	SK185	020823	堀ノ内遺跡	瓦	瓦1小	後7.0	後3.1	7.3	後7.8	瓦敷	瓦敷、調整部、ヘラケズリ	2.5YR2/2	2.5Y7/2	2.5Y7/2	2.5YR3/2
0977	12c	SK185	020728	堀ノ内遺跡	瓦	瓦1小	後5.6	後2.9	3.7	後5.8	瓦敷	瓦敷、調整部、ヘラケズリ	2.5Y7/2	5Y7/3	5Y7/3	2.5YR3/2
0978	12c	SK185	—	堀ノ内遺跡	瓦	瓦2小	後11.4	後2.4	後6.8	後11.6	瓦敷	瓦敷、調整部、ヘラケズリ	2.5YR2/2	5Y7/1	5Y7/1	2.5YR3/2
0979	12c	SK185	020823	堀ノ内遺跡	瓦	瓦1or2小	後11.4	後2.5	6.4	後11.6	瓦敷	瓦敷、調整部、ヘラケズリ	2.5Y7/1	5Y6/1	5Y6/1	2.5YR3/2
0980	12c	SK185	020728	堀ノ内遺跡	瓦	瓦1or2小	後11.5	後2.5	7.2	後11.7	瓦敷	瓦敷、調整部、ヘラケズリ	5YR1/1	CO-M4Y4-16a	CO-M4Y4-16a	2.5YR3/2
0981	12c	SK185	—	瓦敷跡部	瓦	瓦1小	後11.3	後2.4	6.3	後11.6	瓦敷	瓦敷、調整部、ヘラケズリ	2.5YR1/1	5YR1/1	5YR1/1	2.5YR3/2
0982	12c	SK185	020728	堀ノ内遺跡	瓦	瓦1or2小	後11.6	後2.2	後7.6	後11.8	瓦敷	瓦敷、調整部、ヘラケズリ	2.5Y5/1	5YR1/1	5YR1/1	2.5YR3/2
0983	12c	SK185	020728	堀ノ内遺跡	瓦	瓦1or2小	後11.4	後2.4	後7.0	後11.6	瓦敷	瓦敷、調整部、ヘラケズリ	5YR1/1	5YR1/1	5YR1/1	2.5YR3/2

品名No	7107	遺物番号	日付	所在地	種類	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	内面	外面	出土(内面)	巻1	備考
0984	121	SK185	020823	志野丸鉢	丸鉢	伊12 小高	11.7	2.9	2.2	12.0	長石軸、ビン腹 1+1枚、スス付着	長石軸、ヘラケズ 1+1枚、スス付着	5.5771(灰白)	57/1(灰白)	
0985	131	SK185	020728	丸鉢	丸鉢	伊2 小高	11.6	2.2	2.0	11.8	長石軸、ビン腹 1+1枚、スス付着	長石軸、再白塗 1+1枚、スス付着	5.5771(灰白)	57/1(灰白)	
0986	127	SK185	020728	丸鉢	丸鉢	伊10 2小高	11.8	2.6	2.0	12.0	長石軸	長石軸、下手裏 1+1枚、スス付着	5.5781(灰白)	2.5782(灰白)	
0987	127	SK185	020725	丸鉢	丸鉢	伊12 2小高	10.4	1.9		10.6	丸鉢	丸鉢	2.5771(灰白)	2.5772(灰白)	
0988	121	SK185	020823	土師器	ロケツ調整器	伊11 2小高	11.8	2.7	6.0	12.0	全面黒塗ナデ、ス ス付着	ヨコナデ、同色黒 塗	2.5772(灰白)	2.5772(灰白)	
0989	127	SK185	020823	土師器	ロケツ調整器	伊10 2小高	10.0	6.8			ヨコナデ	ヨコナデ、同色黒 塗	10YR7/2 に濃い赤褐色	10YR7/2 に濃い赤褐色	
0990	121	SK185	020728	丸鉢	丸鉢	大塚 or 伊10	6.8	1.7		8.3	黒塗	黒塗	2.5782(灰白)	10YR4/2 に灰褐色	19c土師の遺 品あり
0991	131	SK185	020728	土師器	信條	伊10	26.4	1.6		28.0	丸鉢調整不明(ヘ ラケズ?)	ヨコナデ、指オオ エ、ヘラケズ、 スス付着	10YR2/1	2.5772(灰白)	
0992	131	SK185	020706	土師器	信條	伊10					ヨコナデ、ヘラ、 ナデ、ヘラ	ヨコナデ、指オオ エ、スス付着	2.5783(1)	10YR4/2 に灰褐色	
0993	127	SK185	020823	土師器	信條	伊10					ヨコナデ、ヘラ、 ナデ、ヘラ	ヨコナデ、指オオ エ、スス付着	2.5783(1)	10YR4/2 に灰褐色	
0994	127	SK185	020823	土師器	信條	伊10	7.0	1.8		7.5	布目肌、ヨコナデ	指オオエ	2.5780(4)	10YR7/2 に濃い赤褐色	
0995	131	SK185	020728	土師器	信條	伊10	5.0	1.8		6.2	ヨコナデ、布目肌	ヨコナデ、ナデ付 着、ヘラケズ	10YR7/3 に濃い赤褐色	10YR6/2(灰白)	
0996	121	SK185	020728	丸鉢	丸鉢	伊10 2小高	11.7	3.2	3.0	11.7	表面黒塗に銅緑 酸ナシ、トナシ 2+1枚、金花	表面黒塗、銅緑 酸ナシ、トナシ 2+1枚、金花	10YR7/3 に濃い赤褐色	10YR6/2(灰白)	
0997	127	SK185	020728	丸鉢	丸鉢	伊10 2小高	27.2	7.6	15.3	28.0	長石軸	長石軸、下手裏 黒塗、再白内輪 ナデ、ヘラケズ	5781(灰白)	2.5772(灰白)	
0998	127	SK185	020823	丸鉢	丸鉢	伊2 小高	31.6	7.3	14.2	32.0	表面黒塗に銅緑 酸ナシ	表面黒塗、銅 酸ナシ、ヘラ ケズ	2.5772(灰白)	2.5773(灰白)	
0999	131	SK185	020728	丸鉢	丸鉢	伊2 小高		1.7		2.7	黒塗	黒塗	10YR7/2 に濃い赤褐色	2.5783(2)	10YR4/2 に灰褐色
1000	131	SK185	020728	丸鉢	丸鉢	伊10		1.0		1.0	黒塗、下手裏	黒塗	2.5782(灰白)	7.5781(2)	
1001	131	SK185	020728	常陸丸鉢	常陸丸鉢	伊7c	16.4	1.9		17.0	口縁黒塗、ヨコ ナデ、黒塗	口縁黒塗、ヨコ ナデ、黒塗	2.5785(6)	10YR2/1	
1002	131	SK185	020728	常陸丸鉢	常陸丸鉢	伊7c	20.8	4.7		21.0	ヨコナデ、自然 スス付着	ヨコナデ	5YR4/4	10YR2/1	
1003	127	SK185	020728	常陸丸鉢	常陸丸鉢	伊10	22.2	19.1			青花	青花	5YR7/4に 濃い赤褐色	10Y7/1(灰白)	
1004	1	SK185	020823	常陸丸鉢	常陸丸鉢	伊10	26.6	5.3	14.3	26.8	青花	青花、再白内輪 5YR6/2に濃い赤褐色	57/1(灰白)	567/1(明 オリージュ灰 明赤灰)	
1005	131	SK185	020728	丸鉢	丸鉢	伊10	4.0	1.8		4.0	黒塗	黒塗、表面黒 塗、再白内輪	10YR7/3 に濃い赤褐色	2.5783(1)	10YR2/1
1006	121	SK185	020725	常陸丸鉢	常陸丸鉢	伊7c 4.7	1.9		1.9	1.9	ヨコナデ、黒塗	黒塗、ナデ、ヘラ ケズ、スス付着	5YR3/3	5Y4/4	10YR2/1
1007	131	SK185	020728	常陸丸鉢	常陸丸鉢	伊7c 4.7	1.9	20.8			スス付着、指オオ エ、ナデ、下手裏 黒塗	ヘラケズ、黒塗、 表面黒塗	2.5785(3)	10YR2/1	
1008	127	SK185	020823	木製品	不明(角材)	伊15	15.3	5.3	2.0						
1009	127	SK185	020725	木製品	不明(棒状)	伊15	17.3	19.8	0.6						
1010	121	SK185	020728	丸鉢	丸鉢	伊10	4.5	1.0	0.4	4.4	丸鉢	丸鉢	10YR2/1	10YR2/1	
1011	116、 116、 116	SK136	020723	丸鉢	丸鉢	古墳IV 大1	11.8	1.0		12.0	丸鉢	丸鉢	10YR9/4	7.5YR2/1	
1012	116	SK136	020723	丸鉢	丸鉢	古墳IV 大1	11.0	1.0		11.2	丸鉢	丸鉢	10YR6/3	10YR2/2	
1013	116	SK136	020723	丸鉢	丸鉢	伊10 2小高	10.0	1.6		10.3	丸鉢に黒塗成し	丸鉢に黒塗成し	10YR7/4	5YR5/3	
1014	116	SK136	020723	丸鉢	丸鉢	伊10 2小高	6.4	3.6	4.4	6.7	長石軸	長石軸、再白 10YR7/2に濃い赤褐色	2.5782(2)	2.5783(2)	
1015	116	SK136	020728	丸鉢	丸鉢	古墳IV 古墳IV	2.2	3.8	4.8		丸鉢、内面見込 ナデ、黒塗、下手 裏、再白内輪	丸鉢、内面見込 ナデ、黒塗、下手 裏、再白内輪	10YR7/2 に濃い赤褐色	10YR2/1	
1016	116	SK136	020723	丸鉢	丸鉢	古墳IV 古墳IV	10.6	3.7	5.1	10.8	丸鉢、下手裏	丸鉢、下手裏 同色黒塗	10YR7/3 に濃い赤褐色	7.5Y6/3	オリージュ
1017	116	SK136	020728	丸鉢	丸鉢	大20 2小高	11.3	5.8			丸鉢	丸鉢、輪ナシ 10YR7/2に濃い赤褐色	10YR7/2	10YR2/1	
1018	116	SK136	020728	丸鉢	丸鉢	伊2 小高	12.3	2.8	7.2	12.6	長石軸、ビン腹 1+1枚	長石軸、同色ヘ ラケズ、トナシ 2+1枚	2.5781(1)	2.5782(灰白)	
1019	116	SK136	020728	丸鉢	丸鉢	伊10 2小高	9.6	1.9	5.6	9.8	長石軸	長石軸、同色ヘ ラケズ、トナシ 1+1枚	2.5781(1)	2.5773(灰白)	
1020	116	SK136	020723	丸鉢	丸鉢	伊10 2小高	11.3	1.8	7.4		長石軸、ビン腹 1+1枚	長石軸、同色ヘ ラケズ、トナシ 1+1枚	2.5781(1)	2.5782(灰白)	
1021	116	SK136	020723	丸鉢	丸鉢	伊2 小高	8.2	1.5	5.2	8.6	長石軸	長石軸、同色ヘ ラケズ	2.5782(灰白)	2.5772(灰白)	
1022	116	SK136	020723	丸鉢	丸鉢	伊10 2小高	8.8	1.8	5.2	9.0	長石軸、口縁黒 スス付着	長石軸、口縁黒 スス付着	2.5772(灰白)	2.5771(灰白)	
1023	116	SK136	020728	丸鉢	丸鉢	伊2 小高	11.7	2.1	7.6	12.0	長石軸	長石軸、トナシ 1+1枚、再白 10YR6/3に濃い赤褐色	10YR6/3	57/1(灰白)	
1024	116	SK136	020723	丸鉢	丸鉢	伊10 2小高	13.4	3.0	8.4	13.6	全面丸鉢	全面丸鉢、ヘラ ケズ、トナシ	2.5783(2)	2.5773(灰白)	
1025	116	SK136	020728	丸鉢	丸鉢	伊20 2小高	14.4	3.5	7.3	14.6	表面黒塗、再 白内輪	表面黒塗、再 白内輪	2.5772(灰白)	57/3(灰白)	

名古屋城三の丸遺跡Ⅶ

図番	アノ	遺跡番号	日付	所在地・材質	種別	時期	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	厚さ(m)	内径	外径	備考	
1026	11a	SK156	020723	堀り瓦遺物部	瓦葺り面	併3小期	兼13.2	2.8	兼7.8	兼13.6	瓦葺り	瓦葺り、下平葺り、 同堀ヘラケズリ	2.59x2.6 瓦白 2.59x2.2 2.59x2.2 瓦白	
1027	11a	SK156	020723	瓦遺物部	瓦葺り面	併4小期	兼13.0	残2.2	兼13.2	瓦葺り	瓦葺り	2.59x1.6 瓦灰 2.59x2.2 瓦白		
1028	11a	SK156	020728	瓦遺物部	瓦葺り面	併4小期	残1.7	兼8.6	兼8.6	瓦葺り	瓦葺り、ヒンダシ 2×残	2.59x1.6 瓦灰 2.59x2.2 瓦白		
1029	11a	SK156	020723	瓦遺物部	同堀瓦	併3小期	兼11.4	2.4	兼7.2	兼11.8	瓦葺り、下平葺り、 同堀ヘラケズリ	2.59x2.2 瓦灰 2.59x2.2 瓦白		
1030	11a	SK156	020723	堀内土間内持 石瓦葺り	瓦	併1小期	8.9	2.3	3.9	8.1	下平葺りした瓦葺り、 下平葺り、同堀ヘ ラケズリ	10Y85/1 10Y85/2	5Y6/2 瓦白	
1031	11a	SK156	020723	堀り瓦遺物部	土葺り大面	併102小期	残3.3				瓦葺り	10Y87/1 10Y87/2	2.59x2.2 瓦白	
1032	11a	SK156	020723	堀り瓦遺物部	同堀瓦	併3小期	残3.5				瓦葺り	10Y86/1 10Y86/2	2.59x2.2 瓦白	
1033	11a	SK156	020723	堀り瓦遺物部	同堀瓦	併102小期	残2.5				瓦葺り	10Y86/4 10Y86/5	2.59x2.2 瓦白	
1034	11a	SK156	020723	堀り瓦遺物部	瓦	併30a4小期	残4.1	兼17.4			瓦葺り、トナシ遺 1×残	2.59x2.2 瓦灰 1×残、高由内4 ×1残	C12-M4 Y08-08	
1035	11a	SK156	020723	瓦遺物部	瓦	併30a4小期	残3.7	兼6.6			10Y87/1 10Y87/2	5Y6/2 瓦白		
1036	11a	SK156	020723	堀り瓦遺物部	瓦葺り	大20a3	兼12.6	残9.2			兼13.6	5×1×瓦葺り、下平 葺り	10Y86/2 10Y86/3	10Y3/3 同堀瓦
1037	11a	SK156	020723	堀り瓦遺物部	同堀瓦	古堀IV 遺	兼6.2	残2.4				瓦葺り	10Y88/2 10Y88/3	2.59x2.2 瓦白
1038	11a	SK156	020723	堀り瓦遺物部	同堀瓦	古堀IV 遺	兼6.5	兼13.0				瓦葺り	2.59x2.2 瓦灰 同堀瓦葺り	2.59x2.2 瓦白
1039	11a	SK156	020728	堀り瓦遺物部	同堀瓦	併1～ 4小期	残2.7	兼19.0				瓦葺り	2.59x2.2 瓦灰 同堀ヘラケズリ	2.59x2.2 瓦白
1040	11a	SK156	020723	瓦遺物部	赤土山崩部 当瓦葺り	併1小期	兼30.4	5.9	兼16.6	兼31.2	瓦葺り跡に同堀瓦 散らし	瓦葺り、下平葺り 跡、同堀ヘラケズ リ	2.59x2.2 瓦白	
1041	11a	SK156	020723	瓦遺物部	当瓦葺り	併38.0	残7.6				兼38.6	瓦葺り跡に同堀瓦 散らし	2.59x2.2 瓦灰 同堀瓦	
1042	11a	SK156	020723	堀り瓦遺物部	同堀瓦	古堀I or 古	残6.9					瓦葺り	2.59x2.1 瓦白	
1043	11a	SK156	020723	堀り瓦遺物部	同堀瓦	古堀II or 古	残7.9					瓦葺り	2.59x2.1 瓦白	
1044	11a	SK156	020723	堀り瓦遺物部	瓦葺り	残長5.9	兼5.2	厚2.3					10Y87/3 瓦白	
1045	13a	SK223	020727	土葺り	堀内土間A	17a 併 5×8	兼8.8	4.0	7.2		コナチデ、赤白 土	コナチデ、ヘラケ ズリ、赤白の土 散らし	2.59x2.2/4 に白土	
1046	13a	SK223	020727	土葺り	コナチデ調整 部	兼11.6	残1.9			兼11.8	コナチデ、タマ コナチデ	コナチデ	10Y87/3 に白土	
1047	13a	SK223	020727	土葺り	コナチデ調整 部	残1.6	兼8.2				コナチデ	コナチデ、同堀瓦 散らし	10Y86/3 瓦葺り	
1048	13a	SK223	020727	堀り瓦遺物部 ?	併入7?	残1.8	兼3.2	兼3.2			瓦葺り	瓦葺り、下平葺り、 同堀瓦葺り	2.59x1.6 瓦白 同堀瓦	
1049	13a	SK223	020727	堀り瓦遺物部	併3小期	残3.7					瓦葺り	2.59x2.2 瓦灰 同堀瓦		
1050	13a	SK223	020727	堀り瓦遺物部	併13	併102小期	残7.6	兼12.4			同堀瓦、わずかに 高由内堀内瓦葺り 跡、同堀ヘラケズ リ	10Y86/2 10Y86/3	2.59x2.2 瓦灰 同堀瓦	
1051	13a	SK223	020727	堀り瓦遺物部	同堀瓦	併30.2	残5.8				兼40.6	瓦葺り	10Y87/2 に白土	
1052	11b	S012	020625	瓦遺物部	同堀瓦	併4小期	兼8.8	7.0	兼5.6	兼9.4	瓦葺り	瓦葺り、下平葺り、 同堀ヘラケズリ	2.59x2.2 瓦灰 2.59x2.2 瓦白	
1053	12c	S012	020724	堀り瓦遺物部	瓦葺り	併30a4小期	残1.9	5.4			瓦葺り	同堀ヘラケ ズリ	2.59x2.2 瓦灰 2.59x2.3 同堀瓦	
1054	9b	S012	020919	肥後屋敷	併1丸堀	兼10.9	残3.4			兼11.9	白磁物	磁付	9/白	
1055	12b	S012	020912	肥後屋敷	併1丸堀	兼2.3	5.8				磁付	磁付、高由内堀内 瓦葺り	C12-M0 Y10-04	
1056	11b	S012	020625	瓦遺物部	瓦	併4小期	兼14.2	2.9	兼7.6	兼14.5	瓦葺り	瓦葺り、ヘラケズ リ、高由内堀内瓦 葺り	10Y87/2 に白土	
1057	11b	S012	020625	瓦遺物部	瓦葺り面	併4小期	兼14.8	残2.8		兼15.6	瓦葺り	瓦葺り、ヘラケズ リ	2.59x2.2 瓦灰 5Y6/2 同堀瓦	
1058	11b	S012	020625	瓦遺物部	瓦	併30a4小期	残1.8	兼7.8			瓦葺り	同堀瓦、 ヘラケズリ	2.59x2.2 瓦灰 5Y7/2 瓦白	
1059	12b	S012	020727	瓦遺物部	土葺り大面	併3小期	兼12.0	2.9	兼7.5	兼12.2	瓦葺り跡、ヒン ダシ1×残	瓦葺り、同堀ヘ ラケズリ、トナシ 遺1×残	10Y87/2 10Y87/3	5Y7/2 瓦白
1060	11b	S012	020625	瓦遺物部	土葺り丸堀	併2小期	兼9.0	兼5.9	兼9.2		瓦葺り	瓦葺り、同堀ヘ ラケズリ	10Y84/1 10Y84/2	2.59x1.7 同堀瓦
1061	11b	S012	020625	堀り瓦遺物部	併20a3小期	残1.7	兼6.4				瓦葺り	瓦葺り、同堀ヘ ラケズリ、トナシ 遺2×残	2.59x2.2 瓦灰 2.59x2.2 瓦白	
1062	13b	S012	020727	堀り瓦遺物部	瓦葺り面	併1小期	兼12.6	残2.9			兼12.8	瓦葺り	10Y86/1 10Y86/2	2.59x1.6 瓦灰
1063	11b	S012	020628	土葺り	赤ロウワ調 整部	併3.8	0.9		4.1		磁オサエ?	磁オサエ	10Y87/3 に白土	
1064	11b	S012	020625	土葺り	赤ロウワ調 整部	併3.8	1.0		4.0		調整不明、調整部	磁オサエ	5Y82 瓦葺り	
1065	11b	S012	020625	土葺り	赤ロウワ調 整部	併3.5	残0.8				調整不明	磁オサエ	5Y87 同堀瓦	
1066	13b	S012	020720	土葺り	赤ロウワ調 整部	併4.2	残1.4				兼4.5	磁オサエ	10Y87/3 に白土	
1067	11b	S012	020625	土葺り	赤ロウワ調 整部	併3.8	0.9		4.0		調整不明	磁オサエ	2.59x2.2/4 に白土	
1068	11b	S012	020625	土葺り	赤ロウワ調 整部	併0.9	6.8				コナチデ、中央穿 孔	コナチデ、同堀瓦 散らし	10Y87/3 に白土	
1069	11b	S012	020625	土葺り	赤ロウワ調 整部	兼10.6	2.4	兼5.0	兼10.8		コナチデ	コナチデ、同堀瓦 散らし	10Y87/3 に白土	
1070	11b	S012	020625	堀り瓦遺物部	同堀瓦	併13	残3.5	兼9.5			同堀瓦、並行部に 5×1×瓦葺り	瓦葺り、下平葺り、 同堀ヘラケズリ	2.59x2.2 瓦灰 同堀瓦	

図面番号	7/107	遺物番号	日付	所在地・材質	品名	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	内容	写真	出土(内蔵)	巻	備考
1071	12c	SD12	090724	美濃陶器	飯椀		径 4.1	9.0						鉄軸	鉄軸、真白陶器の心付を有し、同軸へつなぎ、両内面割取が施されている。	109R6/1 既取	59R3/3 磁器	
1072	12b	SD12	090727	瀬戸陶器	筆	江戸時代	径 4.7	差 10.2						鉄軸	鉄軸、下手磨削、同軸へつなぎ。	109R8/2 既取	7.59R3/3 既取	
1073	11b	SD12、SD14	090730	瀬戸陶器	土瓶	伊 享和9 小期	径 5.3	差 10.0						鉄軸	7.5の径、鉄軸、下手磨削、同軸へつなぎ。	2.59R2/2 既取	CS-MO-Y4- 既取	
1074	12b	SD12	090727	美濃陶器	赤漆		径 7.7							ココナデ	7.59R6/4 心付			
1075	11b	SD12	090730	瀬戸陶器	火鉢	伊 享和9 小期	差 21.0	径 2.8						鉄軸	口縁部はねむき、すくい部施	109R8/2 既取	109R2/3 既取	
1076	13f	SD12	090724	美濃陶器	志野鉄軸鉢	伊 享和2 小期	径 3.9	差 13.4						長石軸鉄軸	長石軸、真白陶器の心付を有し、	2.59R2/2 既取	597/2 既取1	
1077	11b	SD12	090628	美濃陶器	志野鉄軸鉢	伊 享和2 小期	径 7.2							長石軸鉄軸	長石軸、真白陶器の心付を有し、	2.597/2 既取	597/1 既取1	
1079	11b	SD12	090621	美濃陶器	赤七輪湯鉢	伊 享和1 小期	差 41.4	径 4.9						赤土	長石軸、同軸に銅線施あり。	2.59R3/2 既取	2.59R4/3 既取	
1079	13b	SD12	090727	土師器	煎茶鉢	寛 12.2	径 4.5							ココナデ、ヘツナデ、ココナデ、煎オヤス、煎オヤス、煎オヤス	2.59/4/1 既取	2.59/2 既取		
1080	13b	SD12	090726	土師器	平手煎茶鉢		差 21.0	径 2.3						ココナデ	ココナデ、煎オヤス、おずかにスス付	59R6/6 既取		
1081	12b	SD12	090727	土師器	信筒		差 33.2	6.1						ココナデ、ハヤ、ココナデ、煎オヤス、スス付、下手磨削不明	59R6/6 既取	7.59R4/2 既取		
1082	11b	SD12	090625	土師器	惣徳意道 D 皿	唐 1.3	3.5	差 10.0						無調整?	1.5の径、煎オヤス付、心付	59R6/6 既取		
1083	12b	SD12	090724	土師器	惣徳意道 A 皿		差 5.0	9.0	3.0	6.2				ココナデ	ココナデ、ヘツナデ	7.59R6/4 心付		
1084	11b	SD12	090625	鉄製品	釘		径 4.4	幅 1.5	厚 1.3									
1085	11b	SD12	090625	鉄製品	釘		径 4.0	幅 1.6	厚 1.1									
1086	11b	SD12	090625	鉄製品	釘		径 4.0	幅 1.6	厚 1.1									
1087	12c	SD14	090730	美濃陶器	丸瓶	伊 1～3 小期	差 9.0	径 4.9						鉄軸	鉄軸/尻施あり	109R8/4 既取	7.59R2/2 既取	
1088	12c	SD14	090730	瀬戸陶器	土師系瓶	伊 2 小期	差 13.9	径 4.0						鉄軸	鉄軸、下手磨削、同軸へつなぎ	109R7/2 心付	109R2/2 既取	
1089	11b	SD14	090731	美濃陶器	丸瓶	伊 2 小期	径 2.4	5.0						鉄軸	鉄軸、下手磨削、同軸へつなぎ	109R6/3 既取	7.59/2 既取	オリーブ 既取
1090	12c	SD14	090730	美濃陶器	小瓶	伊 1～4 小期	差 6.6	3.7	差 6.8					鉄軸	鉄軸、下手磨削、同軸へつなぎ	109R6/1 既取	7.59R3/3 既取	
1091	11c	SD14	090624	肥前磁器	染付丹次		差 6.7	径 3.1						白磁軸	CS-MO-Y6 既取	C10-MO-Y6 既取		
1092	11c	SD14	090625	瀬戸陶器	志野丸瓶	伊 2 小期	差 11.3	2.3	差 6.4	差 11.8				長石軸、ペン磨	長石軸、トナシ磨	109R5/1 既取	2.59/1 既取	
1093	11b	SD14	090731	瀬戸陶器	輪光瓶	伊 3 小期	差 13.0	3.0	差 13.6					長石軸、輪光付	長石軸、下手磨削、同軸へつなぎ、並磨り心付を有し、	59R1 既取1	597/2 既取1	
1094	11c	SD14	090726	瀬戸陶器	輪光瓶	伊 2 小期	差 13.8	径 2.4						鉄軸	鉄軸、下手磨削	59R1 既取1	7.59R2/2 既取	
1095	13c	SD14	090725	土師器	飯沼形	伊 30e4 小期	差 14.0	2.7	差 8.8	差 14.2				全面磨削、スス付	全面磨削	109R7/2 心付		瀬戸美濃陶器 既取7
1096	13c	SD14	090725	瀬戸美濃陶器	飯沼形	伊 30e4 小期	差 13.8	径 2.5						鉄軸	109R6/1 既取	59R3/3 既取	オリーブ 既取	
1097	11c	SD14	090726	美濃陶器	輪光瓶	伊 2 小期	径 1.5	差 6.2						長石軸、輪光付	長石軸、下手磨削、同軸へつなぎ	2.597/2 既取	7.59R1 既取	
1098	11b	SD14	090731	瀬戸美濃陶器	志野鉄軸鉢	伊 享和2 小期	径 1.7	6.0						長石軸、ペン磨	長石軸、同軸へつなぎ、トナシ磨	2.59R1 既取1	2.597/1 既取	
1099	11c	SD14	090624	美濃陶器	志野鉄軸鉢	伊 享和2 小期	差 4.0	差 17.6						長石軸鉄軸	長石軸、真白陶器の心付を有し、	2.59R3/2 既取	59R2 既取1	
1100	11c	SD14	090726	美濃陶器	笠形鉢	伊 30e4 小期	差 34.8	径 6.1						鉄軸	長石軸、同軸に銅線施あり	2.597/2 既取	597/2 既取1	
1101	11b	SD14	090731	土師器	赤いけり調 飯沼形		3.7～4.2	1.1	4.3～4.8					煎オヤス	煎オヤス	2.597/2 既取		
1102	11c	SD14	090726	土師器	惣徳意道 A 皿		差 5.0	径 6.3						ココナデ	ココナデ、煎オヤス、ヘツナデ	59R2/6 既取		
1103	11c	SD14	090624	瀬戸陶器	圓鉢	伊 3 小期	差 27.8	径 4.8						鉄軸	鉄軸、器口1番径 20.4、6cm、1方向径	109R8/4 既取	2.59R3/1 磁器	
1104	12c	SD14	090730	瀬戸陶器	圓鉢	伊 3 小期	差 28.0	径 13.5						鉄軸	鉄軸、一部磨削	109R7/3 心付	2.59R3/3 磁器	
1105	11c	SD14	090727	瀬戸陶器	輪光鉢	寛 7.4	幅 5.8	厚 2.8						鉄軸	同軸へつなぎ	109R7/3 心付	2.59R3/3 磁器	
1106	11c	SD14	090625	鉄製品	不明(飯沼)	寛 6.4	幅 4.1	厚 2.3										
1107	13c	SK163	090725	瀬戸美濃陶器	土師系瓶	伊 5 小期	差 10.6	径 5.9						鉄軸	鉄軸、下手磨削	109R7/2 既取	7.59R3/3 既取	
1108	12c	SK163	090725	瀬戸美濃陶器	土師系瓶	伊 5 小期	差 3.0	4.4						鉄軸	鉄軸、下手磨削、同軸へつなぎ	7.59R6/4 心付	2.59R2/2 輪光磨削	
1109	13c	SK163	090725	瀬戸美濃陶器	丸瓶	伊 30e4 小期	径 3.7							鉄軸	鉄軸、下手磨削	59R2 既取1	7.597/2 既取1	
1110	13c	SK163	090725	瀬戸美濃陶器	志野丸瓶	伊 享和2 小期	差 11.4	径 3.8						長石軸	長石軸	59R1 既取1	597/1 既取1	
1111	13c	SK163	090725	瀬戸美濃陶器	圓鉢	伊 1 小期	差 12.0	径 4.4						長石軸鉄軸	長石軸	109R7/3 心付	7.59R6/3 心付	
1112	13c	SK163	090729	肥前磁器	丸瓶		差 12.4	径 5.0						長石軸鉄軸	長石軸鉄軸	109R6/1 既取	7.59R1 既取	
1113	13c	SK163	090725	中世	白磁小鉢		径 3.9	差 3.8						白磁軸	白磁軸、真白陶器の心付を有し、	59R1 既取1	9/白	
1114	13c	SK163	090725	肥前磁器	白磁小鉢		径 9.4	径 3.5						白磁軸	白磁軸	59R1 既取1	9/白	
1115	13c	SK163	090725	肥前磁器	染付丸瓶		差 9.8	径 4.8						白磁軸	染付	59R1 既取1	CS-MO-Y4 既取	
1116	13c	SK163	090725	肥前磁器	染付丸瓶		差 9.5	径 3.8	差 9.7					染付	染付	59R1 既取1	CS-MO-Y6 既取	
1117	13c	SK163	090729	瀬戸美濃陶器	飯沼形	伊 30e4 小期	差 12.2	径 2.3						鉄軸	鉄軸、下手磨削	109R7/3 心付	597/2 既取1	

図番	7107	遺物番号	日付	所在地・材質	器種	時期	口径(mm)	高さ(mm)	底径(mm)	重量(g)	内面	外面	胎土(内面)	胎土(外面)	備考	
1166	13c	SK484	020912	銅製品	鏡背(鏡本)					2.5						
1167	13c	SK484	020912	銅製品	鏡背(鏡本)					2.5						
1168	13a	SK40	020612	土器類	弥生土器 A 群		径 6.4	1.6			径 6.8	コナテ	不明、コナテ	7.5YR6/6 褐色		
1169	13d	SK40	020612	土器類	弥生土器 A 群		径 10.0	1.6			径 10.8	コナテ	不明、コナテ	7.5YR6/6 褐色		
1170	13a	SK49	020612	土器類	天目土器	器小	径 4.5	5.0			径 4.5	コナテ	鉄粒、下平磨り、ヘラケズリ	10YR8/2 灰白	10YR2/1 灰白	
1171	13a	SK49	020612	土器類	天目土器	器小	径 11.8	2.0	径 7.8	径 12.0	コナテ、アール付背	コナテ、アール付背、ヘラケズリ	10YR5/2 灰白	10YR2/1 灰白		
1172	13a	SK49	020612	土器類	弥生土器 A 群		径 3.6				径 3.6	コナテ	コナテ、ヘラケズリ、スズ付背	7.5YR5/3 に近い褐色		
1173	13a	SK49	020613	土器類	弥生土器 A 群		径 14.9			径 25.6	径 15.0	コナテ	鉄粒、ヘラケズリ、アール付背	10YR7/1 灰白	5Y6/4 オリーブ褐色	
1174	13a	SK49	020613	土器類	弥生土器 A 群		径 6.2	径 13.0			径 6.2	コナテ	鉄粒、ヘラケズリ、アール付背	2.5YR2/3 褐色	7.5YR3/1 灰白	
1175	13a	SK49	020612	土器類	弥生土器 A 群		径 10.6	径 22.6			径 10.6	コナテ	鉄粒、ヘラケズリ、アール付背	7.5YR7/4 灰白	7.5YR3/1 灰白	
1176	11d	SK00	020621	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 3.2	径 1.4			径 3.2	コナテ	鉄粒	2.5YR6/1 褐色	10YR2/2 灰白	
1177	12c	SD26	020726	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 1.5	径 5.0			径 1.5	コナテ	鉄粒	2.5YR7/3 褐色	5YR2/3 緑褐色	
1178	12f	SK132	020914	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 11.0	径 3.0		径 11.4	径 11.0	コナテ	鉄粒	5YR1/1 灰白	5YR4/3 に近い褐色	
1179	11b	SK132	020623	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 13.8	径 1.8		径 14.6	径 13.8	コナテ	鉄粒	2.5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	
1180	10d	SK127	020626	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 8.4	径 1.8	径 4.8	径 8.8	径 8.4	コナテ	鉄粒、アール付背、ヘラケズリ、スズ付背	5Y6/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	
1181	10d	SK127	020626	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 11.4	径 2.0	径 12.0	径 11.4	径 11.4	コナテ	鉄粒、下平磨り	2.5Y6/1 褐色	5Y6/3 オリーブ褐色	
1182	10d	SK127	020626	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 9.0	径 2.0	径 9.2	径 9.2	径 9.0	コナテ	コナテ、スズ付背	10YR6/3 に近い褐色		
1183	10d	SK127	020626	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 10.6	径 1.8	径 5.0	径 10.6	径 10.6	コナテ	コナテ、アール付背	7.5YR8/4 灰白		
1184	10d	SK127	020626	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 3.3	径 6.0			径 3.3	コナテ	鉄粒、非丸底	2.5Y7/1 灰白		
1185	10d	SK127	020626	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 1.8	径 3.6			径 1.8	コナテ	鉄粒、非丸底	2.5YR2/3 褐色	2.5Y7/1 灰白	
1186	10d	SK127	020626	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 3.6	径 3.6			径 3.6	コナテ	鉄粒	10YR3/1 褐色		
1187	13a	SK202	020727	土器類	弥生土器 A 群	器小	3.7	6.0	3.9	6.0	3.7	コナテ	鉄粒	10YR7/3 に近い褐色		
1188	13a	SK224	020727	土器類	弥生土器 A 群	器小	6.5	3.3	3.2	6.8	6.5	コナテ	鉄粒	10YR8/4 灰白	2.5Y7/2 灰白	
1189	16c	SK270	020731	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 3.8				径 3.8	コナテ	鉄粒	2.5YR4/2 褐色		
1190	6d	SK296	020826	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 2.6	4.4			径 2.6	コナテ	鉄粒、アール付背、地肌彫り	10YR7/3 に近い褐色	2.5G3/1 緑オリーブ褐色	
1191	6d	SK296	020826	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 2.2	径 6.4			径 2.2	コナテ	コナテ、アール付背	10YR8/3 灰白		
1192	6d	SK296	020826	土器類	弥生土器 A 群	器小	10.2	2.7	3.4	10.6	10.2	コナテ	コナテ、アール付背	10YR8/4 灰白		
1193	11b	SK434	020919	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 1.9	4.0			径 1.9	コナテ	鉄粒	7.5YR9/3 褐色		
1194	12f	SD21	020724	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 11.0	2.7~2.8	径 7.2	径 11.6	径 11.0	コナテ	鉄粒、アール付背、ヘラケズリ	2.5YR3/2 褐色	5Y7/4 灰白	
1195	11d	SD21	020724	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 4.9			径 20.0	径 4.9	コナテ	コナテ、アール付背	10YR7/3 に近い褐色		
1196	13a	SD22	020726	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 1.8	5.3			径 1.8	コナテ	鉄粒、高台磨り	10YR6/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	
1197	13a	SD22	020726	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 11.6	5.3	径 7.4	径 12.0	径 11.6	コナテ	鉄粒、高台磨り	5YR1/1 灰白	2.5Y7/2 灰白	
1198	13a	SD22	020726	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 5.2	9.0	径 5.0	径 7.6	径 5.2	コナテ	コナテ、ヘラケズリ、地肌彫り	7.5YR7/6 褐色		
1199	13a	SD22	020726	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 15.0	径 3.7			径 15.0	コナテ	鉄粒	10YR8/4 灰白	7.5YR3/2 褐色	
1200	13a	SD22	020726	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 3.9	径 3.9			径 3.9	コナテ	鉄粒	10YR6/3 に近い褐色	10R3/2 緑褐色	
1201	13a	SD22	020726	土器類	弥生土器 A 群	器小	径 2.9	径 17.0			径 2.9	コナテ	鉄粒	2.5YR2/1 褐色	5Y7/2 灰白	
1202	9d	SK94	020625	土器類	弥生土器 A 群	器小	9.9	5.3	3.9	10.0	9.9	白磁	染付、高台磨り	9Y1	Ca-MO-Y4 緑白	有田
1203	10c	SK94	020624	土器類	弥生土器 A 群	器小	9.7	5.4	3.8	9.9	9.7	白磁	染付、高台磨り	5YR1/1 灰白	Ca-MO-Y4 緑白	有田
1204	9d	SK94	020625	土器類	弥生土器 A 群	器小	10.6	5.7	4.1	10.8	10.6	白磁	染付、高台磨り	5YR1/1 灰白	Ca-MO-Y4 緑白	有田
1205	9d	SK94	020625	土器類	弥生土器 A 群	器小	9.8	4.9	3.4	9.9	9.8	白磁	染付、高台磨り	9Y1	Ca-MO-Y4 緑白	有田
1206	10c	SK94	020624	土器類	弥生土器 A 群	器小	10.1	5.1	3.9	10.2	10.1	白磁	染付、高台磨り	9Y1	Ca-MO-Y4 緑白	有田
1207	9d	SK94	020625	土器類	弥生土器 A 群	器小	10.4	5.2	3.5	10.6	10.4	白磁	染付、高台磨り	5YR1/1 灰白	Ca-MO-Y6 緑白	有田
1208	9c	SK94 北下脚	020702	土器類	弥生土器 A 群	器小	10.3	4.7	3.6	10.4	10.3	白磁	染付、高台磨り	7.5YR1/1 灰白	Ca-MO-Y4 緑白	有田
1209	9c	SK94 北下脚	020702	土器類	弥生土器 A 群	器小	9.9	径 4.8			径 9.1	白磁	染付	9Y1/1 灰白	C10-MO-Y4 緑白	有田
1210	10c	SK94	020621	土器類	弥生土器 A 群	器小	9.9	径 4.3			径 10.0	白磁	染付	5YR1/1 灰白	10YR1/1 灰白	有田
1211	10c	SK94	020626	土器類	弥生土器 A 群	器小	10.2	径 3.9			径 10.3	白磁	染付	7.5YR1/1 灰白	10YR1/1 灰白	有田
1212	9d	SK94	020625	土器類	弥生土器 A 群	器小	9.9	径 4.0			径 10.0	白磁	染付	7.5YR1/1 灰白	Ca-MO-Y6 緑白	有田

名古屋城三の丸遺跡 VII

調査年	Plan	遺跡番号	日付	所在地・材質	遺物	時期	口径(mm)	高さ(mm)	厚さ(mm)	長さ(mm)	内径	外径	形状・(作部)	船1	備考	
1213	94	SK34-6	020708	肥前磁器	染付丸瓶	16c 前	8.0	4.0	2.9	8.1	白磁胎	染付、高台塚埋藏物	5Y8/1 灰白	CA-M3-Y4-RE0		
1214	94	SK34-6	020708	肥前磁器	染付丸瓶	16c 前	8.1	4.0	2.9	8.2	白磁胎	染付、高台塚埋藏物	—	CA-M3-Y4-RE0	6/10	
1215	94	SK34	020621	肥前磁器	染付丸瓶	16c 前	7.6	3.6	—	—	白磁胎	染付、高台塚埋藏物	7.5Y8/1 灰白	CA-M3-Y4-RE0		
1216	94	SK34	020625	肥前磁器	白磁丸瓶	16c 前	8.2	4.5	4.8	8.3	白磁胎	白磁胎、高台塚埋藏物	—	CA-M3-Y4-RE0	6/10	
1217	10c	SK34 南下堀	020701	肥前磁器	白磁丸瓶	16c 前	8.1	4.2	3.8	8.2	白磁胎、内面に付貫通穴φ7	白磁胎、高台塚埋藏物	—	CA-M3-Y4-RE0	6/10	
1218	—, 10c	SK34	020625	肥前磁器	白磁丸瓶	16c 前	10.1	5.3	—	—	白磁胎	白磁胎	5Y8/1 灰白	CA-M3-Y4-RE0		
1219	94	SK34 北下堀	020702	肥前磁器	染付丸瓶	16c 前	11.2	5.7	4.7	—	11.4	透明胎	染付、下平蓋物	10Y8/2 灰白	10Y8/2 灰白に染付	
1220	94	SK34	020625	信楽陶器	信楽丸瓶	16c 前	9.4	5.4	3.2	9.6	鉄胎、1筋付	鉄胎、上筋付	10Y8/2 灰白	2.5Y7/1 灰白	10Y8/2 灰白に染付	
1221	10c	SK34	020624	信楽陶器	丸瓶	16c 前	8.5	4.3	2.6	8.6	鉄胎	鉄胎、下平蓋物	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白に染付	
1222	10c	SK34	020624	信楽陶器	丸瓶	16c 前	—	—	—	—	—	鉄胎、下平蓋物	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/4 灰白		
1223	94	SK34 北下堀	020702	瀬戸陶器	瀬戸丸瓶	16c 前	11.4	5.4	4.1	—	11.7	鉄胎	鉄胎、片蓋物	5Y8/3 灰白	5Y8/3 灰白	
1224	10c	SK34	020624	肥前磁器	染付丸瓶	16c 前	11.5	4.9	4.4	11.7	白磁胎、透明胎	白磁胎、透明胎、高台塚埋藏物	5B4-1 磁青	7.5Y8/2 灰白	6/10	
1225	—	SK34 南下堀	020702	瀬戸陶器	丸瓶	16c 前	11.2	5.6	—	—	11.5	鉄胎	鉄胎	5Y7/2 灰白		
1226	94	SK34	020625	肥前赤陶器	丸瓶	16c 前	7.7	3.7	—	—	7.9	鉄胎	鉄胎、高台塚埋藏物	2.5Y8/2 灰白	10Y8/3 磁赤	
1227	94	SK34	020624	中国陶器	刀江系瓶	16c 前	11.6	5.3	—	—	12.0	鉄胎	鉄胎	2.5Y6/1 黄灰	7.5Y8/3 磁赤	
1228	10c	SK34	020624	肥前陶器	染付丸瓶	16c 前	8.3	5.0	—	—	8.3	透明胎、1筋蓋物	透明胎、1筋蓋物、1筋付、下平蓋物	2.5Y8/3 灰白	5Y8/3 灰白	5Y8/3 灰白に染付
1229	94	SK34-6	020708	中国青磁器	青花丸瓶	16c 前	7.4	3.4	—	—	7.4	青花	青花、高台塚埋藏物	—	CA-M3-Y4-RE0	
1230	94	SK34 南下堀	020702	肥前磁器	染付小杯	16c 前	7.3	2.5	—	—	—	白磁胎	染付、下平蓋物	9/0	CA-M3-Y4-RE0	
1231	—, 12c	SK34 南下堀	020702	肥前磁器	染付小杯	16c 前	6.4	3.5	2.8	—	6.6	白磁胎	染付、下平蓋物	2.5Y8/1 灰白	CA-M3-Y4-RE0	
1232	94	SK34	020625	肥前磁器	染付小杯	16c 前	6.0	4.1	—	—	6.1	白磁胎	染付、高台塚埋藏物	—	CA-M3-Y4-RE0	
1233	94	SK34	020625	肥前磁器	染付小杯	16c 前	6.6	4.0	—	—	6.7	白磁胎	染付	7.5Y8/1 灰白	CA-M3-Y4-RE0	
1234	—	SK34-6	020701	肥前磁器	白磁小杯	16c 前	7.0	2.9	—	—	—	白磁胎	白磁胎、高台塚埋藏物	5Y8/1 灰白	CA-M3-Y4-RE0	
1235	94	SK34	020625	肥前磁器	白磁小杯	16c 前	6.4	2.1	—	—	—	白磁胎	白磁胎	5Y8/1 灰白	CA-M3-Y4-RE0	
1236	94	SK34	020625	肥前磁器	染付仏具	16c 前	6.6	2.4	—	—	6.7	白磁胎	染付	CA-M3-Y4-RE0	CA-M3-Y4-RE0	
1237	10c	SK34	020621	肥前磁器	染付仏具	16c 前	6.6	2.0	—	—	6.7	白磁胎	染付	9/0	CA-M4-Y4-RE0	
1238	10c	SK34	020621	肥前磁器	白磁小杯	16c 前	7.0	2.1	—	—	—	白磁胎	白磁胎、高台塚埋藏物	5Y8/1 灰白	CA-M3-Y4-RE0	
1239	94	SK34	020625	肥前磁器	白磁小杯	16c 前	7.8	4.2	—	—	—	白磁胎	白磁胎、高台塚埋藏物	5Y8/1 灰白	CA-M3-Y4-RE0	
1240	94	SK34 北下堀	020702	美濃陶器	惣持鉢	16c 前	7.3	—	—	—	—	鉄胎、鉄胎	鉄胎	10Y8/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	
1241	94	SK34 北下堀	020701	肥前磁器	染付紅丸	16c 前	4.4	1.4	—	—	4.4	白磁胎	白磁胎、下平蓋物	9/0	CA-M3-Y4-RE0	
1242	94	SK34-6	020708	肥前磁器	皿	16c 前	13.4	3.6	7.6	13.3	5.4	染付	染付、高台塚埋藏物	7.5Y8/1 灰白	10Y8/1 3.00 皿	
1243	10c	SK34	020624	信楽陶器	輪切皿	16c 前	10.1	2.3	4.8	10.2	鉄胎、鉄胎、片蓋物	鉄胎、鉄胎、片蓋物	2.5Y8/2 灰白	C20-M10-Y20-RE0	7.5Y2/2 オリーブ色	
1244	94	SK34	020625	肥前磁器	惣持皿	17c 後半 16c 前半	—	2.7	—	—	—	染付	染付、高台塚埋藏物	9/0	CA-M3-Y4-RE0	
1245	94	SK34 南下堀	020702	美濃陶器	惣持皿	16c 前	11.7	3.0	7.2	11.8	鉄胎、片蓋物	鉄胎、高台塚埋藏物	5Y8/1 灰白	7.5Y7/1 灰白		
1246	94	SK34	020621	肥前磁器	染付皿	16c 前	6.0	1.6	—	—	7.1	白磁胎	染付	9/0	CA-M3-Y4-RE0	
1247	10c	SK34 北下堀	020702	肥前磁器	染付皿	16c 前	9.3	2.8	—	—	9.4	白磁胎	染付	—	CA-M3-Y4-RE0	
1248	10c	SK34	020621	信・信楽陶器	皿	16c 後半	9.0	4.6	—	—	11.2	鐵胎	鉄胎	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/3 灰白	
1249	94	SK34	020624	美濃陶器	皿	16c 前半	6.4	1.0	—	—	6.4	鐵胎	鉄胎	2.5Y8/2 灰白	2.5Y7/2 灰白	
1250	94	SK34	020626	美濃陶器	皿	16c 前半	3.6	1.7	—	—	—	鐵胎	鉄胎	2.5Y8/1 灰白	7.5Y8/4 灰白	
1251	94	SK34	020624	肥前磁器	染付茶碗	16c 前	10.0	6.3	3.0	7.7	—	白磁胎	染付、高台塚埋藏物	—	CA-M3-Y4-RE0	
1252	94	SK34	020625	肥前磁器	染付茶碗	16c 前	6.7	2.3	—	—	7.4	白磁胎、合わせ物	染付	2.5Y8/2 灰白	CA-M3-Y4-RE0	
1253	94	SK34	020625	肥前磁器	染付合子身	16c 前	—	—	—	—	—	白磁胎	染付、高台塚埋藏物	2.5Y8/2 灰白	CA-M3-Y4-RE0	
1254	94	SK34	020621	美濃陶器	湯物の身	16c 前半	10.0	4.2	—	—	11.0	1筋蓋物、鉄胎	1筋蓋物、鉄胎	2.5Y8/2 灰白	5Y7/2 灰白	
1255	—	SK34-6	020708	土師器	コップ調整皿	16c 前	17.2	3.6	8.4	17.7	コップ	コップ、同転車調整	5Y8/6 黄	5Y8/6 黄		
1256	—	SK34-6	020708	土師器	コップ調整皿	16c 前	17.2	4.1	9.0	17.4	コップ	コップ、同転車調整	5Y8/6 黄	5Y8/6 黄		
1257	—	SK34	020702	土師器	コップ調整皿	16c 前	12.6	2.4	6.0	12.8	コップ	コップ、同転車調整	5Y8/6 黄	5Y8/6 黄		
1258	94	SK34 北下堀	020702	土師器	コップ調整皿	16c 前	11.9	2.3	6.1	12.1	コップ	コップ、同転車調整	5Y8/6 黄	5Y8/6 黄		
1259	94	SK34	020625	土師器	コップ調整皿	16c 前	11.8	2.4	5.0	12.0	コップ	コップ、同転車調整	7.5Y8/6 黄	7.5Y8/6 黄		
1260	94	SK34-6	020708	土師器	コップ調整皿	16c 前	11.0	2.4	5.0	11.2	コップ	コップ、同転車調整	7.5Y8/6 黄	7.5Y8/6 黄		

図番	品名	目付	所在地	種類	時期	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	内径	外径	出土(層位)	備考	
1261	SK04-6-1	020709	土師原	ロウハ調整部		11.0	2.3	5.3	第112	コナデ	コナデ、同坑6層切取		
1262	SK04-6-1	020709	土師原	ロウハ調整部		10.6	2.3	5.5	10.8	コナデ	コナデ、同坑6層切取		
1263	SK04-6-1	020625	土師原	ロウハ調整部		10.8	2.2	5.4	11.0	コナデ、ナール付	コナデ、同坑6層切取		
1264	SK04-6-1	020709	土師原	ロウハ調整部		第10.0	2.4	5.0	10.0	コナデ	コナデ、同坑6層切取		
1265	SK04-6-1	020625	土師原	ロウハ調整部		10.2	2.1	5.4	10.4	コナデ	コナデ、同坑6層切取		
1266	SK04-6-1	020625	土師原	ロウハ調整部		第 9.8	2.0	5.2	第 10.0	コナデ	コナデ、同坑6層切取		
1267	SK04-6-1	020625	土師原	ロウハ調整部		第 9.8	2.1	5.7	第 10.0	コナデ、ナール付	コナデ、同坑6層切取		
1268	SK04-6-1	020625	土師原	ロウハ調整部		第 9.8	1.7	第 4.8	第 5.0	コナデ	コナデ、同坑6層切取		
1269	SK04-6-1	020628	土師原	ロウハ調整部		第 8.5	1.6	5.2	第 8.8	調整不明	コナデ、同坑6層切取		
1270	SK04-6-1	020702	土師原	ロウハ調整部		第 8.6	2.2	第 5.0	第 8.8	コナデ	コナデ、同坑6層切取		
1271	SK04-6-1	020621	土師原	ロウハ調整部		第 8.0	1.6	第 5.0	第 8.2	コナデ、指首付	コナデ、同坑6層切取の「指首」		
1272	SK04-6-1	020625	土師原	ロウハ調整部		6.2	1.2	3.0	6.4	コナデ	コナデ、同坑6層切取		
1273	SK04-6-1	020625	土師原	ロウハ調整部		6.2	1.2	3.8	6.4	コナデ、鍍金	コナデ、同坑6層切取、ナール付		
1274	SK04-6-1	020621	土師原	ロウハ調整部		第 6.2	1.2	4.0	第 6.4	コナデ	コナデ、同坑6層切取、ナール付		
1275	106-9d	SK04-6-1	020624	土師原	古ロウハ調整部	第 11.6	2.2	第 7.0	第 11.8	内径成形	調整不明	5Y81 灰白	
1276	106-9d	SK04-6-1	020702	土師原	不明(組?)	第 19.0	径 2.4			調整不明	調整不明	10Y80/2 灰白	
1277	106-9d	SK04-6-1	020628	土師原	片欠	186 径	7.4	10.8	7.2	9.2	調整不明	調整不明	2.5Y82/2 灰白
1278	106-9d	SK04-6-1	020621	土師原	結核	第 28.0	径 5.5		第 28.2	底いぼけ、わだちこぼれ、指首付	コナデ、指首付	7.5Y85/4 灰白	
1279	106-9d	SK04-6-1	020625	土師原	片鉄	径 1.3	径 1.3			ナデ	コナデ、未調整	2.5Y71/1 灰白	
1280	106-9d	SK04-6-1	020702	土師原	鋼	径 8 小	径 2.6	6.9		調整不明	調整不明	5Y82/2 灰白	
1281	106-9d	SK04-6-1	020628	土師原	灰土小	径 6.07 小	4.2	5.5	3.8	6.4	調整不明	調整不明	5Y81 灰白
1282	106-9d	SK04-6-1	020625	土師原	灰土小	径 5.06 小	径 8.0	径 2.9			調整不明	調整不明	10Y87/2 灰白
1283	106-9d	SK04-6-1	020624	土師原	鋼	径 2 小					調整不明	調整不明	2.5Y82/2 灰白
1284	106-9d	SK04-6-1	020702	土師原	鋼	径 1 小					調整不明	調整不明	5Y81 灰白
1285	106-9d	SK04-6-1	020702	土師原	鋼	径 5 小	径 16.4	径 5.2			調整不明	調整不明	2.5Y82/2 灰白
1286	106-9d	SK04-6-1	020628	土師原	鋼	径 4 小	径 18	径 11.0			調整不明	調整不明	2.5Y82/2 灰白
1287	106-9d	SK04-6-1	020624	土師原	鋼	径 19.2	径 7.7		第 19.6	調整不明	調整不明	2.5Y81/1 灰白	
1288	106-9d	SK04-6-1	020709	土師原	鋼	径 8 小	径 9.2	径 8.7			調整不明	調整不明	2.5Y82/2 灰白
1289	106-9d	SK04-6-1	020702	土師原	鋼	径 5 小	径 5.8	径 9.8			調整不明	調整不明	10Y83/2 灰白
1290	106-9d	SK04-6-1	020702	土師原	鋼	径 5 小	径 37.8	径 8.9			調整不明	調整不明	5Y84/4 灰白
1291	106-9d	SK04-6-1	020702	土師原	鋼	径 8 小	径 37.2	径 9.3			調整不明	調整不明	2.5Y82/2 灰白
1292	106-9d	SK04-6-1	020624	土師原	鋼	径 7 小	径 38.6	径 11.4			調整不明	調整不明	2.5Y73 灰白
1293	106-9d	SK04-6-1	020709	土師原	鋼	径 5 小	径 46.6	径 16.6			調整不明	調整不明	5Y84/4 灰白
1294	106-9d	SK04-6-1	020625	土師原	鋼	径 1.4	径 0.5	厚 0.4			調整不明	調整不明	
1295	106-9d	SK04-6-1	020625	土師原	鋼	径 2.0	径 1.8	厚 0.3			調整不明	調整不明	
1296	11b-111	SK01-B	020809	丸鏡	径 6 小	第 11.8	径 5.6		第 12.0	調整不明	調整不明	2.5Y81/1 灰白	
1297	11b-111	SK01-B	020808	丸鏡	径 5.4 小	第 9.8	径 5.2		第 10.0	調整不明	調整不明	10Y87/1 灰白	
1298	11b-111	SK01-B	020809	丸鏡	径 5.0 小	径 7.4	径 3.0			調整不明	調整不明	10Y83/2 灰白	
1299	11b-111	SK01-B	020809	丸鏡	径 5 小	第 10.6	径 8.9	第 5.8	第 11.2	調整不明	調整不明	2.5Y82/2 灰白	
1300	11b-111	SK01-B	020809	丸鏡	径 5.4 小	径 9.8	径 5.4			調整不明	調整不明	2.5Y83/2 灰白	
1301	11b-111	SK01-B	020807	丸鏡	径 5.2 小	第 12.4	径 6.3		第 12.6	調整不明	調整不明	10Y81/1 灰白	
1302	11b-111	SK01-B	020808	丸鏡	径 5 小	径 5.8	径 6.0			調整不明	調整不明	2.5Y82/2 灰白	
1303	11b-111	SK01-B	020807	丸鏡	径 5 小	第 10.4	径 5.2		第 10.6	調整不明	調整不明	2.5Y72/2 灰白	
1304	11b-111	SK01-B	020808	丸鏡	径 5 小	第 10.2	径 5.1		第 10.4	調整不明	調整不明	2.5Y73 灰白	
1305	11b-111	SK01-B	020809	丸鏡	径 5.4 小	第 10.1	径 6.4	5.3	第 10.4	調整不明	調整不明	2.5Y81/1 灰白	
1306	11b-111	SK01-B	020809	丸鏡	径 5.4 小	径 3.9	径 5.2			調整不明	調整不明	2.5Y82/2 灰白	
1307	11b-111	SK01-B	020808	丸鏡	径 5 小	径 3.7	径 5.2			調整不明	調整不明	5Y82/2 灰白	
1308	11b-111	SK01-B	020809	丸鏡	径 5 小	径 2.3	径 4.4			調整不明	調整不明	2.5Y86/6 灰白	
1309	11b-111	SK01-B	020809	丸鏡	径 3 小	径 2.0	径 5.0			調整不明	調整不明	5Y81 灰白	
1310	11b-111	SK01-B	020808	丸鏡	径 7 不明	径 11	径 4.2			調整不明	調整不明	5Y71 灰白	

名古屋城三の丸遺跡 VII

調査年	期	遺跡番号	日	行	用途・材質	種	種	時	量	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	内面	外面	貯1 (内径)	貯1	備考	
1311	11b	S801 B	020807	肥前陶器	丸瓶					残 3.1	4.2		縦線彫、長彫	縦線彫、長彫、ヘラツクス、下子彫	2.598/1 灰白	C30 M40-Y10-RE		
1312	11b	S801	020807	肥前陶器	筒形土器					量 10.2	残 5.0		長 10.0	長 10.0	灰 10.0	灰 10.0	灰 10.0	灰 10.0
1313	11b	S801	020805	肥前陶器	筒形土器					量 9.8	残 4.5		長 10.0	長 10.0	灰 10.0	灰 10.0	灰 10.0	灰 10.0
1314	11b	S801 B	020807	肥前陶器	丸瓶					量 9.0	残 5.8		長 10.0	長 10.0	灰 10.0	灰 10.0	灰 10.0	灰 10.0
1315	11c	S801	020831	瀬江瓦器類	筒形丸瓶	白土小				量 10.8	6.7	5.8	長 11.2	長 11.2	灰 11.2	灰 11.2	灰 11.2	灰 11.2
1316	11b	S801	020831	肥前陶器	丸瓶					量 12.8	残 5.3		長 13.8	長 13.8	灰 13.8	灰 13.8	灰 13.8	灰 13.8
1317	11g	S801	020814	肥前陶器	丸瓶					量 9.0	残 4.8		長 10.0	長 10.0	灰 10.0	灰 10.0	灰 10.0	灰 10.0
1318	11b, 11c	S801 B	020806	肥前陶器	丸瓶?					量 9.0	6.8	5.1	長 10.0	長 10.0	灰 10.0	灰 10.0	灰 10.0	灰 10.0
1319	11b	S801 B	020807	肥前陶器	筒形丸瓶	17c 土 +18c 灰				量 2.6	残 4.8		長 2.6	長 4.8	灰 4.8	灰 4.8	灰 4.8	灰 4.8
1320	11c	S801	020806	肥前陶器	丸瓶					残 3.4	残 3.4		長 3.4	長 3.4	灰 3.4	灰 3.4	灰 3.4	灰 3.4
1321	11c	S801 ベルト	020802	肥前陶器	丸瓶					量 2.4	残 6.4		長 2.4	長 6.4	灰 6.4	灰 6.4	灰 6.4	灰 6.4
1322	11c	S801 ベルト	020803	肥前陶器	丸瓶					量 3.1	6.2		長 3.1	長 6.2	灰 6.2	灰 6.2	灰 6.2	灰 6.2
1323	11c	S801 B	020807	肥前陶器	丸瓶					量 2.3	5.6		長 2.3	長 5.6	灰 5.6	灰 5.6	灰 5.6	灰 5.6
1324	11b	S801	020831	肥前陶器	丸瓶					量 13.4	残 4.9		長 13.5	長 4.9	灰 4.9	灰 4.9	灰 4.9	灰 4.9
1325	11b	S801	020803	肥前陶器	丸瓶					量 2.2	残 4.8		長 2.2	長 4.8	灰 4.8	灰 4.8	灰 4.8	灰 4.8
1326	11b	S801 B	020807	肥前陶器	筒形丸瓶					量 2.2	4.4		長 2.2	長 4.4	灰 4.4	灰 4.4	灰 4.4	灰 4.4
1327	11b	S801	020803	中国産瓦器類	首細瓶					量 2.5	残 5.2		長 2.5	長 5.2	灰 5.2	灰 5.2	灰 5.2	灰 5.2
1328	11c	S801	020828	中国産瓦器類	首細瓶	17c 土				量 2.6	4.8		長 2.6	長 4.8	灰 4.8	灰 4.8	灰 4.8	灰 4.8
1329	11c	S801 ベルト	020802	肥前陶器	筒形小杯					量 5.4	残 3.1		長 5.5	長 3.1	灰 3.1	灰 3.1	灰 3.1	灰 3.1
1330	11c	S801 ベルト	020803	肥前陶器	筒形小杯					量 7.4	残 3.7		長 7.5	長 3.7	灰 3.7	灰 3.7	灰 3.7	灰 3.7
1331	11b	S801	020831	肥前陶器	筒形小杯					2.9	1.6	1.6	3.1	3.1	灰 3.1	灰 3.1	灰 3.1	灰 3.1
1332	11b	S801 B	020806	肥前陶器	筒形小杯					5.0	3.0	2.2	5.2	5.2	灰 5.2	灰 5.2	灰 5.2	灰 5.2
1333	11c	S801	020803	肥前陶器	小杯					量 2.9	2.4		長 2.9	長 2.4	灰 2.4	灰 2.4	灰 2.4	灰 2.4
1334	11g	S801	020813	肥前陶器	筒形小杯					量 7.4	残 4.7		長 7.6	長 4.7	灰 4.7	灰 4.7	灰 4.7	灰 4.7
1335	11c	S801	020805	肥前陶器	筒形小杯					量 3.0	3.0	3.0	3.0	3.0	灰 3.0	灰 3.0	灰 3.0	灰 3.0
1336	11c	S801	020830	瓦器類	小皿	白土小				量 4.2	4.2		長 4.2	長 4.2	灰 4.2	灰 4.2	灰 4.2	灰 4.2
1337	11c	S801 ベルト	020802	瓦器類	志野丸瓶	白土小				11.3	2.4	0.5	11.5	11.5	灰 11.5	灰 11.5	灰 11.5	灰 11.5
1338	11c	S801	020828	瓦器類	志野丸瓶	白土小				量 11.0	2.1	残 6.8	量 11.8	量 11.8	灰 11.8	灰 11.8	灰 11.8	灰 11.8
1339	11c	S801	020806	瓦器類	志野丸瓶	白土小				量 10.6	2.1	残 6.6	量 11.0	量 11.0	灰 11.0	灰 11.0	灰 11.0	灰 11.0
1340	11b	S801	020803	瓦器類	志野筒形	白土小				量 12.8	3.1	残 7.4	量 13.0	量 13.0	灰 13.0	灰 13.0	灰 13.0	灰 13.0
1341	11c	S801	020807	瓦器類	皿	白土小				量 13.4	2.8	残 6.8	量 13.6	量 13.6	灰 13.6	灰 13.6	灰 13.6	灰 13.6
1342	11b	S801 B	020808	瓦器類	丸瓶	白土小				量 12.0	2.7	残 6.6	量 12.2	量 12.2	灰 12.2	灰 12.2	灰 12.2	灰 12.2
1343	11b	S801 B	020809	瓦器類	皿	白土小				量 11.4	残 2.9		量 11.6	量 11.6	灰 11.6	灰 11.6	灰 11.6	灰 11.6
1344	11b	S801	020804	肥前陶器	平鉢	17c 土 +18c 灰				量 13.8	残 3.3		量 14.0	量 14.0	灰 14.0	灰 14.0	灰 14.0	灰 14.0
1345	11b	S801 B	020807	瓦器類	平鉢	白土小				3.0	量 5.4		量 5.4	量 5.4	灰 5.4	灰 5.4	灰 5.4	灰 5.4
1346	11b	S801	020813	中国産瓦器類	首細瓶					量 2.5	残 6.6		量 2.5	量 6.6	灰 6.6	灰 6.6	灰 6.6	灰 6.6
1347	11b	S801 B	020803	肥前陶器	筒形瓶					量 10.0	残 5.6		量 10.0	量 10.0	灰 10.0	灰 10.0	灰 10.0	灰 10.0
1348	11c	S801 ベルト	020803	肥前陶器	筒形瓶					量 20.6	残 3.5		量 20.8	量 20.8	灰 20.8	灰 20.8	灰 20.8	灰 20.8
1349	11c	S801	020805	瓦器類	筒形鉢	白土小				量 4.4			量 4.4	量 4.4	灰 4.4	灰 4.4	灰 4.4	灰 4.4
1350	11b	S801	020811	瓦器類	鉢	白土小				量 3.1			量 3.1	量 3.1	灰 3.1	灰 3.1	灰 3.1	灰 3.1
1351	11c	S801	020830	瓦器類	筒形筒形	白土小							量 10.0	量 10.0	灰 10.0	灰 10.0	灰 10.0	灰 10.0
1352	11c	S801	020806	瓦器類	筒形筒形	白土小				量 5.7			量 5.7	量 5.7	灰 5.7	灰 5.7	灰 5.7	灰 5.7
1353	11b, 11c	S801 B	020807	瓦器類	筒形鉢	白土小				量 30.6	残 8.1		量 37.0	量 37.0	灰 37.0	灰 37.0	灰 37.0	灰 37.0
1354	11b	S801	020813	瓦器類	筒形鉢	白土小				量 20.6	残 4.1		量 31.3	量 31.3	灰 31.3	灰 31.3	灰 31.3	灰 31.3
1355	11c	S801	020828	瓦器類	筒形鉢	白土小				量 30.6	5.1	量 15.8	量 27.0	量 27.0	灰 27.0	灰 27.0	灰 27.0	灰 27.0
1356	11b	S801 B	020808	瓦器類	平鉢	白土小				量 3.2	残 15.0		量 3.2	量 15.0	灰 15.0	灰 15.0	灰 15.0	灰 15.0

遺物一覧表

図番	品名	目付	所在地	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	重量(g)	内面	外面	取手(内面)	巻1	備考
1357	11b SK01	020001	瀬川河内	土師	192小	径4.1	厚10.6			直石製、直内口、底面平	直石製、直内口、底面平	2.537/2	2.537/2	
1358	11b SK01	020006	美濃河内	土師	192小	径3.2	厚8.4			直石製	直石製、下平蓋付	2.538/2 取白	2.535/6	取黒
1359	11b SK01	020030	美濃河内	香炉	径2.9x4小	径11.2	径6.9	厚8.2	重11.6	鉄胎、下平蓋付	鉄胎、下平蓋付、ヘラケイイテ	10YR8/3	2.536/6	取黒
1360	11b SK01	020087	美濃河内	鉢	7	径44.0	径5.1		重44.5	鉄胎	鉄胎	2.537/2 取白	2.536/2	取オリーブ
1361	11b SK01	020528	瀬川河内	磁鉢	径192小	径29.2	径4.4		重30.6	磁胎、磨目1車	磁胎	10YR8/4	5YR2/1	取黒
1362	12b SK01	020031	美濃河内	磁鉢	径5小	径30.6	径7.4		重31.2	磁胎、磨目1車	磁胎	10YR8/3	5YR3/3	取黒
1363	11b SK01	020066	瀬川河内	磁鉢	径2.9x4小	径5	径5.7			鉄胎	鉄胎	2.531/1 取白	2.533/3	取黒
1364	11b SK01	020068	美濃河内	土師	径5~7小	径27.8	径7.3		重28.3	鉄胎	鉄胎	10YR0/1	5Y6/2	取オリーブ
1365	11b SK01	020068	美濃河内	香籠大皿	17c中	径17	径14.8			青磁胎	青磁胎、高内口縁	5YR1/1 取白	7.5C17/1	取黒
1366	11b SK01	020031	美濃河内	向付	径3.9x4小	径14.2	径3.2	径2	重14.4	鉄胎、直縁	鉄胎、下平蓋付	5YR1/1 取白	7.5J17/2	取白
1367	11b SK01	020067	瀬川河内	佛結座	径4小	径13.4	径4.3		重14.8	鉄胎、5つ+1縁輪	鉄胎	2.538/2 取白	5YR2/1	取黒
1368	11b SK01	020031	瀬川河内	仏土瓶	仏土瓶	径12.4	径5.2			鉄胎	鉄胎	7.5YR6/4	2.5Y 5/4	取黒
1369	11b SK01	020067	瀬川河内	土師	17c	径3.1	径11.4			鉄胎	鉄胎、直縁、5つ+1縁輪	10YR7/3	10YR2/1	取黒
1370	11b SK01	020067	美濃河内	土師	径5~7小	径2.4	径12.0			5つ+1縁輪	うす+1縁輪、ヘラケイイテ	2.537/2 取白	7.5YR3/4	取黒
1371	11g SK01	020814	美濃河内	香	1090~1750	径2.7	径5.8			磁胎、輪底付	鉄胎、下平蓋付	2.537/4 取白	2.536/3	取オリーブ
1372	11b SK01	020030	中込河内	香籠大皿	香籠大皿	径2.0				青花	青花	2.537/2 取白	10Y 7/1	取白
1373	11b SK01	020068	美濃河内	香籠大皿	三島平大皿	19c 径6.7	径3.7			鉄胎、白化粧面	鉄胎、下平蓋付	10YR4/5	7.5Y/3	取オリーブ
1374	11b SK01	020030	中込河内	佛結	7	径2.6	径18.0			磁胎	白磁胎	5YR6/3	7.5YR3/3	取黒
1375	11b SK01	020068	美濃河内	佛結座	小瓶	径1.6	径4.0			白磁胎、片取縁付	白磁胎、片取縁付	10R4/2 取白	10R3/3	取黒
1376	12b SK01	020031	美濃河内	白磁土師	小瓶(7)	径3.0	径3.0		重3.6	白磁胎	白磁胎	取白	GM-MY4	取黒
1377	11b SK01	020031	美濃河内	白磁土師	白磁土師	径19.8	径5.5		重19.8	白磁胎	白磁胎	2.5YR1/1 取白	CG-M4Y6	取黒
1378	11b SK01	020068	美濃河内	香籠大皿	香籠大皿	径22.0	径4.3		重22.2	青磁胎、片取縁付	青磁胎	5YR1/1 取白	10Y7/2	取白
1379	11b SK01	020066	上原	土師	土師	径11.5	径2.4	径6.0	重11.8	コナテ、おすて	コナテ、片取縁付	2.537/2 取白		
1380	11b SK01	020613	上原	土師	土師	径11.0	径2.3	径6.4	重11.2	コナテ	コナテ、片取縁付	10YR7/4	2.536/6	取黒
1381	11g SK01	020617	上原	土師	土師	径15.8	径3.3	径9.3	重14.0	コナテ	コナテ、片取縁付	2.537/6 取白		
1382	11g SK01	020617	上原	土師	土師	径2.8	径8.8			コナテ	コナテ、片取縁付	5YR6/8 取白		
1383	11g SK01	020617	上原	土師	土師	径2.8	径8.6			コナテ	コナテ、片取縁付	5YR6/8 取白		
1384	11g SK01	020617	上原	土師	土師	径2.2	径8.2			コナテ	コナテ、片取縁付	2.537/6 取白		
1385	12b SK01	020613	上原	土師	土師	径3.8				コナテ、ヘラ	コナテ、片取縁付	10YR3/2		
1386	11b SK01	020066	上原	土師	土師	径24.0	径2.3			コナテ、ヘラ	コナテ、片取縁付	5YR6/6 取白		
1387	12b SK01	020613	上原	土師	土師	径5.8	径1.3		重6.1	コナテ	土オケ、コナテ	7.5YR6/6 取白		
1388	11b SK01	020031	上原	土師	土師	径5.6	径2.8			コナテ	コナテ	2.537/6 取白		
1389	11b SK01	020610	上原	土師	土師	径3.7	径4.0			布目	調整不明	5YR7/6 取白		
1390	11b SK01	020067	上原	土師	土師	径4.0	径3.0			布目	調整不明	2.537/6 取白		
1391	11b SK01	020611	上原	土師	土師	径3.5	径5.5		径1.7	磨減平	磨減平	2.535/1 取白		
1392	11b SK01	020030	美濃河内	土師	土師	径17.5	径6.2			コナテ	コナテ	5YR6/6 取白		
1393	11b SK01	020511	美濃河内	土師	土師	径19.6	径6.2			コナテ	コナテ	7.5YR7/6 取白		
1394	11b SK01	020528	美濃河内	土師	土師	径17.0	径9.7			コナテ	コナテ	5YR6/6 取白		
1395	11b SK01	020068	美濃河内	土師	土師	径19.8	径10.0			コナテ	コナテ	10YR8/3 取白		
1396	11b SK01	020030	美濃河内	土師	土師	径18.8	径7.4	径15.8	重20.2	コナテ、スス付	コナテ	5YR4/4	2.537/6 取白	
1397	11b SK01	020068	美濃河内	土師	土師	径7.0				コナテ、スス付	コナテ、磨減	7.5YR7/6 取白		
1398	11b SK01	020603	瀬川河内	土師	土師	径17.0	径11.0			直石製、磨目	直石製	5YR1/1 取白		
1399	11b SK01	020067	美濃河内	土師	土師	径17.0	径11.0			青磁胎	青磁胎	10Y7/1	取黒	
1400	12b SK01	020613	上原	土師	土師	径6.8				鉄胎	磨目、片取	2.538/3 取白	2.536/2	取白
1401	11b SK01	020067	美濃河内	土師	土師	径6.8			重2.5					3枚取
1402	12b SK01	020613	上原	土師	土師	径6.8	径6.8	径1.4						
1403	12b SK01	020613	上原	土師	土師	径5.0	径1.3	径1.2						
1404	12b SK01	020613	上原	土師	土師	径3.8	径1.2	径0.7						
1405	12b SK01	020613	上原	土師	土師	径6.1	径1.9	径1.0						
1406	11b SK01	020030	美濃河内	土師	土師	径5.8	径3.9	径1.4						
1407	12b SK01	020613	上原	土師	土師	径4.2	径6.5	径6.4						
1408	12b SK01	020613	上原	土師	土師	径19.5	径4.1	径2.7						

名古屋城三の丸遺跡 VII

調査号	アノフ	遺跡番号	日付	所在地・材質	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	内径	外径	厚さ(mm)	備考
1409	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	板		長 18.0	幅 3.0	厚 3.2				鍍銀、ノミ痕
1410		SK01 H 下層		本物品	板		長 18.0	幅 3.2	厚 3.3				鍍銀、ノミ痕
1411		SK01 H 下層		本物品	板		長 17.3	幅 4.1	厚 2.7				鍍銀、ノミ痕
1412	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	板		長 17.1	幅 4.0	厚 3.7				鍍銀、ノミ痕
1413	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	板		長 17.2	幅 2.7	厚 2.7				鍍銀、ノミ痕
1414	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	板		長 16.8	幅 2.8	厚 3.5				鍍銀、ノミ痕
1415	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	板		長 16.5	幅 2.7	厚 2.9				鍍銀、ノミ痕
1416	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	板		長 15.3	幅 3.2	厚 2.6				鍍銀、ノミ痕
1417	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	板		長 15.2	幅 3.0	厚 2.6				鍍銀、ノミ痕
1418	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	板		長 14.3	幅 5.7	厚 1.7				鍍銀、ノミ痕
1419		SK01 H 下層		本物品	板		長 13.6	幅 2.5	厚 2.3				鍍銀、ノミ痕
1420		SK01 H 下層		本物品	板		長 12.6	幅 2.2	厚 1.5				鍍銀、ノミ痕
1421	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	板		長 7.6	幅 4.3	厚 1.3				鍍銀、ノミ痕
1422	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	鉋鉋板		長 20.5	幅 3.3	厚 1.0				不明(台コンナワ)
1423	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	鉋鉋板		長 23.2	幅 6.2	厚 1.4				不明(台コンナワ)
1424	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	鉋鉋板		長 24.0	幅 5.7	厚 1.0	側面台カンナ			不明(台コンナワ)
1425		SK01 H 下層		本物品	8割		長 11.8	幅 6.5	厚 1.0				ノミワ
1426	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	8割		長 7.2	幅 6.8	厚 1.5				ノミワ
1427	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	8割		長 5.9	幅 5.0	厚 1.5				ノミワ
1428	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	カンナ割		残長 12.4	残幅 2.9	—				台コンナ
1429	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	カンナ割		残長 11.9	残幅 1.6	—				台コンナ
1430		SK01 H 下層		本物品	建築部材片		長 13.9	幅 6.1	厚 2.7				ノコギリのち台コンナ
1431	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		長 9.4	幅 4.7	厚 4.4				台コンナ
1432	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		残長 12.9	幅 3.5	厚 1.2				ノコギリ
1433	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		長 15.1	幅 2.8	厚 0.7				鍍銀のちサリコンナ
1434		SK01 H 下層		本物品	建築部材片		残長 13.1	幅 3.5	厚 1.1				鍍銀、裏はノコギリ
1435	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		長 11.3	幅 3.5	厚 1.3				鍍銀のち台コンナ
1436	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		長 6.5	幅 4.9	厚 3.2				不明
1437	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		長 9.8	幅 5.0	厚 2.2				骨・鍍銀ノコギリ
1438	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		残長 26.7	幅 3.8	厚 2.3				骨ノコギリ、表面サリギリ跡あり
1439	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		長 18.7	幅 5.8	厚 3.6				ノコギリ、ノミ
1440	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		残長 22.0	幅 2.1	厚 1.9				不明
1441		SK01 H 下層		本物品	建築部材片		長 20.5	幅 3.5	厚 1.1				ノコギリのち台コンナ
1442	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		残長 17.8	幅 3.9	厚 1.6				不明
1443	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		残長 13.3	幅 2.5	厚 3.4				不明(ノコギリワ)
1444	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		残長 26.5	幅 4.3	厚 3.3				不明
1445	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		残長 27.2	幅 3.4	厚 1.7				サズリ、表面鍍銀
1446	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		残長 27.0	幅 3.7	厚 2.1				ノコギリ
1447	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		残長 30.0	幅 5.7	厚 1.3				不明、裏ノコギリ
1448	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		長 32.7	幅 2.7	厚 0.8				表ノコギリ、裏ノコギリ
1449	11h	SK01 H 下層	020807	本物品	建築部材片		長 32.6	幅 3.4	厚 1.3				不明
1450	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		長 34.4	幅 3.7	厚 1.9				ノコギリ
1451	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		長 32.7	幅 4.5	厚 3.3				サズリ
1452	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		長 30.6	幅 4.0	厚 2.5				鍍銀ノコギリ
1453	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		長 45.0	幅 4.8	厚 5.8				ノコギリワ
1454		SK01 H 下層		本物品	建築部材片		長 54.4	幅 3.6	厚 2.5				ノコギリ
1455	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		残長 50.7	幅 3.0	厚 2.6				ノコギリ
1456	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		残長 30.4	幅 4.6	厚 3.4				ノコギリ
1457	11h	SK01 H 下層	020808	本物品	建築部材片		長 24.7	幅 6.7	厚 5.6				ノコギリ

図番	7107	遺物番号	日付	産地・材質	器種	時期	口径(mm)	最大径(mm)	底径(mm)	高さ(mm)	内径	外径	出土(内径)	出土	備考
1458	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 25.2	幅 3.7	厚 2.1						不明(ノコギリ?)
1459	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 25.7	幅 3.1	厚 2.3						不明(鍬頭?)
1460	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 19.4	幅 3.8	厚 1.9						不明(ノコギリ?)
1461	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 18.9	幅 3.0	厚 1.7						不明(ノコギリ?)
1462	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 18.3	幅 4.6	厚 1.1						ケズリ
1463	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 19.0	幅 9.3	厚 1.1						ケズリ
1464	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 26.0	幅 8.0	厚 0.4						ノコギリまたは鍬頭
1465	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 29.3	幅 6.8	厚 0.3						鍬頭
1466	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 35.5	幅 7.1	厚 0.4						鍬頭
1467		SK01 B 下層		本製品	建築部材片		径 20.7	幅 5.8	厚 0.5						鍬頭
1468		SK01 B 下層		本製品	建築部材片		径 15.5	幅 5.9	厚 1.0						鍬頭
1469	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 22.1	幅 5.7	厚 0.6						不明(鍬頭?)
1470	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 24.6	幅 7.0	厚 0.2						不明(鍬頭?)
1471	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 26.3	幅 4.4	厚 0.5						ノコギリ
1472		SK01 B 下層		本製品	建築部材片		径 15.4	幅 9.0	厚 5.2						ノコギリ
1473	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 5.1	幅 4.7	厚 3.2						ノコギリ
1474	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 8.3	幅 5.5	厚 3.7						ノコギリ
1475	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 13.1	幅 9.5	厚 3.4						鍬頭
1476	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 23.2	幅 7.4	厚 6.7						ノコギリ
1477	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 36.5	幅 6.6	厚 0.6						鍬頭
1478	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 37.2	幅 6.2	厚 0.8						ノコギリ、鍬頭
1479	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 32.7	幅 5.2	厚 0.4						ノコギリ
1480	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 30.2	幅 5.9	厚 0.7						鍬頭
1481	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 30.4	幅 11.2	厚 0.4						鉄ノコギリ、鍬頭
1482	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 35.1	幅 8.2	厚 0.4						鍬頭
1483	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 40.7	幅 13.1	厚 0.7						ノコギリ
1484	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 46.5	幅 9.3	厚 1.2						鍬頭、ノコギリ
1485	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 48.8	幅 6.7	厚 0.6						鍬頭
1486	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 12.3	幅 8.3	厚 0.4						鍬頭
1487	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 15.7	幅 6.2	厚 0.6						鍬頭
1488	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 20.3	幅 9.6	厚 0.7						不明(ノコギリ?)
1489	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 22.2	幅 9.8	厚 0.3						ノコギリのちんちん
1490	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 21.9	幅 5.2	厚 0.3						鍬頭
1491	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 28.0	幅 4.5	厚 1.2						表台(ペンダ)、鍬頭
1492	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 23.3	幅 9.7	厚 1.2						不明(ノコギリ?)
1493		SK01 B 下層		本製品	建築部材片		径 21.6	幅 7.8	厚 1.2						不明(ノコギリ?)
1494		SK01 B 下層		本製品	建築部材片		径 17.8	幅 7.9	厚 1.1						不明(ノコギリ?)
1495	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 13.4	幅 5.9	厚 1.7						不明(ノコギリ?)
1496		SK01 B 下層		本製品	建築部材片		径 28.1	幅 8.5	厚 1.8						ノコギリ
1497	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 27.8	幅 11.2	厚 1.6						ノコギリ
1498		SK01 B 下層		本製品	建築部材片		径 30.5	幅 17.0	厚 1.2						ノコギリ
1499	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	建築部材片		径 21.8	幅 5.1	厚 1.2						不明
1500	11b	SK01 B 下層	020008	本製品	不明(他材)		径 8.9	幅 3.3	厚 0.3						ノコギリ
1501	11b	SK01 B 下層	020008	鍬頭製品	鍬		径 4.7	幅 6.7	厚 0.3						—
1502	11b	SK01 B 下層	020008	鍬頭製品	鍬		径 6.4	幅 6.9	厚 0.2						—
1503	12b	SK01	020031	瀬川青	礫石		径 5.1	幅 3.4	厚 1.8						礫石
1504	11b	SK01	020004	瀬川青	礫石		径 5.2	幅 4.5	厚 1.6						礫石
1505	12b	SK01	020031	瀬川青	礫石		径 5.1	幅 4.1	厚 2.9						礫石
1506	11b	SK01	020004	瀬川青	礫石		径 4.6	幅 3.5	厚 0.9						礫石
1507	11b	SK01 B 下層	020008	瀬川青	引(建築部材用)		径 20.3	幅 21.6	厚 8.9						ノコ
1508	11b	SK01 B 下層	020008	瀬川青	引(建築部材用)		径 18.3	幅 18.1	厚 10.1						ノコ

名古屋城三の丸遺跡Ⅶ

調査号	ア/バ	遺跡番号	日付	所在地・材質	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	内面	外面	断面(作部)	備考		
1509	11b	SN01	020800	扇状地西側 下層	扇状地西側 瓦葺	瓦葺	幅18.1	厚10.5		なし					
1510	11b	SN01	020011	扇状地西側 下層	瓦葺	瓦葺	幅40.1	幅30.0	厚8.6		なし				
1511	11b	SN01	020800	扇状地西側 下層	瓦葺	瓦葺	幅14.1	厚10.8		なし					
1512	11b	SN01	020800	扇状地西側 下層	瓦葺	瓦葺	幅20.7	厚9.2		なし					
1513	14f	SN09	020920	扇状地西側	瓦葺	瓦葺	幅25.5	厚11.5		なし					
1514	14e	SN09	020920	扇状地西側	瓦葺	瓦葺	幅22.7	厚10.6		なし					
1515	11b	SN47	020618	扇状地西側	瓦葺	瓦葺	幅24.9	幅18.7	厚15.1	なし					
1516	10c	SN04	020703	扇状地西側	瓦葺	瓦葺	幅20.3	厚7.2		不明					
1517	11d	SN105	020621	肥前堀跡	瓦葺	瓦葺	幅10.4	幅5.6		瓦葺	瓦葺	2.5YR/3 灰白 硬結	10G7/3 硬結		
1518	11d	SN105	020621	肥前堀跡	瓦葺	瓦葺	幅4小 ～幅	幅14.0	幅3.3	厚14.4	瓦葺、ビンゴ3+ 瓦葺	瓦葺、高台内堀跡 跡は3枚あり、内は ヘラケズル、土ホ ン積3ヶ所	2.5Y7/3 灰白 硬結	5Y7/3 灰白 硬結	
1519	SN02 南 東	020019	肥前堀跡	瓦葺	瓦葺	幅10.3	幅5.5	幅4.2	瓦葺	瓦葺	瓦葺	NW 灰白	C20-M10- Y16-B10	表見	
1520	SN02 南 東	020020	肥前堀跡	瓦葺	瓦葺	幅10.6	幅4.5	幅10.7	瓦葺	瓦葺	瓦葺	NW 灰白	C16-M6- Y10-B10	表見	
1521	SN02 北 東	020621	肥前堀跡	瓦葺	瓦葺	幅10.4	幅3.6	幅10.6	瓦葺	瓦葺	瓦葺	灰白	C16-M4 Y16-B10		
1522	—	SN02 南 東	020623	肥前堀跡	瓦葺	瓦葺	幅3.5	幅4.4	幅4.4	瓦葺	瓦葺	瓦葺	CO-M0-Y4- B14	CO-M0-Y4- B14	
1523	—	SN02 南 東	020620	肥前堀跡	瓦葺	瓦葺	幅8.6	幅2.4	幅8.8	瓦葺	瓦葺	瓦葺	灰白	C16-M6- Y16-B10	
1524	9c, 9e, 9f	SN02 北 東	020818	堀ノ瓦葺跡	瓦葺	幅10e2 小	幅3.5	幅4.8	幅4.8	瓦葺	瓦葺	瓦葺	10YR/3 灰白 硬結	2.5Y4/4 オリーブ 硬結	
1525	—	SN02 西 南	020624	肥前堀跡	瓦葺	幅11.6	幅5.4	幅11.8	瓦葺(透中)	瓦葺	瓦葺	10YR/3 灰白 硬結	10YR/3 灰白 硬結	堀ノ瓦葺で4 ない	
1526	—	SN02 西 南	020625	堀ノ瓦葺跡	瓦葺	幅50e6 小	幅2.5	幅4.8	幅4.8	瓦葺	瓦葺	瓦葺	2.5Y7/3 灰白 硬結	堀ノ瓦葺で4 ない	
1527	—	SN02 西 南	020628	肥前堀跡	瓦葺	幅7.0	幅4.2	幅3.7	瓦葺	瓦葺	瓦葺	2.5YR/3 灰白 硬結	10YR/2 灰白 硬結	堀ノ瓦葺で4 ない	
1528	—	SN02 北 東	020625	肥前堀跡	瓦葺	幅13.4	幅2.0	幅13.8	瓦葺	瓦葺	瓦葺	灰白	C12-M9- Y16-B10		
1529	SN02 北 東	020626	堀ノ瓦葺跡	瓦葺	幅1小 ～幅	幅14.3	幅3.2	幅7.6	瓦葺	瓦葺	瓦葺	2.5YR/2 灰白 硬結	2.5Y7/2 灰白 硬結		
1530	9c	SN02 北 東	020621	堀ノ瓦葺跡	瓦葺	幅1～ 幅2小	幅1.4	幅8.2	幅8.2	瓦葺	瓦葺	瓦葺	2.5YR/2 灰白 硬結	2.5YR/2 灰白 硬結	
1531	—	SN02 南 西	020624	中田御膳所 築基	瓦葺	幅1 ～幅2小	幅4.1			瓦葺	瓦葺	瓦葺	CO-M0-Y4- B14	CO-M0-Y4- B14	
1532	9a	SN02 北 東	020621	瓦葺跡	瓦葺	幅70e6 小	幅21.8	幅3.9	幅11.8	瓦葺	瓦葺	瓦葺	2.5YR/3 灰白 硬結	2.5Y7/2 灰白 硬結	
1533	9a	SN02 北 東	020621	瓦葺跡	瓦葺	幅1 ～幅2小	幅3.8	幅16.8	幅16.8	瓦葺	瓦葺	瓦葺	5Y7/3 灰白 硬結	5Y7/3 灰白 硬結	
1534	—	SN02 南 西	020624	瓦葺跡	瓦葺	幅30e4 小	幅5.5			瓦葺	瓦葺	瓦葺	5YR/2 灰白	5Y7/1 灰白	
1535	9c	SN02 南 西	020818	堀ノ瓦葺跡	瓦葺	幅1 ～幅2小	幅3.3			瓦葺	瓦葺	瓦葺	2.5YR/2 灰白 硬結	2.5Y7/3 灰白 硬結	
1536	SN02 北 東	020621	瓦葺跡	瓦葺	幅10e2 小	幅40.8	幅5.2	幅42.0	瓦葺	瓦葺	瓦葺	2.5YR/2 灰白 硬結	2.5YR/3 灰白 硬結		
1537	—	SN02 北 東	020621	瓦葺跡	瓦葺	幅6小 ～幅	幅36.6	幅5.2	幅37.2	瓦葺	瓦葺	瓦葺	2.5Y7/2 灰白 硬結	2.5YR/3 灰白 硬結	
1538	—	SN02 南 東	020013	空堀跡	瓦葺	幅30.0	幅6.5	幅40.6	瓦葺	瓦葺	瓦葺	2.5YR/6 灰白 硬結	5YR/3 灰白 硬結	5YR/3 灰白 硬結	
1539	—	SN02	020913	空堀跡	瓦葺	幅17.2	幅6.6	幅10.6	幅18.6	瓦葺	瓦葺	瓦葺	2.5Y7/2 灰白 硬結	5YR/3 灰白 硬結	
1540	SN02 南 東	020621	土塀跡	瓦葺	幅3.6	幅5.4	幅5.4	幅5.4	瓦葺	瓦葺	瓦葺	調整不明	5YR/4 灰白 硬結		
1541	8b	SN02 西 南	0208	瓦葺跡	瓦葺	幅8.8	幅2.7	幅10.0	瓦葺	瓦葺	瓦葺	10YR/3 灰白 硬結	5YR/4 灰白 硬結	堀ノ瓦葺で4 ない	
1542	—	SN02 南 東	020619	堀ノ瓦葺跡	瓦葺	幅7	幅4.4			瓦葺	瓦葺	瓦葺	10YR/3 灰白 硬結	10R/3 灰白 硬結	
1543	9a	SN02 北 東	020621	空堀跡	瓦葺	幅12.4				瓦葺	瓦葺	瓦葺	5YR/6 灰白 硬結	5YR/6 灰白 硬結	
1544	SN02 南 東	020624	空堀跡	瓦葺	幅7.0					瓦葺	瓦葺	瓦葺	2.5YR/3 灰白 硬結	2.5YR/3 灰白 硬結	
1545	—	SN02 北 東	020615	瓦葺跡	瓦葺	幅40.5	幅12.1	幅12.3		瓦葺	瓦葺	瓦葺		堀ノ瓦葺跡	
1546	—	SN02 北 東	020615	瓦葺跡	瓦葺	幅20.4	幅10.1	幅9.8		瓦葺	瓦葺	瓦葺		堀ノ瓦葺跡	
1547	—	SN02 北 東	020625	瓦葺跡	瓦葺	幅32.5	幅9.3	幅7.4		瓦葺	瓦葺	瓦葺		堀ノ瓦葺跡	
1548	9c	SN02 北 東	020621	瓦葺跡	瓦葺	幅43.1	幅9.3	幅2.0		瓦葺	瓦葺	瓦葺	不明(1層?)		
1549	8b	SN02 北 東	020621	瓦葺跡	瓦葺	幅23.3	幅3.9	幅0.9		瓦葺	瓦葺	瓦葺	不明(ワズリ?)		
1550	—	SN02	020813	砂引	瓦葺	幅14.7	幅7.1	幅14.5		瓦葺	瓦葺	瓦葺	築造ナシ		
1551	13a	SN01	020520	肥前堀跡	瓦葺	幅10.2	幅5.1	幅4.2	幅10.4	瓦葺	瓦葺	瓦葺	CO-M0-Y4- B14	有田	
1552	13a	SN01	020531	肥前堀跡	瓦葺	幅10.9	幅5.6	幅4.5	幅11.0	瓦葺	瓦葺	瓦葺	5YR/7 灰白 硬結	CO-M6- Y10-B10	
1553	12b	SN01	020604	土塀跡	瓦葺	幅11.0	幅6.2	幅4.4	幅11.1	瓦葺	瓦葺	瓦葺	CO-M0-Y6- B14	表見	
1554	13a	SN01	020521	肥前堀跡	瓦葺	幅4.1	幅3.3	幅3.3		瓦葺	瓦葺	瓦葺	NW 灰白	C12-M4 Y10-B10	
1555	13a	SN01	020522	中堀跡	瓦葺	幅3.0	幅4.4	幅4.4		瓦葺	瓦葺	瓦葺	C16-M4 Y16-B10	表見	

図番	7107	遺跡番号	日付	所在地・材質	器種	時期	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	内径	外径	胎土(内径)	胎土(外径)	備考
1356	13a	SD01 遺跡中	020033	動物陶器	鉄輪丸瓶		長 9.6	径 4.2	厚 0.7			鉄輪	2.5X7.2 灰白	2.5X7.1 灰白 裏戸瓦蓋ではない
1357	13b	SD01 遺跡中	020030	動物陶器	丸形片断小丸	器 3a-d 小	径 2.5	厚 5.7				鉄輪に片断返し	2.5X7.2 灰白	2.5X7.3 灰白
1358	13c	SD01 遺跡中	020024	中国産陶器	青瓦小杯		長 6.2	径 3.3	厚 2.4	厚 6.4	青瓦	9 白	OS-M04Y4	CT6-M4Y4-110
1359	13a	SD01 遺跡中	020021	当地中陶器	丸瓶		長 13.0	径 5.9	厚 14.0			鉄輪	10YR6/4 10Y7/2 灰白	裏戸瓦蓋ではない
1360	13a	SD01 遺跡中	020027	動物陶器	丸瓶	17c	長 15.0	径 3.1				鉄輪	10YR6/4 7.5YR/3 灰白	裏戸瓦蓋ではない
1361	13b	SD01 遺跡中	020029	当地中陶器	丸瓶		長 13.0	径 3.9	厚 13.2			鉄輪	2.5YR/0 灰白	10Y6/2 オリーブ灰白
1362	12a	SD01 遺跡中	020024	動物陶器	小瓶		長 6.8	径 3.1				鉄輪	5Y6/1 灰	裏戸瓦蓋ではない
1363	13b	SD01 遺跡中	020029	動物陶器	丸瓶	器 5a-f 小	径 3.7	厚 5.1				鉄輪、やや軟質	5Y6/1 灰白	5Y7/2 灰白
1364	13b	SD01 遺跡中	020722	動物陶器	平瓶	17c	長 13.2	径 3.1	4.2	厚 13.4	灰石胎	灰石胎、裏面黄褐色、ねじり肌、ヘラケズリ	10YR7/4 に近い灰	7.5YR/7 白
1365	13b	SD01 遺跡中	020718	動物陶器	丸瓶	器 5a-f 小	長 14.4	径 3.8		厚 14.6	灰石胎	灰石胎、下手磨削	5Y6/1 灰白	5Y7/2 灰白
1366	13a	SD01 遺跡中	020021	動物陶器	丸瓶	器 5a-f 小	長 12.2	径 6.9		厚 12.4	灰石胎	灰石胎、下手磨削	2.5YR/0 灰白	5Y7/2 灰白
1367	13c	SD01 遺跡中	020023	動物陶器	壺片断		長 14.4	径 3.7	厚 8.6	厚 14.6	染付	染付、高台面露彫	9 白	OS-M04Y4 灰
1368	13a	SD01 遺跡中	020029	動物陶器	壺片断		径 1.7				染付	染付、高台面露彫	9 白	OS-M04Y4 灰
1369	13b	SD01 遺跡中	020722	動物陶器	土師丸瓶	器 5 小	16.8	径 2.2	6.4	11.6	灰石胎、ビンケツ	灰石胎、同様にヘラケズリ、トナリケツ	2.5YR/2 灰白	5Y7/2 灰白
1370	13b	SD01 遺跡中	020722	動物陶器	土師丸瓶	器 3a-d 小	径 2.1	厚 8.4			灰石胎	灰石胎、裏面黄褐色	5Y7/1 灰白	7.5Y/1 灰
1371	13a	SD01 遺跡中	020031	動物陶器	壺片断	器 1 小	径 3.0				鉄輪	鉄輪	2.5YR/2 灰白	10R2/2 赤褐色
1372	12d	SD01 遺跡中	020024	動物陶器	丸瓶	器 5 小	長 15.4	径 2.9		厚 16.4	鉄輪、下手磨削	鉄輪	2.5YR/2 灰白	2.5Y/3 灰
1373	13b	SD01 遺跡中	020029	動物陶器	青磁瓶	器 2 小	19.0	径 3.1		厚 19.8	青磁輪	青磁輪	5Y6/1 灰白	2.5G/7/1 粉オリーブ灰
1374	12f	SD01 遺跡中	020603	1 土師	ロウロ調整器		長 16.3	径 3.3	厚 8.6	厚 16.6	ココナデ、洗	ココナデ、同様に切削	5YR6/6 灰	
1375	12e	SD01 遺跡中	020024	1 土師	ロウロ調整器		長 12.6	径 2.5	厚 6.0	厚 13.0	ココナデ	ココナデ、同様に切削	5YR6/6 灰	
1376	13a	SD01 遺跡中	020027	1 土師	ロウロ調整器		長 11.8	径 2.3	厚 6.0	厚 12.0	ココナデ	ココナデ、同様に切削	5YR6/6 灰	
1377	13a	SD01 遺跡中	020027	1 土師	ロウロ調整器		径 1.6	径 5.4			ココナデ	ココナデ、同様に切削	5YR6/6 灰	
1378	13b	SD01 遺跡中	020029	1 土師	ロウロ調整器		径 2.2	厚 8.4			ココナデ、スス付	ココナデ、同様に切削、スス付、灰黄濁	10YR4/2	
1379	13b	SD01 遺跡中	020029	灰泥陶器	有蓋壺	器 5a-f 小	径 4.1	径 6.2			鉄輪、うすい鉄輪	鉄輪、うすい鉄輪、下手磨削、ヘラケズリ	10YR7/3 に近い灰	2.5Y/3 オリーブ灰
1380	13b	SD01 遺跡中	020030	灰泥陶器	丸瓶		径 3.3				ココナデ	ココナデ	10YR7/3 に近い灰	5YR6/6 灰
1381	13a	SD01 遺跡中	020027	灰泥陶器	内注筒	器 7a-b 小	長 14.2	径 3.6			鉄輪、口縁部スス付	鉄輪、口縁部スス付	10YR7/3 に近い灰	7.5YR/2 灰
1382	13a	SD01 遺跡中	020024	動物陶器	鉄輪		径 4.3				白土胎、同様に切削、磨	白土胎、同様に切削、磨	10YR7/3 に近い灰	2.5Y/2 灰白
1383	12e	SD01 遺跡中	020029	動物陶器	笠形鉢	器 3a-d 小	径 2.0	厚 13.6			灰石胎に鉄輪跡あり	灰石胎、裏面黄褐色、同様にヘラケズリ	2.5YR/3 灰白	2.5Y/3 灰
1384	13c	SD01 遺跡中	020027	動物陶器	大甕		径 2.5	厚 9.0			白土胎、ヘラケ	磨削、ヘラケズリ	2.5Y/4 1 灰	7.5YR/4 灰
1385	13b	SD01 遺跡中	020722	動物陶器	水甕		長 12.6	径 9.0		厚 12.6	鉄輪	口縁部磨削、灰土胎の成り上げ、胎は露筋、同様にヘラケズリ、磨削	10YR7/4 に近い灰	10YR/3 灰
1386	13a	SD01 遺跡中	020031	動物陶器	圓鉢	器 5 小	径 6.1	16.5~17.0			ヘラケズリ磨削、同様に切削	ヘラケズリ磨削、同様に切削	10YR7/3 に近い灰	2.5YR/1 赤褐色
1387	13c	SD01 遺跡中	020037	動物陶器	圓鉢	古物?	径 2.9				鉄輪	10YR/3 洗	10R2/1 赤褐色	
1388	13b	SD01 遺跡中	020029	1 土師	缶	缶	径 3.4				ココナデ、ヘラケズリ	ココナデ、胎オリーブ、スス付	7.5YR/4 灰	
1389	13a	SD01 遺跡中	020027	1 土師	浅鉢	18c 中	径 9.1	径 5.6	7.0	厚 11.1	瓶ナデ	赤付、瓶ナデニワグサ、胎オリーブ	7.5YR6/6 灰	
1390	13b	SD01 遺跡中	020024	瓦葺	瓦葺		径 9.0				表面風化する	表面風化する、灰	7.5YR/6 灰	
1391	13c	SD01 遺跡中	020017	瓦葺	瓦葺		径 9.0				表面風化する	表面風化する、灰	7.5YR/6 灰	
1392	12f	SD01 遺跡中	020024	動物陶器	赤土甕		径 1.21	径 19.2			胎オリーブのちヨロイ	胎オリーブ、ヘラケズリ	10YR7/3 に近い灰	7.5YR/3 灰
1393	13a	SD01 遺跡中	020027	動物陶器	灰泥甕		56.2	63.2	19.6	64.8	胎オリーブ、ナデ	胎オリーブ、自然熟、洗	7.5YR/6 灰	やや軟質土
1394	13c	SD01 遺跡中	020024	鉄製品	釘		長 9.0	幅 3.0	厚 2.3					
1395	13c	SD01 遺跡中	020027	鉄製品	釘		長 6.8	幅 2.1	厚 1.4					
1396	12e	SD01 遺跡中	020024	鉄製品	釘		径 6.1	幅 1.6	厚 1.0					
1397	13a	SD01 遺跡中	020031	鉄製品	釘		長 6.1	幅 1.4	厚 1.6					
1398	12f	SD01 遺跡中	020029	鉄製品	釘		径 5.6	幅 1.7	厚 1.4					
1399	12e	SD01 遺跡中	020024	鉄製品	釘		径 5.6	幅 1.6	厚 1.2					
1400	13a	SD01 遺跡中	020027	鉄製品	釘		径 5.3	幅 2.1	厚 0.8					
1401	12e	SD01 遺跡中	020024	鉄製品	釘		径 5.5	幅 1.8	厚 0.9					

名古屋城三の丸遺跡Ⅶ

調査号	7107	遺跡番号	日付	所在地・材質	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	内径	外径	貯り(内容)	備考	
1002	12b	SK01 溝線中	020524	鉄製品	釘		残長4.0	幅1.4	厚1.1					
1003	13a	SK01 溝線中	020530	鉄製品	釘		残長5.1	幅2.0	厚1.9					
1004	12f	SK01 1線	020524	鉄製品	釘		長5.0	幅1.0	厚0.7					
1005	13a	SK01 2線	020531	鉄製品	釘		長4.8	幅2.0	厚0.9					
1006	13a	SK01 溝線中	020531	鉄製品	釘		長4.6	幅2.5	厚1.0					
1007	13a	SK01 2線	020529	鉄製品	釘		残長4.7	幅1.8	厚1.2					
1008	12f	SK01 2線	020529	鉄製品	釘		残長4.8	幅1.2	厚0.9					
1009	13a	SK01 2線	020529	鉄製品	釘		残長4.2	幅2.0	厚1.3					
1010	13a	SK01 1線	020527	鉄製品	釘		長4.2	幅0.9	厚0.9					
1011	12e	SK01 溝線中	020524	鉄製品	釘		残長3.7	幅0.9	厚0.7					
1012	13a	SK01 2線	020531	鉄製品	釘		残長3.8	幅0.7	厚0.6					
1013	12e	SK01 溝線中	020524	鉄製品	釘		長3.7	幅0.3	厚0.7					
1014	12f	SK01 1線	020524	鉄製品	釘		長3.8	幅1.5	厚0.9					
1015	12e	SK01 溝線中	020524	鉄製品	釘		残長3.7	幅1.7	厚1.7					
1016	12e	SK01 溝線中	020524	鉄製品	釘		残長3.6	幅1.1	厚1.0					
1017	12e	SK01 溝線中	020524	鉄製品	釘		長3.6	幅1.2	厚0.7					
1018	12e	SK01 溝線中	020524	鉄製品	釘		残長3.3	幅1.0	厚1.0					
1019	12f	SK01 2線	020529	鉄製品	釘		残長3.3	幅1.5	厚1.2					
1020	13a	SK01 2線	020529	鉄製品	釘		長3.4	幅1.2	厚0.7					
1021	13a	SK01 1線	020527	鉄製品	釘		残長3.0	幅1.3	厚0.8					
1022	13a	SK01 2線	020529	鉄製品	釘		長3.4	幅1.1	厚0.9					
1023	13a	SK01 溝線中	020531	鉄製品	釘		長3.6	幅0.8	厚0.6					
1024	12e	SK01 溝線中	020524	鉄製品	釘		長2.8	幅1.4	厚0.9					
1025	12f	SK01 2線	020529	鉄製品	釘		長2.7	幅1.8	厚0.8					
1026	13a	SK01 溝線中	020531	鉄製品	釘		長2.2	幅1.5	厚0.7					
1027	12c	SK01 2線	020527	鉄製品	釘		長2.0	幅0.3	厚0.3					
1028	13a	SK01 溝線中	020531	鉄製品	釘		長2.2	幅1.1	厚0.6					
1029	13a	SK01 1線	020524	銅製品	釘頭					2.5				
1030	13b	SK01 溝線中	020529	銅灰石	碇石		長6.1	幅3.8	厚1.2					
1031	12a	SK03	020606	肥前磁器	染付丸瓶		高10.0	5.6	3.9	径10.2	白磁胎	染付、高台磁器蓋付	9/白	C12-M4-Y4-BE0
1032	12a	SK03	020603	肥前磁器	染付丸瓶		高11.0	径4.5		径11.1	白磁胎	染付	9/白	C9-M4-Y6-BE0
1033	11a	SK03	020604	北濃磁器	石州瓶	登66号	高11.0	径1.9		径11.2	鉄胎	鉄胎、すくい筋、成り残さ藍	10Y08/3	7.5Y03/3
1034	12a	SK03	020606	土師器	ワケ口調物		12.2	5.6	6.0	12.4	コナナデ	コナナデ、わずかにケル付着、同型水取付	5Y06/9	青
1035	12a	SK03	020604	土師器	ワケ口調物		高10.6	2.2	径5.0	径10.8	コナナデ	ミダテ、同型へラケタテ付、高脚型身片あり	5Y06/9	青
1036	12a	SK03	020606	土師器	ワケ口調物		高8.4	1.6	径4.4	径8.6	コナナデ、ケル付着	コナナデ、ケル付着、同型水取付	10Y08/9	明
1037	12a	SK03	020604	土師器	焼成磁器	17c 焼成	8.4	2.4	径9.0	径9.1	青目	ミダテ?	7.5Y06/4	こぶい
1038	12a	SK03	020603	土師器	焼成磁器	17c 焼成	8.2	2.1	径8.4	径8.1	青目	ミダテ?	7.5Y06/9	青
1039	11a	SK03	020604	土師器	焼成磁器	大	径1.7			径1.7	ナデ?	ナデ?	5Y06/9	青
1040	12a	SK03	020604	鉄製品	釘		残長5.0	幅1.6	厚1.2					
1041	12a	SK03	020604	鉄製品	釘		長4.6	幅1.2	厚0.8					
1042	12a	SK03	020604	鉄製品	釘		長4.4	幅2.1	厚1.2					
1043	12a	SK03	020604	鉄製品	釘		残長4.1	幅1.3	厚0.9					
1044	12a	SK03	020604	鉄製品	釘		残長3.8	幅2.0	厚0.8					
1045	12a	SK03	020604	鉄製品	釘		長3.4	幅0.8	厚0.6					
1046	12a	SK03	020604	鉄製品	釘		残長3.2	幅1.3	厚0.8					
1047	11a	SK03	020604	鉄製品	銅頭(板口)		残長2.6	幅1.6	厚0.7					
1048	8a	SK23	020905	平形磁器	染付丸瓶		高10.0	4.5	径3.2	径10.2	白磁胎	染付、高台磁器蓋付	9/白	C12-M4-Y6-BE0
1049	8a	SK23	020911	肥前磁器	染付丸瓶		高10.0	4.8	3.5	径10.2	白磁胎	染付、高台磁器蓋付	9/白	C12-M4-Y4-BE0
1050	8a	SK23	020911	肥前磁器	染付丸瓶		高9.5	4.9	3.4	径9.7	白磁胎	染付、高台磁器蓋付	9/白	C9-M0-Y4-BE0
1051	9a	SK23	020911	肥前磁器	染付丸瓶		高10.0	4.7	径3.6	径10.2	白磁胎	染付、高台磁器蓋付	9/白	C10-M0-Y6-BE0
1052	9a	SK23	020911	肥前磁器	染付丸瓶		高10.9	5.6	径4.9	径11.1	白磁胎、輪売付	染付、高台磁器蓋付	9/白	C10-M4-Y16-BE4
1053	9a	SK23	020911	肥前磁器	染付丸瓶		高10.1	4.9	径4.1	径10.2	白磁胎	染付、高台磁器蓋付	9/白	C9-M0-Y4-BE4

図番	7107	遺物番号	目付	所在地	種類	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	内径	外径	出土(内径)	出土(外径)	備考	
1054	8a	SK23	020005	肥後国	委付丸鏡		長 10.0	径 4.3		重 16.2	白銅製	委付	厚 0.1	厚 0.1	CS-MO-Y4 Y0-0L0	
1055	8a	SK23	020019	肥後国	委付丸鏡		長 10.0	径 3.9		重 16.2	白銅製	委付	厚 0.1	厚 0.1	C10-M4 Y0-0L0	
1056	8a	SK23	020005	肥後国	委付丸鏡		長 9.7	径 3.6		重 9.9	白銅製	委付	厚 0.1	厚 0.1	C10-M4 Y0-0L0	
1057	8a	SK23	020011	肥後国	委付丸鏡		長 9.7	径 3.1		重 9.8	白銅製	委付	厚 0.1	厚 0.1	C10-M0 Y0-0L0	
1058	8a	SK23	020011	肥後国	委付丸鏡		長 2.4	径 4.2			白銅製	委付、高台銅鑄物	厚 0.1	厚 0.1	C10-M4 Y0-0L0	
1059	8a	SK23	020011	肥後国	委付丸鏡		長 9.0	径 2.7		重 9.1	白銅製	委付	厚 0.1	厚 0.1	CS-M4 Y10-0L0	
1060	8a	SK23	020011	肥後国	委付丸鏡		長 3.0	径 3.0			白銅製、輪光付	委付	2.5X1	厚 0.1	C12-M4 Y0-0L0	
1061	8a	SK23	020011	肥後国	委付遺物		長 8.1	径 3.2		重 8.3	白銅製、口縁銅鑄物	委付	厚 0.1	厚 0.1	CS-M6 Y0-0L0	
1062	11a	SK23	020007	美濃国	鏡	古墳小 前期	長 12.0	径 3.6	4.8	重 12.2	鉄製、鏡、竹打	鉄鏡、下平蓋部、 銅板(ヘラクス)	厚 0.1	厚 0.1	T3-V7/2 Y0-0L0	
1063	9a	SK23	020011	瀬川河内	丸鏡	古7世紀 前期	長 3.1	径 3.1			鉄製	鉄鏡、下平蓋部	2.5V7/2	厚 0.1	T3-V9/2 Y0-0L0	
1064	10a	SK23	020019	美濃国	古墳小 前期	長 9.4	径 3.6	重 9.8	鉄製	鉄鏡、丸鏡、銅板	文鏡、下平蓋部	2.5V7/2	厚 0.1	T3-V7/2 Y0-0L0		
1065	8a	SK23	020005	信濃国	丸鏡		長 1.9	径 3.0		重 3.0	鉄製	鉄鏡、下平蓋部	2.5V7/1	厚 0.1	T3-V7/2 Y0-0L0	
1066	11a	SK23	020028	肥後国	鏡		長 1.3	径 5.2			真石製	真石鏡、下平蓋部	5V8/2	厚 0.1	T3-V7/3 Y0-0L0	
1067	9a	SK23	020011	中野河内	平鏡		長 14.0	径 3.7		重 14.2	鉄製	鉄鏡	2.5V6/2	厚 0.1	10YR 4/4 Y0-0L0	
1068	8a	SK23	020005	筑後国	委付丸鏡		長 13.8	径 3.0		重 14.0	鉄製	鉄鏡	2.5V7/3	厚 0.1	T3-V7/3 Y0-0L0	
1069	11a	SK23	020007	中野河内	丸鏡		長 3.3	径 3.3			真石製	真石鏡、銅板、下平蓋部	2.5V7/1	厚 0.1	50Y7/1 Y0-0L0	
1070	9a	SK23	020011	肥後国	委付鏡口		長 9.2	径 5.0	5.0	重 9.3	白銅製	委付、高台銅鑄物	厚 0.1	厚 0.1	C10-M0 Y4-0L4	
1071	9a	SK23	020011	肥後国	委付鏡		長 9.7	径 2.0	4.7	重 9.8	委付	委付、高台銅鑄物	厚 0.1	厚 0.1	CS-M4 Y0-0L0	
1072	8a	SK23	020005	肥後国	委付鏡		長 7.2	径 1.6	重 4.2	重 7.3	委付	白銅製、高台銅鑄物	厚 0.1	厚 0.1	CS-M0-Y4 Y0-0L0	
1073	9a	SK23	020019	肥後国	委付鏡		長 15.2	径 4.3	重 9.0	重 15.3	委付	委付、高台銅鑄物	厚 0.1	厚 0.1	CS-M0-Y4 Y0-0L0	
1074	8a	SK23	020011	肥後国	委付鏡		長 17.4	径 2.9	重 11.0	重 17.7	委付、13H	委付、高台銅鑄物	厚 0.1	厚 0.1	C12-M4 Y12-0L4	
1075	9a	SK23	020011	肥後国	委付鏡		長 10.9	径 1.8		重 11.1	委付	委付	厚 0.1	厚 0.1	C10-M4 Y0-0L0	
1076	9a	SK23	020011	肥後国	委付鏡		長 1.0	径 4.8		重 4.8	委付	委付、高台銅鑄物	5V9/1	厚 0.1	10YR7/4 Y0-0L0	
1077	8a	SK23	020011	1線部	銅口調整 部		長 12.2	径 2.9	重 7.0	重 12.4	コナチテ	コナチテ、銅板 切欠	5V8/6	厚 0.1	5V8/6	
1078	8a	SK23	020011	1線部	銅口調整 部		長 11.0	径 2.2	重 5.2	重 11.2	コナチテ	コナチテ、銅板 切欠	5V8/6	厚 0.1	5V8/6	
1079	10a	SK23	020019	1線部	銅口調整 部		長 16.4	径 2.2	重 6.2	重 16.6	コナチテ	コナチテ、銅板 切欠	5V8/6	厚 0.1	5V8/6	
1080	8a	SK23	020005	1線部	銅口調整 部		長 11.0	径 2.2	重 11.0	重 11.0	コナチテ	コナチテ	5V8/6	厚 0.1	5V8/6	
1081	8a	SK23	020011	肥後国	委付鏡		長 9.8	径 2.7		重 9.9	白銅製	委付	厚 0.1	厚 0.1	CS-M0-Y4 Y0-0L4	
1082	8a	SK23	020005	美濃国	遺物の鏡	古7世紀 前期	長 9.6	径 1.6		重 9.8	鐵製	鉄鏡(銅板)	2.5V8/2	厚 0.1	5V7/2	
1083	11a	SK23	020006	丹波国	丹波銅板表	10c 前期	長 11.4	径 1.4		重 13.0	鐵製	鉄鏡(銅板)に銅板	5V6/4	厚 0.1	5V6/4 オリーブ表	
1084	8a	SK23	020011	瀬川河内	鏡		長 6.2	径 4.2	最大径 1.9	最大径 1.4			厚 0.1	厚 0.1	2.5V7/3 Y0-0L0	
1085	11a	SK23	020028	美濃国	鏡	17c	長 5.3	径 5.3		重 6.6	うすい鉄製	鉄鏡	2.5V8/2	厚 0.1	T3-V7/2 Y0-0L0	
1086	11a	SK23	020006	瀬川河内	鏡	古8小 前期	長 3.3	径 3.3			鉄製	鉄鏡	10YR7/3	厚 0.1	T3-V9/3/2 Y0-0L0	
1087	10a	SK23	020024	瀬川河内	鏡	古8小 前期	長 5.2	径 5.2			うすい鉄製	うすい鉄鏡	10YR3/3	厚 0.1	T3-V9/3/4 Y0-0L0	
1088	11a	SK23	020006	瀬川河内	鏡	古8小 前期	長 4.9	径 4.9			鉄製	鉄鏡	10YR3/3	厚 0.1	T3-V9/3/4 Y0-0L0	
1089	10a	SK23	020024	美濃国	鏡	10c 前期	長 7.3	径 7.3			コナチテ、白銅製	コナチテ、白銅製	10YR6/2	厚 0.1	T3-V9/3/2 Y0-0L0	
1090	11a	SK23	020007	美濃国	丸鏡	古7世紀 前期	長 29.0	径 2.3			鉄製	鉄鏡	10YR6/2	厚 0.1	10YR6/2 Y0-0L0	
1091	10a	SK23	020024	1線部	鏡	古8小 前期	長 6.7	径 1.8		重 7.2	布引	調整不明、コナチテ	5V8/6	厚 0.1	5V8/6	
1092	8a	SK23	020012	1線部	鏡	古8小 前期	長 5.0	径 5.5			コナチテ、布引	コナチテ、ヘラクス	7.5V8/6	厚 0.1	7.5V8/6	
1093	10c	SK202	020730	瀬川河内	丸鏡	古7世紀 前期	長 4.3	径 4.0			鉄製	鉄鏡、高台銅鑄物	5V8/1	厚 0.1	5V8/2	
1094	11c	SK202	020734	1線部	銅口調整 部		長 2.0	径 6.4			コナチテ	コナチテ、銅板 切欠	10YR7/4	厚 0.1	T3-V9/3/2 Y0-0L0	
1095	11c	SK202	020733	瀬川河内	鏡	古3小 前期	長 4.0	径 4.0			鉄製	鉄鏡	10R4/2	厚 0.1	10R4/2	
1096	10c	SK202	020730	瀬川河内	鏡	古3小 前期	長 4.5	径 4.5			鉄製	鉄鏡、曹長	10R3/1	厚 0.1	10R3/1 Y0-0L0	
1097	10c	SK202	020730	中河内	曹長	古花丸 前期	長 2.6	径 2.6			曹長	曹長	2.5V7/1	厚 0.1	CS-M0-Y6 Y0-0L0	
1098	10c	SK202	020730	美濃国	曹長	古7世紀 前期	長 26.0	径 8.0		重 39.0	真石製、銅板に銅板	真石鏡、ヘラクス	2.5V8/2	厚 0.1	T3-V9/3 Y0-0L0	
1099	11c	SK202	020733	美濃国	曹長	古1小 前期	長 39.8	径 3.8		重 41.3	真石製、銅板に銅板	真石鏡、ヘラクス	5V8/1	厚 0.1	5V8/1 Y0-0L0	
1700	13d	SK37	020610	瀬川河内	古銅鏡丸 鏡	古1小 前期	長 12.0	径 2.8	7.4	重 12.2	真石製、銅板、ベツ	真石鏡、高台銅鑄物	2.5V8/2	厚 0.1	5V8/2	
1701	13d	SK37	020613	瀬川河内	大鏡	最大径 2.4	最大径 2.1	最大径 0.9			鉄製	鉄鏡	C30-M30- Y20-0L0			鏡跡?

名古屋城三の丸遺跡 VII

調査年	期	遺跡番号	日付	所在地・材質	器種	時期	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	内径	外径	厚さ	備考
1702	12b	S803	—	陶片/陶器	蓋	弥生中	12.0	3.3	12.0	—	—	—	瓦輪跡品
1703	12c	S803	—	陶片/陶器	鉢形	弥生中	12.8	16.3	14.2	16.7	—	—	瓦輪跡品
1704	12c	S803	管	—	石	—	長9.7	幅7.4	厚2.8	—	—	—	—
1705	12b	S803	管	管内	—	石	長9.8	幅6.5	厚3.8	—	—	—	—
1706	11g	S847	020614	肥前磁器	御茶碗	—	長9.4	幅6.8	厚5.2	長9.8	—	—	瓦輪
1707	11h	S847	020614	瓦器陶器	御茶碗	—	長9.8	幅5.4	—	—	—	—	瓦輪跡品
1708	11h	S847	020614	瓦器陶器	灰皿	17c	長11.4	幅5.3	—	—	—	—	瓦輪跡品
1709	6d	S825	020613	肥前磁器	白磁紅土	—	長4.6	幅1.4	厚1.6	長4.6	—	—	瓦輪
1710	11g	S863	020614	肥前磁器	染付丸瓶	—	長11.0	幅4.2	—	長11.2	—	—	白磁輪
1711	11g	S863	020614	肥前磁器	染付丸瓶	—	長10.1	幅4.0	—	—	—	—	白磁輪
1712	11g	S863	020614	肥前磁器	丸瓶	—	長1.8	幅5.0	—	—	—	—	瓦輪、1日1ヶ
1713	11g	S863	020619	肥前磁器	丸瓶	—	長9.6	幅6.5	厚5.2	長9.9	—	—	瓦輪
1714	11g	S863	020618	肥前磁器	染付小杯	—	長2.4	幅2.6	—	—	—	—	白磁輪
1715	11g	S863	020614	肥前磁器	白磁小杯	—	長1.9	幅2.8	—	—	—	—	白磁輪
1716	11g	S863	020619	肥前磁器	吹流丸瓶	—	長1.6	幅5.5	—	—	—	—	透明輪付品??
1717	11g	S863	020614	陶片/陶器	蓋	弥生中	12.8	3.0	7.4	13.0	—	—	長石輪に緑磁輪跡品
1718	10c	S800	020614	肥前磁器	吹流丸瓶	—	長2.3	幅4.6	—	—	—	—	瓦輪付品
1719	10d	S800	020703	肥前磁器	染付丸瓶	—	長8.6	幅3.4	—	長8.7	—	—	白磁輪上総付
1720	10d	S800	020617	陶片/陶器	丸瓶?	弥生中	長1.7	幅9.4	—	—	—	—	蓋付
1721	10d	S800	020617	瓦器陶器	瓶?	弥生中	長1.7	幅7.4	—	—	—	—	瓦輪、下手蓋付、 内径<ヘラズリ
1722	10d	S800	020617	陶片/陶器	磁器	弥生中	長1.9	—	—	—	—	—	磁輪
1723	10c	S800	020614	土師器	地味赤漆器	—	長7.7	幅1.7	—	長8.4	—	—	布目付
1724	10d	S800	020617	土師器	コテコテ調整器	—	長17.5	幅4.2	厚9.9	—	—	—	コテコテ、一部 フル付首
1725	10d	S800	020617	土師器	コテコテ調整器	—	長13.8	幅3.2	厚7.0	長14.0	—	—	コテコテ、同転 磁気
1726	10d	S800	020617	土師器	コテコテ調整器	—	11.6~ 12.3	2.5~2.9	0.0~6.1	11.8~ 12.6	—	—	コテコテ、同転 磁気、 大きく平凸
1727	10d	S800	020617	土師器	コテコテ調整器	—	長12.0	幅2.4	厚5.8	長12.0	—	—	コテコテ、同転 磁気
1728	10d	S800	020617	土師器	コテコテ調整器	—	長1.6	幅7.2	—	—	—	—	コテコテ
1729	10d	S800	020703	土師器	コテコテ調整器	—	長1.4	幅7.8	—	—	—	—	コテコテ
1730	10d	S800	020617	土師器	コテコテ調整器	—	長1.0	幅6.4	—	—	—	—	コテコテ
1731	10d	S800	020617	陶片/陶器	磁器	—	長16.8	幅7.7	—	長17.8	—	—	蓋付、コテコテ
1732	10d	S800	020617	瓦器陶器	赤漆器	—	長11.3	—	—	—	—	—	コテコテ、指オ ケ
1733	10d	S800	020703	瓦器陶器	赤漆器	—	長9.4	幅12.5	—	—	—	—	コテコテ、指オ ケ、自然 磁気
1734	10d	S800	020617	瓦器陶器	赤漆器	—	長51.4	幅52.4	—	長58.4	—	—	コテコテ、指オ ケ、自然 磁気
1735	10d	S800	020617	瓦器陶器	赤漆器	—	48.2	幅16.8	—	長62.6	—	—	コテコテ、指オ ケ、自然 磁気
1736	8e	S875	020618	陶片/陶器	赤漆器	弥生中	長6~ 8.4	幅5.4	—	長7.4	—	—	瓦輪に瓦輪成し、 輪縁部成文
1737	9d	S8100	020621	肥前磁器	白磁小杯	—	長6.8	幅2.7	—	長7.0	—	—	白磁輪
1738	9d	S8100	020621	肥前磁器	白磁鉢	—	長4.4	—	—	—	—	—	白磁輪
1739	9d	S8100	020621	陶片/陶器	磁器	弥生中	長2.5	幅2.5	—	—	—	—	白磁輪
1740	9d	S8100	020624	瓦器陶器	鉢	弥生中	長10.2	幅3.1	厚18.0	—	—	—	長石輪跡品
1741	11d	S8131	020628	肥前磁器	白磁小杯	—	長6.4	幅3.4	—	長6.5	—	—	白磁輪
1742	11d	S8131	020628	肥前磁器	白磁丸瓶	—	長2.9	幅3.2	—	—	—	—	白磁輪、高台 磁器
1743	8e	S8139	020702	陶片/陶器	灰皿	古墳古	長5.2	幅8.5	—	—	—	—	瓦輪、下手蓋付
1744	11d	S8159	020722	陶片/陶器	二輪鉢?	弥生中	長4.5	幅16.0	—	—	—	—	瓦輪、蓋付、ヘ ラズリ
1745	11j	S800	020630	瓦器陶器	石蓋	弥生中	長9.6	幅2.1	厚4.2	長9.8	—	—	瓦輪
1746	11j	S803	020630	土師器	地味赤漆器	—	長5.4	幅6.5	—	長6.0	—	—	コテコテ、布目 付
1747	11j	S803	020630	土師器	赤コテコテ調整器	—	7.0	幅1.1	—	7.3	—	—	コテコテ、一方 コテコテ
1748	11j	S803	020630	土師器	赤コテコテ調整器	—	6.6	幅1.2	—	6.9	—	—	コテコテ、指オ ケ
1749	11e	S011	020616	陶片/陶器	灰皿	弥生中	長10.4	幅14.4	—	—	—	—	瓦輪に瓦輪成し
1750	11e	S011	020619	瓦器陶器	不明	不明	長1.1	—	—	—	—	—	瓦輪成し

図番	品名	目付	所在地	種別	時期	長さ	幅	厚	重量	内面	外面	取手(内面)	取手(外面)	備考	
1751	11c	SD11	020625	陶/陶器	磁器	径2.5					磁胎	磁胎	磁胎	7.5X10/4 にこい-青 100R/1 取手	
1752	11c	SD11	020621	土器	土胎						不明?	割オキエ、ヘラケズリ	7.5X10/4 にこい-青		
1753	12c	SD15	020625	陶/美濃陶器	有明磁	径5.5小							2.5X7/2 取手 同色へラケズリ	7.5X10/3 取手	
1754	12d	SD15	020624	美濃陶器	京原磁	径1.2小							長石胎胎筋に細線 敷し	2.5X10/3 取手 2.5X7/3 取手	
1755	11c	SD13	020626	美濃陶器	染付同形器	径5.5小							白磁胎	染付 2.5X7/1 取手 C10M03Y6 取手	
1756	11c	SD13	020626	美濃陶器	丸瓶	径3.0x4小							灰胎、印花文	灰胎、下手蓋部、 同色へラケズリ	2.5X7/3 取手 3/5x6 オリーブ
1757	11b	SD13	020621	陶/美濃陶器	反り皿	径2.5小							長石胎、ビン灰 1号焼	2.5X5/1 取手 2.5X7/1 取手	
1758	12b	SD13	020621	美濃陶器	不明	径6.5小							磁胎	灰胎	2.5X7/3 取手 2.5X7/3 取手
1759	11b	SD13	020625	瓦器	石瓦	径9.5							いよしごが、焼 成面残存	10YR6/4 10YR4/1 取手	
1760	11c	SD13	020626	美濃陶器	花瓶	径7.0小							灰胎に灰胎敷し	灰胎、下手蓋部 10YR6/1 7.5X10/3 取手	
1761	11b	SD13	020625	古物	鏡	径12							ココナデ	自然磁 5Y4/1 取手 5/4x3 割オリーブ	
1762	12b	SD13	020621	古物	洋刀								鋼製	灰胎	10YR6/3 取手
1763	11b	SD13	020621	鉄製品	釘	径6.7							鋼製	鋼製	7.5X10/3 取手
1764	11b	SD13	020621	鉄製品	釘	径4.8							鋼製	鋼製	5/4x3 取手
1765	11b	SD13	020621	鉄製品	釘	径3.0							鋼製	鋼製	5/4x3 取手
1766	16T	SK16	020606	陶/美濃陶器	白元土系陶	径2.5小							長石胎	長石胎	2.5X7/1 取手 10YR/1 取手
1767	16T	SK16	020606	陶/美濃陶器	黒鉄胎黒青 陶	径1.5小							長石胎	長石胎	2.5X7/2 取手 5/8x1 取手
1768	17L	SK30	020612	美濃陶器	灰胎丸瓶	径1.5小							灰胎	灰胎	2.5X7/1 取手 5YR4/4 にこい-青
1769	16L	SK30	020612	美濃陶器	灰胎丸瓶	径1.5小							灰胎	灰胎	2.5X7/1 取手 5YR4/4 にこい-青
1770	12F	SK50	020612	陶/美濃陶器	丸瓶	径1.4小							灰胎	灰胎	2.5X7/2 取手 5YR/3 オリーブ取手
1771	13e	SK38	020610	陶/美濃陶器	丸瓶	径2.5小							灰胎	灰胎	2.5X7/2 取手 5YR/3 オリーブ取手
1772	13c	SK38	020612	美濃陶器	鉄胎丸瓶	径1.5小							灰胎	灰胎	10YR6/3 取手 5YR/2 取手
1773	13a	SK38	020610	陶/美濃陶器	丸瓶	径3.0x4小							灰胎	灰胎	5YR/1 取手 5YR/2 取手
1774	12F	SK50	020613	美濃陶器	染付丸瓶	径2.9							染付	染付	5YR/1 取手 C10M40 Y4-0L4
1775	13a	焼出B	020724	陶/美濃陶器	志野丸瓶	径2.5小							長石胎、鉄灰 1号焼	長石胎、鉄灰 1号焼	2.5X8/2 取手 5YR/2 取手
1776	11e	焼出B	020718	陶/美濃陶器	志野丸瓶	径3.5小							長石胎、ビン灰 1号焼	長石胎、ビン灰 1号焼	5YR/1 取手 2.5X8/2 取手
1777	13a	SK36	020610	陶/美濃陶器	志野丸瓶	径2.5小							長石胎、同色へ ラケズリ、ト ナシ焼	長石胎、同色へ ラケズリ、ト ナシ焼	10YR5/1 取手 2.5X6/1 取手
1778	12b	餅ト ロンチ	020309	陶/陶器	志野輪出皿	径1.5小							長石胎に鉄胎の けけけけ	長石胎に鉄胎の けけけけ	2.5X7/2 取手 5YR/1 取手
1779	12b	餅ト ロンチ	020602	美濃陶器	反り皿	径4.5小							灰胎、下手蓋部、 同色へラケズリ、 トナシ焼	2.5X8/2 取手 7.5X7/2 取手	
1780	12L	SK19	020706	美濃陶器	反り皿	径4.5小							灰胎、下手ヘ ラケズリ	灰胎、下手ヘ ラケズリ	5YR/2 取手 5YR/2 取手
1781	16L	焼出B	020419	瓦器	土瓦	径12.6							ココナデ、コナ デ、土	ココナデ、コナ デ、土	10YR6/1 取手
1782	13a	焼出B	020724	土器	赤ロウ調 製器	径4.0							方向ナデ	手の平磁	10YR7/4 にこい-青
1783	12e	SK38	020611	土器	赤ロウ調 製器	径4.0							割オキエのみ	割オキエのみ	10YR7/4 にこい-青
1784	13a	焼出B	020724	土器	赤ロウ調 製器	径10.4							ココナデ、志 志	ココナデ、同色 焼	10YR6/3 にこい-青
1785	13a	餅ト ロンチ	020513	土器	赤ロウ調 製器	径11.8							ココナデ	ココナデ、同色 焼	10YR6/3 取手
1786	13a	焼出B	020724	土器	赤ロウ調 製器	径11.6							ココナデ、ス ス	ココナデ、同色 焼	10YR7/4 にこい-青
1787	13a	焼出B	020724	土器	赤ロウ調 製器	径10.2							ココナデ、志 志	ココナデ、同色 焼	7.5X10/3 取手
1788	16L	SK19	020423	美濃陶器	染付皿	径9.8							ココナデ	染付、高台磁 胎	C9M40Y6 取手
1789	13b	餅ト ロンチ	020309	美濃陶器	染付丸瓶	径13.4							白磁胎、高台磁 胎	白磁胎、高台磁 胎	C10M4 Y12-0L4 取手
1790	16L	SK19	020423	美濃陶器	染付同形器	径6.6							白磁胎	染付	C12M4 Y6-0L4 取手
1791	11d	焼出B	020722	美濃陶器	茶入	径4.0							灰胎、下手蓋部	灰胎、下手蓋部	7.5X10/4 にこい-青 10YR7/3 取手
1792	13e	SK38	020612	美濃陶器	土瓶?	径9.4							灰胎? 灰胎、 下手ヘラケズリ	灰胎? 灰胎、 下手ヘラケズリ	10YR6/3 取手
1793	16L	SK19	020412	美濃陶器	合子身	径8.8							白磁胎磁胎、同 焼	白磁胎磁胎、同 焼	2.5X8/2 取手 5YR/3 取手
1794	12a	餅ト ロンチ	020514	美濃陶器	磁胎	径7.6							灰胎	灰胎、下手蓋部、 同色へラケズリ	10YR6/2 取手
1795	9c	瓦器	020627	美濃陶器	黒赤陶器	径9.6							焼物	焼物	7.5X10/3 にこい-青 10Y7/1 取手
1796	16L	SK19	020423	陶/美濃陶器	陶鉢	径7.4							自然磁、コナ デ、ヘ ラケズリ、長石 胎	自然磁、コナ デ、ヘ ラケズリ	10YR7/4 にこい-青 10YR5/6 取手

名古屋城三の丸遺跡Ⅶ

図名等	ア/ア	遺跡番号	日付	所在地・材質	種類	時期	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	厚さ(m)	内面	外面	貯水(内面)	船1	備考
1797	13a	SK38	020012	常陸陶器	磁器	豊中 小	径 9.5			厚 8.4	遺跡、直列直線	鉄釘、直列直線	10YR6/3 浅黄	5YR3/4 磁赤	船1/5YR3/2 磁赤
1798	13a	船田B	020072	常陸陶器	赤土	17(1)5 貯水小 船1	径 1.0	2.9	4.2	遺跡、同列-長方形	瓦葺物、同列-長方形 瓦葺物におよぶ	2.5Y7/3 灰白	5Y7/2 灰白	5YR3/2 磁赤	
1799	11g	SK07	020013	瀬川常陸陶器	陶器	加工 大	径 大目 2.8	径 小目 2.6	径 大目 1.4	遺跡	遺跡	10R3/1			
1800	11a	船田B	020073	常陸陶器	3角磁器	径 1.0x2 小目	径 31.0		径 8.9	遺 31.6	瓦葺物跡(北)に隣接 瓦葺上	瓦葺物、ヘラズ ズリ	10YR7/2	2.5Y7/2 磁赤	
1801	12a	西トレン チ	020051	常陸陶器	磁器	径 2 小	径 33.0		径 6.5	遺 33.4	遺跡、欄干1段 位 2.2cm 1本 2 方向	遺跡、一部瓦葺	2.5YR6/3 灰白	2.5Y7/2 磁赤	
1802	12a	SK38	020010	瀬川陶器	磁器	径 1 小			径 2.7		遺跡	10YR7/3	5YR3/1 灰黒		
1803	8b	船田1	020022	瓦葺	木葺?		径 21.4	径 5.0	厚 20.0	遺 21.8	コナナデ、ハケ	コナナデ、浅黄 土色、横目打?	10YR5/2 灰黄		
1804	11e	SK25	020006	常陸陶器	赤土丸葺?				径 3.1		コナナデ	コナナデ	10YR7/3		
1805	11a	SK18	020007	常陸陶器	瓦葺				径 9.8		コナナデ、新オ ズリ	コナナデ	7.5YR6/3 灰		
1806	13d	SK38	020012	常陸陶器	4角	17c	径 21.2	径 5.6	厚 14.0	遺 22.0	コナナデ	コナナデ、うすく 白瓦敷、ヘラズ ズリ	2.5YR6/3 灰	2.5YR3/3 磁赤	
1807	12a	SK28	020010	常陸中陶器	赤				径 5.2	遺 10.2	コナナデ、遺跡	コナナデ、遺跡、 横目調整等付	2.5Y7/3 灰灰	2.5YR4/3 磁赤	
1808	13d	SK30	020010	1層葺	半葺の瓦葺				径 3.7		コナナデ、調整等 付、土瓦葺	コナナデ、調整等 付	10YR4/2 灰黄		
1809	11e	SK18	020005	土製品	現代(瓦)				径 2.8				10YR8/3 浅黄		
1810	11a	SK30	020021	1層葺	地盤面葺 A		径 8.0	径 1.3		遺 8.2	コナナデ	コナナデ	5YR7/6 橙		
1811	13a	西トレン チ	020050	1層葺	地盤面葺 A		径 7.4	径 1.4		遺 7.8	コナナデ	コナナデ	5YR7/6 橙		
1812	12b	SK05	020003	1層葺	地盤面葺 A		径 5.8	径 4.0			コナナデ、春日 目	コナナデ、ヘラ ズリ	5YR6/6 橙		
1813	11e	SK24	020007	1層葺	地盤面葺 A		径 4.8	径 4.7			新オズリの瓦 葺、春日目	新オズリ、ヘラ ズリ	5YR7/6 橙		
1814		直上	020418	1層葺	地盤面葺 A		径 5.8	径 6.3			コナナデ、春日 目	コナナデ、ヘラ ズリ	5YR7/6 橙		
1815	11e	SK24	020006	瓦	初九瓦 M01 形式		径 17.0	厚 2.0			コビキ瓦、春日 目	ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M01-1	
1816	11b	SK01 B	020007	瓦	初九瓦 M01 形式		径 18.2	厚 2.3			コビキ瓦、春日 目	ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M01-2	
1817	11b	SK01 B	020009	瓦	初九瓦 M01 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M01-3		
1818	11b	SK01 B	020009	瓦	初九瓦 M01 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M01-4		
1819	—	北東	020014	瓦	初九瓦 M01 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M01-6		
1820	10a	SK00	020014	瓦	初九瓦 M01 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M01-9		
1821	11b	SK01	020007	瓦	初九瓦 M01 形式		径 34.7	幅 17.9	厚 1.9		コビキ瓦、春日 目	ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M01-5	
1822	10b	SK47	020006	瓦	初九瓦 M01 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	—		
1823	10b	SK04	020026	瓦	初九瓦 M01 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M10- Y10-BL60	M01-7		
1824	—	S102 東 西	020029	瓦	初九瓦 M01 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M01-8		
1825	11b	SK01 B	—	瓦	初九瓦 M01 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M04-1		
1826	10a	SK04	020026	瓦	初九瓦 M04 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M04-2		
1827	—	吉土 掘 中	030418	瓦	初九瓦 M05 形式		径 14.6	幅 19.6	厚 2.3		コビキ瓦、春日 目	ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M05-1	
1828	10a	SK05	020010	瓦	初九瓦 M02 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M02-1		
1829	11b	SK01 B	020005	瓦	初九瓦 M02 形式		径 14.6	幅 20.1	厚 2.3		コビキ瓦、春日 目	ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M02-2	
1830	13d	船田B	020724	瓦	初九瓦 M02 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M02-3		
1831	10a	S102 東 西	020024	瓦	初九瓦 M02 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M10- Y10-BL60	M02-4		
1832	6a	S102 東 西	020021	瓦	初九瓦 M02 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M10- Y10-BL60	M02-5		
1833	—	S105 東 西	020028	瓦	初九瓦 M03 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M02-6		
1834	10f	SK16	020006	瓦	初九瓦 M02 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M02-7		
1835	9a	SK23	020011	瓦	初九瓦 M02 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M02-8		
1836	—	直上	020423	瓦	初九瓦 M03 形式						ヘラズズリ、土 色	C0-M0-Y10- BL60	M02-1		
1837	10a	SK04 東 下層	020702	瓦	初九瓦 M03 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M02-2		
1838	13c	SK163	030725、 030729	瓦	初九瓦 M03 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M02-3		
1839	13a	SK224	030729	瓦	初九瓦 M03 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M02-3		
1840	11a	西トレン チ	020013	瓦	初九瓦 M03 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M20- Y10-BL60	M03-4		
1841	13a	船田B	020724	瓦	初九瓦 M03 形式						ヘラズズリ、土 色	C0-M0-Y10- BL60	M03-1		
1842	9b	T-01	020027	瓦	初九瓦 M10 形式						ヘラズズリ、土 色	C0-M0-Y10- BL60	M10-1		
1843	—	北東	020014	瓦	初九瓦 M10 形式						春日目	ヘラズズリ、土 色	C10-M0-Y10- BL60	M10-2	
1844	9c	T-01	020028	瓦	初九瓦 M10 形式						ヘラズズリ、土 色	C10-M10- Y10-BL60	M10-3		

図番	7107	遺物番号	日付	産地・材質	原 形	時 期	12世紀末	鎌倉初期	寛政初期	長久保末期	内蔵	内蔵	形上(内蔵)	数1	備考
1843	9d	SK94	020625	瓦	軒瓦瓦 M10 形式	—	—	—	—	—	—	ヘラケズリ、1.0 キ	C30 M20 Y20-BL60	—	M10-4
1846	11g	SK01	020617	瓦	軒瓦瓦 M10 形式	—	—	—	—	—	コビキ瓦、毎日	ヘラケズリ、1.0 キ	C20 M10 Y20-BL60	—	M10-5
1847	11h	SK01 B	020607	瓦	軒瓦瓦 M20 形式	—	—	—	—	—	—	ヘラケズリ、1.0 キ	C20 M10 Y20-BL60	—	M20-5
1848	11h	SK47	020614	瓦	軒瓦瓦 M20 形式	—	—	—	—	—	—	ヘラケズリ、1.0 キ	C10-M0 Y10 BL60	—	M20-1
1849	—	SX02 並	020615	瓦	軒瓦瓦 M20 形式	—	—	—	—	—	—	ヘラケズリ、1.0 キ	C30 M20 Y20-BL60	—	M20-3
1850	—	SX02 並	020624	瓦	軒瓦瓦 M20 形式	—	—	—	—	—	—	ヘラケズリ、1.0 キ	C30 M20 Y30-BL60	—	M20-2
1851	11i	SK01 A	020607	瓦	軒瓦瓦 M20 形式	—	—	—	—	—	—	ヘラケズリ、1.0 キ	C30 M20 Y20-BL60	—	M20-4
1852	—	SX02 並	020625	瓦	軒瓦瓦 M30 形式	—	—	—	—	—	—	ヘラケズリ、1.0 キ	C30 M20 Y20-BL60	—	M30-1
1853	—	SX02 並	020628	瓦	軒瓦瓦 M30 形式	—	—	—	—	—	—	ヘラケズリ、1.0 キ	C40 M20 Y30-BL60	—	M30-2
1854	—	内蔵	020607	瓦	軒瓦瓦 M30 形式	—	—	—	—	—	コビキ瓦	ヘラケズリ、1.0 キ	C60 M30 Y30-BL60	—	M30-3
1855	11i	SK01	020530	瓦	軒瓦瓦 M30 形式	—	—	—	—	—	—	—	C20 M10 Y20-BL60	—	M30-4
1856	—	SX02 並	020625	瓦	軒瓦瓦 M00?	—	—	—	—	—	—	—	C30 M20 Y20-BL60	—	—
1857	11a	SK23	020628	瓦	軒瓦瓦 M02 土?	—	—	—	—	—	—	—	C20 M10 Y20-BL60	—	瓦当面ナシ
1858	11h	SK01	020611	瓦	軒瓦瓦 M00?	—	—	—	—	—	—	—	C30 M20 Y20-BL60	—	—
1859	11h	SK01	020531	瓦	軒瓦瓦H01 形式	—	—	—	—	—	—	—	C60 M40 Y40-BL30	—	H01-1
1860	11h	SK01 B	020605	瓦	軒瓦瓦H01 形式	—	—	—	—	—	—	—	C60 M40 Y40-BL30	—	H01-3
1861	11a	棟石1	020522	瓦	軒瓦瓦H01 形式	—	—	—	—	—	—	—	C40 M20 Y20-BL60	—	H01-4
1862	10c	SK00	020614	瓦	軒瓦瓦H01 形式	—	—	—	—	—	—	—	C20 M20 Y20-BL60	—	H01-5
1863	12b	SK01- 6-1	020605	瓦	軒瓦瓦H01 形式	—	—	—	—	—	—	—	C20 M20 Y20-BL60	—	H01-6
1864	11h	SK01 B	020608	瓦	軒瓦瓦H01 形式	—	—	—	—	—	—	—	C20 M10 Y20-BL60	—	H01-7
1865	10b	SX04	020620	瓦	軒瓦瓦H01 形式	—	—	—	—	—	—	—	C20 M20 Y20-BL60	—	H01-8
1866	11h	SK47	020614	瓦	軒瓦瓦H01 形式	—	—	—	—	—	—	—	C60 M40 Y40-BL30	—	H01-9
1867	11h	SK01	020603	瓦	軒瓦瓦H01 形式	—	—	—	—	—	—	—	C10-M10 Y20-BL60	—	H01-10
1868	10c	SK00	020614	瓦	軒瓦瓦H01 形式	—	—	—	—	—	—	—	C20 M20 Y20-BL60	—	H01-11
1869	11i	SK01- 6-1	020605	瓦	軒瓦瓦H01 形式	—	—	—	—	—	—	—	C30 M20 Y20-BL60	—	H01-12
1870	11i	SK01	020610	瓦	軒瓦瓦H02 形式	—	—	—	—	—	—	—	C60 M40 Y40-BL30	—	H02-1
1871	12b	棟石B	020722	瓦	軒瓦瓦H02 形式	—	—	—	—	—	—	—	C40 M20 Y30-BL60	—	H02-2
1872	13f	SK50	020612	瓦	軒瓦瓦H02 形式	—	—	—	—	—	—	—	C40 M20 Y40-BL10	—	H02-4
1873	11h	SK01 B	020607	瓦	軒瓦瓦H02 形式	—	—	—	—	—	—	—	C60 M40 Y40-BL30	—	H02-5
1874	10b	SX04	020523	瓦	軒瓦瓦H02 形式	—	—	—	—	—	—	—	C10-M0 Y10- BL30	—	H02-3
1875	11b	SD13	020621	瓦	軒瓦瓦H02 形式	—	—	—	—	—	—	—	C30 M20 Y30-BL60	—	H02-6
1876	—	SK01	—	瓦	軒瓦瓦H03 形式	—	—	—	—	—	—	—	C40 M20 Y30-BL60	—	—
1877	11i	SK01- 6-1	020605	瓦	軒瓦瓦H02 形式	—	—	—	—	—	—	—	C30 M20 Y30-BL60	—	H02-6
1878	10c	SX04	020627	瓦	軒瓦瓦H03 形式	—	—	—	—	—	—	—	C20 M20 Y30-BL60	—	H03-1
1879	10a	SX05	020701	瓦	軒瓦瓦H03 形式	—	—	—	—	—	—	—	C30 M20 Y30-BL60	—	H03-2
1880	10a	SX05	020702	瓦	軒瓦瓦H03 形式	—	—	—	—	—	—	—	C40 M20 Y30-BL60	—	H03-3
1881	13j	SK12	020604	瓦	軒瓦瓦H04 形式	—	—	—	—	—	—	—	C60 M40 Y40-BL30	—	H04-3
1882	11i	SK01	020528	瓦	軒瓦瓦H04 形式	—	—	—	—	—	—	—	C20 M10 Y20-BL60	—	—
1883	—	SX02 並	020624	瓦	軒瓦瓦H04 形式	—	—	—	—	—	—	—	C30 M20 Y30-BL60	—	—
1884	10a	SX05	020702	瓦	軒瓦瓦H04 形式	—	—	—	—	—	—	—	C40 M20 Y30-BL60	—	H04-1
1885	11h	SK01 B	020608	瓦	軒瓦瓦H05 形式	—	—	—	—	—	—	—	C20 M20 Y30-BL60	—	H05-1
1886	11i	SK01	020528	瓦	軒瓦瓦H05 形式	—	—	—	—	—	—	—	C10-M0 Y0- BL60	—	H05-2
1887	11h	SK01 B	020607	瓦	軒瓦瓦H05 形式	—	—	—	—	—	—	—	C10-M0 Y0- BL60	—	H05-3
1888	—	SX02 並	020626	瓦	軒瓦瓦H06 形式	—	—	—	—	—	—	—	C10-M0 Y0- BL60	—	H06-1
1889	10a	棟石1	020702	瓦	軒瓦瓦H06 形式	—	—	—	—	—	—	—	C30 M20 Y30-BL60	—	H06-2
1890	13c	SD22	020725	瓦	軒瓦瓦H07 形式	—	—	—	—	—	—	—	C10-M0 Y0- BL10	—	—
1891	9d	SX02 並	020623	瓦	軒瓦瓦H08 形式	—	—	—	—	—	—	—	C30 M20 Y20-BL60	—	H08-1
1892	9a	SK23	020611	瓦	軒瓦瓦H09 形式	—	—	—	—	—	—	—	C40 M20 Y20-BL60	—	H09-2
1893	10a	棟石1	020702	瓦	軒瓦瓦H09 形式	—	—	—	—	—	—	—	C30 M20 Y30-BL60	—	H09-3
1894	13e	溝ノ 土?	020607	瓦	軒瓦瓦H09 形式	—	—	—	—	—	—	—	C40 M20 Y30-BL60	—	H09-4

名古屋城三の丸遺跡 VII

調査年	アノマ	遺跡番号	日付	区域・材質	種別	時期	長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	内面	外面	貯水(内面)	貯水(外面)	備考
1895	14a	S305	020703	瓦	軒平瓦1909 形式							CP-M8-Y10- BL30		H09-5
1906	—	S302 瓦 下層	020621	瓦	軒平瓦1909 形式							C10-M10- Y20-BL30		H09-0
1897	11a	S830	020612	瓦	軒平瓦1909 形式							C10-M40- Y40-BL30		H09-7
1908	11b	S801 B	020800	瓦	軒平瓦H11 形式							C10-M20- Y20-BL60		H11-1
1899	11b	S801 B	020807	瓦	軒平瓦H11 形式							C10-M20- Y20-BL60		H11-2
1900	11b	S801	020613	瓦	軒平瓦H11 形式							C10-M10- Y10-BL30		H11-3
1901	—	S302 瓦 敷瓦	020619	瓦	軒平瓦H12 形式							C10-M20- Y20-BL60		H12-1
1902	12a	S003 ベ ルト	020625	瓦	軒平瓦H12 形式							C10-M20- Y20-BL60		H12-2
1903	9a	T02	020607	瓦	軒平瓦H13 形式							C10-M40- Y40-BL30		H13-1
1904	—	S302 瓦 西	020625	瓦	軒平瓦H13 形式							C10-M20- Y20-BL60		H13-2
1905	16b	S8292	020730	瓦	軒平瓦H19 形式							C10-M20- Y20-BL10		H19-1
1906	11b	S801 B	020807	瓦	軒平瓦H19 形式							C10-M20- Y20-BL60		H19-2
1907	12b	S801	020613	瓦	軒平瓦H19 形式							C10-M10- Y10-BL60		H19-3
1908	8a	S302 瓦 東	020621	瓦	軒平瓦H19 形式							C10-M40- Y40-BL30		H19-3
1909	12b	S806	020621	瓦	軒平瓦H19 形式	近代 G-7						C10-M20- Y30-BL10		
1910	12a	西ト レ ン ド	020513	瓦	軒瓦瓦501 形式							C10-M10- Y10-BL60		
1911	14a	S309 d	020919	瓦	軒瓦瓦501 形式							C10-M20- Y20-BL60		
1912	—	西ト レ ン ド	—	瓦	軒瓦瓦501 形式							C10-M20- Y20-BL60		
1913	11a	S823 7 層	020826	瓦	軒瓦瓦502 形式							C10-M20- Y20-BL60		
1914	—	北壁	020514	瓦	軒瓦瓦503 形式							C10-M20- Y20-BL60		
1915	—	南土	020418	瓦	軒瓦瓦504 形式							C10-M20- Y30-BL60		
1916	12a	S822	020606	瓦	軒瓦瓦504 形式							C10-M10- Y20-BL60		
1917	12a	西ト レ ン ド	020513	瓦	軒瓦瓦							C10-M20- Y20-BL60		
1918	—	S860	020704	瓦	軒瓦瓦501 形式7							C10-M10- Y20-BL60		
1919	—	S302 瓦 東	020619	瓦	瓦	長33.8	幅18.6	厚2.6		コビキ瓦、赤11層	ヘラケズリ、1.0 タ	C10-M10- Y10-BL60		
1920	—	S302 瓦 西	020619	瓦	瓦	長35.3	幅17.6	厚2.5		コビキ瓦、赤11層	ヘラケズリ、1.0 タ	C10-M40-Y0- BL60		
1921	11b	S012	020718	瓦	瓦	長31.8	幅16.2	厚2.3		コビキ瓦、赤11層、 藍あり	ヘラケズリ、1.0 タ	C10-M20- Y20-BL60		
1922	12b	S001 2 層	020524	瓦	瓦	長27.9	幅14.7	厚1.8		コビキ瓦、赤11層	ヘラケズリ、1.0 タ	C10-M20- Y30-BL60		
1923	11b	S801 F レ ン ド	020800	瓦	瓦	長34.1	幅17.6	厚2.2		コビキ瓦、赤11層	ヘラケズリ、1.0 タ	C10-M10- Y10-BL60		
1924	11b	S801 下層	—	瓦	瓦	長31.1	幅16.2	厚2.1		コビキ瓦、赤11層	ヘラケズリ、1.0 タ	C10-M0-Y0- BL60		
1925	11b	S801 B 下層	020800	瓦	瓦	長32.4	幅15.2	厚2.1		コビキ瓦、赤11層	ヘラケズリ、1.0 タ	C10-M20- Y20-BL60		復元前切取面 あり
1926	11b	S801 B 下層	020800	瓦	瓦	長32.4	幅14.2	厚2.2		コビキ瓦、赤11層	ヘラケズリ、1.0 タ	C10-M20- Y20-BL60		
1927	11	S801 ベ ルト	020802	瓦	瓦	長36.0	幅13.1	厚1.6		コビキ瓦、赤11層	ヘラケズリ、1.0 タ	C10-M0-Y0- BL60		
1928	—	S801 下層	—	瓦	瓦	長30.4	幅18.8	厚2.0				C10-M20- Y20-BL30		
1929	11b	S012	020625	瓦	瓦	長31.8	幅17.3	厚2.1				C10-M10- Y10-BL60		
1930	12a	西ト レ ン ド	020513	瓦	瓦	長31.2	幅20.7	厚2.0				C10-M0-Y0- BL60		
1931	12b	S012	020724	瓦	瓦	長32.6	幅31.5	厚2.3				C10-M20- Y20-BL60		
1932	12a	西ト レ ン ド	020513	瓦	瓦	長27.8	幅25.9	厚1.8				C10-M0-Y0- BL60		
1933	12a	西ト レ ン ド	020513	瓦	瓦	長32.1	幅14.7	厚1.8				C10-M0-Y0- BL60		
1934	12a	西ト レ ン ド	020513	瓦	瓦	長26.9	幅13.0	厚1.6				C10-M40- Y40-BL60		
1935	12a	西ト レ ン ド	020513	瓦	瓦	長30.0	幅16.5	厚1.8				C10-M10- Y10-BL60		
1936	—	S302 瓦 西	020625	瓦	瓦 瓦長 13.0	瓦長 28.6	幅30.3	厚2.2				C10-M10- Y10-BL60		
1937	11c	S8292	020731	瓦	瓦	瓦長 28.6	幅30.3	厚2.2				C10-M10- Y10-BL60		
1938	12a	西ト レ ン ド	020513	瓦	瓦	長27.9	幅17.8	厚2.2				C10-M20- Y20-BL60		
1939	12a	西ト レ ン ド	020509	瓦	瓦	長28.6	幅17.3	厚1.9				C10-M20- Y20-BL60		
1940	10c	S8292	020730	瓦	瓦	長31.5	幅30.2	厚1.8				C10-M10- Y10-BL60		
1941	12a	西ト レ ン ド	020509	瓦	瓦 瓦長 21.9	瓦長 21.9	幅17.8	厚1.8				C10-M10- Y10-BL60		
1942	10c	S8292	020730	瓦	瓦	瓦長 25.7	幅31.7	厚1.9				C10-M0-Y0- BL60		
1943	11b	S801 B 11	020610	瓦	瓦 瓦長 27.5	瓦長 12.4	幅12.4	厚2.2				C10-M0-Y0- BL60		K01-1
1944	11b	S801 11	020611	瓦	瓦 瓦長 27.9	瓦長 17.3	幅17.3	厚2.0				C10-M0-Y0- BL60		K01-2

図号等	7107	遺跡番号	日付	所在地・材質	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	内容	写真	貯蔵(内庫)	数	備考
1945	11b	SK01 B	020013	瓦	焼瓦 K01	瓦	25.8	幅19.0	厚 2.2				C40 M20 Y20-BL60	K01-3	
1946	11i	SK01 B	020002	瓦	焼瓦 K01	瓦	22.8	幅14.8	厚 2.2				C30 M10 Y10-BL60	K01-4	
1947	11b	SK01 B	—	瓦	焼瓦 K01	瓦	16.9	幅14.7	厚 2.0				C20 M20 Y30-BL60	K01-5	
1948	11i	SK01	020010	瓦	焼瓦 K01	瓦	20.4	幅16.4	厚 2.3				C10-M0 Y10 BL60	K01-6	
1949	11b	SK01 B	020002	瓦	焼瓦 K01	瓦	14.1	幅12.4	厚 2.1				C20 M10 Y20-BL60	K01-7	
1950	11e	SK25	020006	瓦	焼瓦 K01	瓦	20.2	幅16.0	厚 2.1				C30 M10 Y10-BL60	K01-8	
1951	11i, 11b	SK01 B	020018, 020005	瓦	焼瓦 K01	瓦	29.5	幅13.3	厚 2.2				C20 M10 Y20-BL60	K01-9	
1952	11b	SK01 B	020007	瓦	焼瓦 K01	瓦	19.2	幅17.2	厚 2.1				C30 M20 Y20-BL60	K01-12	
1953	11b	SK01 B	020007	瓦	焼瓦 K01	瓦?	21.8	幅13.5	厚 2.0				C20 M10 Y10-BL30	K01-15	
1954	11b	SK01 B	020007	瓦	焼瓦 K01	瓦	17.3	幅13.8	厚 2.1				C30 M20 Y30-BL60	K01-20	
1955	—	SX02 瓦	020025	瓦	焼瓦 K01	瓦	10.0	幅6.4	厚 1.7				C10 M0 Y0 BL60	宇衣古物蔵前 比叟丁7 K01-05	
1956	12i	焼皿 1	020513	瓦	焼瓦 K02	瓦	14.7	幅14.0	厚 2.5				C10 M0 Y10 BL60	K02-1	
1957	11b	SK01 B	020007	瓦	焼瓦 K02	瓦	27.7	幅17.0	厚 2.7				C30 M20 Y20-BL60	K02-2	
1958	11b	SK01 B	020007	瓦	焼瓦 K02	瓦	16.1	幅13.2	厚 3.3				C40 M20 Y20-BL60	K02-3	
1959	10e	SX04	020026	瓦	焼瓦 K02	瓦	11.9	幅7.0	厚 4.0				C40 M30 Y30-BL10	K02-4	
1960	13c	SK01 遺 跡中	020524	瓦	焼瓦 K02	瓦	12.2	幅9.0	厚 3.6				C30 M0 Y0 BL60	K02-5	
1961	11b	SK01 B	020009	瓦	焼瓦 K02	瓦	14.6	幅11.4	厚 3.2				C30 M20 Y20-BL60	焼成直前って 遺跡中して 瓦。 K02-6	
1962	13b	SK01 遺 跡中	020030	瓦	焼瓦 K02	瓦	19.9	幅12.2	厚 3.1				C20 M10 Y20-BL60	K02-7	
1963	11b	SK01 B	020007	瓦	焼瓦 K02	瓦	14.8	幅14.1	厚 3.2				C10 M10 Y20-BL60	K02-8	
1964	—	SX02 瓦	020015	瓦	焼瓦 K02	瓦	10.8	幅7.9	厚 4.0				C30 M20 Y20-BL60	K02-10	
1965	—	SX02 瓦	020015	瓦	焼瓦 K02	瓦	17.1	幅7.2	厚 4.7				C30 M20 Y20-BL60	K02-11	
1966	11a, 11b	SK63, SK65, SK01 B	020014, 020001	瓦	焼瓦 K03	瓦	38.7	幅31.5	厚 5.3				C60 M30 Y30-BL60	K03-1	
1967	—	内壁	020507	瓦	焼瓦 K03	瓦	11.0	幅7.1	厚 1.7				C30 M20 Y30-BL60	K03-2	
1968	11b	SK01 B	020007	瓦	焼瓦 K03	瓦	10.8	幅8.3	厚 3.4				C30 M20 Y30-BL60	K03-4	
1969	10e	壁ト ンク	020514	瓦	焼瓦 K03	瓦	13.6	幅5.1	厚 3.5				C9 M0 Y0 BL60	K03-3	
1970	11i	SK01	020030	瓦	焼瓦 K03	瓦	15.6	幅6.9	厚 2.9				C40 M20 Y30-BL60	K03-5	
1971	—	SK01	—	瓦	焼瓦 K03	瓦	15.0	幅9.2	厚 5.0				C30 M20 Y30-BL60	K03-6	
1972	11b	SK01 B	020007	瓦	焼瓦 K03	瓦	19.8	幅17.7	厚 5.2				C30 M20 Y20-BL60	K03-7	
1973	—	内壁	020507	瓦	焼瓦 K03	瓦	16.0	幅16.3	厚 3.5				C40 M20 Y30-BL60	K03-9	
1974	11b	SK01 B	020009	瓦	焼瓦 K03	瓦	20.1	幅18.6	厚 4.2				C10 M10 Y20-BL60	K03-8	
1975	—	SX02 瓦	020015	瓦	焼瓦 K04	瓦	19.8	幅20.4	厚 6.6				C20 M10 Y0 BL60	K04-1	
1976	8c	SX02 瓦	020023, 020029	瓦	焼瓦 K04	瓦	15.5	幅10.1	厚 7.1				C20 M10 Y10-BL10	K04-2	
1977	—	SX02 瓦	020015	瓦	焼瓦 K04	瓦	10.9	幅7.3	厚 7.3				C30 M10 Y10-BL60	K04-3	
1978	11b	SK01 B	020008	瓦	焼瓦 K04	瓦	13.3	幅8.9	厚 7.6				C30 M20 Y30-BL60	K04-4	
1979	11b	SK01 B	020009	瓦	焼瓦 K04	瓦							C40 M20 Y20-BL60	K04-5	
1980	11b	SK01	020613	瓦	焼瓦 K04	瓦							C10 M10 Y20-BL60	K04-6	
1981	13b	SK12	020726	瓦	瓦	瓦	43.1	幅32.8	厚 7.7				C60 M40 Y40-BL20	宇西家蔵	
1982	11i	SK01	020528	瓦	瓦	瓦	12.3	幅11.3	厚 7.6				C10 M0 Y0 BL60		
1983	11i	SK01	020530	瓦	瓦	瓦	9.1	幅6.4	厚 4.1				C40 M20 Y30-BL60		
1984	—	SK01	—	瓦	瓦	瓦	19.5	幅14.9	厚 2.9				C40 M20 Y30-BL60		
1985	11g	SK63	020014	瓦	瓦	瓦	11.7	幅11.3	厚 4.4				C30 M20 Y20-BL60		
1986	11a	SK136	020723	瓦	瓦	瓦	10.8	幅6.5	厚 3.4				C60 M40 Y40-BL10		
1987	11g	SK63	020019	瓦	瓦	瓦	11.7	幅7.1	厚 3.5				C30 M20 Y20-BL60		
1988	10a	SX05	020701	瓦	瓦	瓦	12.5	幅9.2	厚 5.8				C40 M20 Y20-BL60		
1989	9b	焼皿 1	020523	瓦	瓦	瓦	10.6	幅9.3	厚 5.5				C30 M20 Y20-BL60		
1990	10d	SK127	020026	瓦	瓦	瓦	14.4	幅 8.0	厚 3.3				C9 M0 Y10 BL60		
1991	13c	SK163	020725	瓦	瓦?	瓦	7.2	幅6.5	厚 2.6				C30 M20 Y30-BL60		
1992	11i	SK16	020006	瓦	瓦?	瓦	11.5	幅6.5	厚 2.2				C40 M20 Y30-BL60		
1993	12i	SK165	020726	瓦	瓦	瓦	15.3	幅9.6	厚 3.6				C30 M20 Y30-BL60		

名古屋城三の丸遺跡Ⅶ

調査年	ア1-7	遺跡番号	日付	区域・材質	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	厚さ(mm)	内径	外径	貯水(内径)	貯水(外径)	備考
1994	111	S801	020705	瓦	瓦丸瓦	201							C20-M10-Y20-BL0	Z01-1	
1995	11b	S801 B	020807	瓦	瓦丸瓦	201							C20-M10-Y20-BL0	Z01-2	
1996	111	S801	020906	瓦	瓦丸瓦	201							C30-M20-Y20-BL0	Z01-3	
1997	11b	S801	020613	瓦	瓦丸瓦	201							C30-M10-Y10-BL0	Z01-5	
1998	11b	S801	020806	瓦	瓦丸瓦	201				長 14.7	幅 9.3	厚 1.8	C40-M20-Y20-BL0	Z01-4	
1999	10a	S804 裏下層	020702	瓦	瓦丸瓦	202							C30-M20-Y30-BL0	Z02-1	
2000	111	S801 A	020807	瓦	瓦丸瓦	202							C20-M10-Y10-BL0	Z02-2	
2001	10c	S3E7 01	020610	瓦	瓦丸瓦	202							C30-M20-Y20-BL0	Z02-3	
2002	—	S302 裏西	020625, 020627	瓦	瓦丸瓦	203							C20-M10-Y20-BL0	Z03-1	
2003	—	S309	020917	瓦	筒瓦		長 10.8	幅 6.5	厚 1.7				C30-M20-Y20-BL0		
2004	11b	S801	020805	瓦	筒瓦					厚 2.1			C30-M20-Y20-BL0		
2005	111	S801	020805	瓦	筒瓦		長 14.0	幅 13.5	厚 1.7				C30-M20-Y20-BL0		
2006	111	S801	020805	瓦	筒瓦		長 14.2	幅 12.9	厚 1.8				C10-M50-Y0-BL0		
2007	—	S801	—	瓦	筒瓦		長 14.1	幅 14.0	厚 1.8				C40-M20-Y20-BL0		
2008	—	S801	—	瓦	筒瓦		長 11.1	幅 12.6	厚 2.0				C30-M20-Y20-BL0		
2009	12b	S801	020613	瓦	筒瓦		長 14.0	幅 10.1	厚 2.1				C30-M40-Y60-BL0		
2010	111	S801	020806	瓦	筒瓦		長 16.7	幅 10.3	厚 2.0				C20-M20-Y30-BL0		
2011	11b	S801 B	020809	瓦	筒瓦		長 17.0	幅 14.5	厚 2.4				C40-M20-Y20-BL0		
2012	—	S302 裏	020626	瓦	筒瓦		長 14.5	幅 13.9	厚 1.9				C30-M40-Y60-BL0		
2013	11b	S801, S847	020806	瓦	筒瓦		長 12.2	幅 11.8	厚 2.4				C30-M20-Y20-BL0, C30-M20-Y20-BL0		
2014	10a	S305	020703	瓦	筒瓦		長 14.6	幅 11.3	厚 2.0				C40-M20-Y30-BL0		
2015	10a	掘削 1	020522	瓦	筒瓦		長 11.5	幅 10.3	厚 1.8				C40-M20-Y20-BL0		
2016	11g	S803	020819	瓦	筒瓦		長 15.8	幅 14.0	厚 2.0				C40-M20-Y20-BL0		
2017	11g	S803	020819	瓦	筒瓦		長 15.5	幅 14.2	厚 2.1				C40-M20-Y20-BL0		
2018	11g	S803	020819	瓦	筒瓦		長 16.6	幅 13.5	厚 2.0				C40-M20-Y20-BL0		
2019	12b	S801	020613	瓦	瓦丸瓦	201	長 17.0	幅 9.8	厚 2.2				C30-M40-Y40-BL0		
2020	11b	S801 B	020808	瓦	瓦丸瓦	201	長 12.4	幅 7.3	厚 2.2				C30-M20-Y30-BL0		
2021	11b	S801	020611	瓦	瓦丸瓦	201	長 10.5	幅 9.6	厚 1.3				C30-M20-Y30-BL0		
2022	111	S801	020802	瓦	瓦丸瓦	201	長 10.8	幅 7.2	厚 2.6				C30-M40-Y40-BL0		
2023	—	表土	020513	瓦	瓦丸瓦	201	長 14.0	幅 12.7	厚 2.0				C30-M20-Y20-BL0		
2024	—	S302 裏西	020625	瓦	瓦丸瓦	203	長 18.5	幅 8.9	厚 2.0				C40-M20-Y30-BL0		
2025	12g	S811	020603	瓦	瓦丸瓦	201	長 10.2	幅 8.5	厚 2.6				C40-M20-Y30-BL0		
2026	13a	掘削 0	020729	瓦	瓦丸瓦	201	長 7.5	幅 7.5	厚 1.8				C10-M50-Y0-BL0		コピキナ
2027	111	S801	020805	瓦	瓦丸瓦	201	長 22.1	幅 14.6	厚 3.5				C10-M50-Y0-BL0		
2028	11b	S801 B	020807	瓦	瓦丸瓦	201	長 17.5	幅 13.8	厚 5.3				C30-M20-Y20-BL0		
2029	—	S801	—	瓦	瓦丸瓦	201	長 11.3	幅 7.6	厚 4.9				C30-M20-Y20-BL0		
2030	11b	S801 B	020807	瓦	瓦丸瓦	201	長 12.2	幅 12.2	厚 2.5				C40-M20-Y20-BL0		
2031	11b	S801 B	020805	瓦	瓦丸瓦	201	長 20.2	幅 12.1	厚 2.0				C30-M40-Y40-BL0		
2032	11b	S801 B	020807	瓦	瓦丸瓦	201	長 16.3	幅 12.2	厚 2.0				C30-M40-Y40-BL0		
2033	111	S801	020805	瓦	瓦丸瓦	201	長 9.9	幅 7.2	厚 2.4				C40-M20-Y30-BL0		
2034	11b	S013	020621	瓦	瓦丸瓦	201	長 18.0	幅 18.0	厚 2.4				C0-M5-Y10-BL0		
2035	14a, d	S309	020919	瓦	瓦丸瓦	201	長 19.8	幅 14.8	厚 1.8				C30-M20-Y30-BL0		
2036	8c	S302 裏	020621	瓦	瓦丸瓦	201	長 8.5	幅 7.3	厚 1.4				C20-M10-Y30-BL0		
2037	11b	T03	020621	瓦	瓦丸瓦	201	長 9.5	幅 8.2	厚 3.0				C30-M20-Y20-BL0		
2038	10a	S305	020703	瓦	瓦丸瓦	201	長 12.5	幅 9.7	厚 2.4				C30-M20-Y20-BL0		
2039	9a	T01	020528	瓦	瓦丸瓦	201	長 10.5	幅 11.0	厚 1.8				10Y98-Z, 10Y98-Z	C30-M20-Y100-BL0	
2040	—	表土	020428	瓦	瓦丸瓦	201	長 10.3	幅 8.2	厚 2.2				10Y98-Z, 10Y98-Z	C30-M20-Y100-BL0	
2041	8c	S302 裏	020621	瓦	瓦丸瓦	201	長 21.6	幅 9.9	厚 1.5				10Y97-Z, 10Y97-Z	C30-M40-Y30-BL0	
2042	—	S302 裏西	020625	瓦	瓦丸瓦	201	長 9.1	幅 5.7	厚 1.8				Z59Z1 長白	C30-M40-Y100-BL0	

図番	7107	遺跡番号	日付	所在地・材質	原形	時期	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	重量(g)	内径	外径	胎土(内面)	胎土	備考	
2043	—	SX02 北	020621	瓦	緑釉瓦丸瓦	瓦	径 7.4	幅 1.6	厚 1.5							
2044	—	SX02 南	020624	瓦	緑釉瓦丸瓦	瓦	径 5.6	幅 4.8	厚 1.4							
2045	—	SX02 北	020620	瓦	緑釉瓦丸瓦	瓦	径 4.0	幅 1.7	厚 1.2							
2046	6c	SX02 北	020621	瓦	緑釉瓦丸瓦	瓦	径 8.8	幅 6.0	厚 1.5							
2047	—	SX02 北	020625	瓦	緑釉瓦丸瓦	瓦	径 10.0	幅 6.4	厚 1.0							
2048	9d	SX02 北	020621	瓦	緑釉瓦丸瓦	瓦	径 10.7	幅 4.1	厚 1.5							
2049	10b	SX04	020626	瓦	緑釉瓦丸瓦	瓦	径 4.0	幅 3.3	厚 1.1							
2050	9c	SX02 北	020621	瓦	緑釉瓦平瓦	瓦	径 12.2	幅 9.3	厚 2.2							
2051	—	SX02 北	020619	瓦	緑釉瓦平瓦	瓦	径 13.4	幅 12.2	厚 1.4							
2052	—	SX02 北	020625	瓦	緑釉瓦平瓦	瓦	径 5.5	幅 4.5	厚 1.1							
2053	—	SX02 北	020625	瓦	緑釉瓦平瓦	瓦	径 8.6	幅 5.6	厚 1.3							
2054	—	瓦工	020424	瓦	緑釉瓦平瓦	瓦	径 8.1	幅 7.9	厚 1.6							
2055	6c	SX02 北	020621	瓦	緑釉瓦平瓦 糸道瓦片?	瓦	径 8.5	幅 4.2	厚 2.1							
2056	—	SX02 北	020620	瓦	瓦行物瓦造 瓦片?	瓦	径 5.8	幅 2.9	厚 1.6							
2057	—	SX02 北	020620	瓦	緑釉瓦平瓦	瓦	径 11.5	幅 9.8	厚 1.6							
2058	—	SX02 北	020625	瓦	緑釉瓦平瓦	瓦	径 17.4	幅 12.2	厚 1.8							
2059	—	SX02 南	020624	瓦	緑釉瓦丸瓦	瓦	径 24.3	幅 17.5	厚 2.8							
2060	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	大筒		14.8	6.0	5.4	15.0	白磁釉、コバルト 藍、鉄藍、酸化チ ローム藍	白磁釉、コバルト 藍、鉄藍、酸化チ ローム藍、高台 痕跡露出	灰白			
2061	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	大筒		14.8	3.8	5.2	15.0	白磁釉、コバルト 藍、鉄藍、酸化チ ローム藍	白磁釉、コバルト 藍、鉄藍、酸化チ ローム藍、高台 痕跡露出	灰白			
2062	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	大筒		14.6	6.0	5.4	14.8	白磁釉、コバルト 藍、鉄藍、酸化チ ローム藍	白磁釉、コバルト 藍、鉄藍、酸化チ ローム藍、高台 痕跡露出	灰白			
2063	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	大筒		14.0	3.1	5.8	14.2	白磁釉、コバルト 藍、酸化チローム 藍	白磁釉、コバルト 藍、酸化チローム 藍、高台痕跡露出	灰白			
2064	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	大筒		14.0	3.1	5.6	14.2	白磁釉、コバルト 藍、酸化チローム 藍	白磁釉、コバルト 藍、酸化チローム 藍、高台痕跡露出	灰白			
2065	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	大筒		13.8	3.1	5.8	14.1	白磁釉、コバルト 藍、酸化チローム 藍	白磁釉、コバルト 藍、酸化チローム 藍、高台痕跡露出	灰白			
2066	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	大筒		15.2	7.2	5.9	15.6	白磁釉、コバルト 藍、1.1藍	白磁釉、コバルト 藍、高台痕跡露出	灰白			
2067	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	大筒		15.0	7.2	6.0	15.5	白磁釉、コバルト 藍、1.1藍	白磁釉、コバルト 藍、高台痕跡露出	灰白			
2068	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	大筒		15.1	7.2	6.1	15.5	白磁釉、コバルト 藍、1.1藍	白磁釉、コバルト 藍、高台痕跡露出	灰白			
2069	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	大筒		15.0	7.1	6.0	15.4	白磁釉、コバルト 藍、1.1藍	白磁釉、コバルト 藍、高台痕跡露出	灰白			
2070	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	大筒		15.2	7.2	6.0	15.6	白磁釉、コバルト 藍、1.1藍	白磁釉、コバルト 藍、高台痕跡露出	灰白			
2071	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	大筒		15.0	7.2	6.0	15.4	白磁釉、コバルト 藍、1.1藍	白磁釉、コバルト 藍、高台痕跡露出	灰白			
2072	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	大筒		径 15.2	7.2	径 6.0	15.7	白磁釉、コバルト 藍、1.1藍	白磁釉、コバルト 藍、高台痕跡露出	灰白			
2073	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	小杯		5.3	2.9	2.3	5.7	白磁釉、コバルト 藍	白磁釉、高台痕跡 露出	灰白			
2074	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	小杯		7.3	3.2	3.2	7.6	白磁釉、口紅	白磁釉、高台痕跡 露出、上縁付、 スプーン文	灰白			
2075	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	高台		6.8	6.7	4.3	6.5	白磁釉	白磁釉、高台痕跡 露出	灰白			
2076	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	高台		6.4	6.7	4.3	6.8	白磁釉	白磁釉、高台痕跡 露出	灰白			
2077	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	小杯		5.2	5.9	3.5	5.3	磁洗物	磁洗物、底面露出、 壺形?	灰白			
2078	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	高台		7.6	7.7	4.8	8.0	白磁釉	白磁釉、上縁付 (口) 露出、高台 痕跡露出	灰白			
2079	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	高台		7.6	7.6	4.4	7.8	白磁釉	白磁釉、上縁付 (口) 露出、高台 痕跡露出	灰白			
2080	12b	SK06	020621	陶片(磁器?)	高台		7.3 ~ 7.7	6.7	4.4	7.8	白磁釉	白磁釉、上縁付 (口) 露出、高台 痕跡露出	灰白			
2081	12b	SK06	020621	ノリナケ磁 器?	口		径 4.7	径 4.7	径 4.7		白磁釉	白磁釉、上縁付	灰白			
2082	12b	SK06	020621	磁	皿		14.8	2.8	7.8	15.2	白磁釉	多分が磁器、残り は白磁釉、高台 痕跡露出、壺形	灰白			
2083	12b	SK06	020621	種子	ノップ種子		3.0	5.0	3.4	3.4	白磁釉	白磁釉、黄褐色 斑、雫の付く(口) 1目	灰白			

名古屋城三の丸遺跡Ⅶ

図名(号)	ア1-7	遺跡番号	日付	所在地・材質	種別	時期	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	内容	外面	断面(内面)	船1	備考	
2084	12b	S830	020621	堀ノ堀跡? 土	土		2.6	1.2	3.0	—	白磁釉、下半露出。帯の内面は目1目、ケムル状黒色付着あり	白/白	CA-M4-Y4-RE4		
2085	12b	S830	020621	堀ノ堀跡? 土	土		2.5	1.2	3.8	—	白磁釉、下半露出。帯の内面は目1目あり	白/白	CO-M0-Y4-RE4		
2086	12b	S830	020621	堀ノ堀跡? 遺構	土	長 2.2	13.0	4.4	7.6	白磁釉	白磁釉、上層付	白/白	CA-M0-Y4-RE4	C10-M00-Y100-RE10, C40-M0-Y20-RE10, CO-M0-Y5-RE10	
2087	12b	S830	020621	堀ノ堀跡? 内側/内側/堀跡	瓦	長径 17.8	7.4		9.0 35.2	なまこ焼、下半露出。へうろこ式リ、取手付	なまこ焼、取手付	2.5/3.2 白/白	CO-M0-Y100-RE10		
2088	12b	S830	020621	土層	粘土質	10.4	10.2	6.8	10.8	露胎、ヨコナデ、コナデ	露胎、ヨコナデ、コナデ	5/10/6 青	CO-M0-Y100-RE10		
2089	12b	S830	020621	土層	粘土質	長 12.0	10.0	長 7.5	長 12.4	露胎、ヨコナデ、コナデ	露胎、ヨコナデ、コナデ	2.5/3/5.6 緑	CO-M0-Y100-RE10		
2090	12b	S830	020621	土層	粘土質	15.4	13.6	9.6	13.8	露胎、ヨコナデ、コナデ	露胎、ヨコナデ、コナデ	5/10/6 青	CO-M0-Y100-RE10		
2091	12b	S830	020621	土層	粘土質	長 15.4	14.3	長 10.4	長 16.0	露胎、ヨコナデ、コナデ	露胎、ヨコナデ、コナデ	5/12/4 白	CO-M0-Y100-RE10		
2092	12b	S830	020621	土層	粘土質	長さ 20.6	19.7	16.0	27.0	露胎、ヨコナデ、コナデ	露胎、ヨコナデ、コナデ	10/8/5 赤	CO-M0-Y100-RE10		
2093	12b	S830	020621	遺構/白磁釉	瓦		5.7	10.6	7	白磁釉、白磁釉	白磁釉、下半露出	白/白	C20-M0-Y20-RE10	取り付	
2094	12b	S830	020621	堀ノ堀跡? 土	土	長 14.8	5.4	長 4.8	長 15.6	白磁釉	白磁釉、露胎	白/白	白/白		
2095	12b	S830	020621	堀ノ堀跡? 汚物入れ	土	15.2	14.5	14.0	15.6	白磁釉	白磁釉、露胎、白磁釉	白/白	白/白		
2096	12b	S830	020621	ガラスナット	鋼/ガラス	径 16.1	幅 1.1	厚 0.5			毛残	CO-M0-Y12-RE4			
2097	12b	S830	020621	ガラスナット	鋼/ガラス	径 15.3	幅 1.1	厚 0.5				CO-M0-Y100-RE10			
2098	12b	S830	020621	ガラス	瓦	1.9	24.4	5.2	6.4		露胎「大日本帝國式會社製造」	CO-M4-Y12-RE4		5.1青緑色系	
2099	12b	S830	020621	ガラス	瓦	1.8	24.8	4.6	6.0		内容物の痕跡?	C20-M4-Y10-RE4		青色系	
2100	12b	S830	020621	ガラス	瓦	2.0	径 23.0		6.4			CO-M0-Y8-RE4		5.1青緑色系	
2101	12b	S830	020621	ガラス	瓦	2.3	20.2	7.4	8.6			C80-M00-Y100-RE10		緑色系	
2102	12b	S830	020621	ガラス	瓦	3.6	15.9	長 4.2	6.8			無色透明		無色系	
2103	12b	S830	020621	ガラス	瓦	2.8	14.4	4.8	5.7			露胎「内田牧場電二六七、萬福商會 志気一、八郎入」	無色透明		無色系
2104	12b	S830	020621	ガラス	瓦	径 13.1	4.1	5.3				露胎「女立、松葉丸電 地吉車 六八七、三(一) 正八郎 多摩集	無色透明		無色系
2105	12b	S830	020621	ガラス	瓦	1.3	18.1	3.8	4.5			露胎「京都府製」	C20-M0-Y16-RE4	5.1青緑色系	
2106	12b	S830	020621	ガラス	瓦	2.5	16.8	6.4	7.3			露胎「京府府前製」	C20-M0-Y10-RE4	5.1青緑色系	
2107	12b	S830	020612	ガラス	瓦	径 12.2	4.1	長 5.6				CO-M0-Y16-RE4		5.1青緑色系	
2108	12b	S830	020621	ガラス	瓦	径 8.4	4.6	5.2				露胎「レイトワーズ」	無色透明	透明系	
2109	12b	S830	020621	ガラス	瓦	2.4	6.9	4.2	5.9			露胎「PLOT ZONE」	CO-M0-Y4-RE4	5.1青緑色系	
2110	12b	S830	020621	ガラス	瓦	1.4	8.5	3.2	4.0			CO-M0-Y0-RE4		透明系	
2111	12b	S830	020621	ガラス	瓦	1.4	8.1	2.6	2.8			材質物あり、わずかに露出	無色透明	透明系	
2112	12b	S830	020621	ガラス	瓦	1.6	7.2	1.9	2.3			わずかに露出	無色透明	透明系	
2113	12b	S830	020621	ガラス	瓦	2.0	6.0	4.2	5.1			わずかに露出	無色透明	透明系	
2114	12b	S830	020621	ガラス	瓦	4.4	9.4	3.9	5.4			わずかに露出	露胎「TAMU」	CO-M0-Y10-RE4	中々5.1青緑色系
2115	12b	S830	020621	ガラス	瓦	1.7	1.6	—	1.7			わずかに露出	中々出ている	2.5/5.5 青黒	
2116	12b	S830	020621	ガラス	瓦	1.1	12.6	4.5	5.2			わずかに露出	露胎「ベトナム」	C160-M10-Y100-RE30	緑色系
2117	12b	S830	020621	ガラス	瓦	3.8	3.3	3.6	4.5				CO-M0-Y10-RE4	白/白	
2118	12b	S830	020621	ガラス	瓦	4.5	3.9	4.6	5.0				C20-M0-Y10-RE4	5.1青緑色系	
2119	12b	S830	020621	ガラス	瓦	4.4	4.3	4.6	5.1			露出くもり	C20-M0-Y10-RE4	5.1青緑色系	
2120	12b	S830	020621	ガラス	瓦	3.7	4.4	4.0	4.5				露胎に突起1+	白/白	白色系
2121	12b	S830	020621	ガラス	瓦	4.4	4.9	5.0	5.3			13材料部緑色付着	露胎に凸凹の突起	白/白	白色系
2122	12b	S830	020621	ガラス	瓦	4.6	5.7	5.0	5.2			黄色付着物あり	CO-M4-Y4-RE4	白	
2123	12b	S830	020621	ガラス	瓦	3.4	1.1	—	3.4				2.5/5.3 灰青緑	露胎	
2124	12b	S830	020621	ガラス	瓦	3.6	4.9	4.0	4.9				白/白	白色系	
2125	12b	S830	020621	ガラス	瓦	4.8	9.2	3.5	5.8			わずかに露出	露胎透明	透明系	
2126	12b	S830	020621	ガラス	コップ	5.5	9.1	4.0	5.8			わずかに露出	露胎露胎	無色透明	透明系
2127	12b	S830	020621	ガラス	コップ	5.5	9.1	4.0	5.8			わずかに露出	露胎露胎	無色透明	透明系
2128	12b	S830	020621	ガラス	瓦	3.7	7.4	2.8	4.5			露出あり	C20-M0-Y10-RE4	5.1青緑色系	
2129	12b	S830	020621	ガラス	瓦	4.0	7.4	3.2	4.5			露出あり	C20-M0-Y10-RE4	5.1青緑色系	

図番	7107	遺物番号	日付	産地・材質	種別	時期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	内径	外径	胎土(内径)	胎土(外径)	備考			
2130	12b	SK06	020621	ガラス	瓶		3.2	7.3	3.1	4.4	取附中々あり		C20-MO-Y10-01A		うすい青色系			
2131	12b	SK06	020621	ガラス	瓶		5.3	7.3	3.0	4.3	取附あり		C20-MO-Y10-01A		うすい青色系			
2132	12b	SK06	020621	ガラス	瓶		3.8	7.2	3.0	4.4	取附中々あり		C20-MO-Y10-01A		うすい青色系			
2133	12b	SK06	020621	ガラス	瓶		3.9	7.3	3.0	4.4	取附中々あり		C20-MO-Y10-01A		うすい青色系			
2134	12b	SK06	020621	ガラス	瓶		2.8	7.3	2.8	4.4	取附少しあり		C20-MO-Y10-01A		うすい青色系			
2135	12b	SK06	020621	ガラス	瓶		3.8	7.4	3.0	4.4	取附少しあり		C20-MO-Y10-01A		うすい青色系			
2136	12b	SK06	020621	ガラス	瓶		3.1	7.3	3.0	4.4	取附多くあり		C20-MO-Y10-01A		うすい青色系			
2137	12b	SK06	020621	ガラス	瓶		3.1	7.3	2.8	4.5	取附少しあり		C20-MO-Y10-01A		うすい青色系			
2138	12b	SK06	020621	ガラス	瓶		3.0	7.3	2.9	4.4	取附あり		C20-MO-Y10-01A		うすい青色系			
2139	12b	SK06	020621	ガラス	瓶		2.8	7.3	2.8	4.3	取附多くあり		C20-MO-Y10-01A		うすい青色系			
2140	12b	SK06	020621	ガラス	瓶		3.1	7.3	2.9	4.4	取附少しあり		C20-MO-Y10-01A		うすい青色系			
2141	12b	SK06	020621	ガラス	瓶		3.1	7.2	2.8	4.4	取附あり		C20-MO-Y10-01A		うすい青色系			
2142	12b	SK06	020621	ガラス	瓶		3.0	7.5	2.8	4.4	取附少しあり		C20-MO-Y10-01A		うすい青色系			
2143	12b	SK06	020621	ガラス	試験片		残 1.8		1.6						青色透明	透明系		
2144	12b	SK06	020621	ガラス	試験片		残 1.3		1.6						白色アブリット	透明系		
2145	12b	SK06	020621	ガラス	試験片		残 14.7		1.4						白磁中々混入、玉縁状	透明系		
2146	12b	SK06	020621	ガラス	試験片		残 10.0		1.6						青色透明	透明系		
2147	12b	SK06	020621	ガラス	試験片		残 9.9		1.7						青色透明	透明系		
2148	12b	SK06	020621	ガラス	試験片		残 8.2		1.7						青色透明	透明系		
2149	12b	SK06	020621	ガラス	試験片		残 4.3		1.7						青色透明	透明系		
2150	12b	SK06	020621	ガラス	試験片		残 3.3		1.8						白磁混入、玉縁状	透明系		
2151	12b	SK06	020621	ガラス	スライドガラス		最大長 7.8	最大幅 2.6	最大厚 0.15							青色透明	透明系	
2152	12b	SK06	020621	ガラス	スライドガラス		最大長 7.7	最大幅 2.6	最大厚 0.07							青色透明	透明系	
2153	12b	SK06	020621	ガラス	スライドガラス		最大長 7.7	最大幅 2.6	最大厚 0.13							青色透明	透明系	
2154	12b	SK06	020621	ガラス	スライドガラス		残存長 3.7	最大幅 2.6	最大厚 0.13							青色透明	透明系	
2155	12b	SK06	020621	ガラス	スライドガラス		残存長 6.3	最大幅 2.6	最大厚 0.13							青色透明	透明系	
2156	12b	SK06	020621	ガラス	スライドガラス		残存長 4.3	最大幅 2.6	最大厚 0.08							青色透明	透明系	
2157	12b	SK06	020621	ガラス	板ガラス		残存長 9.1	残存幅 5.5	最大厚 0.22							青色透明	透明系	
2158	12b	SK06	020621	ガラス	板ガラス		残存長 11.5	残存幅 5.7	最大厚 0.2							青色透明	透明系	
2159	12b	SK06	020621	ガラス	板ガラス		残存長 11.8	残存幅 7.6	最大厚 0.2							C0-M4-Y6-01A	透明系	
2160	12b	SK06	020621	ガラス	ペンタゴン		3.7	4.9						3.7		空白		
2161	12b	SK06	020621	ガラス	ペンタゴン		3.7	3.7						3.7		空白		
2162	12b	SK06	020621	その他の製品	乾電池?		長 6.3	幅 1.7	厚 1.5									
2163	12b	SK06	020621	その他の製品	乾電池?		長 6.7	幅 1.7	厚 1.7									
2164	12b	SK06	020621	その他の製品	乾電池?		長 6.3	幅 2.0	厚 1.6									
2165	12b	SK06	020621	その他の製品	乾電池?		長 6.5	幅 1.6	厚 1.5									
2166	12b	SK06	020621	その他の製品	乾電池?		長 5.9	幅 0.7	厚 0.6									
2167	12b	SK06	020621	鉄製品	1号(蓋)		2.9	0.9										
2168	12b	SK06	020621	鉄製品	1号(蓋)		2.9	0.9										
2169	12b	SK06	020621	鉄製品	1号(蓋)		3.1	0.9										
2170	12b	SK06	020621	鉄製品	1号(蓋)		3.0	0.9										
2171	12b	SK06	020621	鉄製品	釘		長 12.0	幅 2.8	厚 1.7									
2172	12b	SK06	020621	鉄製品	釘		残長 6.7	幅 1.9	厚 1.8									
2173	12b	SK06	020621	鉄製品	釘		長 7.2	幅 1.7	厚 1.3									
2174	12b	SK06	020621	鉄製品	円筒形容器		残 2.9	5.2										
2175	12b	SK06	020621	鉄製品	円筒形容器		残長 6.4	幅 5.2	厚 0.3									
2176	12b	SK06	020621	鉄製品	円筒形容器		残 3.6	4.0										
2177	12b	SK06	020621	鉄製品	円筒形容器		残 4.9	8.5										
2178	12b	SK06	020621	鉄製品	円筒形容器		残 3.0	11.4										
2179	12b	SK06	020621	その他の製品	蓋		長 3.7	幅 3.6	厚 1.7									
2180	12b	SK06	020621	鉄製品	缶物		残長 10.5	幅 4.2	厚 1.0									
2181	12b	SK06	020621	鉄製品	缶物		残長 11.8	幅 4.0	厚 0.6									
2182	12b	SK06	020621	鉄製品	缶		長 3.4	幅 1.4	厚 0.3									
2183	8a	SK56	020619	種子	不明		最大長 9.1	最大径 5.2							磁鉄、白磁粒、黒色付着物	白磁粒、黒色付着物	空白	空白
2184	8a	SK56	020619	種子	不明		残存長 6.2	最大径 5.0							磁鉄、フロン粒	フロン粒	C4-M4-Y4-01A	C0-M30-Y00-01.30
2185	8a	SK56	020619	種子	ノップ種子		最大長 5.3	最大径 3.6							白磁粒	白磁粒、磁鉄	空白	空白
2186	8a	SK56	020619	種子	ノップ種子		最大長 5.0	最大径 3.6							白磁粒	白磁粒、磁鉄、黒色付着物	空白	空白
2187	8d	SK56	020614	石製品	研石		0.6				2.2							
2188	8a	SK56	020619	鉄製品	錠		長 5.7	幅 0.6	厚 0.1									
2189	8a	SK56	020619	鉄製品	錠		長 15.4	幅 0.1	厚 0.1									
2190	8a	SK56	020619	鉄製品	錠		長 12.7	幅 0.1	厚 0.5									

名古屋城三の丸遺跡Ⅶ

調査年	アゾフ	遺跡番号	目 行	所在地・材質	器 種	時 期	口径(mm)	底径(mm)	高さ(mm)	内径	外径	貯水(内容)	備考		
2191	8e	SK36	020019	平製品	甕		長 14.3	幅 8.4	厚 0.3						
2192	8e	SK36	020019	平製品	甕		長 15.8	幅 9.1	厚 0.7						
2193	8e	SK36	020019	平製品	甕		長 8.6	幅 5.3	厚 0.4						
2194	8e	SK36	020019	平製品	甕		長 6.7	幅 6.1	厚 0.3						
2195	8e	SK36	020019	平製品	甕		長 11.1	幅 6.8	厚 0.5						
2196	8e	SK36	020019	平製品	甕		長 7.3	幅 6.5	厚 0.2						
2197	8e	SK36	020019	平製品	甕		長 10.1	幅 7.0	厚 0.6						
2198	8e	SK36	020019	平製品	甕		長 15.6	幅 8.7	厚 0.3						
2199	8e	SK36	020019	平製品	甕		長 14.2	幅 8.0	厚 0.7						
2200	8e	SK36	020019	平製品	甕		長 7.1	幅 5.5	厚 0.3						
2201	8e	SK36	020019	平製品	甕		長 13.3	幅 8.9	厚 0.5						
2202	8e	SK36	020019	平製品	甕		長 6.9	幅 6.1	厚 0.4						
2203	8e	SK36	020019	平製品	甕		長 23.5	幅 7.5	厚 0.4						
2204	8e	SK36	020019	平製品	甕		長 23.2	幅 7.6	厚 0.2						
2205	8e	SK36	030021	片ちゅう類 品	ボタン		0.9			2.0					
2206	8e	SK36	020019	鉄製品	鉄煎土オモ テ		長 20.3	幅 3.0	厚 3.2						
2207	8e	SK36	020019	鉄製品	鉄煎土		長 15.2	幅 9.6	厚 1.0						
2208	8e	SK36	020019	鉄製品	金片		長 2.8	幅 1.1	厚 1.1						
2209	8e	SK36	020019	鉄製品	刀鏝		長 3.5	幅 7.0	厚 1.7						
2210	8e	SK36	020019	銅・木製品	金具(鍵 用?)		長 5.6	幅 4.7	厚 1.0						
2211	10c	SK14	020624	ガラス 甕	甕		2.4	18.8	6.0	7.4	灰白多くなり	備用1通り	C20-M8Y8 H4	うすい青色系	
2212	10c	SK14	020624	ガラス 甕	甕		2.2	18.8	5.9	7.3		備用1通り	C16-M8Y8 H4	うすい青色系	
2213	10c	SK14	020624	ガラス ラ ム	ラム		2.0	19.8	4.4	5.4	ゼー玉入り	備用1(右)	C20-M8Y16 H4	緑色系	
2214	10c	SK14	020624	ガラス 甕	甕		5.5	4.3	6.4	6.6		備用1(右)	緑色透明	透明系	
2215	10c	SK14	020624	銅/銅線 合子身	合子身		4.6	2.0	5.0	5.0	白銅線	受け部磨削、白銅 線、銅合子身	厚 0.1	厚 0.1	
2216	10c	SK14	020624	鉄製品	門鉋付銅線		4.6	1.8	4.5						
2217	8d	SK06	020014	鉄製品	煎餅		長 17.6	幅 2.1							
2218	9d	SK08	020017	鉄製品	ハサミ		長 16.2	幅 6.8	厚 2.0						
2219	11e	SK25	020006	鉄製品	瓶14のつま み		長 6.1	幅 5.7	厚 1.2						
2220	11e	SK25	020006	鉄製品	煎餅		長 14.4	幅 3.1	厚 1.3						
2221	11e	SK25	020006	鉄製品	釘		長さ 4.6	幅 1.2	厚 1.0						
2222	11e	SK25	020006	ガラス	レンズ		長 5.3	幅 3.7	厚 0.5						
2223	11e	SK24	020007	ガラス	眼鏡レンズ		径 2.7	径 3.6	径 0.15						
2224	11e	SK24	020007	木製品	透切歯付板		長 25.9	幅 4.6	厚 4.5						
2225	16d	SK07	020704	木製品	銅物		長 64.2	幅 13.6	厚 6.5						
2226	8d	SK37	020014	木製品	和材(平物)		長 41.7	幅 10.6	厚 2.9						
2227	10b	SK302	020019	木製品	和材(平物)		長 34.0	幅 13.8	厚 0.9						
2228	10b	SK302	020019	木製品	銅物磨板		長 42.0	幅 17.6	厚 2.8						
2229	10b	和材1	020702	銅製品	平釘(片物)		長 1.5	幅 1.5	高 0.2						
2230	10a	和材1	020702	銅製品	平釘(片物)		長 1.6	幅 1.6	高 0.2						
2231	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.36	幅 0.74	高 0.74						
2232	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.36	幅 0.74	高 0.75						
2233	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.6	幅 0.6	高 1.2						
2234	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.4	幅 0.6	高 1.2						
2235	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.6	幅 0.5	高 0.5						
2236	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.4	幅 0.6	高 0.6						
2237	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.38	幅 0.58	高 0.38						
2238	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.35	幅 0.37	高 0.37						
2239	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.36	幅 0.58	高 0.38						
2240	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.34	幅 0.38	高 0.38						
2241	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.3	幅 0.4	高 0.4						
2242	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.0	幅 0.6	高 0.5						
2243	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.0	幅 1.4	高 0.5						
2244	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.0	幅 1.5	高 0.5						
2245	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.0	幅 1.1	高 0.5						
2246	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.0	幅 1.0	高 0.5						
2247	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.0	幅 0.8	高 0.4						
2248	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.0	幅 0.7	高 0.3						
2249	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.0	幅 0.3	高 0.3						
2250	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.2	幅 0.9	高 0.2						
2251	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 4.1	幅 1.4	高 0.5						
2252	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 14.6	幅 0.2	高 11.1						
2253	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.37	幅 0.58	高 0.58						
2254	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.36	幅 0.37	高 0.37						
2255	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.36	幅 0.38	高 0.38						
2256	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.35	幅 0.37	高 0.37						
2257	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.35	幅 0.38	高 0.38						
2258	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.35	幅 0.39	高 0.39						
2259	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.37	幅 0.37	高 0.37						
2260	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.36	幅 0.37	高 0.37						
2261	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.36	幅 0.58	高 0.58						
2262	10a	和材1	020702	銅製品	平釘		長 2.35	幅 0.58	高 0.58						

道具一覧表

道具ID	7/17	種類	目録	用途	属性	時間	1日使用回数	消費SP	消費MP	消費CP	内蔵	持主(外部)	備考
2435	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.30	輪:0.37	高:0.37	---	---	---	---	No.204 前
2436	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.37	輪:0.39	高:0.39	---	---	---	---	No.205 前
2437	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.37	輪:0.39	高:0.39	---	---	---	---	No.206 前
2438	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.38	高:0.37	---	---	---	---	No.207 大
2439	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.00	輪:0.37	高:0.37	---	---	---	---	No.208 3/4~3/7
2440	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.38	高:0.37	---	---	---	---	No.209 後
2441	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.42	高:0.42	---	---	---	---	No.210 前
2442	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.42	高:0.41	---	---	---	---	No.211 前
2443	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.45	高:0.44	---	---	---	---	No.212 六
2444	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.38	高:0.38	---	---	---	---	No.213 八
2445	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.39	高:0.38	---	---	---	---	No.214 前
2446	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.37	輪:0.39	高:0.39	---	---	---	---	No.215 後
2447	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.38	高:0.38	---	---	---	---	No.216 前
2448	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.39	高:0.39	---	---	---	---	No.217 大
2449	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.38	高:0.38	---	---	---	---	No.218 前
2450	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.44	輪:0.41	高:0.41	---	---	---	---	No.219 前
2451	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.38	高:0.38	---	---	---	---	No.220 前
2452	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.40	高:0.40	---	---	---	---	No.221 八
2453	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.37	高:0.37	---	---	---	---	No.222 八
2454	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.38	高:0.38	---	---	---	---	No.223 前
2455	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.40	輪:0.41	高:0.40	---	---	---	---	No.224 大
2456	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.37	高:0.37	---	---	---	---	No.225 前
2457	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.39	高:0.38	---	---	---	---	No.226 前
2458	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:1.98	輪:0.38	高:0.38	---	---	---	---	No.229 3/4~3/7
2459	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.34	輪:0.37	高:0.37	---	---	---	---	No.230 前
2460	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.38	高:0.37	---	---	---	---	No.231 名
2461	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.37	輪:0.38	高:0.39	---	---	---	---	No.232 見
2462	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.37	高:0.37	---	---	---	---	No.233 後
2463	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.37	輪:0.37	高:0.37	---	---	---	---	No.235 後
2464	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.37	高:0.37	---	---	---	---	No.236 後
2465	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.31	輪:0.37	高:0.37	---	---	---	---	No.238
2466	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.38	高:0.38	---	---	---	---	No.239 前
2467	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.45	高:0.43	---	---	---	---	No.240 六/7
2468	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.37	輪:0.38	高:0.38	---	---	---	---	No.241 九/7
2469	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.38	高:0.38	---	---	---	---	No.243 前
2470	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.37	輪:0.39	高:0.40	---	---	---	---	No.244 前
2471	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.47	輪:0.44	高:0.40	---	---	---	---	No.245 十/7
2472	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.31	輪:0.40	高:0.40	---	---	---	---	No.246 七/7
2473	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.37	高:0.37	---	---	---	---	No.247 一/5
2474	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.34	輪:0.38	高:0.38	---	---	---	---	No.248 十
2475	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.37	高:0.37	---	---	---	---	No.249 前
2476	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.32	輪:0.37	高:0.37	---	---	---	---	No.250 二/7
2477	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.38	高:0.38	---	---	---	---	No.251 二/7
2478	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.38	高:0.38	---	---	---	---	No.253 見
2479	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.42	高:0.40	---	---	---	---	No.254 前
2480	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.38	高:0.38	---	---	---	---	No.255 二/7
2481	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.38	高:0.40	---	---	---	---	No.256 前
2482	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.38	高:0.38	---	---	---	---	No.257 前
2483	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.40	高:0.39	---	---	---	---	No.258 前
2484	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.37	高:0.37	---	---	---	---	No.259 後
2485	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.37	輪:0.39	高:0.38	---	---	---	---	No.260 名
2486	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.39	高:0.38	---	---	---	---	No.262 前
2487	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.40	高:0.39	---	---	---	---	No.263 前
2488	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.37	高:0.38	---	---	---	---	No.264 八
2489	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.37	高:0.38	---	---	---	---	No.265 +後
2490	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.38	高:0.38	---	---	---	---	No.266 前
2491	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.34	輪:0.40	高:0.40	---	---	---	---	No.267 一/7
2492	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.37	高:0.34	---	---	---	---	No.268 前
2493	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.40	高:0.40	---	---	---	---	No.269 大
2494	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.40	高:0.40	---	---	---	---	No.3 遺
2495	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.40	高:0.40	---	---	---	---	No.13 遺
2496	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.40	高:0.40	---	---	---	---	No.25 前
2497	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.40	高:0.40	---	---	---	---	No.56 大
2498	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.50	高:0.50	---	---	---	---	No.124 前
2499	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.40	高:0.40	---	---	---	---	No.152 前
2500	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.44	高:0.44	---	---	---	---	No.227 前
2501	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.46	高:0.44	---	---	---	---	No.228 前
2502	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.76	高:0.74	---	---	---	---	No.270 特
2503	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.37	輪:0.76	高:0.75	---	---	---	---	No.273 前
2504	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.28	高:0.29	---	---	---	---	No.17 召
2505	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.34	輪:0.28	高:0.28	---	---	---	---	No.132 前
2506	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.29	高:0.29	---	---	---	---	No.184 前
2507	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.28	高:0.28	---	---	---	---	No.237 前
2508	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.36	輪:0.19	高:0.38	---	---	---	---	No.36 3/4~3/7
2509	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.20	高:0.38	---	---	---	---	No.138 一/7
2510	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:1.93	輪:0.25	高:0.49	---	---	---	---	No.201 3/4~3/7
2511	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:1.96	輪:0.24	高:0.49	---	---	---	---	No.232 3/4~3/7
2512	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:1.95	輪:0.24	高:0.50	---	---	---	---	No.252 3/4~3/7
2513	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.21	高:0.43	---	---	---	---	No.261 一/7
2514	16a	呪詛	020702	多属性	活字	時:2.35	輪:0.19	高:0.37	---	---	---	---	No.76 前1/7

名古屋城三の丸遺跡 VII

調査年	アノ	遺跡番号	日 付	所在地・材質	種 類	時 期	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	内 容	外 形	貯 1 (内径)	貯 1	備考	
2515	16a	020702		多量鉄製品	刃片		長 2.35	幅 0.19	厚 0.38	刃部直線 1本	鋼製丸穴メッキ			No.342 遺十	
2516		020507			鋼	明治10年まで	長 11.2	5.3	3.6	長 11.4	白銅製コバルト錠	C4-M4-Y4-BL0	C9-M4-Y6-BL0		
2517		020507			鋼	明治10～20年代 代々木 1号まで	長 11.4	4.7	3.8	長 11.6	白銅製コバルト錠、黄銅製ナット、高台座調整部	白銅製コバルト錠、C4-M4-Y4-BL0 白銅製コバルト錠、C4-M4-Y6-BL0	C9-M6-Y8-BL0		
2518		020412			鋼	明治10年まで	長 13.1	5.9	4.1	長 13.3	白銅製コバルト錠	白銅製コバルト錠、高台座調整部	C6-M4-Y4-BL0	C9-M6-Y4-BL0	
2519		020412			鋼		長 6.6	7.2	4.2	長 6.7	白銅製コバルト錠、黄銅製ナット	白銅製コバルト錠、C4-M4-Y6-BL0	C16-M4-Y6-BL0		
2520		020412			鋼		長 15.0	4.0	7.2	長 15.3	白銅製コバルト錠、黄銅製ナット	白銅製コバルト錠、C6-M4-Y4-BL0	C16-M4-Y10-BL0		
2521		020507			鋼		長 14.9	4.1	7.6	長 15.2	白銅製コバルト錠、黄銅製ナット	白銅製コバルト錠、黄銅製ナット、死の目高台調整部	C20-M10-Y20-BL0		
2522		020412			1号		長 23.4	3.2	10.4	長 24.1	白銅製コバルト錠、ステンレスナット	白銅製コバルト錠、7.5%Ni 鋼	C4-M6-Y10-BL0		
2523		020412			鋼		長 7.0	7.0	4.6	長 7.2	白銅製、フリス鋼製、高台座調整部	鋼	鋼	鋼	
2524		020412			鋼	明治20年代 大正・昭和	長 6.2	幅 1.8		長 6.8	白銅製、13%Ni鋼製	白銅製、チタム鋼製、高台座調整部	鋼	鋼	
2525		020412			鋼(1号)鋼(2号)		長 16.0	幅 3.6		長 17.0	白銅製コバルト錠、ステンレスナット	鋼	鋼	鋼	
2526		SN02 調査棟1			鋼	比呂より鋼	長 15.2	6.4	5.6	長 15.6	白銅製	白銅製、黄銅、鋼製、高台座調整部	CO-M6-Y6-BL0		
2527		020917			鋼	跡地中河内跡	長 11.6	幅 3.7			白色鋼	鋼製、白色鋼	CO-M6-Y4-BL0		
2528		020412			鋼	比呂から割品	長 12.6	1.8	9.4	12.8	鋼製調整部	鋼製調整部、磁錠により差込みあり、磨傷	CO-M6-Y20-BL0	ア6-1鋼	
2529		020412			鋼	比呂から割品	長 12.6	1.8	9.4	12.8	鋼製調整部	鋼製調整部、磁錠により差込みあり、磨傷	CO-M6-Y20-BL0	ア6-1鋼	
2530	10f	SK16	020606		鉄製品	鉄部	長さ 22.9	幅 0.9	厚 0.9						
2531	11f	SK16	020606		鉄製品	溝部	長さ 10.6	幅 0.7	厚 0.3						
2532	10f	SK16	020606		鉄製品	底	長さ 3.0	幅 1.6	厚 1.2						
2533	10f	SK16	020606		鉄製品	ナット	長さ 2.0	幅 0.7	厚 0.7						
2534	11f	SK16	020605		鋼+ゴム割品	コード	長さ 4.6	幅 0.7	厚 0.6						
2535	11a	SK05	020602		鋼製品	鋼金具	長さ 2.6	幅 3.0	厚 0.3						
2536	13g	SK07	020603		1号品	1号	長さ 3.3								
2537	11c	SK134	020625		1号品	1号	長さ 3.1			長 3.0					
2538	8a	SK70	020701		1号品	1号				0.6		1.9			
2539	10c	SK141	020703		瓦葺	片ノリ	長さ 13.8	幅 30.0							
2540	8d	SK308	020827		地塊取引	破片	長さ 8.2	幅 4.8	厚 2.4						
2541	11a	SK020	020820		石地塊取引	2号石	長さ 17.8	幅 16.9	厚 6.6						
2542		020507			鋼		長 14.1	幅 6.3	厚 1.9						
2543	13a	西トランプ	020509		瓦葺	瓦	長さ 5.5	幅 4.5	厚 1.1						
2544	13b	SK170	020724		鋼瓦取引	破	長さ 7.6	幅 5.6	厚 1.7						
2545	11a	SK43	020610		鋼瓦取引	破	長さ 10.9	幅 4.9	厚 2.9						
2546	11a	鋼瓦B	020718		鋼瓦取引	破片	長さ 11.5	幅 5.9	厚 4.0						
2547	10a	鋼瓦B	020523		鋼瓦取引	破片	長さ 12.1	幅 2.5	厚 2.1						
2548	10d	SK341	020829		鋼瓦取引	破片	長さ 5.2	幅 4.3	厚 0.9						
2549	12b	SK05	020705		鋼瓦取引	破片	長さ 3.6	幅 2.2	厚 1.1						
2550	11b	鋼瓦B	020523		鋼瓦取引	破片	長さ 2.1	幅 2.1	厚 0.9						
2551	8d	SK344	020826		鋼瓦取引	破片	長さ 2.1	幅 2.1	厚 0.4						
2552	10b	SK05	020703		鋼瓦取引	1号	長さ 32.7	幅 12.1	厚 35.0	長 35.4					
2553	12b	SK02	020530		鉄製品	釘	長さ 8.6	幅 2.6	厚 1.8						
2554	8d	鋼瓦B	020712		鉄製品	釘	長さ 13.6	幅 3.6	厚 0.6						
2555	13f	SK06	020726		鉄製品	ナット	長さ 11.2	幅 4.9	厚 2.0						
2556	9b	SK01	020919		鋼+鉄製品	釘	長さ 9.4	幅 1.6	厚 0.5						
2557	16a	鋼瓦B	020703		鉄製品	ナット	長さ 1.5	幅 4.6	厚 1.5	1.6					
2558	16a	鋼瓦B	020703		鉄製品	ナット	長さ 1.5	幅 4.6	厚 0.2						
2559	17a	SK05	020603		鋼製品	鋼	長さ 4.1	幅 0.3	厚 0.3						
2560	13c	SK05	020603		鋼製品	鋼部玉	長さ 1.3								
2561	13d	SK02	020727		ガラス	ナット	長さ 4.2	幅 2.0	厚 0.2						

図 版

1. 遺構図版 s = 1 : 250

遺構図版1：第1面の遺構

遺構図版2：第2面の遺構

遺構図版3：第3面の遺構

遺構図版4：第1面の遺構（掘削前の略測図）

遺構図版5：第2面の遺構（掘削前の略測図）

2. 写真図版

遺構写真：写真図版1～写真図版16

遺物写真：写真図版17～写真図版30

関連絵図の写真：写真図版31～写真図版32



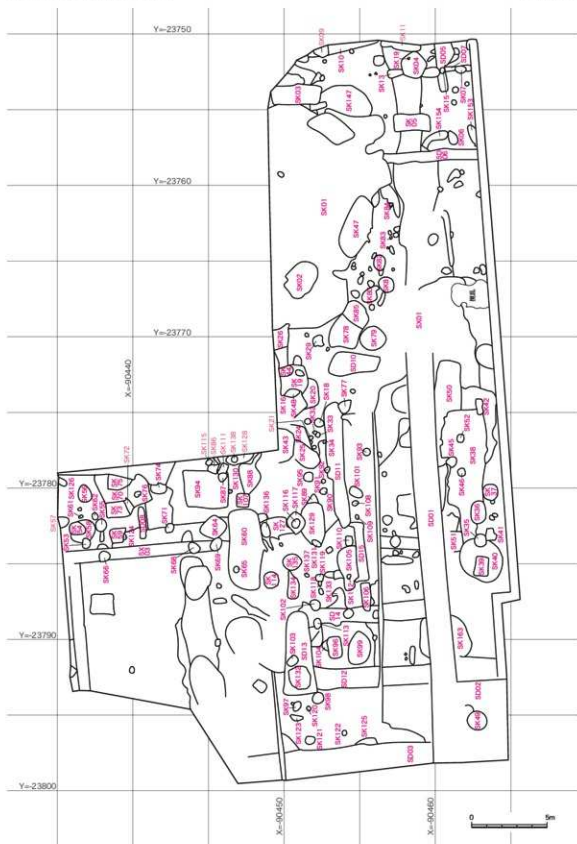
第 2 面の遺構





第1面の遺構（掘削前の略測図）

遺構図版 4





調査区遠景（南東からみる） 左上に見える建物が名古屋城天守



1 面遺構全体（北西からみる）

名古屋城三の丸遺跡 VII

写真図版 2



2面遺構全体（北西からみる）



3面遺構全体（北西からみる）



土坑 SK308 遺物出土状態 (東からみる)



竪穴建物跡群 (北からみる)

名古屋城三の丸遺跡 VII

写真図版 4



井戸 SK226 土層断面 (北からみる)



溝 SD17, 18 全体 (東からみる)



溝 SD12, SD14 等全体 (北からみる)



土坑 SK185, 柵列 SD24 全体 (南からみる)

名古屋城三の丸遺跡 VII

写真図版 6



石組溝 SD01～03 全体 (西からみる)



池 SX02 全体 (北西からみる)



池 SX02 東張り出し部 (北からみる)



池 SX02 西張り出し部 (北からみる)



池 SX02 階段状遺構 (西からみる)



池 SX02 東張り出し部正面 (西からみる)



池 SX02 東張り出し部上面玉石 (南からみる)



池 SX02 床面玉石 (東からみる)



池 SX02 南壁盛土層断面 (東からみる)



池 SX02 導水部漆喰断面 (南西からみる)

名古屋城三の丸遺跡 VII

写真図版 8



礎石建物跡 SB01 全体（東からみる）



礎石建物跡 SB01 床面（南西からみる）

左:調査区遠景
(南からみる)



右:SK331遺物
出土状態
(南西からみる)



左:SB07,SB09
(西からみる)



右:SB02
(西からみる)



左:SB03,SB05
(北からみる)



右:SB06
(北からみる)



左:SB04土層断
面(東からみる)



右:SB08土層断
面(南からみる)



左:3面中央部
柱穴群
(北東からみる)



右:3面南西部
柱穴群
(東からみる)



名古屋城三の丸遺跡 VII

写真図版 10

左:SD17-SD18
土層断面
(東からみる)



右:SD22
土層断面
(西からみる)

左:SD24-SA03
(北からみる)



右:SD39遺物
出土状態
(北からみる)



左:SK226遺物
出土状態
(北西からみる)



右:SK146-
SK147
(北からみる)



左:SK147
土層断面
(西からみる)



右:SK146
土層断面
(南からみる)



左:SK330
土層断面
(南からみる)



右:SK202
(南からみる)



左:SK484遺物
出土状態
(東からみる)



右:SD31・SD12
(南からみる)



左:SK93遺物
出土状態
(東からみる)



右:SK26石材
出土状態
(南からみる)



左:SK60遺物
出土状態
(東からみる)



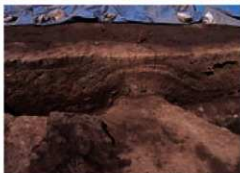
右:SK01
(東からみる)



左:SK01
土層断面
(南からみる)



右:SK63・SK01
土層断面
(南からみる)



左:SK01
木材出土状況
(西からみる)



右:SK01
出土状態
(東からみる)



名古屋城三の丸遺跡 VII

写真図版 12

左:SD01全体
(西からみる)



右:SD01遺物
出土状態
(北からみる)



左:SD01
(南からみる)



右:SD01部分
(南からみる)



左:SD01部分
(南からみる)



右:SD01部分
(南からみる)



左:SD01部分
(北からみる)



右:SD01部分
(北からみる)



左:SD02
(南からみる)



右:SD01・SD03
(南からみる)



左:SD04
(東からみる)



右:SD02
(西からみる)



左:SD01
土層断面
(西からみる)



右:SD01
土層断面
(西からみる)



左:SK23
(西からみる)



右:SD01掘削
(西からみる)



左:SK185
土層断面
(南からみる)



右:SK100
(西からみる)



左:SK94
土層断面
(南からみる)



右:SK94
壁面前落状態
(南からみる)



名古屋城三の丸遺跡 VII

写真図版 14

左: SX02
調査風景
(北西からみる)



右: SX02
北壁部
(東からみる)

左: SX02
階段状遺構
(北西からみる)



右: SX02
南壁
(北からみる)

左: SX02-SK01
(北からみる)



右: SX02-SK03
(北からみる)



左: SX02-SK04
(北からみる)



右: SX02-SK09
(東からみる)



左: SX02-SK16
(東からみる)



右: SX02-SK07
(北東からみる)



左: SX02
導水部
(南西からみる)



右: SX02
導水部下端
(南からみる)

左: SX02
土層断面
(東からみる)



右: SD41
(南からみる)

左: SX02
完掘状態
(北西からみる)



右: SX02
床面土層断面
(東からみる)

左: SX03
土層断面
(南からみる)



右: SK20
石材出土状態
(南からみる)

左: SX09
(東からみる)



右: SX03
全体
(北からみる)



名古屋城三の丸遺跡 VII

写真図版 16

左:SK163
土層断面
(南からみる)



右:SK202
壁面
(北からみる)

左:SK49
土層断面
(北からみる)



右:SK37
土層断面
(北からみる)

左:SK56
遺物出土状態
(東からみる)



右:SK66
遺物出土状態
(南からみる)

左:SK68
遺物出土状態
(南からみる)



右:SK107
(南からみる)

左:SK142
土層断面
(南からみる)



右:SK362
遺物出土状態
(南からみる)



土坑 SK308 出土遺物



井戸 SK226 出土遺物

写真図版 18



井戸 SK147 出土遺物



土坑 SK185 出土遺物



地下室 SK94 出土遺物



土坑 SK96 出土遺物





2078



2071



2061



2074



2124



2098



2099



2101



2106



2103



2110



2109



2129



2141



2086



2088



2087



2252



2093



2204

2203



2237 2238 2239 2240 2233 2234 2251 2230
2249 2242 2247 2248 2250 2246 2245 2243



1515



1508



2562



1514



1510



SX02-S54



SX02-S7



1510



SX02-玉石



SK20-玉石



SX02-玉石



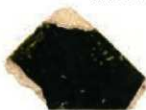
SX02-S75



SX02東裏りだし部-玉石



SX02-玉石



2059



2041



2050



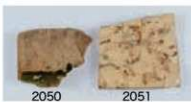
2059



2042



2039



2051



1981

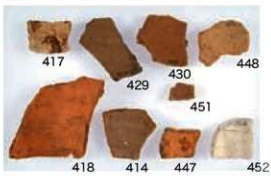


1966

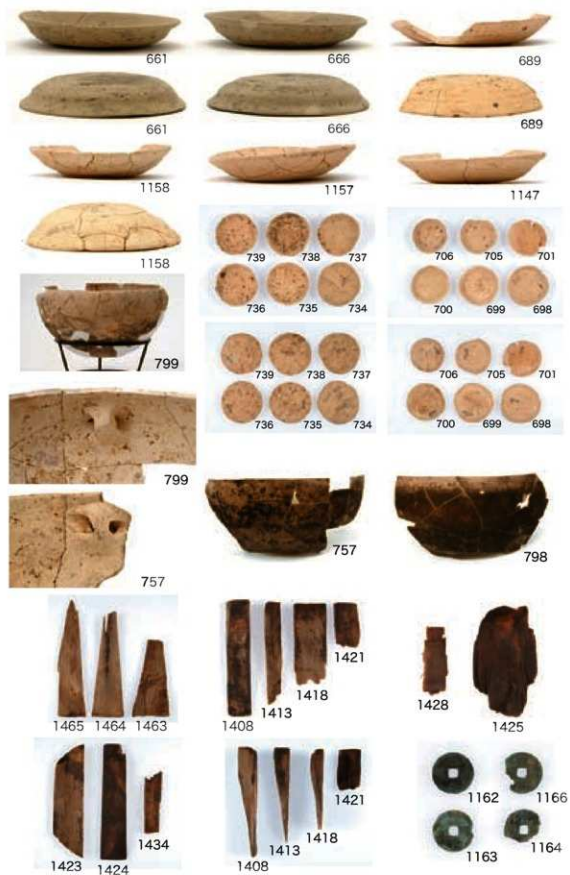


1602 1601 1600 1599 1598 1597 1596 1595
1626 1625 1624 1623 1622 1621 1620 1619















1910



1998



2005



2018



2032



2005



2018



2028



1932



1951



1923



1923



1975



1943

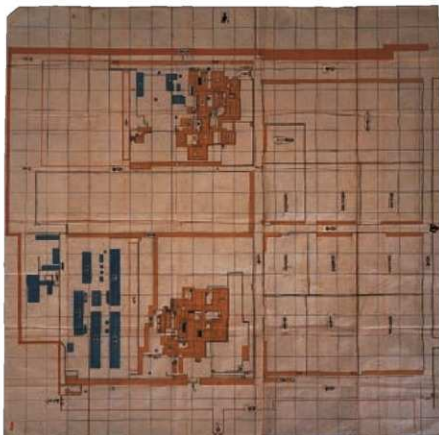


1943

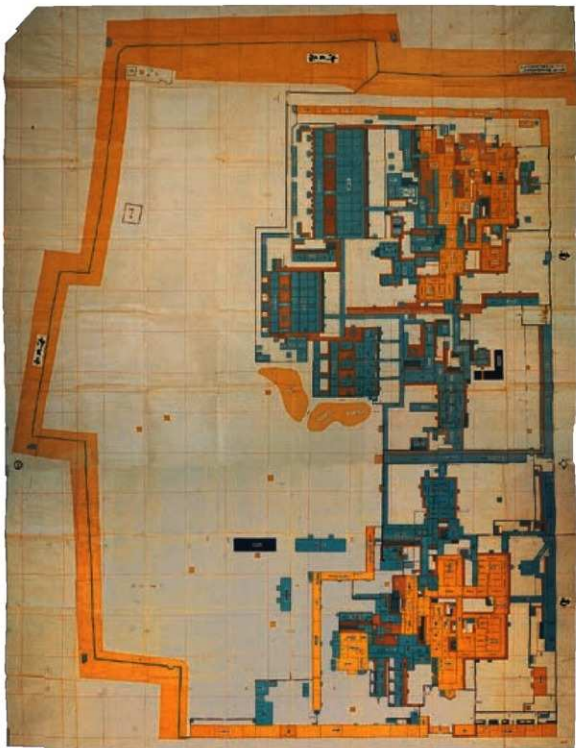




「三の丸絵図」(名古屋市蓬左文庫蔵)



「御屋形并東御殿御絵図」(名古屋市蓬左文庫蔵)



「御屋形御絵図」(名古屋市蓬左文庫蔵)

報告書抄録

ふりがな	なごやじょうさんのまるいせき なな							
書名	名古屋城三の丸遺跡 VII							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第127集							
編著者名	鈴木正貴、早野浩二、永井邦仁、鬼頭剛、古澤明、森勇一、上田恭子、堀木真美子、小村美代子、植田弥生、鶴飼雅弘							
編集機関	財団法人 愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町前ヶ須新田野方802-24							
発行年月日	西暦 2005年 3月 31日				TEL0567(67)4161			
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 °、′、″	東経 °、′、″	調査期間	調査面積	調査原因
なごやじょうさん のまるいせき 名古屋城 三の丸遺跡	なごや なかく 名古屋市中区 三の丸4丁目	23106	01-7027	35度 10分 33秒	136度 54分 5秒	20020401 ～ 20020930	1100㎡	看護婦 養成所 大型化 整備
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
名古屋城 三の丸遺跡	集落	古墳～ 奈良時代	竪穴建物跡7棟、 掘立柱建物跡、 溝、土坑など	土師器、 須恵器、 灰陶陶器		古墳時代から古 代の集落		
	城郭	鎌倉～ 戦国時代	掘立柱建物跡、 欄列、溝、井戸、 土坑など	山茶碗類、 瀬戸美濃窯産陶器、 肥前窯産陶磁器		那古野城関連の 遺構を検出		
		江戸時代	池、石組溝、 掘立柱建物跡、 溝、土坑など	石器・石製品、 木製品、木材、 金属製品および その関連遺物		江戸時代の庭園 遺構を検出 御屋形に関する 遺構群		
		明治～ 昭和時代	礎石建物跡、 井戸、土坑など	ガラス製品など		名古屋陸軍病院 の病棟やその関 連遺物		
文書番号	発掘届出(13埋セ第171号・2002.2.28) 通知(13教生第36-26号・2002.3.6) 終了届(保管証・発見届(14埋セ第82号・2002.9.20))							
要約	今回の調査で確認された遺構や遺物を4期に大別した。古墳時代から古代では竪穴建物を中心とした集落が確認された。中世では戦国時代の那古野城に関連する屋敷群とそれに先行する集落の存在が明らかになった。近世では当初名古屋城三の丸の武家屋敷が展開したが、17世紀中頃に尾張藩主徳川家の親族らが居住する御屋形が建設され、それに伴う庭園遺構や石組溝が検出された。庭園遺構は池泉鑑賞式庭園で屋敷の中庭的存在であったと推測される。近代では名古屋陸軍病院に関連する遺構や遺物が発見され、戦時中の切迫した物質生活様相を明らかにした。土師器皿や鍋類、及び遺構の変遷を辿ることにより、当地域における物質生活上の画期や歴史的な変遷を考察することができた。							

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第127集

名古屋城三の丸遺跡 VII
—旧国立名古屋病院地点の調査—

2005年3月31日

編集・発行

財団法人愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター

印刷

西濃印刷株式会社